
日本にダンジョンが現われた！

赤野用介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<https://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日本にダンジョンが現われた！

【Nコード】

N4966EK

【作者名】

赤野用介

【あらすじ】

2042年5月、南海トラフを震源とする西日本大震災が発災してから2年半。

日本全国の僻地では、不自然な地割れが次々と見つかった。だが調査名目で封鎖されるため、地主ですら内部を窺い知る事はない。

そんな折、全国数十カ所目となる新たな地割れが、杉林の中で発見

される。

発見者の少年は自分で調べようと、地割れの中に潜り込んでいった。
日本中がパニックに陥るのは14話からです。

01話 はじまりの日

山と主張するには些か小ぢんまりとした、田舎ではよく見かける私有地の小山。

その見渡す限り杉が植え尽くされた人工林の中を、ひたすら分け入る少年の姿があった。

彼は、腰の高さまで伸びる藪を掻き分け、視界を遮る小枝をナタで打ち払いながら、年齢に相応しい軽快な足取りで山道を奥へと進んでいる。

服装はTシャツに長袖の上着、そしてジーンズにスニーカーという、大よそ登山には似つかわしくない格好だった。

しかし彼にとって、この杉山は庭にも等しい慣れ親しんだ場所だった。

ただ唯一の誤算は、この杉山が造園技師の造った庭では無く、自然の山だった事だろう。

早朝に騒いでいたカッコウが完全に鳴き止んでから、既に数時間。木漏れ日が地上をじわじわと温め続けた結果、少年にとっては上着一着分ほど、気温の見積もりに誤差が生じていた。

「あーっーい」

彼の目的は、小木を一本伐採して持ち帰る事だ。

今更引き返すのは遅きに失しており、上着を脱いで片手を塞ぐ事も得策ではない。

結果として少年は我慢する事を選択し、暑さを嘆く声が静寂の杉山に虚しく響いた。

この杉山は、かつて日本で電柱が木製だった時代に『お上のお達し』で大規模に植えられた、田舎に数多ある人工杉山の一つだ。

当時の日本では、電柱が杉だった。そして国中に電柱を立てて定期交換するためには、膨大な杉の需要が見込まれていた。

杉を電柱用に育てるためには、数十年の時間が必要となる。そこで当時のお上は、長期的な視点から杉山を増やすようにと指示を出した。

現代でも行政の指導には強い力があるが、戦前は現代よりも遥かに大きな強制力が働き、多くの人々が国の指示に従った。

しかし、コンクリート製の電柱が登場した事で、従った人々は頭を抱える事になる。

電柱という最大の需要が消失した結果、使い道の無くなった杉が国中で大量に溢れ返ったのだ。これほど大規模に需要と供給が逆転した例は、当時の日本で他に類を見ない。

土地は所有するだけでも税金が掛かる。かといって土地を活用するために杉を売ろうにも、足元を見られて伐採だけでも大赤字だ。

そのように無価値どころか、関係者が押し付け合うようになった田舎の杉山に、人の寄り付くはずもない。

そして少年は、誰も寄り付かなくなった杉山では、絶滅危惧種に等しい希少な入山者だった。

なお絶滅危惧種の個体名は、堂下次郎どうしたじろうという。いくつかの杉山と同時に頭も抱える、現所有者の内孫だ。

「イノシシでも良いから、獣道でも作ってくれよなあ」

杉しか植えられていない人工林では、イノシシすらも寄り付かない。

彼は野生動物が縦横無尽に杉山を駆け巡ると言う、可能性の皆無な妄想で気を紛らわせながら、目的物を探して山奥へと分け入った。

彼が住む七村市ななそんは、自他共に認める田舎の山中県でもさらにど田舎の市だ。

人口は、市を名乗るために必要な五万人を割り込んで久しい。市民生活を支える主要産業が存在せず、市民の大半は片道一時間から二時間ほど掛けて、隣市や県庁所在地のある市まで出稼ぎに行っている。

市民病院も赤字経営が続き、民営化された。急患は救急車で隣市に搬送されるようになったが、職員の大半は市役所へ異動して人件費が削減されず、市民の不信を買っている。

七村市の電車も、山中県に新幹線が来て普通電車が各市へ移管される流れになった時、維持できないため電車はいらないと七村市は拒否した。それを聞いたＪＲ側が、我々には社会的使命があると維持を決断してくれた結果、辛うじて動いている有様だ。

人が減り続け、主要産業が無く、患者は隣市へ丸投げされ、社会的使命も放り投げる。それが次郎の暮らす七村市だ。

そんな七村市の凋落を顧みるたびに、次郎は居た堪れない気持ちになる。

彼は未だに中学二年生だが、彼の実家である堂下家は、七村市が七つの村だった時の村長家の一つで、明治時代に七つの村が合併して七村町になった時は初代町長も務めた。

そして堂下家は、結果として市に何も残していない。それどころか足を引っ張ったのではないかとすら疑っている。

その酷評には、彼なりの根拠もある。

それは、彼の実家が所有する大きな三つの山だ。七村市三山町という地名の由来にもなった三つの大山は、お上のお達し通り残らず杉山と化し、現在も子孫たちの足を引っ張っている。

不良債権どころか赤字物件である事が明白にも拘らず、代々の堂下家当主たちは杉山を無為無策のままに放置し続けてきた。

次郎の祖父に至っては、相続税代わりに山の一部を物納しようと

して税務署に拒否されて「努力はしたが結果は駄目だった」という大義名分を得て満足している節がある。

そしてその行動規範こそが、現在の七村市の「何もしい事なかれ主義」の市政の縮図でもあった。

堂下家が代替わりしない限り、この杉山には誰も立ち入らないだろう。

唯一の例外である次郎も、隣市に住む親戚が祭りで使う小木を分けてくれと頼んだ時に伐採に入る程度だ。

以前は次郎の兄である一郎が伐採していたが、次郎が中学に上がって以降、弟に役目を譲っている。

「手頃な太さの木、丈は次郎より高くて、枝が一杯あるやつ。ただし台車で路地に入る時に引つ掛からないくらいの横幅で……」

次郎の親戚が依頼したのは、祭りで牽く台車に挿す小木を『一本』だ。

祭りには笛や太鼓の音が欠かせないが、太鼓は人の手で持ち運びながら打ち鳴らすには重すぎるため、台車に乗せて牽く必要がある。そのため無骨な台車が祭りに相応しくなるよう、側面に紅白の幕を張り、小木の枝に同じく紅白の色紙と紙縊りで作った花を結び、桜を模して鮮やかに彩るのだ。

祭りは五月の子供神輿と、九月の獅子舞で年二回。

但し小木は使い回すため、依頼されるのは二年に一回程度となる。そんな依頼によって、二年に一度くらいは、この山にも小木一本分くらいの価値が生み出される。

そのため次郎としては、見繕った中で一番良い小木を渡すつもりだった。何しろその小木には、杉山全体の二年分の存在価値が掛かっている。

そう考えながら山に深入りした次郎は、不意に出現した光景に思

わず歩みを止めた。

「穴？」

藪をかき分け、小枝を打ち払った細道の脇に、黒い洞穴が大口を開けていた。

横幅は車三台が並ぶ程に広く、高さは目算で次郎の身長の二倍にも達するだろうか。

だが次郎が最も目を引いたのは、杉山と大口との境目だった。

茶色い山肌が、膝丈ほどの段差を境目として、灰色の岩壁に姿を変えて奥まで続いている。加えて灰色の床面は、コンクリートを流し込んで固めたかのように、平坦で凹凸が見られなかった。

それはあたかも、自然物と人工物との境界線であった。

次郎は第二次世界大戦中の防空壕を想像し、即座に否定する。

仮に防空壕であるなら、由緒正しき地主の家柄という謎のプライドを持つ父親が、次郎に対して賢しげに何度も語って聞かせているはずだ。そんな自慢話を一度も聞いた記憶が無い以上、これは第二次大戦中に造られた防空壕ではない。

だが大戦前の古い洞窟であるなら、それこそコンクリート製ではないだろう。そんなものが昔からあれば、木製電柱を目的とした杉山など作られなかった。

「……よつと」

いつ誰が作ったのか想像も付かなかった次郎は、中を確かめるべく段差を降りて、灰色の床上に立った。

靴と靴下越しに、山肌に比べて固い感触が足裏へと伝わってくる。次郎はその感触を確かめるように、何度も足踏みを繰り返した。

「土じゃなくて、石っぽいな」

軍手を外してナタを脇に置き、しゃがみ込んで灰色の床面に指先でそつと触れる。

床は表面がザラザラしており、指先には細かい砂のような物が付着した。その指をこすると、パラパラと砂粒のようなものが落ちていく。

想像していたコンクリートとの微妙な差異に首をかしげる次郎だったが、結局それ以上の事は分からなかった。一応臭いも嗅いでみたものの、周囲の木や土の臭いが強すぎるせいか、嗅ぎ分ける事は出来なかった。

ごく一般的な中学生である次郎にとって、調べる手段はさほど多くない。

次いで思い付いたのは、砂粒を嘗める事だった。この地で生まれ育った次郎は、この山や周囲の畑の土なら多少は口に含んだことがある。

小学生の低学年頃であれば、躊躇わずに嘗めただろう。しかし中学生となった次郎は、暫く葛藤した後、それを最終手段として取っておく事とした。

その代わりに床に置いていたナタを無造作に掴むと、地面に向けて軽く振るった。

カツンと乾いた音が洞窟内に響き、ナタが反動で弾かれる。

叩いた白い床面には僅かに傷が付いたが、引き換えに得たのは床が土では無かったと言う確信くらいである。

手持ちの分析手段が尽きた次郎は、洞窟の奥へ進む事にした。

車三台が並んで通れる坂道を下る。横穴に比べて傾斜の分だけ陽光は届きやすいが、それでも十数メートルほど進むと随分と薄暗くなった。

光源無しでは先へと進めなくなった頃、ようやく勾配が無くなった。

薄暗い洞窟の内部は平坦で、入り口よりも遥かに広がっているようだった。しかし地上の光が殆ど届かず、あたかも深淵の縁に立っているかのような感覚に襲われる。

「お前が深淵を覗く時、深淵もまたお前を覗いているのだ」

次郎はニーチェの詩の一節を呟き、言い知れぬ不安を誤魔化そうと図った。

だが内容としては不安に拍車をかけており、それを覆すほどの心理的な余裕も無かった。

光源が無い以上、暗闇の中で先に進むことは無謀極まりない。進行を断念せざるを得ないのは明白だが、ここで踵を返す事は逃げ出した様で悔しくもあった。

未練がましく洞窟内を見渡したところ、僅かに届いた光が地面に転がる小石に反射し、緑の煌めきを放つ瞬間が視界に入る。

怪訝に思った次郎は、地上の光が届かない世界へと一歩足を踏み込ませる。

刹那、天井から何かが降ってきた。

「うわああっ!？」

僅かな羽ばたきが聞こえた刹那、咄嗟に振り上げた次郎の左手と何かがぶつかった。

強く掴まれたような感覚から、先端が食い込んでくる感覚までが瞬く間に伝わってくる。それと同時に、ぶつかった衝撃で身体が弾かれた。

次郎は叫び声を上げ、衝撃に耐えると同時に反射的に身体を捻り、さらには左腕を必死に振り払った。

「ギギギッ」

深く食い込んだ何かが、左上腕から外れない。

振るわれた左腕に、黒い影がしつかりとしがみ付いている。

二度、三度と腕を振るう間に見えた何かは、猫ほどの大きさと重さだった。猫と異なるのは、その生物に翼がある事だろうか。顔もコウモリのように不細工で、鳴き声も不気味だ。

地元民の次郎と言えど、これほど巨大で人を襲うコウモリは見た事も聞いた事もない。

こんなコウモリが人類社会を飛び回れば、即座に駆除対象である。

「ふざけるなっ」

巨大コウモリっぽい何かに咬み付かれた次郎は、恐怖心と嫌悪感を同時に覚え、それらを怒号で掻き消した。

代わりに生まれたのは怒りである。あるいは闘争心と呼ぶべきか、それらを以て、先程まで必死に振るっていた左手の動きを止め、しがみ付く巨大コウモリと仮定した相手に右手のナタを何度も叩き付けて反撃を始めた。

重音が響く度に巨大コウモリの皮膚が裂け、それを十数度も繰り返すうちに傷口は骨にまで達した。その骨は何度叩いても折れないが、血飛沫だけは相応に飛び散り続ける。

反対に次郎がナタを振るうたびに、食い込んだ巨大コウモリの爪も左腕に強く食い込んだ。そうやって繰り返される痛みは、やがて痺れへと至った。痛覚は麻痺したが、生存本能だけは生命の危機を繰り返して訴える。

次郎が反撃を中断しても、巨大コウモリが攻撃を止めるとは思えない。むしろ一方的に攻撃を受けるだろう。そんな巨大コウモリのテリトリーに入った事が悪いのか。

この杉山は登記簿上、次郎の祖父である堂下哲雄の土地だ。ただし、巨大コウモリ側のルールでは、コウモリの住処になっているようである。

次郎から見れば、コウモリによる土地の不法占拠。そしてコウモリから見れば、武装した人間による住処への不法侵入。これでは互いに歩み寄れるはずも無い。地球上で争いが絶えないのも道理である。

「この土地から出てけや！」

今ここに、行政に見捨てられた杉山を巡り、人類と巨大コウモリによる互いの生存権を掛けた全面戦争が勃発した。

もともと戦いは既に最終局面に入っており、次郎は肉を切らせて骨を断つような攻撃の繰り返しで、痛み分けと言えるほどには相手方にダメージを負わせている。

左腕と言う戦闘に支障のない部位を封じられたただであつた点や、引き換えに右手でナタを振るえた点も良かったのだらう。出血量と同じでも、体重の分だけ次郎が有利だった。

ナタを振るう回数が数十度に及んだ時、巨大コウモリの爪から力がようやく抜けた。そこで咄嗟に左腕を振るうと、ついに巨大コウモリの身体が床へと落ちていった。

コウモリの左翼は半ばで折れており、全身は血塗れだ。

しかし巨大コウモリは、右の翼と折れた左の翼を羽ばたかせ、必死に逃げようと図る。

そんな巨大コウモリの背後から、頭部に目がけてナタが振り下ろされた。

「ギイツ……………」

甲高くも短い、戦いの終わりを告げる断末魔が鳴る。

力強く振るわれたナタが頭皮を切り裂き、さらには頭部に衝撃を与えてさらなる出血を強いたのだ。

それでもナタは振り上げられ、既に大きく裂けている背中へと突き立てられた。

次郎からしてみれば、猫サイズにという体格に全く見合わない、巨大コウモリの恐るべき頑強さと体力に困惑せざるを得なかった。昆虫などを除くと生物を殺害した経験が無く、躊躇いから非効率な攻撃を行った事を加味してすら、コウモリの身体は硬過ぎた。

次郎は念のため、地上で痙攣しているコウモリを踏み付け、背部に付き立てた刃先を掻き回しながら臓器を破壊する。その瞬間、刃先が体内の何かに当たってコウモリが激しく跳ね上がった。

するとコウモリの身体から完全に力が抜け切り、全く動かなくなつた。

「ようやく終わったか」

コウモリが動かない事を確認した次郎は、ようやく緊張を収めて溜息を吐いた。

ついでナタを無造作に引き抜く。すると刃先に弾かれたのか、体内から血塗れになった緑色の小石が一個転がり出てきた。

「そもそも俺って、なんでここに来たんだよ」

その自問を皮切りに、次郎の中で疑問が百出した。

この洞窟を作ったのは誰で、目的は何なのか。左袖が裂かれた上着はどうすれば良いのか。返り血はどうやって洗い流せば良いのか。そして左腕の傷はどうするべきか。

そんな様々な思いと共に、次郎は巨大コウモリの身体から飛び出した緑色の小石を右手で拾い上げた。

その瞬間、次郎の身体に何かが流れ込んで来る。悪寒が全身を駆

け巡り、まるで雪山に軽装で放り出されたかのように身体が震えた。さらに早鐘を打ち鳴らすように、心臓がガンガンと激しい鼓動を繰り返す。

「痛だあつ」

腎臓が締め付けられるような痛みを覚えた次郎は、一度掴んだ緑石を咄嗟に放り捨て、代わりに上着の胸辺りを掴んで、灰色の床を転げ回った。呻り声を上げながら荒い息を吐き、心臓付近の痛みを静めようと楽な体勢を模索して、必死に床を蠢く。

今この場に新手のコウモリが現われたならば、とても戦えるような状態ではない。背中や頭部、あるいは右手に絡み付かれるだけでも、左腕だった先程より遥かに不利となるのだ。まして現状では、戦闘どころか逃げる事すら不可能だ。

次郎は危機的状況になんとか声を抑え、必死に痛みを耐え続けた。幾許かの時間を費やし、汗でべっとり張り付いた上着が気持ち悪いと感じられるくらいには、心の平静を取り戻すに至る。

そして次郎の眼前には、さらに新たな問題が二つも発生していた。

一つ目は、コウモリの体内から出た小石。

次郎が掴んだ時は緑色だったが、ふと気付けば洞窟を染め上げる床面や壁面と同じように、色褪せた灰色に変わっていた。

そして二つ目は、完全に意味が分からない現象が起きている事。次郎の正面に、真っ白な背景と黒い文字が浮かび上がっていたのだ。

堂下次郎 レベルー B Pー

体力ー 魔力ー 攻撃ー 防御ー 敏捷ー

火○ 風○ 水○ 土○ 光○ 闇○

次郎は文字を凝視しながら、呆然と固まった。思考停止に陥った次郎をあざ笑うかのようになり、B P ーという部分だけが、いつまでも点滅を繰り返す。

一体どれくらい、茫然自失としていたのだろうか。

次郎は時間経過と共に落ち着きを取り戻し、深呼吸してから仮説を立てた。

この空間投影を行う技術は、現人類の技術力では再現不可能だ。ならば未来人や宇宙超文明、あるいは神などの何れかが行ったのだと仮定する。

なぜその様な事をするのかという問題を棚上げし、現実には現われた表示内容だけを素直に解釈すれば、表示は次郎自身を表していると思われる。

現状に至った原因は、巨大コウモリを倒して、その体内から飛び出した石を掴んだ事だろう。おそらくコウモリを倒した事で、レベルが〇から一になったのだ。

すると点滅しているB P ーは、もしかするとボーナスポイントの略ではないだろうか。レベルそのものがあるとすれば、レベルが上がるに能力に加算できるボーナスポイントなども有り得るだろう。

その表示に触れて良いのか悪いのか、相手の意図が不明なため判断できない。しかし能力が上がるのであれば、基本的には歓迎すべき事だろう。

次郎は、新手のコウモリが出現する前に、この場を立ち去りたいという思いもあった。しかし割り振らずに移動して、ボーナスポイントが消える可能性も完全には否定できず、その場合には能力を得られる機会をふいにした事を後悔しそうだった。

本来の次郎は選択前にじっくり検討する性格だが、現状では諦めざるを得なかった。

（レベルが何度も上がると仮定すれば、コウモリを倒し易くなる力が良いか？）

次郎は攻撃か防御辺りに振ろうかと思い悩み、逡巡した後回復魔法が使えそうな光に振る事にした。

中学生としては、倒しやすいの前に母親への言い訳である。

左腕の傷を詰問されて、洞窟への立ち入りを禁止される事は避けなければならない。

決断した次郎は、指先を青く点滅するポイントの一部分に右の人差し指を合せ、それを光○という部分に引っ張った。

加えて目力と意思で、光に行けとも念じる。

すると青い光が次郎の指先に移り、光○という表示部分に移動して数字が変化する。

堂下次郎 レベルー B P○

体力ー 魔力ー 攻撃ー 防御ー 敏捷ー

火○ 風○ 水○ 土○ 光ー 闇○

ポイントを割り振った後、表示自体が薄らぎ消えていった。

「……………はぁ」

次郎は、深い安堵の溜息を吐いた。

02話 初めての魔法

次郎が洞窟内へ深入りしたのは、緑色に光る小石を見つけたからだ。

結果として巨大コウモリを倒して体内から同様の緑石を得て、それに触れた事でレベルが上がったようである。レベルアップの効果は不明だが、体力などが上がるのは良い事だろう。

では最初に見つけた緑石はどうなったのかと言えば、今も床に転がっていた。

緑石に触れても、直接コウモリを倒さなければ効果は無いかもしれない。だが戦わずに上がる可能性があれば、その機会を逃すのはあまりに惜しい。ここは検証のためにも入手すべきだろう。

問題は、緑石を拾う時に生じた尋常ではない心臓の痛みだ。新手のコウモリに遭遇する危険を考えれば、負傷している今は動けなくなる事態を避けたい。

次郎は少し考え、左裾が裂けてしまった上着を脱いで石に触れないように包んで持ち上げた。小石の重みが上着越しに伝わってきたものの、緑石と直接触れていないためか、痛みを感じる事は無かった。次郎は足元のナタを拾うと、目的を果たした洞窟から足早に逃げ出した。

家を出てから洞窟へ辿り着くまでは徒歩一〇分程度。この近距離では、巨大コウモリが自宅まで飛来する恐れがある。

もともと次郎は、家族が危険であるとは全く思わなかった。

「うちの家族だと、返り討ちにするだろうけどなあ」

次郎と同居している家族は、両親と四歳年上の兄、それに祖父の四人だ。

祖父は猟銃を所持しており、年に数頭は熊を撃っている。猫サイズの巨大コウモリが出たと言えば、鼻で笑って駆除に行く程にはアグレッシブだ。

父は剣道三段で、大学では剣道部の主将を務めていた。剣道を止めて久しいが、素人の次郎が勝てる程度のコウモリならば問題にもならないだろう。

母は空手の銅メダリストだ。半径四メートルが間合いだそうで、オリンピックでは体格に勝る外国の選手を次々と殴り倒した。生半可な熊だと倒しかねず、一人だけ次元が違う。

兄は、そんな母の強い希望で空手道場に通わされた。母には及ばないが全国レベルの実力者で、木刀を持つ父と素手の兄が戦えば確実に兄が勝つ。

こんな戦闘民族の巣窟にコウモリが飛来した場合、末路は撲殺と野焼きである。次郎は半笑いし、一番弱い自分が心配する事ではないと思った。

近隣住民については、身近なケースを当て嵌めて考える。

例えば山に熊が出たとして、地主が責任を負わされた話は聞いた事が無い。そもそも県内の山に熊が出るのは常識だ。行政だって捕獲した子熊は山奥へ逃がす。

蜂も同様で、日本中どこにでも巣を作るのも、近付いた人を刺すのも習性である。巣を作られた側に、一体どんな過失があるというのか。

アリに噛まれても、蚊に刺されても、カラスに買い物袋を奪われても、やはり生息地の地主が悪いと言う話は聞かない。

それらに鑑みるに、山にコウモリが出て近隣住民を噛んだとして、次郎の家に賠償責任は発生しそうにない。

よって次郎は、巨大コウモリ発生を誰にも通報せず、個人的なレベル上げを行う事にした。

大人に話せば、危険を説かれて行く事を禁じられるだろう。報告しても褒められる程度のメリットしか無いのだ。賠償問題が発生しない以上、レベルという可能性を禁止されるデメリットが大きすぎて、報告は割に合わない。

それに次郎は、西日本大震災後に全国の数十カ所で見つかった「特異な地割れ」地点が全て封鎖され、一向に地主の元へ返還されない点も気になった。

封鎖の名目は「南海トラフを震源とする西日本大震災後に発生した地割れと地質の調査」だが、具体的に何を調べているのか国民には一切伝わってこない。

最初の発見例は、ちょうど二年前の二〇四〇年五月四日。

西日本大震災の発災自体は半年前の二〇三九年一月四日だったが、発見された場所が全て山奥などの「へき地」であったため、発見が遅れたのだとするテレビの説明には一定の説得力があった。

ただし、今の次郎はそれを非常に疑わしく思っている。

次郎が見つけた「へき地」の「特異な地割れ」は、実態が巨大コウモリ出現と摩訶不思議なステータス表示だった。常識的に考えて地質学とレベル表示に接点なんてあるわけが無い。

この洞窟が過去に発見された「特異な地割れ」と同質のものであった場合、他と同様に封鎖される事は誰の目にも明らかだ。なお行政は「西日本大震災で発生した地割れなどの被害は、市町村へ届け出るように」と珍しく積極的な指示を出している。

「ここは西日本じゃないし、うちには被害も無かったから無関係だな！」

次郎は「お上のお達し」を表面通りに捉える事で、届け出の対象

から逃れた。

堂下家を含むお上のお達しに従った家は、土地を杉山に変えさせられた挙げ句、需要と供給が逆転して発生した負債を全て背負わされている。

また日本中に造林された杉山が放置されるに至り、スギ花粉による花粉症患者が爆発的に増大したが、行政は因果関係を認めていない。

これで今回も馬鹿正直に行政へ届け出れば、堂下家に残るのは『立ち入りすら出来なくなった杉山』と『杉山にかかる税金』だけである。

次郎は政治家が口にする『自己責任論』を思い浮かべたところで、当初の目的であった親戚依頼の小木を思い出し、適当に一本を伐採して帰る事にした。家を出る際には小木を伐りに行くと言っており、手ぶらで帰れば一体何をしに行ったのだと不審に思われる。

片手間に見繕った小木は、拘っていたほど良質な木ではなかった。しかし、伐採してから暫く置けば、小木は乾燥して枝葉が耄り易くなる。最初に枝が多目のものを選んでおけば、後から調整できるのだ。

次郎は選択した小木に左手を添え、根元付近に向けてナタを振った。

折れるまでに、僅か二回。

最初は狙いを付けるために軽く表皮に当てたため、実質は一回で呆気なく折れた。体感的には三、四回必要と予測していたが、その想像した以上に脆い木だったらしい。祭りで折れては困るため、次郎はさらに別の小木を選んで伐り直すも、二本目も同様に二回で折れた。

「もしかしてレベルが上がったから、力も上がったのか？」

次郎がポイントを割り振ったのは「光」で、力に該当しそうな項目を触った覚えはない。だが体感と現実には、明らかなズレが生じたように感じられた。

長々と検証するわけにも行かず、次郎は再々度の伐採を断念して一本目の幹を掴み、引き摺りながら自宅の蔵に向かって歩き出した。滅多に人が入らない山道を広げて一〇分余り。

ようやく山道を下り終えると、先ずは蔵の中に小木を放り込み、据え付けの棚にナタと軍手を置く。

本来ならこれで家に入れば良いのだが、爪を突き立てられた左腕は挟れており、脱ぎ捨てた上着も血塗れだ。家族に見つかれば、事情聴取が始まるだろう。

転んで擦り剥いたと言えば誤魔化せるかも知れないが、親は子供の行動に対しては妙に鋭い。余計なリスクは避けるべきだと、次郎の第六感は何を告げていた。

幸いにして気温は高くなっており、血塗れの上着は暑いから脱いだと説明が付く。その上着の血があまり付いていない部分で、左腕の傷を覆い隠しながら部屋まで戻れば、遠目には誤魔化せるはずである。

決断を下した次郎は、蔵を出て家の壁沿いに玄関へと向かった。そして引き戸の玄関をガラガラと空け、来客では無いから応対は不要である旨を高らかに宣言する。

「ただいまーっ」

「お帰り。手を洗ってきなさい」

「うい」

さっそく進路変更を余儀なくされた次郎は、致し方がなく廊下を小走りで駆け抜け、台所を通り過ぎて洗面所へと向かう。

「おい次郎、木は伐ってきたのか？」

「伐つてきた。蔵に置いてあるよ！」

居間から父の声が聞こえてきたので、大声で言い返す。

そしてさらに何かを言われる前に、洗面台の蛇口を上げて水を流し始めた。

左腕を水道水で洗うと、洗面台に鮮血が流れ出て傷口が染みる。

「痛っ」

次郎はしかめっ面になりながら、右手に石鹸水を付けて、なるべく痛まないように左上腕の傷口付近を軽くなぞっていった。

その後は上着で傷口を抑え、洗面台には水を掛けて血を洗い流す。母は台所、父は居間から移動する素振りが無い。次郎は廊下を怒られない程度の小走りで、廊下を駆け抜けた。

「次郎、今夜はシチューよ」

「ういっい！」

最早振り返りもせず、次郎は階段を駆け上がった。

そして部屋にあと数歩という所で、隣の部屋から出てきた兄の一郎と遭遇した。しかも左手に巻き抱えた上着を、しっかりと見られてしまう。

そして第一声。

「おい次郎、危ないから走るな」

「了解、兄貴」

一郎の視線は上着を追っていたが、特に何かしら指摘する事は無かった。

次郎は速度を歩行に落としながらも移動は止めず、すれ違って自

分の部屋へと逃げ込んだ。そして部屋のドアを閉めて、大きな溜息を吐く。

「はぁ、危なかった」

兄とすれ違った際、上着に付いた血液を見られた。

あまり汚れていない部分で覆っていた事から追求を逃れられたが、相手が兄以外の家族であれば追及は免れなかっただろう。

だが自室に入った以上、家族の追求は殆ど逃れきった。

あとは上着を自宅以外に捨てれば、証拠は左腕の傷だけとなる。

光の魔法が予想している回復ではなかった場合でも、傷自体は暫く長袖を着て隠せば、いずれ消えて誤魔化せるようになる。

「やれやれ」

次郎は上着をコンビニのビニール袋に入れて口を縛ると、学習機の隅に投げ捨てた。

次いで背中からベッドに倒れ込み、仰向けに寝転がる。

そして左腕を頭上に伸ばし、巨大コウモリから受けた傷を改めて確認した。

コウモリに傷つけられた傷からの出血は、既に止まっている。

だが左上腕には鉤爪に傷跡が傷は痛々しく走っていた。攻撃を受けたのは上着越しであったが、決して浅くない傷が出来ている。

「さてと。問題は魔法が使えるかだけど、とりあえず……ステータス」

次郎は、期待と力を込めて呟いた。

しかしいくら待っても、洞窟で見たような白い背景と黒い文字は

再表示されなかった。

「ステータス、ステータス……ステータス」

未練がましく、何度か呟いてみる。

その音量は次第に小さくなり、やがて六回目には途切れて消えた。

「それなら、回復！」

気を取り直した次郎は次に右掌を左上腕に向かって伸ばし、新たな文言を唱えてみら。

しかし暫く待っても、傷口には何一つ変化が起らない。

流石に次郎は困惑したが、前提としてステータス表示に魔力という項目があつた以上、魔法自体はあるはずだと信じ込む。

「火・風・水・土」の四種類は、様々な文明が提唱してきた四元素と同一だ。

現代でも「個体・液体・気体・プラズマ」として、物質の状態を表わしている。

表示された四属性を魔法として常識的に解するならば、土は魔法で固体を生み出すか、既存の固体に形状変化を起こすものであるはずだ。すると水は液体、風は気体、火はプラズマとなる。

そして四属性と異なる光と闇は、物理法則への直接作用系ではなく、補助的な役割になるのでは無いだろうか。

次郎は自らの仮説が、洞窟内で表示された日本語表記が正しいと仮定すれば、かなり高い確率で合っていると考えた。

そして光の魔法を発動させるには、不足する何らかの手順があると考えた。

呪文か、あるいは念じるコツなどが必要なのか。

まずは呪文に当たりを付けた次郎は、次々と知っている言葉を試み始める。

「ヒーリング、リカバリー、フォーマット、ザムデイン！」

傷口には、何ら変化が生じなかった。

残念ながら次郎の付けたあたりは、大外れだったらしい。そしてふと、コンビ二に売っている創傷被覆材を貼り付けた方が早そうだという考えが脳裏を過ぎる。

それでも諦めきれない次郎は、未練がましくベッドに身体を預けて力を抜くと、天井に向かって伸ばしていた左手を降ろし、右手を心臓の上に置いた。

そして魔力のようなものを探して、全身に意識を向ける。

暫く時間を掛けて、ゆっくりと身体の力を感じ取ってみた。

すると心臓の左上辺りを基点に、血液ではない何かが身体を巡っているような、不思議な違和感に気付く。

一先ず呼吸を整える。

そして身体を巡っている何かの流れを引っ張るように意識してみると、流れが任意の方向に動いたように感じられた。

「おお」

思わず感嘆の声が漏れる。

そして意識を集中し、何かを右肩から右腕、右手へと徐々に押し出していく。

すると身体から右手へと集まった何かは、最後に右手の指先まで達したようだった。

次郎は右手の指先に集約された違和感をその場に留めながら、ゆっくりと左手を掲げて、左上腕の傷跡を右手の指先でなぞる。

イメージしたのは、回復だった。

治癒、再生、復元、巻き戻し、陽光、輝き。

その様な言葉を思い浮かべ、イメージを加えながら力を流し込んでいく。

思い浮かべたのは、肉が盛り上がり、かさぶたが出来て、やがて剥がれると元通りになるという光景だ。

右手に留めた流れを左上腕の傷跡へ流し込み、放つ力がイメージに変換されるように念じ続けた。

すると不意に脱力感が生じ、右手から力が抜け落ちた。

それと同時に、左上腕から熱さを感じた。

そして掲げた左上腕の傷跡には、かさぶたが出来ているのが見て取れた。

「……………呪文は要らなかったのか」

どうやら光魔法の一には、コンビで数百円する創傷被覆材スプレーを上回る力があつたらしい。お小遣いが月五千円の次郎にとっては、有難い結果である。

だが初めて魔法を行使した次郎は、世界に対する認識を大いに改めざるを得なかった。

もはや次郎は、人類が共有してきた常識からは、一步外れている。だが世界の定説が間違っていた事例は、歴史でいくつも習った。た。

例えば、天動説と地動説。

学問の世界に民主主義は通用しない。一〇〇人中九九人がAと言いつても、事実がBだったという例は存在する。

それを学校で習った次郎は、目の前の出来事が世界の常識と乖離していると分かっている、頭から否定する気にはなれなかった。

そんな次郎は、巨大コウモリに遭遇する前に見つけて持ち帰った

緑色の小石に目を向けた。

持ち帰った小石は、倒して触れたコウモリの石と異なり、無反応だった。

「……接触が短すぎたとか？」

そう思い直した次郎は、痛みを警戒しながら五本の指先で素早く触れてみる。

だが次郎の身体には変化が起らず、緑石も灰色に変わる事は無かった。

一体、どのような差があるのか。

二つの緑石を比べると、最初に鮮度の問題が思い浮かぶ。

どんな食べ物でも鮮度が良ければその分美味しいし、消費期限を過ぎればやがて食べ物では無くなる。

すると次郎が拾った緑石は、もう消費期限を過ぎていたのかもしれない。

但し同時に、他の可能性も思い浮かぶ。

そもそも常識や定説が通用する石では無いのだ。

もしかするとゲームのように、次郎が直接コウモリを倒さないと、経験値のようなものを得られないかもしれない。

そんな仮説が正しい場合、倒す行為はどのように定義されるのか。例えば猟銃でコウモリを撃った場合、引き金を引いた人間に経験値が入ると仮定する。

すると洞窟にミサイルを撃ち込んだ場合は、発射ボタンを押した人間に経験値が入るのか。あるいはもっと極端に、自動的に撃つ迎撃システムを洞窟に配備した場合には、設置者に経験値が入るのか。つまり投石や罠を用いてコウモリを倒した場合、それで効果が出るのかという疑問だ。

もつとも次郎は、コウモリに対する畏を仕掛けられるほどの知識を持っていない。

より直接的かつ原始的な手段に訴えるべく、次郎は翌日からコウモリを探し回った。

五月五日は、こどもの日で祝日だ。

だから出現数をサーブスしてくれたのだとは思えないが、コウモリは次々と見つかり、都合六匹も倒せた。

戦い自体に苦戦はしなかった。

巨大コウモリを一匹も倒す前は、レベル〇だったのだろう。レベル一の次郎は危なげなく戦えたし、洞窟までの移動時間も一〇分から七、八分に短縮していた。

目に見える成果が上がれば、モチベーションも高くなる。

ゴールデンウィーク最終日となる五月六日は、四匹を倒したところでレベルが二に上がった。

そこでボーンラスポイントを攻撃に振り、攻撃力を上げてさらにコウモリを叩き落として回った。結果として一〇匹を倒すも、持参したナタが壊れかけた為に引き返した。

こうして中学二年のゴールデンウィークは過ぎ去っていった。

03話 日常への回帰

衝撃のゴールデンウィークが明け、次郎は普段通りに学校へ登校した。

自転車を漕ぐ速度は体感的に上がっていたが、それ以外に変わった点は一切無い。

「おはー」

「ジロオハ」

「ジロオハハ」

クラスに入って挨拶すると、友人の中川と北村から挨拶が返ってきた。他にも何人か、手を軽く挙げて挨拶してくる。

次郎の通う三山町には中学校が一校しか無い。

クラス数も各学年に一つずつだ。

次郎たち二年生は、男子一〇人と女子八人。

それが小学一年生から続いている。

そんな状態でもグループが形成されるのは人の性だろうか。小さいクラスは、さらに小さな複数の集団に分かれている。

ちなみに中川と北村は、次郎と合せて三馬鹿トリオである。

「ジロー、休み中にどこ行った？」

「ジローならテレビで見ただろう。選手とコーチ時代を合わせたら、野球界生活がついに半世紀に達したらしいぞ。すげえな次郎。ビックな男だぜ」

「それはイチローで、俺じゃなくて兄貴と同じ名前。ちなみにゴールデンウィークは、前半に一泊の温泉旅行に行ってきた」

話を振ってきたのが中川で、わざとボケてるのが北村だ。

基本的には二人ともボケ役だと次郎は信じており、三人ともボケだというのが周囲の評価である。

「ほう、熱海ですか。それとも別府ですか」

「そっぴや別府温泉つて、エロ温泉らしいぞ」

「えっ、マジで!？」

「おう。まずはコンパニオンを呼ぶ時に、ソフトかハードかを選びます」

「……………ゴクリ」

三馬鹿は妄想街道に向けて、勢い良く自転車のペダルを漕ぎ始めた。

ちなみに次郎が泊まったのは、日本海に浮かぶように建てられた有名な温泉宿だ。

部屋まで料理を運ぶ仲居への心付けが必須となる相応の部屋であり、そこでは三人が期待するような特殊なコンパニオンと遭遇する機会は無い……はずである。

温泉旅行は、次郎の祖父が提案して父が乗った。

母は宿内の店舗で専用の枕を作成して貰い、シャンプーとコンディショナーとボディーソープをお取り寄せにして、存分に満喫していた。

兄は帰宅後に、ネット通販で同じメーカーの一〇リットル入り格安シャンプー、コンディショナー、ボディーソープを発見し、母に伝えて一悶着起こしていた。

そんな大人たちの旅行に、次郎は家族の義務として連れて行かれただけである。

話のネタになった以上、まったくの無駄にはならなかったが。

やがて三馬鹿の妄想が一段落した後、次郎は自分の席へ移動して机の上に鞆を乗せ、中から教科書とノートを取り出し、次々と机の

中に放り込み始める。

すると次郎から遅れて、次の生徒が教室に入ってきた。

「おはよう」

「おう、おはは」

声を掛けてきたのは、ツインテールが特徴的な次郎の幼馴染み、
地家美也^{じけみちや}だった。

小学一年生から一クラスしかない環境では、同級生全員が幼馴染
みと言える。

だが美也はそこの中にあっても、次郎と家が向かいというエリート
幼馴染みである。

最も二人の家は、都会人が想像するお向かいさんとは少し異なる。
何しろ溪谷を挟んでいるのだ。

次郎の家は、古くからある山の集落だ。

そして美也の家は、団塊の世代ジュニアと呼ばれる祖父母の子供
時代に切り開かれた、バブル期の新興住宅地の一つである。

そのため溪谷を隔てた旧家と新興住宅地との間には、田舎ならで
はの下らない確執があった。

旧家の古めかしい人々曰く、彼らは苦難を分かち合ってきた仲間
ではないらしい。

クラスに小集団が形成されるように、大人の社会にもグループが
形成されたのだ。

やがて少子化によって町内行事が一纏めにされると確執も薄れて
いき、次郎の父世代には随分とマシになったそうだが、次郎から見
ても未だ隔たりは残っている。

だが次郎と美也の場合は、最初から確執や隔意とは無縁だった。
その理由の最たるは、互いの祖母同士の仲が良かった事だ。

祖母たちは田舎に嫁いだ同士で助け合いの精神が発生したらしく、

周囲の確執をものとしなないどころか、むしろ積極的に仲の良さを見せつけた。

その延長で、育児が長男に偏った次郎の母や、半ば育児放棄だった美也の母に変わって同い年の末孫同士を引き合わせて一緒に遊ばせたり、片方が一纏めに預かったりもしてきた。

結果として次郎たちは、祖母二人と同い年の兄妹という家族のよくな関係に至っている。

そんな幼少時から植え付けられた二人の同族意識は、三年前に次郎の祖母が他界した後も健在だった。

「次郎くん。校門に入るところで、凄く肩が下がっていたよ」

「午後は、アンニユイでマングラムなんだよ」

「まだ朝だよ。早く元に戻る」

「へいへい」

美也は名前こそ猫の鳴き声っぽいけど、性格は犬に近い。

次郎に対する美也の行動は、自らリードを啜えて寄ってきて「そろそろ散歩の時間だけど、どうしようか。用事はちゃんと終わってる？ 体調とか大丈夫？」と心配してくれる中型犬に似ている。

本人に言くと確実に怒るので、心の中で思っているだけだが。

但し美也の場合、群れの線引きに関しては狼よりもシビアだ。

田舎の出自や家柄至上主義が性格的に合わなかった事や、両親が育児放棄気味だった事も有り、箱庭の内側に祖母たちと次郎を入れている他は、基本的に他の群れとして一定の距離を取っている。

学年一位という成績から真面目な子だと色眼鏡で見られがちだが、次郎から見れば、単に学力が高いだけで他は周囲と何ら変わりなく普通に喜怒哀楽を外に隠しているだけの幼馴染みという感覚だ。

「それと、はいこれ。お兄ちゃんから」

「おー、サンキュー！」

差し出されたのは、次郎が預けていたUSBだった。

その中には、美也の兄である恭也が見繕った無料公開されている「お勧めネット小説」や「ウェブ漫画」のデータが入っている。

何故これほど沢山の小説が、インターネット上に無料で公開されているのか次郎には解せないが、恭也が探した作品はどれも次郎の趣味に合致しており、いつも有り難く読ませてもらっていた。

「じゃあこれ、次のUSB。恭也さんよろしく」

「その時間を一時間だけでも英語に向ければ、すぐに成績が上がるよ？」

「英語に向けるのだけは有り得ないな」

次郎の総合成績は、クラスで中ほどだ。

但し、好き嫌いで教科ごとの点数には極端な偏りがある。その悪い方の代表格が英語で、切っ掛けは小学生の時に起った西日本大震災だった。

平時から治安が良好で、外国人への気遣いもあり、地震多発国ゆえに高い防災が施され、極めつけに南海トラフを震源とする巨大地震が事前に想定されていた日本ですら、各地の行政機能は崩壊していた。

震災後に取り上げられたニュースでは、被災した外国人が言葉の壁で保護を受けられずに苦勞する姿が何度も取り上げられた。

それを見た次郎は、自分が海外で被災した場合はどうなるのかと恐れた。

結果として次郎は、日本語の通じない海外へ出る気を失った。よって、今後の人生において全く訪れる予定の無い英語を習得する気になれなくないのだ。

一方で自らの関心事には、それしか目に映らないかの如き集中力を見せる。差し当たったの関心事は、当然ながらこの洞窟内に纏わ

る全事項についてだった。次郎は英語の話題を聞き流すべく、鞆の中から徐ろにお土産を取り出した。

「まあまあ。それよりもお代官様、黄金色のお菓子で御座います」

「……………何それ？」

「旅行に行ったからお土産。恭也さんと二人で一箱だけだな」

「うーん、ありがとう」

兄と二人分と言われた美也は渋々受け取って、自分の鞆に仕舞い込んだ。

こういう旅行のお土産に関しては、完全に次郎が渡す側で、美也が受け取る側になる。

美也の父は、サラリーマンとして都会で八年働いた後、結婚と共に山中県に移り住んで農業に参入した。そして経営に失敗して借金を背負いながら、零細農家と零細サラリーマンの二足のわらじを履いている。

しかも農家経営が傾いていた頃から、安酒に走って肝臓を悪くしており、零細サラリーマンも人並み以下の能力しか出せていない。母がパートで家計を助け、近所に住む祖母の支援も得て、ようやく借金を返済しながらギリギリの生活が成り立っているところだ。

そんな家庭の事情によって、美也は家族旅行に行く余裕など一切無い。

昔は素直にお土産を受け取っていた美也も、やがて次郎から受け取るばかりの状況に不公平を感じて、遠慮するようになった。

その頃から次郎は、幼馴染みにお土産を渡す際には受け取りを断られないように、USBを預けてお願いも加えと言った小技を使うようになった。

「何処に行ってきたの？」

「日出づる処より、日没する処へ」

「中国？」

いきなり突拍子も無い言い回しをしても会話のキャッチボールが成立する辺り、二人は流石に幼馴染みであった。

「いや、石川県の温泉」

「確かに西よね。それで、どんなところだったの？」

「マジで海に日が沈んでいった。空の雲が真っ赤だった」

「動画とか撮った？」

「おう」

次郎は鞆から携帯端末を取り出して、動画を再生しようとした。二〇四二年現在、一部の携帯端末は複数人で同時にTV電話すら可能な機能を備えるに至っている。

一方でガラパゴス携帯、略してガラケーと呼ばれる製品も高齢者を中心に一部で根強い人気があり、未だ絶滅には至っていない。

「学校で出さないの」

「うい」

美也の一言で、次郎の携帯端末は鞆に出戻りをする。

「旅行には皆で行ってきたの？」

「ああ、爺ちゃんが皆連れて行った」

「そっか。良かったね」

美也に安堵の表情が浮かんだ。

亡くなった次郎の祖母は、美也にとって一番内側の線に入る存在だった。

そのため、その配偶者である次郎の祖父については、美也なりに

多少は気にしていたのだ。そして家族旅行に誘うような精神状態であることに安心したのだ。

「そろそろ先生来るわね。直ぐに中間テストだから、ちゃんと勉強しないとダメよ」

「ういいうい」

次郎は放課後に向かう予定の洞窟で半分くらい上の空になりつつも、残り半分くらいは美也の言葉通り真面目に授業を受けた。

体育の時間だけは手を抜いたが、それは他のクラスメイトも同罪である。ゴールデンウィーク翌日にグラウンドを走れというのは、あまりに酷な話だろう。

やがて放課後になった次郎は、真つ直ぐ帰宅する事にした。

部活は陸上部だが、入部の理由は小学生の頃に障害物競走で速いと褒められ調子に乗っただけだ。次郎より速い陸上部員は後輩にすら複数おり、大会での活躍は期待されていない。そのため、無理に練習をしなくても良い立場である。

美也に言伝を頼むと確実に捕まるため、それ以外の人物に依頼する。

「ナカさん、キタムー、悪いけど部活休んで先に帰るわ」

「どうしたジロー。今日こそはお前の最速の走りを見せてくれるんじゃないのか」

帰宅を告げた次郎に、中川からお約束のセリフが返ってくる。

次郎の名前は、堂下次郎どうしたじろである。どうしたジローとは、次郎のフルネームと問い掛けを重ねた、小学生以来の使い古しのオヤジギャグだ。

「いや、エロ温泉のせいで足腰が立たない」

「ジローえろっ」

「うひょ、お大事になー」

アホ二人は満面の笑みを浮かべ、両手を叩いて喜びを表現しながら次郎を解放した。自由を得た次郎は、鞆に教科書を詰め込むと、素早くドアへと駆けて行く。

去り際に美也が嗜めるような表情を向けていたが、次郎は軽く手を振ってそのまま教室を後にした。

部活動に熱心な他校の生徒は、部活に所属しながら帰宅する光景を奇妙に思うかも知れない。

しかし三山中学校には、それを許容せざるを得ない特殊な事情が存在する。

その特殊な事情とは、全学年を合わせて六〇人に満たない生徒数だ。

部活の最低所属人数は五人だが、サッカー部や野球部などは五人では活動出来ない。サッカーが流行って男子の半数がサッカー部に入った時には、野球部が廃部に追い込まれた。そしてサッカーが廃れると、今度はサッカー部も廃部した。

そんな調子で所属人数に偏りが生まれる度に廃部が続いた結果、今や残っているのはバスケット部、バレー部、陸上部、美術部の四種類だけである。

こうなると生徒側には、部活動に対する自由選択の余地が無い。そのため部活に所属する義務はあるものの、活動は強制しないという妥協案が採られた。次郎が比較的すんなり帰れる所以である。

足腰が立たないと言い訳した割には軽やかなベダル漕ぎで、次郎は自宅へと辿り着いた。レベルとやる気が合わさった結果、中川が言った最速の走りが実現出来た可能性もある。

惜しむらくは、その立会人が皆無だった事だろう。もつとも次郎の関心は、既に洞窟へ向いている。

洞窟内へ持つていく物は、昨日のうちに見繕っておいた。壊れかけたナタの代わりに選んだのは魚用の投網と電動ドリル、それと解体用ナイフだ。他にもLEDランタンとLED懐中電灯は持つていく。

投網はかなり古い物で、家族の誰も使っているのを見た事が無い。飛び回るコウモリを捕獲すべく、蔵の肥やしになっていたのを引っ張り出した。

電動ドリルは、次郎の父が昔使っていた旧型だ。使い勝手が悪くなって子供用に払い下げられたので、壊れようが無くなるうが文句は言われない。それでも投網に絡め取られたコウモリの頭部に穴を空けるくらいは出来ると思われたため、持つていく事にした。

解体用ナイフは、祖父が沢山持つている熊用の品だ。猟銃や今使っているナイフは鍵付きの金庫にしまわれているが、古いナイフは十数本くらい纏めて一つの箱に入れられて蔵に放り込まれている。――二本減ったところで、気付かないと思われた。

なおナイフは、コウモリの体内にある緑の小石を取り出すために用意したものだ。護身用としても使えるだろう。

そのように、次郎の家には様々なものがあつた。その中で持ち出しても発覚せず、重くなりすぎないものを選び、洞窟へと向かった。時刻は一六時を少し回ったところである。

夕食の一九時くらいに帰宅する場合、コウモリ狩りに費やせるのは二時間半くらいだろうか。あまり不審がられないためにも、早めに切り上げた方が良さかもしれない。土日なら半日は使えるため、深入りするのとは休日となる。

そのように考えているうちに、目的地に辿り着いた。

昨日までと全く変わらず、車三台ほどが並んで入れるくらいの大穴がポツカリと開いている。綺麗に整った段差と、奥へと続く灰色の床。明らかに不自然な建造物である。

次郎は段差を超えて坂道の半ばまで進んだ後、ランタンのスイッチを入れて、未知なる洞窟の内部を科学技術の粋で照らし出した。

「……うげっ」

暗闇から浮かび上がった光景に、次郎は驚きの声を漏らさずにはいられなかった。

原因は、三日前に倒した最初の巨大コウモリの死骸だ。翼が折れて内臓を破壊されたコウモリは、杉山に放置すれば虫や蟻の餌になるのが本来の末路だろう。

しかし二日前に見た死骸は、無視などに襲われる事無く、代わりに仄かに光る灰色の半透明の液体に包まれていた。また周囲に飛び散った血も、同様に発光する小さな灰色の液体に覆われていた。

液体はコウモリの身体から出たものでは無く、洞窟内の床や壁などから染み出てきたと思われる。液体そのものは柔らかく、ナタの先端で突くとゼリー状の感触があった。

そんな液体に包まれてから一日経った昨日は、コウモリの身体が随分と小さくなっていた。身体の水分を抜かれて干からびたかのような、そんな縮み型であった。

そして現在、コウモリは皮膚や肉が溶けたのか、ゼリーの中で骨格模型になっていた。しかも完全骨格では無く、あの硬い骨格が指先から溶け始めている。

「洞窟内で死ぬと、溶かされるのか？」

コウモリの死骸や糞尿が無い事に違和感を覚えていた次郎だったが、ゼリー状の物体が洞窟内の異物を溶かすのでは無いかと想像して、一先ず納得した。

この物体は洞窟内の僅かな蛍光灯であり、異物に対する掃除機でもあるのだろう。

非常に効率的であり、益々以て常識の通じない場所だった。

次郎はゼリーを外見からスライムと名付け、そのまま放置を決め込んだ。

半透明な身体の何処にも緑石を持たないスライムは、戯れるだけ時間の無駄だ。

改めて段差の先にあった坂道を下り切り、蛍光スライムの灯りだけでは不十分な暗闇へと足を踏み入れた。そして左手で掲げたランタンに照らし出された世界を覗き込んだ。

入り口を降り立った先から奥への道は、やや広がりを見せながら続いていた。

目算だが横幅は車四台が通れるくらいで、高さは次郎の身長のおよそ四倍くらいだろう。まるで片道二車線の国道で、大型トラックも進めるトンネルくらいの大きさだ。

これではまるで、都会にある駅の階段を降りたところで、駅の反対側へと伸びる巨大な地下道を目にした気分だ。

駅の地下道との相違点は、天井に蛍光灯が無い事だろう。

蛍光スライムはコウモリにとっては十分な灯りなのかも知れないが、次郎にとっては街灯も月明かりも無い夜道に等しく暗い。

壁には非常ボタンが無く、AEDや消化器も見当たらない。

携帯の電波すら届かず、道も曲線で奥まで見通せなくなっている。そしてコウモリが生息し、壁には蛍光消化スライムが溶け込んでいる。

こんな駅の地下道が日本にあったら、その管理会社は炎上し、即日クレームの嵐に見舞われるはずだ。マスコミ辺りは社長の謝罪会見を要求するかも知れない。

もつとも、現在唯一の利用者である次郎にクレームを入れるつもりが無いので、山の所有者である祖父は謝罪会見を開かずに済むだろう。

それに次郎自身にも、これから大怪我をする予定は無い。

失敗したのも初日だけで、それ以降は充分な心構えと装備で進んでおり、大きな怪我はしていない。今日も事前準備は怠っておらず、洞窟内を大胆かつ慎重に進んでいる。

刹那、何かが降って来る気配を感じた次郎は、気合いと共に投網を投げ放った。

「おりゃああっ！」

「ギギイイ」

大きく広がった投網の中心に、三匹ものコウモリが絡まった。羽ばたきを阻害されたコウモリたちは、洞窟の床へと引きずり落とされていく。

「ヤバい、ヤバいつ」

投網でコウモリを捕まえすぎた次郎は、大慌てで電動ドリルのスイッチをオンにした。

全員が攻撃特化の一族において比較的慎重派に属する次郎は、複数同時に襲い掛かってくるという想定外のコウモリ達に対し、ドリルの回転音を洞窟内に鳴り響かせながら、絡め取ったコウモリたちに襲い掛かっていった。

堂下家が初代町長であった祖先を最後に、代々財産を減らしていくのも道理であった。

04話 成績悪化

次郎が洞窟に潜り始めてから、二週間が経った。

その間に中学校では、一学期の中間テストも行われている。

日本の教育は、上げて落とす恐ろしいシステムだ。

次郎達学生は、毎年五月のゴールデンウィークという幸せ絶頂期から、直ぐさまテスト勉強期間と中間テスト本番へと突き落とされたのだ。

諺では『獅子は我が子を千尋の谷に落とす』と言われるが、獅子でも我が子を直前に油断させたりはしないだろう。

このスケジュールを考えた大人たちは、一体何を考えているのか。社会へ出てから経験する辛さの一部を、子供のうちから叩き込むうとも思ったのか。

こんな世知辛い世の中では、テスト前に読破したはずの漫画を読み直したり、新着のネット小説を読み漁ったり、綺麗なはずの部屋を急に掃除したり、コウモリ退治に洞窟へ赴いたりする生徒が続出するのも道理である。

ゴールデンウィークが明けてから二週間、次郎は先人達の例に漏れず、コウモリの乱獲を続けていた。

土日は撃破数上がり、レベルアップと共に狩りの効率も上がった。

そのおかげか、現在のレベルは四に上がっている。コウモリは複数同時に倒せるようになった。

しかし相手が中間テストとなると、その強さは全く通用しない。探索活動への没頭は、中間テストに限っては自分の首を絞めただけであった。

「セイセキガ、オチタ」

「どれくらい落ちたの。前は一八人中一〇番だったよね」

次郎の学年は、一八人しか生徒が居ない。

そして九位と一〇位との間には、成績一桁か二桁か、中間ラインの上か下かと言う二重の区切りが存在する。

次郎の成績は、良い方と悪い方に分けるとギリギリ悪い方に入っていた。

だがそれも、過去の話である。

「一三番」

「あー、それはマズいかもね」

次郎の席次は、三つ落ちた。

これは一〇〇人以上の同級生を有する都会では大したことは無いが、一八人しか居ない学年では大きな変動となる。

一八人では一二番までが上から三分の二に入り、一三番以降は下位グループとなるのだ。

そして三分の二に入れないのは、非常に拙い事態である。

なぜなら次郎達の住んでいる県では、少子化の影響で生徒数が大きく減った結果、公立学校と私立学校の間で生徒数の調整が行われているからだ。

生徒数の調整とは、公立高校と私立高校で、それぞれ何人の生徒を入れるかの話し合いの事だ。

例えば生徒数が二〇〇人ほど居る場合、公立高校一〇〇人、私立高校一〇〇人という風に棲み分けが行われていた。

しかし少子化の影響で、生徒数が一〇〇人しか居なくなった。

その時に公立高校が従来通り一〇〇人を入学させ続けければ、私立高校は潰れてしまう。

そうして私立高校の廃校や教師の失業問題が出たため、次郎達の県では教育委員会が乗り出し、七村市と隣市においては生徒の三分の二を公立が取り、三分の一を私立が取る形で話が付いたそうである。

従って成績で三分の二に入れない人間は、自ずと私立高校へ行く事になる。

「くつくく、どうしたジロー。テスト前の威勢は、どこへ消えた？」

次郎の成績ライバル、中川仁大なかむらじんだいこと通称ナカさんが、貼り出された成績順位を得意気に指差して叫んでいた。

加えてここぞとばかりに、堂下次郎ネタを入れてくる。

わざわざ見るまでも無く、一三位の次郎か、八位の自身を指差しているのだろう。

二人の間でここまでの差が付いたのは、今回が初めてだった。中川は明らかに有頂天になっている。

だが次郎にとっては、正直それどころではない。

私立高校に行けば良いと言う人も、都会人には居るだろう。

公立よりも遙かに人気の高い有名私立がある事は、田舎者の次郎でも多少は知っている。

だがそんな事を宣う都会人は、逆にど田舎ど辺境の事を何も分かっていない。

次郎達が住む七村市は、市が町だった時も、それ以前に村だった時も、私立高校は一度も存在した事が無かった。

従って、唯一無二である市立高校に落ちた人間は、総じて隣市にある私立高校まで遠路遙々、三年間も毎朝早起きして通学する羽目に陥るのだ。

「あー、最悪」

さらに市立出身と隣市私立出身との間には、さらに恐ろしい壁がある。

それは、田舎のおばちゃんネットである。

インターネットにも匹敵する田舎のおばちゃん井戸端会議という恐ろしいネットワークによって、子供達は高校で勝ち組と負け組というレッテルを張られて分け隔てられてしまうのだ。

私立高校から頑張って有名大学に入っても、井戸端会議のおばちゃんズには全く通用しない。

なぜならおばちゃんズは、大学は東大と医学部が凄いという事くらいしか分からないからだ。

仮におばちゃんズの中に有名大学を分かる人が居ても、話し相手のおばちゃん分が分かなければ話題に上らない。超辺境のど田舎では、インテリ振ると生意気な人だと思われる、恐ろしい世界なのだ。おばちゃんズが必ず抑えている情報は、旦那は何をしているか、息子や娘はこの高校か、部活は何か、県大会で何位だったか。である。

これは旦那の仕事や子供の成績によるヒエラルキーに直結するため、絶対不可欠な情報だ。

話さないという拒否権は存在しないし、おばちゃんズはあらゆる伝手を用いて何が何でも聞き出してくる。

しかし、ここでさらに注意が必要だ。

子供が全国大会出場などで大きな結果を出すと、掌を返す様に途端に嫉妬される。

そうして嫌煙され、疎遠にされる事から、対抗しようのない結果を出した際には慎重かつ謙虚な伝え方をしなければなくなる。例えば全国大会に行ったお土産を、東京に行ったなどと言ってさり気なく渡しておき、後日偶然耳に入るなどだ。

出る杭は、おばちゃんズが連携して押し潰す。

田舎連絡網にも、上下関係に基づく情報の変質が存在する。

仲の良い年齢層のグループ、家の距離に応じたグループ、その他のおばちゃんズで伝え方が微妙に異なるのだ。

さらにご近所付き合いの程度、この町内に何年住んでいるのか、町内の役員は何をやったなども重要だ。場合によっては情報が恣意的に曲げられてしまったため、連携は欠かせない。

日々の暮らしでも畑の収穫が多ければ少しお裾分けをして、鮎釣りなどの際にはお何匹か裾分けをして、細かく配慮する事も欠かせない。

これこそが、次郎が私立高校に行くと我が家が若干困るという本当の意味であり、ど田舎ど辺境の嫌らしい姿である。

他にも次郎がまだ知らない大人たちのルールは山ほど有る。マンシヨン暮らしの都会人たちには、想像すら出来ないだろう。

これら一切がどこにも明文化されていなくて、田舎に住んでいて自然に身に付く事と、両親や周囲から教わる事でしか覚えようがない。

都会人は知りようがなく、移り住んだからといって誰も説明なんてしてくれない。まずは田舎者たちから遠巻きに様子を見られる。

それでいてルールを逸脱すると一気に嫌われるし、フォローの方法も知らないのです、都会人は山中県ではとても暮らせないという結論に達する。

都会から来た美也の父が農業で失敗したのも、このルールのせいだ。

美也の母も農業系には疎く、祖母が居なければ完全に村八分になっていた。

そんな発展途上国もビックリな日本の超田舎社会において、受験で市立高校に落ちると言うことは、都会人が想像する以上に深刻な事態なのである。

「オカンニ、オコラレル」

次郎の母は、空手のメダリストである。

単なる男子中学生が反抗しても、到底太刀打ちできる相手ではない。

「はっはっは、グラウンドにジローの墓が建つのか。ではシャープンの芯で線香を立ててやるぞ」

机に突っ伏した次郎に対して、中川が神妙な顔を作ってパンパンと柏手を二度打ってから一礼した。

どうやら霊として祀られてしまったらしい。

しかも中川は信仰が薄いらしく、祀った後はアツサリと立ち去っていった。

おそらく次は、次郎と同程度の成績を取ったであろう北村の所へ自慢に行くのだろう。まさに我が世の春である。

もはや結果は覆せないため、油断した中川を祀り返すのは期末テストに持ち越しとなった。

「次郎くん、ちょっと手伝おうか」

「あー、うー、頼む」

「良いよ。頑張ろうね」

霊体化して虚しく漂う次郎に、美也が救いの手を差し伸べた。

美也の成績は、学年一位だ。

小学生の時にクラスでいつも一〇〇点を取っていたような子は、おそらくこの小学校にでも一人くらいはいるだろう。美也は、その中学校延長版である。

とりわけ次郎が嫌いな英語に関しては、美也は飛び抜けている。

美也は、父方の伯父が小学生からイギリスに住んでおり、従姉妹はハーフでイギリス国籍を持っている。

そんな親戚に英語を仕込まれ、今でもインターネットを介して英語で会話やメールをしているため、美也の語学力は今すぐ外国で暮らしても不自由しないくらい高い。

次郎たちのクラスが衝撃を受けたのは、中学一年の時に起った出来事だ。

英語の授業中、英語教師が外国人講師に向かって英語で話しかけても伝わらず、首を傾げられた時、美也が代わりに英会話で仲立ちをしたのだ。

ペラペラと英会話でやり取りする美也と外国人講師、そして唖然と見つめる生徒と英語教師。

要するに美也は、そのレベルで英語が出来るのだ。

もしも英語のテストで美也が満点以外を取った場合、次郎達はまず英語教師が間違っている可能性を疑う。

美也は残る数国理社に関しても、二歳年上の兄と同じペースで勉強してきた。

学年トップの兄も、親戚から貰った教科書などで一学年先を勉強しており、美也はそれに合せているので二年先と三年先を同時に勉強している。

つまり美也は、三年後と二年後の予習をしているため、自分の学年に関しては学ぶのが三回目になるわけだ。

外国では飛び級というのだろうか。

このように美也は日本の教育システムから逸脱しているため、基本的に一回しか学ばない次郎達のような一般生徒とは、最初から同じ土俵には居ない。

「それで美也は、何問くらい間違えたんだ」

美也に対しては、全教科合せて何問を間違えたのかと聞くのが手っ取り早い。

はたして美也は、指を三つ立てた。

「……………中間テスト全体で三問かよ。相変わらずだわ」

「ここまで来ると、全教科満点じゃないのが悔しいけどね」

「それで、何の教科なんだ」

「社会一つと国語二つ。社会は学習指導要領の改訂で、教科書の内容が変わったの。思い込みで見逃していたよ。国語は、本当は間違っていないけどバツ。問題文に出ていない原作の範囲を答えに書いたから駄目だったみたい。だから文系は駄目なんだよ」

「よし、何を言っているか、サッパリ分らん」

次郎はわざとらしく溜息を吐いた後、日本の現代教育に不満を呈した。

「そもそも詰め込み教育が悪い。一番理解できないのは古典、あれって社会に出てから、絶対使わないだろ」

「現代語の成立に不可欠な過程だから、学問としては省けないんじゃないかな」

「いや、過去より未来を見ようぜ」

次郎は実用性を重視する姿勢を保ったが、美也は首を横に振った。

「未来語を策定する時に、過去の過程が参考になるかもしれないよ。あとは国民全体の言語理解が深まれば、意思伝達と相互理解も深まるかも」

「ぐぬぬ、文科省の役人みたいな事を言いおつて。てい」

次郎は美也の頬と両手で挟み、うにうにと軽く上下に動かした。

「うにゃ!？」

咄嗟に何かを言いかけた美也の言葉は、頬を挟まれて言葉にならない奇声を發した。

それでも次郎の手は収まらず、美也の柔らかい頬をふにふにと左右に蹂躪した。

「うりゃ、うりゃ、うりゃっ」

「うーっ!？」

「ほっぺた、柔らかいなあ」

「ふあ、にゃ、すい、にゃ、しゃ、いい!」

ふにふにの肌を弄んだ次郎が満足して手を離すと、今度は美也が手を伸ばして次郎の頬を左右から両手で摘まむ。

「反撃っ!」

「うぎゅう」

次郎は奇声を上げつつも、美也の手に為されるが儘となった。

『右の頬を弄った後は、左の頬を差し出さない』

二〇四二年ほど前、弟子に銀貨三〇枚くらいで売られて処刑された偉人も、そのような事を言っていた……かも知れない。

やがて美也が満足して手を引っ込めると、次郎は自らの成績を差し置いて応援を始めた。

「社会は残念だったな。次は頑張って国語以外は満点を目指してく

れ」

「うん。でも期末は他の教科も出るから、無理かも」

「他の教科か。音楽、美術、体育、技術・家庭。学科だけならともかく、実技はどうしようもないからなあ」

「流石にね」

美也は元々のスペックが高いのか、実技でも好成績を出す。

ただし音楽などでは、元々ピアノなどを習っている女子が圧倒的に有利なシステムだ。そのため単科では、一番を譲らなければならなくなる。

惜しむらくは家計が苦しくて、美也に音楽や美術を学ぶ機会が無かった事だろう。

小学生の時には獅子舞で笛を吹いていたが、美也は十何種類もある曲を音符も無しに二年でマスターして、アレンジ曲まで作っていた。

二年は長く思えるが、祭りの練習期間は一年間に三週間のみだ。その短期間で全てを覚えきったのは、町内では美也だけだった。もっとも次郎の町内では、少子化で獅子舞自体が完全消滅してしまったが。

「どうせ高校に行ったら、音楽とかは選択制でやらなくなるだろ。受験にも出ないし」

「そうだけど。でも、ありがと」

あまり良い慰めでは無かったが、美也は次郎の気持ちを素直に受け取った。

「そっいえば次郎くん、成績の話だったよね」

「……………お手柔らかにお願いします」

それから一カ月半が過ぎた。

教師の出題範囲を読み切った美也の指導は的確で、次郎の期末テストの成績は六番まで急浮上した。

差し当たって次郎は、調子に乗って立場が逆転した中川の墓を肃々と建立した。

05話 発見後の夏休み

洞窟を発見してから三カ月が過ぎ、夏休みに突入した。

夏は海や山でのレジャーやスポーツ、長期の休みを活用した遠方への旅行、近場でもかき氷やアイス等々、魅力的な光景に溢れている。

ずっと山暮らしの次郎は、人生において一度も山に行きたいと思った事が無い。

しかし海には、昨年まで毎年何回も遊びに行っていた。

次郎が自力で行ける範囲は市営プールと市内の海だけだが、田舎の海岸はプライベートビーチであるかのように人がおらず、見渡す限りゴミが落ちていない。

白くて肌触りの良い砂浜が何処までも続き、水平線の彼方まで深い青色の海と、押し寄せる白色の波が視界いっぱいに広がっている。そんな素晴らしい環境は、どれだけ行き慣れていても相応の充足感が得られた。

しかし今年に限っては、次郎はまるで修行僧のように山籠もりを繰り返しているおり、一度も海に行っていない。

あまりに落差が激しかったため、山で一体何をしているのかと母親に問われたほどだ。

それでも山は自宅の敷地内であり、成績も上位三分の一にあたる六番まで上がっていた事から、深くは追求されなかった。

それには兄の一郎が高校三年生で、受験勉強のために次郎が家を出ていてくれた方が有難いと言う家庭の事情もあった。

おかげで次郎は、まるで草むしりをするかのように巨大コウモリ狩りに勤しむ事が出来た。

「うおりゃあああっ！」

怒声と共に全力投擲した石が、コウモリのぶら下がる天井の一画に直撃して、激しい衝撃音と共に爆ぜ散った。

すると巨大コウモリの群れが、洞窟内に悲鳴にも似た鳴き声を響かせながら、雨のように次々と降り注いでくる。

一〇匹や二〇匹といった生易しい数では無い。

体育館くらいの広さにある天井と思っていた部分が、残らずコウモリのぶら下がっていた場所だったのだ。

天井が崩落するかのようになり、巣くっていた巨大コウモリ達が一斉に降り注いで来た。

一匹が成猫くらいの巨大コウモリであるにも拘わらず、この空間にひしめいていたコウモリの数は、数百匹を下ることは無いだろう。

「てめえらは、一体何匹居るんだあっ！」

「ギギッギギッギッ」

コウモリ語を学んでいない次郎には、コウモリの返事がサッパリ分からなかった。

そのため鳴き声は一切合切無視して、当初の予定通りに通路側へと退避する。

そして通路に飛び込んできたコウモリたちを、順に叩き落とし始めた。

次郎が使っている武器は、レベルを上げて覚えた魔法で出した石の棒だ。

ナタも金属バットもレベルが上がった次郎の力には耐え切れず、電動ドリルと投網も倒す速度を鑑みれば効率が悪い。

そのため次郎は、使い勝手が良くて、容易に補充できる新たな武

器が必要になった。

そんな次郎が選んだのは、土の魔法で生み出せる石だ。

石は、人類が文明発祥以前から用いてきた最初の道具である。

何しろ地面にいくらでも落ちていて、何の加工もせず自由に使えるのだ。

石器時代という言葉の通り、人類は相当の長期間、様々な形で石器を多用してきた。

現代に至る人類の礎を築いたのは、石だと言っても過言では無いだろう。

投げて、掴んで殴りつけて、押し付けて切り裂ける。

加えて次郎の場合、土魔法でいくらでも好きな形を生み出せる。

そんな石をコウモリ狩りに使う事で、次郎は三カ月間でレベル一まで上がった。

堂下次郎 レベル一 B P O

体力二 魔力三 攻撃二 防御二 敏捷二

火一 風〇 水一 土二 光一 闇〇

身体能力を満遍なく上げたのは、当然コウモリと戦闘するためだ。魔力だけ三に上がっているのは、使用する値に見合った魔力が無いと、魔法がまともに使えなかったからである。

戦闘時には火一で光源を確保しつつ、土二で戦う形で魔力を三つ使っている。

その後は火一で光源を確保しながら、水一で血を洗い流す形で、魔力を二つ使用している。

もしかすると火と風の魔法を集中的に覚えて、コウモリの群れを風で叩き落としてから焼き払った方が効率的だったかもしれない。現在の次郎は器用貧乏で、万能型である代わりに必殺技を持ち合わせていない。

もっとも単独で洞窟に潜っているため、身体能力を上げずに必殺

技を覚えても、膨大な数のコウモリに飲み込まれていれば、どこかで死んでいた可能性もある。

流石に効率程度では自身の命と釣り合わず、次郎は悩みつつも、現在の戦闘スタイルを維持している。

「おんどりやあつ！」

威勢の良い叫び声が、洞窟内に響き渡る。

まるでヤクザのカチコミだ。

ちなみにヤクザは山中県にもしつかりと根を張っていて、次郎も見えた事がある。

ヤクザは、諸外国ではマフィアと呼ばれる。より分かり易く例えるなら、中世ヨーロッパ世界においては名のある盗賊団などに該当する。

しかし現代の騎士団たる正義の山中県警は、ここは山賊のアジトですと看板が掲げられた街中の一画を素通りである。

中学生の感覚では、警察は交通違反の反則切符を切る暇があったら、暴力団の事務所にでも行ったらどうかと思わなくも無いが、今のところ山中県警にその気は無いようである。

あとは、パチンコ店が異様に多い。

パチンコは法律で禁止された賭博ではないという建前の元に、店舗から少し離れた場所に景品を換金するのが好きな一般人のおばちゃんやんが住んでいるという建前で換金所を設置しているが、次郎はそれを認める山中県警をアホかと思っている。

コウモリを警察に知らせない理由の一つが、そんな警察への不信感であった。

一方コウモリたちは、次々と次郎の脇を抜けて通路の奥へと飛び去っていった。

通路を川に例えるなら、コウモリたちが川を流れる水で、次郎が

川に鎮座する岩のような状態だ。

川の流れは速く、棍棒程度の大きさの石器で一匹が叩き落とされる間に、一〇匹以上のコウモリたちがすり抜けるように通路から逃げていく。

叩き落とした一匹の頭部が踏み付けられ、胴体が蹴り飛ばされて洞窟の壁に叩き付けられる。

それと同時に石器が振り回され、二匹目のコウモリが殴り落とされた。

そんな手足を方々に振り回す流れ作業が、ひたすら繰り返されていく。

この洞窟は、次郎が思っていたよりも遙かに複雑かつ広大だった。内部はまるでアリの巣のように、沢山の通路と部屋が繋がる。

通路は、幅が二車線の国道並、高さが建物の二階相当に広い大道と、バイク程度しか通れない細道とが入り乱れている。

部屋は、一つが体育館くらいの大きさもあれば、グラウンド並に広大なところもあった。

そして肝心の洞窟全体の面積は、最低でも七村市の地下全域が洞窟なのではないかと疑うほど広い上に、未だ洞窟内の全てに到達した訳でも無かった。

もはや、祖父の土地では収まりきらないかもしれない。次郎は洞窟に入る事が法律的に大丈夫なのかと、改めて考え直した程だ。

しかし実際には、七村市の地下に洞窟が広がる可能性については疑わしい。

なぜなら、七村市に存在する井戸や水道管が、洞窟と重なっていないからだ。

それに同様の穴は日本の僻地で一年間に発見されただけで数十か所もあるが、それらが井戸や水道管などと重なった話も一切聞かない。

司法や行政が洞窟を隠そうとしても、僻地には温泉地などもある

ため、源泉からお湯が出なくなればニュースで騒がれる。

そういった報道が一度も行われない為、洞窟は日本の地下にあるのではなく、入口を介してどこかと繋がっているのではないかと考えた。

物理法則という常識は、魔法が実在する時点で今更である。

よって洞窟内は祖父の土地ではないが、日本の土地でも無いと次郎は解釈した。

日本国に届け出られた土地の所有者が居ないため、不法侵入などの違法行為は成立しない。

もしも警察にこの洞窟が発覚した場合、次郎はこの説で押し通す事になっている。

だがそれ以前に、地上から堂下家の山に入ってくる人間が存在しない以上、人工衛星などで上空から撮影される時に誤魔化せれば、おそらく誰にも見つからないだろう。

そのように考えた次郎は、洞窟の入り口を土魔法で殆ど塞ぎ、生い茂る草木まで使って見つからないように覆い隠した。

「ギツギツギツギツ……」

「やかましいわっ!」

人類とコウモリとの双方に、会話を成立させようと努力する姿は一切見られない。

そのうち一方は、問答無用とばかりに地面に墜落したコウモリを踏み付け、石棒で殴り付けながら次々とトドメを刺していた。

次郎が今最も欲しているのは、靴底が鋼鉄製になっている靴だった。

既に二足もの古靴を使い捨てており、現在は昔使っていた部活用の運動靴である。

通学用の革靴や、降雪時の長靴を失うわけにも行かず、今履いている靴が駄目になった場合は裸足とビーチサンダルの二択しか無くなる。

レベル上昇と共に狩りのペースは上がったが、次郎の身体能力や過激な戦闘行動に被服は着いて行けない。

「はあ、こいつら多過ぎるだろ。一体何を食べて増えているんだよ」

次郎は無限に湧き出すコウモリに辟易し、嘆息した。

洞窟内には、無限に湧き出るスライムくらいしか食べられそうなものが無い。

仮にスライムが主食であるのならば、衣食住の問題を解決しているコウモリが洞窟内から外へ出ない事には一応納得できる。

だが生憎と、未だに次郎はコウモリの食事風景を目撃した事は無い。

ちなみに夏休みに洞窟に引き籠もる次郎自身のメリットは、レベルが上がる事だ。

コウモリ自体はゲームのように金やアイテムを落とさず、洞窟自体にも宝箱は出てこない。コウモリの体内から得られる緑石も、次郎が掴むと経験値を得るのと引き替えに灰色化して石ころに変わる。しかしレベルを上げれば、身体能力が上がる。

そして身体能力が上がれば、大抵の仕事で有益だろう。

他には、魔法にも可能性を見出せる。

魔法を使えば、不可思議な事象を引き起こせるようになるのだ。

魔力はエネルギーの総量、火や水などはそれぞれの才能値のようであり、その組み合わせで様々な事象を生み出せる。

火や土の魔法需要は不明瞭だが、負傷を回復させる光魔法は、現代医学も真っ青だ。

「ようやく収まったか」

飛び交っていたコウモリは、長考の間に姿を消していた。大半が逃げ去ったが、十匹近くは石棒で地面に叩き落とされている。

次郎は解体用ナイフとバールを使い、地面に落ちているコウモリたちの身体から、次々と緑石を引っ張り出した。

そして水魔法で洗浄をしながら流れ作業で緑石を掴み、そこに籠められていた見えない何かを次々と身体に取り込んでいく。

最近レベルが上がり難くなった次郎は、もしも上がったら儲けものくらいの感覚で流れ作業を行うようになっていた。

倒したコウモリの緑石に黙々と触れ、そのすべての灰色化を終えていく。

ここで放置したコウモリの死骸は、一日も経てばスライムたちが綺麗に片付けてくれるはずだ。

今日もレベルアップはしなかったが、気にせず確保した部屋へと踏み入る。

この洞窟内における危険の九割は天井から降って来るため、部屋に入る時は最初に天井を確認する事が不可欠だ。

なるべく遠くの天井を見て事前に危険を察知すると共に、あまり上を見過ぎて首を痛めないようにするのが長続きのコツだった。

「クリアー」

洞窟内に随分と慣れた次郎は、自衛隊員の真似をする余裕を見せつつ、前方の新たな通路へと向かった。

当面の目標はレベル一五である。

攻撃と防御をそれぞれ三に上げて、さらに未だ覚えていない風と闇を獲得してみたい。

夏休みはまだ一カ月もあるため、二学期になるまでになんとか目標に近づけておきたいのだ。

そんな風に思いを馳せながら、部屋の奥にある通路を覗き込む。いつも通り、真っ直ぐ続いているかと思われた通路の先には、洞窟の入り口と同じような急勾配が、さらに地下深く伸びていた。

「……………はへっ？」

次郎の口から、随分とおかしな擬音が飛び出した。三カ月間も練り歩いた洞窟は、それすらごく僅かな範囲に過ぎなかったらしい。

次郎が覗き込んだ深淵は、市に匹敵する規模の地下洞窟から、前代未聞な多重階層の都市へと姿を変えていた。

そして新たに発見した勾配を下った先には、再び長い通路が伸びている。

最早、言葉も無い。

国道並に広い通路を張り巡らせ、体育館やグラウンド並の部屋をビルのように林立させ、それらを七村市の地下全体にまで張り巡らせている……と思われた広大な洞窟は、それすらも本来の姿の僅か一端に過ぎなかったのだ。

今までに見た洞窟は、人間の全身で例えれば片手程度だったのだろうか。

あるいは指先程度だろうか。

はたまた爪先程度だろうか。

その一部分に三カ月も費やした次郎としては、なるべく後者では無かったと信じたい。

人間がこの大洞窟を造り出す際の困難さは、山を開通する時のトンネル工事や、原油を採掘するための掘削工事とは比較もならないだろう。

単なる事業者たちでは、この地下高層都市を造り出す事は不可能だ。

ピラミッドや万里の長城など、当時最高の技術と膨大な労力、そして長い年月を費やして築く国家事業と比較する事で、ようやくこの洞窟を作り出す困難さが推し量れる。

仮にこの洞窟を日本が造り出したのなら、それは間違いなく後世で世界遺産となる。

言い知れぬ不可解な力を感じた次郎は、冷や汗で体感温度を一気に下げていた。

改めて見渡した通路は、相変わらず灰色の壁と床で覆われている。硬い岩盤のようになっていいるそれらは、次郎とコウモリが戦闘を行った程度では傷付かない。

「……暫定的に地下二階にするか。ここって、何なんだろうな」

洞窟の所在地は、日本列島だ。

しかし洞窟は、日本人が作ったわけではないだろう。

竪穴式住居の規模では無いし、集落単位でも深すぎる。

主立った鉱石も採れない事から、過去の鉱山でも無い。

そもそもコウモリを倒すとステータスが表示される事から、製作者は地球人ですら無いと思われる。

ステータスが日本語で表示される理由は不明だが、もしかするとアメリカ人なら英語、ドイツ人ならドイツ語で表示されるのかもしれない。

こんな事が可能なのは、想像し得る限りで遙かに進んだ技術力を持つ未来人、宇宙人、異世界人、神などだ。

そのような高度に発達した文明が干渉してくるのは、一体何故なのか。

そして彼らは、何をしたいのか。

彼らから見て、今の次郎程度では歯牙にも掛けられないだろう。だとすれば次郎は、彼らに目を付けられる前に可能な限りレベルを上げまくるか、早々に撤退するしかない。

賭け事に勝っている間には勝負から降りられない人間の心理が、今の次郎には手に取るように分かった。

もっと儲かるかも知れないという欲が、賭け事からの勝ち逃げをさせてくれないのだ。

もっとレベルを上げられるかも知れない。

せめてレベル一五までは上げる。

そして到達すれば、まだいけると思っでレベル二〇を目指す。

そんな事を繰り返した挙げ句の果てに死んでしまうのだとしても、今の次郎は心理的に引くに引けなかった。

「うちは、皆こんな感じだからなあ」

七村市で初代町長まで務めた堂下家の凋落が激しいのも道理だろう。

それでも次郎は逡巡の果て、地下二階の通路へと踏み出した。

暗闇を照らし出すのは、火魔法で出した炎だ。

中学生の次郎も酸欠の危険については、一応頭の片隅に留めている。

だがここは密閉された空間では無いし、通路も非常識な広さだ。加えてあれだけ膨大なコウモリが飛び回って空気をかき回している事から、酸素濃度に大差は無いだろうと考えている。

それに魔法で生み出す炎は、酸素を用いて燃焼しているのかが、非常に疑わしい。

魔法を行使する際には、魔法の素となる元素のようなものを現象に変換させている感覚がある。

その際たる例は、何も無い空間から石を生み出す土魔法だ。

あの現象を、既存の物理法則で説明できるわけがない。

他の地域にも同様の洞窟がありそうなので、いずれ各地を封鎖している日本政府には、その研究成果を発表して欲しいものである。

次郎は斜め上方に魔法灯を浮かべ、移動時に先行させた。

ランタンで片手を塞がないため、火魔法の使い勝手は良い。

その代わりに土魔法で武器作成をしており、いつでもコウモリを叩き落とせる体勢を取っている。

一時はランタンを腰にぶら下げてみた事もあったが、戦闘中の激しい動きに合わせてガンガンと腰に当たり、有り体に言って物凄く邪魔だった。

足元の床に置いてても移動範囲が狭まるし、下手をすると叩き落としたコウモリが激突して弾き飛ばされる。

それでも光源は欠かせないため、結果として火魔法に行き着いたのだ。

暫く進むと、灰色と黒色と茶色の三色縞模様になっている塊が多数、床の上に蠢いているのが見えてきた。

「あれは、コウモリじゃないのか？」

遠く視界の先に蠢く数十匹ほどの群れは、緩慢な動作で地上を這い回っていた。

どうやら地下二階には、スライムとコウモリ以外の生物も生息しているらしかった。

次郎は石棒を心持ち強く握り締め、慎重に塊たちの方へと近付いていく。

それを一言で表すなら、巨大なダンゴムシだろうか。

大きさは丸まってもサッカーボールくらいはありそうで、壁にへばり付いてよじ登っているダンゴムシも居ることから、足の力は相

当強そうだった。

そんな足は、片側十数本。

片側七本有るというダンゴムシよりも多そうで、世界最大のダンゴムシにしてカラフルなタマヤスデ科の『ハウセキタマヤスデ』に近いかも知れない。

なんでそんなマニアックな生物を次郎が知っているかというところ、シヨップینگモールに隣接したペットシヨップで普通に売っていたのだ。

巨峰くらいのサイズで、一匹の値段が次郎の一カ月の小遣い分くらいだったため、衝撃を受けて覚えていた。

「こいつらを運んだら、一体いくらで売れるかな？」

相手はサッカーボール並の大きさだ。

一匹一〇万円くらいで、動物園が引き取ってくれないだろうか。次郎はゴクリと唾を飲み込むと、サラリーマンの年収分くらいは沸いているタマヤスデに向かって、ゆっくりと躍り寄った。

相手がいかに大きかろうと、所詮は単なるダンゴムシである。

正確にはヤスデの仲間なのかもしれないが、いずれにしても日本のペットシヨップで売られる程度の愛玩動物だ。

熊や虎と比べて、何ほどの事があるうか。

巨大なムカデ系であれば、食性が肉食で人にも噛み付く事から、脅威を感じたかも知れない。

だが落ち葉や微生物を主食とするタマヤスデに対して、次郎は何ら恐れを抱かなかった。

彼は群れの中で最も外側に居た一匹に目星を付けると、無防備な胸部に狙いを定めつつ、斧で薪を割るように石器を頭上に振り上げた。

「タマちゃん、スイカ割りしようぜっ。お前がスイカ役な。オラア

ッ！」

石棒がタマヤスデに全力で叩き付けられた瞬間、まるで石を殴りつけた様な感覚と共に、次郎の両腕には強い衝撃が伝わった。

「硬あぁっ、いいいつ」

まるで壁を殴ったような反動に、思わず声が漏れる。

一方で攻撃されたタマヤスデも、衝撃でひっくり返り、無防備な腹を晒け出した。

そして片側十数本もある脚をウネウネと動かし、背中を伸ばして元の体勢に戻ろうと頑張っている。

「このスイカ、中身が詰まり過ぎじゃん。生産農家のおっさん、ちよっと出て来いや……うえっ」

タマヤスデがひっくり返っているために背中の方は見えないが、次郎の手には甲殻を深く抉った感触があり、床にも体液が大きな染みを作っていた。

相手は間違いなく大ダメージを受け、深手を負っているはずだ。

これほどの重傷であれば、このまま放置しても長生きしないだろう。野生の世界は過酷であり、人間もまた野生に足を踏み入れる動物の一種類なのである。

だが、そんな山中県で随一のタマヤスデハンターが挙げた戦果と同時に、周囲には鼻につく刺激臭も漂い始めた。

異臭を感じた次郎は、同時に目も痛くなり、口元を抑えながら涙目になった。

「はなが、いひゃい……」

たった一度攻撃しただけで、鼻が曲がりそうだった。

明日ここに来る時は、マスクが必須だろう。

早く終わらせたいと考えた次郎は、ひっくり返ったタマヤスデの柔らかな腹が目掛けて石器を振り下ろし、躊躇なく迅速にトドメを刺した。

はたして周囲のタマヤスデたちは、仲間の死に全くと言って良いほど関心を示していない。

天敵に一匹食べられた事で、他は助かったと解釈したのだろうか。あるいは身体に毒を持っていて、自分が食べられる事で種族の脅威を敵に教え込むという、種の生存戦略を取っているのだろうか。もっとも全ては考え過ぎで、タマヤスデの行動は天然なのかも知れない。

次郎がそう考えたのは、かつて人跡未踏の地には、人間が近寄っても逃げなかった野生生物がいた事を思い出したからだ。

もしも、この洞窟に入った最初の人間が次郎なのだとすれば、巨大タマヤスデが未知の生物である人間から身を守る術を持ち合わせていない可能性もある。

だが、タマヤスデ側が人間への対抗手段を持ち合わせていないのだとしても、レベルーの次郎にこれだけ抵抗してみせる堅さと、強烈な刺激臭は生物として強力だ。

少なくとも、コウモリより防御力に秀でている事だけは疑いない。次郎は、タマヤスデの体液がどれほど危険なのか、確かめておこうと思った。

方法としては、持ち込んだペットボトルの容器にタマヤスデの体液を入れて持ち帰り、山の生物たちに浴びせて無事かどうかを確認する。

その結果次第で、タマヤスデの脅威度が概ね判明するだろう。

そんな、どこにも提出予定の無い夏休みの自由研究を思い付いた後は、石器を逆手に持ち替えてタマヤスデの腹部を突き始めた。

探しているのは、コウモリが体内に持っていた緑石だ。

その不可思議な石こそ、人によつては宝石にも勝る、この洞窟で得られる唯一の産物と言つても過言では無い。

タマヤスデがそれを持っているか否かで、彼らの種族の命運が変わるだろう。

しばらく石器で突き続けた次郎は、タマヤスデの体内で石器の先端が何か硬い物に当たった感触を得た。

どうやらタマヤスデも、その体内に小石を持っていたようである。

次郎はタマヤスデの大きく裂けた傷口を解体用ナイフで拡大させ、バールの先端で引つ掛けながら石を取り出した。

取り出した石は水魔法を掛けて洗浄し、血や肉片を洗い流す。すると石は次第に綺麗になっていい、やがてコウモリの時と殆ど変わらない大きさの、土色の小石が露わになった。

「ひょうのところわ、このくりやいに、してほいてやりゆ……」

心優しい次郎は、その目に涙を浮かべながら、家の土地を不当占拠する連中を一日だけ見逃してあげることにした。

06話 二学期の異変

地下二階の発見から一カ月が経ち、学生の大多数が望まない二学期がやって来た。

誰も望まないとまで言い切れないのは、生徒会活動や部活動に青春の汗を流す人達がいるからだ。人生を謳歌しているようで、実に結構な事である。

なお部活を引退気味の次郎は、もちろん多数派に属する。

むしろ洞窟で汗を流していたため、二学期が訪れて人生の謳歌を妨げられた事は誠に遺憾であった。

なお誠に遺憾とは、表現が控えめの日本人にとっては、それなりに強い意思表示にあたる。

それでも毎日が日曜日という夏休みをずっと探索に費やせた事で、レベルは目標にしていた一五に達していた。

ボーナスポイントの割り振りは、巨大タマヤスデが体液に毒を持つていた事から計画を変更し、身体能力系を全て三まで上げる安全策を採った。

体液は弱毒で、山に生息する昆虫の何種類かが天に召された程度だ。

しかしタマヤスデとの戦いや受けた毒で次郎が弱っていれば、歸路に現われる数百匹のコウモリたちが容赦なく襲い掛かって来る。

そして倒されれば単独であるため助けは訪れず、いずれスライムに骨まで綺麗に溶かされてしまうだろう。

従って基本方針は「いのちをだいじに」となり、身体能力の強化が行われたのだ。

そして目標が達成され、地下三階に辿り着いて巨大バツタを発見した矢先、新学期が到来した次第である。

「ジロオハ」

「ジロオハハ」

「ナカさん、キタムー、おはー」

クラスに入ると中川と北村が、一学期と変わらない挨拶を交わしてきた。

挨拶を返した次郎は、夏休みの宿題がギッシリと詰まった鞆を机の上に乗せる。

そして黙々と中身を出していくと、それを呆れた眼差しで見ていた二人が、声を上擦らせながら問うた。

「うわ……ジロー、真面目にやったのかよ？」

「マジかジロー。お前はメジャーで、コーチをしていたはずだろう？」

二人の心境には、次郎も同感である。

なにしろ夏休みに出された課題は、英文の選択問題や穴埋め、数学の応用問題集、漢字検定問題集など、それぞれが教科書一冊分にも匹敵する厚さであった。

しかも内容は、教科書のように要点が簡潔に纏められたわけではなく、単に暗記すべき事柄の羅列や相応の分量があるだけだ。

市立三山中学校の教師には、生徒側の長期記憶に結び付けようという工夫が見られず、問題の意味を理解させようという意志も無い。市立中学の公務員教師としてノルマを果たしているだけであり、それを感じ取れる生徒は馬鹿らしくなってしまう。

この非効率な宿題で生徒が真つ先に身に付けるのは単語や計算式ではなく、思考を停止して唯々諸々と従う日本人的な行動規範だろう。

それでも夏休みの宿題を出さないと放課後に居残りをさせられるため、洞窟に潜りたい次郎としては本当に致し方が無く、嫌々なが

らも宿題を適当に完成させた次第であつた。公務員教師の斯様な姿勢に対しては、誠に遺憾である。

「気持ちには分かるけど、夏休みの宿題を出さないと居残り……」

「うおおおつ、やめるジローっ」

「それだけは、それだけは言つてはならなかつた」

中川は次郎の言葉を遮り、両手で耳を塞ぎながら首を横に振り出した。

それに連動して北村も、両手を自分の頬にあて、自然体でムンクの叫びを体現する。

放課後も居残り組で賑やかになりそうな二学期の教室を想像した次郎は、現代教育の哀れな被害者たちに祈りを捧げることにした。

「ポクポクポク、チーン」

「てめえ。こうなつたら宿題を写させろ！」

「そうだぞ、ジロー。俺たちは仲間じゃないか」

弔いを終える僅かな間に、二人はゾンビに進化して襲い掛かってきた。

そして連携して次郎の宿題を掴むと、おどろおどろしく呻り声を上げる。

「うおおっしゃあ、宿題ゲットしたぜ！」

「やめろ馬鹿、一八人しか居ないクラスで中身が同じだったら、教師に怪しまれるだろ。しかも計算は手を抜いたから、かなり違っている。お前らと間違いが完全一致したら、絶対にバレる」

教師にバレれば写させた側も同罪となり、居残りの巻き添えでアンデッド化してしまう。

次郎は居残りの巻き添えを食らう未来を想像して焦った。こんな事で洞窟に潜れなくなる事は断じて許容しがたい。全く以て遺憾であり、場合によっては一五レベルの力を以て宿題を奪還する事も辞さない所存であった。

そんな次郎の本気を察したのか、中川と北村は連携してフォローを始めた。

「俺らは、もっと間違っから大丈夫だつて。それにジローの他にも写して貰うから。色々混ぜて間違えれば、もう誰のを写したのか分からないだろ！」

「よし、さっそく他の奴の宿題も確保してくるわ」

妙に活気付き、素晴らしい社交性を発揮する二人のゾンビーズ。彼らは次々と他のクラスメイトを襲って宿題を確保し、先に奪った次郎の宿題も合せて無作為に複製を始める。

公務員である教師側がページを埋めさせる事をノルマにしている以上、生徒側は英単語を覚えるのでは無く書き殴れば良いし、数学は間違えても問題にならない。白かった亡者達の宿題のページが、恐ろしい速度で埋まり始めた。

「感想文やってないわ。たっちゃん、去年書いた読書感想文の内容だけ手短かに教えて」

「マジで？」

「大マジ。たっちゃんは何読んだの」

ついに北村が、無読書感想文という禁忌に手を染めた。

中川の成績は学年で真ん中辺り、北村は中間から三分の二までの間に居るが、要領の良さに限れば、二人は美也すら抜いてツートップになるのでは無いだろうか。

この時、次郎は不意に世の中の仕組みを悟った。

教師が課す夏休みの膨大な宿題量は、真面目に解かせる事が目的では無い。

社会に出た時に理不尽な課題を出す上司に遭遇した時、どう対処すれば良いのかを实体经济で学ばせているのだ。

長期不況によってブラック企業が日本中にまかり通り、監督すべき役所が責務を果たさない現代社会。

そんな不条理な世の中で、いかに要領良く生きていくかを学生のうちから学ばせるために存在するのが、夏休みの宿題だったのだ。

そして要領良く生きている中川や北村は、宿題に隠された本当の正解を、無意識に導き出していたのだ。

さらに宿題を奪われた次郎を含めたクラスメイトの何割かは、二人から社会の仕組みと対処の術を学び取ったのではないだろうか。

次郎は驚愕と同時に納得し、感動の眼差しを以て、二体のゾンビたちが繰り広げる見苦しい死に様を脳裏に焼き付けた。

「……………」と言う訳で、あの本の作者は、幸せは外に探し求めずとも、内に目を向ける事で見つかると言いたかったらしい。視点を変える心持ち次第で見方が変わるらしい」
「分かった！」

瞬く間に聞き取りを終えた北村は、読書感想文ならぬ聴取感想文を書き始めた。

課題である「読書感想文、四〇〇字詰原稿用紙二枚」に対し、読書という過程を省く大胆な発想の転換を行い、聴き取りした解釈を踏まえた想像と改行の多用で、瞬く間に用紙を埋めていく。

まさに才能の無駄遣いである。

北村が自らの才能をネット小説に費やせば、筆が速く、人気ジャンルを次々と抑えていく作家になれそうだった。

次郎は、ネット小説が好きだ。

家が向かいにある二歳年上の恭也に、お勧め小説のURLやPD

FをUSBに放り込んでくれるよう、美也を介して依頼している程である。

もしも北村が小説の一本も書いてくれれば、彼への評価が「残念」から「輝いている」くらいに変わるのだが。

「はあ、色々と残念だわ」

北村の凄いけれど、全く尊敬できない後ろ姿に、次郎は呆れを乗せた溜息を吐いた。

次郎が知るリアルネット小説投稿者は、美也の兄である恭也のみだ。そして作者故だろうか、恭也は次郎が見つけれない掘り出し物の小説を探すのも上手い。

データを渡してくれるタイミングは不定期だが、夏休みという期間を置いた今、投稿された小説は相当の量になるはずで、即ちUSBが渡される事は殆ど疑いない。

次郎は一日千秋の思いで、美也の登校を待ち続けた。

「というか、美也遅いな」

遅刻確定まで残り二分、美也は未だに登校していない。

美也は、小学四年生の時にインフルエンザで休んだ以降は、無遅刻無欠席だった。しかし大記録は、今日で打ち止めになりそんな雰囲気だった。

そして次郎が教室の時計と引き戸を交互に眺めているうちに、登校時間はあっさりと過ぎてしまう。

やがて担任が時間通りに教室へ入ってきて、出欠簿を開いて名前を読み始めた。

「よし、出欠を取るぞ。相沢……」

「はい」

アイウエオ順で男子から名前を呼ばれ、中川と北村も内職は見逃され、続いて女子が順番に呼ばれていく。

「地家は休みだ。須藤」

「はい」

説明と共に、点呼が飛ばされた。

随分と珍しい事もあるものだと思われ、首を傾げた次郎だったが、授業が始まりそうだったので、風邪でも引いたのだろうと頭を切り換えた。そして始まった授業を聞き流しながら、洞窟の方に思いを馳せる。新たに発見した地下三階は、コウモリとタマヤスデの出現地帯を抜けた先にある。

生息する巨大バツタは顎とキック力こそ脅威だが、タマヤスデよりも柔らかくて毒も持たないため、物理で殴る次郎にとっては狩り易い相手だ。

問題は、地下二階よりも地下三階の往復時間が長くなる事だ。

レベル相応の身体能力を得て、移動速度が上がったとは言え、夏休みのようには探索時間が取れない。さらに秋に入れば、大まかな門限である日没時間が早くなるため、洞窟に費やせる時間はより一層短くなる。

そのため現在の探索は、最短ルートを模索するのが至上命題だ。広大な洞窟内の正確な測量など不可能なため、実際に複数のルートを実際に走りながら、掛かった時間を比べている。

（他の洞窟の攻略方法を知りたいな。誰かネットで動画とか上げてくれないかなあ）

北は北海道から南は沖縄まで、西日本大震災後に見つかった調査対象の地割れは、メディアに載ったものだけでも広範囲に多数発見

されている。

それも人が滅多に踏み入らない僻地ばかりで発見されている事から、次郎のように行政に見つからないまま上手く隠している人もいる可能性はある。

装備品やボースポイントの振り方などをネット動画などで公開してくれば、次郎の探索も随分と捗るのだ。

（まあ動画を公開したら、その日の晩には警察が玄関に現われるだろうけど）

そのように思考をひたすら洞窟に潜らせている間に、次郎たちの夏休み明け初日の授業は呆気なく終わっていった。

そして放課後に入って物理的にも洞窟へ潜ろうと考えた矢先、担任が次郎を引き留めた。

「おい堂下。確かお前、地家とは家が向かい同士だったな？」

「はあ、一応そうですね」

「悪いが地家に、連絡のプリントを持って行ってくれ」

「別に構わないですけど」

担任は次郎の承諾を最初から見越していたらしく、連絡のプリントが入った封筒を手渡してきた。

帰り際に美也の家へ寄る事になった次郎は、自転車置き場に向かうまでの間に携帯端末を操作して、事前に連絡を送信しておく事にした。

科学の英知は素晴らしく、即座に相手へ届いた旨のメッセージが現われる。高度に発達した科学は魔法に等しいとの言は、まさに正鵠を得ているだろう。

そんな高度な科学を体現する携帯端末は、技術が公開され、数多の人々に利便性を追求され続けた結果として飛躍的な進歩を遂げた。

（だったら、魔法も公開される事で進歩するかな）

火・風・水・土などの魔法は、確実に進歩するだろうと次郎は予測する。

明かりと石槨にしか用いない次郎と異なり、多くの人は火魔法や水魔法を料理や洗濯に用い、さらに風魔法を混ぜて洗濯物の乾燥に用いたり、冷房代わりにしたりするだろう。

土魔法は希少な鉱石を生み出すために使うだろうし、それらが広く普及すればエネルギー問題や資源問題の解決の糸口に繋がるかも知れない。

そんな風に社会学を考えながら自転車を走らせているうちに、携帯が震えて美也から了解の返信が届く。

そこから次郎は美也が準備するための時間を稼ぐべく、敢えて大回りしながら美也の家に向かった。

最初に次郎の目に止まったのは、美也の父が兼業農家として使っている軽トラだった。

積みまれているのは、美也の部屋で見慣れた家具類。

そして傍には、次郎を待つ美也の姿があった。

「……………闇属性も必要だな」

さしあたって次郎は、この役目を負わせた担任にハゲの呪いを掛けておいた。

07話 探索の転機

美也に対する世間の評価は、『とても良い子』だ。

万事に対して両親の仕事が忙しいから駄目、家計が苦しいから駄目と言われ続け、欲しい物を口にした事はなく、基本的には家で大人しくする生活を続けた結果、大人から与えられた評価の半分が『良い子』である。

大人からは、同い年の子供の何倍も自制や自戒を身に付けていると思われている。

だがそれは、美也が心を許していない相手に自分の感情を表出していないだけだ。

我慢の限界を超えた分は、美也の祖母と次郎、そして亡くなった次郎の祖母という輪の中できちんと発散していた。

そんな輪の中に、ストレスの原因である両親や、小さい頃に両親から言われるが儘に妹へ我慢するように言い聞かせてしまった兄の恭也は、勿論含まれていない。

美也にとって家族は、祖母が味方、両親が敵、兄が距離を置いた中立という状態だ。

最初は兄も敵の手下くらいの態度だったが、兄には情状酌量の余地があると美也が理解した点と、次郎が美也の家族内での立場をマシにしようと仲立ちに勤めた結果、距離を置いた中立関係に行き着いている。

一方で両親は生活苦や忙しさから、娘に対する歩み寄りには放棄して久しい。

両親にとっては、兄の恭也が『自分たちの子供』で、妹の美也が『親の苦労を理解せず祖母に甘える我が儘な子供』となる。そう思

い込む事で、美也に対する後ろめたさを忘却しようとしたわけだが、いつしか両親の中では思い込みが真実になっていた。

そんな家庭の事情は、父親の農業失敗と零細サラリーマンの兼業、母親のパート開始、二人目の子供である美也に掛かる経済的負担や、二人目の子供に強く当たる態度などを目撃する近所の奥様方にとっ

ては、一目瞭然だった。

結果として美也に対する『良い子』という評価の前には、同情心からか『とても』が付けられる。

そんな美也の父親が所有する軽トラックと、そこに積み込まれた美也の荷物を見た次郎の自転車は、一段と速度を落とした。

そうして僅かに増やした時間で、次郎は可能な限りの情報収集を試みる。

軽トラに積まれている荷物は、美也の家具ばかりだった。

仮に家財の全てが積み込まれているのであれば引越しを想像するが、積み込まれた荷物が美也の私物だけである点や、それを乗せているのが屋根無しの軽トラックである点は不可解だ。

結局分らないままに目的地に到着してしまった次郎は、観念して乗ってきた自転車を道の脇に停めた。

そして眉がハの字になった美也に、恐る恐る問い質した。

「あー、説明を求む」

単刀直入に問われた美也は、視線を軽トラックの家具に向け、肩を竦めながら話す。

「引越し。わたしだけね」

「どこへ？」

「お婆ちゃんの所」

美也が指差したのは、美也の母方の祖母が住む家の方向だった。視界一杯に里山が広がるような田舎のため一kmは離れているが、一応は同じ町内にあたる。

最悪の想定であった遠方への引っ越しでは無かった事に、次郎は一先ず安堵した。

そんな感情に気付いたのだろうか、美也も僅かに安堵を見せた。

「美也の婆ちゃんの所なら、まだマシな方かな」

「保護者としては有り得ないけどね」

次郎は頷きつつ、なぜそうなったのかと考えた。

世間体を気にする日本において、両親と未成年の子供が別居するのは、そうそう起こり得る事では無い。

次郎の知る身近な例では、美也の父方の伯父が小学三年生から一人でイギリスに留学して日本人学校に通った。その後はロンドン大学を卒業してイギリスの永住権を貰い、就職して会計士の資格を取ったことで国籍を貰い、その後にあちらで結婚している。

支援者は美也の父方の曾祖母で、留学に関してかなりの後押しをしたらしい。

だが今回の美也の場合は、留学と異なり英語力が身に付くわけでは無く、親族が居ない環境で自主自立の精神が育まれるわけでも無い。つまり親子が別居する大義名分が見当たらないのだ。

暫く考えた次郎は、結局白旗を揚げた。

「どうして美也だけ引っ越しなんだ？」

「複雑な事情があるけど、お兄ちゃんが『USBを渡せなくなるから、次郎くんにも説明しておかないといけない』って言っていたから、話すね」

「うい」

美也は何度か口に出そうとして、言い淀む。

そして次郎を自分の部屋に連れて行こうとして、引越しのため部屋に何も無くなっていた事を思い出すという混乱まで見せた。

「……暗くなる前に、引越しを手伝おうか？」

「うん、お願い」

かくして本日の洞窟探索は延期となった。

次郎は母親に遅れる旨のメールを送ると、美也の父と共に残っていた荷物を積み込み、美也の祖母の家に移動して荷物を降ろし、荷解きを手伝いながら合間に詳しい事情を聞き出した。

始まりは二カ月前の七月、恭也が身体の痛みを訴えた事に端を発する。

最初は両肩の激しい痛みを訴えて、町の整形外科医院で診てもらった。その時は、レントゲン撮影で骨に異常が見つからず、痛み止めを処方されて経過観察となった。

だが一週間経っても、肩の痛みは収まらなかった。

既に夏休みに入っていたため家で寝ていたが、良くなるどころか三九度の熱発と歯・顎の痛みまで出てきた。今度は歯医者に行つてレントゲン撮影するも、虫歯の一本も無くて大丈夫だと言われてしまった。

そのため再び家で安静にしていたが、その後も三八度台の熱が続いた。

やがて八月に入ると身体が動かなくなってきた、ついには手も拳げられなくなり、今度は内科を受診して採血した結果、すぐに山中県で最大の県立中央病院へ紹介される事になった。

そこで医者から『あなたは白血病です。治療しなければ数カ月以内に死亡します』と言われたそうだ。

「恭也さんが白血病？」

「うん。今まで白血病なんて、全然知らなかったけど……」

美也の説明によれば、白血病は『血液の癌』と言われる病気らしい。

癌は日本人の死因一位で、ＴＶで特集されるため、次郎でも多少はイメージできる。

次郎がイメージする癌とは、身体に回復を上回るダメージを与える事で悪い癌細胞が出来て、その癌細胞が次第に増殖し、全身に転移して身体機能を阻害し、やがて患者を死に至らしめる病気だ。

病院に行けば、癌化した部位を手術で摘出したり、抗がん剤でがん細胞を殺す化学療法をしたり、がん細胞に放射線を照射する放射線治療を行うなどの様々な治療法がある。

検査や手術の機器は年々進化しており、手術と抗がん剤の併用療法にも副作用の少ない薬や、術後生存率が高くなる薬も続々と出ている。放射線治療も、サイバーナイフなどの医療機器が容易に使えるようになった。

ただし全員が治るわけでは無く、切除できない部位が癌化したり、早期発見ができなくて転移したりして、命を落とす人も未だ沢山いる。

「そんな感じで合ってる？」

「うん。でも血液の癌はちょっと違うみたい」

「ふむふむ？」

恭也が罹患した白血病には、癌と似た特徴がある。

骨髓や血液の中で白血病細胞という悪い細胞がどんどん増えていき、やがて一兆個以上に増殖して全身に隈無く広がる。

白血病の厄介な点は三つ。

一つ目は、切除が出来ない事。がん細胞は血液中に広がっており、

まさか全身の血液を抜くわけにも行かない。

二つ目は、化学療法が難しい事。化学療法は必要だが、中途半端では再発するし、薬が強力すぎれば他の正常な造血幹細胞まで死んで、血球などが作れなくなる。

三つ目は、放射線治療が出来ない事。全身の白血病細胞を破壊し尽くす放射線を浴びせれば、白血病細胞だけではなく身体の他の細胞も破壊されてしまう。

このように切除、抗がん剤治療、放射線治療という癌に対する三種の神器が通用しない。

「と言うわけで、白血病は治療が大変みたい」

「厄介な病気なんだな」

そんな白血病を大まかに分類すると、癌化した場所によって骨髄性とリンパ性の二種類に分かれ、さらに病気の進行速度によっても急性と慢性の二種類に分かれる。

恭也の正式な病名は、フィラデルフィア染色体陽性急性リンパ性白血病。

急性は病気の進行速度が早く、治療せずに放置すれば月単位で死に至る。そのため恭也は、診断が付いた翌日から治療を始めた。

だが問題は、そこからだ。

恭也のように一〇代と若く、しかも適合するドナーがすぐに見つかる場合は、骨髄移植が検討される。要は白血病細胞を殺し尽くした後、骨髄を移植して、正常な血液を取り戻す治療法だ。

ただし骨髄移植に必要なドナーは、易々とは見つからない。提供者が数万人居てすら、一致する相手が見つからない事も往々にしてある。

島国である日本人同士は、ドナーとして一致する確率が高い。だが提供者の総数は少なく、骨髄移植を待つ間に死亡する人が半

数を占める。

加えて問題なのは、骨髄を提供するドナー側にリスクがある点だ。移植の際に学校や仕事を休んで入院して貰わなければならない点は無論だが、骨髄採取では、全身麻酔に伴う合併症や死亡例が報告されている。また末梢血管細胞採取では、脾臓破裂、脳梗塞、心筋梗塞、そして死亡例が報告されている。

そのためドナー登録したものの、実際に依頼が来た時に断るドナー登録者もいる。

このような問題がある中で、最も推奨されるのが、家族を提供者に行することだ。

実は、兄弟姉妹の場合にドナーとして適合する確率は四分の一にもなる。

さらに医学的にもリスクが最小で、移植のタイミングも患者の都合に合わせてやすく、相手が家族では心理的に断る事も難しい。

そのため急性白血病の診断が付けられる際には、兄弟姉妹がドナーに成り得るか否かを併せて確認される。

「骨髄移植が必要だから、検査をさせてくれって先生が言ったの。それで検査させられて、そしたら一座不一致で移植可能ですって」

美也が移植のリスクを強調してから結果を語ったのは、本心では嫌だという意思表示だった。

美也は普段大人しい振りをしているが、紛れもなく女子中学生の一人であり、人並みの恐怖心を持ち合わせている。

死の危険もありますと言われれば、例えその確率が極めて低くとも、何も考えずに骨髄を提供出来るほど自己犠牲的ではない。

まして相手が次郎や祖母なら兎も角、育児放棄気味の母の依頼で、優遇されている兄を助けるためと言われれば、尚更に心理的な壁が高くなる。

だが美也の両親は、逆の立場だ。

家に残る『自分たちの子供』と、いずれ家を出る『親の苦労を理解せず祖母に甘える我が儘な子供』とでは、議論の余地など一切無く『自分たちの子供』に天秤が傾く。

次郎が知る美也の両親は、娘が骨髓提供を拒否する事を決して許さない。

そんな両親は保護者の立場であり、美也の義務教育後は進学の書類に印を押さない事や、授業料を払えないとして美也の意志を無視した退学をさせる事すら可能だ。

そしてそれらを以て脅し、美也に骨髓の提供をするよう強制する事も躊躇わない。

提供者としてのリスクは怖いが、両親に強制されて拒否出来ない。美也の言葉からは、嫌だという意志とは裏腹に諦めが見て取れた。

なお恭也が入院した県立中央病院には、七村市から車で片道二時間もかかる。

美也の父がそちらで働いている事もあり、両親はアパートを借りてそちらで生活し、病院での付き添いや世話もする事になったそうだ。

それを期に、母親が娘の面倒まで見切れないと判断したのか、あるいは白血病患者と同居する際の衛生管理目的なのか、はたまた経済的負担の軽減目的なのか。美也は、祖母の家に預けられる事になったそうである。

次郎が洞窟に引き籠もっている間、お向かいの家は大変な事になっていたらしい。

「いやいや……………待てよ」

ふと脳裏を過ぎったのは、次郎が手に入れたレベルと回復魔法だった。

それらを隠してきたのは、力を獲得する邪魔をされたくないからだ。

これまでに発見された洞窟を残らず封鎖して情報を隠している行政が、次郎の家だけを例外にするはずが無い。

見つけた当初は「魔物が洞窟内から出てくる可能性」を危惧した次郎も、魔物が階層を移動しない事と、洞窟の入り口を土魔法で塞いだ事で、今では不安に思っていない。

日本全体でも魔物が外に現われたニュースが流れていない事から、おそらく魔物たちは生息している階層を越えないのでは無く、越えられないのだろう。

理由は不明だが、自然発生し得ないステータスや魔法がある時点で、それらを発生させた存在の意志が介在していると考えるべきだ。洞窟の入り口が堂下家の敷地内であり、魔物が周囲に危険を及ぼす可能性も現時点では無い以上、次郎としては今後も心置きなく探索に勤しもうと考える次第であった。

しかし現状に至り、状況が変化した。

次郎と美也は、互いに最大の理解者だ。

美也であれば、次郎の不利になる行動を取らないように配慮する。さらに状況的にも、美也自身が洞窟でレベルを上げたり回復魔法を覚えたりすれば、移植時のリスクを軽減できるというメリットがある。

その一方で、洞窟を誰かに話したところで間近に迫った白血病問題や、骨髓提供者としてのリスクは回避出来ない。

現状で引き込めば、洞窟からコウモリが溢れてくる危険があつても誰にも話さず、今後も継続して次郎の探索活動に協力してくれる仲間に出来る。

そうすれば、次郎の半家族である美也の移植に関する危険も下が

り、次郎の探索時のリスクも大いに下がる。

そのように打算的に判断した次郎は、これまで頑なに閉ざしていた口を開いた。

「今の美也にとって、凄く助けになる話がある」

真面目さに期待が入り交じる希有な表情を見た美也は、一瞬呆気に取られたものの、表情と雰囲気から察したのかすぐに自らの表情を改めて聞く姿勢に入った。

「百聞は一見に如かずって言うし、見た方が早いかな。美也、二〇秒だけ黙って見ていてくれ」

そう言った次郎は左手を身体の前に出し、段ボール箱を開封していたカッターで左上腕を浅く切った。

次郎の肌に線が走り、傷口から真っ赤な血液が流れる。

「ちょっと、何して……………」

次郎は止まれのジェスチャーを出すと、カッターを置いて傷口の上を右手の指でなぞった。刹那、右手の指先が白く輝く。

それを見た美也は目を見開き、次郎の動作を注視した。

指先に触れた傷口は、直ぐにかさぶたが出来て、その瘡蓋すらも肌と同化して消えていく。

次郎が最後にハンカチで血を拭くと、左腕は見た目上、完全にカッターで裂く前の状態に戻っていた。

「説明する。ちょっと長くなるけど」

「もちろん聞くわよ。全部ちゃんと説明して」

「分かった」

次郎はゴールデンウィーク中に洞窟を見つけた経緯から、順を追って説明を行った。

加えて堂下家の洞窟が、日本各地で発見されて調査継続中になっている不自然な地割れと同じものでは無いかとの考察も含め、洞窟を隠している経緯までを話し終えた。

「つまりレベルを上げたり回復魔法を覚えたりすれば、手術のリスクが軽減できるって事？」

「概ねそんな感じ。体力とかが上がるのは、絶対にプラスだと思う」

次郎はステータスに現われていた体力や、実演した回復魔法などを説明しながら、美也がドナーとなる際の危険を回避する具体案を提示した。

体力を上げれば死ぬ危険が下がるし、後遺症が出ても回復魔法で治せる可能性がある。

絶対の保証は無いが、確率であろうとリスクが下がるのであれば、得ておいた方が良いと考えた。

「魔法は見せて貰ったから信じるし、提案自体も良いけど……」

説明には理解を示しつつも、美也は困惑顔を浮かべたままだった。そんな美也の様子に、次郎は提案に不備があったのかと首を傾げた。

「わたしが人に話したら、どうするの。お兄ちゃんが死にそうなら魔法を使うかも知れないけど」

「いや、絶対に使わないだろ」

次郎に取り繕っても無駄と考えたのか、美也は兄についてそれ以

上は言及しなかった。

「でも、お婆ちゃんが怪我をしたら、人前で使うかもしれないよ」

「その時は俺も使うから問題ない。俺と美也、それに婆ちゃんが最優先で良いだろ」

「一応、あつちの人達も血縁上では家族だけど」

「今日から別居するんだろ。だったら今まで通り、あの人達は他人で、俺たちが家族で良いじゃん」

「……………そうだったね。これからもよろしく」

「ああ、よろしく」

こうして次郎の洞窟探索に、新たな仲間が加わった。

08話 二人の探索

洞窟探索に新たな仲間に加わってから四カ月が経過し、やがて年が明けた。

その間に次郎はレベル二一、美也はレベル二二まで上がっている。

堂下次郎 レベル二一 B P ○

体力四 魔力四 攻撃四 防御四 敏捷四

火一 風○ 水一 土三 光一 闇○

地家美也 レベル二二 B P ○

体力三 魔力四 攻撃一 防御一 敏捷一

火二 風一 水一 土一 光二 闇○

骨髓移植前に体力の向上や回復可能な光魔法の習得が適っている。それらの力を習得した事との因果関係は不明だが、幸いにも美也には移植の後遺症が現われなかった。

身体に違和感がある度に回復魔法を使ったものの、使わなかった場合と比較出来ないため差異は不明だ。

しかし結果こそが全てであり、美也に問題なかった以上は成功したと言える。

もともと万事が恙なく済んだわけでは無かった。

入院中、美也の親子関係は完全に破綻した。

破綻の引き金は、母親が引いた。兄の移植が無事に済んだ事を引き合いに出しながら、良かったという肯定の言葉を美也から何度もしつこく引き出そうとしたのだ。

白血病となった兄の恭也は、副作用を抑える薬を使いながら、入

院を続ける事になる。そして退院後も、清潔な環境下での療養生活を余儀なくされるため、美也は様々な負担を強いられる。

そのように今後も多大な負担を強いる美也に対し、現状に対する肯定的な言葉を敢えて言わせる事で、母親は自らの承認欲求を満たそうとした。

そんな母親の要求に対して、美也は真っ向から反論した。

曰く、進学で脅しながら嫌がる骨髓提供を強制し、兄の病気を人質に肯定を強要するのは止めたらどうかと。

いきなり娘に自分を全面否定された母親は簡単に逆上し、兄の治療が上手く行って良かったと思えないのかと憤った。これまでの人生においても母親は、美也を叱る事で意見を封殺してきており、その時もそれが通じると考えた。

そんな母親に対して美也は、兄の治療成功で論点のすり替えをしても、脅迫は脅迫でしようと指摘した。

普段の美也では有り得ない反発に母親は簡単に沸騰し、怒りに任せて入院中の美也を病室で何度も引っぱたいた。

そして美也も、叩かれる度に母親を睨み付けるなど、行為がエスカレートするように敢えて誘導したらしい。

叫び声と暴行する音が響き渡った病棟では大変な騒ぎとなり、看護師たちが母親を強引に引き離れた。

だがそれは美也にとって、事前に想定していた事態だった。

暴行された美也は、『無理矢理に骨髓提供をさせられた病院』での治療を拒否してすぐさま祖母に連絡を取り、他院を受診して病院で殴られた頭部の打撲についての診断書を求めた。

その後、美也は祖母と共に脅迫と傷害で警察に被害届を出し、児童相談所に経済的虐待で通報を行い、民事でも親権喪失の申し立てを行うに至った。

どうも美也と祖母は、最初から両親と縁を切る目的で証拠集めを

していたらしい。

弁護士のアドバイスの元、隠しカメラで母親が同意書にサインするように強要した場面を撮影し、祖母が金銭面で支援していた帳簿を用意し、入院していた病院へのカルテ開示請求を行い、新たに受診した病院の診断書も確保して訴訟を起こしたのだ。

結果は、美也の勝利だった。

元々経済的に困窮しており、中学生にも拘らず両親と別居していた事も相俟って、両親は親権者としての能力に疑義が生じる状況だった。

加えて入院中の子供を病室で殴った事や、その原因が嫌がる骨髄提供の強要だった事が決定打となり、公的にも親子関係の破綻が認められるに至った。

日本の裁判は時間が掛かる事で有名だが、子供への虐待に関する手続きは直ぐに進められるそうで、来月には両親が親権を喪失し、正式に祖母へ引き取られる事になるそうだ。

（普段大人しい子ほど、キレると怖い？）

行動の引き金に心当たりが無くも無い次郎だったが、美也の場合は十年近く我慢を強いられて鬱憤を溜め込んでいた。

火山が大噴火を起こしたのだとしても、その原因が両親にある点は疑いない。

その両親とは縁が切れるが、それは負担ばかり掛けられていた美也にとってプラスになる。

であれば反省も後悔も不要だ。

「これで束縛される事は無いから、自由に探索出来るね」

その言葉を聞いた次郎は戦慄した。

まさか特別枠の大きな借りとやらを、次郎のダンジョン探索活動に徹底して協力する事で返すために、自由を得る決断に至ったのは無かるうか。

その様に精神が振り切れた想像して、恐ろしさを感じたのだ。

だが答えがいずれであろうとも、確定した事象を振り返っても仕方がない。

「……………うい」

次郎は洞窟探索に邁進する事で、それらを記憶の底へと追いやる事にした。

美也に先行し、通路から奥の部屋へと歩み出す。

すると視界を埋めるバツタの群れが視界に飛び込んでくる。

外見だけは、トノサマバツタそのものだ。次郎たちの山中県でもそこら中に飛び回っており、次郎も小学生の時には良く捕まえたものである。

そんなバツタが小型犬くらいのサイズまで巨大化し、洞窟内を群れて飛び回っていた。

戦闘力がかつての比では無く、不用意に近付くと蹴り飛ばし、噛み付いて皮膚を裂こうとしてくる。

「沢山いるね」

後ろから覗き込んだ美也も、視界を埋めるバツタに半ば呆れ、半ば感心した。

「そうだな。この洞窟の連中は、減らしてもすぐ増えるからなあ」

次郎達の想像では、大量に湧いている魔物たちの餌は、空間に満ちている魔法に用いる元素のようなものと、壁や床などから湧き出

してくるスライムたちだ。

そのため魔物たちは、空間に存在する魔法の素とスライムがある限り増え続ける。

魔法の素もスライムもほぼ無限であり、加えて魔物たちの増加速度も速すぎるため、次郎達が二人掛かりで減らしてもすぐに元通りになってしまう。

巨大バツタは、体育館程の空間に十数匹、グラウンド程の空間には常に百匹単位で居る。

スライム以外の食糧を消費しない点では、光合成する植物くらい地球に優しい魔物たちだが、彼らの生息域に踏み入る人間に対しては、その強靱な脚で容赦なく蹴り飛ばしてくる。

ボーナスポイントを身体能力に殆ど振っていない美也では、巨大バツタから受けるダメージが侮れないため、二人はパーティとしての敵の倒し方を試行錯誤してきた。

試したのは、次郎が数匹を釣って叩き、美也が魔法でトドメを刺す方法。あるいは次郎が土魔法で壁を形成し、隔離された安全地帯から美也が魔法を放つ方法。

そして最終的に行き着いた先が、今の方法だ。

「どりゃあああっ！」

次郎は雄叫びを上げ、巨大バツタの群れに突撃を敢行した。

右手に持つのは、土三で生み出した二メートルほどの鋭い石槍だ。それを軽々と振り回し、攻撃範囲に入ったバツタを先制攻撃で次々と薙ぎ払う。

「ジジジジッ……ジジジジジッ……」

近くに居たバツタが脚を擦り合わせ、警告音を発し始めた。

すると仲間の音に反応した数十匹のバツタが一斉に次郎達へ向き直り、飛び跳ねながら襲い掛かってくる。

そこへ石槍が轟音を鳴らしながら振り回され、その矛先や石突きを受けたバツタたちが、向かう先から次々と叩き落とされる。どの方角から襲ってくるバツタも、払い落とされる先は通路から向かって右端の一角だ。

転がされたバツタが徐々に積み上がってきたところで、待ち構えていた美也が魔法を放った。

火二の力で発現した魔法の炎は、同じく風二の力で生み出された暴風に乗せられ、あたかも火炎放射器で生み出したかのような烈火の吐息を浴びせ掛ける。

生きたまま火葬されるバツタたちは当然藻掻く。

しかし殴られた部位が大きく欠損しており、大半は逃げられないまま炎に飲まれて焼かれていった。

「こんなに燃えているのに、酸欠にならないのが謎だ」

「発火自体は魔法の素みたいなものを使って起っているから、酸素は減らないみたい。だから正確には燃焼じゃ無いかも」

「すると電子レンジで分子をぶつけるみたいないないか？」

「着火後は魔法の素と酸素を両方使うから、魔法学の新定義が必要かも」

「……よく分からんから、各種学会への発表は任せる」

難解さに理解を放棄した次郎の石槍は、主の頭が変わって回転を再開した。

次郎と同じく思考を放棄している後続のバツタたちは、次々と襲い掛かつては焚き火の中へ叩き落とされていく。

一般人が瞬きをする間に一閃。

目にも止まらぬ速さで繰り出される石槍は、バツタの進撃を塞ぐ絶対的な防壁となつり美也が控える後方には一匹たりとも踏み入ら

せない。

次郎のレベルは、バツタで太刀打ちできる次元を大きく越えている。

洞窟に潜る二人が選んだレベルアップの方法は、このように高レベルになつて低レベルの魔物を安全かつ大量に倒す事だった。

もっと奥の魔物でも戦いに不安は無いが、深入りが過ぎると往復だけで時間が過ぎてしまったため、このように低階層での乱獲を選択した次第である。

「今の次郎くんなら、紗江さんにも勝てるかな？」

「……いや。うちのお袋は、第六感とか第七感とか、普通に使ってくるぞ」

僅かな躊躇いは、家族の会話をして良いものと悩んでの事だ。

しかし美也から振つてきたのだと思い直し、避ける方が不自然だと考えて答えた。

今の次郎は、剣道三段の父には余裕で勝てるという確信がある。

空手で全国レベルの兄と素手で戦つても、やはり身体能力の差で上回れると考えている。

しかし空手でメダリストの母が相手では、まだ確実に勝てる気はしなかった。あるいは幼い事から植え付けられた意識が、そう思わせているのかもしれない。

「第六感つて、直感よね。第七感は何？」

「戦っている相手の動きを、先読みするんだ。直感じゃ無くて、気の流れみたいなのが見えるとか言っていた」

「紗江さんつて、銅メダリストだよ。相手の選手つて、どうやって勝つたの？」

「……………さあ」

結果が全ての世界で負けた以上、相手より弱かったと考えるしか無いだろう。

「よく分からないけど、お袋も未だ半分くらいは人間なんだと思う」
「対戦相手は洞窟でレベルを上げたのかな」

紗江がオリンピックに出たのは、西日本大震災の発災前だ。日本全国で見つかり次第封鎖されている不自然な地割れも、その頃は影も形も無かった。

次郎は焚き火から飛び出たバツタを叩きつつ、頭を振って否と答えた。

「相手は八割くらい人間を止めていたんじゃないか？」

次郎は勝敗という事実から逆算し、適当に答えた。

もっとも戦闘力が突出している母親だろうと、あるいは娘を虐待する母親だろうと、人の枠内に収まっている事に違いは無い。むしろ洞窟に籠もる二人こそ、力が知られれば疑惑の対象とされるだろう。

美也は骨髓提供に際して、レベルが上がった状態で様々な検査を受けた。

問診や血圧測定から始まり、採血や検尿などの検体検査、X線やCTなどの生体検査、感染症の有無やアレルギーに至るまで徹底的に調べられたが、そのいずれも異常値は検出されなかった。

しかし入院を控えて敏感になっていた美也は、レベルが上がる度に自身の身体に何か満ち、補われていった感覚があった。現代医療の検査項目には無い何か、美也の身体のいくらかを、純然たる人間から逸脱させている可能性が脳裏を過ぎる。

レベル〇だった五カ月前と、レベル一二の今とを比べれば、身体能力が劇的に変化しているのは紛れもない事実だ。

美也にとっては、骨髓提供前に必要だから求めた力であり、両親と決別した今後は生きるために得たい力で取得に後悔は無い。だからこそ力を得た結果どのような事が起るのかについては、無関心では居られなかった。

そんな思考の海に深く潜る間にも、石槍は回転を続け、焚き火も爛々と燃え続ける。

「あ、レベルが一三になったみたい」

「おお、コングラッチレーション？」

「うん、ありがとう」

適当な英語に、先程よりずっと柔らかい微笑が溢れた。

やがて火が燃え尽きると、焚き火の中に石槍が突き刺され、あるいは炎が流し込まれた。二つの魔法は死骸となったバツタたちの魔石に触れ、その内に秘めた力を魔力越しに術者達へと届けているのだ。

次郎が石を一つ一つ拾っていた頃に比べると、美也が加入した後は様々な面で効率が上がっている。

やがてバツタの群れが経験値に換え尽くされた頃、洞窟にようやく静けさが戻った。

09話 バレンタインデー

二〇四三年二月。

以前は、あれほどニュースに取り沙汰されていた「西日本大震災後の不自然な地割れ」も、最近では殆ど報道されなくなった。

新情報が出て来なくては、人々の関心も持続し得ないのだろう。それは地割れを隠している行政と、密かに潜っている次郎の双方にとって、非常に都合が良かった。

誰にも関心を向けられなければ、誰かに発覚する危険も低くなる。次郎は気兼ねなくレベル上げに没頭できたし、美也も洞窟内の写真や映像を撮ってはネット上の様々な資料と比較した。

しかし次郎たちは、後二カ月で受験生になってしまう。

流石に受験生ともなれば、いつまでも洞窟に籠もり続けるわけには行かなくなる。二人の会話の比率も、自ずと洞窟以外が増えてきた。

「三年生になったら、流石に勉強の比率を上げないと駄目かなあ」「どれくらい上げるの?」

渋々といった体に、美也はどこまで手を貸して欲しいのかを問うた。

次郎の成績は、中学一年の時点では一八人中一〇番だった。

それが中学二年の一学期には、中間テストで高校不合格の目安となる一三番まで下がり、その後に美也の手を借りて期末試験で六番まで上がった。

二学期は美也のレベル上げに勤しんだ事で八番まで下がったが、三学期は美也の手が空いた事で少し上がりそうな様子だ。

要するに次郎の成績は、美也のフォロー次第で大きく変動するという事になる。

そして美也としては、次郎に求められた分だけ成績向上に協力するつもりだった。

「例えばクラスで三番くらいを目指すと言ったら、可能だったりするか？」

「うーん。次郎くんが本気なら、三年二学期の中間テストなら可能かな」

目を大きく見開いて驚く次郎に、美也は念を押す。

「テストが終わるまで、自由時間が全部勉強になるけど」

「それは嫌だなあ」

高校全入時代となった現代において、七村市のヒエラルキーを下に分断する市立七村高等学校の普通科に受かる事は絶対条件だ。

また市内の高校に不合格すると通学のために早起きしなければならなくなるといふ問題もあるので、勉強をせざるを得ない事は次郎も理解している。

問題は、どれくらい洞窟の探索時間を減らすかであろう。

三山中学の目安では、成績がクラスで平均以上であれば合格が安全圏で、三分の一に入れば九割方確実となる。

従って確実に合格するには、クラスで六番くらいの学力を維持すれば良い。

「平日は纏まった時間が取れないし、探索は休日だけにしてみるか」
やがて妥協点を見出した次郎に対し、家庭教師役の美也も妥当だと結論付けた。

「うん、それは良いかも。次郎くんの成績も、結構上がると思うよ」

なにより自発的に勉強しだした事が、次郎の成長点だろう。

一方、美也も変化している。

例えば二人は一緒に登校しているが、これは美也が家族のために朝ギリギリまで家事をする必要がなくなったからであり、心に余裕が生まれていた。

「それと、今日探索しないなら、後で渡すね」

「……………ん？」

次郎が訝しげに首を傾げる間に、三山中学の校門が見えてきた。

少子化で生徒数が減ったため、中学校の自転車小屋は随分と疎らだ。そんな広いスペースに贅沢な駐輪をすると、半分は使われていない下駄箱で内履きに履き替える。

そこに至って次郎は、美也が口にした言葉の意味を理解した。

「ああ、サンキュー」

「どういたしまして」

本日は、二月一四日。

中学校生活で起る三大イベントの一つ、バレンタインデーの発生日であった。

本イベントにおける中学男子のヒエラルキーは、誰からどのようなチョコを貰ったのかで、カースト制のように厳しく分け隔てられる。

身分を大まかに分ければ「複数からの本命チョコ」王族」「本命チョコ」貴族」「義理チョコ」平民」「家族チョコ」貧民」となる。チョコで貧富の差を表わすと聞けば眉を潜める良識人もいるだろ

うが、一般的な中学男子が内心で気にするのは致し方がない。学生である彼らにとって、これは大問題なのだ。

この勝負に関して毎年一個が保証されている次郎は、辛うじて平民以上が保証されている。

美也が次郎にチヨコレートをくれるようになったのは、小学三年生の時からだ。

最初は祖母たちがお膳立てをした義理チヨコだったが、美也は意味を理解した後もチヨコを渡してくれるし、真つ当な男子である次郎も非常に有り難く思っていた。

そんな美也との仲は、美也が祖母の家に引っ越した時に次郎が口走った家族発言の後からより一層深くなっている。また美也自身もチヨコに費やす軍資金が増えている事から、そろそろチヨコ王国における貴族の仲間入りも見えてきたところだ。

そんな本日の重大イベントに、不覚にも次郎は気付いていなかった。

浮き世離れしてしまった原因は、意識が完全に洞窟探索へと向いていたからだろう。それに付随してTVを見なくなったとか、部活に全く顔を出さなくなった等の理由も挙げられるかもしれない。

もちろん自己の利益追求だけではなく、時間が出来た時には恭也の白血病を治す方法も考えてみた。

例えば、白血病細胞を抗がん剤で減らす場合、光魔法を併用すれば白血病細胞を回復させてしまう恐れがある。それならば、逆に闇魔法で白血病細胞だけを殺す事が出来ないか。

そのように魔法の活用法を考えたりもしたが、医学知識の無い人間がいきなり本番を行うのは拙いという結論に行き着くしか無かった。

怪我程度ならいくらでも自分で治験が出来るが、失敗した時の危険がある治療は拙い。

白血病マウスを持つ国が、魔法を公開して臨床試験を行ってくれ

る事を願うしか無いが、一体どうなっているのか。

そのように気が逸れまくっていた結果、下級生が下駄箱からそれっぽい箱を取り出している姿を見て、ようやく本日のイベントに気付いた次第である。

「でもさあ、下駄箱に食べ物を入れるのはどうなんだろうなあ」

下駄箱にチョコを入れて貰えない哀れな男が、イベントに気付くと同時に僻み出した。

衛生問題を指摘する直前まで一生懸命に医学を考えていた事は、情状酌量に寄与するだろうか。

「ノーコメントです」

次郎に問い掛けられた美也は、他の女子を慮ってコメントを差し控えた。

女子の立場では、相手に直接手渡す行為は非常にハードルが高い。チョコを渡した事が知られると、告白を伴わなくても周囲から誰々を好きだとレッテルを貼られる。囃し立てられて嬉しい人は少ないし、相手にまで被害が及んでは最悪の結末に至る。

つまり大多数に配る明らかな義理チョコを除けば、直接相手に渡すのは分の悪い賭けなのだ。

そのような事情を鑑みれば、下駄箱にチョコを入れる女子が出るのも致し方が無い事だ。

「机の中に入れるとかは？」

「二年前に次郎くんたちが悪戯してから、机の中に入れるのは皆避けているかも？」

「うぐぐ」

美也が指摘したのは、二年前に次郎が悪友の中川や北村と協力して、町のデパートで調達したチヨコを、クラス男子の机の中へ密かに放り込んだ事件だ。

三人の犯行動機は、クラスの真面目君である相山達弘君がチヨコに気付いた時の反応を見たかったという、小学生らしい純粋な好奇心からだった。

犯行は早朝。タイミングを見計らった次郎が、机の前を通り過ぎる僅かな瞬間にチヨコを入れた事で成立した。

そしてホームルーム開始前、想定外の事態が発生する。

クラス全員で行う縦笛の練習時間に、隣の席の須藤由良子がチヨコを見つけ出して引っ張り出し、それを満面の笑みで高らかに掲げたのだ。

それはバレンタインの日に、男達の手によって入れられたハート型の大きなチヨコが、クラス全員の目の前に晒された瞬間である。ひたすら呆然とし、やがて笑みを浮かべた相山君を見た犯人たちの笛の音は、音階を高らかに外していった。

（しかしあれば、どうしてバレたんだ……………）

犯人は三人。資金提供は中川、購入者は北村、そして設置者が次郎だ。

机の傍を通り抜けながら素早く入れたので、チヨコを潜ませた際に気付いた人間は皆無だった。

しかし、次郎が担任に呼ばれた時には全てを知られていた。

裏切り者は中川か、北村か。

事実確認とお説教が一言ずつで済んだのは、担任自身が笑いを堪えていたためだろう。複雑な顰めっ面で、説得力は皆無だった。

次郎の懐かしき思い出である。

「もう悪戯したら駄目だからね」

「うい」

美也に釘を刺された次郎は、あまり反省の素振りが見えない返答と共に教室へと入った。

相山が今でも傷付いているなら、流石に次郎達も反省しただろう。しかし相山は、チヨコ事件を切っ掛けに須藤から告白され、付き合うようになった。

そのため恋のキューピットを自称する三人は、差し引きで大きなプラスに転じた自らの行為を全く反省していないのだ。

クラスに入ると、若干浮ついた空気が流れていた。

他所の中学男子ならバレンタインデーに戦々恐々としたり、諦めを覚えたり、果ては嫉妬を現わすマスクを被り出すかもしれない。

しかし次郎達のクラスには、チヨコを貰えない男子全員に手作りの義理チヨコを配る女神のような女子が居るのだ。

なお相山や次郎のように、他の女子からチヨコを貰えるアテがある男子には配られない。競合しないように、事前調査もされている。

「はい、ナカさん」

「おおつ、天からのお恵みじゃ。ありがたや、ありがたや」

「オーバーだねえ。はい、キタムーも」

「ハハハッ」

教室に入るなり、平伏する恋のキューピット達の痴態が飛び込んできた。

それを思わず目撃してしまった次郎は、かつての片割れたちに生暖かい眼差しを向ける。

「ちなみにトリユフに挑戦したよ」

「マジで！？ キラさん、マジパネエ」

「貴女が神か」

最後のキューピットとなった次郎に羨ましい感情は、決して……
無い事も無い。

ここまでクオリティの高いチョコが配られると、他の女子たちも
渡し難いだろう。それでも女神が他の女子たちから嫉妬されないの
には、きちんとした理由があった。

チョコを配る女神の氏名は、名字が越後屋^{えちごや}、名前は輝星^{きいつい}という。
まるで時代劇で、悪代官に黄金色のお菓子を渡す代表格のような
名字。

さらに僻地では珍しいキラキラネームが組み合わされた、明らかに
人生ベリーハードモードな名前だ。

越後屋の輝く星とは、いったいどんな賄賂で裏社会を牛耳るつも
りなのか。

名字は致し方が無いとして、名前は全面的に親の責任だろう。

もしかすると両親は、インパクトのある名字を、同じようにイン
パクトのある名前で誤魔化したかったのかも知れない。

だが相乗効果で、なおさら酷い事になっている。

彼女の場合、美也のように証拠集めをしなくても虐待認定される
かもしれない。

そんな彼女と八年間同じクラスだった次郎達は、その間に幾度か
の争いを経て、越後屋輝星を氏名でからかわない、名字を呼ぶのは
避ける、不当に扱わない等の不文律を生み出していった。

彼女が配るチョコは、クラスメイト達の気遣いに対するお礼の一
部であり、よって他の女子たちも文句を言わないのだ。

「うおっ、うめえ！」

欧米人並の豪快さで包装紙を破った中川が、取り出したチョコを

その場で口にしながら感想を述べる。

この時、次郎は不意に世界の仕組みの一端を理解した。

「富の偏在が、戦争の原因になる」

嫉妬男あるいは空腹の中学男児が連想したのは、人類における経済格差の縮図であつた。

南の貧しい発展途上国が輸出されていく力カ才を眺める一方、北の裕福な先進国がトリュフを食している。

そのような貧富の差を是正するのは、人類の急務であろう。今ここに、後の革命児が生まれたのかもしれない。

「堂下くんも、美也っちに貰えなくなったら、あたしがあげるよ？」
「……ぐぬぬ、国連め」

僅かに芽生えた革命の意志は、さり気なく賛同者を奪う越後屋の手腕により、呆気なく摘み取られた。

10話 突入

季節はあつという間に巡り、中学三年生の夏休みが訪れた。

それでも受験生に属する次郎は、洞窟探索を休日のみにする自主ルールを設けた。

目標を定める際、『高く設定して不断の努力で推し進める』か、『程々の設定をして着実に履行する』か、『低く設定して安易に到達する』かの三種類があるが、次郎は三番目を選択した次第である。達成できない目標を立てるよりは、マシだろう。

月に十日の探索に加え、春休み、ゴールデンウィークが立て続いた結果、次郎達のレベルは大いに上がっているが、それでも毎日潜っていた以前に比べれば自己コントロールが出来ている。

これで世間の受験生並に真面目に勉強しているのかと問われれば、当然ながら首を傾げざるを得ないが、洞窟依存症の自己抑制は図れたため、趣味と勉強が両立できていると言えない事もない。

問題は、どの程度の水準で勉強と趣味が両立できているのかだ。

比較が容易な勉学では、一年前にライバルであつた中川の墓を建立して以降、次郎はクラスメイト一八人中六番以内を維持している。これは本人の功績では無く、家庭教師役を担う美也が、次郎個人に合った教え方をしているからだ。懸念された夏休みの宿題も、美也の協力によつて七月中に全てを終えており、それらの結果だけ見れば、勉学は上手くいっているのだろう。

そのおかげで次郎は誰憚ることなく、洞窟探索に勤しめている。

なお洞窟探索に関しては、辛うじて「可」に届く程度だ。

それは洞窟探索をしているのが、二人という少人数である事に起因する。

この人数では複数のグループに分かれて互いに未踏破部分の地図

を埋めたり、戦闘ごとにメンバー入れ替えて体力の温存を図ったりするのは無理だ。

二人で可能なのは戦闘時の役割分担くらいで、次郎が物理で殴り、美也が魔法で薙ぎ払う形に落ち着いている。

そのため二人のボーナスポイントは、それぞれの役割に特化した形で割り振られている。

堂下次郎 レベル三二 B P ○

体力六 魔力六 攻撃五 防御五 敏捷五

火一 風一 水一 土五 光一 闇一

地家美也 レベル二七 B P ○

体力三 魔力八 攻撃三 防御三 敏捷三

火四 風三 水一 土一 光三 闇○

ここまでレベルを上げた理由の最たるは、自分の身を守るためだ。魔物は群れを成しており、前衛と後衛が一人ずつの次郎達では、広い空間で二方向以上から同時に攻められると必ず討ち漏らしが出る。そのため後衛にも、それなりのレベルが必要だった。

魔物に対抗できるレベルに関して、二人は「生息している階と同レベル程度が必要」だと見積もっている。

つまり地下一階の巨大コウモリに対しては、レベル一の強さ。地下二階の巨大タマヤスデに対しては、レベル二の強さが必要という事だ。

次郎は巨大コウモリに対して、レベル〇の時にはナタを数十回振るった一方、レベル一ではさほど苦労せずに倒せた。

以降も同じような感覚だったため、現在の次郎は三二階相当の魔物を倒せて、美也は二七階相当の魔物を倒せると考えた。

そんな二人が潜るのは概ね地下五階で、一番深く潜る時でも地下

十階までだ。

これほど大きな能力差ならば、大失敗をしても強引に切り抜けられる。二人は夏休みに入るまで、安全確保のために浅層でのレベル上げに勤しんできた。

だが代わり映えしないレベル上げには、流石に次郎の飽きが来ていた。

レベルが上がって力が上昇するという目に見える恩恵が無ければ、とつくに根を上げていただろう。

「いい加減に飽きた。もう一〇階は踏破するぞ」

「うん。ここまで上がれば、安全確保は充分かな」

こうして本格的な受験シーズンが到来する前に集大成を求める次郎は、美也の同意を取り付けて一〇階突破を目標に定めた。

一〇階の魔物は中型犬くらいの大きさの真っ黒なカマキリ達だが、レベル三〇台に上がった次郎達の敵では無い。

両者は「普通の人間」対「子猫」くらいの力量差で、噛み付いてくるカマキリを千切っては投げ、千切っては投げする無双振りが発揮できた。

「うーん。魔物の強さは大丈夫だけど、どうして無茶をしたの？」

「無茶って？」

「朝四時の出発」

「ああ、そっちな」

美也が指摘したのは、時間についてだった。

この洞窟の各階層は、七村市が丸ごと収まる程に広い。

さらに魔物も多数生息しているため、下層へ降りるにはそれなりの時間が掛かる。

次郎達はレベルが上がった事で、移動速度が跳ね上がっている。

それに付随して、洞窟内の道順や、魔物の分布も概ね把握した。それでも移動時間の短縮には、限界がある。

現在は最深記録と並ぶ地下一〇階まで潜っているが、ここまでに片道六時間を費やしている。今すぐに引き返しても、往復で一二時間が掛かる計算だ。

次郎は成績が上がった結果として、いつ帰宅しても母親から何も言われなくなった。

成績が落ちないなら口出しの必要が無いし、男の子なら多少のやんちゃには目をつぶるといふ判断のようである。空手でメダリストな母親の許容するやんちゃの範囲が何処までなのかは不明であるが、とりあえず次郎は自由の身だ。

しかし女子である美也の帰宅時間は、成績に限らず常識的な範囲に収めなければならぬと次郎は考える。それは美也を引き取った祖母の立場を悪くしないためであり、ひいては美也自身のためでもあった。

そのため次郎は「朝釣り」を言い訳に使わせ、深夜四時に家を出させた次第だ。

「無理だったか？」

「お婆ちゃんは何も言わなかったけど、魚釣りは嘘だって分かっていると思うよ」

「うわ、マジか。深入りする日は、中川と北村が釣りをする日に合わせているのに」

いわゆる計画的犯行である。

さらに釣れた魚の一部を分けてもらうなど、小細工も欠かしていない。

もっとも呆気なく露見しては、まるで意味が無いが。

「なんでバレていると分かったんだ？」

恐る恐る聞く次郎に、美也は眉を八の字に下げながら答える。

「誰と行くのかを聞かれて、次郎さんと二人だって答えたらお小遣いをくれたんだけど」

「ふむふむ、それで？」

「貰った金額が五千円」

「あー」

中学生が釣りへ行く時に、五千円をくれる保護者は少ないのでは無いだろうか。

「それと……」

「まだ何かあるのか？」

「部活に行くような服は止めておいたらって」

「おおっ」

どうやら美也の祖母は、二人がデートしているのだと勘違いしたようである。

次郎はしばし考え、誤解されたままでも良いかと開き直った。

洞窟探索に美也を付き合わせているのは事実であるし、そういった真つ当な理由だと思って貰った方が、洞窟を探索する上で何かと都合も良い。

「それで次郎くんが一〇階に拘るのには、何か理由があるの？」

「ああ、一〇階って、一つの区切りだろう？」

「レベルが一〇進法だから、これを作った相手にとっても区切りかもしれないね」

実際には一〇進法までは考えていなかった次郎は、顔を若干引き攣らせながらも内心の焦りを表に出さないように頷きつつ、自らの願望を語る。

「つまり俺が考えているのは、区切りの後に洞窟の中が変わるかも知れないって事だ。具体的には、宝箱が出てくるようになるとか」「宝箱？」

「そうだよ。なんでレベルがあるのに、これまで宝箱が出て来ないんだ。武器とか回復薬とか、色々あっても良いじゃ無いか」

次郎の後ろから追走する美也には、前方を走る次郎の表情は窺えなかった。それでも次郎の性格上、高い割合で本音が混じっているのだと理解する。

これまでの探索では、経験値の元になる石しか得られていない。地下一階から八階までは緑色・土色・赤色・水色の石が二巡しており、九階の巨大ゲンジボタルが白色、一〇階の巨大力マキリが黒色を体内に持っていた。

これは美也たちのステータスに表記される、風・土・火・水・光・闇に当て嵌まるように思われる。

しかし、石の用途に関しては、レベル上げ以外には思い付かない。倒した者にしかレベル上昇などの恩恵がない事は検証済みであり、他者に売れるとは思えなかった。

つまり次郎達は、このままではどれだけ潜っても収支がマイナスのままなのだ。

魔法や力の上昇には大きなメリットが有るが、それだけではお金にならない。コンビ二でアルバイトでもした方が、まだ食い繋げる。そんな中、洞窟内で石以外に得られるものがあれば、探索にも光明が差すはずだ。

「仮に宝箱が出て、換金は難しいと思うよ」

「そうか？」

「そうだよ。例えば金塊が出てきたら、どうする？」

「リサイクルショップとかに売る」

「それには身分証が必要だし、未成年なら保護者の同意書も必要だし、そもそも金塊が自分のものだと言われたいら出来る？」

「うちの敷地内で拾ったとか」

「地権者は次郎くんのお爺さんだから、次郎くんの所有物としては売れないよ」

「……………ぐぬぬ」

販売までの高い道のりにショックを受けた次郎は、ガックリと肩を落とした。

美也の指摘に、貴金属の種類や大小は関係ない。自宅の敷地内に落ちているカラフルな石を拾い、私的に使っている分には良いが、売るとなると途端にハードルが跳ね上がる。

ちなみに武器を持っていれば銃刀法違反であり、回復薬を持っていれば何処で手に入れたのかと調べ上げられるだろう。

それらを回避するためには、洞窟が日本政府から正式に認められ、次郎が正規に入れるようになり、かつ取得物の所有権が取得者に帰すようにならなければならない。

「どこかに隠しておいて、いつか売りに出すとか…………」

「それには、少しだけ時間が掛かるかも？」

日本で最初に不自然な地割れが見つかったのは、今から二年三カ月前。

情報が入り乱れる現代社会において、全国数十カ所の洞窟を秘匿し続けるのは困難なはずだ。

しかし、これだけ長期間に渡って秘密が守られている以上、上手

く秘匿できてしまったと解するしか無い。であれば現状は、これからも暫くは持続するだろう。

従って、次郎の活動が公に認められる可能性は、近々にはかなり低かった。

「最初の洞窟が出た時に、上手く隠したのかなあ」

「うん。それと見つかるたびに壁とかで塞いで、封鎖している警察官にも詳しい話は伝えなかったのかも」

「その有能振りは、七村市の役人には不可能だな」

洞窟を隠蔽する側にとって都合が良かったのは、発見された場所が僻地ばかりであり、かつコウモリが日本には自然に生息していたという二点だ。

いくらコウモリの大きさや強さに違和感があっても、それだけでは決定的な証拠とは成り得ない。ステータスも他人には見えず、写真にも撮れなかった。

こうなると問題は、魔法の発現が可能になった次郎達のようなごく一部の例外だけだ。

もしも次郎達がネットなどで公表を試みたなら、隠している側の行政はどう動くだろう。

最初はネット投稿がCGで再現可能だと反論し、次郎がアクセスできないように手配してから反論が無いので逃げたと言いかもしれない

次郎に対する懐柔も、同時に試みられるだろう。

そして懐柔が失敗すれば脅し、それでも駄目なら実力行使を行う。そうして、次の投稿が無いからアレは嘘だったとも言っただろうか。そのような想像をする次郎の側からすれば、わざわざ洞窟を世間に公表して自らのアドバンテージを失おうとは思わない。

つまり次郎達のような例外は、よほど行動的な馬鹿でも無い限り、自ら公表はしないのだ。

そして今のところ日本に、よほど行動的な馬鹿は居ないようである。

「換金は、一先ず保留する。あるのかも分らないし」

「そうだね。それに宝箱を気にするなら、ボスとかにも気を付けな
いと駄目だよ。ここまで日本のゲームに似せているなら、可能性は
あるよ」

「ボスカ」

「うん。洞窟には魔物の数が多いから、大人数用の凄く強いボスが
居るかもしれないよ。今のレベルなら心配ないと思うけど、一応気
を付けてね」

「了解」

次郎は美也の説明に納得しかけ、新たな空間に一步踏み込んでか
ら首を大きく横に振った。

「……どうしたの？」

次郎に追いついた美也が、肩越しに前方を覗き込む。

すると火魔法に照らし出された空間には、目を疑うような草原が
広がっていた。

草自体は、単なるイネ科の雑草だ。

牧草にもなる有り触れたグラス類で、丈は二人の脚のふくらはぎ
くらいまで伸びている。細かい品種までは分からなかったものの、
日本にも生えている品種で物珍しさは無い。

訝しがる最大の理由は、草の色にあった。

地を埋める草の全てが、まるで墨汁に漬け込んだかのように、一
本残らず真っ黒に染まっていたのだ。

吹くはずの無い風に凧がれて、黒い草原が波立っている。

そんな風に舞い上げられて飛ばされた黒い光が、次郎達の前方に巨大な渦を次々と生み出し始めた。

「ボスの想像は正解っぽいな。美也、通路まで下がれ」

次郎たちは渦に向かい合ったまま、後ずさりを始めた。
直後、後退が不可能だと知る。

「次郎くん、通路が消えてるよ！」

慌てて振り返った次郎が目にしたのは、通路があつた場所を完全に埋めている壁だった。

11話 烽火

開戦を告げる烽火は、当事者の片側が全く知らぬ間に、唐突に上げられた。

前方の虚空に出現した、黒光りする無数の渦。

その一際大きな渦から巨大な鎌が飛び出してきたのは、二人が身構える前だった。

「ひだりっ！」

美也の声が届いた直後、咄嗟に振るわれた石槍が巨大鎌を弾き返していた。

土魔法五の力を込めた石槍は折れなかったが、これが低い魔力の武器や鉄パイプなどであれば、アツサリと寸断されていただろう。攻撃を受けた次郎の手には、そう思わせるだけの速度と重量が乗せられていた。

「おいおい、ちょっとデカすぎるだろう」

鎌のサイズから推測するに、相手の全長は軽トラック並みにある。一〇階に群れている中型犬サイズのカマキリたちとはサイズが違いすぎて、比較にもならない。

鎌から推察される全身は、まるで白亜紀の恐竜だった。現代にも同サイズのゾウは居るが、あちらは草食で鎌など持たない。

この巨大肉食昆虫が地上で卵を生めば、大型の動物を餌として大量繁殖するのは不可避だ。

少なくとも地上世界において、陸上でこの巨大大カマキリに対抗で

きそうな生物は、武装した人間以外に想像できなかった。

そのような事を考える間に、同じ渦から二本目の巨大鎌が襲いかかって来る。

次郎は石槍を引き戻す間も無く、カマキリの左腕と思わしき二本目の大鎌を、自らの右前腕で叩き返した。

「痛っ」

鎌を受け止めた次郎の右前腕から、鮮血が迸った。

視線を向ければ薄らと、浅く皮膚を裂かれた切創が出来ている。

魔物に出血を強いられたのは、美也を洞窟に誘った最初期以来だ。魔物のレベルは階層に等しいという仮定が、脆くも崩れ去っていく。あるいは美也が口にしたとおり、相手がボスだから強い可能性もある。

「美也、こいつの鎌はヤバイ」

「うん、接近戦はお願い」

レベル三二に加えて身体能力が五から六もあって傷を付けられるなど、完全な想定外だ。

巨大カマキリのレベルは、少なくとも並のカマキリの二倍はあるだろうか。

次郎とは開きがあるが、それでもダメージを受けるのだから素の攻撃力は推して知るべし。ナタを持ったレベル〇の次郎がコウモリを倒せたようなものだろう。

黒光りする渦が薄らぐ中、真っ黒な草原に真っ黒な巨大カマキリたちの姿が次々と現われる。

二トトラクを上回りそうな、超巨大な黒色カマキリが二匹。

そして一〇階に沢山いる大型犬サイズの黒色カマキリが一〇匹。

いずれの複眼も、次郎達の間を窺っているのだろう。触覚も次郎

達の方向ピンと張られ、体勢を低くして今にも飛び掛かってきそうだった。

「後ろの通路はどうなっている」

「駄目、来た道が消えたまま」

「くそっ」

次郎は視線をカマキリから逸らさずに、大きな舌打ちをした。

二人がレベル三二と二七まで探索活動を停滞させていたのは、門限があつて長時間潜る機会が得られなかった中学生の都合と、石橋を叩いて渡る美也の性格が、偶然重なった結果に過ぎない。

二匹の超巨大カマキリは大雑把に見積もってもレベル二〇くらいはある。

次郎達に十分な時間があれば、半分のレベルでもここまで来る事は可能だった。そしてその場合は、確実にカマキリの餌になっていただろう。

想像するだけで身の毛が弥立つ末路であり、自分と美也がそのような危険な目に遭わせられた事は、断固として受け入れられなかった。

「この洞窟を作った奴は、最悪だな」

洞窟を主体的な意志によって作った存在が居るとすれば、その者は侵入してきた人類が巨大昆虫たちに食い殺されても一向に構わないと考えている事になる。

次郎は今になってようやく、この洞窟が人類の安全など意に介さない危険地帯である事を認識した。

「俺が削るから、傷口を狙って火魔法を撃ってくれ」

「うん。分かった」

次郎は身を屈め、次の瞬間には前方に向かって勢い良く飛び出した。

目標は至近の巨大黒色カマキリだ。まずは次郎の接近に合わせて振るわれる左の鎌を、右手の槍で受け流す。

遅れてやって来た右の鎌は、左手に生み出した新たな石槍で弾き返す。

そしてがら空きになった巨大カマキリの腹部目掛けて、両手に持った二本の槍を交差させるように叩き込んだ。

「おりゃああつ！」

両手には布を棒で叩いたかのような、衝撃が分散する鈍い感触が伝わった。

しかしダメージは与えられたようで、腹部からは黒色の液体が漏れ出している。

次郎は再び声を上げてカマキリ達の注意を引き付けながら、全力で黒い草原の土を踏み込み、二匹目の巨大カマキリに向かう。

そんな次郎が空けた隙間を埋めるように、美也が生み出した火の塊が一匹目の巨大カマキリに放たれた。

火弾の大きさは、大型犬サイズの巨大カマキリを数匹まとめて飲み込むほど。直撃すれば一撃で巨大カマキリをヴェリー・ウェルダンのステークと化せる威力がある。

そんな次郎の身体に隠れるように迫ってきた強烈な火弾の攻撃を、巨大カマキリは反応できずに直撃した。

火弾は傷付いた腹部に命中し、魔法の力で一気に燃え上がる。強烈な炎は巨大カマキリの表面を燃やしながら、傷口から体内に潜り込んで内部まで焼いた。

「ギギッ……ギギッ」

鳴き声と共に巨大鎌が滅茶苦茶に振るわれ、風圧で草原の黒い草が巻き上げられる。巨大カマキリの背中の中羽が開き、羽ばたきがさらに草を舞い散らせた。

その間に、新たな火弾が胴体目掛けて放たれていた。

同時に二匹目の巨大カマキリに向かっていた次郎も、左手の石槍を二匹目への牽制に投げ飛ばすと急速な方向転換を行った。

そして傷付いた巨大カマキリの背後から挟み撃ちをするように襲い掛かる。

「ぬ、お、りゃあっ！」

振り被られた右手の石槍が、頭上から叩き落とされる。

対して傷付いた巨大カマキリは半身を逸らし、左の大鎌を振るって迎撃に出た。

「ギギギギギギッ」

「いつてええっ」

右脚の裏で大鎌を受け止めた次郎は、石槍で巨大カマキリの左複眼を叩き壊した。次郎の損傷は靴の裏と靴下が破れ、皮膚が浅く切られた程度である。

一方でカマキリが負った損害は、遙かに甚大だった。複眼の片方が叩き壊されると共に、美也の放った二発目の火弾が胴体を焼き、羽を燃やして飛行力を奪い去ったのだ。

次郎は着地と同時に槍を投げ付け、追撃とばかりに巨大カマキリの大顎を削る。その間に火弾の三発目も頭部を襲い、首を掠めた所で派手に炸裂した。

徹底的な集中攻撃を浴びた一匹目の巨大カマキリは、戦意を喪失して後方に逃げ出す。

その穴を埋めるように、二匹目の巨大カマキリが飛び掛かってきた。その僅かな間に次郎は迎撃のために新たな石槍を生み出したが、美也は動けずに困惑の声を発した。

「黒い光が邪魔をして、回復魔法が使えない」

負傷した次郎の右手や右脚を回復しようとした美也は、生み出した光が黒い光に掻き消されるのを目撃した。

洞窟に潜って一〇カ月、こんな現象を観測したのは初めてだった。発光色から察するに、闇魔法の黒い光が、光魔法の白い光を打ち消しているようだった。この黒色草原では、空間を埋め尽くすほど黒い光が満たされている。周囲の環境が、光魔法の発動を打ち消してしまうのだろう。

「分かった」

次郎は短く答え、槍を構えた。

発動できないものはどうしようもない。回復が出来ないのなら、なおさら早く倒してしまわなければならなかった。

幸いにも、美也に怪我を負わせられそうな巨大カマキリは残り一匹だ。

次郎はそちらに狙いを定めると、再度大声を上げてカマキリたちの注意を引きながら、一直線に突っ込んでいった。

「ぬおおおっ」

接近に反応した巨大カマキリの両鎌が、左右から次郎に伸ばされる。

カマキリは、自分の身体より小さな動くものを襲う。片方の鎌で抱えられる次郎なら、巨大カマキリにとって丁度良いサイズかもしれない。

れない。

素直に食べられてやる道理など無い次郎は、二本の槍を振るって二つの鎌を弾きながら、カマキリが避けるよりも早く左真ん中の足に石槍を叩き付けた。

「つぁあっ」

巨大カマキリの足は、タイヤを殴ったような分厚い感触だった。鋭利さが足りずに斬り飛ばせず、一本を弾いただけでは巨大カマキリの姿勢すら崩れない。

次郎を目掛けて両鎌が振るい直され、さらに頭上からは大顎も迫ってくる。次郎は舌打ちと共に後ろへ飛び、両鎌と大顎を次々と弾き返した。

近接戦闘中の両者に援護の魔法を飛ばせない美也は、四方にいる大型犬サイズのカマキリたちを火弾と風弾で撃ち落としていた。

次郎の脅威とはならない通常カマキリであるが、戦闘時の足枷と成り得るために削ってくれているのだ。

そんな通常カマキリたちの一部が、後ろから手傷を負った巨大カマキリの巨大鎌に絡め取られた。

一体何をするのかと見守る次郎達の目の前で、巨大カマキリが通常カマキリを頭から貪り始めた。

すると捕食される通常カマキリから巨大カマキリに向かい、黒い光が流れていく。

その光によつて次郎に破壊された巨大カマキリの腹部が、そして美也に焼かれた表面が、次第に回復を始めた。

「嘘だろ。こいつ、回復しているのか？」

捕食行動で回復するという非常識さに、次郎は啞然とするばかりだった。

光魔法の回復でも、白い光が覆うと損傷した肉体が回復していく。その魔物版なだけかもしれないが、それらの光景が初見の身としては、相手方の理不尽さに言葉を失するしか無い。

固まった次郎の脇をすり抜けた四発目の火弾が、動きの止まった巨大カマキリの頭部に炸裂していく。失った左複眼までは回復し切れていなかったようで、巨大カマキリの頭部は炎に飲まれた。

「美也！？」

「今っ」

「お、おう」

美也の判断は素早く、また的確であった。

指摘された次郎は背中を押されるように、一匹目の身体が二匹目の壁となるような位置取りで素早く移動した。

二匹目のカマキリも次郎に追従したものの、レベルやステータスの差からか、次郎の方が早く一匹目の巨大カマキリに辿り着く。

そして頭部が炎に包まれている巨大カマキリに飛び掛かって、横薙ぎに石槍を振るった。

「くたばれっ」

タイヤを殴ったような鈍い手応えの中に、炭化した部分を破壊できた感触が伝わってくる。次郎は重点的にそこを叩きまくり、ついに巨大カマキリの頭部を狩り落とした。さらに追撃ばかりに石槍を振るって、頭部を遠くまで打ち飛ばす。

いかに体力の強い昆虫と言えど、頭部を失っては回復できないだろう。次郎は一匹目を確実に倒した確信を得た。

だが壁となっていた一匹目が崩れ落ちると同時に、殆ど無傷の二匹目が襲って来た。

巨大な両鎌が、左右から鋭く伸びてくる。

辛うじて追いついた石槍が鎌に合わせられたが、勢いが足りずに押し込められてしまった。そして次郎の脇腹に、鎌足が刺さった。

「ぐあぁっ」

硬い刺があら骨に当たり、思わずうめき声が漏れた。

骨が折れるほどでは無いが、石槍で防いでいなければそれも危うかった。攻撃に特化したカマキリは、レベル以上に高い攻撃力を持っているのかも知れない。

そんなギリギリと押し込められる力を、レベルで上回る次郎は力ずくで押し返す。

二本の石槍が押し出されると、広げられた鎌から解き放たれた次郎が地面に落ちた。

「次郎くんっ」

殆ど直立に近い状態で着地した次郎は、襲い掛かってきた巨大鎌を二本の石槍で弾き返した。

巨大鎌と石槍が撃ち合う度に、草原の黒い草が吹き散らされる。削れる石槍は魔法の力で補われるが、欠けた巨大鎌の刺は回復しない。

その間にも美也の魔法は着実に周囲の通常カマキリを倒し続け、ついに残るは巨大カマキリ一匹となった。

「ギギギギッ……」

巨力カマキリは羽を広げて威嚇しているが、レベル差を鑑みれば虚勢だった。荒々しく振るわれる鎌も、巨大な大顎も、当たらなければ問題ない。

これ以上の特殊な行動をされないうちに倒すべきだと考えた次郎

は、それまでの受け身から速攻に転じた。

まずは巨大な両鎌を徹底して弾きながら、懐深くに飛び込む。その間に側面から放たれた風魔法による援護砲撃が、左足の一本を弾く。

巨大カマキリの体勢が僅かに崩れたところへ、真っ直ぐに伸ばされた石槍が正面から突き立てられた。

「ぬあああつ」

胴体を突いた石槍は一度引かれ、頭上まで振りかぶられて叩き落とされる。さらに流れるような動作で再び引き戻され、今度は真横から薙ぎ払われた。

巨大カマキリは身体の一部を削られ、直後に襲い掛かってきた強力な火弾に焼かれ、傷口を拡大させられていった。

炭化した部位は、次郎の槍に耐え切れない。

二人の連携攻撃を受けた巨大カマキリは、身体の部位を次々と破壊され、次第に戦闘力を落としていった。

「ちつ、くそつ。しぶとい」

一方で巨大カマキリも、反撃を続けている。

右側の鎌を掴んだ次郎の左手は皮膚が破れ、血で滲んでいた。

左側の鎌を防いだ右腕も服が裂け、血で赤く染まっていた。

それでも次郎は攻撃の手を緩めなかった。羽を破り、足を潰し、巨大鎌を破壊し、複眼を割り、大顎を砕いて、容赦なく徹底的に戦闘力を奪っていく。

やがて動きが緩慢になり、ついには地に伏せた巨大カマキリの頭部に向かって、石槍が容赦なく叩き落とされた。

12話 想定外

地下一〇階の黒い草原に、二人の男女がへたり込んでいた。

男は両手と右脚から血を流し、仰向けになつて肩を上下させながら息をしている。

女は無傷だが、額から汗を流して疲労している様子が窺えた。

そんな二人の周囲には、軽トラック並に巨大なカマキリの死骸が二つと、大型犬並のカマキリの死骸が一〇個ほど転がっている。

次郎にとっては、最初に洞窟に足を踏み入れて以来の苦戦。そして美也にとっては、人生で初めての大激戦だった。

「ちょっと、予想外だったな」

実際には仰向けに寝転がるほどの傷は負っていないが、肉体的な損傷以上に精神的な疲労が大きかった。

超巨大カマキリは、次郎を傷つけるだけの力を持っていた。

一度危機感を覚えると、自在に動く巨大鎌、不気味に蠢く大顎、理解を越える触覚の動きの全てが、不気味に思えてくる。

今までゲーム感覚で居た次郎にとっては、冷水を浴びせられるに等しい体験だった。

「うん、危なかったね」

美也も頷き、油断をせずに巨大カマキリの死骸を焼き払い始めた。二人が相対した超巨大カマキリは、クロコダイルなどといった危険生物の枠を越えて、災害レベルの生物にあたるのではないだろうか。

軽トラック並の大きな上に鋭い鎌足と大顎を持ち、空を飛んで、

生物を捕食する。

そんな超巨大カマキリに対抗できそうな陸上生物が、次郎には思
い浮かばない。そんな超巨大カマキリたちが洞窟の外で卵を生めば、
地上は地獄と化すだろう。

「そうなたら生物災害だバイオハザードな。まだゾンビの方が可愛げがある」

ゾンビのどこに可愛げが感じられるのかは個人の感性次第である
が、想定される最悪の事態がゾンビ被害にも匹敵するとの主張に関
しては、決して誇張ではないだろう。

災害発生率が高い日本では、災害対策基本法や耐震基準などが整
備され、ハザードマップが策定され、避難所の指定や自助共助公助
の概念が周知され、防災対策に関しては世界でも高水準にある。

だが災害の枠を越えた場合、日本人の対応力は途端に世界でも低
い水準へと下がる。

それは日本が地理的に海という天然の防壁に守られてきたため、
ユーラシア大陸の国々に比べて、他者の悪意に対する免疫力が低い
事に由来する。

魔物を意図的に発生させる存在が居れば、常に受身な日本では後
手に回って積極的な対策が取れず、結論に至るまでに四方八方へ迷
走して散々たる被害を出すのは、目に見えている。

次郎はやれやれと首を振り、黒い草原から起き上がった。

今回の戦闘を振り返るに、洞窟の認識に関する反省点が出てきた。
苦戦したわけではないが、想定外に強い敵が出て、しかも退路を
断たれたのだ。

洞窟を隠して独占する事と引き替えに他からの情報やバックアッ
プが無い次郎たちは、危険に対して自分たちだけで備えなければな
らない。差し当たって必要なのは、危険を撥ね除けられる充分なレ
ベルだ。

次郎は黒焦げになった超巨大カマキリの体内から現われた黒い石の一つに手を伸ばす。そして美也も、残る一つに手を伸ばした。

「ボスを倒したら、帰り道が現れても良いと思うんだけど………
おっ、あつ、へっ？」

次郎が不満を漏らした時、空間内に理解を超える事象が発生した。床面を覆い尽くすように生えていた黒い草原が、急速に萎れ、風化していったのだ。

瞬く間に消えていく黒色草原と、反比例するように広がり出す灰色の床面。

どこまでも黒く照らし出されていた空間も、同様に灰色の世界へと変貌を遂げる。

次郎が即座に石槍を構え、美也も魔法を放てる状態で身構える中、地下一〇階の一角を占める広い空間は、先程までの特異性を喪失して見慣れた空間に姿を変えていった。

「一体何だったん……」

次郎は再び口を噤んだ。

突如として虚空に、真っ白な背景と黒い文字が浮かび上がったのだ。

チュートリアルダンジョン 総合評価S

攻略特典を選択してください。

- 一・能力加算S (BP+二四)
- 二・転移能力S (二回/一日)
- 三・収納能力S (四〇フィートコンテナ分)

次郎は文字を凝視しながら、初めてステータス画面を見た時のように呆然と固まった。

一年三カ月振りに頭が真っ白になった次郎を急き立てるかのよう
に、虚空に現れた文字が点滅を繰り返す。

だが選択以前に、突っ込みどころが多すぎた。

例えば、ダンジョンの前に表記されている「チュートリアル」の
文言。

次郎の拙い英語では、チュートリアルとは物事を行う前の練習的
な意味合いが強い単語だったはずだ。つまり一年三カ月を費やした
洞窟探索は、先方から見れば単なる練習期間だった事になる。

そのあまりに衝撃的な事実には、次郎は軽くめまいを覚えた。

常識的に考えて欲しい。ゲームでチュートリアルに一年三カ月を
費やす人間が、この世界のどこにいるのか。

それでも救いがあるのは、チュートリアルとはいえ攻略が済んだ
事だろう。

次郎の祖父が所有する山に出来た洞窟は、どうやら最奥まで踏破
し尽くしたらしかった。

少なくとも洞窟内に存在する魔物は、次郎と美也だけでも全種類
を駆除可能だと確認できたわけだ。

「さて、どうするか」

チュートリアルダンジョンという文言をまともに捉えれば、次の
ダンジョンがある事はほぼ疑いない。

すると次のダンジョンは、いつどこに出現するのか。そして内部
は、チュートリアルに比べてどれだけ難しくなるのか。さらに他の
ダンジョンの攻略状況は、どうなっているのか。

次郎の疑念は尽きなかったが、思考している内に魔物を焼き尽く
した美也が戻ってきた。

「次郎くんも、攻略特典は見えているよね？」

「ああ、総合評価はSらしい。美也は？」

「わたしも同じ。どういう基準だろうね」

ボーナスポイントらしき表示をBPと略している以上、アルファベットが出てくるのは今更である。

次郎が知る限りにおいて、アルファベットを使った評価では、上から「S」「A」「B」「C」「D」「E」の順に良かったはずである。

さらに評価が細かければ「SS」や「F」などが増えるだろうが、いずれにしても「S」が高い評価である事に違いは無い。

「多分だけど、攻略時間は評価の対象じゃなかったんだろうな」

次郎が中学生で無ければ、一年三カ月という攻略時間は短縮できただろう。

家族の誰かが攻略していれば、間違いなく次郎より早く一〇階まで辿り着いている。

「それならレベルとか、倒した魔物の種類とか、探索したエリア数かな」

「その辺りが妥当だろうな」

攻略者が同じパーティの二人では検証のしようがないため、頷くしかない。

それよりも次郎の目を引いたのは、三つの特典だった。

わざわざ特典を示した事から、示しただけで与えないと言う事は無いだろう。

二四レベル分の能力加算、一日二回の転移能力、四〇フィートコ

ンテナ分の収納能力。いずれも人類の常識では、規格外の極みだ。

「ところで美也、フィートコンテナってどんな単位だ」

日本から出る予定の無い次郎は、最初から英語を覚える気が無い。餅は餅屋。フィートを生み出した英国在住の叔母と従妹に英語を習った美也が居る以上、翻訳は丸投げの一択である。

「一フィートが約三〇cmだから、四〇フィートは一二m。コンテナの幅と高さは約八フィートで二・四mだから、大まかに七〇立方メートルかな。一リットルのペットボトルが、七万本分くらいになるよ」

「うん、全然分かん」

ペットボトル七万本を同時に見た事がある人は、なかなか居ないだろう。

美也は例えを身近なものに改めた。

「次郎君の家に、一〇畳と八畳の二間続きの和室があるよね。その二つの部屋の襖を取り外して繋げたら、四〇フィートコンテナと同じくらいの体積になるよ」

「おお、分かり易い。理解できた」

謎が解けた次郎は晴れやかに頷いた。

より正確を期すなら、四〇フィートコンテナは一七畳弱だ。しかし相手がそこまで細かい数値を求めている事を、付き合いの長い美也は口にされずとも分かっていた。

「収納能力と二四レベル分の能力加算のどちらも凄いけど、転移能力は捨てがたいな」

「そうだね。ここまで片道七時間だから、今後を考えるなら転移は必須かも」

探索における最大の障害が、探索時間だった。とりわけ女子の美也に関しては、帰宅時間が遅くならないように苦慮してきた。

もしも自分の部屋と探索地点を往復できるなら、一〇階までの踏破に一年三カ月もの年月を費やす事は無かっただろう。

転移能力がボス戦にまで有用なのは不明だが、状況が不利になれば転移でいつでも撤退できると言う点も大いに魅力だ。

それに美也が指摘した通り、次のダンジョンがあるならば、チュートリアルダンジョンに比べてより一層の時間が掛かるのは火を見るより明らかだ。

次郎は決断を下した。

「二人とも転移を取るべきだな」

「もしかしたら、一人が取れば一緒に転移できるかもしれないけど」

美也の指摘に次郎は固まった。

虚空には一日二回とあるが、どれだけの重量を共に転移させられるのか、またどれだけの距離を移動できるのかが分からない。つまりゲーム基準で考えて、パーティ単位で一気に移動できる可能性も有り得る。

その条件次第では、次郎と美也が転移と別の能力をバラバラに取った方が良くかもしれない。能力が高ければボスが出ても切り抜け易いし、収納なら様々な物を持ち運びできる。

探索の実態を顧みた次郎は、やがて首を横に振った。

「外に出やすいし、休憩や昼食に戻れるから、二人とも転移で回数を増やした方が良くと思う。能力加算はレベルを上げれば済むし、

洞窟には持つていく物も、持ち帰る物もあまり無いからな」

「結局、宝箱は無かったよね」

次郎は自らの感情を表すかのように、ガツクリと項垂れてみせた。ここで攻略したのなら、想定していた一階以降は存在しないことになる。つまり次郎が期待していた特殊な武器やアイテム、宝石類も存在しないということだ。

それでは洞窟内で収入を得られない。

ボスを倒す際に右足の靴が破られたように、戦闘による被服の損失は時折発生する。

次郎は、好き好んで潜っている自身は兎も角として、それに付き合せている美也にはあまり金銭的な負担を掛けたくないという思いがあった。

「美也。今度、服とかプレゼントするな」

「……突然どうしたの？」

「いや、宝が無かった代わり」

突然プレゼントをくれると言われた美也は困惑した。

もし男性から気落ちしながらプレゼントをくれると言われたら、彼女でなくとも大抵の女性は困惑するだろう。

それでも長年の付き合いから次郎の気持ちを察した美也は、形を取り繕おうと助け舟を出した。

「わたしの誕生日、九月一日だよ」

「ちょうど夏休み明けだからなあ。洞窟も攻略したし、夏休み中にショッピングモールにでも行くか」

「久しぶりに洞窟以外でのデートだね」

暗かった雰囲気、流されていった。

その雰囲気に取り直した次郎は、目前の問題を処理すべく、虚空に手を伸ばした。

伸ばされた手が転移能力に触れるや否や、選択肢が消滅して、代わりにステータスが現われる。

堂下次郎 レベル三三 B P O 転移 S

体力六 魔力六 攻撃五 防御五 敏捷五

火一 風一 水一 土六 光一 闇一

次郎は虚空に現われたステータスが完全に消え失せるまで、転移 S と描かれた部分を何度も見返した。

一日二回の転移能力や、四〇フィートコンテナ分の収納能力は、どちらも異常な能力だ。

身体能力を跳ね上げるレベルや、現代の医療技術を飛び越えた回復魔法も異常だが、それらに比べても全く遜色がない。

洞窟が隠されている理由について、次郎は従来の認識を改めた。

仮に悪意を持つ者が攻略特典を手にした場合、強盗や殺人のし放題となる。

銀行や現金輸送車を襲撃して収納能力で奪い、転移能力で逃げればどうなるのか。もしくは死体を収納能力で隠し、転移能力で太平洋沖にでも飛ばせばどうなるのか。果ては冤罪を着せたい相手の家にも死体を飛ばせば、嫌疑をかけ放題では無いか。

これでは行政が隠すのも無理はないだろう。どうりで発見次第、すぐに警察署へ届けるようにと繰り返すわけである。

「わたしも転移を選んだ……よ……」

美也が声を発した直後、灰色だった景色が一瞬で杉山に変わった。

「美也、もしかして転移を使ったのか？」

突然目の前に現れたのは、二人が通い続けて見慣れた洞窟の入り口手前だった。

記憶との相違点は一つ、洞窟の入り口が消えていた事。

故に敢えて確認するも、次郎は美也が転移を使つたわけでは無いだろうと確信していた。そして答えを聞くまでも無く、洞窟の入り口があつたはずの場所を確認する。

はたしてその場には、一年と四カ月前にはあつたであろう山肌が、何事も無かつたかのように山の一部としてベツタリと地表に張り付いていた。

「使つてないよ」

次郎の確認から僅かに遅れて、戸惑うような返事が聞こえてきた。

自らが洞窟について無理解であることを、次郎は十分に承知しているはずだった。

彼が洞窟について理解していた事は、以下の通りである。

・最初の発見例は二〇四〇年五月四日で、西日本大震災の影響だと報道された。

・それらは全都道府県の僻地で一〇三カ所ずつ発見され、未発見地も複数ある。

・外国での発見例は、少なくとも報道には無い。

・各階層には灰色の半透明の液体が現われ、死体やゴミなどを溶かし尽くす。

・各階層には地球に実在する生物も巨大化して生息している。

・巨大生物は各階層に一種類のみで、階層を越えることはない。

・巨大生物は体内に六色の石を持ち、倒した人間が石に触れれば灰色化する。

・六色の石に一定数触った人間は、レベルアップする。

・レベルアップすると、身体能力などが上がる。

・レベルアップの際に得られるBPで、能力や魔法の才能を任意に得られる。

そして今回、次郎達が潜っていた洞窟が地下一〇階までのチュートリアルダンジョンである事や、最奥にはボスらしき存在が居る事、攻略に際して何らかの評価に基づいた特典が与えられる事、攻略の済んだダンジョンが消え失せる事なども新たに確認できた。

攻略に際して、かなり高かった「評価の基準」については、攻略時のレベルや到達エリア、討伐した魔物の種類や数、攻略人数などが関係しているのでは無いかと思われる。少なくとも、良くなかったはずの攻略時間は関係しないのだろう。

なおこれらの情報は「たった一つの洞窟における、僅か二人の検証例」に基づく。例えばステータスは日本語表記だが、母国語の異なる人間がどうなるのかも不明である。

「分からない事だらけだな」

杉山から洞窟が消えて早七カ月、二〇四四年の桜が見頃を迎えていた。

次郎が中学校を卒業するまで、杉山の中に新たなダンジョンが出現する兆候は見られなかった。そんな洞窟に行けなくなった空白の時間帯は、主に勉強に振り向けられた。

彼の思考を上手く誘導した美也に功績の大半が帰すのは明らかだが、次郎の成績は九月から順調に上がり続け、以前に口走っていたクラスで三番を達成し、市立七村高等学校への合格も呆気なく果たしている。

二人の勉強会は高校合格後も続いており、次郎が親戚から貰った高校の教科書も、美也の手によって徐々に先へと進められていた。このままでは、真つ当な高校生になってしまう。

次郎は性格と行動の不一致を危惧したが、実際に出来る事はなかった。

全国数十カ所の封鎖された洞窟に赴けば、入り口は壁などを作られて封鎖されており、二四時間警備と監視カメラに睨み付けられ、周辺を歩くだけでも職務質問が待っていることだろう。

次郎の家の杉山に洞窟があつた証拠は完全に消え失せたが、レベルや魔法、有り得ない身体能力が残っているために、巨大生物を倒したか否かの確認はおそらく可能だ。目を付けられて調べられた場合、発覚する危険は少ない。

もしも一〇階のボスを攻略するまでチュートリアルダンジョンが消えないならば、レベルや魔法を得た事はあまり問題にはならないだろう。いくつか未攻略のダンジョンを抱えておけば、レベルを上げさせたい人間をいつでも自由に上げさせる事が出来る。

問題になりそうなのは、洞窟を消す事と引き替えに得られた攻略特典の方である。

「転移能力は、ちょっと拙いかもね」

美也の指摘は、よく考えれば至極当然だろう。

攻略特典Sで得られた一日二回の転移能力は、移動時間が一瞬で、重量四〇〇kgまでなら生物すら同伴可能だった。移動距離は思い描ける場所なら殆ど無制限で、少なくとも美也は次郎を連れて日本とイギリスを往復できた。

一度行っただけの場所でも、撮影して後日しっかりと見返せば問題なく跳べる。

二人が取らなかった収納能力Sも、特典として転移能力に釣り合うと考えれば、わりと滅茶苦茶なのだろう。例えば人間すらも収納できるとか。

そんな人間が、果たして国家に放置されるだろうか。

「よし、とりあえずひっそりと生きよう」

公権力に逆らってまでダンジョンに潜る事を、次郎はアッサリと諦めた。

高校に入ってお小遣いも増えだし、転移によって活動範囲も大きく広がっている。

しかしチュートリアルダンジョンは攻略済みであり、これ以上潜ってもレベルを上げる以外に得られる物はない。それに他所の木のブドウは、きっと酸っぱいのだ。

「ひっそりって、普通の高校生活のこと？」

「そうそう。チュートリアルじゃないダンジョンが現われるまでは、貝のように高校という大海の底で静かに暮らしておく」

「浜辺に打ち上がるのはいつかな？」

「嵐がいつ来るかなんて、単なる貝が知るはずもないさ。でも普通に考えれば、一定期間が過ぎた後かな」

次郎には、遠からず次のダンジョンが現われる予感がしていた。根拠は、攻略特典を選ぶ際に出てきた「チュートリアル」という文字だ。

普通はチュートリアルを受けた者が次の段階に進むのであって、だとすれば次郎の寿命が尽きるまで出てこないと言う事は有り得ないだろう。

「まあ、しばらくは普通の高校生活で」

「それが良いかもね」

二人が見渡せば、真新しい制服に身を包んだクラスメイトが教室に溢れ返っていた。

市立七村高等学校は、次郎達の所属する普通科が四クラスで合計一二〇人いる他、ビジネス科と生活福祉科が各二クラスで計一二〇人、農業科と海洋科が各二〇名で計四〇人と多様なコースで同学年が二八〇人もいる。

普通科の二〜四組は、総合成績上位、理系上位、文系上位、合格ラインの四クラスに分けられている。

ビジネス科は、五組が経済系の大学・短大・専門学校へ進学し、六組が地元企業へ就職する。

生活福祉科は七組が福祉系の大学・短大・専門学校へ進んで福祉系の資格を取得し、八組が高卒で就職してヘルパーなどの資格を取る。

農業科と海洋科は家業を継ぐ男子が大半だ。

同学年が僅か一八人だった三山中学の一五倍以上も同級生が居るが、いくら山中県の田舎市とはいえ、市内で唯一の高校ならばそれなりに人も集まるらしい。

三山中学から七村高校には一二人受かっており、その中には悪友の中川仁大と北村亮介、悪戯でチョコを入れた相山達弘と大笑いした須藤由良子、越後屋輝星の姿もあった。

「どうしたジロー、黄昏時にはまだ早いぞ」

「いや、地上の太陽が眩しくてな」

「そうか黄色い太陽が見えるのか。ジローえろっ！」

七村高校の普通科でクラスを分けられる基準は、一組が総合成績の高かった者、二組が理系の成績が高かった者、三組が文系の成績が高かった者、四組がそれ以外の者だそうだ。学力毎に生徒を分けるのは、学校単位であろうとクラス単位であろうと変わらない。

入学生代表の挨拶まで行った美也は言うまでも無いが、次郎や越後屋も一組に入った。

そして次郎が驚愕しているのは、あまり成績が良くなかった中川や北村まで同じ一組に居る事だ。

「というかキタムー、お前はどやって一組に入ったんだよ」

「おー、よく分からんけど、入試の問題が異様に解けた」

「マジか。受験勉強とは一体何だったのか」

洞窟が消えてから半年ほど真面目に勉強した次郎としては、一回きりの試験の理不尽さに苦言を呈したいところだ。

「そういえば七村高校は、推薦入試もあったよなあ」

「スポーツ推薦の事か。それなりの段持ちか、県大会で入賞した奴が対象だったろ。ジローの兄貴ならいけるんじゃない？」

結果を出した北村は他人事のように宣い、次郎は次郎も渋々無関係だと認めた。

「まあ良いけどな。また三年間よろしく」

「おう。小学一年以来、一二年間クラスメイトだな」

二〇四四年四月八日、金曜日。

次郎達は田舎でひっそりと、ごく平凡な高校生活をスタートさせた。

それは日本政府が洞窟を隠していればこそ訪れた平穏な日常だ。

大多数の国民に隠された水面下を知るごく一部の中は、やがて訪れるであろうチュートリアル次のダンジョンに纏わる騒動に危機感を抱く者も居る。だが彼らにしても、情報統制の決壊が如何なる影響を及ぼすのか、正確には予見できていない。

そんな決壊が訪れるまでのごく僅かにして、極めて貴重な時間を、次郎と美也は存分に満喫した。

13話 部活選択

「次郎くん、部活動は何にする？」

真新しくてシックなブレザーに身を包んだ美也が部活案内の冊子を見せてきたのは、二日間の新入生オリエンテーションが終わった水曜日だった。

オリエンテーションで行われた部活案内は一通り聞いたものの、次郎もどこの部活に入るのかは決めていない。

七村高校には運動部一五種類と、文化部一〇種類の部活動がある。全校生徒六〇名足らずであった三山中学の出身者として、推薦入学者以外は入部を強制されないにも係わらずこれほどの部活動が維持できている状況を驚愕せざるを得ない。

強制されれば嫌になるが、強制されなければ関心を持つ。

そんな北風と太陽に翻弄される旅人が如き次郎は、案内用紙の身を覗き込んだ。

「一五の運動部は全て却下として、文化部は一〇種類が」

四月の中旬までは体験入部が出来るので、部活を決めていない新入生の多くはこれから行く先を決める事になる。

中学は美也と共に陸上部だったが、洞窟でレベル上げをした結果としてオリンピック選手どころか、チーターや渡り鳥と競争しても余裕で勝ちかねない今となつては、陸上部に入る事が出来ない。

一時的には、非常に気分が良くなるだろう。どれだけ手を抜いても部活のエース扱いされ、県や全国でも代表選手となるのは確実だ。後輩からモテモテになるかも知れない。

しかし、そんな身体能力の特異な者がノコノコと世に現われるの

を、新たな洞窟を探している政府は手ぐすねを引いて待ち構えているはずだ。

それは陸上以外も同様である。

運動部は、野球、陸上競技、水泳、卓球、バスケット、テニス、ソフトテニス、ハンドボール、サッカー、バドミントン、柔道、剣道、弓道、自転車とあるが、そのいずれも圧倒的な身体能力で無双してしまうのは目に見えている。

目の前に餌があるからと言って、わざわざ檻の中に飛び込むのは、頭の緩い野生動物までである。

二人が入部をするなら、身体能力とは無関係な文化系しか選択の余地がない。

その選択の参考となる案内の冊子をパラパラと捲れば、全ての部活が印刷された写真付きで簡単に紹介されていた。

文化部は、吹奏楽、美術、書道、写真、放送新聞、図書文芸、茶華道、JRC、ESS、コンピュータ経理とある。

このうち経験者が圧倒的に有利そうなのが吹奏楽と書道と茶華道で、才能を問われそうなのが美術、マスコミ系が放送新聞、ビジネス科向けの部活であることが明白なのがコンピュータ経理だ。それらは次郎達にはあまり向いていない。

横文字のJRCは国際交流で、ESSは英会話。いずれも英語に堪能な美也が即戦力として大活躍するだろうが、英語が好きではない次郎としては気が進まない。

逆に写真は、お金が掛かりそうで美也には勧められない。

「図書文芸にでも行くか」

次郎は消去法で見学先を選んだ。

とはいえ、元々ネット小説を読むのは好きである。

美也とは縁が切れた美也の実兄である恭也からも、お勧めネット

小説のデータを散々貰っていた。そして今でも美也には内緒で、たまにメールでURLを送って貰っている。もっとも受験勉強のおかげで、読んでいないデータが山のように溜まっているが。

そのような理由から、一応見ておこうと思うくらいには部活に関心があった。

「……………図書文芸って、昔お兄ちゃんが所属していた部活だったかも」

「恭也さんも七村高校だったな。それなら止めておくか？」

「ううん、別に良いよ。あの人達が所属していたわけじゃないし」
「まあな」

美也の言う「あの人達」とは、美也に骨髓移植のドナーを始めとして様々な事を強要してきた元両親の事である。元母親が入院中の美也を病室で殴った事を最後の引き金に、美也と祖母が起こした裁判で親権喪失にまで至っている。

若干不機嫌になった美也の手を強引に引き、次郎は放課後の廊下を図書室へと歩み出した。

生徒数が三山中学の一五倍を超える七村高校では、教室にもグラウンドにも、課外活動に勤しむ生徒達の姿が多数見受けられる。

洞窟に籠もっていた頃はすぐに帰宅しており、中学三年の二学期以降は受験勉強に偏っていたため、このような光景自体も久しぶりであった。

やがて暫く歩くうちに、美也の機嫌も次第に直ってきたらしく、図書文芸部について話を振られる。

「図書文芸部って、図書部と文芸部が合併したんだって」

「そっなのか？」

「放送新聞部も合併したそうだけど、合併した部活には両方の活動

があるみたい」

「文芸か。具体的には何をするんだ？」

「その先は部室で説明しよう。ようこそ一年生諸君」

背後から声を掛けられた二人が振り返ると、そこにはブレザーに三年生の学年章を付けた長身の男性が立っていた。

細くて鋭い目つきに、無愛想な表情。男子生徒としては生活指導が入るか否かのギリギリを攻めたようなミディアムショートの髪型に、低くて渋い声であった。

良く言って孤高の狼、悪く見れば不良っぽい。そんな先輩に軽く背中を押され、二人は図書室へと招き入れられた。

「ジョー、獲物が掛かった」

図書室に入つての第一声が、獲物の捕獲報告である。

彼が「何組だ？」などと問うたら、字面ではクラスでは無くヤクザの所属先を連想する新入生すらいるかもしれない。

これが一人で文芸部を見学に来たか弱い女子生徒ならば、連れ込まれた時点で泣き出すのではないだろうか。

次郎と美也は呆気にとられたが、二人の疑問は奥から出てきた穏和そうな別の三年生が解消してくれた。

「綾さん、言い方。二人ともごめん、見学の新入生かい」

「あつ、はい。そうです」

「図書文芸部はここで合っていますか？」

「ここは図書文芸部で間違いないね。もしかして君たちは、中学校が同じだったのかな」

「そうです」

「それは良いね。実は俺たちも中学が同じだったんだ。はじめまして、副部長の定塚だよ。それでそっちの無愛想な男が、部長の綾村」

「見学の堂下次郎です」

「同じく見学の地家美也です」

地家という苗字に定塚副部長は一瞬ピンと来たような表情を浮かべたが、彼は問い質す気は無いらしく、二人の自己紹介をサラリと聞き流した。

愛想が良くて、コミュニケーション能力が高く、咄嗟の判断力でありそうな定塚副部長の様子に、次郎は部長と副部長の役職が逆だった方が良かったのでは無いかと考えた。

定塚副部長は二人に椅子を勧めると、予め用意していたらしい資料を机に並べていく。

「図書文芸部は、図書部と文芸部が合併して活動内容が分かり難いからね。図書部は、図書室に入れる本の推薦文作成や図書広報誌の発行、おまけで図書貸し出しカードの発行と管理。文芸部は、その人の力量や嗜好に沿った創作が主になるかな」

定塚副部長が最初に並べたのは、図書部の活動の一環である図書室の書籍推薦リストと、図書広報誌らしき簡単な冊子だった。

広報誌の大半は書籍案内などで、本のあらすじが部員の名前で載っている。

その次に、文芸部が製作した作品が並べられた。絵本、本の栞、そして随分と手の込んだ同人誌のような文芸部誌も出てくる。

同人誌の表紙は背景までキツチリと書き込まれた線画で、オリジナルキャラクターと思わしき大正時代の和服を着た女性が馬車に乗り、両手で本を抱えながら、車窓から見える帝都の街並みを見ていた。

ページを捲ればびっしりと文字で埋められており、貧しい家から支援を受けて東京府女子師範学校に入った女性が、希望する教職の道と、両親に期待される支援者子息との結婚の間で葛藤する様が描

かれていた。

「うわ、なんこれ。レベル高っ」

「ああ、それは三月に卒業した先輩の一人が趣味で作ったんだ。同人誌即売会って知ってるかな。そういう所に普通に出る人達だったから、わりと何でも出来たんだ。普通は無理だよ。部長の綾村は少し描けるけど、僕はナローとかに小説を投稿する方が好きかな」

不良そうな綾村部長が絵を描けると聞いた次郎は、ギャップによる衝撃で思わず部長への評価を改めた。

「俺はナローとかを読むのが好きです」

「わたしも投稿経験は何回ありますけど、読む方が好きです」

「部活は好きな事をするのが良いと思うよ。幸いにして図書文芸部は恵まれていてね。図書室を使い放題の上、図書室から繋がった部屋が部室になっている。先輩達から寄贈されたパソコンもお絵かきソフト付きであるし、ネットにも繋がっている。もちろん図書室だから空調も完璧だ」

「おおー」

「君たちの他にも三人ほど新入生が入る予定があるからね。部活は五人以上所属していないと廃部になるけど、少なくとも君たちの代は安泰だよ」

「それは凄い。って、部員は少ないんですか？」

次郎に問われた定塚副部長は、綾村部長に視線で合図を送った。すると先程まで沈黙を守っていた綾村部長が、重々しく口を開いた。

「現在の部員は俺とジョー、二年の女子で合計三人だ」
「へっ？」

「しかも二年の女子は、三月に卒業した先輩達が引退した後から一度も部活に来ていない。今年五人確保できなければ、廃部も有り得る」

「なんでそんな事に」

「去年は運悪く部員獲得に失敗した上に、二年だった俺たちが男子だけで、一年の女子が来づらくなった」

「図書文芸部は、中学時代に部活をやっていた人が引き続き入るような部活じゃないからね。環境は恵まれているけど、僕達のプレゼンが下手だった。それで今年こそは、何とか部員を確保したいわけさ」

次郎はプレゼンよりも、綾村部長の愛想の無さに原因を求めるべきではないかと考えた。

長身長髪で目つきの悪い男が背後から現れたら、普通の下級生は怯える。

次郎達が平然としているのは、圧倒的なレベル差から物理的な脅威が無いと確信しているからに過ぎない。

これが次郎達以外であれば、この状態で部活に入るなど考えられないだろう。

「一年に一回の図書広報誌以外はノルマも無いし、ぜひ入ってくれないかな」

部活の意外な危機に次郎は戸惑ったが、元々消去法で問題なく入れそうな部活はここ以外に無かった。

入部しないのも選択肢の一つではあるが、保守的な日本人の一人である次郎としては、部活未経験があまり好ましくないのではないかと考える。卒業後の進学だろうと就職だろうと、何かしらに所属していた方が良いはずだ。

入部にあたってのデメリットが特に見当たらない事から、次郎は

一先ず頷いておく事にした。

「前向きに検討しますので、入部届を貰っても良いですか」
「もちろん」

定塚は愛想の良い笑みで、図書文芸部のハンコがしっかりと押された入部届を手渡した。それを受け取った次郎はすぐに鞆に仕舞い込むと、図書室をぐるりと見渡した。

図書室自体は、普通の教室が五つ分くらい入る広さだろうか。入り口の先にあるのは図書管理室で、窓口で本の貸し出しを行い、奥ではその他の業務をしているようだ。部活紹介にも載っていた定年間近と思わしき顧問の女性教諭が「我が城」とばかりに静かに陣取っており、新人生勧誘には無関心そうに何かの書類を覗き込んでいる。

次郎たちが座っている読書コーナーは教室一つ分ほどの広さで、管理室に向かうように教室形式で机とイスが並べられている。

そして本棚が置かれているスペースは、図書室で最大の広さだ。ざっと見渡せば、高校の図書室らしく各国歴史系、社会科学系、自然科学系、産業技術系、倫理・哲学系、技術・工学系、農林水産業系、美術・芸術系、各国言語系、各国文学系、その他の書籍と学問に特化して揃っている。

一部にはぶ厚い図鑑や、市の歴史を記した古めかしい本なども見受けられる。図書室にある全ての本を読み切れるのは、顧問の女性教諭以外に居ないだろう。

そして図書室の奥には、先ほど定塚副部長が話していた部室らしき部屋が見えた。

「さつき話に出ていた、図書室と繋がっている部室って見学できますか？」

「いいよ。元々は視聴覚室だったから防音されているし、一クラス

分が入れるくらいには広いよ」

椅子から立ち上がった定塚副部長は次郎達を促し、奥の部室へと招き入れた。

部室は元々視聴覚室だったと言うだけあって、教室一つ分の広さがある。

部室内には六つのテーブルの島があり、そのうち四つではネットやレーザープリンタ、多機能プリンタに繋がったパソコンが六台ずつ合計二四台置かれている。残る二つは何も置かれておらず、広い作業台になっていた。

外窓と反対側の壁には棚が並んでおり、過去の活用内容と思わしき製作物が収納されている。また部室の後ろ側にはロッカーが一六台あり、部長や副部長の名前がテプラで印字されたマグネットシートが貼ってある事から、個人が一台ずつ使っているようだった。

部室の正面側には天井から引き出すタイプのスクリーンが収納されており、天井には投影機があつて、教卓がある側には再生機器も設置されている。

実に贅沢で、とても部室とは思えないほど恵まれた環境だ。

そんな部室の一角に、一年生の学年章を付けた三人の女子生徒が固まって座っていた。その中でショートヘアの小柄な子が、大きく手を振り始める。

「あー、新入生代表の挨拶をした地家さんじゃない。それと、ずっと一緒に居る男子。ボクは同じクラスの綾村絵理だよ。部活見学？」

「あ、そうです。こんにちは」

「堂下次郎だ。よろしく」

「これで五人揃ったね。お兄ちゃん、奢ってくれる約束忘れないでよー！」

全身から活発さを迸らせる彼女は、定塚副部長が話した入部予定の新生たちによつた。付け加えるなら、綾村部長の妹でもあるらしい。

そんな彼女の中では、次郎達の入部は確定しているよつた。

もつとも次郎は、その発言を敢えて否定しようとは思わなかつた。この部室は全部活動の中で、おそらく最良の部類に入る部屋だ。もしも新生を勧誘する時に部長が欠席していたら、部室紹介だけでも部員は増えるだらう。

さらに先に座つていた三人のうち部長の妹はかなり積極的で、図書部のノルマも率先して達成しそつた。同学年なら、いづれ部長も任せてしまえる。なるべくフリーハンドでありたい次郎にとって、彼女の存在も都合が良かった。

結果として次郎と美也は、なし崩しに図書文芸部へ入部する事となつた。

14話 激震

二〇四四年五月四日、午後。

世間はゴールデンウィークの真っ最中であり、人々は今日も行樂地を賑わせている。

とはいえ今年は五月三日が火曜日で、五日が木曜日だ。

前後に平日の月曜日と金曜日を挟んだゴールデンウィークは三日しか連休にならず、民間の人達は月曜日や金曜日に休みを取って大連休にしようとはしないので、若干盛り上がり欠けている。

（転移を使えば思い描ける場所に跳べるけど、金が無いからな）

高校生になった次郎のお小遣いは、なんと月一万円に上がった。

お小遣い相場から考えると平均より若干高めだが、次郎の祖父は大地主にして会社の会長、父は社長、母は父よりも大きな会社の元社長令嬢でオリympicメダリスト。一般家庭に比べれば、明らかに裕福だ。

次郎の父は「高校生には多いのでは無いか」と若干渋ったが、次郎の成績が向上した事や、それを贐した美也との付き合いを鑑みた母が「家庭教師代はいくらかしら？」と言った事で呆気なく納得して、今の金額に落ち着いた。

但し、美也に少しは還元しなさいとも言われたが。

そのため高校合格祝いに奢ると次郎が言い、転移を使った美也のロンドン観光名所巡りに付き合った結果、財布の中身がスッカラカンとなった。

さらに同じ中学から進学した中川や北村と新しいクラスメイト、そして同じ部活となった綾村絵理たち三人とも遊び回ったせいで、緊急用のお年玉にまで手を付ける有様となってしまうた。

無計画、ここに極まれり。最早、バイトをしようかと悩むほどの財政難である。

おかげでゴールデンウィーク中に遊び回る軍資金など残っていない。

そして金を使わない行動を選択した結果が、入院したとメールに書いていた恭也のお見舞いである。

「動機がなんともアレだけど、お見舞い有り難う」

微妙に嬉しく無さそうな愛想笑いをしてみせたのは、美也の元兄である地家恭也だ。

次郎にとっては幼馴染のお兄さんであり、お勧め小説のアドレスをメールで送って貰っている相手にして、読んでいる投稿小説のお気に入り作家の一人でもある。

彼は一年半前に白血病を発症し、骨髄移植を経て療養しながら、通信制の高校へ再入学した。今は実年齢より一年遅れの高校二年生だが、最終的には奨学金を貰っての大学卒業を目指して頑張っている。

学力に関しては、二年前に七村高校で新入生代表の挨拶をするくらい頭が良かったので、本来ならば地元国立くらいは問題が無い。

問題は、病気の方である。

幸いにして白血病は再発していないが、移植片対宿主病という移植を受けた患者特有の病気を発症したらしい。

さらに恭也は、原因不明の熱発も続発するようになった。

家族では無い次郎は医者から話を聞いたわけでは無いが、体調不良については体が弱った事と精神的な理由が合わさった結果だろうと考えている。

妹に骨髄提供を強要する事になってしまったことや、親権を剥奪されて祖母から経済援助も打ち切られた母親のヒステリー、両親の不仲、そして自身の白血病や副作用、高校中退など、恭也が精神的

に参る理由には事欠かない。

むしろここまでの逆境に陥って、精神的に正常であるほうが高校生としては異常だ。

そんな恭也の事情は既に厚生労働省や学会に報告され、マスコミも知るところだ。

この先、恭也が白血病を再発するなり、別の理由で死亡するなりすれば、病院側は「嫌がる女子中学生を無理矢理ドナーにして移植を行ったにも係わらず、患者を死なせた病院」として今度こそ全国報道され、社会問題化する。

そうなれば関係者の医療者としての社会的地位や名声は地に落ち、過去の問題事例として医療系の研修や教育で永遠と取り上げられ続ける事になる。

それを恐れる県立中央病院としては、恭也にはなんとしても順調に回復してもらうべく、総力を挙げての特別な診療体制を構築するようになった。

恭也が治ってしまえば、法益衡量説によつて『移植強要による被害』を『救命』が上回るため、問題が複雑になつてマスコミは病院を悪とするような極端な報道を避ける。少なくとも五年生存率として数値に乘せられる間は生きて貰いたい。

そのため恭也が治るように少しでも療養環境を良くしようという、病院側の涙ぐましい努力の一端が見て取れた。

「今回も単なる発熱のようだけだね。『もう帰っても大丈夫ですよ、ご家族が来られる時間が分かったら教えてください』と言われたよ。退院は夕食後くらいになるかな」

「深刻な病気じゃなくて良かったですね。熱発の頻度は多いみたいですけど」

「身体の免疫力が落ちたまま低空飛行中だよ。あまり無理は出来ないね」

次郎は不思議な力によって用意されたフカフカのソファに身体を沈めながら頷いた。

恭也が入院した今回の病室だが、無料の大部屋が空いていないという理由で、減免扱いで特別個室が無料で用意されている。

特別個室には応接室や大型テレビがあり、キッチンや冷蔵庫が付いて、トイレやシャワーのみならず風呂まである。電動ベッドや家具類も落ち着いた色合いの高級品で、病院の高層階の角部屋から見える景色も綺麗だ。

そんな一体どこの大企業の社長室だろうかと目を疑うような贅沢部屋に、主治医や選抜された気の合う看護師、管理栄養士などのスタッフが付いてきて、最新の医学的知見に基づいた健康管理をしてくれる。

しかし不思議な事に、次郎が歩いてきた病棟の大部屋には空きベッドが複数あった。

おそらく外部が指摘しても、恭也が入院したタイミングだけ大部屋が何らかの理由で埋まっていたという事にするのだろうか。事情が事情とは言え、豪儀な話だった。

「そつえば、美也と二人で図書文芸部に入りました」

「へえ、懐かしいね。部活はどうだい？」

「ちよつと恐めの綾村部長と、それをいなす定塚副部長を筆頭に、まあまあ程々にやっています。というかあの元視聴覚室の部室、結構贅沢ですね」

「随分と懐かしい名前だ。部室はよく覚えているよ。パソコンは一人一台使えたけど、使いたいソフトがバラバラに入っているからと先輩の一人が三台まとめて確保してね。部員同士で言い合いになった時に顧問の大婆に怒られていたな」

「大林先生って、怒るんですか。というか、部活に口を出すんですか？」

「動かざること山の如し。だけど、時々噴火するから」
「やべえ」

それは次郎が、富士山の噴火を連想した時に起こった。
最初は不意にゾクゾクと、全身に言い知れぬ悪寒が走った。
外側から肌寒い冷気を感じるのではなく、内側から生物的な本能
が生命の危機を知らせるかのような、収まる事の無い警鐘が身体
の中を駆け巡る。

「どうしたんだい？」

次郎の様子が急におかしくなったのを見咎めた恭也が心配そうに
問うた。

ごく自然体のまま平然とする恭也を見返した次郎は、現在の危機
感は二人に共通のものではないと認識した。
その直後、大気に重い振動が響き渡った。

「……っ!？」

強烈な振動に反響するかのように打ち震えた次郎は、休憩中のダ
ンジョンで急に魔物から襲われたかのように、慌てて立ち上がった。
流石に土魔法の武器は生み出さなかったが、拳は無意識に固く握り
しめている。

そして警戒の視線を四方へと廻らせたところで、窓の外にあるソ
レが見えた。

地の底から天空に向かって爆発的に吹き上がる、噴煙が如き巨大
な土煙。

その中心地らしき駅と周辺は、空中に舞った土色の塵に覆われて
殆ど見えなくなっている。

「じ、事故かい？」

恭也の入院している山中県立中央病院は、海まで数キロの平地の川沿いに建っている。近くには県庁もあり、噴煙が吹き上がる地形ではない。

恭也が口にした事故やテロといった可能性も、おそらく無いだろう。

中心地の山中駅周辺では大規模な工事など行われていないし、電車同士が正面衝突してもこれほど巨大な土煙はおそらく発生しない。それにテロが起こるのであれば、四七都道府県で人口下位の山中県ではなく、もっと都会の方のはずだ。

では、あれは一体何なのか。次郎は土煙を目撃している人々の中で、その正体に最も早く気付いた人間の一人だっただろう。

次郎は非日常的な現象が発生すれば、まず真っ先にダンジョン関連を疑う。

ダンジョンを発生させた相手であれば、土煙を上げるくらい容易く出来る。それに魔物を生み出すからには、日本の法律や倫理など最初から全く意に介していない。

そしてダンジョンを出現させた相手には、ダンジョンを出現させた目的があるはずだ。少なくともチュートリアルダンジョンに関しては、次郎達日本人に潜って練習してもらいたかったからこそ、その名前になったのだと予想できる。

しかし日本は、次郎の家のように発見されなかった一部例外を除いて、残らず封鎖した上で隠蔽してしまった。そんな日本の行為は、ダンジョンを出現させた相手の目的に真っ向から反している。

であれば次のダンジョンは、日本がどうやっても隠せない場所に出すのが必定だ。

だから次郎は、一定の理解を以てそれを見つめた。だがその規模は、次郎が想像した杉山に現れていたダンジョンを遙かに超越して

いた。

(…………マジかよ)

濛々と広がった土煙が拡散し、少しずつ視界が晴れていく。

やがて土煙の中から、ドーム状の巨大な構造物の一部が姿を現した。

それは新幹線を含めた大量の電車を丸ごと収容し、数多の店舗を抱え込める山中県最大の山中駅全体と同規模の、巨大なダンジョンへの入り口だった。

入り口は車どころか、電車ですら入れそうな大口で、その光景はある程度を予測して心理的に身構えていた次郎すらも呆氣にとらせるものだった。

だが驚愕は、やがて確信へと変わる。

ダンジョンを出現させた相手は、封鎖と隠ぺいを行う日本に対処したのだ。

その対処とは、ダンジョンの入り口を隠ぺい不可能な場所に出す事。そして選ばれたのは、この山中県では最も利用者が多い駅前だった。

それどころかチュートリアルダンジョンが四七都道府県に数カ所ずつ出現した事を考えれば、四七都道府県で最も利用者の多い駅から順に同数くらい、駅前に巨大なダンジョンが現われた可能性もある。

もはや日本は、ダンジョンという存在を隠せないだろう。

こんな山中県でも、ゴールデンウィークの真っ最中に県内で最も利用者が多い駅から上空へ土煙が上がれば、最低でも数万人が目撃する。

そこで土煙の中から巨大な構造物が現われたら、携帯端末で四方八方から撮影会が行われ、ネットを介して即座に全世界へ大流出だ。

おそらく数時間後にはダンジョン内部に潜った人間を追い出し、危険を理由に壁を作って出入り口を塞ぎ、二四時間体制の警備と監視カメラの設置をするだろう。

だが警察より先にダンジョン内部へ潜り、以降は入口を通らずに直接内部へ転移できるようにしておけば、次郎達だけは今後自由にダンジョンに潜る事が出来る。

そうすればレベルやボースポイントが追加で得られ、さらに最奥のボスを倒せば次の攻略特典で収納が得られるはずなのだ。

チュートリアルダンジョンと基本構造が同じなら、スライムが機器類を溶かすため、内部に監視用の機器類を設置する事は出来ない。市単位の広さがあるダンジョン内では、内部で警察に遭遇する危険は低い。仮に不意な遭遇をしても転移で逃げてしまえば良い。

あとはボスの攻略競争だが、ダンジョンの維持と消滅の利害計算をする間であれば、日本がダンジョンを消滅させる事はないだろう。やがて次郎は決断した。

「恭也さん、俺見てきます」

「何だつて!？」

「今ごろ駅前にいる人達は、みんな見に行っていると思いますよ」

「土煙のほかに、有害なガスも出ているかもしれない。気になるのは分かるけど、勧められないな」

「他の人が倒れていたら速攻で逃げます。病院のコンビニでマスクと帽子は買っていきます」

これから赴く先は、万単位の一般市民による撮影会が行われている会場だ。

どの方角から近寄っても誰かのカメラに撮影されるのは確実に、インターネット上にも載るであろうから、顔や髪型は最初から隠して行く必要がある。

病院のコンビニならマスクの品切れは有り得ないし、急な入院患

者用の衣服類や、外傷や抗がん剤による脱毛を隠すための帽子なども売っている。

駅周辺のコンビニなら兎も角、病院でマスクを買う人間を不審人物として調べたりはしないはずだ。仮に調べられても、白血病患者が風邪を引いたのでお見舞いのために買ったと言えば済む。

次郎は早くも懐具合を思い浮かべた。

「どうやら言っても無駄なようだけど、本当に行くなら注意力を普段の六倍くらいにして、いつもより慎重に行くんだ。六倍というのは、普段見ている前方に加えて、上下左右と後方を追加する事だからね」

「了解です。じゃあまたメールで」

「ああ。お見舞いありがとう」

急いだ次郎は、あからさまな早足で病棟を出るとエレベーターホールに向かった。

だが病棟内を急ぐ見舞客に注意する者は皆無だった。患者も見舞いの家族も、果ては病棟の看護師たちですら揃って窓の外を見ている。

次郎がエレベーターのスイッチを押した時、院内に放送が掛かり始める。

『ただ今、山中駅周辺に大規模な爆発のようなものが発生しました。対策本部を防災センターに設置します。本部員は至急防災センターに集まって下さい。今後職員は、対策本部の指示により冷静に行動してください。また、二次災害の防止に努めて下さい。繰り返しします。ただ今、駅周辺に大規模な……』

次郎はエレベーターを待つ間、美也にも連絡すべきだと思い立った。

攻略特典で転移能力を得たのは美也も同様で、この病院には美也も入院したことがあるため転移ですぐに来られる。

院内で人気のない場所や、周辺で人通りが皆無な橋の下、公衆トイレの個室など、いくらでも思い浮かべられる場所はあるはずだ。

どこかで合流してから二人でダンジョンに行けば、転移する為に必要な現地を思い浮かべる記憶の保険を二人で掛けられる。あるいは家から撮影機器を持って来て貰って、最初から記録しておいた方が確実かも知れない。

次郎が懷から携帯端末を取り出したところで、エレベーターがやってきた。

『防災センターに対策本部を設置しました。地区隊長は、各部署の状況をFAXにて本部に報告して下さい。また、院内の皆様にも願います。現在、状況を確認中です。患者さんは慌てず職員の指示に従ってください。慌ててお怪我などされないようにご注意ください。看護師が確認に廻りますので、異常のある方はお申し出下さい。エレベーターのご使用はお控えください』

次郎は携帯端末を片手で握ったまま、慌てて階段側へと駆け始めた。

15話 新ダンジョン

駅前には赤色灯を光らせた様々な緊急車両が続々と集い、山中駅もそれに負けじと、構内に白い警告灯を点滅させながら、緊急サイレンを鳴らし続けていた。

駅周辺のビルには物理的な被害こそ出ていないものの、大量に舞い上がった土煙が今も立ち込めており、煙を吸って咳き込む人や、気分が悪くなつて倒れる人、それを介抱する駅職員や救急隊員がそこかしこに見て取れる。

助けを求める声が飛び交い、様々な理由で人々が周囲を走り回り、あるいは野次馬の携帯端末による大撮影会が行われるなど、無秩序な状態に陥っていた。

そんな騒ぎの中心にあるドーム状の構造物にある入り口は、真向かいにある駅の入り口よりも遙かに広かった。

顔を隠して人混みの中から近寄った次郎と美也は、合図と共に洞窟の入り口に向かって走り出した。

次郎はレベルを上げて得られる身体能力について、レベル五で種目を問わず全国出場クラス、レベル一〇で世界選手権出場、レベル一五でオリンピックのメダリスト並、それ以上は完全に人外だと見積もっている。

また身体能力を一から二に上げれば、当該分野に限っては最低でも掛け算ほどの途方もない結果が出る。

一〇〇mの距離を時速四〇kmで走るレベル一五の人間であれば、敏捷を二に上げると時速八〇km、敏捷三に上げれば時速一二〇kmを出せる力が身に付く。

レベル三三で敏捷五の次郎は勿論、レベル二八で敏捷三の美也も、最早人間が追いつける速度ではない。

「おいちよつ、ま……」

一気に洞窟の入り口まで駆け寄った二人は、九カ月振りとなる灰色の世界に勢い良く飛び込んだ。

入り口から先は一五段の階段があり、その先は急勾配の坂道になっていた。それを暫く下ると、やがて直径で一kmはありそうな大広場が現われる。

大広場の入り口付近では、先に入り込んだ人達が必死に逃げ戻って来ており、それを追う巨大コウモリと、警棒を振るう数人のコスプレイヤーが戯れていた。

飛び掛かっているコウモリは、チュートリアルダンジョンと若干、姿が異なるようだった。

以前のダンジョンにいた猫サイズのコウモリと大きさは左程変わらないが、牙や爪は大きく発達し、全身が筋肉質で、手足も随分と太くなっている。また視力も向上したのか、目を見開いて人間を見定めながら襲っている。

チュートリアルダンジョンのコウモリは、レベル〇の次郎が一对一で戦い、ナタを数十回振るって軽傷と引き替えに倒した。

しかし今回のコウモリ達は、次郎が過小に見積もって全治一カ月コースの強さまで上がっていきそうだった。

凶悪性が大幅に増した印象で、相對するのが武器を持たない男子中高生であれば互角。男子小学生や女性では、逆にコウモリに捕食されかねない。

「前のダンジョンと違うな」

「凄く広いし、コウモリの形も違うね」

入り口付近ではコウモリ達と戦う者、同行者に加勢する者、捕獲しようと試みる者、強制的に献血させられている者、それを助けよ

うとする者、撮影に徹する者など、ダンジョン内での人々の行動は十人十色だった。

それでも人間が数で上回るためか、周辺に致命傷を負っていそうな人は居なかった。

「まずは地下二階を探す。みんな自己責任で入ったんだから、手助け禁止。戦闘は避けて、魔法も使わない方針で奥まで進む」

いかに強かろうとコウモリでは自分たちの脅威にはならないと判断した次郎は、戦闘を避けながら進むことを宣言した。

先に入り込んだ人達の脅威にはなっているし、それを助けるのも容易いが、そうすれば非常に目立つだろう。

ここで正体を明かすつもりは無く、そのためにお互いの名前を呼ぶ事すら事前に禁止しているのに、行動がそれに反しては本末転倒である。

下手に誰かを助ければ、出口までの護衛を頼まれるかもしれない。そして拒絶しても、生命の危機を感じた人間が引き下がるとは思えない。

それらに付き合っていれば、やがて警察が追いついてきた時に、保護した人々と一緒に連行されてしまう最悪の結末に至る。

そのため、もしも彼らに腕を掴まれるなどすれば、次郎は掴んできた相手を蹴り飛ばす覚悟すらあった。

一方で美也は相手を蹴り飛ばすまではしないが、次郎の方針が示された以上、掴んできた腕を振り払って逃げるくらいはする。

「この蝙蝠野郎があ、哺乳類なめんじゃねえ！」
「ギイツ」

広場ではあまり賢く無さそうな四〇代の二足歩行型の哺乳類が、年齢不詳な飛行型の哺乳類の片翼を折り、振り回して床面に叩き付

けながら罵倒していた。

その一方で飛行型の哺乳類も、自分を掴んでいる手に爪を食い込ませながら、辛うじて何事かを言い返している。

だが生憎と外国語に堪能ならざる次郎には、飛行型の哺乳類が伝えた内容はサッパリ分からなかった。

飛行型は既に瀕死なので、断末魔だろうとは思うが、彼らの積極的に襲い掛かる好戦的な性格を考えれば、相対している二足歩行型に対して罵倒し返している可能性もある。

次郎は彼らに関わり合う必要性を一切認めなかった。

「あの通路から行くぞ」

二人は互いに譲らない二種類の哺乳類たちを大きく迂回しながら、広場を駆け抜けて通路へ向かった。

直後、発砲音が洞窟内に響き渡る。

慌てて振り返ると、広場の入り口付近に姿を現わした警察官が、実弾を発砲していた。相手はコウモリの群れで、背後には負傷した民間人が居た。

どうやら現場の判断で、咄嗟に威嚇射撃を行ったようだ。

しかしコウモリ達は、発砲音に対して一向に怯まず、警察官に襲い掛かった。

それに対して警察官は、さらに四度に渡って、コウモリの至近距離から発砲を繰り返した。その攻撃によってコウモリの一匹が地面に落ちるが、残るコウモリ達は発砲した警察官の腕に噛み付いた。噛み付かれた警察官は必死に抵抗し、叫び声を上げながら腕を大きく振り回す。

その間に、地面に落ちたコウモリが再び飛び上がり、警察官を襲う群れに加わった。

撃たれて落ちたはずのコウモリが、再び飛び上がって襲い掛かっ

たのを見た人々は混乱し、一部は慌てて洞窟の外へと逃げ出していた。

驚いたのは次郎も同様だった。

確かにコウモリの身体は硬く、対する警察官の拳銃が鎮圧用で殺傷能力の低い三八口径だとはいえ、翼を除けば猫サイズのコウモリならば十分な打撃力だろうと思ひ込んでいた。

それにも拘わらず銃弾が直撃したコウモリが再び飛び上がるなど、常識的に受け入れがたい光景だった。

ついに弾を切らせて襲われる一方となった警察官の横合いから、別の警察官が拳銃を伸ばしてコウモリにゼロ距離射撃を行った。

次郎はその結果を注視したが、発砲された弾丸はコウモリの身体は傷を与える事は出来ても、身体の皮膚を貫通する事は出来ていなかった。

それどころか、大きな音が何度も響いたためか、広場の各通路からは次々と新手のコウモリたちが姿を見せ始める。

全体的な戦況としては、コウモリの片翼を折って罵倒しながら振り回していた中年男性が一匹を瀕死に至らしめているものの、人間側が数の有利を活かせない間にコウモリの増援が来て、次第に不利になりつつあった。

「ヤバイ、あいつらがどんどん出てきたっ」

「早く逃げろ」

「ぬおりゃああつ、下等な爬虫類が。万物の霊長たる人間様に、逆らうんじゃない！」

警察官が苦戦する一方、中年男性はついに事切れたコウモリを何度も踏み付けながら、勝利の雄叫びを上げていた。男性の左腕は完全に垂れ下がっており、ワイシャツの胸部と左肩口から先が真っ赤に染まっていたが、それでも彼は力強い雄叫びを上げていた。

次郎は中年男性の強さに呆れると同時に、彼が倒したコウモリの体内から石を取り出して掴まない事を残念に思った。

もしも彼らのような一般人が皆揃ってレベルを持てば、相対的に次郎たちの希少価値が下がり、秘密を隠す必要が薄れていくのだ。

「その男性、早く戻ってください。それと、奥の二人もだ。誰か、怪我人を運ぶために外に出て助けを呼んできて下さい」

戦闘を終えた中年男性と、立ち止まった次郎に呼び掛けを行ったのは、コウモリと戦闘中の警察官では無く、広場の出入り口付近から様子を窺っていたサラリーマン風の男性だった。

彼は発砲後から急激に増え始めたコウモリに危機感を抱いたのか、外へ出るようにと周囲へ呼び掛けている。

「行くぞ」

呼び掛けを無視した次郎は踵を返すと、声とは反対方向に向かつて走り出した。

促された美也も次郎の後を追いつ、新たに飛んできたコウモリを避けながら、当初目指していた通路に飛び込んでいく。

「おいつ、お前たち。危険だから早く戻って来い！」

最後に背中からサラリーマン風の男の叫び声が聞こえたが、もちろん次郎は振り返らなかった。

勢い良く飛び込んだ通路は、幅が片側三車線ほどで、高さも次郎の身長を二倍は上回っていた。

そしてここにも先行者が入り込んでおり、やはりコウモリ達と争っていたようである。

二〇代くらいの青年が、コウモリに引き裂かれたと思わしき顔面

を抱えながら、血の海でうめき声を上げていた。

白いシャツは血で真っ赤に染まっており、ズボンも膝と裾が裂け、皮膚が抉れて赤黒い肉が見えている。頭部や顔面を含む全身十数カ所の裂傷と、相当量の出血であり、このままでは命に関わるかもしれない。

だが彼を保護して警察に引き渡せば、その時点で次郎たちは調べられて終わりとなる。

次郎は血の海で溺れている知らない誰かを一瞥すると、美也を連れてそのまま奥に向かって駆け出した。

ダンジョン内部は次郎の予測とは若干異なっていたが、いずれにしても従来の非日常が日常化した事に変わりは無かった。

それは奇しくもチュートリアルダンジョンが現われてから四年を経た二〇四四年五月四日の事であり、攻略特典に「能力加算＋二四」や「転移一回四〇〇k_g」、「収納四〇フィートコンテナ分」などと、死の語呂合わせを多用する相手の意志を感じずには居られなかった。

16話 緊急対処事態

次郎と美也が帰宅したのは、午後七時過ぎだった。

三時間以上も奥へと突き進んだが、地下二階への階段は見つかっていない。

始めて入って地理が分からない点に加えて、チュートリアルダンジョンに比べて内部もかなり広そうだった。

幸いにして明日の五月五日もゴールデンウィークであるため、明日は一日掛けて地下二階に辿り着きたいと考えている。

それが駄目だった場合、二日後の五月六日は金曜日で学校に行かなければならないが、その後は土日が控えている。最悪でも土日までに地下二階へ潜り、山中県警を振り切りたいところだ。

だが今日は、これ以上の探索活動は続けられない。

そのため美也を送り届けて美也の祖母を安心させた後、駆け足で家まで帰った。

普段は遅く帰っても気にしない母親も今日は心配したのか、メールを送ったのに返信しなかったのは何故なのか、そしてどこに遊びに行っていたのかと問うてきた。

それを適当に誤魔化し、食卓に着いてニュースを眺める。

『この時間も全ての番組を変更して、引き続き臨時ニュースをお伝えします。本日、全国各地の駅周辺に大規模な土煙が発生し、直後に謎の巨大構造物が相次いで現われました。大場総理は現状を緊急対処事態にあたると宣言、直ちに自らを長とする対策本部を設置しました』

テレビの画面には案の定というか、次郎の予想を遙かに飛び越え

た映像が映し出されていた。

ビルから撮影されたと思われる映像では、新宿駅付近が大規模な土煙に覆われ、やがて視界が晴れると新宿御苑の西半分にドーム状になった巨大なダンジョン入り口が出現していた。

ダンジョンの入り口が現われた位置に居た人は、全員が新宿御苑の東側に一瞬で飛ばされたらしい。巻き込まれた人がインタビュアーに答えており、自分たちは無事だったが西側にあった茶室や日本庭園などは消え失せたと言っている。

新宿に現われたダンジョンから中に入ると暫くは下り坂で、そこから巨大な地下空間に繋がっているらしい。内部には新宿御苑の西半分にも匹敵する広場があつて、壁にはいくつかの通路があり、猫より一回り大きなサイズのコウモリたちが生息していたと言っている。

『総理は国民保護法に基づき、全都道府県に対して国民保護対策本部の設置を命じると共に、速やかな国民保護措置を講ずるよう指示しました。各都道府県は避難実施要領に基づいた避難指示を発令しており、現在は警察、消防、自衛隊と協力した避難誘導を行っています。該当する地域にお住まいの方は、指示された避難先への避難を行ってください』

テレビ局の中継には、ダンジョンの入り口が既に規制テープで封鎖されており、融通の利かなそうな警察官がズラリと並ぶ姿が映し出されていた。

やがて映像は神奈川県横浜駅や、大阪府の大阪駅、新潟県の新潟駅、福岡県の博多駅などに次々と切り替わっていったが、そのいずれにも灰色のドームが映し出されていた。

「だから心配したのよ。四七都道府県に一つずつ出たんですって。駅前とか行っていないわよね？」

「行っていたら電車が止まって帰れないんじゃないの？」

「もう安全確認が終わって、運転は再開しているそうよ」

「おお、流石日本だ」

次郎は感心して見せると、夕食のエビフライを箸で摘まんだ。

実際に驚いたのは電車の早期再開では無く、ダンジョンが各県に
一力所ずつしか出ていなかった点だ。チュートリアル時には複数
出ていたが、本番になって数を減らすのは意味が分からない。

それとも巨大化して内部も拡大した代わりに、個数を絞ったのだ
ろうか。

新ダンジョンで地下二階を探して走り回った体感では、階層の広
さは倍加しているように感じられた。

『謎の巨大構造物には人を襲う危険な生物が確認されています。未
知のウイルスの危険もありますので、絶対に近寄らず、万が一襲わ
れて傷を負った場合は速やかに医療機関を受診してください』

「……………ところで国民保護法って、なんぞ？」

次郎に問われた母は、父に目を向けた。

次郎の父は現与党である労働党が大好きで、同時に愛国者でもあ
るので、そういった事には多少の知識がある。

そう言った知識を語る事も嫌いでは無いため、得意気に語り始め
た。

「国民保護法とは、武力攻撃や大規模なテロから、国民の生命と財
産を守る法律だ」

「ふむふむ」

「法律自体は、中国、ロシア、北朝鮮の攻撃に対処する『武力攻撃
事態』と、テロ攻撃に対処する『緊急対処事態』を想定して成立さ
せた。自然災害は対象外で、あくまで悪意のある相手によって引き

起こされる危険に対する国民保護が目的だ。発令されると民間人の避難誘導と、危険集団への対処行動が開始される」

「へえ」

「自然災害は一過性だが、悪意のある相手は重複性と継続性を以て何度でも繰り返す。原因は国家の外交関係や諸事情にある。誰がアレをやったのか知らんが、他の国に出てきていない以上、何らかの理由で日本だけが狙われている。だから緊急対処事態を発令して、国家が責任主体になって対処する訳だ」

「ふああ」

次郎は父親の小難しくなっていく話に、思わず変な声を出した。

説明はその後も続いたが、国民保護任務に従事している自衛隊員は当該任務中には同時に戦闘は行えない仕組みがジュネーブ条約にあるとか、そのため部隊を分けてそれぞれ別々の任務で行動させた方が良かったとか、説明に独自解釈がどんどん増えていった。

既に聞きたい事を聞き終えている次郎は、適当に相槌を打ちながらエビフライを囓り、話を聞き流しながら味噌汁を啜る。

一方で父の方は、どんどんヒートアップしていった。

話題は、国家安全保障戦略（NSS）と二〇三七年の防衛大綱で完全に分化した機動部隊と防衛部隊のうち、今回構造物を監視・封鎖するのが防衛部隊で、内部を調べるのが機動部隊になるのが適切だとか、次郎にとっては全く興味を引かない内容に移っていった。

そんな話は、自衛隊の佐官以上しか気にしなくて良いのではないだろうか。

やがて会話が『世界地図を逆にした時に見えるユーラシア大陸側から、太平洋への進出を抑える戦略要所に日本や南西諸島がなっている』などと日本を取り巻く地政学に入り始めた頃、食事を終えた次郎は風呂に入ると言って食卓から逃げ出した。

次郎が父の話に最後まで関心を持てないのは、このウンザリする長話のせいである。

風呂の湯張りをセツトした次郎は自室に戻り、PCを起動してネット上の情報を集める事にした。

まずは反応であるが、あらゆるニュースサイトの記事一覧を、ダウンロード関連のニュースが写真付きで埋め尽くしている。

四七都道府県の駅前に、球体状の灰色い巨大構造物が一斉に出現した件。

その内部には、巨大な地下空間が存在していた件。

地下には巨大蝙蝠が生息しており、襲われた人に犠牲者が出た件。
国民保護法に基づく緊急対処事態が発令された件。

巨大構造物の周辺には規制テープが張られ、警察官がグルリと囲んでいる件。

警察、消防、自衛隊によって一部住民は避難させられた件。

大場総理と峰岸官房長官による記者会見が行われた件。

アメリカが支援を申し出て、日本は感謝の意を示しつつ断った件。

このように、平時であれば大ニュースになる記事が様々な見出しでズラリと並んでいる。

そのいくつかを適当に流し読みしている間に風呂が沸いたので、先に入る事にした。

今日は長時間の探索で疲れており、明日のゴールデンウィーク最終日も朝から探索を再開するため、早めに風呂に入って休んでおかなければならない。

次郎は逸る気持ちを抑えながら、休憩すべく風呂に向かった。

新宿御苑に出現したダンジョンから直線距離にして僅か3km。
皇居にも程近く、国会から数分の距離にある総理官邸では、体格の良い白髪老人が、壮年の男性から報告を聞いていた。

「チュートリアルダンジョンが消えた報告は、確認が取れたのか」
「はい。封鎖中のハ七カ所全てが、新たなダンジョンの出現と入れ替わるように消滅しました。内部に居た者は全員残らず外に飛ばされ、直接所持していなかった物資はダンジョンと共に消えております」

「信じられん」

白髪の老人は背もたれに身体を預けると、疲れ切った表情で深い溜息を吐いた。

彼こそは与党労働党の総裁にして、日本国内閣総理大臣の大場宗一郎である。

現在は野党第一党に落ちた改革党が与党だった時代に、党内調整でババ抜きのパバを引かされて総裁に就任し、西日本大震災の後に行われた選挙で圧勝して政権交代を果たし、総理に就任してからは二期目を迎えている。

すなわち日本にダンジョンが現われた時からの現職総理大臣であり、次の総理へ引き継ぐ際に何と伝えようかと頭を抱える総責任者でもある。

大場の派閥は非常に大きいが、その大半は現与党が圧勝した時に初当選したハリボテで、即戦力となる議員の比率は少ない。

同じ党内でも非主流派の古狸や古狐どもは、隙あらば使えそうな新人議員を自陣営に引き込もうと画策し、同時に様々な手を駆使して旨みの増した総裁の座から引きずり下ろそうと蠢動する。

殆ど派閥力学で選んだ大臣たちは、各派閥への調整力はともかくとして、非常時の指導力という面では全くアテにならない。

官房長官を任せた後継候補の峰岸は六期目だが、親族に政界出身者がいないために総理を引き継がせるには未だに格が足りない。

連立を組む国民党も法案次第では蝙蝠となるし、野党落ちした改革党は重箱の隅を突くように与党の足を引っ張ってくる。

野党第二党の共和党とも事あるごとに対立し、第三党の新生党に至っては根本的な思想信条が違い過ぎて意見のすり合わせなどまともに出来た試しがない。彼らを相手にするなら、まだ第四党である共歩党との折り合いが付き易いくらいだ。

ダンジョンの存在を確認した当初は情報不足で、秘匿しつつ調査するしか無かった。

やがて情報が集まると、今度は軽々しく公表できる問題では無くなった。

そして大きな犠牲が出た今になって公表すれば、なぜ隠していたのだと批判を浴びるのは目に見えている。

大場は今までの選択に対して自分なりの正当な理由は持っているが、それを非主流派や野党が受け入れるかと問われれば、有り得ないと自答せざるを得ない。

またダンジョンは同盟国であるアメリカにも秘匿しており、これまでの事を知られれば、国内外から盛大な大場降ろしが行われることだろう。

「チュートリアルダンジョンが消えたただけならば良かったのだ。そうであれば、問題自体が消えていた」

大場は苦々しげに愚痴を溢した。

彼は地位、名誉、財産の全てを高い次元で所持しており、ダンジョンなどに依存する必要は無く、むしろ自身の立場から鑑みれば特大の厄介ごとでしかなかった。

すると大場の不満げな様子を伺っていた峰岸官房長官が、声を落としてしながら囁いた。

「いつその事、全て無かった事にしては如何かと」

「何、どういう意味だね」

「今まで封鎖していた場所は、全てダンジョンが現われる前の状態に戻っております。そこで大学教授などに、大震災に伴う地割れだったと結論付ける報告を書かせます。危険な個所は国側で塞いでおいたとして、いずれ時期を見計らって土地を地主に戻しましょう」

「……………ふむ」

「そうすれば日本にダンジョンが現われたのは本日からであり、総理は極めて迅速に対処しているという事になります。そうなれば誰であろうと、揚げ足の取りようがありません」

「それで隠しおおせるのかね？」

「チュートリアルダンジョンは、全て跡形も無く消えております。

証拠は存在しません」

「それはそうだが」

大場はダンジョンの不可思議な特性を思い浮かべた。

政府がレベルの存在を知ったのは、洞窟に入り込んだ子供を救助した際に、その子供が魔法を使って見せた時だ。

何度でも再現可能な力を前に、疑いの眼差しはやがて驚愕へと変わった。

そして検証を繰り返していくうちに、魔物を直接倒した後には体内にある魔石に触れた者が、何らかの理由でレベルが上がると判明した。

但し、そのレベルの上がり方には極端な差が生じる。

第二次性徴期である一〇代前半までに魔石の力を取り込めば、第三次性徴期のようなものが始まってレベルが非常に上がり易くなる。逆に第二次性徴期を過ぎてからレベルを上げようとしても、二〇代前半の隊員一人のレベルを一に上げるだけで、コウモリ百匹単位の膨大な魔石が必要になる。しかも必要量は、年齢が増すほど跳ね上がっていった。

そしてレベルを上げる事による副作用や異常報告も、いくつか判明している。

例えばレベルを得る事と引き替えに、身体の成長速度が鈍化する傾向が見られる。

他にも、レベル×%分だけ、細胞や染色体が何かに補われているのではないかと示唆される報告が上がっている。

だが、それが何を齎すのかについては、まだ分かっていない。

幸いにして『第二次性徴期までに、倒した魔物の魔石に直接触れて魔素を得た』者は、国内でも指折り数えるほどで、危機感の乏しい子供が安易に発信した情報を見つけ出す事は難しくなかった。

特別に立ち上げさせた専属チームには、インターネット上の書き込みから子供のスポーツ大会まで幅広く調べさせており、情報の発信者が居れば速やかに公式上は行方不明になって貰っている。

投稿された動画や写真は消し、CGで再現可能だと指摘させ、投稿者は嘘が発覚して逃亡したのだと決め付けた。記事もコメントを投稿できなくした上で、検索に掛からないようにして、人々の記憶から風化させている。

そうして大場総理率いるの日本政府は、ダンジョンをひた隠しながら、密かに調査を続けてきた。もちろん検証作業は必須で、そのために身寄りの無い子供の人権などは必要に応じて無視してきた。

だがそれら一切は、大場や峰岸にとっては当然過ぎて論じるまでもない事だった。

彼らの解する民主主義の本質は、最大多数の最大幸福である。断じて、個人の権利などのために、国家を犠牲にする事では無いのだ。

「本日踏み込んだ者の中にも、レベルの上がる条件を満たした者は殆ど居ないでしょう。疑わしい者は検疫を理由に自衛隊施設へ強制連行し、聴き取りや確認作業を行わせた上で、該当者を発見した場合には未知の病気が見つかったとして移送させております」

「状況が変わっているが、これまで調査に従事させていた者の口は大丈夫かね？」

「調査隊は警察・自衛隊の特殊部隊から厳しく選抜されており、彼らから秘密が漏れる事はありません。それ以外の従事者は、さらに厳しく選抜した者と、処分予定の者だけです」

調査に投入された隊員は、いずれも第二次性徴期を過ぎていた上、銃火器で制圧しても魔石エネルギーの吸収効率が著しく低く、隊員の一人をレベル一にするために数百という多大な魔石を集めさせられた。

それでも百を超えるダンジョンを確保していた事と、国家の資金や組織力を費やした結果、隊員達は膨大な魔石を掻き集めてレベルアップを果たしている。

最奥では殉職者も出ているが、二〇以上のダンジョンを攻略させた事により、総合評価と表示される事象の変化を検証する事が出来た。

その結果、大量の重火器を持ち込ませてボスを倒させた数名の隊員には、攻略特典という尋常ならざる能力が備わるに至っている。外部に知られれば、一過性では終わらない大変な事態となるだろう。

だが最奥に踏み入らせていた隊員は、いずれも純血の日本人で、特殊隊員としての教育を受けており、生涯に渡る家族も含めた生活

保証が為されている事から、他の部隊や家族が相手であろうとも秘密を漏らすような真似はしない。

「隠蔽と口封じは、遺漏の無いように取り計らい給え」

「畏まりました」

一礼した峰岸官房長官は、連絡係を兼ねる自身の秘書官に目配せをした。すると秘書官は指示を実行すべく、携帯端末を取り出しながら速やかに別室へと移動した。

こうして表裏両方の緊急対処を終えた大場総理は、顔色から生氣を取り戻していった。

17話 情報錯綜

四七都道府県で発生した事象は、世界中の人々を震撼させた。

『各都道府県で利用者最多の駅周辺に、突如としてドーム状の巨大構造物が出現』

『巨大構造物が発生した地域に居た人間は、一瞬で別の場所へ飛ばされる』

『地下に巨大空間が発生するも、重なったはずの地下水道管は何故か繋がったまま』

いずれも発言者の頭を疑う話であり、そのように絶対に有り得ない事が実際に起きた。

少なくとも、現地に居た外国人を含む数百万人が同時に目撃している。

さらに現地にあつた個人の携帯や車載カメラ、駅周辺の監視カメラなど数十万から数百万台が、四七カ所の巨大構造物を全方向から記録しており、それらの一部はネットを介して全世界へ一斉に発信された。

そして何より、巨大構造物は現在もそのまま残っている。

そのため当初は半信半疑だった人々も、新たな情報が積み重なる内に、従来の常識が根底から覆された事を受け入れざるを得なかった。

巨大構造物が存在する事実は、最早疑う余地が無い。

日本政府は、出現した巨大構造物の周辺を直ちに封鎖し、近隣住民を速やかに避難させ、諸外国に対しては訪日外国人の安否情報を出しながら、安全かつ慎重に調査を開始した。

その堅実さは良識派から歓迎され、内閣支持率は上昇している。一方で世界各国は、詳しい情報を求めた。

巨大構造物を削れば、材質が判明する。そして内部を調べれば、構造物が単独で出現する宇宙船のような存在なのか、あるいは単に放たれた弾丸で他に大本があるのかを推察できる。

各国は日本に対して様々な手段を用い、知り得た情報の開示を求めた。また調査への協力を申し出るなどして、技術獲得に出遅れまいと動き出した。

またメディアは、国民の知る権利を訴えて調査隊への同行を求めた。そして安全を理由に一切を却下されると、巨大構造物の周辺を取り巻きながら憶測に基づいた様々な報道を始めた。

そんな怒濤のゴールデンウィークが過ぎ去り、平穏ならざる平日の金曜日が訪れた。

「ジロオハ」

「ナカさん、おはー」

次郎が教室に入るなり、中川から相変わらずの挨拶が帰ってくる。小学校時代から続く挨拶は生活習慣の一部になっており、このような情勢下にあっても変わる事が無かった。もともと中川の目は爛々とした輝きに満ちており、身体は隠しようのない喜びに打ち震えているが。

停滞した政治や経済、劣化した社会保障、押し付けられる過去の負債、見通しの暗い国家の将来など、日本は若者の氣勢を削ぐ問題に事欠かない。

その中で発生したダンジョン問題は、既得権益が生み出した既定路線に風穴を開けた。そして直感的に風穴の可能性を見出した中川は歡喜していたのだ。クラスメイトも全体的に明るい雰囲気であり、一種のお祭り騒ぎである事が見て取れた。

「ジロー、いよいよ新時代の幕開けだな」

次郎の前の席に座った中川が、無駄に格好良くて意味不明な言葉を宣った。

そこは中川の座では無いのだが、本来の持ち主は別のクラスメイ
トの所で雑談に興じている。今日はクラス中が好きな席に座り、雑
談に興じているようだった。

「ナカさんは、どんな点に新時代を感じたんだ？」

「おいおい、どうしたジロー。お前の家の山にはテレビの電波届い
てないのかよ」

久々の堂下次郎ネタを聞かされた次郎は苦笑を返した。

山中県の一部でテレビが映らなかったのは、地上デジタルに切り
替わった三〇年程前の一時期だけである。

「いや、見たつて。ドーム状の謎の巨大構造物だろ」

「なんだ、お前の家もテレビは映ったのか。例のドームだが、歴史
遺産とかパワースポットとかを無視して、四七都道府県でそれぞれ
一番利用者が多い駅前に出現しただろ。これは俺たち日本人に対す
るアクションと見るしか無いわけだ」

「ふむ」

中川の言い分に否定する箇所を見出せなかった次郎は、一先ず頷
いた。

出現した全てのドームは、宗教上の聖地を無視して日本の駅前に
姿を現わしている。

従ってドームを出現させた存在は地球上の宗教・宗派とは無関係
であり、日本人の活動に合せて行動している事になる。

この場合の問題は、日本が相手に差別されているという点だ。

日本に便宜を図っているのか、それとも試練を与えているのか。
次郎の答えは、今のところ前者側だ。

日本のみにチュートリアルダンジョンを出現させ、レベルや魔法、果ては特典まで与えている事から、相手は日本を特別優遇している
とは思えない。ボス戦では冷や汗を掻かされたが、特典の恩恵を
鑑みれば許容範囲内にある。

しかし、どうして日本が選ばれたのかはサッパリ分からない。

「それで、ナカさんの結論は？」

「まあそう焦るな。いいか次郎、絶対に声を上げずに黙ってコレを
見ろ」

中川は急に声色を落とし、自身の携帯端末を操作してから画面を
見せてきた。

その画面を覗き込んだ次郎は、息を呑み、目を見開いて思わず立
ち上がり掛ける。そこには、巨大コウモリの足を掴んでピースサイ
ンする北村が映っていたのだ。

次郎が理解したのを確認した中川は、携帯端末を速やかに回収し
た。

「いつ、どこで？」

「もちろん当日、俺らの県だ」

それを聞いた次郎は、思わず舌打ちを打ち掛けた。

次郎と美也が洞窟に入った時、広い内部には沢山の人が居た。そ
の顔を一々確かめたりはしていなかったが、そこに北村が居合わせ
た可能性があるわけだ。

次郎たちはマスクと帽子で顔を隠しており、服装もありきたりな
ものだった。そのため他人には特定出来ないだろうが、小学一年生
から同級生だった北村に間近で見られれば、歩き方や仕草などから

正体が露見する危険がある。

「キタムーは、なんて言っていた？」

声を落として慎重に確認した次郎に、中川は笑みを浮かべながら小声で答える。

「あいつはデートで駅前にいたらしい。それで怪我人を運ぶために男手が足りないから手伝ってくれと言われて中に入り、警察官を襲っていたコウモリを引き剥がしたんだと」

「二重に驚いたわ」

概要を聞いた次郎は、自分たちの行動が露見して居ないとの結論に達し、安堵の表情を浮かべた。

次郎たちがダンジョン内部へと突入した時、人手が足りないから手伝ってくれなどとは決して頼まれなかったし、そういった人々が先に入り込んでいる様子も無かった。

おそらくは、警察官が発砲してコウモリが増えた後の事だろう。

あの時は、一般人の青年が外に助けを求め始めていた。

次郎が想像するに、デート中の北村は洞窟への突入を一度は見合わせ、その後に助けを求められて良い格好をするために飛び込んだのだろう。コウモリの足を掴んで持ち上げている姿は、男としてやり遂げた感じがにじみ出ていた。

そんな輝かしい青春のページに、次郎は尊敬の念を浮かべた。

「ちなみに付き合っている相手は、お前らと同じ図書文芸部で二組の塚原愛菜美だ。ほら、先月お前らと二回連続で遊びに行っただろ。それが切っ掛けになった」

「ほほう」

図書文芸部の一年生は、現在五名いる。

そのうち二人は次郎と美也で、残る三人は部長の妹で一組の絵理と、絵理が引つ張ってきた中学時代の同級生である二組の塚原愛菜と三組の丹保智子だ。

その中心となるのは活動的な絵理で、次郎たちと交友関係にある中川や北村とは、部員メンバーと一緒に遊びに行っている。

なお次郎たち男性陣は、絵理にトリプルデートだと言われて結構奢らされた。中川が丹保に、北村が塚原に、そして次郎が何故か美也と絵理の両方に。

「ウラギリモノ？」

「イエス、ユダ」

中川が口にしたユダとは、イエス・キリストを銀貨三〇枚で売ったとされる弟子の事だ。

処刑されたキリストが宗教上の象徴となった事で、キリスト教が世界宗教となったとするならば、ユダは紛れもなくキリスト教を世界に広める事になった人物の一人だ。

だが結果論はともかく、利己主義に走って師匠を売ったとされる行為は裏切りである。

そして今回の場合は、割り勘した三人の中で一人だけ良い思いをした裏切り者という意味となる。

「後ほどキタムーには宗教裁判を行う。それで、話の続きは？」

「おう。あいつは引き剥がしたコウモリを地面に叩き付け、踏み殺したらしい。で、次の日になって急に検疫が必要だと言われて、ドナドナされた」

「はあ？」

次郎は困惑顔を浮かべた。

政府の主張する『未知の病気を防ぐための検疫』は、これまで散々コウモリに触れて無事だった次郎にとって、首を傾げざるを得ないものだった。

むしろこれまでチュートリアルダンジョンを隠してきた経緯を踏まえるに、レベルや魔法を隠そうとしているのだと考えた方が納得できる。

ダンジョンは白日の下に晒されたが、レベルや魔法は未だ世間に知られていない。

もはや世間に知れ渡るのは時間の問題とは言え、隠し通せる間は日本のみがそれらを独占できる状況が続く。

魔法は、従来の科学の限界を引つ繰り返す代物だ。他国に先んじれば幅広い分野で特許を獲得し、新技術を独占できるだろう。

さらに特典の転移は、SFで語られる数百年後の宇宙船のワープ技術に繋がる。

また特典の収納に至っては、SFですら語られない数千年後の宇宙船の物資収納技術などに繋がるのでは無いだろうか。

日本の技術力は決して低くは無く、独占できるアドバンテージを活かして諸外国に一〇年も先んじれば、未知の魔法学分野に関して有利な状況に持つて行ける。

首脳陣がともであれば、高レベル者や特典所持者を他国や国内のヤクザに渡したくは無いだろう。

仮にレベルが上がった人間が居た場合、政府は余計な事を口走られる前に確保すべく動く。

（それでドナドナか？）

もつとも中川の話聞く限りにおいて、北村はコウモリの体内にある石を掴んでおらず、レベルが上がったわけではないようだ。そうであれば、いずれ北村は解放される。

次郎は北村の身を案じつつ、ゴールデンウィーク明けの気怠い授業に身を投じた。

クラスでは休み時間の度に会話が盛り上がったが、特に目新しい情報は無かった。

やがて放課後になって次郎たちが部室へ入ると、先に部室に入っていた綾村絵理がPCで描いた絵を見せてくる。

「いやあ、ついにボクたちの時代が来たねえ。二人とも、図書広報誌の表紙はドーム状の巨大構造物で良いよね。もう描いたけど!」

「絵理よ、お前もか」

「ふふーん、もちろんだよ」

絵理が見せてきたのは、川沿いから巨大構造物を描いた絵だった。モデルは山中県ではないようで、聳え立つビル群の中央に巨大構造物の天井部分が頭を覗かせており、天空ではそれらを囲むように美しい虹が半円を描いている。

周囲を包囲しているはずの警察は見えない構図で、上空を旋回するヘリコプターも、調査・報道・観光のいずれが目的か分からない機体になっている。そのため物々しさは無く、ひたすら幻想的な光景が描かれている。

流石は現部長の妹にして、将来の部長候補だと感心させられる表紙だった。

「結構良いと思うぞ」

「うん。凄く綺麗」

「やったあ!」

絵理の表紙を眺めた次郎は、改めてダンジョンの影響力に思いを馳せた。

ダンジョンは謎の巨大構造物として世間の注目を集めているもの

の、本来の姿から見れば氷山の一角に過ぎない。それにも拘わらず、北村が内部へ潜り込み、絵理は部活の表紙としてドームを描いた。ではダンジョンの隠されている情報が世間に知れ渡った時、世間にどのような影響を与えるのだろうか。

（普通に考えたら、みんなレベルは欲しいよな）

交通事故に遭っても助かる防御力や、怪我をしても治る回復力などがデメリット無しで手に入るのであれば、それらを求めるのは生存本能を持つ生物であれば自然な行動だ。

だが人々が力を持てば、絶対王政に反発したように腐敗した民主主義にも反発しかねず、民衆をコントロールしたい政府は嫌がるだろう。

とりわけ不正を怒れない日本人を相手に、これまで好き勝手に私腹を肥やしてきた既得権益者たちにとっては、悪夢のような話だろう。そのためレベルを与える対象は、権力者を守る自衛隊や警察の一部に限定されるかも知れない。

普通に考えれば政府が押さえ付けて民衆が従う流れになるだろうが、そんな状況を複雑にするのが諸外国の存在だ。

日本だけがレベルや魔法、特典といった恩恵を独占するのを許容するとは思えない。

どのような落とし処となるのか、次郎の興味は尽きなかった。

「ところで話は変わるけど、塚原さんとキタムーって付き合っているのか？」

「そうだよ。塚ちゃんはチヨロインだから、早い者勝ちだったのさ」
「……………マジか」

図書文芸部に所属する塚原愛菜美は、市役所の主幹である父親と、民営化された元市民病院の看護師長を務める母親との間に生まれた

核家族の一人っ子だ。

小柄で笑顔が純粹で、将来は看護大学に進んで保健師になると言っているのだが、一人っ子故に甘やかされて育っており、夢の国のヒロインの如く甘々なダメっ子でもある。

「キタムーが連れて行かれたけど、塚原さんは結構心配してるっばい？」

「うーん、本気で心配するとは思っけど、あの子は割り切るからねえ。キタムーが帰ってこなかったら、きつと次の愛に生きると思うよ」

「おおっ、なんてこった」

ユダを哀れんだ次郎は、予定していた宗教裁判を取り止める事にした。

18話 新ダンジョン攻略中

二〇四四年五月二十九日、日曜日。

日本の駅前にドーム状の巨大構造物が出現してから三週間以上が経過した。

その間にあった大きな出来事としては、国連側の幹部が国際的な調査チームを出す意向をマスコミに流し、定例会見で問われた峰岸官房長官が「日本国内の調査は、日本が行う」と答えた事だろうか。主権国家としては当然の回答であったが、常に受け身で弱腰の日本側が明確に断った事は、日本をよく知る各国に衝撃を与えた。

実際に日本は巨大構造物の入り口を壁で完全に覆い、昼夜を問わず警察官をズラリと配置し、猫の子一匹通さない構えを貫いている。官房長官の発言後、巨大構造物は世界からより一層の注目を集める事になった。

一方で次郎の身近な出来事といえば、五月八日の日曜日にダンジョンの地下三階まで辿り着けた事と引き替えに、五月一二日と一三日に行われた中間テストではクラスで九位という微妙な順位になった事だろう。

入試の時は一〇位だったので、そこから一人だけ抜いた。だが美也との勉強の積み重ねがあつてこの成績というのは、当初の想定よりもかなり悪い。

もしもダンジョン攻略を捨てて勉学に集中していれば、さらに数人は抜けたはずだ。

しかし学校内の定期試験で数人抜く事と引き替えにダンジョンの攻略特典を諦めるのは、あまりに勿体ない気がした。

「それに付き合ってもらって、悪いな」

「うっん。わたしも収納は欲しいから、気にしなくて良いよ」

とはいえ美也単独であつたなら、存在が露見しているダンジョンの攻略に乗り出したとは思えない。北村の件で明らかのように、洞窟で魔物を倒せば、何処かへ連れて行かれて調べられる。

レベルを持たない北村は中間テストの後に無事解放されて公欠扱いになつたが、日本が公表していない秘密を知る次郎や美也は確実に帰して貰えないだろう。

そのため二人は、国の調査隊に遭遇しないよう、平日は夕食を終えた後の夜から潜り、土日は日中の時間を用いて可能な限り奥へと進んだ。

新ダンジョンは確実にチュートリアルダンジョンよりも広く、通路も複雑で進み難くかつた。加えて魔物の数も、かつてのチュートリアルダンジョンに比べて倍加している。

それでも成績を犠牲にした結果、五月一五日には地下四階、五月二一日には地下五階まで辿り着いている。

概ね一週間に一階をいう早いペースで下っているが、今のところ周辺で魔物の死骸などは見つかつておらず、山中県警には先んじているようだった。

次郎は新ダンジョンで得られたボーナスポイントを全て闇に振り、ダンジョン内で遭遇した際には姿を隠しながら逃げる算段も打ち合わせてきたが、今のところ全て無意味になっている。

おそらく先方は、次郎たちが転移で自宅とダンジョンを往復しながら探索している事など想像もせず、じっくりと地図作りでもしているのだろう。

初見のダンジョン内を記憶して思い描くのは容易ではないが、カメラで撮影して見返せば問題なく跳ぶ事が出来る。かつて美也が両親の行為に対する証拠集めで用いたカメラは、現在も新たな用途で活躍している。

あるいは政府は、首都圏を優先させて山中県までは手が回らないのかも知れない。

そのため二人は誰にも邪魔される事無く、チュートリアルダンジョンで折り返し地点だった地下六階まで到達していた。

「はあ、やつと地下六階か」

「調査隊を引き離すために、ちょっと無理しすぎたね。これから普通のペースで進んだら、地下一〇階に辿り着くのは六月末から七月頭くらいかも」

ダンジョンが地下何階まで続いているのかは分からない。

だが常識的に考えれば、練習的な意味合いのチュートリアルダンジョンよりも、本格的に出現した新ダンジョンの難易度が高いであろう事は想像に難くない。

であれば新ダンジョンは、チュートリアルダンジョンの最深部だった地下一〇階以上の深さであろうという考えで二人の意見は一致している。

「期末テストが六月三〇日と七月一日。どうせ被ってしまうなら、少しペースを落として勉強もしておくか」

「それならあまり進めない平日は予習復習を中心にして、探索は土日だけにしようか？」

「仕方がない。かなり先行したから、平日は息抜き程度で我慢しておくか」

「うん、それが良いよ」

中学時代からダンジョンに入り浸る二人には、探索と成績のバランスを調整する感覚が自然と身に付いていた。

調査隊の動きは不確定要素だが、彼らがどこまで進んでいるのかを確認するために浅い階層へ赴いて発見されれば本末転倒だ。同じ

階に居ない事を信じて、ひたすら前に進むしかない。

地下五階から下る道に入った次郎と美也は、すぐに地下六階に降り立った。

地下六階の入り口付近はグラウンドくらいの広い空間になっており、そこにはチュートリアルダンジョンの地下六階にも生息していた巨大なヤモリの姿が数十匹も見て取れた。

魔物は形状が変化してより攻撃的になっているが、次郎たちのレベルが上がりすぎたせいか、遭遇すると半数くらいは通路の奥へと逃げ出していく。

この逃亡行為はチュートリアルダンジョンの巨大コウモリから既に起っていた現象で、魔物達は機械的では無く、生物としての生存本能のようなものを持っているようだ。

次郎は逃げ出した魔物を無視し、逃げ出さなかった手前の一匹に右手の石槍を向けると、わざとらしく解説を始める。

「さて出ました、懐かしの巨大ヤモリ君の登場です。白亜紀の大地を思い起こしそうな土色の皮膚ですが、灰色のダンジョン内では保護色の意味がありません。これは保護色を持たずとも、天敵なんて存在しないと主張したいのでしょうか」

「単に土系統だから、身体が土色なんだと思うよ」
「うぐっ」

「攻略の総合評価をSにする条件が分からないから、魔物はちゃんと全種類、一定数を倒してね。それと、なるべく沢山のフロアに入ってレベルも上げようね」

「……うい」

鋭い突っ込みとオカンの説教を同時に浴びせられた気分になった次郎は、洪々と大型犬サイズの巨大ヤモリの前に歩み寄る。

そして反射的に噛み付いてきたヤモリの口を避けて背後に回り込

み、長い尻尾を踏み付けた。

「哺乳類との戦いに尻尾を持ち込むとは、なんて卑怯な爬虫類だった！」

尻尾を踏み付けた次郎の足の裏に、グニヤリと柔らかいものを踏んだ感触が伝わってくる。

かつてチュートリアルダンジョンで戦った時には、それなりに硬かった尻尾だ。

おそらく地上にいるワニと比べても素体の頑丈さには遜色が無いはずで、銃弾が効かなかった巨大コウモリのようにダンジョンの不思議なエネルギーで補われている分だけ、巨大ヤモリの方が堅さで勝っているはずである。

もしかすると機関銃ですら、皮膚を貫けないかもしれない。

しかしレベル三三に上がって、その分だけ不思議な力で強化されている今の次郎にとっては、硬いはずの尻尾もマシユマロのように柔らかく感じられる。

レベルが上がるごとに身体に不思議な力が纏わり付き、それがヤモリの身体を覆う何かを中和しているようなのだ。加えて身体能力も上昇しており、次郎の攻撃は二重に通る易くなっている。

本気で踏み付けられ、踏み切る事すら出来るだろう。その場合は尻尾の前に、次郎が履いている靴の方が破損してしまうのだが。

「おっと、逃げるなよ。地上を支配したご先祖様の名が泣くぞ」

次郎に踏み付けられたヤモリは危機を感じたのか、くねくねと身体をよじらせて、踏まれた尻尾を切り離れた。

そしてヤモリが自由を取り戻す直前、次郎の右手から石槍の矛先が伸び、ヤモリの背中から突き刺さって前胸部へと突き抜ける。

まるで千枚通しで薄い紙を貫いたかのように、双方に存在する絶

対的な強度の差が、抗いようのない一方的な結果を生み出したのだ。胴体を串刺しにされたヤモリは、頭部と四肢を激しく振って、拘束から逃れようと藻掻き、鳴き声を上げて必死に抵抗した。

「ギイイイ、ギイヤヤアアッ」

まるで一億年前の恐竜時代を彷彿とさせるような鳴き声だった。かつて地上を支配していた絶対的強者として、地上の片隅でコソコソと生きていた哺乳類の子孫を威嚇しているのだろうか。

しかし、イモリと人間の身体のサイズは、一億年の時を経て逆転している。少なくとも両者の力関係においては、地上のイモリと人間並に開きがあった。

次郎は右手の槍でヤモリを押さえ付けたまま、左手にも石槍を生み出してヤモリの頭部を叩いて、爬虫類の絶叫を強制的に黙らせる。鈍い音が響いた時、ヤモリの頭蓋骨は上からの衝撃で割れていた。さらにそのままの勢いで床面に叩き付けられ、割れた頭蓋骨がさらに細かく粉碎される。

だが頭部を破壊されたヤモリは、恐ろしい体力でなおも四肢を動かし続けた。

その心臓付近に、頭部を破壊した槍が突っ込まれ、体内の石を引っ掛けて弾き出した。すると石を取り出されたヤモリは、今度こそ絶命した。

「もつと簡単にならないかなあ」

返り血を浴びないよう慎重に戦った次郎は、愚痴りながら土色の石を手取る。

触れられた石は瞬く間に色褪せ、土色から灰色へと変わっていく。そしてダンジョンの壁や床と同色に変わると、ボロボロと崩れて手からこぼれ落ちていった。

その一方で美也は、風魔法を放って周辺のヤモリを纏めて斬り伏せていた。

そして最短の距離に倒れる一匹に歩み寄りながら追撃の風を放ち、石を取り出しやすいように身体を切断する。さらに辿り着くまでに、傷口から血が流れないように炎も放った。

そんな姿を見た次郎は、ふと思い付いた。

「炎と風の魔女。これで高校の制服なら、漫画の表紙に載せられるな」

「綾村さんが喜んで描きそうだな」

切り刻まれ、焼かれたヤモリは、石を取り出すまでも無く絶命している。

美也の魔法を生み出したエネルギーが、ヤモリの体内にあった石に打撃を与えたからだろうか。魔法の理論に関しては、殆ど分かっていない次郎と美也である。

「よし、六階のノルマ達成。後は地下七階を目指すだけだな」

「それが長いよね。それに一〇階の先もあるかも知れないし」

「それなら、今度こそ宝箱を期待したいな」

「宝箱？」

「おう。チュートリアルじゃない普通のダンジョンが出てきたし、今度こそ回復薬とかを期待したいところだ」

「そんなのが見つかったら、研究に回されて世の中には出回らないよ。売ったら調べられて、捕まるから駄目」

「だったら闇ルートで売り捌く！」

「それってどこにあるの？」

「……………夜の歌舞伎町とか新宿の裏通り？」

「見つかると良いね」

周辺に転がる石を自らの力に換えた二人は、広い空間の奥に向かって走り出した。

19話 逆優攻

二〇四四年七月四日、月曜日。

日本では、気候や景観の移り変わりと共に、季節を感じて過ごすのが一般的だ。

しかし学生時代に限っては、迫り来るテストや各種の行事で季節の変化を感じる。

七村高校では、先週末に一学期の期末テストが全て終わった。

七月上旬には二年生の修学旅行を控えているが、他の学年にそのような予定は無く、次郎たち一年生は、心の中で夏休みまでのカウントダウンを始めている時節であった。

夏休みを前にして、次郎のダンジョン探索は地下一〇階まで順調に進行していた。

これまで各階に出てきた魔物はチュートリアルと同じ種族だったが、この先がどうなっているのかは分からない。もしも地下十一階以降が現われるのであれば、夏休みに本格的な攻略を行う事になるだろう。

そんな風に各自が様々な夏休みの計画を思い巡らして、浮かれ気味となっている明るい教室内で、ただ一人だけ机に突っ伏したまま動かなくなっている男が居た。

「キタムーは、尊い犠牲になったのだ」

七村高校のグラウンドに、北村の墓が建った。

ちなみに勝手に建てたのは、次郎と中川の二人である。

体育の授業中にグラウンドの土を集めて、グラウンドの隅の方に建ててパンパンと柏手を打った。

二人に崇め奉られてしまった北村は、ゴールデンウィーク時の新ダンジョンへの突入と、勇気ある人命救助の引き替えに、政府に連行されてテストで爆死してしまったのだ。

より正確には、中間テストで爆死して以降、成績が落ちたまま迎えた期末テストでも再び爆死してしまった。

付き合っている彼女の塚原愛菜美が、クラス違いの理系コースで頼れなかった事が大きかったのだらう。あるいは彼女に見栄を張ったのか。

いずれにしても学期末試験で赤点だった生徒には、夏休みの自由を奪う恐怖の補習が待っている。

そんな黄泉路へと旅立った旧友に対して次郎が祈りを捧げていると、机の合間を縫いながら美也がやって来た。

「次郎くん、世界史は何点だった？」

本日最後の授業にして、北村に死体蹴りを行った教科は世界史だった。

次郎は授業中に返された答案用紙を引っ張り出すと、クラスメイトにして専属の家庭教師でもある美也に恭しく差し出す。そしてさらに言葉を継ぎ足した。

「四問間違えて、九三点だった」

期末テストは一〇〇点満点だ。

いかに高校一年生の一学期で横並びのスタートラインだとは言え、皆が一〇〇点を取れる問題では学力テストにならないため、問題を作成する教師側は点数差が出るように意地悪な問題をしっかりと入れる。

その中での世界史九三点は、クラス内では単科で四番の成績だった。

付け加えるならば、次郎は他の教科においても平均九〇点台を取っている。

全教科は返ってきていないが、この調子ならば総合成績で中間テストの九位を上回る成績が見込めるだろう。そのため次郎は答案用紙を差し出しながらも、その表情には比較的余裕が見て取れた。

但し家庭教師という役割から、美也は敢えて厳しい指摘をする。

「うーん、この三つはテスト範囲にあったかも。もう一つは授業で話していたから、ちゃんと聞いていたかの問題みたいだね」

「詰め込み教育、反対。古代文明史なんて、社会に出てからどんな仕事で使っんだよ」

現代教育に対する不満の声が、現役高校生から上げられた。

ちなみに次郎は、中学生の頃にも同様の主張を行っていた。

いくら成績が上がっても精神構造は成長していないと嘆くべきか、それとも主義主張が一貫していると褒めるべきか。

しかし、従順な日本人たちを相手に社会に対する不満を呼び掛けた所で、賛同者を得る事は容易では無い。

次郎のささやかな不平不満は、周囲から軽く聞き流された。次郎が新しい風だとすれば、周囲は風を受け流すのに慣れた柳の木であった。

その後、七村高校の新風と柳の木たちは掃除の時間に入った。

一組が掃除範囲に割り振られた廊下で、中川と共にモップを振り回した次郎は、最後に形だけは廊下を掃いてから教室に戻った。

やがてホームルームが始まるうち、大抵の問題を軽く受け流す柳の中で、到底無視し得ない大きなざわめきが発生した。

次郎が訝しげに目を向けると、複数の生徒が携帯端末の画面を操作するクラスメイトを囲んでいた。彼らはうめき、自分たちの端末を開き出す。

「何だ？」

端末に向かつて耳を^{そはだ}欅てると、大音量に操作された携帯から、アナウンサーの緊迫した声が聞こえてきた。

『ただいまの時間は、報道センターより緊急ニュースをお伝えしております。先程午後三時、全国各地の巨大構造物のドーム天井部分が一斉に開き、内部よりそれぞれ数千から数万の巨大コウモリの群れが一斉に飛び出してきました。巨大コウモリの大群は、周辺にいた人々に次々と襲い掛かっています。現在ご覧頂いておりますのは、午後三時頃にビルから撮影された新宿御苑付近の映像です』

「うえええっ!？」

「おいマジかつ!」

掃除から戻ってきたクラスメイト達が、一斉に騒ぎ出した。

発生時刻は七時間目の授業開始くらいで、既に随分と時間が経っている。授業を終えた教師達は職員室に戻っているが、今ごろは職員室も大騒ぎになっているだろう。

次郎はひしめき合うクラスメイトの中に割り込み、開かれていた画面を覗き込んだ。

するとそこには、大都市を行き交う数万の人々に向かつて、コウモリの群れが津波のように押し寄せていく光景が映し出されていた。人々は四方八方に逃げようと右往左往しているが、飛行する蝙蝠の速度からは到底逃げ切れず、空から襲来する膨大な黒い影に飲み込まれていった。

それはあたかも、地上を歩くアリの群れに子供が真上から熱湯を注ぐかのような、残忍かつ不可逆的な光景だった。

『今現地には木田記者がいます。木田さん』

『はい、こちら新宿よりお伝えします。新宿御苑の巨大構造物の天井部分が開いたのは午後三時丁度でした。天井ドーム部分の一部が突然消え、そこから巨大なコウモリが次々と飛び立ちました。ドームは一〇分間ほど開き、その後閉じました。その間に飛び立った数千から数万匹の巨大コウモリの群れは、付近を歩いていた市民に次々と襲い掛かりました……………」

テレビの画面が再現映像から、現地リポーターに切り替わった。

本来は別の取材をしていたであろう女性リポーターが、蒼白な顔のままマイクを握り報告を始めた。

『現地では巨大構造物を封鎖していた警察と自衛隊が銃を発砲して応戦していますが、コウモリは全く怯まず、今も人に向かって真っ直ぐ襲い掛かってきます。付近には警察・消防・自衛隊の緊急車両が続々と駆け付けていますが、混乱は一向に収まる気配がありません。発砲音はまるで工事現場のように、今も激しく鳴り続けています』

「これ、日本よね!？」

「うわぁ……………」

おそらく路肩にテレビ局の車を停車させて、その前方にカメラを置いて車道側から撮影しているのだろう。

歩道側には、血塗れの子供を抱き抱える父親や、殆ど意識の無い男性を左右から抱えて運ぶサラリーマン、真っ赤な血が流れっぱなしの腕を抱えて逃げてくる子供の姿が映っていた。

カメラが慌てて車道側にフレームの向きを変える。すると今度はパトライトを光らせた緊急車両が数秒ごとに走り抜けていき、反対車線からは暴走の勢いで逃げてくる車や救急車が映し出される。

遠くからは、途切れる事の無い激しい銃声が響いており、その上空には今も黒い影が数百の群れを作って飛び回っていた。

『木田さん、発砲音はこちらにも聞こえてきていますが、そちらは大丈夫ですか？』

『はい。こちらは巨大構造物から東側にやや離れた新宿区四谷一丁目です。この先は警察が封鎖を始めており、一般車両は通れません。私たち報道陣はここまで避難するように指示されて移動してきました。この付近にはコウモリの姿はありません。ですが、この先の三丁目付近では、未だに人々が襲われています。倒れて動かない人も大勢居ました。ここからでも空を見上げれば、沢山のコウモリが飛び交う姿が確認できます』

道端にはカッター並の鋭利な爪で身体を引き裂かれた血塗れの人々が座り込んでおり、周囲の人が布を裂いて止血をしている。

虎の如き牙で噛まれた人は重傷で、周囲が身振り手振りで救急車の一台を停車させて無理矢理押し込んでいる。

遠くの空では黒い影が林立する新宿のビルの間を飛び交い、時折急降下しては何かを襲っているようだった。

新宿区は、比喻では無く戦場と化している。

ここまで大規模な戦闘が日本国内で繰り返られるのは、太平洋戦争が行われたおおよそ一〇〇年前以来だろうか。

クラスメイト達は名状しがたい呻き声を上げ、次々と自身の携帯端末を開いてTV局の映像や様々な情報画面を開き、あるいは誰かの画面に見入っていた。

『コウモリは西側の新宿駅方面、北側の歌舞伎町方面、南側の明治神宮方面にも飛来しているという情報が入っています。危険ですので、巨大構造物の付近には絶対に近寄らず、近くに居る方は、直ちに、避難してください』

『木田さん、ありがとうございます。全国各地の巨大構造物周辺では、新宿と同様に巨大コウモリが人々を襲っているという情報が』

入っています。政府は午後四時三十分頃より緊急会見を行うと発表しました……」

いつになく静かな教室に、TV放送の音声だけが嫌に大きく響き渡っていた。

次郎はふと美也に視線を向けたが、視線の合った彼女から返ってきたのは自分も想定外で困惑しているという表情だった。

新宿区には少ないとは言え、他国の大使館などもある。

そして巨大コウモリの群れは、相手が日本人だろうと他国の大使だろうと構わず襲い掛かるだろう。

もしも日本が、各国の大使と大使館を魔物から守れないとなれば、他国に介入の口実を与える事になる。

今がどれだけ酷い状況なのか、そしてどれだけの被害が出るのか、次郎にはとても計り知れなかった。

「ねえねえ、キタムー。コウモリって強い」

「あいつらは猫くらいのサイズだけど、爪がカッターよりも切れて、牙はそれより深く抉ってきて、警棒とかを口の中に突っ込まないと絶対に離さない」

「動物だと、どれくらい？」

「キレた中型犬と互角くらいヤバイ」

「マジで。超ヤバイじゃん」

周囲は、それぞれが思い浮かべられる中型犬のキレた姿を想像して戦慄していた。

だが実際に北村が説明したとおり、新ダンジョンの巨大コウモリはチュートリアルダンジョンよりも遙かに強かった。

非武装の小学生や女性では勝てそうに無く、コウモリの強さは平均的な人間を若干上回ると見積もれるだろうか。

すなわち一万匹出現すれば、およそ一万人の人間と互角となる。

新宿区には大勢の人が居て、武装した警察官や自衛隊も配置されており、近隣からは即座に増援も見込めるので負ける事は無いだろう。

一方で山中市では、その様な結果は期待できない。

なにしろ新宿駅には一日に数百万人の利用者が居るが、山中駅の利用者は一〇〇〇分の一しか居ないのだ。

警察や自衛隊の配置も当然少なく、付近にも直ぐに駆け付けられそうな部隊の駐留地は無い。

数千から数万のコウモリに対して、山中市が用意できる初動人員は百人くらいだろう。

しかもコウモリは新宿のように四方へと飛んでいくので、田舎の山中市では東京以上に収拾が付かなくなるのは目に見えている。

そして最悪な事に、駅から僅か一kmの距離には、恭也が入院している県立中央病院がある。

それを思い浮かべた次郎は、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。

（魔物が逆侵攻して来るなんて。いや、ダンジョンを創った側が逆侵攻させたのか）

ダンジョンの攻略特典を得た次郎は、ダンジョンを生み出した側が、ダンジョンに関して何らかのルールを設けていると考えていた。例えば『同じ階層には一種類の魔物しか出ない』点や、『ダンジョンの外には魔物が出ない』点など、明らかに不自然な部分がそれらにあたる。

実際にチュートリアルダンジョンの時には、逆侵攻は一度も起きなかった。しかもそれは、次郎の家の敷地に限らず、四年以上の長期に渡っておそらく全国規模でだ。

そのため次郎は、これから最初のルールが続くと考えていた。そしてダンジョンを封鎖した政府側も、同様に思っていたのだらう。

従来の感覚でダンジョンを外部から入れないように塞いで済ませた日本は、今まさに勘違いのツケを支払わされていた。

「コウモリって、俺たちの県でも出ているんだよな」

「山中市って、七村市からだと言車で一時間半くらいだろ。ここまでは来ないと思うぞ」

「直線距離で何kmくらい？」

「確か、三五kmはあったと思う」

「コウモリが時速三五kmで飛んできたなら、一時間で来るじゃん」

「直線でこんな田舎に来るわけ無いだろ。途中で市が三つくらい有るし、その間に人間が一杯居るじゃん」

教室のざわめきは、緊急の職員会議を終えた担任が教室に来て『ホームルームは無し』と言うまで一向に収まらなかった。

担任からは、『なるべく複数で早めに帰るように』と伝えられた。

高校側が欲するのは、複数での早期帰宅を指示したという大義名分だろう。

万が一にも巨大コウモリが生徒を襲ったとして、学校側が無為無策だったのと、生徒が指示に反して危険な行動を取ったのでは、責任の所在が大きく異なる。

全く以て市立高校らしい、見事なお役所仕事だった。

これまで政府は、ダンジョン内での死者を発表していない。

またテレビ局側も、人が死ぬ映像は流さないようにしている。

それらの事情に加えて、七村市が巨大構造物から三五kmも離れている事や、相手が所詮はコウモリだという認識が周囲にあった。

そのため教師側も、何とも中途半端な指示を出していた。

危機感が薄いのは生徒達も同様で、コウモリが出て危ないから帰れと言われても、素直に従う高校生は半数くらいだった。

それは成績が優秀とされる一組や二組であるうとも、例外では無い。

「愛菜美、駅前のクレープ屋に寄ろうぜ」

「キタムー、奢ってー」

「マジか」

二組の塚原愛菜美が鞆を持って一組までやって来たのを見た北村は、担任の指示を真っ先に破った。

おそらく高校の周囲にある軽食店やカラオケ店を見て回れば、制服を着た多くの生徒が仲間達と共に過ごしている光景が見られるのではないだろうか。

もしかするとこれでは教師側が指示を出さなかった時と、生徒全体の平均帰宅時間はあまり変わらないのではないだろうか。

「今日は部活無しにするね。お兄ちゃん達にはボクからメールするし、ともみんには伝えておくから、美也っちとジローくんも、ちゃんと帰るんだよ」

「うい」

はたして次郎の所属する図書文芸部は、至極真つ当な指示を出した。

次郎が頷くのを見た絵理は、三組の方へと歩いて行く。

図書文芸部は三年生が受験のため引退気味で、次期部長の絵理が一年生に伝達すれば部活は休部に出来る。

少人数の文化部ならではのフットワークの軽さで帰宅許可が出た

が、次郎は素直に家路には就かなかった。

「……美也、部室に行くぞ」

「帰らないの？」

「部室で情報収集。あの部屋は高速回線のパソコンが大量に置いてあるからな」

「ふえ」

次郎は美也の手を掴んで強引に引き寄せると、柳の木の一部が生暖かい目で見守る中、足早に教室から飛び出した。

各教室が一斉に解散となった廊下は、思い思いに移動する生徒達で、朝の駅のように混雑していた。

次郎は圧倒的な身体能力で人混みを素早く潜り抜けていくと、先に玄関の下駄箱から外履きを回収し、部室がある図書室まで一投足で移動した。

普段であれば、図書室には誰かしら居る。

だが解散が通達された直後である今は、流石に誰の姿も見当たらなかった。そして『動かざる事、山の如し』の顧問の大林先生も、職員会議なのか管理室に不在だった。

次郎は図書室から繋がる部室に入ると、自分の定位置になっている机の上に鞆を置いて、イスに座った。

その隣に美也が座ると、パソコンの電源は付けないままに向き合って淡々と告げる。

「ちょっとだけ、人助けに行ってくるわ」

それは普段の次郎たちの行動原理からは、対極に位置する宣言だった。

ダンジョンで得られる力や魔法、攻略特典は、現代はおろか近未来の人類の技術力ですら手に届かないほど大きくて異常なものだ。

日本ならずとも、国家が徹底して隠蔽するのは当然の代物である。

ダンジョンが数多有る中で、希少性に若干の疑問符が付くとは言え、その力の一端を手にした二人の存在が露見すれば、政府の手が伸びてくる事は殆ど疑いない。

それにも拘わらず、おそらく全ダンジョンを封鎖した政府に責任があるであろう今回の魔物逆侵攻に際して、次郎が正体の露見するリスクを背負ってまで人助けに赴く理由が、美也には分からなかった。

そのため訝しげな表情で真意が問われたのは、むしろ当然の事だっただろう。

「力を知られると、すごく困るよね」

「絶対にバレないように顔を隠すからさ」

「制服だし、絶対にバレるよ」

「それなら服装も変える。美也の転移で、俺の部屋まで跳んでくれ。俺は変装してから現地に転移して、適当に人助けをしたら帰ってくる。美也は俺の部屋からもう一度跳んで、家に帰ってくれ」

二人はチュートリアルダンジョンを攻略した際に、総合評価Sの攻略特典で転移能力を得ている。これは一日二回、地球の裏側であろうと重量四〇〇kgまでであれば一瞬で移動できる規格外な力だ。その能力を用いれば、駅のカメラなど様々な場所に移動の足跡を残さず、任意の場所へ自在に赴く事が出来る。

「それでも次郎くんの力で魔物を倒して回ったら、レベルを上げた民間人がいるって知られて、私たちの県のダンジョンが四七都道府県で優先的に調べられるよ。助けに行くなら、他の県の方がダンジョン攻略の足を引っ張らないかも」

「いや、うちの県に行かないと」

「どうして行くのか説明して」

人助けをしに行く理由の説明が避けられている事に気付いた美也は、端的に真意を問い質した。

理由を告げなければ絶対に協力しないという幼馴染み態度を察した次郎は、渋々と本心を語る。

「今、恭也さんが県立中央病院に入院中。病院とダンジョンは1kmくらいで、コウモリが飛んで来る距離。あいつらは人に襲い掛かるから、窓とか破りそうじゃん。恭也さん、最上階の角部屋で一番危険だし、ちよつとフオローに行こうかと思つて」

次郎が危惧するのは、病院がコウモリに襲われて恭也が死ぬ事だった。

最優先するのは自身と美也であり、そのためには他者を見捨てる事も厭わないが、恭也の存在は他から僅かに例外に位置している。それに恭也が魔物に襲われて死ねば、骨髓移植のドナーになる事を我慢した美也の行為が無意味になる点も気に食わない。

さらに恭也が死亡した場合には、美也の親権を失って接近も禁止されているとは言え、あの元両親達が遺伝的に唯一の子供となった美也にあの手この手で干渉してこないとも限らない。相手は借金を抱えて精神的に追い詰められており、次郎が介する一般的な常識が通じない。

そのため次郎は、以前から世話になつている先輩であり、美也の環境や精神衛生という面においても、恭也には生きていて貰いたいと考えている。

はたして次郎の意図を酌み取った美也の回答は、否だった。

「嫌かな」

「嫌つて、何がだ」

「転移で協力するの。物凄く嫌かな」

「そんなに嫌か？」

「うん。すごく、すごくね。でも仕方がないから協力するよ」

「……………ドウモ、アリガトウ」

次郎は梅干しを口に含んだような渋面で応えたが、美也は眉を八の字に下げながら付け加えた。

「一つ貸しだからね」

激しい拒否反応からは、極力関わりたくないという強い意志が如実に表われていた。

付き合いの長い美也には、次郎の考えている事は大抵見え透いている。だがそれでも、感情面では元家族の救出を受け入れがたいのだ。

それは、精神的なアレルギーの一種であろう。

一方で次郎も美也の事を理解しており、敢えて意志に反した。

二人の間では、お互いに譲れない状況で美也が渋々と折れ、その分を一つ貸しにしたのである。

次郎は致し方が無いとばかりに条件を受け入れて頷き、美也の転移に便乗すべく手を伸ばした。

美也がその手を握った直後、二人の姿が瞬時に消え失せる。

そして静寂が戻った図書室の入り口では、二人が図書室に向かったと聞いて様子を見に来た絵理が、呆然と立ち尽くしていた。

20話 病院

転移能力は一瞬で、瞬く間に想い描く場所へと跳べる。

まるで玄関から外に出た瞬間のように、あるいはテレビの場面が切り替わったかのように、周囲の光景が瞬間的に入れ替わった。

「……………よし誰も居ないな」

自室で着替えと変装を済ませて転移した先は、駅に程近い川辺にある男性用トイレの個室だった。

山中市は、山神川という大きな川沿いに発展してきた地方都市だ。何種類もの言い伝えを持つ山神川は、古来より地域の発展に大きく寄与し、江戸から明治時代に掛けては、海上輸送で都市部を栄えさせた歴史を持っている。

自動車が普及した昭和中期からは陸上輸送が主体となり、運河は廃れていった。しかし運河は川辺の遊歩道へと姿を変え、今も人々の暮らしと共に在り続けている。

但し言葉を飾らずに評せば、山神川の川沿いは景観が良いだけで、職場や商店などには繋がらない利便性が最悪の道だ。

唯一の取り柄である景観に関しても、普段見慣れている地元民はわざわざ見に行こうとは思わず、県外から観光客が来るほどでもない。

実際に駅から川辺を少し歩くと、日曜日の昼下がりですら、すれ違う人は一時間に二、三人いれば良い方という残念な場所である。

運河を遊歩道に造り替えた県にどのような思惑があったのか定かでは無いが、方々に整備されたトイレのうち、男性用の個室に人が入っている可能性は極めて低い。

そして次郎が転移で跳んだ川辺のトイレの個室には、案の定、誰も居なかった。

誰かが居た場合には背後から襲うつもりだった次郎は、安堵の溜息を吐きながら川辺に飛び出した。

時刻は、既に午後五時を過ぎている。

これは時間的な辻褄が合うように、車が少ない旧国道を急ぎのタクシーで走ってきたと言える程度の時間を待機させられたためだ。

それでも七月の空は、未だに明るかった。そして普段は綺麗な青色のコントラストに、黒い影が点々と汚れを付けているのが見て取れた。

川辺から僅かに見える高層ビルやホテルの上層階でも、幾つかの窓ガラスが大きく割れている。距離的に内部は到底見えないが、屋内の惨状は目に浮かぶようだった。

そんなコウモリ達であるが、どうやら軍隊のように整然とは行動しないらしい。

てんでバラバラに山中市の空を飛び交い、標的を定めると本能的に襲っている様子だった。

そして周囲に人が居ない事が原因となったのであろうか、三匹のコウモリが川辺に一人だけ佇む人間を標的と定め、急降下しながら迫ってきた。

「ちっ」

迫り来るコウモリにどう対処するか迷った次郎は、咄嗟に攻撃を避けながら二匹の翼を手袋越しで同時に掴み、山神川に向かって投げ飛ばした。

盛大な水音と共に二つの水柱が上がり、二匹のコウモリが水中に放り込まれる。

だが急降下の攻撃を避けられた最後の一匹は、そのままの速度で

次郎から遠ざかる。

「おい、逃げるなよ」

次郎は土魔法で右手に握り拳くらいの大きさの石を生み出すと、それを最後の一匹に向かって投げ付けた。

剛速球を三倍速で早送り再生したように高速で飛んでいった石は、進路上を飛行していたコウモリに直撃して撃ち落とした。

次郎は落ちてくるコウモリの真下に走り、その身体を左手で掴んで右手に石製のナイフを生み出し、ナイフを突き刺して魔石を吸収した。

これは魔物を倒した人間しか魔石を吸収できないため、シンデレラのガラスの靴ならぬ、魔物を倒した謎の人物の証拠を残さないようにする意図があった。

次郎は、魔石を壊したコウモリの死骸を山神川に投げ捨てると、川で泳ぐ二匹は無視して川辺から駆け上がった。

病院に向かって走り始めた次郎の目には、非常事態の街並みが映り始めた。

道端には事故車が停まり、二匹のコウモリが襲い掛かっていた。車は側溝に嵌まって動かなくなっており、車内では人が身を竦ませながら、携帯端末で助けを求めている。

コウモリ達は、高そうな黒塗りの車のボンネットをボコボコにへこませ、フロントガラスに爪を立てて大きな傷を作っているが、未だ突き破るには至っていない。

「助けてくれ！」

目が合った男性が助けを求めてくるが、次郎は早足で駆け抜けた。目的は恭也の保護であり、それ以外では無い。

それから暫く走ると、その先では折りたたみ傘を振り回すサラリーマンに、三匹ほどのコウモリが群がっていた。サラリーマンは飛び付かれる度にコウモリを叩き落とし、あるいは掴んで電柱に叩き付けながら応戦している。

そんな激戦を繰り広げるサラリーマンの元へ中年男性が加勢し、手前の薬局から調達したと思わしき殺虫剤を勢い良く吹き付けた。殺虫剤を浴びたコウモリの一匹は、翼をバタつかせながら嫌がって地面を転げ回り、ついには飛んで逃げ出していく。

結果を見た周囲の人々が、自衛の手段を手に入れようと薬局に駆け込んでいく。そして空からは、新たなコウモリが次々と飛来してきた。

ビルの入り口には、会社員と思わしきスーツ姿の若い男性達が集まって防衛網を構築していた。上司の命令でも出ているのだろうか、彼らに撤退の二文字は無いらしく、必死に戦っている。

しかしビルの上層階の窓は既に破られており、そこから侵入したコウモリと、モップを振り回す女性社員の姿が同時に見えた。

路上には、ひっくり返った自転車や片足だけのヒール、小学生の学生帽など、普段は落ちているはずの無い様々な物が散乱していた。

次郎は視界に映った全てを振り払い、サイレンが四方八方から響き渡る街中を、病院に向かって駆けていく。

速度は人間としての常識と非常識の間であるが、死ぬ気で走っている人は周囲に散見される。現状で足が速いだけの少年に關心を向け続ける余裕は、誰にも無かった。

おそらく日本中で、数十万のコウモリと人間が、組んず解れつの大乱闘を繰り広げているはずだ。

暫く走る間に、コウモリに襲われている人や、コウモリを叩き殺している人とすれ違う頻度が増していった。

やがて見えてきた病院前の路上には、赤色灯を光らせた緊急車両

が、ズラリと並んでいた。病院前の道路は大混雑になっており、駐車場は満車の上に停められない車がウロウロと走って大渋滞を起こしていた。

その先にある正面玄関前では、緑色のシートやトリアージと書かれた板、救護所のテントがひっくり返っている。

正面玄関の奥には、逃げ込んだと思わしき人々が山手線の車内のようにひしめき合っており、そこへ激戦区を抜けた人々が駆け込み乗車のように飛び込んでいった。

「怪我をしたら、皆ここに来るもんな」

次郎は、病院が大混雑している理由が腑に落ちた。

そもそも自然治癒が難しそうな怪我人は、誰しも病院に来る。

さらに感染の恐れがあるから名乗り出るようにと政府が散々脅した結果、本当に誰しもが病院に押し寄せて来ており、病院側の受入能力を大幅に超過してしまっていた。

病院に居る負傷者と家族だけで、数千人にも達している。

コウモリの出現現場から最も近い県内最大の総合病院というだけあって、大半の人が県立中央病院に押し寄せてきたのだ。

そして人が集まれば、コウモリもおびき寄せられるようにやってくる。

飛来するコウモリ達と、安全圏を確保しようとする警察や救急隊員、男性職員や患者家族との間で、血みどろの争いが勃発していた。罵声の合間に、断続的な発砲音が響き渡る。

間奏は子供の泣き声と、女性の金切り声で、大変耳によろしくない曲だった。

「早くこっちに逃げてこい！」

「おい、そっちにコウモリが来たぞ。手を貸せ」

見上げた病院の窓ガラスはいくつも割られており、コウモリが侵入した形跡が見られる。高層ビルの窓ガラスも同様だったが、消防隊が火災の際にハンマーで叩き割って救助に突入できるほどの硬さでは、コウモリを防げないという事なのだろう。

次郎は混雑する正面玄関を避けて、時間外の出入り口から入った。そして人混みを掻き分けながら奥へ進み、階段の所でお手軽変装セットを全部解くと、辛うじて常識的な速度に抑えながら階段を駆け上がっていく。

『コードブルー、中央八階。ドクターハリー、西棟九階』

非常放送が引つ切りなしに流れる中、最上階に辿り着いた次郎は、特別個室前の廊下まで走り抜けていった。通り過ぎた廊下には沢山の椅子が並べられており、そこには病衣姿の患者が、不安そうな表情で身体を預けていた。

そして辿り着いた特別個室前の廊下では、部屋から運び出されたベッド上の恭也が、何かの処置を受けていた。

上半身にはガーゼと包帯が巻かれ、傍には血塗れの病衣が脱ぎ捨てられている。

（やっぱり飛んできていたのか）

次郎は、病棟の患者が揃いも揃って廊下に出されている理由を察した。

おそらくコウモリが飛来して病室の窓ガラスを割り、入院患者を襲ったのだろう。

そのため危険な病室は放棄して、ドアを閉めて鍵を掛け、患者を廊下側に避難させたのではないだろうか。

時折、病室内から何かがドアにぶつかる音が聞こえてくるが、病棟看護師たちは聞こえない振りをしながら必死に走り回っている。

どの病棟も危険な状態で、外はさらに危なく、どうにもならないのだろう。

だが日本中がこの有様であり、警察や自衛隊の大規模な増援が到着するのは何時になるのか想像も付かない。

「やあ次郎くん。学校と部活はどうしたんだい？」

ベッド上の恭也は意識が明瞭だったらしく、次郎を見つけてゆつくりと手招きをしながら呼び掛けてきた。

傍に居る看護師も定期的な見舞客の顔を見知っており、現状では付き添いは大歓迎らしく、次郎を恭也の傍まで招いていた。

両者に呼ばれるがまま歩み寄った次郎は、ベッド上に横たわる恭也の様子を観察した。

傷に関しては既に処置済みのようで、今は血の滲んだガーゼを交換されているようだった。負傷は両腕や上半身に集中しており、頭部に外傷は見られない。輸液もされており、状態も落ち着いている。どうやら無事らしいと判断した次郎の頭に、急速に冷静さが戻り始める。

美也のおかげで、時間的な辻褃は一応合っている。

高校生にとっては贅沢だが、幸いにして次郎はお金持ちの家の子だと認識されており、お小遣いを使ってタクシーで来たと言えば通る。

あとは警察か自衛隊の集団が到着するまで居座って、病室内からノックを繰り返すコウモリたちから恭也を守り切れば、今回の目的は達成となる。

「途中で切り上げになって、部活も無しになりました。ちょっと気になってタクシーで来たんですけど、恭也さんは大丈夫ですか」
「テレビで知って、窓から外を眺めていたら、コウモリと目が合ってたね。来るな、来るなと思っていただけ、真っ直ぐ突っ込んで来ら

れたよ。幸い怪我の方は、窓ガラスで切ったのと、コウモリに肩を噛まれたのと、爪で引っかかれたくらいかな」

恭也が説明するとおり、彼の肩口や両手には包帯が巻かれ、身体所々にガーゼがメンディングテープで付けられていた。

脱ぎ捨てられている病衣の袖口も、爪で裂かれたような跡が見られる。

「一匹ですか？」

「二匹だったら、本当に危なかったね。何しろ一人で戦ったから」
「一人で戦ったんですか。よく勝てましたね」

確かに恭也の傷を見れば、誰が戦ったのかは一目瞭然だった。

恭也はチュートリアルダンジョンよりも強いコウモリを相手に、弱った病気の身体でありながら、ナタのような武器も持たずに凌ぎきったのだ。

これは弱いチュートリアルのコウモリを相手にナタを振り回した次郎から見て、驚嘆に値する出来事だった。

「はははっ。点滴スタンドをコウモリの口の中に突っ込んで床に押さえ込みながら、電動ベッドのキヤスターで何度も挽いて、開いた傷口を両手でこじ開けたら倒せたよ」

「かなり過激な戦いでしたね」

「確かに輸液パックが飛んで、チューブから血液が逆流したけどね」
「うわぁ」

次郎が呆れとも溜息とも取れる声を上げると、恭也も僅かに苦笑した。

やがて口を閉じ、言葉が止むと目を虚空に向けて、おかしい事を口走った。

「ところで次郎くん。僕の前に何か見えないかい？」
「はい？」

何の前振りも無く尋ねられた次郎は、何を聞かれているのか分からず素っ頓狂な声を出した。

それでも恭也は質問を続ける。

「パソコンの画面のような真っ白な背景と、黒い文字。あるいは発光する何かが見えないかな」

「……………いいえ」

より具体性を増した問い掛けに、次郎はやや間を置いて返答した。声の上擦っていたかどうか、次郎自身には分からなかった。

「そうか。変な事を聞いて悪かったね」

「はい」

「ところで次郎くん。中国の陰陽五行って知っているかな」

「えっ？」

「陰陽、木・火・土・金・水。だけど木と金が無い代わりに、風があるね。これは物質の相転移を表わすのかな。はて……………さて……………」

自問の後、眠るように思考の海へと潜り始めた恭也の前で、次郎は言葉を失い立ち尽くした。

21話 世界の反応

二一世紀に入ってから、千年に一度の大災害を二度も経験した日本においても、全国で数十万匹にも及ぶ巨大コウモリが発生した事による影響は、極めて甚大であつた。

巨大コウモリの大発生後、一時的に制空権を確保できなくなった日本では、安全のために複数の空港が航空機の受け入れを拒否した。とりわけ首都圏の空港は拒否の姿勢が顕著で、すべてを地方へ押し付けようと躍起だつた。

だが各国から飛んできた航空機の一部は最初から燃料が乏しく、出発国へ引き返す事が出来ない状態で各地を盪回しにされた結果、燃料不足に陥つた。

そのため各機長は、燃料不足による『緊急事態』を次々と宣言し始めた。

緊急事態の宣言が行われた航空機は、自衛隊や米軍基地だろうと無関係に最優先で緊急着陸できる。なにしろ拒否すれば、空から航空機が墜落して来るのだ。頭を押さえられた地上側には、拒否権など存在しなかった。

こうして各空港は予定外の緊急着陸を受け入れて、次々と機能不全に陥つた、

また国内の電車も、一時的に半数近くが停まってしまった。

なにしろ巨大構造物の出現位置は、各都道府県で利用者最多の駅付近である。

山中県であれば、山中駅の正面に向かい合う形で同規模の巨大構造物が出現しており、東京都であれば、新宿駅から目と鼻の先にある新宿御苑の西半分が巨大構造物に変わっている。

そんな至近距離から一万匹もの巨大コウモリが現われて人間を襲い始めたのだから、安全など確保できるはずもなく、国内の路線は滅茶苦茶になった。

高速道路や幹線道路も事故車両が道を狭め、緊急車両を通すための通行止めが相次いだ結果、人の往来や物流が停滞した。

総理が行った緊急記者会見では、巨大構造物四七カ所の半径一〇kmには屋内避難指示が出され、不要不急の外出は控えるようにと通達された。

諸外国から見れば、日本は非常事態宣言の発令と何ら変わらない状態に陥った。

そのためアメリカ合衆国のライアン大統領が、日米安保条約に基づき在日米軍の自衛的活動とアメリカ太平洋軍の派遣を通告した時、混乱状態にあった大場総理には咄嗟に断る術が無かった。

予てより介入の機会を窺っていたアメリカ軍の行動は、極めて迅速だった。

沖縄に臨時配備されていた攻撃ヘリコプターAH九一サラマンダーや、アメリカ本土から長駆した無人戦闘攻撃機X七四ゴルゴンなどの最新機動兵器が、日本の空を縦横無尽に飛び交いながら、強烈な機関銃やミサイルの雨によって巨大コウモリの群れを瞬く間に叩き落としていった。

流石に仮想敵国との兵器開発競争に明け暮れる世界最強の軍隊だけあって、コウモリ達はゲームの的であるかのように次々と、いとも容易く潰されていった。

もっともアメリカ軍が戦果を挙げるたびに、日本がアメリカ合衆国に対して何らかの譲歩を迫られるであろうことは誰の目にも明らかであったが。

一方で自衛隊は、アメリカ軍の型落ちや世代落ち兵器を高額で押し付けられる立場であったが、それでも地の利と人数を活かして戦

果を挙げ続けた。

そんな各地での戦果と共に、コウモリ側も一昼夜攻撃を行った後は一斉に山や森へ逃げだした事で、戦闘は一気に収束していった。

しかし報道機関に取り上げられた新たな問題によって、事態はさらに複雑化する。

「引き続きまして、レベル問題についてお伝えします。巨大コウモリ氾濫後、被害を受けた各地の市民からレベルが見えたという報告が相次ぎました。共通する内容として、いずれも身体能力五種類、魔法能力六種類の一つが上げられるようになり、魔法を選択した人は、何も無いところから火や水、光などを自在に生み出せるようになりました」

テレビの画面が、ニュースを読み上げる女性アナウンサーから、インターネット上に投稿されて再生数が跳ね上がったという有名な動画に切り替わった。

動画では男子高校生が、空き缶や七月四日付けの新聞紙を全方向から撮影して何の仕掛けもない事を証明した後、ガレージに並べる様子が映されていた。

そして空き缶と紙を並べ終えた少年が、仰々しく構えて手を突き出した数秒後、掌の先から卓球の球くらい火球が飛び出して空き缶を弾き飛ばし、新聞紙を燃やした。

この動画は、巨大コウモリが出現した七月四日の夜に投稿されたものだ。

最初は真偽を巡って大議論が巻き起こり、コウモリ出現関連の掲示板などへ大量のリンクが張られ、一夜にして五〇万回を超える再生数を弾き出した。

だが同様の主張をする複数名からの新動画が続々と投稿されていた結果、魔法を撮した最初の投稿として不動の地位を築いている。

「御覧頂きました映像は、視聴者が投稿したものです。投稿した男性高校生は取材に対し、火を○から一に上げて、火の球を生み出せるようになったと語りました」

テレビの画面は、再びスタジオに戻った。

「そして芸能界でも、シルフィード Sylphidの四人が、レベルが見えたと発表しています。Sylphidは病院で行った記者会見で、メディアの前で魔法や身体能力を実演しました」

シルフィード Sylphidは、日本人と外国人のハーフとクォーターで結成された現役女子中高生の人気アイドルユニットだ。

リーダーの片山真暖マナは、次郎と同じ年の高校一年生。

祖母がフランス人のクォーターで、最初はフランス語会話でテレビにレギュラー出演して知名度を上げた。

初レギュラーから一年ほど経った頃には、その容姿とトライリンガルトライリンの能力を活かして英会話番組を掛け持ちするようになり、CM出演で人気を博し、ついに大河ドラマに大抜擢された。

その後にSylphidを結成して歌手活動も行い、曲を出せばランキング入りし、コンサートでは数千人を動員できるほどの人気を誇っている。

なおSylphidのメンバーには、片山真暖の他に、同じく子役時代から芸能活動をしていた三人がいる。父がフィンランド人のイリナ・アウヴィネン。父がトルコ人のアイシエ。母が中国人の遠田華。

彼女たちは自分たちのルーツを個性として活かしながら、ユニット単位でいくつもの番組に出演している。

そんなSylphidが三枚目のCDジャケット撮影のために沖縄へ赴いていたところ、コウモリが大発生し、在日米軍の攻撃ヘリコプターと争う現場に巻き込まれてしまった。

乗っていた車が事故を起こして逃亡手段を失う中、弱ったコウモリたちに襲われて必死に抵抗し、体内から臓器ごとほみ出した魔石に触れた時にレベルが上がったらしい。

その後、彼女たちはレベルに活路を見い出して応戦する事で、辛うじてコウモリの襲撃から生き延びたそうである。

入院中の病院で行った国内外のメディアに対する記者会見では、全員がレベル三になって片山真暖が魔力と火を二に上げ、イリナが火・水・光、アイシエが体力と攻撃と敏捷、遠田華が魔力と火・風を得たと発表した。

そして四人は、実際に沢山のカメラの前で魔法や身体能力を披露してみせたのだ。

マスメディアの数十台のカメラが並ぶ中で行った魔法の実演は、ネット上に投稿された動画と異なり、本人たちには編集の余地が一切無い。

その映像を見た世界の人々は、魔法が存在する事を共通認識とせざるを得なくなった。

さらにSylphidは、極めて重要な情報を出している。

それは欧州人、北欧人、中東人、アジア人との混血でも、レベルが上がるという事だ。

各国から共感されやすい立場の彼女たちが行った、日本人以外でもレベルの影響を受けると言う情報は、既に地球の半分以上の国々で放送されている。

そのため各国の情報を求める要求は、劇的に増した。

それに対して峰岸官房長官は、日本政府は健在であり、日本国内での調査は日本が主体となつて行つと発言した。

官房長官の言い回しが「日本が行う」から「日本が主体となつて行う」に変わったのは、アメリカ側への配慮であろうと世間から認識されている。

一方で国民に対しては、レベルについてはどのような副作用が出るのか分からないため、不用意に取らないようにと呼び掛けたただだ。

また発表は国外メディアを排除した記者クラブで行われており、目新しい新情報もなく、調査内容の具体的な言及も避けられた。

その官房長官の対応に、とりわけ記者会見に呼ばれなかった国外メディアは苛立ちを募らせており、国外での報道は情報公開に後ろ向きな日本政府に対する批判の嵐となっている。

一方で優遇されている国内メディアは、流石に日本政府を突き上げるような事はしていないが、Sylphidの記者会見には飛び付いて、様々な立場の者を呼んで多様な意見を述べさせている。

女子アナウンサーがこれまでの経過を説明し終わったところで、司会者の菅山雄大が出演者達に話を振った。

「Sylphidのメンバーは実際に魔法を使って世間に衝撃を与えましたが、皆さんは映像をどのようにご覧になりましたか。亜寿沙さん、彼女達の魔法を見て如何でしたか」

話を振られた柊亜寿沙は三〇代の女優・タレントで、高校時代から芸能活動が続けている。何も考えずに自由な発言をするため、テレビ局にとっては都合の良い人間の一人だ。発言自体のコントロールは困難だが、過激な発言の方が視聴率を取れる。

時に危ない発言もあるが、それは司会が良識的に遮ってみせる事で、テレビ局の見解は司会者側と同一だと視聴者に誤認させて評価も上げられる。

「火の魔法って、ガスコンロとか水道で代用できそう。芸人ならいいけど、日本のアイドルは使い道ないですねー」

「なるほど。確かに生活必需品では無いかも知れません」

「でもトルコなら、火の魔法は便利かも。あとは水とかも」
「では五井さんは如何ですか」

司会者が中東への偏見を遮るように話題を振り直した先は、時代劇や刑事物で活躍する俳優の五井甚平だ。

大柄で厳つい顔の彼は、頑固で融通が利かない役を担う事が多く、番組でもご意見番的な立ち位置を求められる。

本人も自分が望まれる役回りを理解しており、敢えて頑固な面を見せる。

「記者会見で軽々とバク転をして見せた小柄な子がいましたが、元々は平均的な身体能力だったというのは本当ですか？」

「アイシエさんですね。以前出演した別の番組では、そのような結果が出ていたようです」

「あれくらい自在に動ければアクション女優になれますが、そんな力が一夜で手に入るなら、役者としての長年の身体作りは何だったのかと思いますね。必死に生き延びた本人を責める気はありませんが、レベルは格差問題になると思いますよ」

無然とした表情を浮かべて見せた五井の意見は、決して多数派と言っわけでは無かった。

レベルが見える条件は一部未解明だが、少なくともコウモリを倒して魔石に触れば良いと言う事は分かっているため、レベルが欲しい者は武装して各地に逃げたコウモリを追い回している。

レベルが見えるまでのコウモリ撃破数には、個人差がある事も知られ始めている。

ネット上に集められた情報によれば、一八歳を境に区切りが存在するようである。

だが複数匹を倒してレベルが上がった報告もあった事から、とにかく沢山倒せばいつか上がると言う事で、都会からコウモリの多い

田舎の森まで遠征に行く人達も居る。

「千葉さん、医者としてはいかがでしょう」

五井の次に話を振られた千葉美冬は、元アイドルで医師だ。

医学部に受かってから研修医を終えるまで芸能活動を休止し、医師になってからは父親が院長を務める病院で週に数日働く傍ら芸能活動にも復帰したアイドル医師である。

アイドルから医者になったという極めて異彩な経歴を持つため、このように様々な番組に呼ばれている。

「そうですね。わたしが驚いたのは、イリナさんの光魔法です。記者会見の場で切り傷を作った後、魔法で傷を最初から無かったかのように綺麗に消していましたけど、あれは再生治療の超高性能版かもしれないですね。医学と組み合わせれば、これまで助けられなかった方も助かる可能性があります」

「一体どういう方が助かるのでしょうか」

「どこをどれだけ再生できるのか詳しく調べる必要はありますが、例えば外科系では、従来では死亡していた多発外傷の救命や、回復不可能だった脳の損傷や頸椎の麻痺に新たな治療法を確立できる可能性があります。内科系では、臓器や細胞の再生が可能なら人工透析や糖尿病の患者を完治できます」

「それは、凄いですね」

「はい。魔法の力を現代医学に還元できれば、一〇〇年分のノーベル医学賞が乱発されるくらいの事態になります」

「一〇〇年分のノーベル医学賞ですか!？」

一〇〇年分のノーベル賞という言葉が飛び出し、司会の菅山は大いに喜んだ。

大言壮語は注目されて視聴率が上がり、スポンサーが付いてCM

の広告料も入るので番組にとっては大変喜ばしい。

そのためもつと話して欲しいとばかりに、単語を取り上げて聞き返した。

しかし発言した千葉美冬自身は、発言を大言壮語だとは思っていなかった。彼女は力強く、先ほどの発言を堂々と肯定する。

「はい。現代医学では、いかに低侵襲性の治療を行うかが基本でした。低侵襲性とは、身体をなるべく傷付けずに治療する事です。そうする事で身体の負担が少なくなり、回復や社会復帰が早くなるというものでした」

「なるほど」

「ですが未侵襲の治療が可能になった場合、現代医学の標準治療が根底から覆ります。新たな治療法では、傷病者が一瞬で治り、即座に社会復帰が可能になります。さらに高額な薬剤や材料が一切不要で、医療資源も大幅に抑制できます。そんな魔法のような治療が始まった場合、日本と世界がどうなるか分かりますか？」

「……………どうなるのでしょうか」

「日本では、少子高齢化によって国家喫緊の課題であった、労働力の回復と税収の増大、さらに毎年数十兆円という医療費の大幅な削減が期待出来ます。また世界でも、魔法であれば高額な薬剤や材料が不要になるため、経済的に貧しい国でも様々な疾病が治って大勢の人命が救われます。仮に日本が規制しても世界が行いますので、結果として医学が最低一〇〇年分の躍進をするのは時間の問題です。きっと、もう誰にも止められませんかよ」

アイドル医師である千葉美冬の発言以降、世界中のメディアが魔法の可能性に飛び付いて、日本政府に対して強く情報公開を求めるようになった。

22話 絵理の追求

巨大コウモリの大氾濫から、一週間が経過した。

凶悪な飛行生物の群れが人間に襲い掛かって来る光景は、二〇三九年の西日本大震災にも劣らぬ地獄絵図だった。だが今回の事態による負傷者は数十万人と目される一方で、死者数は幸いな事に未だ千人に達していない。

それは、様々な要因が複合的に作用した結果だ。

戦力的には、最初から巨大構造物に警察や自衛隊が張り付いており、在日米軍も早期に参戦した一方で、コウモリ側が戦闘ヘリの攻撃しやすい空を飛び、本能の赴くままに分散して各個撃破された事が影響した。

発生地点も都道府県の中心部であったため、周囲からの助けが得られ易く、医療機関も密集していた事が救命率を引き上げた。また発生時間も、人間側に有利かつコウモリ側に不利な日中であった。

もつとも、そのように状況を振り返れる余裕が出てきたのは、日本がそれなりに秩序を取り戻しつつあるからだ。

市街地の巨大コウモリは既に相当数が追い散らされ、各地に散った群れも官民が追い回している。鼻先にレベルという人参がぶら下げられた人々は、貴重な獲物を奪われまいと必死に競い合いながら、人間の脅威を次々と排除している。

そうやって人間の生活圏から積極的にコウモリが叩き出されていた結果、電車の運行が再開され、道路の封鎖も解除されるようになった。

そしてコウモリ自体が飛んで来なかった地域は、かなり早い段階で日常が回復している。その地域には七村市も含まれており、七村高校は翌日から二日間休校になっただけで、七月七日には再開され

た。

既に期末テストが終わっており、七月一六日からは夏休みだということもあって、保護者の判断で登校しなかった生徒も居る。だが勤勉な日本人の習性であるのか、大半の生徒は素直に登校してきた。勿論、全てが元通りにはならない。

例えばコウモリ自体が飛来しなかった七村高校においても、七月七日から七月一〇日までの三泊四日で北海道旅行が予定されていた二年生たちは、空港が使えなかったために修学旅行が中止になっている。

事態発生が旅行の直前であつたために、貸し切りバスや旅館にはキャンセル料が発生しており、延期して旅行先を変える事は出来なかった。そのため二年生達は、高校時代の修学旅行を失った。

一年生の次郎には他人事だが、来年も同様の事が起きれば非常に困ったことになる。そのため、ダンジョンの天井開放が一年後に再び起らない事を願わずにはいらなかった。

食堂帰りに廊下でそのような事を考えながら歩いていると、背後から声を掛けられた。

「ジローくん、ちょっと手伝って」

「ん、どうした？」

次郎が振り返ると、アンケート用紙を抱えた絵理が歩み寄ってくるところだった。

アンケートは『第二回・巨大構造物は何なのかアンケート』で、学級委員の中川が朝に趣味で配布して昼休みまでに集めていたものだ。

あくまで中川の個人的な趣味なので学校の業務用コピー機は使えず、図書文芸部のパソコンとプリンタを駆使して配布する事にしたようだった。

部室の鍵は図書管理室の鍵付き棚の中にあり、部員以外の生徒は

持ち出せないようになっていた。加えて絵理はイベント好きで絵も付けてくれるため、中川は次郎ではなく絵理に依頼していた。

「結果が纏まったから、結果を印刷しに行こうと思って。タイトルと文章の他に、グラフと絵も付けるから、部室にヘルプミー」

「それで内職していたのか。成績落ちるぞ」

「内職ならいつもしているよ。でも期末の結果はボク三番、ジローくん七番」

「どうして授業中に絵を描いていて、総合成績で三番を取れるのか理解不能だ」

「ボクが転生者で、人生は二週目だからね」

「また訳の分からない事を言って」

絵理は同人誌を描いて祭典に出るほどの生粋のオタ女だ。

図書文芸部に所属する二組の塚原愛菜美と三組の丹保智美もその同類で、三人で同人誌を描く光景はよく見られるのだが、リーダー格の絵理は普段からそっち系の言動も強い。

誰彼構わず発言するわけでは無いが、同じ部活で同級生の次郎と美也には遠慮無く妄想の世界を口にしてくる。

「それなら巨大構造物が、次にいつコウモリを出すのか教えてくれ」
「残念ながらボクの前世は、二〇二八年で終わっているのです。それで二〇二九年に二度目の人生が始まりました。ちなみに前世は男の子だったよ。それは良いから、さあ行こうよ」

「最後の方、聞き捨てならんわ。それと美也が居ないんだが」

「美也っちは、まだ教室で皆とお弁当を食べているよ。ジロー君はナカさん達と一緒に食堂で食べ終わっただでしょう。カモン」

「分かった。エクセルでのグラフ作成と適当なタイトルで良いんだよな？」

「グラフはお任せ。でもタイトルは『第二回・巨大構造物は何なの

かアンケート』って入れてね」
「うい」

次郎が納得したところで、二人は部室に向かった。

その途中で、欠席・未提出・無効を除いたクラス三〇人中二四人分のアンケート結果が渡されたので、まとめられた紙を確認する。

集計結果には「異世界と繋がった」が八票、「宇宙からの侵略」が六票、「ここはゲームの世界」と「神の天罰」が各三票、「魔界からの侵略」と「悪魔の使い」と「秘密組織の陰謀」と「皆で夢を見ている」が各一票と書かれていた。

異世界に繋がったという予想が最多だが、宇宙からの侵略も二票差で後を追っている。このように意見が割れているのは世間でも同様で、結局のところ巨大構造物が何なのか、誰もがよく分からないままだ。

一部の人が虚空に見えたレベルという表示は、現代技術で再現する事が不可能だ。宇宙技術・異世界・ゲーム世界など、地球以外の力が無ければ成立しない。そのため一般的には、そのいずれかの超技術だろうと大まかに予想されている。

もつともチュートリアルダンジョンという表示を見て、攻略特典も得た次郎と美也は例外だ。相手が意図的に行っている時点で、どこかと繋がっただけでは無いと確信している。もちろん犯人が誰でもを目的としているのかは全く分からないが。

「ジローくんは、何に投票したの？」

「俺は秘密組織の陰謀に入れたよ」

「へえ。あ、ボクはスキャナで取り込むからグラフ作ってね」

管理室で鍵を借りて部室に入ると、絵理は素早くパソコンと多機能プリンタの電源を入れ、内職で描いた絵をセットし始めた。

取り込んだ画像を切り取って、エクセルに貼るのが絵理の仕事だ。

その間に次郎は表題を作り、数値を入力して横にグラフを置いておく。

あくまで趣味の範疇で、ホームルームまでに配布しなければならぬという時間的な制約もあるが、最低限A四サイズに綺麗に纏めるのが部員の矜持である。

サクサクとデータを作っていく次郎に、絵理が取り込みを行いなから話しかけてくる。

「そういえばジローくん。美也っちは皆で夢を見ているに一票入れたみたいだけど、知ってた？」

「いや、聞いてないぞ」

「そうなんだ。だったら凄く徹底しているね」

「徹底って何がだ？」

「うん。先週の月曜日、部室から自宅に美也っちの転移で移動した後、ジローくんの転移で県立中央病院に行ったでしょ。夢じゃないって分かっているのに、何気ないアンケートでもわざと違う事を書くなんて徹底しているねって」

突然、精神的に殴りつけられるような衝撃を受けた次郎は、二口を告げる事が出来なかった。何も言えないままにパソコンから顔を上げ、絵理の意図を見極めようと表情を伺う。

「あ、作業は止めないで。ホームルームまでに作らないと行けないから」

「……………はあ」

呆れとも溜息とも言えない微妙な声が漏れた。

この状況で作業をしろと言われても、集中できるはずが無い。このタイミングを見計らって話を切り出したのだとすれば、実に効果的なやり方である。

美也と切り離された次郎は、どう対応すべきか逡巡して結論を出せなかった。

「大丈夫。美也っちのお兄さんには、学校が途中で切り上げになった話を肯定しておいたから。隠しているんでしょ。もちろんボクも、他の人には言っていないよ」

「恭也さんの所へ会いに行ったのか」

「うん。昨日会いに行ってきたよ。名目は三年生が引退するから、後輩として部室に置いてある私物の返却をしにね。ちょっと雑談もして、確認してきたんだ」

「……………それで？」

「あらかじめ言うておくけど、ボクの絵ってそこそこアクセス数があるんだ。もしもネットに接続できなくなったら、これまでに見聞きした事が全部、色んな所で自動的に公開される設定になっているよ。だから転移で口封じはしないで欲しいかな」

次郎は無表情のままに口を閉ざした。

恭也を助けようとする余り、焦りすぎて証拠を残してしまったようである。

証拠なんて無いから知らないと強弁するのは可能かも知れないが、情報が自動的に公開される設定になっているという部分は聞き捨てならなかった。

例え勘違いだと強弁したところで、ネット上に広く流布されれば、政府が調べるだろう。

今の政府にそんな余裕があるのかと問われれば、次郎たちに関しては余裕が無くても調べるという回答に行き着く。

レベルや魔法であれば急速に広まって価値が暴落中だが、攻略特典はダンジョンを消滅させたメンバーしか保有していないはずで、未だに希少なままだ。

加えて、政府が隠していたチュートリアルダンジョンの存在を証

明できる者として、政府から危険視される。

巨大構造物が今年突然現われたのと、数年前から魔物が出て危険だと分かっていたのでは、政府の対策に対する評価が一八〇度変わってくる。

連立与党の労働党と国民党からすれば、次郎を野放しになど出来ないのだ。

この話が広まれば、次郎だけでは無く美也まで被害を受ける。

次郎は大失態した自分に対する舌打ちに堪え、硬い表情の儘に顎をゆっくり前に振って、絵理に話の続きを促した。

「理解してくれて良かったよ。もちろん塚ちゃんにも、ともみんなも絶対に言わないよ。ボクがお願いしたいのは、ボクも仲間に混ぜて欲しいって事だけ」

「仲間に混ぜるって、どういう事だ」

「コウモリが溢れ出てきたのは一週間前で、その時にジロー君と美也っちが転移できていたのはおかしいよね。それならコウモリが溢れ出て来なくても、レベルを上げられるはずだよ。ボクもそれに混ぜて欲しいなって思ったんだ」

王手を掛けたと確信した絵理が、得意気な顔を浮かべながら最後まで押し切ろうとする。

しかし次郎は重苦しい表情の儘、攻め手だった絵理が想像し得なかった回答を返した。

「五月四日の巨大構造物が出現した日、偶然居合わせたんだ。そこから巨大構造物に行って、出てきた金色のコウモリを倒したらこの力が現われた」

「……………えっ、金色のコウモリ？」

「ああ。美也と二人で金色のコウモリを倒したら、特殊な力が手に入った。その後にナカさんから、コウモリと戦ったキタムーが検疫

で連れて行かれたと聞いて、誰にも言わなかったんだ」

「うそっ、そうなのっ!？」

「ああ、恭也さんの病室から行ったから、恭也さんに事実確認しても良いぞ」

次郎の口元から、完全に根も葉もないほら話が飛び出して羽ばたきを始めた。

咄嗟に連想したのは、ゲームで異様に経験値が多いレアモンスターだ。そんな相手に偶然遭遇しただけで、独自の手段など持っていないと誤魔化したのである。

実際に金色のコウモリが存在するか否かなど、ダンジョンを出現させた側で無ければ確認の取りようが無い。

巨大構造物が何なのか分からない以上、金色のコウモリが存在しない事を証明するのは不可能だ。

後から疑われても、女王蜂のように一匹しか存在しなかったのではないかと言い張れば、絵理にはそれ以上の追求など出来ない。

完全に自分の予想を外した形の絵理が啞然としている間に、次郎は心理的な体勢を立て直し、咄嗟に飛び出した嘘を貫き通す事にした。

いずれ攻略特典の存在が世間に知れ渡った後は、苦しい言い訳になるだろう。

しかし金色のコウモリが存在しない事を証明するのは、その後であろうとも不可能だ。

絵理に取り得る手段は、五月四日に本当に次郎が恭也の病室へお見舞いに来たかの事実確認だ。

しかし次郎は実際にお見舞いに行っており、そこからダンジョンへと向かっている。

美也は居合わせなかったが、近くまで一緒に付き合ってきたと口裏合わせを行えば、辻褄が合う。

最悪の場合、美也が骨髓提供を行って家族関係が崩壊した話を話せば、美也だけが病室まで付いて行かなかった名目は立つ。

美也が行くのを止めるように言ったにも拘わらず転移で助けに行き、結果として大失敗してしまった次郎だったが、これ以上の失態は避けるべく気を張り直して絵理に向き合った。

「すまんが、そういう訳だ。力を分け与えるとかは出来そうに無い」
「でもっ、転移で巨大構造物の中には移動できるんだよね。秘密は黙っているから、ボクも混ぜてよ」

「動物で試したけど、転移能力を持たない生物は転移に同行出来なくて消えた。絵理を同行させると、絵理だけどこに跳ばしてしまうか分からない。そんな理由で口封じになって情報を公開されたら困る」

「そ、そんなあっ！」

大嘘を力強く断言された絵理は、絶望に顔を歪ませて悲嘆に暮れた。同人誌を描くオタ女として、それほどまでにレベルや魔法に憧れていたらしい。

なお場当たり的に誤魔化した次郎は、今度は美也との口裏合わせに頭を悩ませる事になった。

23話 夏休みの課題

学生の夏休みは、一般的には海の日が始まる前から、八月末までとされている。

日本列島は地理的な特性により、南の暑い地域では夏休みが長くなり、北の寒い地域では逆に短くなる傾向がある。そして次郎たちの山中県では、今年は七月一六日から八月三一日までの四七日間が夏休みと定められていた。

そんな長期休暇を大半の大人は羨ましがすが、彼らも学生時代には我が世の夏を存分に謳歌したはずで、学生側が大人に遠慮すべき理由は一切ない。

そんな誰もが持つ正当な権利を行使すべく、次郎も夏休みの活用計画を立てた。

すなわち夏休み前に確認したダンジョンの地下一一階以降の踏破こそが、今夏最大の目標である。

もつとも世間では、計画が予定通りに進まない事は往々にしてある。次郎が躓いたのも、そんな数多ある止むに止まれぬ事情に基づいていた。

「夏だ、休みだ、コウモリ探しだつ。ガンバローオー！」

「……………オー」

夏休みの初日に意気揚々と声を上げる小柄なボクっ子に遅れて、サングラスとニット帽とマスクという格好で顔を隠した、活力が著しく乏しい男の声が後に続いた。

付き従う次郎に拒否権は無い。

転移能力を秘密にする引き替えにレベル上げに付き合っただけと言われ、対応を相談した美也からも、それで満足するのならと諦

め気味に首を横に振られている。

そんな美也自身は、転移や力に積極的では無いという体で不参加だ。

あくまで次郎が主導して巨大構造物へ潜り込み、そこで金色コウモリを倒したのであって、秘密を漏らせば巻き込まれた美也に迷惑が掛かるという形にして、絵理が話し難くなる理由を増やしたのだ。建前上は。

本音では、骨髄移植を強制された時以来、数年振りに本気で怒っている。

両親が本来の役割を果たさなかった美也にとって、幼い頃から次郎や祖母と過ごした世界こそが家庭であり、心の安寧を保つ箱庭にして、死守すべき最後の拠り所だった。

絵理の自覚はともかく、結果として脅迫という形で介入された探索活動は、チュートリアルダンジョン自体が次郎の自宅の敷地内にあった事もあり、美也にとっては次郎と二人で行ってきた幼い頃からの庭先探検の延長だった。

もしも脅迫者に秘密を自動公開する保険が掛けられていなければ、箱庭を死守する少女は庭先に現われた害虫を処理するかのよう、望み通り転移で新ダンジョンの最深部まで連れて行き、魔物の爪とスライムの溶解液に解決を委ねたかもしれない。

普通の家庭で育った少年自身はそこまで追い詰められた精神状態ではなかったが、転移能力を露呈させてしまい、まともな生活を送れなくなるリスクを発生させた責任は痛感している。もしも選択肢が無いのであれば、最終的にはそれすら受け入れただろう。

そんな事を思い悩む次郎が、よりによって絵理のハイテンションに着いていけるはずも無い。むしろ絵理が要求を増大させるなどして、強制連行の羽目に陥らないかと心配していた。

「元気が無いぞー。魔法が待ってるんだぞー」

「それは輝く太陽に言ってくれ。夏の炎天下であいつとまともに付き合つと、別れるまでに干からびてしまう」

消極性が、夏の日差しに責任転嫁された。

金色コウモリから始まって、絵理に対する説明の殆どが偽りだという嘔吐きの鼻は、木漏れ日が差し込む周囲の木々の背丈を追い抜きそうなくらいに伸びていた。

そんな次郎と張り合うくらい高い木々が乱雑に伸びる、ダンジョンに程近い県内の森林地帯には、大氾濫の時に飛来したコウモリが多数生息している。

生息数は誰にも把握出来ないが、快晴の大空に向かって顔を上げれば、気ままに飛び回るコウモリの姿をいくらでも見る事が出来る。そんな状況を認識している警察や自衛隊も、未だ途上である市街地の治安回復に忙しく、人の住まない森にまでは手が回っていない。そのためレベルに強い関心を持つ国民が、勝手に退治しに行っている有様だ。

テレビ番組に出た専門家によれば、武器を持ち歩けば銃刀法違反とはなるものの、襲ってくるコウモリに対する自衛は、憲法二五条に定められる生存権の行使にあたり、警察や自衛隊が国内の危険を排除できていない現状では裁判でも無罪に成り得るらしい。

この頻りに流される報道に政府も警察も一切反論しない事から、国民はコウモリ退治が黙認されていると見なしている。

そして現在までに官民合わせて数十万匹は倒したが、残り数十万匹は居るはずだというどんぶり勘定の元、今日も人々は手当たり次第にコウモリを狩り回っていた。

「おーっ、沢山居るね」

夏休み初日となる、土曜日に赴いた森の中には、田舎者の想像を超える人々が集っていた。

休日に行き先の無い田舎では、郊外的大型商業施設に人が集まる傾向がある。人ごみを嫌がる人もいるために数千人程度で済むのだが、それが次郎たちの山中県における平時最大の集客数だ。

しかし森に集まった人の数は、大型商業施設の数倍はありそうだった。

森の深部へと向かう途中にすれ違った人達は、親に連れて来られた小学校低学年から、六〇代くらいの人までの年齢層と幅広く、金属バットや投網、手製の槍など様々な武器を携えていた。しかも彼らは巨大コウモリを探し出すべく、茂みや枝葉の中まで掻き分けている。

「どうして人が、こんなに沢山いるんだよ」

「そんなの当たり前だよ。だって力とか魔法が手に入るんだよ」

「確かに群がるだろうけどさあ」

「ジローくん、分かってないね。もしも回復魔法が覚えられたら、将来は理学療法士とか作業療法士みたいな、医療系の資格になるかもしれないんだよ。塚ちゃんのお母さんも、塚ちゃんに勧めたし」

「ほほう？」

塚原愛菜美の母親は、現役の看護師長だ。その母親が娘に勧めていたのであれば、少なくとも医療現場では可能性を感じているのかもしれない。

日本では、返済不可能な国債の利子を自転車操業で返すという最悪の悪循環に加えて、少子高齢化で急速に税収が減り、一方で社会保障費が増大の一途を辿った結果、近年では世界に抜きん出て高い税率を掛けざるを得なくなっている。

そのため国民は真っ当に働いても暮らしが良くならず、夫婦揃ってそれなりに良い仕事に就くか、詐欺や犯罪でも行わなければ、半世紀前には人並みだった生活すら成り立たなくなっている。

であればこそ、親として子どものために魔法を覚えさせたいとい

うのは、至極真つ当な考え方なのかもしれない。

「歯を再生できたら歯科医師の代わりにかもしれないし、美容整形とか、髪の毛の再生とか、何が出来るか分からないからね」

「道理で中年の男までいるはずだ」

「みんな凄いよね。レベルが上がり難いのに」

「全くだ」

コウモリの大氾濫から、未だに僅か一二日。

だが百万匹という膨大な数のコウモリを相手に、一億人もの国民が検証を行った結果、次郎も知らなかった様々な情報が急速に集まっている。

例えば、一〇代半ばまでの子供であれば、コウモリー匹でレベルが一に上がる。その代表格は、沖縄で在日米軍が撃ち落としたコウモリの群れにトドメを刺して回った Syllphid で、彼女達は数十匹のコウモリを倒してレベル三から四に上がっている。

だが成長期を過ぎると、数十匹から数百匹倒さなければレベルが上がらなくなる。そして年かさが増す毎に、必要な魔石量は増えていくのだ。

当初は単に成長期後はレベルが上がらないと思われたが、力を手に入れた人からの報告動画があり、レベルアップの条件が違うのだと判明した。

そのため中年がレベルを上げるのは、極めて困難だと考えられている。コウモリが狭い通路に密集して襲い掛かってくるダンジョンとは異なり、地上には天井が無いのだ。数十匹、数百匹の飛び回る巨大コウモリを倒すには、相当の創意工夫が不可欠だろう。

それでも彼らは此処に居る。髪の毛のために。

なお理屈は不明だが、倒した人で無ければ魔石に触れても効果が無い事や、銃で倒してもレベルが上がり難い事が知られてきている。

「運動部とか肉体労働系でも、レベルがあると凄く便利じゃない。文化部とか腰痛に悩むアニメーターさんだって欲しいよ」

「概ね納得した。すると絵理は、アニメーター志望か？」

「違うよ。ボクは魔法を使いたいんだよ。これはアイデンティティの問題で、何もしないで見送る事は出来なかったんだよね」

「アイデンティティ？」

「自己同一性。ボクがボクである事。そこにレベルや魔法があつて、さらに凄い力があるのに、黙って見ていたら死んでも死に切れないよ」

「はあ、流石だ」

次郎は一応理解を示し、周囲に人が居ない事を確認すると足元から一〇個ほどの小石をまとめて拾った。

「それじゃあレベル上げをするか」

「どうするの」

「空に一杯居るだろ。石を投げて叩き落とす」

「凄く高いよ？」

悠々と飛び回るコウモリの高さは、最低高度でもビルの上五、六階に相当する。高く舞い上がれば数百メートル上空だ。

その高さでは、最も近くに寄った時ですらレベル一や二の投石や魔法では届かないだろう。例えば奇跡的に何かが届いたとしても、巨大コウモリの体勢を崩すには足りない。

だからこそ人々は、枝葉や茂みの中に潜んでいるコウモリを探しているのだ。

「確かに高いよなあ。ちょっと離れていてくれ」
「うん」

絵理が離れるのを見届けた次郎は、野球選手のような投球体勢で構えると、コウモリの動きを悉に観察した。

コウモリは群れており、数匹から数十匹単位で飛行している。

ダンジョンを飛び出したコウモリは、一昼夜暴れた後は一斉に森や山へ逃げた。

時折人に襲い掛かったりはするものの、基本的には自由気ままに飛び回っている。

そんな付近を飛行している群れのうち、接近中の大きなコウモリの群れに狙いを定めた次郎は、大きく振りかぶって、握っていた石をまとめて投げ付けた。

軽く風圧が生まれ、あまり離れなかった絵理の小柄な身体を蹠跟めかせる。

「きゃあっ」

思わず蹈鞴を踏んだ絵理が悲鳴を上げる間に、飛び上がった小石たちはコウモリ目掛けて突き進み、そのうち一匹の身体に命中した。胴体や翼を穿たれたコウモリが、急速に高度を落としてくる。

「絵理はそこにいる。ちよつと連れてくる」

「ちよつと、有り得ないからっ！」

道無き森の中を駆け出した次郎は、木々の合間を縫いながら、コウモリの着地点に向かって迫っていく。

走行速度は、シルフィード Sylphidで肉体系に振ったアイシエを始め、コウモリを沢山狩れた一部の人なら、これくらいは出せるだろうという程度だ。

美也と打ち合わせた結果、金色コウモリで稼いだ上にボーナスポ

イントを肉体系に振った次郎は、それくらいは出来るという事にした。

但し検疫は困るので、誰だか分からない変装した上で、同行する絵理にもそれを求めたのだが。

最近の次郎は、以前に増して慎重になった。

部室では絵理の隠しカメラがある事を想定して、ダンジョンの会話は一切してない。メールなどにも証拠は一切残さず、直接会った時にだけ打ち合わせをしている。

本来であれば、もっと早くに対策をして然るべきだった。部室に部員が来るのは当たり前で、絵理に知られたのは明らかに次郎の過失に因るものだ。

絵理に知られてしまった事態は、もはや取り返しが付かない。もっと致命的で取り返しの付かない事態で発覚しなくて良かったと、せめて前向きに捉えるべきだろうか。

道中で啞然とする何人かを追い抜いた後、修正した落下地点に辿り着き、空から振ってきたコウモリの翼を掴んで取り押さえた。

捕獲したコウモリは、左の翼が付け根から折れており、飛行不可能な状態だった。

次郎は念のために右の翼も折ると、先程すれ違った人達を避けるように若干迂回しながら、絵理の元へ引き返し始めた。

「ノルマ達成かな？」

疑わしげな次郎の予感は的中した。

これが数日歩き回った結果であれば、絵理も矛先を収めただろう。しかし数分での退治があまりに楽すぎたためか、秘密の保持が割に合わない駄々を捏ねられてしまい、丸一日掛けて絵理がレベル三に上がるまで付き合わされた。

最後の方では絵理が様々に次郎の気を引こうとしてきたが、反省

していた次郎は一線を引き、当初の取引条件をきっちりと成立させた。

24話 発覚

コウモリ大氾濫に続くように、夏の熱波が襲い掛かってきた八月一日。

絵理のレベル上げから解放された次郎は、美也と共にダンジョンの地下一二階を探索していた。

夏休みの探索では、次郎が美也の家まで迎えに行き、部活や市立図書館、街などに出かけてくると伝えてから連れ出し、次郎の家が所有している杉山の中から転移を使って、ダンジョンの攻略地点まで一気に跳ぶ。

帰宅時も次郎が家まで送らなければならないが、これは七村市にまでコウモリが現われるようになった結果、安全のために祖母から課されたルールだった。

なお次郎自身の場合は、空手のメダリストである母が、男なら冒険の一つくらいしておくべきだという漫画のような考え方を持っているため、夜中に散歩こうとも何も言わない。コウモリの一匹でも狩って持ち帰れば、さぞや褒めてくれるだろう。

現在潜っている地下一二階の魔物は、巨大クロオオアリだ。

地球に実在する種ではあるものの、サイズは胴体だけでも中型犬に等しく、長い手足と触覚まで含めれば大型犬と遜色なく見える。

魔物同士で比較するならば、地下一〇階の巨大力マキリや、地下一二階の巨大オニヤンマが同サイズになるだろう。

カマキリやオニヤンマは鋭い鎌や顎を持ち飛行するが、クロオオアリは強靱な顎に加えて凄まじいパワーと硬い身体を持っており、しかも大集団を形成する。

地上に現われた場合は兎も角、ダンジョン内においては大集団で物理的な壁を形成するクロオオアリの方が厄介だろう。そのため次

郎と美也は、地下一二階で足踏みしないまでも、かなりの鈍足を余儀なくされた。

「美也先生、土槍の射出で道を作っても、黒い影が奥からどんどん溢れてきます」

「それなら、もうお家に帰る？」

「いいえ。先生の火炎放射器で『汚物を消毒だー』作戦を提案いたします」

「次郎くん、言い方が汚い」

ボケが流されるや否や、通路を埋め尽くす巨大な炎が形成された。炎の後ろには風の防護膜が張られており、二つの魔法は世界への産声を上げると同時にゆっくりと前方に進み始めた。

炎に巻かれた黒い塊の動きは次第に緩やかとなり、タンパク質を焼いた臭いが周囲に立ち籠め、パンパンと膨張した体内の水分が身体を突き破って弾け出す音が聞こえ出す。

まるでフライパンでポップコーンを作った時のように、通路の隅にドロドロに溶けたオオクロアリの塊がこびり付いていった。そこへ石槍が突っ込まれ、同時に炎が流し込まれて、魔石を経験値へと変えていく。

「階層と同じレベルだと、ちょっと辛いかも知れないね」

視界を埋めていたクロオオアリの群れを倒しきった後、美也から魔物の再評価が行われた。

レベル三九の次郎と三四の美也にとっては、クロオオアリも纏めて薙ぎ払える相手ではない。そのため相手の脅威度を推し量る事は難しいのだが、地下一〇階のカマキリに比べると、地下一一階以降の脅威度は上がっているように感じられた。

「地下一階のコウモリだって、レベル〇の人が沢山倒している。武器があれば、何とか……………！？」

先に気付いたのは、美也だった。

彼女は人差し指を口元で立てると、いつでも転移で離脱できるように、転移先の録画用に持ち歩いている携帯ペン型カメラで周囲を撮り始める。

その様子を見た次郎は言葉を飲み込むと、後方に向かって石槍を構えた。やがて二人に向かって、新たな黒い群れが近付いてくる。

群れの一部には、POLICEという白文字が描かれていた。

頭部を覆い隠すポリカーボネート製の特殊ヘルメットが被られ、左手にはファイバーコンポジット製（炭素繊維強化炭素複合材料）の盾が構えられ、右手には自衛隊のお下がりと思わしき二〇三六年製の通称・三六式小銃まで構えられていた。

その横には、射撃時に保護するために右肩パッドが大きくなった戦闘防弾チョッキ三型改と呼ばれる迷彩服を着込み、ケプラー製の三三式迷彩帽を被った武装集団も居る。

その新たな集団がアサルトライフルの銃口を向けながら、投光器で次郎たちの視界を奪いつつ、真っ直ぐに迫ってきていた。

「お前達、何処からダンジョンに入った！」

石槍と相対した相手は、日本語を話した。

次郎が始めてダンジョンに潜り始めてから二年三カ月。

以来、洞窟内で会話した相手は美也しか居なかったが、その記録がついに打ち破られた。無論、二人にとっては絵理の乱入に勝る最悪の事態だ。

次郎は相手の「武器を捨て、両手を挙げる」という警告とほぼ同時に、土魔法で相手との間に土壁を生み出した。続いて闇魔法を放ち、投光器の照射を阻害する。

次郎の魔法発動に続いて美也も光魔法で生み出していた明かりを消し、火魔法で身体の放熱を遮って暗視スコープを無効化した。

一瞬で生まれた暗闇と障害物が山中県警の誇る機動隊員達の目を眩ませた隙に、次郎たちは反転してダンジョンの奥に向かって駆け出した。

「待て、止まれっ！」

そんな警告に前後して土壁の端が対抗魔法で崩され、隙間から覗いた三六式小銃の銃口が激しい火花を散らした。

発砲音が立て続き、直後に右脚が衝撃を受ける。

思わず身を竦めた次郎は、一瞬の硬直後に気を持ち直すと、すぐさま美也の手を引いて奥へと駆け始めた。

二人の後を追おうとした機動隊員たちが土壁に阻まれる僅かな間に距離が開く。それが決定打となって両者は互いを見失ったが、それでも次郎は暫く奥へと走り続けた。

時折出てくるクロオオアリを追っ手に対する壁にするためにすり抜け続け、どうしても回避できない場合は倒すのでは無く退かしながら強引に道を作っていく。

「どうするの？」

暫く高速で疾走した後、完全に引き剥がしたと確信できた頃、話しかけるタイミングを見計らっていた美也が口を開いた。

チュートリアルダンジョンと異なり、新ダンジョンは国家に把握されている。そんなダンジョンに潜っている以上、警察との遭遇はいずれ起こり得た事態だ。

二人は最初から顔を隠しており、捕まりそうになっても転移で逃げ出す事が出来る。

事前に遭遇時の対策も用意しており、それも上手く機能して出し

抜けた。

それでも二人にとって想定外の事態は発生していた。

「撃たれた」

「身体を狙っていなかったから、警告射撃だと思うけど……」

「勿論そうだろうけど、手元がズレたのか足を撃たれた」

次郎は立ち止まり、右脚を上げてズボンを引っ張って見せた。

ズボンは右脚のふくらはぎ部分に穴が空いており、破れた部分から覗いた皮膚は赤くなっている。さらに靴にも穴が空いており、脱ぐと弾頭が転がり落ちてきた。

「大丈夫なの？」

途端に真剣みを帯びた美也が、次郎の撃たれた足を覗き込んだ。

「ああ、血は出ていない。何しろレベル三九で防御五だからな」

「本当は怪我してるとかだったら、ちゃんと言って。銃創は弾が回転して肉が抉れるし、弾が体内に残って危険だから」

「いや、マジで大丈夫。回復魔法もいらないと思う」

「ちよつと見せて」

「……………はい」

転移能力を絵理に知られて以降、次郎は一時的に美也に逆らい難くなっている。素直にズボンの裾を上げ、靴下を脱いでみせた。

光魔法で明かりを出しながら、納得するまで傷を観察した美也は、確かに銃弾を弾いているようだ結論づけると安堵の溜息を吐いた。

「撃たれたのは予想外だった」

「うん」

「美也に当たっていたら拙かったな」

「わたしもレベル三四で防御三だけど？」

「俺よりは柔らかいだろ。それに機動隊に撃たれると、かなり精神に来るな」

機動隊は、全国で約三〇万人居る警察の一部隊だ。

本機機動隊一万名の他に、状況に応じて管区機動隊や第二機動隊が編成されて最大三倍にまで膨れ上がる基幹部隊の一つである。

通常の警察では困難な任務に投入される性格上、体力のある隊員ばかりで構成され、アサルトライフルなど各国の対テロ特殊部隊と遜色ない装備も持っている。

出動目的は治安確保であるが、内容に応じて装備が変わり、特殊任務においては最初から武力制圧も辞さない。そしてこれは、どう考えても特殊任務であろう。

彼らの公式な任務は巨大構造物の封鎖であり、ダンジョンから溢れ出したコウモリ退治を行う自衛隊と共に任務に当たっているというのが世間の認識だが、実際にはダンジョン内でもしっかりと活動している。

いかに集団とは言え、ここまで潜って来られるレベルから推察するに、おそらくはチュートリアルダンジョンが封鎖されていた頃から編制されていた部隊なのだろう。

経験値が最低でも一〇〇倍以上も必要な大人の彼らがレベル一〇に達するためには、最低六万匹ほどのコウモリを倒す必要がある。

一日一〇〇匹倒しても二年近く必要で、今の新ダンジョンが出てからではとても到達不可能だ。

レベルはそこまで高く無さそうだったが、流石にレベル三や四でこの場に来るのは自殺行為だ。チュートリアルを経験していないなら、いくら何でも地下一二階まで来られるはずが無い。

「俺たちが倒した魔物の死骸を見つけて、一斉搜索でもしたのかな」

「そうかもしれないね。これからどうしようか？」

「せっかくマップを埋めて良いところまで来たのに、ここで収納能力を諦めるのは惜しい」

「そうだけど、撃たれたんだよ」

「だからこそだ。あいつらは不法侵入者を捕獲するつもりなのかもしれないけど、そもそもダンジョンは日本の地下じゃなくて、巨大構造物の入り口から別空間に繋がっている」

次郎の断言には、根拠がある。

地下に広がるダンジョンは、都市を丸ごと飲み込むほど大規模だ。それにも拘わらず、巨大構造物が出現した新宿などの地下にある地下鉄や下水管などが、ダンジョンに押し潰されず綺麗に残っているのだ。

構造物だけでは無く、地盤も水脈もそのまま残っている。

ダンジョンの上と思われる場所から地下に向かって地面を掘っても、ダンジョンには行き着かない。

そのためダンジョンは日本の地下では無く、別空間に在ると考えるのが順当だ。

「従ってダンジョン内は日本国外になるから、日本の国内法が適応されない。俺たちは、公海上で海賊船から止まれという警告と同時に実弾で撃たれたようなものだ」

「つまり、結論は？」

「海賊船に従う謂われは無い。これからもフロンティアを目指して航海を続ける」

「レベル一〇にも届いていないみたいだから、私達を追っては来られないと思うけど。でも先制攻撃された証拠は、しっかりと残しておこうね」

美也は作動を続けている携帯ペン型カメラで、次郎の撃たれたズ

ボンや靴、皮膚や弾丸などを念入りに撮影していった。

次いで遭遇時の状況を、細部まで詳しく口頭で補足説明して記録を終える。

「後で動画をコピーしておくね」

「……………分かった。任せる」

「これは家に置いておきたくないから、ますます収納能力を取らないといけなくなっただね」

美也の同意が得られた次郎は、再びダンジョン深部へと進み始めた。

25話 巨大蜘蛛

高校一年生の夏休みが尽きかけた八月下旬、次郎たちが何をして
いるかと言えば、鬼ごっこである。

高校生が夏休みに鬼ごっこに耽るとは実に巫山戯た話であるが、
鬼たちは金棒の代わりに三六式小銃を担ぎ、地図や無線機を駆使し
て集団で襲ってくるのだから、逃げる方も本気にならざるを得ない。

もちろん当初は、警告の呼び掛けが行われた。

しかし逃げ手が追跡を躲し続け、威嚇射撃も効果が無かった事か
ら、鬼側が次第に対応をエスカレートさせていったのだ。

最初の明確な意志に基づく発砲は、麻酔銃で行われたようである。
幸いな事に次郎の肌は通らなかったが、もしも弾けなかった場合、
いかに次郎と言えど薬物には勝てなかっただろう。

以降、次郎と美也は風魔法で徹底的に吹き散らす対策を採り、先
方は蹠跟めいて見せて「公務執行妨害」などと謎の呪文を唱えて対
応を過激化させた。

今では相手も、容赦なく三六式小銃やダンジョン用のHK四一六
を撃っており、武器使用に関しては魔物に準じる扱いを受けている。

相手方から攻撃してきた証拠は揃えているが、それをネット上に
公開しても、即座に消されるか検索に載らないようにされて、すぐ
に身元を押さえられるだろう。

撮影したデータだけは溜まりに溜まって、専用のハードディスク
を追加購入しなければならなくなったほどだが、裁判での有効性は
極めて懐疑的だった。

話好きの次郎の父曰く、父が学生の時分には、司法試験に受かつ
て司法修習生になった者のうち、模擬判決文で国に有利な判決文を

書いた人だけが裁判官になれて、そうでない人は弁護士になつていたそうである。

法律を教える教授は、司法試験に通つて将来は裁判官を目指したいと思つた場合、国に有利な判決文を書くようにと父を含めた学生に話した。

その後に出す判決も出世に影響するため、地方裁ならまだしも、高裁や最高裁に控訴・上告すると、上に行くほど国に有利な判決が出るのが日本の裁判制度らしい。

確かに次郎の父が若かりし頃には、契約しなくても支払いを命じるといふ、民法上の契約行為を馬鹿にするような判決が、公共放送に関してよく出たらしい。

日本で三権分立が行われているか否か、次郎は試してみる気にはなれなかった。

かくして裁判で負ける気が一切無さそうな鬼達は、強力な仲間を次々と呼び集めて追い回してきた。鬼の中には転移能力を持つ者も居るようで、新たな人員にはレベルが一〇を越えている者すら居た。そのため次郎と鬼達との遭遇頻度は、上がる一方だった。

次郎たちの方が遙かに高レベルで、相手に先行しており、転移回数も多かった為に捕まらずに地下一五階まで辿り着けたが、この先に地下一六階以降があるならば、流石にこれ以上の回避は厳しくなる。

大人がムキになるなと言いたい次郎だが、相手は鬼側の人数制限というゲームの根幹となるルールを守ろうとはしない。

明らかに山中県のダンジョンに本腰を入れており、転移能力を持つチュートリアルダンジョン攻略者の次郎たちを捕らえるか口封じしようとしていた。

次郎と美也は、一五階に蔓延る大型犬サイズの女郎蜘蛛が生み出

した巣を潜り抜けると、後方の鬼達の足元に石壁を出現させて転ばせ、蜘蛛の巣に纏わり付かせている間に大広間から次の通路へ飛び込んだ。

直後、雷神と風神が共鳴したかのような怒濤の銃声が鳴り響き、魔法の豪雨が吹き荒れて、最後に遙か後方から拡声器による罵声が轟いた。

聞き飽きた罵声を右から左へ聞き流すと、通路の先に新たな広い空間が見えてくる。

次郎は振り返りもせず、美也に続いて飛び込んで中央まで走った。ダンジョンはアリの巣のように、部屋と部屋を結ぶ通路がいくつかが繋がっている。

そのため二人は次の通路を搜したのだが、その部屋には入ってきただけで通路以外に道が一つも無かった。

「これって!？」

「あいつら、入って来やがった」

その大広間の床は、暗さに因らず最初から真っ黒だった。即座にチュートリアルダンジョン最奥を連想した次郎は、ここが新ダンジョンの終着点だと理解した。

当時との最大の違いは、追っ手が着いて来た事だ。

「くそつ、ボス部屋だ!」

背後を振り返ると、既に二名の機動隊員が広間へ踏み入っており、後方に向かってボス部屋に侵入したという警告を発していた。

次郎は咄嗟に、通路の入り口に向かって全力で可能な限り巨大な土壁を造り出した。

足元から一気に迫り上がった土壁を越えて、三人目の機動隊員が

飛び込んできた直後、硬い岩に変わった壁は鬼達の後続を完全に遮断した。

慌てて銃撃や魔法が鳴り響くが、直後に岩壁から僅かに覗いていた通路が消え失せる。

「どうするのっ!？」

主語は無くとも、対象が三人の追っ手である事は明らかだ。

次郎は、あまりにしつこい鬼達が手にしているアサルトライフルを憎々しげに睨むと、ついに一線を越える決断を下した。

「あいつらを殺す。土壁で左右から挟むから、正面から炎で焼いてくれ」

「……………」

次郎は最初から、機動隊員に対して根強い不信感があった。

チュートリアルダンジョンの存在を隠し、土地を強制的に接收しながら密かに攻略を続けてきた事は今更だろう。

新ダンジョンのコウモリ出現と同時に千人ほどの犠牲者が出ているが、政府はチュートリアルダンジョンの情報を隠ぺいしたままだ。そして秘密を知る次郎たちを追い回し、最終的には目撃者の口封じをせんとばかりに、三六式小銃で撃ち殺そうとしてきた。

そんな機動隊員の行為は、国家という枠組みで見れば論理的な行動だ。

国家とは、人間が形成する最も大きな群れである。

鳥や魚を見れば一目瞭然だが、群れとして互いに協力し合えば、個々の生命体が各々で活動するよりも、ずっと生存や子孫を残せる可能性が高まる。

そのような数百の群れが凌ぎを削る国際社会において、群れを揺

るがす秘密を知った個体を駆除する事は、群れを維持する側から見れば真つ当な行為であろう。

だが、自身が生存する可能性を高めるために群れに所属しているにも係わらず、群れから殺されそうになった場合、一個体は抵抗こそが生物として真つ当な行為となる。すなわち次郎に、抵抗を躊躇う道理は無い。

次郎が両手を広げて左右から挟むような動作をしたのと、機動隊員が三六式小銃を構えるのは、殆ど同時だった。

直後、後方を遮断されている機動隊員の左右から、土壁が勢い良くせり上がった。

対する三六式小銃も高らかに雄叫びを上げ、次郎の身体に銃弾の雨を浴びせる。

発砲音が鳴り響いた瞬間、美也の鎧もついに外れた。機動隊員の前面に巨大な炎と風が生み出され、津波のような勢いで勢い良く突き進んでいく。

機動隊員は、後方の退路をダンジョンの壁で塞がれており、左右を次郎の土壁に挟まれ、正面から迫る炎の嵐を避けようが無く、全力で放たれたプラズマの嵐に全身を丸呑みにされた。

火魔法は純粹な酸素の燃焼では無く、魔力の素のようなもので発生している。

いかに化学繊維で防火対策をしようとも、魔力が防護服を透過して内側から魔力の素のようなものを燃やすのでは防ぎようが無い。

美也の検証では、魔法に対抗出来るのはレベルや魔力、属性などの強さだ。

そして機動隊員のレベルや魔力などは、攻撃を行った美也には到底及ばなかったらしく、僅かに足掻いた後に動かなくなった。

人間を焼いた臭いが、次郎の安いマスク越しに鼻を突いてくる。

次郎は眉を顰めながら焼死体に駆け寄り、三体の首辺りを石槍の矛先で順に貫いてトドメを刺していった。

石槍を握る次郎の手には、焦げた魚の皮の表面を破るような感触と、内側の生焼けの肉を貫く感触が立て続けに伝わってきた。

その不快な間食の中で、美也では無く自分がトドメを刺したのだという事実だけに、僅かな救いを感じられた。

今回の悪行に関しては、美也は次郎の従属状態だったという事にして、次郎自身が命令から実行までを行った最大の責任という事にしておきたかった。次郎にとっては明らかに正当防衛であり、裁かれる筋合いはないとも思っているが。

「次郎くん、怪我はどれくらい!?」

「額から血が出ているけど、目だけは庇った。それよりもボスだ」

大広間は直径一km、短径五〇〇m、高さ二〇mほどの楕円形だった。

そんな円の中心には黒い渦が二つ、床から天井に向かって渦巻いていた。

渦の中心には軽トラック並の巨大蜘蛛が合計二匹出現しており、忙しく前脚を動かしながら、多眼で周囲の端から端までを隈無く見渡していた。

対するは次郎と美也、そして既に死体となっている機動隊員を合わせて五人。

チュートリアルダンジョンで巨大カマキリが現われた時に、次郎と美也の二人に合わせたように二匹だった事から、ボスの数は入ってきた人間に連動している可能性を考えた。

しかし、実際にはそうでは無いらしいと理解する。

巨大カマキリは雌雄のペアだったが、巨大蜘蛛も雄雌のペアなのかもしれない。

おそらく、相当数のチュートリアルダンジョンを確保していた政府側は知っているはずだ。もしかすると死亡した山中県警の機動隊員も、情報を得ていたのかも知れない。

だが次郎が他所から得られる情報は、地上のコウモリ退治の結果ばかりで、大半は自分が確認した事象を組み立てていくしか無かった。

巨大蜘蛛達の周囲の黒い床面からは、まるで沼の底から這い上がってきたかのように、地下一五階で目にしてきた大型犬サイズの大蜘蛛たちが続々と沸き上がっている。

「小さい方、どんどん増えているよ」

「分かっている。そっちはレベル一五程度だから、俺たちの敵にはならないはずだ。ボスもチュートリアルの時を考えれば、レベル三〇くらいだろう。一体ずつ確実に仕留めていくから魔法で援護してくれ」

「うん」

大型犬サイズの女郎蜘蛛たちは、それほど生易しい存在では無い。糸を出されれば、次郎たちのレベルでも粘ついて動きを阻害されるし、それが顔面であれば視界や口を塞がれる。闇魔法の毒を流されれば幾許かの痺れを感じるし、その際には魔法での対応が必要になる。

時間が経つほど敵が増えて不利になると判断した次郎は、楕円形の空間の中央に佇む一体に狙いを定めると、力強く踏み込んで一気に飛び出した。

対する巨大な女郎蜘蛛は、次郎に向き直ると複眼で睨め付け、口を大きく開けて鋭い牙を蠢かせながら、すぐさま前足二本を大きく振り上げて迎撃の構えを取った。

前脚からは鋭い爪が伸びており、それらが次郎の身体に狙いを定めている。

「餌が欲しけりゃ、共食いでもしてろ！」

先手を打った次郎の手から石槍が投げ付けられ、巨大蜘蛛の口元に向かい一直線に伸びた。

巨大蜘蛛は槍の速度に対抗しきれなかったのか、鋭い石槍の矛先を受けた左頬付近が弾け飛び、衝撃で蜘蛛は大きく仰け反る。

そこへ阿吽の呼吸で美也の指先から赤い閃光が迸り、炎となって挟れた左頬を内外から焼き払う。

連携攻撃を受けた巨大蜘蛛は、堪らず後ろへ飛び下がった。

これが人間同士の戦いであれば、傷付いた仲間の穴を埋める形で仲間がフォローに入っただろう。しかしもう一体の巨大蜘蛛も、周囲に沸き続ける大蜘蛛からも、逃げた巨大蜘蛛を庇うような素振りは一切見られなかった。

追い打ちとなる二本目の石槍が投げ付けられ、飛び下がった巨大蜘蛛の胴体に命中して深く突き刺さる。傷口からは体液が吹き出し、黒い床面に大きな染みを作った。

動きを落とした巨大蜘蛛に対し、立て続けに三本目、四本目と石槍が投げ付けられていく。

蜘蛛は生来の捕食者だが、人間も石器を用いて大抵の動物を狩猟してきた歴史を持つ捕食者の一種だ。遠距離から一方的に石槍を投げ付けられた巨大蜘蛛は動きを弱らせ、ついには蹲った。

次郎が二匹目の蜘蛛を抑えるべく攻撃対象を移す中、美也は火魔法で一匹目の巨大蜘蛛に魔法攻撃を加えながら、湧き続ける無数の大蜘蛛が放つ糸を風魔法で吹き散らし、戦場を抑えにかかる。

巨大蜘蛛の前脚と毒を警戒した次郎は、ひたすら石槍を投げて相手を弱らせる戦法を取った。巨大蜘蛛が迫ってくれば下がって距離を取り、それでも接近を許した時にだけ石槍を振り回す。

そんな人間と巨大蜘蛛との戦いは、チュートリアルダンジョンから続く美也の徹底レベル上げ路線に従い続けた人間側に明らかな軍配が上がりつつあった。

相手を上回る身体能力を活かして位置取りを変えながら、てんで

バラバラな蜘蛛を各個撃破で削り続ける。

まるで石器時代の原始人のようにマンモスならぬ巨大蜘蛛の巨体に石槍を投げ続け、魔女裁判では即刻死刑になりそうなほどの炎魔法を浴びせ続け、足元に纏わり付く大蜘蛛を蹴り飛ばし、毒を回復魔法で癒やしながらかい続けた。

だが、いかにボスを抑えようと、無数に沸き続ける大蜘蛛まで回避するのは困難だ。

ふと美也に視線を向ければ、爪に引っかかれた上着が布きれ同然のボロボロになっており、そこから白い下着と素肌が見えた。ちなみに下着も半分くらい破れている。

次郎は、そちらに視線を奪われた。

「次郎くん！」

「すまん。色々と荒んだ心を上書きしていた」

「わたしたち、何しに來たの！？」

「ラストサマーバケーション。お土産は収納能力」

「だったら、あれを倒してきなさい」

「ういうい」

斃命された次郎は、二匹目の巨大蜘蛛の側面に回り込むと、石槍を全力で投げ付けた。

二匹目の巨大蜘蛛は、身体を傾けて迫ってきた石槍を素早く躲すが、だが躲した先には一匹目の巨大蜘蛛が居て、一匹目は突然死角から現われた石槍を躲せずに頭部に直撃を受けた。

巨大蜘蛛が軽トラサイズとはいえ、動物に例えれば象が頭を石槍で勢い良く貫かれたようなものだ。

しかもレベル四〇で身体能力を強化している次郎は、巨大蜘蛛の力を遥かに上回っており、土魔法に特化して上げているために凶器の破壊力も抜群だった。

投石器で石を投げ付けられたかのように、あるいは牽引式バリス

タで矢を深く突き刺されたかのように、頭部に直撃を受けた一匹目の巨大蜘蛛は頭を破壊されて倒れ伏した。

その傷口へ、八つ当たり気味の炎が容赦なく注ぎ込まれる。

巨大蜘蛛は内側からの防ぎようのない業火に蹂躪され、完全に事切れた。

残る二匹目の巨大蜘蛛に対し、次郎は投槍の継続で相対した。常人が見たら、何が起っているのか分からないかもしれない。

次郎はテレビ局が超スロー再生で放送するような一瞬で全力の投槍を行い、飛ばされた石槍は吸い込まれるように二匹目の巨大蜘蛛の首を貫いた。

それは人間も動物の一種類だと改めて考えさせられるような、他の野生動物に全く劣らぬ速度で繰り出した攻撃だった。

人外の領域に軽く踏み込んだ次郎に続き、美也も傷口に向かって炎を流し込む。

容赦の無い追撃の炎が二匹目の巨大蜘蛛を焼き焦がした後、黒い床面が灰色に変じて、今まで無数に沸いていた大蜘蛛の出現が停止した。

26話 変化

巨大蜘蛛の撃破後、最初に行ったのは機動隊員の服を脱がせる事だった。

ボス戦を行った次郎と美也の服は何れもボロボロで、互いに目のやり場に困る状態だった。

チュートリアルダンジョンを攻略した時のように、ダンジョンがあつた場所に跳ばされた場合、半裸で駅前に放り出されてしまう。

山中県警の機動隊員は美也の魔法で焼かれたが、化学的な燃焼ではなく魔法による対人攻撃であり、衣服や装備は半焼け未満で使えるものが多かった。

そんな三人分の服を二人で分けて、エセ機動隊員の出来上がりである。

サイズが合っていないが、転移で次郎の家の杉山に隠してある服を回収して着替えるまでの応急処置なので、その点には目を瞑った。やがて即席のコスプレイヤーが誕生した後、ようやく二人は現実と向き合った。

初級ダンジョン 総合評価 A

攻略特典を選択してください。

- 一・能力加算 A (BP + 一二)
- 二・転移能力 A (一回ノ一日)
- 三・収納能力 A (二〇フィートコンテナ分)

虚空に見えている内容は、二人とも変わらなかった。いずれも総合評価 A であり、かつて見た S 評価の時の半分の特典内容だった。

「機動隊員の三人分が混ざって、人数とか平均レベルで評価が下がったのか。それとも追いかけてこで探索不足だったから、踏破率みたいなものが低かったのか。あるいは人間の死亡率が影響したのか」
「それより次郎くん、初級ダンジョンっていう文字、ちゃんと見えてる？」

「ああ。つまりダンジョンには、次の段階があるわけだな」

ダンジョンを生み出した側にとって、新ダンジョンは初級ダンジョンのつもりであつたらしい。

わざわざ日本人に通じるように表記している以上、この後には中級や上級のダンジョンが控えていると考えるべきだろう。

但し、それらのダンジョンがいつ何処に出るのかは分からない。

初級ダンジョンがいくらか攻略された後であるのか、それともチユートリアルダンジョンの時のように四年ほど経ったら変わるのか。仮に四年後であれば、現在一六歳の次郎は二〇歳になっている。

そうであるなら、初級ダンジョンでレベル上げに勤しみたいところであるが、山中県警機動隊の溜まり場となっているダンジョン内では難しいだろう。

「それで特典はどうしよう。これからも追いかけられるなら、能力加算を取るのもありかも」

二人の能力の割り振り方は、典型的な前衛と後衛の特化型だ。

それ故に集団戦となった時、美也は真っ先に狙われる。

「俺は収納能力を取って、あの三人を運ぶ。美也も、収納能力が良いんじゃないか。次のダンジョンで俺たちが特典を得られる保証なんて、無いんだから」

「もう二度とダンジョンに来ないならそれで良いんだけど、次の機会があるなら収納を選ぶと後悔するから。わたしが収納を取るまで

は、次郎くんがわたしの荷物も持ってくれたら嬉しいかな」

「分かった。じゃあ、そうしよう。二人とも特典を取ったら多分跳ばされるから、俺が先に選んで、あいつらを収納で片付けられないか試してみる」

「うん。それじゃあお願い。どうしても駄目なら、魔法が転移で何とかするけど」

「まあ、収納でやってみる」

次郎が特典を選ぶと、虚空に表示されているステータスが変化した。

堂下次郎	レベル四一	B P O	転移 S	収納 A
体力六	魔力八	攻撃五	防御五	敏捷五
火一	風一	水一	土八	光一
			闇五	

それから、あまり心躍らない作業が粛々と行われた。

結論として、人間は収納できた。次郎が極めて不快な作業をやり遂げたのは、美也には手伝わせないという責任感からである。

その後、美也が特典を選ぶ順番になった。

「それじゃあ、次は美也が能力加算を取ってくれ。チュートリアルダンジョンの時みたいに、選択の直後か、B P を振った後に入り口に飛ばされるかもしれない。だから先に手を繋いでおいて、一緒の位置に出たら美也の転移で移動。別々の位置だったら各自の転移で離脱。準備してくれ」

スツと伸ばされた手が、次郎の左手をしっかりと握った。

「じゃあ、選ぶね」

「おう」

「……………あつ、B Pが一二になったよ」

「うーん、跳ばないな。選択してからののか」

どうやら跳ばないらしいと理解した二人は、割り振りの相談と相槌を繰り返しながら、加算された能力値を割り振っていく。

地家美也 レベル三六 B P三 転移S 加算A

体力五 魔力一二 攻撃五 防御五 敏捷五

火六 風四 水一 土一 光四 闇二

美也は身体能力で次郎に匹敵するようになり、魔法も幅広く使える状態となった。

また今後の魔物に対応した割り振りが出来るように。ボーナスポイントには三つ分を残した。

ネット上では、ボーナスポイントを選択せずに時間を置いて虚空の表示が消えても、次のレベルアップ時にはポイントが残っており、割り振り出来る事が確認されている。

自分と美也の数値を比較した次郎は羨ましがり、自身も能力値に割り振ろうかと悩んだほどだった。

だが収納能力は、水や食糧、着替えなどを持ち込めそうであり、見逃すにはあまりに惜しかった。最終的には、二人で協力した方が良いという結論に達した次第である。

美也が選択を放棄して暫く経つと、やがて周囲の光景が楕円形の空間から、地上のダンジョン前にグルリと入れ替わる。

目前には初級ダンジョンの倍ほどは幅広い、二〇段もの階段が、地底へと続いているのが見えた。

「中止、突っ込む！」

次郎は目の前の光景から、咄嗟に新ダンジョンと新特典を連想した。

そして周囲が大混乱している間に潜って、入り口が封鎖される前に転移登録しておこうと即断し、美也の手を素早く引き寄せて走り始めた。

周囲では、ダンジョン内に居たと思わしき自衛隊員や機動隊員が続々と出現しており、ドーム状から塔状へと形を変えた巨大構造物を目の前にして、大混乱に陥っている。

機動隊員の装備を着込んで周囲に溶け込んでいた二人は、周りが大混乱に陥っている間に、新たなダンジョンの内部へと潜り込んでいった。

二〇四四年九月一日、木曜日。

次郎たちにとっては、美也の一六歳の誕生日である。

クラスメイト達にとっては、二学期最初の登校日という認識になるだろう。

そして世間一般では、山中県の巨大構造物が灰色のドーム状から、灰色の多階層円柱に変化して五日目という数え方をしているようである。

ヘリで上空から撮影された中級と思わしきダンジョンは、特大の

円柱の上に、大型の円柱が乗り、その上に中型が乗り、最上部に小型の円柱が乗るといふ四階層だった。

最も下の位置にある特大の円柱は、それ自体が初級ダンジョンや正面に向き合った山中駅を丸ごと飲み込めるほど大きかった。そして上の三段も、底面こそ一回りずつ小さくなっていくものの、高さは全て等しかった。

そんな巨大な多階層円柱の出現により、周辺のビルは幾つかが飲みまれて消えている。

ビル内部の人達は、初級ダンジョンの出現時のように周辺へ跳ばされて無事だったが、所有していたビルや職場を失った人達の被害は深刻だろう。国は保証してくれるのだろうか。

中級ダンジョンの入り口は、正面以外にも複数あった。

夏休み最後の土曜日という最中、内部を探索していた機動隊員が跳ばされた場所以外から、内部へ潜り込んだ人も相当居たようだ。何しろ最初から人通りが多い駅前で、人々はコウモリ退治でレベルが上がる事を熟知していた。

だがレベルを目当てに突入した人々は、踏み入った地下一階で、すぐに後悔する事になった。

帰還者の携帯端末で撮影され、テレビで流された映像には、まるで物語に出てくる小悪魔インプのような姿をした魔物の姿が映されていた。

サイズは猫ではなく、人間の幼児くらい。

肌は灰色で、瞳は緑色。

頭部からは角が突き出し、耳は尖り、腹部は膨れ、背中からは大きなコウモリの翼を生やし、尻からは先端が鉤状に尖った尻尾を生やした、何とも気味の悪い姿だった。

そして魔物達は、侵入してきた人々の足を瞬く間に払って床に引き摺り倒すと、生きたまま喰らい始めたのだ。

次郎たちの体感では、そのインプの強さは初級ダンジョン最下層の大蜘蛛を僅かに勝るレベル一六程で、抗えなかった複数の人が犠牲になった。

インプはテレビで放送されるや否や、世界中の人々を戦慄させた。とりわけ宗教色が強い国々でのメディアの反応は顕著で、悪魔に対して日本政府は一体何をしているのだと、情報公開に関して極めて後ろ向きな日本政府に対して強い抗議が行われている。

被害とは殆ど無関係な諸外国はともかく、日本政府がコウモリ被害を受けている当事者の日本国民に対して説明責任を果たしているかと問われれば、確かに全く為されてはいない。おかげで国民は、言いたい放題である。

「夏は無理だったけど、冬の同人は異世界物で決まりだね！」

放課後の部室で、兄たちの引退に伴って新部長に就任した絵理が堂々と宣った。

発言内容はさておき、絵理は行動力だけとはとんでもなく高い。入部時の目論見通り、部活に関しては丸投げできそうで何よりと言うべきだろうか。少なくとも図書文芸部の活動自体は、次郎たちが積極性を持たなくとも勝手に進んでいくらしかった。

「巨大構造物に対してその発想を持つのは、学校では絵理くらいだろうな」

「そんな事ないよ。塚ちゃんと、ともみんな、普通に描くんだから」
「普通って何だよ。ていうか、一体何を描くんだよ」

「それは勿論、巨大構造物から繋がる異世界の王国だよ。時代は中世から近世くらいで、地質学的に農業革命が起こらなくて、産業革命も発生しなくて、技術の代わりに文化が進んでいる感じ。それで、その世界の王国の貴族に生まれた娘が主人公の物語」

「オリジナルの恋愛物か。ハードル高いな」

同人の世界で幅広く支持されるのは、人気作品の二次創作物だ。多くの人が知っている人気作品を下地にして、読者の理想や願望を作者が代行して描くか、パロディ化して受けを狙えば、それなりの支持を得られる。

逆に難易度が高いのがオリジナル作品で、作者が自由に描けて著作権上の問題も一切発生しない反面、物語へ導入するためのハードルは、事前に作品の世界が理解されている二次創作物より遥かに高い。

そして作った作品が売れなければ、スペース申込み代や交通費、印刷費などの諸経費だけ掛かって次の活動を圧迫する。

図書文芸部は部室のプリンタでカラー印刷ができるので、コピー本を作るだけなら印刷費だけは掛からないが、それ以外は全て自腹だ。絵理は同人活動の経費を捻出するため、コンビニでアルバイトもしている。

「ボクの生き甲斐だからねえ」

「そうかそうか。完成したら見せてくれ」

「良いけど、頒布は交換以外だとお金取るからね」

「エロいシチュエーションはあるのか？」

「描いている間に自然に出てくるならあるかもしれないけど、売るために最初からその路線で進める事は無いよ」

「そうか。まあ頑張ってくれ」

「ジローくと美也っちも、描けば良いのに」

「そんな才能は無い。と言うわけで、今日の活動はここまで。お先」

「はいはい。誕生日デートいつてらっしゃい。ちなみにボクの誕生日は四月一日だから。また森林デートで良いよ」

「気が向いたらな」

「あ、それって絶対行かないやつだ」

こうして二学期最初の校内活動を残らず終えた次郎は、美也と共にデートへと向かった。行き先は勿論、新たに誕生した中級ダンジョンである。

当面の目標は中級と思わしきダンジョンを攻略して、一度は美也が見送った収納能力を得る事だ。

美也自身はそれを必須だとは思っていないし、次郎も自身が能力を獲得した事で満足感を得ているため、二人には別に焦燥のようなものはない。さらに付け加えるなら、政府側も新ダンジョンへの対応を検討中なのか、中級ダンジョン内での鬼ごっこも停止中だ。

そのような事情もあり、もしも全てを知る者が居たら、誕生日にまでダンジョンへ行かなくても良いのにと嗜めるかも知れない。

しかしこれは二人が中学時代から続けてきたライフワークであって、テストなどの明らかな理由が無いにも拘わらずダンジョンに赴かないのは、むしろ不自然な事だった。

それに誕生日は、ダンジョン内でも祝うことが出来る。

次郎は収納していた机と二脚の椅子を取り出し、テーブルクロスを掛けると、その上に皿やフォークを並べていき、最後にクーラーボックスから取り出された小さなバースデーケーキの箱を乗せた。

「美也、一六歳の誕生日おめでとう」

「……………ありがとう。ケーキを買いに行く暇なんてあった？」

「学校でトイレの個室に鍵を掛けて、転移で往復したからな」

「収納って便利ね」

「そうだな。転移に匹敵するかも知れない」

開封されたバースデーケーキは、道中の戦闘でインプの集団をいくつも蹴散らしてきたにも拘わらず、買ったばかりのように綺麗な形を保っていた。

それだけではなく、一緒に入っていた保冷剤も全く溶けていなか

った。

収納能力は、Aで二〇フィートコンテナ分と出ていたが、内容としては二〇フィートコンテナと同サイズ分まで入る倉庫を、異次元空間に持つようなものだった。

個々の収納物それぞれに仕切りがあるのか、液体を二種類同時に入れても混ざる事は無かった。そして空間内は時間が停止しており、録画中のカメラは取り出すまで止まっていた。

数千年から数万年後の人類がこの技術を再現できるようになれば、さぞや宇宙開拓が捗る事だろう。

生物の収納に関しては、昆虫などの生き物は可能だったが、生きている魔物は出来なかった。ちなみに死んだ魔物は、しっかりと収納できている。

そんな極めて特殊な空間から取り出したケーキにロウソクを立てた次郎は、魔法で小さな火を灯すと、流石に照れながら歌を一節だけ謡って、火を消すように促した。

すると美也は息を吹き掛けるのでは無く、次郎に合わせるように風魔法でそよ風を生み出して静かに火を消した。

「ダンジョン内で誕生日をお祝いするのって、わたしたちが最初かな」

「多分人類初じゃないか。機動隊がケーキを持ち込むとは思えないしな。いや、まてよ。山中県警ならやりかねん……」

やがて切り分けられたケーキは、二人の手で交互に崩し合われた。

26話 変化（後書き）

第一巻は、ここまです。

次話より、第二巻となります。

S p e c i a l T h a n k s

活動報告を読んで最初に応援して下さいました方々

レビューを下された、北海ひぐま様、c a m i n a 0 0 様

お気に入り登録や評価を付けて下さった皆様

27話 最近のダンジョン事情

人類以外の手で生み出された、巨大な多階層円柱。

それに対する日本国民の評価は、出現直後から僅か数日で大きく変化した。

出現当初は、コウモリに変わって人を喰らう幼児ほどのサイズの小悪魔インプが確認された事により、この世に現われた地獄であるかのように思われた。

しかし実際には、巨大構造物ドームが二ヵ月ごとに『九月四日は、コウモリとタマヤスデ』、『一月四日は、コウモリとタマヤスデとトノサマバツタ』という形で新種を増やしながら魔物を放出し続けた一方で、多階層円柱からは何も出なかった。

さらに出現した魔物が各都道府県を越境しなかった事で、山中県は日本における唯一の安全圏となった。

この問題に関してメディアでは、様々な推測が流れている。

その中でも多くの支持を得たのは、次の意見だ。

一・魔物討伐者に現われるステータス表示は、いかなる自然現象でも有り得ない。現代を超越する技術を有した、日本語を介する何者かの意志による事は明白である。

二・一で示唆された我々にとつての超越的存在は、ステータス表示を行う事で、人々に巨大構造物由来の魔物を倒してレベルや能力を得るように取り計らっている。

三・一の存在が行う二の計画からその目的を推察するに、一は少なくとも現段階において、手に負えない強力なインプを放出して人々を無意味に殺す事は望んでいない。

この予想を行ったのは、元アイドルで医師の千葉美冬だ。

テレビ局側が彼女に求めるキャラクター像は『アイドルでも賢くなれる』であり、千葉の発言はしっかりと全国放送されて、巨大構造物に対する国民の認識に一石を投じた。

政府はそれら国民の様々な憶測を無視して、巨大構造物そのものを塞ぐ案を試みたが、ドームが出現時のように一定範囲内の邪魔と思わしき物体を転移させて魔物氾濫の道を開けてしまった事により、千葉美冬の憶測を思料せざるを得なかった。

魔物は種類が増えても、出現総数だけは巨大構造物ごとに約一万匹ずつのままであった。

だが一月四日に出現したトノサマバッタは、チュートリアル時代に比べると小型犬サイズから中型犬サイズに巨大化しており、脅威度が遥かに増していた。

脚力は五階建てのビルを跳び越せて、人間が一撃でも浴びれば車に撥ね飛ばされるほどの高エネルギー外傷を受けた。

しかも人間に襲い掛かる特性は相変わらずで、狙いを定めた人間を前脚でしっかりと掴み、大顎で顔をガリガリと削った結果、逃げ切れずに捕まった人の頭部は大変悲惨な事になった。

高層ビルを縦横無尽に飛び回りながら襲い掛かってくる凶悪な巨大トノサマバッタに対して、武器を持たないレベル〇の人間では殆ど抗いようがなく、被害は巨大コウモリだけだった時に比べて、一〇倍にも及んでいる。

そんなバッタ被害を憂いた政府は、公式にはアメリカにも協力を要請した形で、二〇四四年一月から一二月にかけて沖縄と鹿児島に相次いで大部隊を投入し、ドームを多階層円柱に変えるという社会実験を試みた。

その結果、山中県に続いて二つの地域でも魔物が出現しなくなったことで、結果論として多階層円柱は一先ず安全らしいと判断された。

以降の日本政府は、転送で跳ばされない巨大構造物のギリギリ外側をコンクリート防壁で囲み、各巨大構造物に連隊規模の自衛隊を配して魔物出現と同時に集中砲火を浴びせつつ、巨大構造物をドームから多階層円柱へと変える作戦を試み始めた。

攻略対象となった巨大構造物には、自衛隊が大規模に投入される姿が相次いで目撃されている。

関東地方では、東京、埼玉、神奈川の一都二県。

近畿地方では、大阪、兵庫の一府一県。

これらの地域は、いずれも国が大部隊を投入して『国民が知らない何らかの処置』を行い、巨大構造物の形状をドーム型から多階層円柱型に変えている。

そして四七都道府県のうち八都府県で被害が発生しなくなった事により、政府は失った治安と体面の一部を取り戻した。

但し、最初は首都から遙か遠方の鹿児島や沖縄を実験場に用い、いざ結果が判明すれば、今度は首都圏を優先する政府に対して、未だ被害が続く地方からは不満の声が上がっている。

また政府がドームを多階層円柱に変えるために、一カ所ずつ、約一カ月もの時間を費やしている点については、より多くの国民に不信感が芽生え始めている。

だがマスコミがあらゆる手練手管を用いて調べようとしても、深部で何らかの処置に従事したのは独立した特殊な部隊らしく、作戦に投入された他所の隊員達は『試験的に結成された高レベル部隊』とだけしか聞かされていなかった。

日本に巨大構造物が現われて以降、一体いつ何処で募集があり部隊が結成されたのか、そして所属は何処になるのか、メディアがいくら調べても全く出てこない。

そのため各メディアは独占スクープを断念し、共同して国民の声という力業を以て情報開示を試みた。

「自衛隊は沢山居るのに、なぜ何らかの処置を各都道府県で同時に行わないのか。理由があるならば、それを国民に説明しろ」

いかに政府と云えど、日に日に落ちる支持率を気にせずには居られない。

峰岸官房長官は淡々と、深部で活動できるレベルに達している隊員が少ないとだけ回答した。

なお実際に深部にはどれだけの脅威があつて、従事する隊員のレベルがどれだけ足りていないのか等については説明されなかった。それらは特定機密保護法の特定機密に指定されているため、誰も追求できない範囲となる。

そして会見の最後に記者が苦し紛れに問いかけた「国民が自衛する為に、巨大構造物を開放してレベルを上げさせる予定は無いのですか」という質問に関しては、「明らかに危険だと分かっているため、そのような予定はありません」と、取り付く島も無かった。

そんな情勢の中、とある内部告発が行われて、日本中で大きな物議を醸した。

国民に公表された巨大構造物をドームから多階層円柱に変える次の候補地は、『東北地方と中国地方に、取り急ぎ安全圏を一つずつ作る』という理由で、東北地方の宮城県と、中国地方の広島県だった。

だが実際には、一度は人口の多い愛知県と千葉県に決まっていたところを政府が介入し、宮城県と広島県に変更されたという話である。

宮城県は大場総理の選挙区で、広島県は高瀬総務大臣の選挙区だ。逆に愛知県は第一野党・改革党の地盤で、千葉県は第三野党・新生党の地盤である。

政府の介入前に愛知県と千葉県が明記されていた資料がメディア

の手で公開されて、世間は大騒ぎになった。

このように政治家が権力を乱用するのは、特段珍しい事ではない。集票のためのバラマキ政策などはいくらでもあるし、口利きをして行政を歪める例も枚挙に暇がない。

だが今回のケースでは、人命が掛かっている。

自身や家族の命が掛かった優先順位で不当に後回しにされるのは、誰であろうと受け入れがたい。これでは後回しにされた県出身者から、内部告発者が出て来た事も致し方が無かった。

また魔物被害は、様々な商品の製造や流通、価格にも影響を及ぼしている。

そのため普段は政権と懇ろになる経済団体も、今回に限っては政府の味方には付かなかった。

野党第一党の改革党を支持する静岡県や愛知県、第二党の共和党を支持する北海道、第三党の新生党を支持する千葉県や茨城県などでは、巨大構造物ドームの前に市民が集まり、ひたすら封鎖を続ける警察に対して早く解決しろと抗議の声を上げている。

このように巨大構造物に関心を持つ者は、なにも大人だけに留まらなかった。

その一例が、七村高校である。

七村高校では昨年度、高校生の三大イベントの一つである二年生の修学旅行が、魔物の出現で中止になっている。

学校側は、二カ月周期で奇数月の四日に魔物出現が続いている事から、七月四日とそれ以降の日程を避けて、六月二九日の木曜日から七月二日の日曜日までの三泊四日で修学旅行の日程を組んだ。

このようにしっかりと対策を採った点に関しては、次郎も評価している。

しかし残念な事に、七村市は教育委員会から教師に至るまで、学

校関係者が揃いも揃ってお役所仕事だった。

彼らが当初の授業計画は変更しなかった為、次郎たちは六月二六日から二八日までが期末テストで、その翌日からは北海道へ旅立つという強行スケジュールを組まれてしまった。

「怒濤の一週間過ぎるわっ！」

次郎は半ば八つ当たり気味に、中級ダンジョンの地下一八階に生息しているグリフォンを出会い頭に蹴り飛ばした。

レベル六二の次郎に蹴り飛ばされた推定レベル三三のグリフォンは、巨体を弾かれて床を派手に転がった。それでも転がりながら衝撃を逃がし、速度が減じたところで跳ね上がった。

その直後に石槍が投げ付けられ、床に映る影を叩いて鈍い音を響かせる。

舌打ちが鳴る間に体勢を立て直したグリフォンは、大きく仰け反って鷲の大口を開くと、喉元から赤く輝く塊を吐き出した。

赤い塊は虚空で膨れ上がり、まるで火炎放射器のように一直線に伸びていく。

次郎は慌てて左手を突き出すと、強大な魔力で低い火と風を操り、迫ってきた炎を受け流した。

炎は何度も赤い舌を伸ばし、その都度魔法で逸らされて左手だけを炙った。

「うわっ、ちっ、ちっ」

素早く振られた手が虚空で怪しげに踊り、強烈な熱気を逃がしていく。

もしも炎を浴びたのが火一〇の美也であれば、直撃でも服に焦げ目一つすら付かないだろう。

しかし火一という耐火能力の乏しい次郎では、直撃を浴びれば着

ている服が燃え上がってしまう。レベルと魔力が高いために肉体的なダメージは軽微だが、懐には服代という高校生にとって重い衝撃を受けるのだ。

「てめえ、皮を剥いで毛皮にすんぞ、こらっ！」

怒りに染まった男が恫喝を始めたが、そもそも出会い頭に相手を蹴り飛ばしたのは男の側である。これでは数万年前の石器時代の原始人が、肉と毛皮を求めて獲物に襲い掛かっているのと何ら変わらない。

そんな原始人は有言実行すべく、相手に飛び掛かると同時に石槍を素早く振り抜いた。

矛先は天翔る流星のように煌めきながら、軌跡上に存在したグリフォンのクチバシを砕き、巨大な鷲頭を地面に叩き落とした。

流星は素早く引き戻され、続いて水平に流れてグリフォンの右側頭部から駆け抜ける。

その後には、夏の海岸でスイカに木刀を振り下ろした時のような乱雑な開かれ方をしたグリフォンの頭部が散らかっていた。

派手に飛び散った中身が、ダンジョンの床を汚い紅斑色に染めている。

頭部を失った首からは、真っ赤な液体がピューピューと噴き出し、床を幾度も塗り直していった。

「胴体は綺麗に残っているのになあ」

次郎は未練がましく、頭部を失ったグリフォンの全身を眺めた。一体だけであれば、収納能力で持ち帰れるだろう。

ただし惜しむらくは、サイヤカバにも匹敵する四メートル級の巨軀に、鷲の翼まで生やしたグリフォンの毛皮を地上に持ち込もうものなら、一体何処からどうやって持ってきたのだと大騒ぎになる事

だ。

ダンジョン攻略の優先順位で批判を浴びた政府は、各地の初級ダンジョンを速やかに攻略して支持率を保つ事に全力を挙げている。そのため中級ダンジョンに手を伸ばす余裕が無かったのか、次郎は九カ月間潜っている間に一度も機動隊と遭遇しなかった。

おかげで妨害に苦しんだ初級ダンジョンの頃と比べて、随分と探索が捗っている。

また転移で直接ダンジョン内を往復出来る事で、チュートリアルダンジョンの占有時代にも勝る速度でレベルが上昇し続けた。

だが、収入を得られないという点は、今までと全く変わらない。

一度でもダンジョンの魔物を何処かへ持ち込めば、それが山中県のダンジョンを先行していた謎の二人組だという事がすぐに知られてしまう。魔物素材の売却に関しては、断念せざるを得なかった。

「おりやつ」

次郎は洪々と、無事だったグリフォンの背中から前胸部に掛けて石槍を突き刺した。

そして途中にあった魔石に石槍の矛先をぶつけ、そこから経験値の素になる力のようなものを回収した。

このように簡単に倒せるグリフォンより、さらに弱い初級ダンジョンのボス攻略に日本政府が手こずる理由は、次郎にもいくらか推察できた。

そもそも初級ダンジョンは、七村市などが複数入る空間が地下に一五階層も続く。

階層を降りる際には道が狭まるため、地下二階以降まで運用できるのは単車など横幅の狭い車輛だけだ。そして単車は、魔物の群れだらけの内部で走り回るには危険すぎる。

従って最奥のボス部屋に辿り着くだけでも、相当の時間を要する

のだ。

さらに推定レベル三〇の巨大女郎蜘蛛と、無数に沸き続ける推定レベル一五の大蜘蛛を倒すには、相当のレベルが求められる。

多数の国民がレベル上げを試みた結果、一八歳以上の人間はレベル上げに要する魔物の数が次第に多くなり、二〇歳を超えれば数十倍、二十代後半には一〇〇倍以上と知られてきた。

従って、どんなに若い機動隊員や自衛隊員でも、簡単にはレベルが上がらない。

大半はレベル一〇に届かない程度にしか育たず、ボスを倒すレベルに届かないのだ。

初級ダンジョンの地下深くで次郎達を追ひ回していた機動隊員が居た以上、程々にレベルを持った隊員もいるのだろう。だがこの情報氾濫時代にチュートリアルの話が一切出て来なかった以上、チュートリアル時代からの深部探索従事者は、ごく少数のはずだ。

そのため初級ダンジョンの攻略に手こずっている現状は、特に理解し難い話では無かった。

おかげで次郎たちは、心置きなく中級ダンジョン攻略に勤しめる。

「こつちも終わったよ」

呼び掛けに振り返ると、そこには背後から回り込んできた来たと思われる二体目のグリフォンの焼死体が転がっていた。

初級ダンジョンの攻略特典で能力加算を得た美也は、もはや護衛を必要としない。挟撃の片方を単独で受け持ち、既に魔石の回収も終えていた。

次郎は魔物の後続が無い事を確認すると、余裕の表情を浮かべて講評を始めた。

「やっぱりグリフォンは、狩り方がライオンっぽいと思うぞ」

「ライオンほど群れないし、オスメス関係なく狩りをしているよ？」

「でも待ち伏せとか後ろに回るとか、色々とライオンっぽい気がするんだよね」

「確かにそういう部分もあるけどね」

美也は強く否定しなかったが、その表情からはあまり納得していない事が見て取れた。おそらく他の、待ち伏せや背後に回り込む生物を想像しているのだと次郎は察する。

「……………そろそろ帰るか」

「うん、今日はここまでだね」

二人はどちらとも無く手を伸ばすと、手が触れ合った直後に姿を掻き消した。

28話 自由行動決め

市立七村高校の修学旅行は二年生の七月にある。

なぜこの時期にあるのか次郎は知らないが、九月末にある学校祭などと共に、次郎が生まれる遙か以前からこの時期に行われてきたらしい。

ちなみに七村高校では、毎年必ず北海道に行く事になっている。

魔物の出ない山中県から県外に行く事には、反対する保護者も多い。そんな中、わざわざ北海道まで赴く高校は、県内では七村高校だけだそうである。

その事実に対してクラスメイトは、七村市のクオリティを思い浮かべた。

「学校が新しい事を考えるのが、面倒臭かったからじゃね？」

「マジで有り得る」

二年生は二八〇人も居るため、一〇〇名弱ずつ三集団に分けて三泊四日の行程を別々に移動させるらしいが、教師側は毎年恒例なので慣れたものである。

ホームルームで打ち合わせをさせられた生徒達は、期末テスト直後の修学旅行という日程にこそ不満を表明したものの、すぐに適応して班別の自由行動の計画を立て始めた。

三〇人のクラスメイトは五人ごとで六班に分けられ、次郎自身は中川と北村、それに中学が別だった奈部と鳥内という男子で五人組の班を組まれた。

この班で修学旅行の三日目に、午前一〇時頃に札幌駅から時計台まで向かった後、午後三時くらいまで自由行動となる。

ちなみに修学旅行の軍資金は祖父から貰った三万円で、次郎の懐は少し温かくなっている。

「これは北海道ドームに行けというお達しだろ」

山中県が新ダンジョンに変化して以降、レベルを上げる機会が訪れない事に不満を募らせていた北村が、喜色を浮かべながら断言した。

北村は巨大構造物の出現当日、巨大コウモリを倒すという偉業を果たしながら、魔石に触れなかったためにレベルを得られなかったという残念すぎる過去を持つ。

その後悔から、今度こそ魔物を倒してレベルを上げたいと願っているのだ。

「そもそも北海道ドームって、どこにあるんだ？」

残る四人が首を傾げると、北村は携帯端末に地図を表示させながら説明する。

「札幌駅の南口から右手側に徒歩一〇分」

次郎が端末の地図を覗き込むと、北海道ダンジョンは札幌駅南口から右手側に進んだ、旧北海道大学植物園に表示されていた。

そして行き先である時計台は、札幌駅南口から正面に同じくらいの距離を進むとあるようで、それら三角形で結ばれた三つの地点は全て徒歩一〇分圏内という事になる。

「良いんじゃない？」

北村の提案に、中川が軽い気持ちで乗った。

その動機は、おそらくレベルだろう。

レベルが最も上がり易いのは一八歳になる前までだと知られており、高校生はラストチャンスと見なされているのだ。一八歳になった後でも、二〇歳になるまではあまり難しくないらしいが、難易度は低い方がよい。

レベルを一つ上げても大差ないように思えるのは現在の次郎だけで、レベル〇とレベル一では、文化部員と全競技で市の大会に出場できる運動部員くらいに身体能力の差がある。

運動系の活動に一切属して来なかった人でも、レベル二で県大会出場、レベル三で県大会平均、レベル四で県大会入賞、レベル五で全国出場くらいになる。

また同時に手に入るボーナスポイントを割り振れば、各種の力が倍加するという恩恵がある。例えば、敏捷を一から二に上げれば、時速二〇kmで走る者なら時速四〇kmに倍加するのだ。

そして六種類の魔法に割り振れば、様々な魔法を使えるようになる。

従って、北村らがダンジョンに惹かれるのは、無理からぬことであつた。

「行くか」

「これは行くしかありませんな！」

誘惑に負けた奈部と鳥内も追従した。

五人中四人が賛成したとなると、次郎としても敢えて否定する気は起きなかった。

「提出する行程表に学習目的の欄があるけど、どうするんだ？」
「任せろ！」

北村は指差された欄にペンを走らせ、『社会問題となっている巨大構造物が県外にもある事を確認して、その影響を考える』と書き込んだ。

「確かに、修学旅行の学習目的に適っているな」

「しかも魔物の出現が奇数月の四日で、修学旅行もそれを避けているから反対され難いぜ」

「才能の無駄遣いでキタムーに勝る奴は居ないな」

最大の懸念は、巨大構造物の前で行われている大規模なデモ活動だろうか。

国民からデモ活動を行われる理由の一つは、ドームから多階層円柱に変化させる都道府県を、人口や被害規模で選定された野党の御膝元から、与党の地盤が厚い場所に変えた事だ。

これは物的証拠がテレビで報道されており、国権乱用だと批判されて抗議活動を行われても、事実としてその通りなので文句の付けようが無い。

そしてもう一つの理由が、レベルや魔法の独占非公開だ。

一般人のレベルは、シルフィード Sylphidの偶然のレベルアップなどが最大級と言われており、自衛隊や機動隊など一部の警察官を除く大抵の国民は、レベル五に届かないと考えられている。

レベルを上げれば様々な恩恵があり、巨大バツタ等に対する自衛も叶う。逆にレベルを上げる以外では、バツタ以降の魔物に個人で対抗する代替手段が無い。そのためダンジョンに入れろという抗議活動も起こっている。

抗議活動を行う人達の論拠は、次の通りである。

一・デモ活動は、憲法第二十一第一項で規定された正当な権利である。

（日本国憲法第二十一条第一項では、集会、結社および言論、出版

その他一切の表現の自由は侵すことのできない永久の権利すなわち基本的人権に属し、その完全なる保障が民主政治の基本原則の一つであると規定される）

二・憲法の濫用は憲法一二条で制限されるが、「人口や被害規模で決めた処置場所を、政治家が個人的な都合で変えるな」や、「自衛のためにレベルを上げさせる」等の主張の表明は、実現或いは議論自体が公共の福祉に資する。

（憲法一二条『憲法が国民に保障する自由及び権利は、国民の不断の努力によつて、これを保持しなければならない。又、国民は、これを濫用してはならないのであつて、常に公共の福祉のためにこれを利用する責任を負ふ』）

三・従つて憲法に規定される国民の権利に基づき、大場政権の国権乱用並びにレベル規制に対して集団での抗議活動を実施する。（公安委員会は、集団行動の実施が「公共の安寧を保持する上に直接危険を及ぼすと明らかに認められる場合」の外はこれを許可しなければならぬ。最高裁判所昭和三五年七月二〇日大法院判決）

これらが、抗議活動を主催する側の主張であつた。

立憲主義国家において、最高法規である憲法で規定され、最高裁大法院での判決も出ている行動を力尽くで阻止すれば、政府の拠つて立つところが失われる。

但し近年の日本人は、一部の特別な事情を抱える地域を除くと、暫く放置すれば参加者が勝手に諦めて目減りしていく傾向がある。

そのため政府は国民の抗議活動に対して、たまに行う不満のガス抜きだと認識して、ドームを封鎖した上で放置を決め込んでいた。

次郎は、ダンジョン内部を転移能力で行き来しているために、警

察の嚴重な封鎖をすり抜けている。

だが転移能力と、実際に内部に入る行為の二つが組み合わせなければ、このような活動は出来なかった。

もしも北村たちと同じ立場であったならば、レベルを求めてダンジョンを開放しろと言っていた一人だったかも知れない。

なお次郎の知識と経験では、流石に抗議活動に対する政府の認識にまでは理解が及んでいない。

（北海道を登録しておけば、保険にもなるかな）

次郎は北村たちの行動が、自分のメリットになると考えた。

山中県以外の巨大構造物を転移登録しておけば、山中県のダンジョンで何か問題があった時に別の場所で活動を行う保険になる。

内部に入れば、初級ダンジョンの特典の重複や総合評価の取り直しが可能であるのかを検証できるかもしれない。

また政府が頑張って多階層円柱に形状変化したとしても、入り口の周辺に転移登録しておけば、完全に封鎖される前に内部へ潜り込む余地がある。

はたして次郎は、北村の行動計画を支持する事にした。

「俺も賛成する」

「おう、ジローならそう言うと思っていたぜ。それじゃあ出してくるぞ」

「いてらー」

提出用紙を完成させた北村は、全員の同意を取り終わるとクラスで最初に担任へと持ち込んだ。

担任は用紙を眺めながらいくつかの質問を行うが、北村は滑らかな舌でスラスラと回答する。

「巨大構造物前は、デモ活動とかあるだろ？」

「いいえ、大丈夫です。北海道駅と時計塔とドームの間、この三角で結んだ内側を見てください。ここには北海道庁や北海道警察本部があります」

「ん、あるな」

「北海道警察本部の正面でデモ活動が行われていても、それは警察にしっかりとコントロールされています」

「それは、そうだろうがなあ」

「それに抗議活動を実際に見る事も、学習目的の『社会問題となっている巨大構造物が県外にもある事を確認して、その影響を考える』に繋がります」

「確かにそうかもしれんな」

北村は教師の指摘を正面から突破し、ついには承認を得る事に成功した。

そんな情熱的な彼の行動を、班員たちは半ば呆れ気味に見守っていた。

「あの情熱を、最下位の成績に少しでも振り向ければ良いのに」

「キタムーは高校入試の時も、合格ラインより下だったんだけどさ。実際に受験したら一組に入れたんだよな」

「大学入試でも、あの勢いで受かりそうな気がする」

「あいつ怖いわー」

かくして次郎たちの班は、修学旅行の自由行動で、北海道ダンジョン前に赴く事となった。

とはいえ、その前には北村の天敵である一学期の期末テストも控えている。

次郎の成績は、三〇人のクラスで概ね六〜九番だ。

一番が美也で、二番に固定で他校出身の男子が居て、三、五番くらいを越後屋や絵理が競っており、その少し後ろに次郎が居る。

上の方の順位は殆ど固定で、次郎は一度も絵理に勝った事が無い。絵理は同人活動に情熱を費やしているが、次郎も同様にダンジョンに潜っており、元々の基礎学力や下地の差が埋められないのだ。要するにダンジョンに潜り続ける限り、これ以上は順位が上がらないわけである。

西日本大震災からのトラウマである英語という苦手教科を克服できれば、もう少し上がれるだろう。だが美也を伴わずに外国へ行く気は起きないため、必要性の乏しい英語を覚える意欲は全く沸かなかった。

それに現在では、ダンジョンが出現している日本に外国人が集団で押し寄せて、氾濫時の魔物でレベルを獲得しようとする時代だ。

そんな旅行者もとい冒険者ならずとも、沖縄辺りに行けば、合同調査など様々な名目でアメリカ人が沢山入り込んでおり、外国人と会うだけならば国内で充分に事足りる。

差し当たって当面の目標は、成績の向上では無く、現状の維持だった。

「それじゃあ部活に行くか」

一足先に自由行動計画が完成した次郎は、未だに行き先で悩む美也の班を一瞥した後、図書文芸部へと移動した。

二〇四五年度の図書文芸部は、三年生が幽霊部員一名、二年生が部長の絵理を筆頭に五名、一年生が一名と、ついに完全なる復活を遂げた。

功績の九割方は、次々と一年生を捕まえて引き込んだ絵理である。パソコンは二四台あるが、ロッカーはフル活用でも一つ不足しており、次郎の入学以来一度も部屋に顔を出さない幽霊部員な先輩の分を絵理が貰ってきたほどだった。

そんな部活動の内容は、部の名称をオタク文化部に変えた方が良いのでは無いかと思わせるようなものとなっている。

しかし基本的に自由人が多く、廃部の危機も知っている現在の二年生は、部員がやりたい事をさせれば良いという結論に達していた。すなわち一年生に対しては、予め定まっている最低限の活動以外は好きにして良いよという、個性的な一一匹のヤギを広範囲で放牧しているが如き状態である。

「おつかれー」

「「先輩お疲れ様ですー」」

部室の思い思いの場所に座っていた後輩達の何人かが声を掛けてくる。

声を出さない後輩も軽く頭を下げるような仕草するなどしており、決して次郎が無視されているわけではない。

単に次郎と後輩たちの性別が違うので、若干心の距離があるだけだ。

絵理が仲間の女子二人を連れて勧誘していった結果、男子が入り辛かったのか、一年生は女子ばかりが集まった。おかげで次郎は、部員一七名の中で唯一の男子生徒という立場となっている。

かつて幽霊部員の先輩が来辛くなったのと逆パターンで、現在の次郎は非常に肩身が狭い。美也が居なければ、とっくに部活へ来なくなっていただろう。

ところで認知心理学の世界において、マジカルナンバー七という言葉がある。

これは人間が一度に知覚できる数が、おおよそ七±二程度だというものだ。

従って何かしらに関連付けない限り、次郎のような凡人では新入生一人を一度に覚える事は困難なのである。

そんな次郎が新入生を覚えるに辺り、最初にやったのは一人の属性分けだった。

一、正統派優等生。二、アメリカ人ハーフ。三、韓国人ハーフ。四、ドジ優等生。五、同人誌描き。六、オタ女。七、万事同調型。八、拝金主義。九、リアリスト。一〇、おっとり。一一、乙女ゲー好き。

ちなみに入学時の成績順であり、一〜三が普通科の一組、四が二組、五が三組、六〜七が四組。八〜九がビジネス科の五組。一〇が生活福祉科の七組、一一が八組となる。

本人たちが聞けば、過半数は抗議しそうな覚え方だ。

だが次郎も最初の頃は、『部活に居る唯一男子の先輩』や、『地家先輩の彼氏』等と覚えられていた。

もちろん今では、お互いにフルネームや多少の性格程度は知っている。

だが部活での次郎の活動は、美也と二人で並んで端の方に座り、適当にパソコンでネット小説を読み漁り、たまに男手として雑用に駆り出されるくらいが関の山だ。

そのため次郎に対する認識はあまり更新されておらず、ヤギの放牧場の隅の方で無害に草を食む羊くらいの感覚で覚えられたままである。

もしも世界中がゾンビパニックにでも陥れば、先程まで草を食んでいた羊がアルティメット黄金羊に変身して、「キヤー堂下先輩すてきー」と言われるような八面六臂の大活躍をするかもしれない。

だが差し当たって羊は、今日も草を食んでいた。

そんな無害な羊に対しては、たまにはヤギの方から声も掛けて貰える。

「先輩、修学旅行って北海道なんですよね」

近寄って来たヤギは、正統派優等生にして暫定次期部長の浜野亜理寿だった。

処世術で羊に成り切る次郎は、内心で流石アリスと感心しながらも、表面的にはのんびりと答える。

「ああ。飛行機で行って、北海道をバスで横断するらしい。ちなみに毎年恒例だから、来年は浜野たちも行く事になると思うぞ」

「何泊なんですか？」

「三泊四日だな。ちなみに自由行動で、俺たちの班は北海道ドームに行くことになった」

「それって部長と地家先輩もですか？」

「いや、男子と女子は自由行動が別の班だ。俺たちの班にはコウモリを倒したけど石に触れなかった奴が居て、レベルを上げたいからどうしても行きたいんだと」

「レベルですかー。私たちの県は七月の一回しかコウモリが出なかったから、もう上げられませんものね」

「ああ、残念だったな」

ちなみに犯人は、ヤギの目の前にいる無害そうな羊である。

「部長はレベル三でしたっけ？」

「ああ。絵理は去年の七月に、コウモリが集まっている山まで狩りに行ったんだ。生き甲斐だとか、アイデンティティだとか言っていたな」

「さっすが部長」

二人がいくらか雑談を交わす間に時間が過ぎ、やがて他の二年生

がや^がつて来た事で、次郎の肩身の狭さは程々に解消された。

29話 登別

光陰流水の如く時は移ろい、いよいよ待ちに待った修学旅行がやってきた。

修学旅行の集合地点は七村駅だった。そこから電車とバスを乗り換えて空港まで向かい、空港からは飛行機に搭乗して新千歳空港に飛び立つ。

そして次郎は、空の人となった。

「おおつ、始めて飛行機に乗った」

「どうしたジロー、お前の家は金持ちじゃないんかい」

「俺が日本語の通じない場所には絶対行かない派だからな。飛行機に乗ってないのは家族で俺だけだ」

次郎は、毎度おなじみの堂下次郎ネタに反応することなく、ひたすら飛行機の小さな窓から見える景色を眺めた。

窓の下には羊毛のような雲の絨毯が、海の如く満遍なく敷き詰められている。それらは天空から輝く太陽の光に照らされて、紅白と影に彩られていた。

空は深みの増した青色で、少しだけ宇宙が近くなったように思わせる。

上空には千メートル単位で分かれた別種の雲が形成されており、これが生み出される気象条件について思わず考え込まれた。

廊下側の席から上半身だけ窓際に乗り出した次郎は、窓の外に携帯端末を向け、何度もシャッターを切る。

「モコモコだなあ」

あの雲に飛び乗れば、高反発のクッションのようにふわふわに跳ねるのか、それとも低反発ベッドのように身体が沈み込むのか。そんな有り得ない妄想で脳内を満たし、次郎は一時の至福を満喫した。

「そんなに気に入ったなら、場所変わってやろうか」

次郎と窓に挟まれた中川が、呆れて提案した。

「ナカさん、マジで？」

次郎は歓喜しながら中川の顔色を窺った。

しかし中川は、単なる善意の人ではないらしく、嫌らしく含んだ笑みを浮かべていた。

半分ほどは作った悪顔であろうが、残り半分くらいは実際に悪い事を企んでいるのである。事を、小学一年生からクラスメイトの次郎は経験則から理解していた。

「ブルジョワジーの我々としては、プロレタリアートのジローくん
に窓際を譲ってあげるのにも吝かではないよ。条件次第ではあるが
ね」

「回りくどい言い方をしおつて。要求は何だ？」

「可愛い後輩が一人も居るそうだね。ちよつと紹介したまえ」
「そう来たか」

高校に入学した一学期、中川と北村は次郎たちを交えて、図書文芸部の女子たちと遊びに行っている。そして北村と二組の塚原愛菜
美がカップルとなり、今も別れずに付き合っている。

一方で中川は三組の丹保智美と二人にしたのだが、あまり進展し
なかったらしく、それっきりのようだった。

「ともみんとは合わなかったか」
「色々となあ」

北村とカップルが成立した塚原愛菜美は、夢見がちで笑顔が可愛い系の女子だ。母親が看護師で、将来は看護大学に進学して保健師になる事を考えており、わりとモテる要素がある。

中川とカップルが成立しなかった丹保智美は、身長が高くて容姿的には格好良い系の女子だ。但しお弁当を手作りし、バレンタインでは越後屋のようにクラスの男子全員に義理チョコを配るなど、女子力が高くて気配りも出来る。

ちなみにともみんは、現在彼氏募集中である。
それなりにお買い得品なのだが、中川の目は贅沢に肥えているらしい。

「ちなみに席を譲って貰うのは諦めて、あくまで参考までに聞きたいんだけど、ナカさんの好みってどんなだ？」

「なんだよジロー、自分だけハーレム王かよ」

「違うわ。俺は山羊舎に一匹だけ放り込まれた羊だよ。種族が違ってどうにもならんわ。変な事をしたら、即座に山羊の群れに集団攻撃されるわ」

「ケツ、つかえねー」

「よし分かった。表に出ろ」

次郎は窓の外で輝く雲海を指差すと、機上の時間を下らない言い争いに費やした。

ダメ元で紹介してみないのは、本当にダメだったときに紹介者として部活に居辛くなるからだ。同級生なら兎も角、先輩の立場として僅かなりとも強制力が働くのも気分的に良くない。

他にも言い訳を探すとすれば、次郎たちは既に高校二年生の一学

期末であり、この後には夏休みが控えているため、紹介する場合は二学期に入ってしまう。

三年生の大学受験までは時期が短く、中川や相手のためにならない気もした。

やがて飛行機は新千歳空港に降り立ち、次郎たちは手配されていたバスに乗り込んで、まずは登別へと向かった。

そしてやって来たのは、熊牧場である。

万里の長城が如く長い柵の遙か下側で、広いコンクリートの丘山を沢山の熊たちが闊歩していた。

「何故、熊牧場？」

「うわっ。こいつら、滅茶こつち見てるし」

困惑する高校二年生たちの前で、熊たちは両手をバシバシと叩いて餌をねだっている。

繰り返される催促に居たたまれなくなった何人かの生徒が、有料の餌を購入して熊の方へ投げ込んだ。

すると熊は素早く首を振り、飛んできた餌を口で咥えると素早く飲み込んだ。

「おおっ、ナイスキャッチ！」

高校生達が感心していると、クマは再び両手をバシバシと叩き合わせ、上半身をグルグルと回して次の餌を催促する。

周囲には新手のクマが次々と集まってきた。

どうやら餌をくれるチョロい集団と認識したらしい。だが事実として、七村高校の生徒達は、餌を買って次々と投げ入れていった。

そんな高校生を手玉に取る賢い熊達を見ているうちに、次郎はある生き物を連想した。

（お前ら、実はグリフォンとかだろ）

多階層円柱の地下一八階に生息するグリフォンも、嘴を器用に動かして餌を狙い、集団で連携する知恵を持っている。

かつてアダムとイブは知恵の実を食べて楽園を追放されたそうであるが、であれば追放されたこの世界にいる生物たちは、皆どこかしらで知恵の実を食べた結果、この場所にいるのかもしれない。

そんな空想を続けながら、次郎は熊牧場の中を歩き始めた。

熊牧場の中には、なぜか狐たちも飼われていた。

広い草むらに疎らに木々が生えており、いくつかの岩場があつて、その岩の上にアカギツネがチョココンと乗っている。

岩は日向になっており、狐はその上に伏せて前脚を伸ばし、耳だけを立てながら日向ぼっこをしていた。

あまりの平和さに次郎が和んでいると、自由行動で同じ班の奈部と鳥内が不穏なことを口走り始めた。

「こいつらつて、熊の非常食か？」

「そりや当然ですがな社長。地産地消。資源は有用に使い切らないといけません」

仕切られたフェンスの中から無垢な瞳を向けるアカギツネと、下劣な笑みを浮かべる同級生たちを見比べた次郎は、フランスの画家ブーランジェの作品『奴隷市場』を思い浮かべた。

だが、かつて奴隷市場を実際に目にした多くの人々のように、次郎に出来る事は何も無い。此処に居る狐たちを逃がしてあげても、どこかで捕まって殺されるか、また別の檻に連れて行かれるのである。

（中世時代の民衆も、俺と同じように奴隷を見ているしかなかった

んだらうなあ)

次郎は修学旅行で、奴隷について学ぶという極めて貴重な経験を積むと、次の場所へ赴いた。

やはりフェンスに囲まれた広い場所に、今度は水場があった。

そして中では、ゴマファザラシが気ままに泳いでおり、オットセイは飼育員の男性から魚を貰うべく首を伸ばしていた。

「……熊牧場じゃなかったんかい！」

どうやら次郎たちが来た場所は、クマ牧場兼何種類かの動物園であるらしかった。

修学旅行生達が群れてきたのを横目に確認した飼育員のオジサンは、仰々しく魚を捕りだして、左右に振ってみせる。

すると飼育員の動きにオットセイが反応し、猫じやらしを目の前にチラつかされたかのように首を振り、早く寄越せとばかりに何度も頷きを繰り返した。

焦らし上手なオジサンは、オットセイがキレる前にタイミングを見計らって魚を投げ、オットセイも完全に慣れた様子で上手く口でキャッチしていた。

見学していた無垢な同級生達から、次々と拍手がわき起こる。

かなり気を良くしたオジサンは、徐ろに二匹目の魚を掴み取る。

いつの間にか次郎は、オジサンの餌やりに魅入っていた。

やがて熊牧場の散策が終わり、次郎たちは有名なクラーク像に移動して記念写真の撮影を行い、近くの食堂のようなところで夕食にジンギスカン料理を食べた。

クラーク像を襲撃した馬鹿が居て、台座に昇って銅像の首を押さえ、写真撮影を行った後に教師から引きずり下ろされていた以外に特筆すべき事は何も無い。

携帯端末を奪われてデータを消されていたが、それはもう自業自得と言うべきだろう。夕食のジנגスカン料理のように軽い気持ちでSNSに襲撃写真を載せられでもしたら、来年から後輩達が北海道に来られなくなる。

些細なトラブルが鎮圧された後、一行はバスで初日に泊まる旅館に到着した。

既に窓の外は真っ暗で、次郎たちは速やかに班ごとに割り振られた部屋へと押し込まれる。

畳の大部屋には布団が五つ敷かれており、さつさと寝ると催促されているかのようなだった。暇つぶしをしたければテレビでも見るとばかりに、テレビだけがドンと鎮座されている。

「成程。これが理由で、班を男女で分けると言っていた訳か」

早速北村がテレビを付け始める。

受信料を強制徴収する局のニュース番組と、恐ろしく広告料を取る局のバラエティ番組が交互に映し出された結果、バラエティを選んだ北村はテレビの前で転がり始めた。

その間に荷解きをした中川が、入浴セットを取り出して立ち上がる。

「ジロー、温泉行こうぜ」

「了解。キタムーはどうする？」

「後で入るわ」

どうやら今映っている番組が出演している芸能人は、北村にとってお気に入りらしい。テレビの前から動かず、そっけない反応を返してきた。

「分かった。それなら奈部と鳥内は？」

「俺らも後で良いわ」「同じく」

「入浴時間があるらしいから、早めに入っておけよ」

一応声だけは掛けたものの、座した三人は一向に動きそうに無い。次郎と中川は着替えを素早く纏めると、アツサリ見捨てて旅館の温泉に向かった。

広い脱衣所に入ると、一般客は全く見当たらず、同級生もまだ数人しか入っていないかった。

「一番乗りでもないけど、かなり早い方だな」

「というか、他の客がいねえ」

「それは一般予約が入る前に、旅行会社の枠で部屋を押さえたんだろ。修学旅行者、御用達とかなんじゃね？」

「ほほお。なんか普通にありそうだな。ボロいし」

「確かに」

次郎たちが来ている旅館は、勝手に宿泊料金を値付けするなら一泊三、〇〇〇円台だろうか。夕食が付いて来ず、今どき畳に布団の大部屋であり、照明も壁も、廊下もボロい。

クラーク像からバスで三〇分は走ったはずで、地価が高いという感じも全くしない。

支払った修学旅行代の差額は、一体何処へ消えているのかと疑いを持ちたくなるグレードの旅館である。まさか一緒に来た校長達の酒代だろうか。

そんな安っぽい旅館の磨りガラスをガラガラと空けると、ゴツゴツと大きな石が埋め込まれたタイルの上を歩き、これまた安っぽいシャワーの前に座り込む。

子供騙しならぬ高校生騙しに、気付かなければ幸せだっただろう。次郎は渋々と頭から洗い始めたが、その隣に座った中川が批判を口にする。

「教師が居ない。奴等は別の温泉に入っていると見た」
「マジか」

旅館の館内マップは、事前に高校で貰った旅のしおりに一部記載されているだけだ。そこには旅館の入り口から割り振られた部屋と、次郎たちが入っている温泉など最低限の記載しか無い。

それを次郎たちは、館内マップを拡大して見易くするためだと性善説で解釈していたが、もはや信じられなくなっていた。

「大人の汚さを教えるとは、なんて修学旅行だ」

「いつか革命だな。政権を奪取したら、奴等の年金を九〇歳から支給にしてやるうぜ」

「……………やめるんだナカさん。それをすると、俺らも巻き添えになる」

身体を洗い終えた二人は、手前にある安っぽい温泉に浸かり始めた。

温泉は内風呂の他に露天風呂もあるらしく、竹壁で囲まれた広い空間にかなり長くて広い湯船が伸びていた。

内風呂は狭く、三〇人も入れば一杯になってしまう。

修学旅行生御用達であるなら、この露天風呂の広さと長さはあつて然るべきなのだろう

「ナカさんや。露天風呂に移らんかね」
「おうジロー、行ってみようぜ」

二人は内風呂を抜け出し、露天風呂へと移動した。

露天風呂は石で囲われており、内風呂より幅が広くて底が深く、若干温かった。それが奥まで伸びていて、次郎は肩まで浸かりなが

ら奥まで進んでいく。

するとし字型のようになっていた露天風呂の奥で奥に行き着いた。最奥は竹壁で囲まれており、風呂から上がった狭い岩場には、別のクラスと思われる男子が二人居た。

彼らのうち一人は次郎たちを見ると露天風呂に戻っていき、もう一人は動こうとしない。

「……………ん？」

不審に思った次郎は、何となく竹壁の方に向かった。

そして離れていった男子が空けた空間に入り、竹壁の方を見る。すると先に居た男子がグツと親指を上げて、その指を竹壁の方に向けた。

指先の指す場所をのぞき見ると、一カ所だけ微妙に空いた空間があり、そこから覗き込むと明かりに照らされた別の露天風呂が見えた。

「……………！？」

次郎は思わず息を呑んだ。

三人、いや四人だろうか、同級生と思わしき裸体の女子が見える。彼女達は無防備に、やや小振りの果実を堂々と晒しながら、頭からシャワーを浴びせていた。

そのうちストレートの黒髪が肩まで切りそろえられた女子が立ち上がると、今度は下腹部のさらに下が見える。両足の付け根の中間辺りだ。その部分は髪と同じような黒色だったが、照明に照らされており、まず間違いなく影ではないだろう。

そこを惜しげも無く次郎に晒した彼女は、濡れた髪をタオルで拭くと、ゆっくりと温泉の中に浸かっていった。

なぜこの旅館には、このような場所があるのか。

露天風呂の次郎側はL字型の奥になっており、暗くて光が漏れない。一方で竹壁の向こう側は明るく、ハッキリと見える。

不意に次郎は、これが旅館の作為なのだと思い付いた。

なぜなら、このように男湯と女湯が物理的に繋がっているなど、建物を建てる際に意図しなければ有り得ないからだ。

まさか温泉の湯を繋げる配管代をケチって一纏めにして竹壁で仕切るなど、いくらなんでも有り得ないだろう。

この旅館を建てたのは、おそらく男性に違いない。

それも浪漫を持った男性だ。

そして浪漫だけでは無く、それを他の男に分け与える度量まで持った男の中の男だ。

（旅行会社も教師たちも、みんな良い人だった）

次郎は心の中で、性善説を疑った己の未熟さを謝罪すると共に、旅館の宿泊料金を三、〇〇〇円台から九、〇〇〇円台まで跳ね上げた。

そして大人達の配慮を有り難く受け取るべく、改めて竹壁の先を覗き込む。

次に入ってきたのは、一部のジェットコースターに乗ろうとすれば身長を測られそうな小柄なカジュアルショート少女と、私服ならコンビニでお酒を買えそうなロングヘアの女性と、普段のツインテールを解いた次郎が生年月日を言い当てられそうな女子だった。頭が真っ白になった次郎は、どうして良いか分からずに、一先ず心を落ち着けようと状況を分析した。

みかん、梨、柿、である。

みかんは、もはやどうしようもない。道理でエリートオタクなのに、コスプレに走らないわけだ。みかんが好きな人もいるため、あ

まり気にしなくて良いと次郎は考えた。

梨は同級生の中でも一際輝く星であり、将来も有望だろう。いずれメロンのように高値が付き、悪代官が「お主も悪よのう」と嫌らしく笑いかけてきそうである。

柿はかつてリンゴになるかと思われたが、ある時期から日当たりが悪かったためか成長速度が落ちている。しかしその分、他よりも色白である。

そんな果実達は、惜しげも無く果実を晒しながら、その実を洗い始めた。

その後も女子達が続々と入ってきたが、女子達はよほど集団行動が好きなのか、あるグループは果実をさり気なく腕で隠し、あるグループは一切隠さず、皆がグループ毎にまとまってシャワーを浴び始める。

日本人型と言われる内股O脚も居れば、XO脚もいた。

寸胴型と言われる日本人だが、こうして沢山の女子を並べて見比べると、ウエストの細い方が身体が引き締まって綺麗に見えるというのは確かなようだった。道理で女子がバストやヒップだけでは無く、ウエストを気にするわけである。

（おい、ジロー、代われ）

次郎が竹壁の前から動かないのを不審に思った中川が、持ち前の妄想力から状況を察して肩を掴むと引つ張り始めた。

次郎は思わず舌打ちを仕掛けた。

普段男子たちの前では見せない純粋な女子の笑顔を堪能していたところ……ではなく、よりによって美也が入っているタイミングで中川に見せるのは、理由は説明できないが許されざる気がした。

次郎は首を横に振り、抵抗の意思を示す。

すると中川が引つ張る力をどんどん強めてきた。

しかし次郎は現在レベル六三であり、熊牧場のツキノワグマどこ

るか、サイヤカバ並に巨大なグリフォンを一本背負い出来るくらいには力がある。レベル〇で巨大コウモリと良い勝負な中川の力ではビクともしなかった。

（ジロー、お前は、俺たちの友情を、裏切るのか）

動かないとみた中川が、女湯に気付かれない程度の小声を出して、心配と心情とで二重の圧力を掛けてくる。

しかし中川は気付かないと思ったのだろうが、次郎にとってそれは致命的だった。

何しろ先方には、レベル六三で風の動きに鋭敏な柿の化身が居る。そのドライアードは、濡れそぼった髪から垣間見える瞳を、竹壁ごしに次郎たちの方へと振り向けた。

「……………あ……………終わった」

次郎は瞬時に土魔法を使ったが、隙間が埋まる直前に見えたのは、ドライアードの呆れた瞳と、ハの字に下がった眉と、白い肌にタオルを引き寄せる姿だった。

一切の抵抗力を無くした次郎を押し退けた中川は、竹壁を覗き込み始めた。

そして何処にも隙間が無いことを信じず、それから一〇分以上も見えない隙間を探し続けた。

30話 ラベンダー畑

一組には、哀れな男が二人居る。

その一人は、竹壁に仕切られた女湯の前で、あるはずの無い隙間を探し続けた男である。

彼は如何なる理由でか、そこには間違いなく桃源郷の入り口があると確信しており、他の男子生徒に止められるまで延々と張り付き続けていた。

その姿は、まるでギャンブルに金を注ぎ込んだ男が、投資を少しでも取り返そうとして自分では引き返せなくなる様に似ていた。

彼は一〇分以上も竹壁の前で粘った結果、男子からは尊敬の眼差しを向けられる一方で、噂を耳にした女子からは大いに蔑まれてしまった。

覗ける穴など存在しなかったので、実害は発生していない。

彼は同行している生徒指導の教諭から「おかしい真似をするな」と口頭注意を受けるに留まった。

だが修学旅行の第一集団である一〜三組九〇名の中では、今や最も話題に挙がるネタ話として面白おかしく語られている。いずれ修学旅行が終われば、第二集団の四〜六組や、第三集団の七〜一〇組へも広がっていくだろう。

そしてもう一人は、これから非公開裁判を待つ身である。

裁判官はレベル六三という超能力で事態を知覚し、エリート幼馴染みという天然の高性能嘘発見器まで所持しているため、シラを切れば自動的に量刑が重くなる。

元々空いていた竹壁の隙間を知らずに覗き込んだという言い訳は、見たか見ていないかの二択で有罪と無罪を分ける裁判官には通じない。

罪刑法定主義を掲げる日本の司法では、被告人の行為は自らの意志に因らない不作為だった点が充分考慮された判決が出されるかも知れないが、残念ながら今回開廷されるのは民事裁判ですらない。要するに有罪は確定しており、あとは判決文が読み上げられるのを待つ状況であつた。

明けて早朝。

大広間に並べられた御膳の前に次郎が座ると、その隣に当然の如く美也が座つた。

高校では食事の際に、誰の隣に誰が座るという決まりなど設けられていない。

抵抗が無駄だと知る次郎は、自然に逆らう素振りを見せること無く、大人しく隣にお茶を注ぎ始めた。

すると嵐の前の静けさを保つ台風は、お茶を入れられたお返しとばかりにご飯をよそつて次郎に差し出してきた。

これがどんな量でも被告人に拒否権は無いのだが、ご飯の量自体は普通だった。素直に受け取った次郎は、自分の分のお茶も注いでから吸い物の蓋を取る。

その間に噴火前の火山は自身のお椀にご飯をよそい、吸い物の蓋を取ると音を立てずに一口啜つた。

朝食は程々に軽めの和食で、ご飯、豆腐とワカメの吸い物、焼き魚、卵、海苔、おひたし、ひじきの煮物だった。

それらに箸が付けられる一挙一動を、次郎は生唾を飲み込んで見守る。

「食べたara?」

「……………はい」

様子を窺うというバツサリと切つて捨てられた次郎は、怖ず怖ず

と朝食に口を付け始めた。

二人の気配を察してだろうか、あるいはレベル相応の威圧でも自然と発せられているのだろうか、一組の生徒たちは決して次郎と美也の隣に座ろうとはしなかった。

その空いた席を、やがて何も知らない他のクラスの生徒達が埋めていく。

これが中級ダンジョンであれば、危機察知能力の低い彼らは間違はなく地下二階まで辿り着けずに死んでいただろう。

だが彼らにとっては幸いな事に、旅館内の魔物は既に自らの獲物の首に牙を突き立てており、標的が変わる事は無かった。

暫く表面上の平和が続き、やがて周囲の雑談が大きくなった頃、美也が再び口を開いた。

「貸し一つ。今回は、特別枠の小さい貸し一つ」

唐突に、次郎の右隣から左人差し指が一本突き立てられる。

そして特別である旨が強く協調された後、一拍ほどの沈黙が訪れた。

次郎が沈黙を保ったまま様子を窺うと、最後に判決が下る。

「一つだけ、相応の要求を飲むこと。分かった？」

「……………はい」

横合いから目力で圧しつつ、判決文を読み上げた美也に対し、次郎は素直に頷いた。

被告人が観念して判決を受け入れるのを確認した裁判官は、黙々と食事を再開する。通告を出し終えた美也は、それで解決とするようだ。

よく考えれば、高レベルの魔法で瞬時に穴だけを塞ぎましたなど言えるはずも無く、であれば被害は存在しなかった事になる。

もつとも、そんな公式記録とは裏腹に、次郎は特別枠の小さい借りを負って頭を悩ませた。借款の返済期限は定められていないが、取り立て人が次郎を知りすぎているために、踏み倒しは不可能だ。転移が絵理にバレた時の、次郎感覚での「特別枠の中くらいの借り」も溜まっており、首が絞まる前に精算したいが、美也が大抵の問題を自己解決できるために機会は滅多に訪れない。

美也感覚での「特別枠の大きな貸し」は一つあるが、それに関して次郎は最初から精算を求める気は無い。

次郎は意気消沈したまま朝食を口の中に詰め込むと、二日目の目的地へ赴くべく、ゾンビのような足取りで一組のバスに乗り込んだ。

修学旅行の二日目は、北海道の横断だ。

千歳方面から東進して富良野市のラベンダー畑を見学した後、さらに東へ進んで空が映し出される屈斜路湖くつがしうみを眺め、蒸気が噴き出す硫黄山に訪れるという行程である。

一日目に飛行機で移動した距離に比べれば短いものの、山中県では有り得ない超超距離で、高校生の感覚では無茶苦茶だ。

旅のしおりには、修学旅行のスローガンに北海道の雄大さを体験して大きな心を育むなどと書かれていたが、モノは言い様であると関心すらさせられる。

尤も、観光バスの運転手にとっては、これが日常茶飯事であるらしい。

四〇代の運転手はバスガイドに煩い高校生達の相手を任せると、自らのペースで観光バスを走らせ続け、概ね予定時刻通りに運び切った。

「本当に移動できるんだねー。大富豪してたら、あっけなく着いちやったよ」

「一番負けたナカさんがラベンダーソフトの驕りで決定。いやあ悪いねえ」

「大貧民に奢らせるとかおかしいだろ。むしろ大富豪が奢れよ！」

到着したバスから続々と降りてきた生徒達は、担任から集合時間が念押しされた後、北海道に数ある観光名所の中でも王道であるラベンダー畑の中へと解き放たれた。

空は快晴で、紫、ピンク、オレンジ、白、赤といった色鮮やかな花々が眩しく映える。

金曜日の午前という時間帯で、周囲の来園者は疎らだったが、見学する側にとっては都合が良い。

心持ち気を良くした次郎は、鮮やかな畑の中を歩き出した。

「おーっ、これって全部ラベンダーなのか？」

「紫はラベンダーだけど、ピンクはコマチソウで、オレンジはカリフォルニアポピー、白はかすみ草、赤がポピーかな」

四割ほど機嫌の治った美也が、次郎に歩み寄ってきた。

とはいえ透明な心の壁が、今も全身に薄く張られている。

それを自覚しつつも歩み寄るべく、敢えて近付いてきたのだろうというのが次郎の分析だった。

次郎は自らも歩み寄るべく、左手を伸ばして美也の右手を握った。すると複雑な機嫌のパロメータが上下に急激な変動を見せる。

普段であれば美也側の意志も加わって相乗効果を発揮するのだが、現状ではそこまでは期待できないらしい。

「美也」

「なに？」

「ほら、行くぞ」

強引に手を引き寄せられた美也は反射的に従い、次郎と共に歩き出した。

片側車線でも通り抜けてしまえば交易路は繋がるらしく、パロメータの数値が六〇七割くらいで落ち着きを取り戻す。

「結構色んな種類があるんだな」

「うん。だから綺麗に咲き並ぶのが六月末から七月末までで、開園もその一カ月間だけみたい」

「随分と短いな」

「仕方が無いよ。花の命は短いんだから」

「ふむ。それなら俺は、この花を愛でるか」

次郎は回れ左でクルリと半回転すると、右手で美也の頭を撫でた。

「次郎くん、そういうの、誰から習ったの？」

「俺の知識の源泉は、概ねネット小説だ。数百人の先生が居るようなものだな」

「なんか凄くヤダから、やり直しを要求します」

「うぐっ」

「要求します」

「マジか」

美也が突然、『特別枠の小さな貸し』の返済を要求した。

この場合、拒否には重い利子が付き、より困難な状況で使用される事になる。

次郎は自身の乏しい語彙から必死に見栄えの良い言葉を紡ごうとしたが、そういう事を求めているのではないと目で訴えられ、抵抗虚しく胸の内を言わされた。

「……………美也が一番可愛いよ」

次郎自身の辞書に記されている言葉は、小学生か、下手をすると

幼稚園児並であつた。

祖母達の作った箱庭で美也と暮らしていたため、成長する機会を失っていたのかもしれない。

しかし相手は同じ箱庭育ちにして、次郎とほぼ同レベルの美也であつた。

「……………もう良い」

聞かされた側は下を向いたが、耳が赤かつたので効果の程は窺えた。

あらゆる攻防は、相対的なものである。

どれだけ強くとも、相手の方が強ければ勝利できない。

逆に自身が弱くとも、相手の方が弱ければ敗北しない。

ただし今回の場合は、互いに同レベルなので、第三者視点では同等のダメージを受けているのは一目瞭然であつた。

世の中には肉を切らせて骨を断つという諺があるが、あれを現実で実施した結果がこの様である。

それでも肉が抉られた結果、ラベンダー畑を回りきつた頃には、美也の機嫌は普段の五割増しで良くなっていた。

ラベンダー畑での散策を終えた一行は、屈斜路湖くつしゃろこと硫黄山に相次いで足を運んだ。

屈斜路湖は、数十万年前から数万年前にかけて激しい火山活動が繰り返された後、巨大な窪地が形成されて湖になった日本最大のカルデラ湖だ。

最後の噴火は最終氷河期中期にあたる約三万年前で、ネアンデルタール人の絶滅前らしく、今後の噴火を次郎が見る事は無いだろう。

広さは約八〇平方キロメートルで、東京都新宿区が四つくらい入る。それが冬には全面結氷するらしいが、次郎の訪れた七月は流石

に氷が浮いておらず、向こう岸と空の雲が水面に映し出されていた。確かに湖は雄大で、学校が教育の一環として生徒達を連れて来た意味も理解できたが、普段から田舎を見慣れている次郎には今一つ有り難みが感じられなかった。

一先ず風景を携帯端末で撮影しまくると、そのまま硫黄山へと移動する。

硫黄山は、屈斜路湖からバスで一〇分の距離にある。

屈斜路カルデラと摩周カルデラとの間に挟まれた活火山で、最後の噴火は数百年前の水蒸気爆発らしい。年数が曖昧なのは、北海道開拓が本格化したのが明治時代からであり、それ以前に暮らしていたアイヌ民族に記録が無いからだ。

明治時代、マッチや火薬、紙やゴムの製造に用いられる硫黄が文字通り山のようにあった硫黄山には鉄道が敷かれ、二十余年に渡って採り尽くされるまで採鉱と大量輸送が続けられた。

飛躍的に発展した明治時代を支える一助が、北海道の豊かな自然の賸す資源であった事は、中々に感慨深い。

景色よりも歴史に興味を持った次郎は、ここで修学旅行の目的を果たすに至った。

高尚な旅行を終えた次郎たちは、二日目の夜を過ごすホテルへと移動した。

ホテルは昨日の旅館ほどでは無いが安っぽく、何の飾り気も無い狭い部屋にベッドが二つ置かれており、生徒達はクラス毎に名字のあいっえお順で次々と押し込まれてった。

そして堂下次郎は、中川仁大と相部屋である。

ホテルには露天風呂など無く、普通に風呂に入ってテレビを見るしかなかった。流石に暇なので、男子同士で部屋を行き来してトランプなどで遊んでいるうちに時間が過ぎる。

すると徐ろに中川が立ち上がり、凜々しい表情で高らかに宣言し

た。

「おいジロー、女子の部屋に行くぞ」

「……………ナカさん、いきなりだな」

「全然いきなりじゃ無いだろ。むしろ一日耐えた俺を褒めるジロー。ていうか温泉の時のアレは何だよ。絶対覗けると思ったのに、なんで覗けないんだよ。お前はアレか、心眼で透視してたのかっ!」

「まあまあ、落ち着けて」

興奮した中川を落ち着けるべく、次郎はゆっくりとした口調で宿めに掛かった。

「二日目に期待を掛けてみれば露天風呂なんて存在しないし、一体どないせいつちゅうんじゃ!」

「分かった、分かった。というか、ナカさん。女子の部屋に行つて、何をしたいんだ?」

「はあ、お前、決まってるだろ。それはもう、うつひよっひよっひよ」

「おまわりさん、コイツが犯人です」

奇っ怪な声を上げ始めた中川に耐え切れなかった次郎は、思わず国家権力に助けを求めた。

そもそも美也との一件は完全に解決したが、中川の方は全く気にしていなかった。そして放置した結果、中川の場合はついに暴走したらしい。

たった一日しか保たないとは、まるで福島原発一号機並みに柔な精神構造だ。日本中がビクビク仰天である。

「まあアレだ。変な事したら、明日北海道ドームに行けなくなるぞ」
「どうした、堅いこと言うなよ。硬いのは、ここだけでええんやで」

？」

「やかましいわ」

中川の右手が怪しく動いて領空侵犯を行ってきたため、次郎は速やかに迎撃機を飛ばして容赦なく撃墜した。

「とにかく俺は行かん。だが止めないから、ナカさんいつてらー」

「何だよ、来ないのかよ。裏切り者め」

中川は愚痴りながら廊下に出て行き、ほんの数分で戻ってきた。

「お早いお帰りで？」

「フナヤマンが廊下で待ち構えてた」

「へ、フナヤマンが？」

フナヤマンとは、次郎たちの担任である舟山浩之先生の愛称だ。教科は国語で、漢字検定で美也に準一級を受けさせると同時に自分が一級を受けて受かるという実に大人げない三十路のオッサンである。

高校生の学習範囲をとくに網羅した美也も、流石に趣味の範囲に属する漢字検定一級の漢字までは覚えていない。そこを突いて一級を受験し、合格をクラスで発表して教師の面目を保つという結構セコい担任だ。

フナヤマンは一級の受験にあたって二カ月ほど家で勉強していたらしく、確かに努力家ではあるのだが、セコいので素直に賞賛がたかった。

「ああ。あいつ、階段の前に椅子を持ち込んで、俺らの部屋と階段を同時に監視してやがった」

中川は旅のしおりを取り出すと、男子の二、四階と、女子の五、七階を指し示す。

男女の部屋は階が分かれており、階段若しくはエレベーターを使わなければ行き来できない。

そしてフナヤマンが陣取っているのが階段前であり、エレベーターは階段の奥にある。言うなれば、倒さない限り先には進めないダンジョンの中ボス的な配置だ。

「流石フナヤマンだな。奴の性格だと、夜中まで監視を続けると思うぞ」

「あいつ、ほんとにもう。いきなり捕まって、釘を刺されたわ」

「てかナカさん、よく解放されたな」

「一階のロビーでお土産買いたいって言ったからな。即座に却下されたけど」

「あー。それはもう完全に目論見がバレてるわ」

「くそつ、時間差だ。奴が疲れたタイミングで行くしか無い」

中川に諦める意思は無いようだった。

それに付き合わされては御免だと感じた次郎は、速やかに撤退を宣言する。

「じゃあ一眠りするわ。ナカさんも程々にな」

「おう。俺はやるぞ！」

次郎は部屋の明かりを少し落とすと、テレビを見始めた中川を無視してベッドに潜り込んだ。そして毛布を頭から被ると、身体を楽にしてとにかく寝ようと図る。

最初は眠れないかと思ったが、いつの間にか寝入っていた。

そして夜中、深夜二時頃にふと目が覚めるとテレビが消えており、

中川は自分のベッドに居なかった。

（捕まったのか、それとも成功したのか。いずれにせよレジェン
だ）

中川は暴走気味だったが、次郎の相手だと認識している美也と、
北村の相手だと認識している塚原愛菜美をターゲットにしない程度
の良識は持ち合わせている。

それに部屋を間違ったところで、美也のレベルと攻略特典の能力
加算が相手では、グリフォンですら投げ飛ばされる。

であれば自由恋愛でも略奪愛でも、あるいは廊下で正座でも好き
にしてくれとばかりに、再び次郎は眠りについた。

31話 北海道ダンジョン

二〇四五年七月一日、土曜日。

修学旅行の三日目となった。

本日は最初に札幌駅から時計塔に向かい、そこから午後三時までグループ単位で自由行動という、極めて自由度の高い行程になっている。

これは生徒達に見知らぬ土地での事前調査・計画立案・現地行動をグループ単位で体験させる事により、段取りや役割分担を学ばせ、自主性や自立性を養わせようという学校側の教育の一環だ。

高校卒業後に進学せず社会人になる生徒もそれなりにいるため、修学旅行は最良にして最大、かつ最後の機会でもある。

そのため生徒達が立案した行動計画は、時間的に達成不可能など最初から明らかに破綻していない限りは一切口を出されなかった。

午後三時までは生徒達にやらせてみて、集合時間に間に合わなかったグループを教師が回収して宿泊先のホテルまで連れて行き、四日目に飛行機で帰路に就くというのが学校側の計画である。

かくして堂下・中川・北村・奈部・鳥内の一組第三班は、解散となった時計塔前から一〇分ほど歩き、目的地である北海道ダンジョンまでやって来た。

そのうち四人は学校指定のブレザーで堂々とやって来ているが、次郎だけは監視カメラでデモの集団を撮影されているだろうと説明して、時計塔のトイレの個室内で着替えた。さらに個室の内側には鍵を掛け、いざとなれば転移で逃げる算段まで整えている。

服装は、収納能力で持ち込んだ使い捨ての安い私服とニット帽、その辺のコンビニで買える白いマスクと色つき眼鏡という怪しげな格好だ。

加えて監視カメラを警戒して北村達から少し離れた後ろから、速

度を変えながら四人の集団とは別だと言わんばかりの動きをするという念の入れ様で、お前は実際にデモに参加する気なのかと四人を呆れさせた。

北海道ダンジョンは、昨年五月に北海道大学植物園があつた場所に出現した。

元々背の高い樹木に覆われた迷路のような場所だったが、今では本当の迷宮と化している。

周囲の北海道県警本部、年金事務所や病院、高校や幼稚園、電化製品販売店やマンションなどは全て無事だったが、これらは警察本部を除き、憲法二九条第三項の基に全て国に接收された。

憲法二十九条第三項では『私有財産は、正当な補償の下に、これを公共のために用いることができる』と定められており、全国の巨大構造物の周辺は大抵同じようなことになっている。

南西にあつた電化製品販売店や、高校・幼稚園・年金事務所などは自衛隊基地と化して重機関銃や対空砲などが並べられ、魔物出現時のクロスファイアポイントになっている。

マンションは自衛隊員や機動隊員たちの宿舎に変わり、病院には自衛隊の駐屯地業務隊衛生科長を筆頭とした医官が詰めている。

国側が巨大構造物の周囲を完全に覆い尽くさないのは、それをすると奇数月の四日に発生する魔物氾濫時に壁が自動的に転移させられて、道を全開放させられてしまうからだ。

それならば最初から跳ばされない程度に道を空けておいて、攻撃できる位置に誘導するしかない。

だが多少の魔物は包囲を突破してしまうため、奇数月の四日は警戒区域が指定されて、民間人が避難させられている。

なお外周では、レベルを求める民間人が集団で武器を持ち集う。

だが無辜の市民が被害に遭うより、自発的意思に基づく自己責任の人間が魔物と遭遇して、自衛隊が駆け付けるまで足止めになってくれた方が良いのか、彼らは完全には排除されていない。

そんな巨大構造物の周囲で市民が合法的に入れるのは、周囲の一区内では警察本部だけだ。それ以外はコンクリートと規制線で囲まれており、それを越えると不法侵入で取り押さえられる。

それ以外で最も近いのは警察本部の向かいにある北海道庁だが、その隣には北海道札幌方面中央警察署があるためおかしい事は出来ない。

だが建物や規制線の外側で抗議活動を行う人たちは、一向に減る様子が無い。

北海道にいるデモ隊の主張は、概ね次の通りだ。

一・国民が法律を守る義務を負うように、国家も憲法を守る義務を負っている。

二・その国家が、国民の生命・財産を守る憲法上の責務を果たさずに国権乱用に走ったのは、国民の法律違反と同様に、国家による憲法違反である。

三・現政府は、自己の利益のために不当に国民の生命・財産を脅かす違法集団であり、国家を統治する資格は無い。直ちに退陣せよ。

マスコミ各社の調べでは、国民の約七割が政党の支持度合いで『ドームから多階層円柱に変える処置地域』を変更するのはおかしいと感じており、国会でも取り分け野党が大反発している。

そんな政府に怒りや危機感を抱いた国民、理不尽な損害を被る企業、犠牲者に近い個人などが抗議の声を上げるのは、彼らの主張をよく聞けば正常な行動のようにも思われる。もしも一切抗議しなければ、政治家は権力を悪用してどんどん腐敗していく。

おかしくないと回答した三割の人達も、実際には本当に全くおかしく無いと思っているわけでは無く、優先順位が上げられた宮城県民や広島県民、あるいは安定した生活が保障されている公務員の一部や天下り法人、随意契約団体など諸々の人々とその家族が、損得

などを差し引きして大人の対応をしているだけだ。

結局のところ民主主義とは最大多数の最大幸福であり、各自の利害で判断される。

だが今回の場合、政府が多数の幸福を示す前に内部告発されてしまい、状況の改善前だった三九都道府県に暮らす人達の多くが批判に回り、多数派と少数派が入れ替わったわけである。

問題は、そんな普段は分かり易い民主主義に、レベル上げは権利や機会だと捉える人々が乗って主張が変質してしまった事だ。

具体的には、抗議活動の――三までは論理的に整合性が取れていたが、いつの間にか項目に四番目の巨大構造物内部を公開しろという内容が増えていた。

追加された大義名分は生存権を根拠とする魔物対策で、レベルを上げて魔物に対する自衛手段を持つ事や、政府の代わりに自力で処置して魔物を出なくするのが目的らしいが、そこに利己的な部分が見え隠れするのは否めない。

おかげで峰岸官房長官の「明らかに危険だと分かっているため、そのような予定はありません」という回答に、一見すると正当性が生まれてしまった。

ようするに、レベルを上げたい人々の本音が漏れ過ぎたわけである。

また国際的にも、悪魔の一種であるインプを見て、宗教上の思想から打倒すべきだと考えた世界人口の半数以上を占める世界三大宗教の信者たちが各国で運動を起こし、色々な国の政府もそれに乗って日本に情報開示と封鎖の解除をするよう働きかけた。

圧力をかける各国政府も、出遅れまいとする本音が漏れ過ぎである。

だが三大宗教色の弱い日本では、宗教上の思想で要求されても日本人の賛同者が得られず、内政不干渉の壁を通りはいしない。

それにも拘わらず各国は自国民の支持を得て外交圧力を掛けられ

るため、当初単純明快だった問題は様々な個人や組織の思惑が複雑に絡み合って、もはや収拾不可能になってしまった。

「うわぁ、これはすげえな」

札幌の北海道ダンジョンには、土曜日とあって数千人が集まっていた。

次郎たちのような修学旅行生や外国人旅行者、観光やお祭り気分で見に来た人、偶々通りかかった人なども沢山いるのだろうが、東京以外でこの動員数はそれなりに多いと思われる。これだけ多くの人影に隠れば、個人の識別は困難なはずだ。

抗議している人の声に耳を傾けると、面白い言葉も聞こえてくる。

『昨日発売された週刊文秋に、高瀬総務大臣の孫が脳性麻痺から回復して、下半身が動くようになったと書かれていた。政府は税金で運用している警察や自衛隊を使い、自分たちだけで私的に独占している。ふざけるなっ！』

「そうだっ、特権階級で国家を私物化するな！」

「国民を馬鹿にするのも大概にしろ！」

男性は右手に拡声器を持ち、左手で週刊文秋を高らかに掲げながらダンジョン前を封鎖する警察官を罵倒して盛り上がっていた。

巨大構造物ドームに至る正面門は、転移を繰り返されたためか、コンクリートでは塞がれていなかった。

但し出入口は、コンクリート製の防壁と巨大な門扉でしっかりと塞がれている。

政府が門を作って巨大構造物を閉じても転送で跳ばされないのは、魔物氾濫時に巨大構造物の外壁が開いて、そこから魔物を放出できるからだろう。

明らかに魔物ではなく、人間の出入りを禁止する対策だった。

その前に居並ぶのは、二〇余名の警察官。

彼らは規制線の奥で両手を後ろに組み、憤る群衆の声を無視しながら視線を虚空に向けて無反応を貫いていた。

おそらく警察官が居なくても、大型重機を大量に持ち込まなければ破壊して内部には入り込めないだろう。そして重機を持ち込めば、即座に周辺から警察と自衛隊の応援を呼んで、凶悪犯を逮捕である。相手が門を越えられないと知っている為なのか、警察官達は黙々と佇んだままだった。

「週刊文秋ってどこから情報集めてくるんだろうな」

「また内部告発じゃないのか。情報提供料も大きいらしいぞ」

「へえ、いくらくらい？」

「そりゃあピンキリだろう。でも今の話なら、一〇〇万は硬いな」

中川と北村は抗議している人を面白そうに眺めながら、どんどん前の方に進んでいった。そして奈部と鳥内は、なぜか他校の生徒たちをナンパし始めた。

「ねえ君たち、修学旅行中？」

「そうですよー」

「俺らも修学旅行なんだ。どこから来たの？」

「えー、京都」

「マジで。超イケてるじゃん。俺らなんて山中県だぜ。山中県って何処にあるか分かる？」

「えー、九州？」

「あはははっ」

奈部が機嫌を取り、彼女たちのグループを話に引き込んでいく。すると状況を察した中川と北村が素早く引き返してきて、デモ集団の一角にナンパ集団が混じるといふ摩訶不思議な光景が生み出さ

れた。

京都が出身地だという女子高生たちは、若干色白で、明るく、山中県の女子に比べて仕草が洗練されていた。加えて奈部は、相手の容姿だけではなく、人数まで見定めて声を掛けたいらしい。

落ち着いた紺色のワンピースに長めのプリーツスカートの女子四人と、ブレザーを着ていない次郎を除いた七村高校の男子生徒四人が、政治とは別の攻防を始めた。

そしてブレザーを着ていない次郎は、クラスで一二を争う利己主義者である奈部の戦略上、動員戦力から省かれたようである。

それどころか、さり気なく後ろに回された左手で追い払うような仕草までされた。

「マジか」

不審者スタイルの次郎が省かれたのは自業自得だとは言え、納得しがたい感情も芽生えざるを得ない。見捨てられた感や、置き去りにされた感が、さざ波のようにヒシヒシと押し寄せてくる。

だが粘ったところで見苦しいだけだ。

奈部たち男女八人が、デモ活動から離れた大通公園側へ歩いていくのを見届けた次郎は、渋々とその場を離れて警察に抗議している人達の所へと向かった。

（ナンパは兎も角として、これで遠慮する理由が無くなったな）

奈部たちの姿が完全に見えなくなった頃、次郎は群衆の前の方に辿り着いた。

少し先には規制線が張られており、その奥には分厚いコンクリート製の壁があつて、金属製の大きな扉の前には二〇人以上の警察官が整列している。

次郎はポケットに右手を突っ込むと、掌に石を生み出して握り締

めた。

そして右手を出すと、四方八方のカメラから死角となる人壁の隙間からコンクリート製の防壁に向かって、掴んでいた石を最小限の動作で素早く投げ放った。

その動作を視認できた人間は、一人も居なかった。

だが上に放り投げられた石が上り切った後、ゆっくりと弧線を描いて防壁に落ちていく様は、多くの人が目撃していた。

弧を描きながら速度を落とした石は、なぜか拳大まで巨大化していた。そして最後にゴツと大きな音を立てて防壁に当たり、弾かれて地面に落ちていく。

その刹那、防壁の命中部分を睨め付けた次郎は、土魔法で生み出した見えない魔力の塊を伸ばした。

砂浜の砂山に両手をつ込むように、石が命中した部分から一気に魔力を突き入れる。

するとコンクリートの防壁に、亀裂が生じて広がっていった。

『従って我々は、不当な封鎖と権力の乱用を続ける労働党に対し、速やかな退陣を……………お……………お、おおおっ！？』

コンクリート製の防壁に向き合っていた群衆の悲鳴が波及し、警官隊が異常事態に顔を上げて後ろを振り向く。

そこへ防壁に土系統の魔力を突っ込んだ次郎が、砂山の砂を掻き出すように、警官隊に向かってコンクリートの津波を流し出した。

「うわあああああっ！？」

「きゃあああああっ！」

局地的なコンクリートの鉄砲水が、警官隊と悲鳴を上げた人々の声を飲み込んでいく。

警察官は、当然のごとく押し寄せてくるコンクリートを素早く避

けようとした。

しかしコンクリートの津波は次郎の操作に従って、警察官を追いかけるながら方向を変えて、身体や両足を押さえ付けるように次々とのし掛かった。

同時に防壁に埋まっていた巨大な金属製の扉も支えを失い、地面に倒れて周囲に轟音を響かせる。

その怒濤の流れに、立ち並んでいた二〇余名もの警官の下半身が全て波に飲み込まれた後、崩れたコンクリートは、防壁だった場所と規制線の間辺りで突然停止した。

直後、何の前触れも無く風が吹いて、巻き上がった土煙を吹き払う。

すると群衆の前には、巨大構造物の入り口が堂々と開いているのが見えた。

警察官たちはその場から脱出を図ろうとするも、砂のように流れたコンクリートが下半身を抑えるように固まっており、一向に抜け出せないでいる。

あくまでコンクリートを崩して固めただけなので、増援が電動ブレイカーなどを持ち込めば抜け出せるようになるが、術者側にとってはそれで充分だった。

「い、入り口が開いたぞ!？」

「おい、救急車を呼べ」

『ダンジョン内にも流れ込んだ。中にいる警官たちを助けに行ってくれ!』

人々が様々に叫ぶ中、最後の声だけは風に乗って、大勢の人の耳に運ばれた。

直後、突然風が生まれて、人々の背中をダンジョン側に押し始める。

すると何人かの男性が、倒れて動かない警察官ではなく、ダンジョンの入り口に向かって走り出した。

既にコンクリート製の防壁は入り口を塞ぐ体をしておらず、正面に居た二〇人以上の警官も今は一人も立っていない。

駆け出した彼らを遮るものは、何一つ存在しなかった。

『コウモリを一匹でも倒して回復魔法を覚えれば、皆助けられるぞ』

布越しなのか、低く抑えられたくもった声が、何故か広範囲に響き渡る。それと同時に薄らと、黒い影のようなものが群集の足元に生まれて、音も無く人々の足に纏わり付いていった。

すると今度は、黒い影が差し込んだ数十人が一斉に入り口に向かって走り出した。

そんな先行集団の後を追ひ、やがて沢山の人達が駆け始める。

『急げ』

ついに群集心理が作用したのか、彼らは遅れまいと、前の人を押しながら入り口に殺到していく。

もしも『どこから投げ付けられた石が命中し、その部分から亀裂が走り始め、やがて崩れていった』という過程を踏まずに突然コンクリートが崩れた場合、人々は恐怖を覚えて、ダンジョン内部に入るのを躊躇っただろう。

しかし先に過程を踏まえた事で、一部の人達は混乱しつつも、『コンクリート製の防壁は、内部の魔物の攻撃で脆くなっていたのかも知れない』だとか、『突貫工事で作ったから構造に問題があったのだ』などと、自分が理解できる常識と願望とで物事を解釈したのだ。

一度決壊したダンジョンの入り口には、湯船の栓を抜いた時にお湯が排水溝に流れ込むようにして、人々を引き込む流れが生まれて

いた。

日本人は、周りの人がやっていると同調して真似をする特性を持つ。

次郎はその流れに身体を押し込むと、周りの人を押したり、逆に押されたり、あるいは腕を掴まれて支えにされたりと、揉みくちやにされながら、ダンジョン内へ入り込んでいった。

32話 綾香

北海道ダンジョン前に集っていた数千人が、崩された入口から一斉に内部へ流れ込んでいく。

ダンジョンの入り口を塞いでいたコンクリート防壁が崩壊し、立ち塞がっていた警察官が一人残らず飲み込まれた。さらに群集には人命救助と言う大義名分が添えられ、後ろから押された不作為だというお膳立てまで整えられた。

そのためダンジョンで得られる力に関心があつて集まっていた人の多くが、この流れに乗り遅れまいと周囲に歩調を合わせたのだ。彼らは大平原を疾走するヌーの群れが如く、破竹の勢いで崩された入口から内部へと流れ込んでいった。

「おい、早く行け。警察が出てくると引き戻されるぞ」

「それより自衛隊だろう。いいから急げ！」

彼らが急いだ理由は、至近距離に北海道県警本部や北海道札幌方面中央警察署、果ては自衛隊の施設までもがあったからだ。

もちろん魔物に襲われる巨大構造物内で、数千人単位を引き戻すためには、相当数の人員を投入しなければならない。

直ぐに集められる規模の警察は、全開放された入り口を警察官の人壁で塞ぎ、SNS等で拡散されて続々と集まってくるであろう新たな民衆の流入を制止するのが関の山だ。

おそらく巨大構造物内の一斉搜索が出来るのは、巨大構造物周辺に駐留している自衛隊の連隊だけであろう。

であれば搜索隊が本格的に動き出すためには、最低でも連隊長が隷下部隊を搜索用に再編制しつつ、師団長に許可を得るくらいの時間が必要となる。

そのためレベルを上げたい彼らは、連れ戻され難くなる巨大構造物内の最初の広場から先へと走った。

政府が国民のレベルを上げさせたくない事に、多くの国民は首を傾げる。

魔法治療には新たな可能性が示唆されており、身体能力の向上も労働力の増大を考えれば非常に好ましく思われる。民衆がそれらを獲得すれば、日本にとってもプラスになるのではないかと。

だが支配者側が被支配者側に力を与えたくない理由は、支配し続けたいという目的を考えれば、決しておかしな事では無い。

豊臣秀吉の刀狩りや、明治時代の廃刀令、現代の銃刀法違反など、民衆の力を削ぐ政策が行われてきた事は、誰もが知っている。

それでも首を傾げる国民が多いのは、差別対象だった穢多^{えた}、他国の貧困や犯罪などを比較に示されて、自分たちはマシなのだという被支配者としての教育を受けているからだ。

勿論それ一辺倒ではなく、江戸時代から儒教の『子供が自身の親に忠実に従うことを示す道德概念』などを取り入れて上に従う教育を組み合わせた結果、支配者側にとっての概ね理想型となったのが現在の形だ。

そのように複合的な構造のため、被支配者には容易に理解し難く出来ている。

しかしダンジョンから魔物が湧き出して以降、権力者側は国民のレベル上げを規制することが困難になった。

魔物が襲ってくるため、魔物退治は禁止できないのだ。

このような場合、政府の取り得る政策としては、巨大構造物を多階層円柱に変えて魔物が流出する場所を減らし、自衛隊で作る防衛線を強化して流出する総量も減らし、国民がレベルを上げる機会を失わせる。

やがて状況が落ち着いてきたところで、警察発表でレベルを用い

た凄惨な事件などを煽り、メディアを介して露骨に批判させてから法整備して規制する手法が考えられる。

だが現時点においては、レベルを上げて発生する国民の被害より、レベルを上げた国民の自衛力で魔物被害を軽減できる方が遙かに利が大きいため、未だレベル上げを規制する時期に至っていない。

そのため法的には禁じられていないが、滅多に訪れないレベル上げの機会に乘ろうとする群集は、相当数に上っていた。

警察や自衛隊が来る前に巨大構造物内へと潜り込んだ人々は、そのまま入り口の坂を下りきると、広場のような空間から繋がるいくつもの通路へと流れ込んでいった。

次郎はその流れに乗り、通路の奥まで進んだ所で、ようやく困惑と共に立ち止まった。

既に人は閑散としているにも拘わらず、次郎の左腕には未だに人間がしがみついていたからだ。

相手は、中学二―三年生くらいの少女である。

ここまでの流れを思い出した次郎は、ボソリと呟いた。

「溺れる者は藁をも掴む？」

どうやら押し合う人の波に飲まれて溺れかけていたのが少女で、咄嗟に掴まれたのが次郎であるらしい。

余程恐い目に遭ったのか、未だに涙目で必死にしがみついたままでいる。

しかも周囲に人の姿は見当たらず、一緒に流れてきた人達は揃ってコウモリ退治のために方々へと散ってしまっていた。

次郎が一連の事態に全く無関係であれば、あるいは腕にしがみつかれていなければ、駆けていった連中と同様にダンジョンの奥深く

へと向かっただろう。

しかし次郎は、この事態を引き起こした張本人である。

かつて発砲してきた機動隊が相手であれば、組織単位の行為だったと見なして敵として攻撃できるし、男子中学生以上か成人女性であればダンジョン前に来たのは自己責任だと無視も出来る。

だが流石に、人の波に巻き込まれて流されてしまい、必死にしがみついた年下の少女を、力尽くで振り払う事は良心に咎めた。

そもそも北海道ダンジョン内を予備として転移登録するという当初の目的は果たされており、実際のところ振り払って走り出す理由も無かった。

「よしよし、よく頑張ったな」

次郎は掴まれていない右手で少女の頭を撫でてみた。

すると少女は顔を上げて、掴んでいた次郎の手を離れた。

「掴まってしましまして、すみませんでした」

口調や仕草はお淑やかで、立ち姿も凜としており、表情も取り繕われている。だが瞳の奥では、かなり困惑している様子だった。

年齢は、次郎から見て自身より一から二歳年下に思われた。

体格は細身だが、小柄な絵理よりは幾分か身長がある。

髪は上の方で編まれて、左右に振り分けられて軽く巻き毛になっていた。

テレビでも目にしない難しい髪型で、二週間に一度くらいは美容院で手入れをしなければ維持出来なような絶妙のバランスだった。

服装は、上質な白襟セーラーのブラックワンピース。リボンブローチ、パネルラインの立体的なスカート、三つ折りソックス、トス
トラップシューズ。そしてセットと思われるバッグも持っている。

これなら余程格式の高い場に赴いても、自然に溶け込めるだろう。

結論として次郎は、少女を超が二つほど付くお嬢様だと判断した。次郎も小学生の頃には絵画の習い事をしており、親が画家から個展の案内状を送られくるようなお坊ちゃまではあるが、だからこそ相手が自分や周囲よりも格上のお嬢様である事を理解できた。

親戚や知り合いにいる社長の娘たちの中でも、目の前の少女ほど洗練された振る舞いを身に付けている者は居ない。

それは少女の周囲の大人が、高頻度で洗練された場に出席している事を意味する。

こういう上流階級に育ったお嬢様に、中川や北村を相手にするよなノリで対応すれば、本気で引かれてしまう。

差し当って、実は育ちの良いお坊ちゃまの次郎は、真摯な声で少女に問い掛けた。

「怪我は無かったか？」

「はい、大丈夫だと思います」

少女は蛍光スライムが僅かに光を灯す洞窟内で、自身の体を僅かに見下ろしてから答えた。

散々左右からぶつかられた次郎と一緒にだった事から、打撲程度の被害は受けただろうが、少なくとも見た目に怪我は無い。

次郎もざっと目で確認したが、特に出血などは見られず、おかしな立ち方もしていなかった。

「違和感があるなら言ってくれ。一応レベルがあるから、回復魔法は使える」

「ありがとうございます。回復魔法が使えるのですか？」

「ああ、レベル三だからな」

次郎は右手の人差し指から薬指までを三本立てると、軽く振って

見せた。

直後、指の先端に紅白の光が灯り、クルクルと浮き上がって周囲を徐々に明るく照らし始める。

「凄いですね。コウモリ退治ですか」

「バツタも倒したよ」

二種類の均一な輝きは、部屋を照らす蛍光灯と同じくらいの明るさになった所で光力を留め、次郎の頭上に滞留した。

少女は興味深そうにそれを眺めると、静々と口を開いた。

「お聞きしても宜しいでしょうか」

「ああ、何だ？」

「敢えて二種類出したのには、何か意味があるのですか？」

「光魔法は、コウモリの撃墜に使えない。火魔法だけだと、撃墜で使えば灯りが無くなる。槍や石で叩き落とせば問題ないけど、大量に部屋湧きしたら手間だから、念のために浮かせておいた感じかな」
「随分と慣れていらっしやるんですね。失礼ですが、道外の方ですか？」

「まあな。どこの都道府県かは内緒だ」

「山中県の高校生の方ですね」

少女の指摘に、次郎は咄嗟に紡ぐ言葉を失った。

次郎は自分の仕草や言動に都道府県を断定させるような情報があっただろうかと振り返り、そんなものは無かったはずだと思い直す。であれば次郎が巨大構造物内に慣れている事や、容易に獲得できない力を見て、政府が唯一コントロールできないまま多階層円柱に変わった山中県を連想したのだろうか。

北村や絵理のように、日本にはドーム内部に潜った者や、幾つものレベルを上げた者は居る。従って、巨大構造物内での活動経験やレ

ベルでは、攻略者の断定は出来ない。

しかし口籠もった空白の時間と、色つき眼鏡越しとは言え逡巡した表情まで合わせれば、もはや相手に確定情報を与えたにも等しかった。

「山中県は、八月に多階層円柱が現われてから魔物が出ていません。ですから山中県には、バツタは出ていないはずですよ」

既に確信めいている少女に、次郎は心底困った顔で愚痴を溢した。

「俺はお喋りが過ぎたな」

「申し訳ございません」

少女は追求する口調だった事を謝罪した。

次郎は相手の立場や能力から、起こり得る最悪の状況を想定した。政府と異なり、何処にでも一瞬で来られる転移能力を知らない少女が真つ当に調べる場合、まずは札幌市と周辺のホテルの宿泊者リストを洗い出す。

少女の背後が、ホテル関係者に無理を言える立場であれば、今夜宿泊予定の山中県民を調べられるだろう。そうすると土曜日で旅行者が多いとは言え、明らかに目立ってくるのが、次郎たち七村高校二年の修学旅行生だ。

二八〇名の修学旅行生のうち、男子生徒は一四〇名。

仮に市立高校の集合写真を手でできれば、色眼鏡越しとは言えこれだけしっかりと見続けている次郎を特定する事も、本気でやれば不可能では無い。

最初は子兔のように震えていた少女が、初めて出会ったマスクと色眼鏡越しの次郎の身元にまで辿り着けるような相手だとは、まさか思いも寄らなかった。

この少女をどうすべきか、次郎は咄嗟に考えた。

明確な殺意を以て発砲してきた機動隊と異なり、少女には一切の過失がない。むしろ事態の被害者で、現時点で次郎には加害を加えていない。

それでは彼女の立場は、一体どのようなものであるのか。

デモの群衆内に居たという事は、政府の姿勢に反対する立場だ。

少なくとも親などが、巨大構造物を封鎖する政府や自衛隊、警察という事は有り得ない。

であれば政府や自衛隊、警察と組んで次郎に害を為す立場では無いだろう。

そこまで思考を進めた次郎は、少女に穏当な解決手段の提示を試みた。

「それで、俺の事を詮索しない引き替えに何かして欲しい事があれば聞くが」

「詮索しない引き替えですか？」

「ああ。わざわざダンジョン前に来ていたと言う事は、ダンジョンに関心があるんだろ。君のレベルを一か二くらい上げるのを手伝っても良い」

「分かりました。それでは宜しく願いします」

はたして少女は、次郎が提示した条件に乗った。

同意を得られた事に安堵した次郎は、ポケットを弄る振りをしながら収納でナイフを取り出して手渡した。

「これは？」

「武器。俺がコウモリを取り押さえて心臓にあたる魔石を露出させるから、君が魔石を破壊してレベルを上げる。レベル一に上がるには、コウモリを一匹倒せば良い。レベル二に上がるなら、追加で四

匹だ」

少女は繁々とナイフを見つめると、右手で握り締める。

女性がナイフを握り締める姿にヤンデレを連想した次郎は、慌てて妄想を振り払うと、少女に先んじて歩み始めた。

その背後から、ナイフを握った少女の足音が続く。

暫く歩いた次郎は、やがてズボンのポケットに手をつ込むと、土魔法で生み出した十数個の小石を掌に握り締めながら手を引き出し、前方に向けて軽く投げ放った。

すると遠くからコウモリ達の悲鳴が聞こえてくる。

「今、何をされたのですか」

「闇魔法で感知した天井付近のコウモリの群れを叩き落とした。外の連中が封鎖しているから、随分と溜まっているらしいな。意外に早く済みそうだ」

次郎は笑みを浮かべると、コウモリの悲鳴が聞こえた方向へ歩み寄っていった。

すると四匹のコウモリが床に落ちており、三匹はまだ生きていた。

「警察の拳銃でも落とせないのに」

少女は驚きに目を見開いたが、次郎にとっては何の不思議も無い事だった。

「警察の拳銃は鎮圧用で、殺傷能力が低いから」

コウモリが逃げないように強い語調と共に翼を踏み付け、床に擦り付けながら揺り潰す。

そのうち一匹の翼を踏んで押さえ付けながら、収納から取り出し

た二本目のナイフを首筋に突き立て、それを引く事で心臓付近の魔石を露出させる。

「ほら、この緑石がレベルを上げる素だ。生きている魔物に攻撃をして、魔的な何かをこの石に届ければ、死後に魔石の力を吸収してレベルを上げる力が取り込める。とりあえず露出している心臓をナイフで突いてみてくれ」

「ちよつと待つてください。貴方の行動が早すぎて、心の準備が出来ていませんでした」

「追っ手や横槍が来ると困るから、悠長には待てないぞ」

「……………大丈夫です。やります」

次郎の言葉に覚悟を決めた少女は、取り押さえられている瀕死のコウモリにナイフを突き立て、心臓を破ってトドメを刺した。

そうやって得た魔石を持たせると、少女のレベルは呆気なく上がる。レベルアップ後のステータス割り振りでは当然悩んでいたが、次郎が火魔法でトドメを刺してはどうかとアドバイスを言うと、アツサリと火魔法を覚えるに至った。

もしかすると、突き立てる感触が嫌だったのだろうか。ナイフはすぐに返され、二匹目からのトドメは火魔法による内臓加熱で行われた。

そうして二個の魔石の力を回収した後に再び奥へと歩みを進める。その後、暫くは無言が続いたが、やがて少女の方から話しかけてきた。

「お聞きしたいのですが」

「なんだ？」

「貴方は、巨大構造物をどのように捉えていますか」

「漠然とした問いだな。何を聞きたい」

「随分とストレートな聞き方をされるのですね」

「舌戦じゃ絶対に勝てないと分かったからな。答えるかどうかはさておき、言ってみたらどうだ」

上流階級の言い回しや読み合いに不慣れな次郎が相手に合わせようとした結果、先程は惨事が起きた。

そこで次郎は相手に合わせるのを止め、自分のペースで話そうとした次第である。

「分かりました。改めてお伺いします」

はたして次郎の土俵に乗った少女は、居住まいを正すと、次郎の正面を向いて問い掛けた。

「日本は巨大構造物の情報開示を要求されて、それを拒否しています。従来でしたら原油の価格を上げると脅されれば直ぐ折れるのに、今回は引きません。そして総務大臣の家族が回復魔法で不治の病から回復するなど、随分おかしい事になっています」

「ふむふむ、それで？」

「魔法で新技術を生み出すのは悪い事ではありませんが、労働党は非公開にして自分たちで独占しているために、国家の財産を私的に利用していると批判されています。あなたは現与党の行動をどう捉えますか」

「うーん」

何とも政治的な話であったが、次郎の認識では、現与党は次郎にとつては敵である。

元々、売れない杉山を抱えさせられた堂下家の末代として、国家への盲信はなかった。

だが現代においてもダンジョンの存在を隠して土地を立ち入り禁止し、ダンジョン内では次郎と美也への発砲を認めた労働党政権は、

現在進行形で次郎の敵だ。

但し少女の思想的な立ち位置が分からない。

次郎は新たなコウモリに向けて石を投げ付ける間に時間を稼ぎ、迷うように言葉を選びながら回答した。

「巨大構造物や魔法が国家財産なのかはさておき、国税で運用する機動隊や自衛隊の成果を自分たちの家族だけに還元している点は不当だな。俺の知り合いも、もっと早く魔法治療が公表されていたら、違う治療が試みられたかもしれない」

「巨大構造物が現われたのは一年前ですから、公開されていたとしても、違う治療法を試みるのは流石に難しかったかもしれませんが」と

少女は新たなコウモリの死骸に火魔法を送り込み、魔石を回収する間に疑問を口にした。

確かに一年前に魔法治療が分かったとしても、人間への臨床試験の前段階である動物実験に留まるだろう。

アメリカで確立されて実用化された治療でも、日本で認可が下りるのは二年くらい後だ。日本の厚生労働省は、良い意味でも悪い意味でもお役所仕事である。

だが少女の指摘は、そもそも前提の知識が間違っている。

「それは違うけどな。この巨大構造物の前段階であるチュートリアルダンジョンが日本に発生したのは二〇四〇年の五月四日だ。政府がこれを把握してから、かれこれ五年以上は経っているぞ」

「……………どういう事でしょう」

「西日本大震災の後に、各都道府県で一〇三カ所ずつ不自然な地割れが見つかったんだろう。あれは全部、巨大構造物と呼ばれる初級ダンジョンの前段階で、チュートリアルダンジョンという物だった。政府が封鎖していなければ、隠していた年数分だけ研究が進ん

でいたはずだ」

少女は大きく目を見開いて、驚きを露わにした。

「それは何かしらの根拠があつてのご指摘ですか」

「ああ。レベル二に上がったようだから撤収する。最後に証拠を見せてやるから、詮索をしないという約束は守ってくれよ」

「証拠というのは、チュートリアルダンジョンが存在したというものですか」

「そうだ。簡単に証明できるから、手を出してくれ」

「……………はい」

差し出された少女の手が、しっかりと握られた。

元々次郎は、転移を使って追っ手の警察や自衛隊に遭遇せず帰る予定だった。

そこに警察や自衛隊に捕まって次郎の事を話されると非常に困る事になる、目の前の少女をミスリードも含めて同行させようと考えたのだ。

警察などに捕まって自供させられれば、次郎の搜索が行われるかも知れない。少女が探そうとするよりも、国家権力が少女も使って探そうとする方が遙かに厄介だ。

一方で次郎が少女を逃がしてしまえば、知能の高い少女は自らデモ隊の一員として捕まるような馬鹿な事はしないだろう。

次郎は転移で飛ばうとして、ふと思い直して先に注意点を付け加える。

「先に言っておく。今から行うのは、ダンジョン攻略特典の一つである転移能力だ」

「……………転移能力ですか？」

「そうだ。実際に体験しないと信じられないと思うが、一瞬で世界

中の何処にでも跳べる。他にも、俺がナイフを出し入れした収納能力というものもある。そして俺が複数の特典を持っている事こそが、巨大構造物が以前から存在したという証明だ。なにしろ駅前に出た巨大構造物は、山中県の一カ所を除くと、全て政府が攻略しているからな」

「あなたは実際にチュートリアルダンジョンを攻略した。という事なのですね」

「そういう事だ。それで今から、北海道ダンジョンの出入り口を避けて、札幌市内にある時計塔のトイレの個室内に跳ぶわけだが、そちらにいるのは事情を知らない人間ばかりだ。だから転移を体験して驚くと思うが、現地では騒ぐな。分かったな？」

少女は頷きつつも、手を引き寄せる事で次郎の行動に制止を掛けてきた。

「……………何だ？」

「貴方の連絡先を下さい」

「却下」

「では私の連絡先をお渡ししますので、そちらへ連絡を下さい」

少女は次郎の手を離し、メモ帳を取り出し始めた。

その様子を見た次郎は首を横に振り、溜息を吐いてから気が乗らなそうに返事をした。

「一〇世紀くらい経って気が向いたらで良いなら受け取る」

少女は暫く考え込み、やがてメモ帳に何らかの文字を書くとき、携帯端末そのものと一緒に差し出してきた。

「どついう事だ」

「携帯端末は後日お返してください。それが無いと、凄く困ります」

「それなら渡すなよ」

「貴方は連絡先を教えて下さるそうですね、私も貴方の家や学校を詮索しないとお約束しましたので。ですから連絡手段として、私の携帯端末を一時的にお預けします。今夜以降、祖父か伯父、父という名前が表示された時だけお取り下さい。メールも同様をお願いします」

「これを受け取っても、俺に良い事なんて無いだろ」

「あります」

「なんだよ？」

「それは次回お会いした時に、必ずお示します」

必ずという言葉を強調した彼女は、次郎のズボンのポケットに携帯端末とパスワードが書かれた紙を押し込むと、返されるのを拒むように次郎の手を取った。

その少女の目に宿った強い意志を見て、次郎は説得を断念した。

「俺の個人情報を探さないって約束を律儀に守ろうとした点は評価する。だから、一回だけな」

「一回機会を頂けましたら、充分です」

「分かった」

受け取った上で捨てる、厄介な事になりそうである。

だが何ら根拠は無かったが、次郎は自分が約束を守る限り、相対する少女も約束を守るだろうという確信があった。

一呼吸した次郎は少女の手を取ると、ゆっくりと瞬きをした。

そして次に目を開くと、そこは薄暗い洞窟では無く、照明に照らされた時計塔の中だった。

33話 井口邸にて（前書き）

作者よりご報告

感想欄に匿名で作者への誹謗中傷が書き込まれました。

今作二回目でしたので、匿名投稿可をログイン必須に変更しました。忌憚の無いご意見を頂けた状態を変更せざるを得ず、誠に残念です。

感想欄でやって良い事〃投稿された小説全般に対する感想・批評

（例・あのストーリー展開は納得できない、このキャラの判断は愚かだetc）

感想欄でやってはいけない事〃小説ではなく作者個人への誹謗中傷（例・この作者は頭が悪い。この程度しか書けないんだろetc）

以降、ログイン状態で書き込まれる方も、よろしくお願いします。

・感想の注意事項と荒らしの基準は、運営会社が次に定める通りです。

<https://syosetu.com/man/impression/#attention>

・なお運営は、ブロックユーザ設定による自己防衛措置を推奨しています。

<https://blog.syosetu.com/index.php?itemid=463>

・今後、注意事項違反者や荒らし実行者等は、『任意』でブロック設定します。

（実はタメ口も注意事項違反なので、タメ口で文句だけ書かれる方はご注意ください）

・これらは『利用規約』（第三条 第一項）の範囲で、

違反者は『禁止事項』（第一四条 第二項）に反します。

<https://syosetu.com/site/rule/>
従って規約違反に対する運営推奨の対応ですので、悪しからずご了承下さい。

以上、作者が小説投稿を続けるための予防措置でした。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

それでは本編に戻ります。

33話 井口邸にて

時計の短針と長針が同時に真上を向いた頃。

次郎は当初の予定より三時間も早く、時計塔へと戻ってきた。するとダンジョンの奥では届かなかった携帯端末の電波が立ち、担任から出された早期集合指示のメールが受信される。同時に、ナンパに成功した四人組のうち中川からも、代表しておざなりな安否確認が届いた。

先に少女と別れ、携帯端末を収納でしまつて制服に着替えた次郎は、外で昼食を摂りながら中川に返信を済ませてから、何食わぬ顔で集合場所に紛れ込んだ。

自由行動から急遽呼び集められた七村高校の修学旅行生たちは、一〇クラス中七クラスが午後三時までに集合を果たした。

その中には中川達も含まれており、一組は全員が予定よりも早く揃っていた。

「いやあ次郎くん、実にすまないね。俺ら連絡先、交換しちゃったよ」

「分かった、死ねい」

次郎自身は、謎のお嬢様から電話番号どころか携帯端末そのものを預かっているのだが、ナンパに成功したとは見なせないだろう。いずれにしても次郎たちの班は、各々が修学旅行の最後に自由すぎる経験を積んだようであった。

「よし、全員揃ったクラスはバスに乗れ。ホテルに移動するぞ」
「「はい」」

やがて揃った生徒を乗せたバスから順に動き出し、三日目の宿泊地であるホテルへと移動を開始した。

なお帰って来なかった生徒の大半は、観光名所の一つであった北海道ドームでの騒ぎに巻き込まれ、あるいは情報を知って自ら駆け付け、実際に内部へと潜ってしまったようである。

魔物が出なくなった山中県で、スムーズにレベルを上げられる最終年齢層たる高校生にとって、今回の入口決壊は人生最大にして、最後のチャンスだったのだ。

そして何故レベル上げが悪いのかを具体的に説明していない政府の制止には、抑止効果が非常に乏しかった。

彼らはレベル上昇と引き替えに不法侵入などで捕まり、取り調べを受けて起訴猶予で釈放されるまで北海道滞在を余儀なくされた。

こうして七村高校生は、数十名もの生徒が捕まって予定通りに帰れなくなるという中川以上の伝説を残しつつも、全ての行程を終えて帰郷を果たした。

それから暫くの時間が過ぎ、再び土曜日がやって来た。

七月八日、北海道の時計塔前。

安っぽい私服に色眼鏡とマスク、カツラに帽子という非常に怪しげな格好をした次郎は、敢えて一週間前と同じ格好をしたであろうお嬢様と再開を果たした。

「着いてきて下さい」

格好を突っ込まれるかと思った次郎は肩すかしの気分で、少女の後ろを歩いた。

共通の話題など無いため暫く無言で歩くと、やがて高そうな黒塗りの車が停めてあるのが見えてくる。

二人の男性が車外に立っており、少女が近付くとドアを空けられ

て車内へ招かれた。

少女と次郎が相次いで車内に乗り込むと、二人の男性は運転席と助手席に座って静かに車を発進させた。

「今日の交渉は、私の担当ではありません。到着まで暫くお待ち下さい」

「分かった」

少女の説明に了解を返した次郎は、車外を眺めながら交渉相手の想像を始める。

三日目の夜、次郎の体験談と判断を聞いた美也は迂闊な行為を注意した後、位置情報が知られないように収納能力でしまっていた携帯端末の中身を他所で調べた。

次郎が獲得した収納能力Aは、二〇フィートコンテナと同サイズ分まで入る倉庫を、異次元空間に持つ能力だ。さらに空間内は時間が停止しており、録画中のカメラも取り出すまで止まっていた。

従って収納能力を用いれば、時間が止まった異次元空間に置かれた携帯端末の位置情報を調べる事は不可能だ。

そして過去に行った事がある他県に跳んでから携帯端末を取り出せば、居場所を誤魔化してメールを受信する事が出来る。

美也は、少女がわざわざ携帯端末を差し出したのは、一度連絡先の受け取りを断った次郎に対して、交渉させるために自分の個人情報を含み隠さず明らかにしたのではないかと考えた。

何しろ、お坊ちやまの次郎が超を二つほど付けるようなお嬢様らしき相手である。アドレス帳や普段の連絡者を見せて、地位や財産などを用意できると示したのではないかと。

それに対して次郎は、まさか自分より年下の少女がそこまで考えるだろうか疑った。

はたして結果は、美也が予想したよりも遙かに上だった。

交渉に出てくる相手への個別対応案も美也に用意されているが、今のところ誰が出てくるのかは確定的ではない。

黒塗りの高級車を動かしている立派な体格の三〇代前半の運転手は、運転手と護衛を兼ねているのだろう。また助手席に座っている男性は、武道とは別の意味で隙が無いため、相当のキャリアであると思われる。

堂下家がお手伝いさんを雇っていたのは曾祖父の代までであり、今の時代に運転手や護衛を雇える相手の財力には呆れざるを得なかった。

そんな田舎の古い地主より遙かに格上の相手に手配された車で、次郎はある邸宅まで連れて行かれた。

邸宅は表札には、井口豊と掲げられている。

「偶然の一致かな。よくテレビで見る名前だけど」

「どのテレビ局でご覧になられますか」

「どこでも見る名前だな」

「それでは、ご想像の通りだと思います」

「共和党の党首か」

「はい、祖父です」

「それは大した大物だ」

次郎は美也が予想した中で一番の大物が相手だった事に、思わず溜息を吐いた。

二〇四五年七月現在、衆議院の四四五議席は次のようになっている。

・労働党 二二三議席（与党）

- ・国民党 三一議席（連立与党）
- ・改革党 七一議席（野党第一党）
- ・共和党 六三議席（野党第二党）
- ・新生党 二八議席（野党第三党）
- ・共歩党 二一議席（野党第四党）
- ・その他 八議席（その他）

井口豊とは、野党第二党である共和党の現代表者である。

彼は三度の閣僚経験を持ち、連立与党時代の最後には総務大臣を勤めた超大物政治家の一人だ。

今すぐ回れ右して帰りたくなった次郎は、一礼すると示された席に背筋を伸ばして座った。

そして数秒だけ目を瞑り、気を取り直して目を開ける。

正面には、テレビでよく見る強面の井口党首が座していた。

その隣には、国会で鋭い指摘を行う事で印象深い、同党の広瀬秀久が座している。

一緒に来た少女は、広瀬衆議院議員から一つ席を空けて、その隣側に座った。他にも秘書らしき人間が二人居たが、着席する様子は無い。

彼らが交渉相手だった場合には、美也から特別な対応を指示されている。

次郎は自ら口を開いた。

「本日はお招きにあずかり、ありがとうございます。大変申し訳御座いませんが、顔を隠します事をご了承下さい」

「ふむ。なぜ顔を隠さなければならぬのかね」

「それは政府がダンジョンの存在を隠し、それを知る者を口封じしようとするからですよ」

「口封じとは？」

「去年の八月一日から二七日に掛けて、山中県の初級ダンジョンで機動隊から三六式小銃で撃たれ続けました。先制攻撃を仕掛けたのはあちらで、初日から全て録画してあります。撃った実行部隊の装備も三人分、丸ごと確保してありますよ」

そう言っただけで、初級ダンジョンのボス部屋で回収した自衛隊員の装備を収納から出して応接間の机の上に乗せる。

少し焼けた三六式小銃、三三式鉄帽、防弾チョッキ三型改、戦闘パッド、弾入れ……。

次郎は次々と並べてみせた後、それらを収納で仕舞い込んだ。

「お話の前に、少し映像を見て頂きましょうか」

片付けられた机の上に、収納能力でノートパソコンが起動状態で取り出される。

すぐに再生が始まり、八月一日に撃たれた映像から順に、次郎の解説を交えながら機動隊らが銃口を向けて実弾を発砲する映像など次々と流されていった。

元々証拠用に集めていたもので、固有名詞や顔が映る場面は極めて少ないが、それが入っている部分は全て音声や画面を消して編集済みだ。

だが状況がエスカレートし、出会い頭に容赦なく実弾を撃ちまくる映像などが流されるに至り、視聴者は声を失い、いつしか少女や秘書達も映像を覗き込んでいた。

コーヒーなどが運ばれてくる間にも、動画は衝撃的な光景を映し続けた。強面の井口党首と、鋭い眼光の広瀬議員の表情は、ついに険しさの極みに達する。

やがてキリの良いところで映像が止まると、次郎はダンジョンが別空間であるという持論を展開し始めた。

巨大構造物が出現した新宿などの地下にある地下鉄や下水管などが、ダンジョンに押し潰されず綺麗に残っている事から、都市を丸ごと飲み込むほど大規模な地下空間は日本の地下とは別の場所に繋がっており、日本の国内法は適応されない事。

従って次郎たちは、公海上で海賊船から警告と同時に実弾発砲されたようなものであり、発砲してきた機動隊側に正義は無い事。

実弾や麻酔銃を命中させておきながら、それを払う防御の魔法を展開すると、あからさまに蹠^{よち}跟けて見せてから「公務執行妨害だ」等と言って機関銃を撃ちまくる行為には正当性の欠片もないこと。

そもそも現政権が日本国内に現われたチュートリアルダンジョンを隠し、地主から土地を接收して魔法や特典を独占していた事や、実際に攻略でどのような特典が得られるのかを一通り話していく。

「現政権が隠し続けてきたチュートリアルダンジョンの映像も全階層を記録してあります。現在の初級ダンジョンよりも魔物が弱く、レベルを上げやすい特徴が有りました。政府に捕まれば口封じされますし、実際に今まで数千発撃たれましたので、顔は隠させて頂きます」

次郎の話が終わると井口党首と広瀬議員は暫く押し黙り、次郎を睨み付けるように見つめた。

暫しの沈黙が続いた後、広瀬議員が口を開く。

「君の他にも、撮影協力者などが居るようだね」

「事前に話しましたが、ここには連れて来ていません。今日は井口党首のお孫さんに、一度機会を設けて頂ければ良い事があると聞かされたので、少しだけ期待して訪問させて頂いた次第です。まあ期待以上でしたが」

「それはどのような意味かね？」

「先週、お孫さんに『現与党の行動の是非』を問われました。そこ

で政府がチユートリアルダンジョンを五年以上隠してきた事を話すと根拠を求め、証明すると私の連絡先を求められました。そこでお孫さんの親族が、証拠があれば現政権ないし勢力基盤にアクションを起こせる人物であろうと予想したわけです。ですから、それが期待以上だったと申し上げました」

なお予想したのは美也であり、次郎は全く分かっていなかった。仮に政界の関係者だった場合、相手に応じて何段階かの対応パターンが考えられた。そのうち相当の力を持つ国会議員本人が相手だった場合、予てより集めていた物を一部託す事も話し合われた。そして井口豊の場合、美也の条件に完全に合致している。

「かくも一方的に撃たれて気に食わないのは、私も仲間も同意見です。もしも映像データがご入り用でしたらコピーを差し上げても良いのですが、魔物や機動隊に襲われて衣服がよくボロボロになりますので、お渡しする場合は有償とさせて頂きたく存じます」

「いくらだね」

「高容量の記録媒体を五本用意しました。内容は選別した機動隊に銃撃される詳細動画が計二本、チユートリアルと初級ダンジョンの魔物全二五種類を撮影した動画が計二本。他に春先に撮影した東京とロンドンを転移で往復する動画と、収納で様々な物を自在に出し入れする動画、回復魔法実験の特典映像付きで一本。放映権も添えますので、値段を付けて下さい」

「一本につき一〇〇万円で、合計五〇〇万円でどうだね？」

広瀬議員が値段を付け、次郎は即答を避けて暫く考え込んだ。次郎には、個人的に欲しいものがある。それは、美也の大学への進学費用だった。

美也は六年制の医学部に強い興味があるようだが、元親とは戸籍が別れており、決して裕福とは言えない祖母にもあまり負担は掛け

られない為、諦めている節がある。

希望する進路に一体いくら必要なかと計算したが、学費や専門書等の購入金額を計算していけば、国立でも一年間に一〇〇万円を下る事は無いだろう。また県外に進学するとすれば、家賃も相応に発生する。アルバイトを計算しても、五〇〇万では足りない。

次郎は無償で奉仕する正義の味方ではなく、自身と美也を優先する利己主義者だ。

「一旦持ち帰りまして、仲間と相談する事に致します」
「私が出そう。合計一〇〇〇万だ」

一瞬だけ止まった次郎は、目標額に届いたと判断して頷いた。

「それで結構です。現金と引き替えにお渡し致しますので、その際に中身をご確認下さい」

「和馬、今すぐ金庫を開けて一〇〇〇万円持って来い」
「分かりました」

車の助手席に座っていた秘書っぽい人が、井口党首に指示されて応接間から退出した。

一〇〇〇万は、高級車一台分である。それで支持率が一〇%も入れ替わるなら、野党と支援者にとっては破格の買い物だろう。

もつと吹っ掛けても良かっただろうかという欲が脳裏を過ぎったが、あまり欲を出しすぎると後が恐いかと思ひ直し、価格交渉はこの辺で止めておく事にした。

ついでにお礼を述べておく。

「生活費が稼げました。感謝します」

次郎の口から出た要求の弁明に、広瀬議員が怪訝な表情を浮かべ

た。

「君は、とても貧乏な家の子には見えないがね」

「お調べになられたのですか？」

「いや、綾香君から君を呼ぶ条件は聞いている。いくつかの情報から推察しただけだ」

綾香と呼ばれた少女は頷きを返す事で、横目を向けた次郎に詮索していない事を伝えた。

信憑性の程は不明だが、相手が少女よりも遙かに推察力の高い広瀬議員である事を鑑みれば、次郎の振る舞いから家庭の生活水準を推察できたとしても不思議ではない。

もつとも、先ほど美也の読みを口にした事で、過大評価されたのかも知れないが。

「大凡ご推察の通りです。リーダーとして、責任がありますので」
「責任感があるのは良い事だな」

広瀬議員はそう評して、価格に関する話を打ち切った。
すぐに銀行の帯がされた札束の山が運ばれてきて、五つの記録媒体と引き換えに次郎の前に積み上げられていく。

現金を持ってきた男性がデータを確認する間、次郎もお札の枚数をペラペラと確かめた。

「ところで君たちは、ダンジョンの存在を詳らかにした方が良くと考えているようだね」

「そうですね。仲間と共にダンジョンに挑んだ切っ掛けが病気でしたので、医療や回復魔法の実用化にはそれなりの思いがあります。それに口封じされ掛けた件にも腹が立ちますし」

「よく分かった。このように秘密を知った国民を口封じして回るな

ど、大場政権は言語道断だ。チュートリアルダンジョンを隠してきた事で、何も知らなかった国民が受けた魔物被害も断じて見逃す事は出来ん」

「流石に政治家ですね」

広瀬議員は当然だと言わんばかりに、無言のまま自然に頷いた。

「君に新しい携帯端末を渡したい。名義は我々に繋がらない支援者になっている」

「……別にいいですけど」

「結局のところ君と我々は、現政権に対抗する同志だ。労働党を追いつめるために確認事項が出るであろうから渡すのであって、労働党を利用する君の個人情報調べるつもりは毛頭無い」

「まあそれは分かりますけど」

差し出された携帯端末の受け取りを次郎が渋ると、横から少女が口を挟んだ。

「お願いします。それが駄目でしたら、また私の携帯端末を持たれますか？」

「どうしてそうなる」

「今回のご連絡とは無関係な携帯端末の中身を、洗い浚いご覧になられましたよね。もしかして私の携帯端末の中身に興味があるのかなかと思ひまして」

少女が何を以てそれを調べたのか、持ち主ならざる次郎には定かでは無かった。

だが墓穴を掘る弁解をしなくても、表情を読んだ少女にとって次郎の沈黙は肯定と同義だった。

「個人的な部分を全て見られたのはショックでしたが、許して差し上げる事も出来ます。そちらの携帯端末を受け取って頂けましたら」
「分かった。ギブアップ。お嬢さんには勝てない」

「はい。それでは、二つ目のお約束を致しました。申し遅れましたが、私は井口綾香と申します。中学三年生です。今後ともよろしく願います」

「俺は名乗れないけど、お手柔らかに」

白旗の代わりに両手が挙げられ、卓上の携帯端末が回収されるのを見届けた広瀬議員は、力強く頷いた。

「その端末には、井口豊衆議院議員、綾香君の伯父でもある私、広瀬秀久。そして私の議員秘書であり、綾香君の父でもある井口和馬君の三人が一時的に持つ別名義の端末が登録されている。後で綾香君からも別名義の携帯端末で着信を入れさせるので、登録しておいてくれたまえ」

「随分と手が込んでいますね」

「当然だ。これから労働党に対して全面攻勢に出る。一瞬たりとも隙は見せられん」

広瀬議員の全身から、静かな炎が溢れ出した。

その様子を少年は満足げに見つめ、そんな少年を少女は静かに観察し続けた。

34話 国会

二〇四五年七月一三日木曜日。

通常国会の会期末を間近に控えたこの日の国会では、今最大の注目が向けられている政治家の広瀬議員が質問に立った。

この日に先んじること二日前。

日本共和党の東京本部で行われた緊急の記者会見が、集められたメディアを介して世界中に凄まじい衝撃を与えた。

公表された全てが衝撃的であつたが、その中でも重要だつたのは次の六点だろう。

一・日本政府は、五年以上前の二〇四〇年五月四日からダンジョンの存在を把握していた。

二・現在の通称・巨大構造物は正式名称が『初級ダンジョン』で、五年前から出現していたのは前段階の『チュートリアルダンジョン』である。

三・全都道府県で一〇三カ所発見されていた約一〇〇カ所のチュートリアルダンジョンは、政府が「南海トラフを震源とする西日本大震災後に発生した地割れと地質の調査」と称して全て封鎖し、一部の自衛隊員や機動隊員に独自調査を行わせていた。

四・『チュートリアルダンジョン』は地下一〇階までで、生息していた魔物は初級ダンジョンの魔物を弱体化した脆弱さで、レベルが非常に上げやすかつた。

五・ダンジョンを攻略すると『総合評価』に基づき『攻略特典』が得られる。内容は『能力加算』『転移能力』『収納能力』で、ボス攻略者各自がそれぞれ得られる。

六・政府はダンジョンの情報を隠蔽しており、奥に潜った民間人

を組織的に口封じすべく機関銃で銃撃していた。

これらは、チュートリアルダンジョン内部の全魔物を撮影した映像、転移で東京・ロンドン間を往復しながら周囲の人々を映す映像、収納で大量の米俵や廃タイヤを自在に出し入れする映像、実際に未成年の子供たちを機動隊が撃ち殺そうとする映像などと共に、ネットを含めた国内外のあらゆる報道媒体へ一斉公開された。

その記者会見以降、世界中は日本政府の人道や危機管理能力、転移や収納能力を問題視して大騒動となった。

あまりに衝撃的な内容であるため、僅か二日で事態の收拾が付けられるはずも無く、これらの情報をメディアに発信した共和党の広瀬議員が行う国会質問を、全世界が固唾を吞んで見守っていた。

「広瀬、秀久君」

議長から呼ばれた広瀬議員が一礼をして前に出ると、受信料を徴収するテレビの画面下に『共和党 無所属クラブ 広瀬秀久』という文字が表示された。

「日本共和党の広瀬秀久です。私は共和党、無所属クラブを代表して、大場総理に巨大構造物に纏わる事象について質問を致します」

ここまでは概ね定型であり、どの議員も同じような流れで質問を始める。

それと同時に国民への自己紹介を終えた広瀬議員は、事前通告した質問を始めた。

「二〇四〇年五月四日以降、政府は日本の僻地一〇〇カ所以上で続々と発見された地割れを、『南海トラフを震源とする西日本大震災後に発生した地割れ』と称し、出入り口を封鎖して警察官を配置し

た上で、機動隊を含む調査チームを送り込んで地質調査を行って参りました。内部は地下一〇階層であり、巨大構造物に出現している魔物を弱体化したような生物が住み着き、さぞや調査に苦労なされた事かと存じます。そして昨年の二〇四四年五月四日、巨大構造物の出現と同時に地割れが一斉に消滅し、政府は七月末に『大震災に伴う大規模な断層のズレによって生じた地割れだった』と結論付ける報告を出しました。まずはこの調査結果について、地割れ内部に数多生息していた魔物と断層のズレとの相関関係をご説明下さい」

「大場、内閣総理大臣」

議長に呼ばれた総理が立ち、事前通告を受けて官僚が作成した原稿を読み上げる。

「あー、ええ、西日本大震災後に発生した国内の地割れは、断層のズレだとする調査結果が地質学を専門とする大学教授の調査チームによって出されており、地質学的に尤も妥当であろうと結論付けられております。内部に魔物が生息していたという話は、私は存じません」

「広瀬、秀久君」

議長に呼ばれた広瀬議員が、再びマイクに向かった。

「政府が入り口に建物を建てて物理的に封鎖し、警察官を配置して侵入を拒み、四年間もの長きに渡って機動隊などを入れて調べていた地割れの内部は地下一〇階層あり、一階層ごとに巨大構造物に出てくる魔物を弱体化したかのような生物が生息していました。そして最奥には地下一〇階に生息するカマキリの巨大化した生物が存在し、それを倒すと『チュートリアルダンジョン、総合評価いくつ、攻略特典を選択して下さい』という表示が為され、三択の選択肢が出てきます」

存じませんと返された広瀬議員は、自ら説明しながら質問へと繋ぐ。

「先般ダンジョン内部で機動隊員が民間人に向かい、『お前達、何処からダンジョンに入った！』と発言する映像が得られましたので、メディアに公開したところです。映像は二〇四四年八月一日に撮影された事が明らかになりました。これは初級ダンジョンが最初に攻略された二〇四四年八月二十七日より以前の出来事です。ダンジョンという単語は、ダンジョンを攻略しなければ表示されず、しかも公称では巨大構造物とされています。調査隊がダンジョンと呼称していたのは何故でしょうか」

「大場、内閣総理大臣」

仮に政府が全国の警察から組織的に報告を受けていないとすれば、政府が国家の統治能力を持たない事が露呈し、トカゲの尻尾切りでは済まなくなる。

かといって知っていたとすれば、嘘の調査結果を公表していたと認める事になる。

「調査隊がダンジョンと呼称していたとの話ですが、政府は巨大構造物をダンジョンとは呼んでいません。その映像というものは拝見しておりませんが、個人が勝手に呼称しただけではありませんか」

流石に官僚の答弁書通りと言うべきか、総理は追求をスルリと躲した。

それに気を強くした労働党の議員席からも、言い掛かりをするなとヤジが飛び始める。

だが知らぬ存ぜぬで押し通すには、広瀬議員はあまりに情報を知りすぎていた。

「総理が説明された『勝手に呼称した』のではない証拠は、映像に残されており。二〇四四年八月二七日、少年たちを追って初級ダンジョンの最奥に入った機動隊員は、後続に向かつて『くそつ、ボス部屋だ!』と警告を發しました。彼らは巨大構造物が史上始めて攻略される以前に、どうしてダンジョンの最奥がボス部屋だと知っていたのでしょうか。ボス部屋に入ると出入り口が消滅し、そこで始めてボスが現われ、入った者が死ぬかボスを倒して攻略するまで外に出られません。初級ダンジョンの初攻略以前にボスの出る事を知っていた事実こそが、政府が密かにチュートリアルダンジョンを攻略させていた証拠に他なりません」

これは事前通告していた質問に対する総理の答弁に対して、広瀬が述べた補足説明ではない。すなわち正規の質問ではないため、総理は答える必要が無い。

だがその場で個人の呼称ではないことを証明して見せた広瀬議員に対し、先程まで飛んでいたヤジが萎んで消えていく。

さらに広瀬は次の質問に入る前に、前振りを行った。

「さて、政府が五年以上前からダンジョンを把握していた事を今、国会の場で証明したわけですが、ここで重要なのは攻略時の『攻略特典』という文言です。すなわちダンジョンを出現させている側は、我々にダンジョンを攻略させようとしており、それを為せば特典を与えるという意思を示しているわけです。思い返せば初級ダンジョンでは魔物が外に飛び出して国民に犠牲を出していますが、攻略したダンジョンからは魔物がなくなっております。これがどういう事か、お分かりになりますか」

しんと静まり返ったのは、おそらく国会の中だけでは無かっただろう。

国会中継を注視していた人も、偶々目にしただけの人も、そして世界中で中継を見ていた外国の政府やメディアも、今始めて明らかになったダンジョンを生み出した側の意志に絶句せざるを得なかった。

「総理、我々日本人は、チュートリアルダンジョンで四年間も対策を取る時間があつたにも係わらず、あなたたち労働党が隠したが為に、何も知らないままに時間を浪費させました。そして今まさに、初級ダンジョンから溢れる魔物で日本は甚大な被害を受けています。これから九月に出るのは地下八階のオオサンショウウオ、一月に出るのは地下九階のゲンジボタル、そこまでは従来通りの対応でも同等の被害で凌げるかもしれません。しかし、来年一月に出る地下一〇階のカマキリは、一体どうするのです」

広瀬議員はそこで一度言葉を切り、総理のみならず閣僚席、議員席を広く見渡してからあくまで冷静に語った。

「地下一〇階のカマキリは大型犬サイズで空を飛び、得物に襲い掛かって頭から喰らいます。地下一〇階は、レベル一〇相当の魔物だそうです。予想される数は、最低でも三万匹以上」

ドーム状の巨大構造物からは、一カ所につき約一万匹ずつ魔物が現われている。

すなわち三九都道府県の巨大構造物の各所からは、総計三九万匹の魔物が現われる。

カマキリが出た時点で魔物が一〇種類ならば、そのうちカマキリは三万九千匹くらいで、後は他の魔物が約三五万匹現われると見積もられる。

毎月一カ所の巨大構造物をドームから多階層円柱に変え続けたとしても、六カ月後の二〇四六年一月には、未だ三三カ所くらいの県

がドームのままである。

すなわちカマキリは、半年後にも出現予想数が三万匹を超えている。

「レベル一〇とは、様々な競技で世界選手権に出場できる身体能力者を、さらにボーナスポイント一〇回分で強化した強さです。我が国には、そんな力を持って、飛行する巨大カマキリを追い回せるような人間が、三万人以上もいるのですか」

ボーナスポイントは、能力が倍加する凄まじい力だと知られている。

レベル一〇で時速四〇kmの人間ならば、敏捷を二に上がると時速八〇km、敏捷三に上がれば時速一二〇kmを出せる力が身に付く。

身体能力を重視してボーナスポイントを体力、攻撃、防御、速度に二つずつ割り振れば、たちまち人間がチーター並の戦士に生まれ変わる。さらに残ったポイントも使って、ようやく大型犬サイズのカマキリと互角に戦える戦士を生み出せる。

はたして日本に、そんなチート戦士が三万人も居るだろうか。

約一年前に次郎を追い回していた集団にも、それ程レベルの高い人間は殆ど居なかった。

チュートリアル時代の四年間より魔物が強くて倒し難くなった今、僅か一年間で三万人の成人をレベル一〇まで上げるのは不可能だ。

魔物は、レベルが一つ異なれば強さが一気に跳ね上がる。

レベル三のバツタに武器を用いた数人掛かりで対処できたからといって、レベル一〇のカマキリにも同じやり方で勝てると思う国民は殆ど居ない。

カマキリは日本中に生息しており、獰猛な肉食昆虫としても知られる。

強烈な鎌状の前脚を用いて、○・○五秒という瞬きの四倍もの速度で得物を捕らえ、大型犬サイズならば三トンもの力で得物を押さえ付け、同サイズの多様な昆虫を補食できる大顎でバリバリと喰らってくる。

大鎌に挟まれたとして、三トンの物体を持ち上げられるパワーで鎌をこじ開けられる人間が、この地球上に存在するだろうか。

大顎は、元の昆虫サイズですら人間の皮膚を噛み切れる。元の全長八cmが、一五倍の一二〇cmくらいまで巨大化したとして、顎の力は一体如何ほどであろう。自分の皮膚なら耐えられると思う人間は、居るだろうか。

そんな獰猛な巨大肉食昆虫が、空を飛んで襲ってくるのだ。

普通のカマキリを単に大型化しただけであれば様々な問題が起こり得るはずだが、魔物はその問題をクリアできる能力やエネルギー、魔石などを身体に持っているらしく、実際に巨大構造物内に存在している。

巨大構造物を物理的に塞げない事は、既に検証済みだ。

そのため魔物を一匹も撃ち漏らさないためには、出現と同時に核兵器でも使っしか無い。

だが残っているドーム状の巨大構造物は、北海道なら札幌駅前、愛知県なら名古屋駅前、京都府なら京都駅前、福岡県なら博多駅前に存在している。

人命を最優先に考えて使用までの問題を全てクリアしたところで、そんな場所で核兵器を使うことなど出来ようはずがない。

三三県に住む国民に、残る一四都道府県への集団疎開でも命令すべきだろうか。だが、そちらも現実的には実現不可能である。

であれば、どうあってもカマキリ被害は避けがたい。

広瀬はしっかりと正面を見据えながら、次第に語調を強めていった。

「カマキリを凌いだとして、地下一階は同サイズのオニヤンマです。オニヤンマは、カマキリすらも補食する肉食の飛行生物です。地下一二階は、強靱な甲殻と顎を持つクロオオアリ。地下一三階は、カマキリやオニヤンマも襲うシオヤアブ。このままでは、来年は国民が日本中で魔物に喰われる地獄が到来します。ダンジョンを隠蔽し続けた結果として至ったこの事態に対し、政府と労働党は一体どのように対処するのか」

予定外の補足説明を行った広瀬は、ここで一度言葉を切って、事前通告してあった通りの質問に戻る。

「そこで総理にお伺いします。ダンジョンから出現してくる魔物は、毎回強くなっております。この問題に対して政府は、どのような対策を採られるのですか」

「大場、内閣総理大臣」

広瀬が事前通告していたのは、一つ目『単なる地割れだったと結論付けた調査結果と魔物の相関関係』、二つ目『調査隊がダンジョンと呼称していたのは何故か』、三つ目『ダンジョンから出現してくる魔物が毎回強くなっている事への政府の対策』である。

それに対して答弁書を用意した官僚側は、一つ目『地割れは西日本大震災の影響と考えるのが地質学的に尤も妥当である』と専門家が結論付けており、内部に魔物が生息している事は確認されていない』、二つ目『個人が勝手に呼称しただけ』、三つ目『当初に比べて被害は減っており、今後も全力で対応していく』と締め括る予定だった。

なお被害が減った数字は、無為無策だった時と、住民を避難させて自衛隊が重機関銃や対空砲で迎撃を行った後を比べてであり、対策と効果の面では確かに事実である。

だが広瀬の寄り道が、その回答を封じ込んだ。

政府としては、大きく寄り道するのは事前通告の範囲外でルール違反だと言いたい。あるいは違反すれすれの卑怯な行為でイエローカードだと。

返答に窮した総理は席から立ち上がれず、峰岸官房長官と官僚たちが総理の席に慌てて集まり始めた。それと同時に国会が、一時的に停止状態に陥った。

峰岸官房長官らが、バツタ被害にも上手く対処している点を大場に伝え、なんとか予定通りの答弁を行わせようとするが、当の大場自身が狼狽えて逆に確認している有様だった。

不意に広瀬の脳裏を、ある直感が過ぎった。

大場宗一郎は、たった一つのボタンを掛け間違えたのではないかと。

ダンジョンは、人類にとって未知の存在である。公表には慎重を期すべきで、誰が政権を担おうとも、公表前に調査を行うのは当然だ。

やがて何処かの段階で、レベルや魔法の存在を知る。

レベルを得られる条件が異なるのであれば、検証しなければならぬ。若年者の方がレベル上がり易いのであれば、若い人間で確かめようとする。なるべく問題にならない人間を選ぶのは、秘密を考えれば順当だ。そこで倫理の箍が外れた。

調査を続ければ、やがて攻略特典に辿り着く。

転移や収納といった能力を知ってしまったえば、もはや諸外国の行動を考えて迂闊に公表など出来なくなる。

そうして機密が山のように積み重なった後、チュートリアルダンジョンが消えて初級ダンジョンが現われた。初級ダンジョンから魔物が溢れ出し、国民に膨大な犠牲が出始める。

さて大場総理は、この段階に至って世間に隠していましたと言え

るだろうか。

そこに、チュートリアルダンジョンを攻略して転移能力を得た謎の少年達が現われた。しかも彼らは、何が起るか分からないダンジョンを攻略しようとしている。

少年達を力尽くでも確保しようと試みたのは、大場の立場で見れば当然のように思われる。何が起るか分からないダンジョンを勝手に攻略させないのは、別段間違いいでは無い。多階層円柱が現われたのは、あくまで結果論なのだ。

最初に麻酔銃を使ったのは、対話の余地を残すためか、背後に誰か居ないのか調べるためか、失敗したときの言い訳のためか。

いずれにせよ政府は少年達の確保に失敗し、機動隊に危害を加える凶悪犯を射殺も辞さず取り押さえるという建前で強硬手段に訴えた。

だがそれにも失敗し、少年達に初級ダンジョンを攻略され、次のダンジョンを生み出されていよいよ手に負えなくなった。

この流れでの大場のターニングポイントは、少年達に対して呼び掛けではなく、麻酔銃で取り押さえようとした事だろうか。

相手は情報を持たない子供であり、話せば通じる知能は持っている。

一方的に決めつけるのではなく、自ら日本政府だと名乗り、ダンジョンの攻略がどのような影響を及ぼすか分からないから待ってくれと呼び掛けていれば、交渉の余地があつたように思われる。

ダンジョンを隠していた手前、勿論そのような事は言えなかっただろう。

だが既に知られている事実を受け止めて、何れ公表するが時期が未だ早いのだと訴えるなど柔軟な対応を採っていれば、あれほど怒らせることは無かつたはずだ。

それら全ては、広瀬の勝手な憶測に過ぎない。

仮に大場の立場にあった場合、自分であればダンジョンに対してどのような対応を行い、どのように失敗していくかを想像しただけだ。

だが存外、それほど大きく外れていないのでは無いかと広瀬は考えた。

判断を誤らせるのは、誰にでもあることだ。

現在は野党に落ちている改革党と共和党も、予想されていた西日本大震災で震災前と震災後に幾つもの判断を誤り、二三十万人もの犠牲者を出して国民の怒りと失望を買い、一気に支持を減らした苦い経験がある。

あの時は不運も重なった。

そして今回の大場にも、いくつかの不運が重なっている。

一点目、チュートリアルを密かに攻略した高レベル転移能力者が居た事。

二点目、その少年達が、映像や検証記録を最初から集めていた事。
三点目、その少年達が、いつの間にか初級ダンジョンに潜り込んだ事。

一点目については、いかに全国で一〇〇カ所を越える僻地に出現したとは言え、実際に攻略するまで隠し果せる子供が最初に発見した。

二点目については、発見者がなぜか高性能な小型カメラを複数台も所持し、実際に裁判で実用可能な記録を完璧に残していた。

三点目については、ダンジョンが利用者最多の駅前に出現したとはいえ、初日の僅か数時間を除けば全て封鎖されたはずだった。

力による捕獲の失敗は、政府の判断ミスのため運のせいには出来ない。従ってそれ以降の連鎖は、命令した者たちの責任である。

少年達はいずれ映像を公表する気があったようなので、井口綾香に出会わずとも公表自体は避けがたかった。交渉相手を選ぶ少年達のようなので、隠し果せる事も難しかったに違いない。

だが彼との邂逅が『今』だった点は、井口と広瀬にとって天啓にも等しかった。

二〇四五年七月現在、ダンジョンの魔物は地下七階のコオロギまで出現している。

この後は九月に地下八階のオオサンショウウオ、十一月に地下九階のゲンジボタル、そして翌年一月に地下一〇階のカマキリ出現へと至る。

だが『今』であれば、非常に際どいが、まだ間に合う。

井口と広瀬が完璧に立ち回れば、カマキリを日本に一匹も出さない手を打てる。

さらにドーム状の巨大構造物は初級だと言うが、『今』であれば中級以降の巨大構造物に対する算段も付けられる。

そのためには、現代にそぐわない幾つかの非常識も率先して行う覚悟だ。敢えて身内を犠牲にする事も厭わない。

この後は井口豊が少年に会い、広瀬自身は東京で動き回り、それらの布石を打つ手筈である。

過去と未来に思いを馳せていた広瀬は、逸れていた思考を打ち切ると、未だ混乱が続ける大場を覚悟の座った目で睨め付けた。

広瀬が思考を続けた間、国会議員達のざわめきは、随分と大きくなっていた。

総理たちの混乱した様子と、静かに回答を待ち続ける広瀬議員の姿を、テレビが全国に向けて放送し続ける。

やがて総理が回答できないままに国会が一時中断し、テレビの画面が切り替わった。

広瀬議員が暴露した政府のチュートリアルダンジョン隠蔽と、今後の魔物たちの詳しい出現情報は、総理が国会で答えに窮したという事実と併せてセンサーシヨナルな大ニュースとなり、直ぐさま全世界を駆け巡った。

35話 アルバイト

二〇四五年七月一五日、土曜日。

次郎は今月何度目かとなる、北海道への移動を行った。

相変わらずマスクやサングラスを装着して顔を隠しており、コンビニに入れば店員に非常ボタンの位置を確認される事請け合いの不審者スタイルである。

訪問先は、前回覚えた井口邸の内部だ。

いきなり屋内に跳ぶとは非礼極まる行為であろうが、今回ばかりは仕方が無い。

なにしろ通常国会が閉会して北海道へと戻ってきた井口党首の移動に合わせてメディアが、カメラを引つ提げて追いかけてきたのだ。九月の臨時国会に向けて東京に残って活動中の広瀬議員に至っては、自宅に本人が居ないにも拘らず、押し掛けている報道陣の数が井口邸の五倍を上回る。

大場総理や峰岸官房長官、政府サイドや警察などにも報道陣は突撃しており、そちらに関してはメディア以上に国民の目が向けられていた。

なお告発者である謎の少年についても、立ち入りを禁止されていなかった未発見のチュートリアルダンジョンで能力を上げ、立ち入り禁止になる前に入った初級ダンジョンを転移で行き来していた件について、刑法一三〇条の犯罪構成要件を満たすのかで一時盛り上がった。

もつとも、何も考えずに自由な発言をする女優・タレントの柊亜寿沙が放送中に口にした発言で、結論は出てしまったが。

「その凄いレベルの子達が、転移能力とか、収納能力とか、チュー

トリアルダンジョンのビデオとかを持って外国に逃げちゃったら、どうするんですか？」

告発者の少年達は、少なくともイギリスには一瞬で行けるらしい。彼らが大場政権のダンジョン隠蔽に反対して告発した点を加味すれば、同じく隠蔽を非難していた国々で政治亡命を受け入れそうなところは、常任理事国を含めて最低でも三〇国以上は思い当たる。イギリスに転移してから好きな国の大使館に駆け込めば、おそらく手続きが行われて亡命は成功する。以降メディアは、その件については一切触れなくなった。

現在、やり玉に上げられているのは政府の判断だった。既に数万人もの死者や膨大な被害が発生しており、時間経過で状況も悪化しているため、政府の隠蔽と口封じは間違いであったという結果論にならざるを得ない。だがいずれにしろメディアは、総動員体制を掛けてあらゆる場所を取材している。

井口邸では扉を閉ざして警備員を配しながら、屋内だけで活動せざるを得ない状態だった。

そんな『ペン』は剣よりも強し』の信念を掲げつつ、都合が悪くなったら知らん振りをするソルジャー達の包囲網を跳び抜けた次郎は、一週間前と同様に応接間の示された席に座した。

正面には井口党首が座っており、孫娘の井口綾香が座る。

広瀬議員の秘書を務める井口和馬氏も今日は不在で、部屋には井口党首の秘書と思われる男性が一人だけ壁際に控えている。

井口党首はブラックコーヒーに軽く口を付けると、次郎にも勧めた上で口を開いた。

「久しぶりだと口にする程には経っていないが、君がここに来たのが、随分昔の事のように感じるよ」

「外から見ていても、凄いと思いましたよ」

言葉とは裏腹に、次郎は他人事のように随分と素っ気なく答えた。彼自身は世間よりも、手に入れた一〇〇〇万円の分配で揉めて大変な思いをした。

次郎個人としては、九割にあたる九〇〇万円くらいを美也の進学・生活費に充てた上で、残る一〇〇万を山分けしようと考えていた。自身は大学への進学や生活費に困らないと分かっており、親に言えない被服費が得られれば満足だった。

次郎が金銭にあまり頓着しないのは、彼自身や家族、親族に至るまでが揃って貧乏を実体験していないからである。

逆に美也は、二等分した五〇〇万円が受け取れる上限金額だと主張して譲らなかった。金銭トラブルで人間関係を破綻させた元両親を見て育った美也は、金銭トラブルを抱えなくなかった。

そこで次郎は、五〇〇万円ずつ公平に分配した上で、家庭教師代を払う形で調整したいと申し出た。

一カ月一〇万で、中学二年の夏から三年間の三六カ月分で三六〇万円を渡し、次郎が一四〇万円、美也が八六〇万円を受け取る形の提案である。

我ながら上手い落とし処を考えたものと自画自賛した次郎だったが、そういうつもりで教えていた訳じゃないと本気で怒られ、謝らされて五〇〇万円ずつの分配で決着を付けられた挙げ句、美也の機嫌は今でも少し悪いままだ。

この場合の美也は、機嫌が悪い振りを継続する事で次郎に反省を促している。

反省させられている次郎としては、美也の機嫌が治るなら、その辺の世間など一〇回ひっくり返っても構わないくらいの感覚であった。

とりあえず一回ひっくり返った世間では、調査機関によって多少の幅はあるものの、どここの予想でも内閣支持率が失墜どころか墜落を始めている。

広瀬議員が指摘した、攻略特典と言うダンジョンを出現させた側の明確な意思を隠していた事、大型犬サイズのカマキリやそれ以降の魔物の脅威、機動隊が子供を銃撃する映像が三つ揃って相乗効果を齎し、隠蔽を重ねた政府に対する国民の信頼が吹き飛んだのだ。

四発エンジンの三つが同時に吹き飛んで墜落中のジェット機には、広瀬議員が名指しで批判した労働党の議員たちも無理やり乗せられている。

労働党には孫が脳性麻痺から回復した高瀬総務大臣など、明らかに隠蔽を知りながら加担したと思わしき人物が、国民の眼にもチラホラと見え隠れしている。そのため平議員たちは、自分達は知らないと言っ青になりながら右往左往していた。

まだ墜落は始まったばかりだが、この後は何もなくてもメディアが騒ぐ度に支持が下がっていく。

加えて共和党本部などが順に公開していく魔物の映像が加わる度に、落下中の飛行機は残った最後のエンジンが火を噴いて、乗せられている労働党議員がパニックに陥っていく。

そんな中、定例会見で魔物対策を問われた峰岸官房長官は、選抜隊にダンジョン攻略を急がせるとして、次の攻略地として愛知県を名指した。

愛知県は、野党第一党である改革党の勢力が根強い地域だ。

野党同士の分断を図ろうとする魂胆が見え透いており、改革党も労働党の策には乗らずに徹底追求の構えを崩していない。むしろ直ちに閉会中審議を開けと、猛抗議中である。

そんな与党を追い込んでいる最中、事態の主導的立場である共和党代表の井口豊が、コーヒーにミルクと砂糖を混ぜるような少年に貴重な時間を費やして面会を申し込んだ。

「まずは総合評価で中身が変わるといって、攻略特典について詳しく確認したいのだが」

「ダンジョンは初級だけでも九カ所、チュートリアルはそれ以上に攻略されているはずですけど、あれだけやっても情報は出ませんでしたか」

「皆無だな。おそらく虚偽の身分を与えた特別編成の専任部隊だけに攻略させているのだろう。現職の総理や防衛大臣ならば当然聞き出せるが、私の立場では知り様も無い」

「そうですか」

日本は、スパイ天国と揶揄されるほど情報管理が甘い。

その中で、機動隊と自衛隊がチュートリアルダンジョン深部の秘密を守る部隊を編制して運用できていた点は、実際に何をしていたのかを問わなければ日本人としては喜ばしい事なのだろうと次郎は考えた。

確かに数十人程度であれば、人員を厳選して極秘に運用する事は容易い。

それに結果として秘匿が国民の利益に反したとしても、彼らが政府に従うのは文民統制が正常に機能している証左だ。勿論、自分たちが追い回されて撃たれまくった事には全く納得していないが。

「私の場合は、チュートリアルで評価S、初級ダンジョンで評価Aでした。その中身なら説明できますけど」

「紙に書いて貰いたい」

次郎は頷くと、自分が目にした特典を書き始めた。

自身が転移二回と収納能力を持っている事は、そもそも伝達済みである。

総合評価S

- 一・能力加算S (BP+二四)
- 二・転移能力S (二回ノ一日)
- 三・収納能力S (四〇フィートコンテナ分)

総合評価A

- 一・能力加算A (BP+一二)
- 二・転移能力A (一回ノ一日)
- 三・収納能力A (二〇フィートコンテナ分)

次郎達を追いかけた転移能力者が居た事から、政府も転移能力の特性は充分に把握していると考えるのが妥当であろう。

その点を加味した次郎は、移動時の重量四〇〇kg制限、使用回数のリセットは日本時間の深夜〇時、国外でも日本時間が基準になる事などを説明した。

収納に関しては、獲得したサイズ分の空間を倉庫として所持できる事、何処に居ても出し入れができる事、内部では時間が停止する事を大雑把に説明した。

「それと、おそらくS評価が最上だと思います」

「何故かね？」

「S評価を獲得したチュートリアルダンジョンは、うちの実家の敷地内に出現して、一年以上掛けて攻略し尽くしました。あれ以上は、挑んだ人数を減らすくらいしか思い付きませんね」

中学生のために最奥へ移動する時間が確保できなかった次郎と美也は、長らくダンジョン内で足踏み状態を続けた。

その間に最短ルートを求めて様々な道を模索し、今でも記憶から大雑把な地図が描けるくらい内部を歩き尽くした。またボスが弱く感じられるくらい魔物を倒し、魔物の習性を広く検証し、魔法を実

験するなど、幅広い事を試みている。

そんな体験談に基づくに、それ以上は攻略人数を減らすくらいしか出来る事が思い浮かばなかった。

「では攻略時間は、どう思っかね」

「私と仲間は探索内容が同等で、時期だけ数カ月ずれましたが、揃ってS評価でした。一方で、僅か三カ月で攻略した初級ダンジョンがA評価でしたので、攻略時間は影響しないと思います」

これらは検証例が少なすぎるため、あくまで次郎の憶測に過ぎない。

だが次郎には、攻略時間で特典が左右されるとは思えなかった。

「そもそもダンジョン攻略の最速記録は、誰でも簡単に塗り替えられます」

「どういう事だね」

「例えば、私がダンジョン最奥まで進んだ後に、お嬢さんを転移能力で同行してボスを倒した場合、ダンジョン攻略時間は僅か数時間になります。それでお嬢さんがS評価以上になるのは、流石に有り得ないかと」

「私は名乗らせて頂きました」

同席している少女を例えに用いたところ、内容では無く呼び方で訂正を求められた。

次郎的には『井口家のお嬢さん』の感覚だったが、相手もレベルから次郎が一八才未満だと分かっている。

実際には二学年下でしかなく、同世代にお嬢さんと呼ばれるのはあまり気分の良いものでは無いのだろうと思い直した次郎は、相手の主張を受け入れて訂正した。

「悪かった。綾香さんを最速攻略者にする事は可能ですが、『総合評価』と表示されていたからには、最低三種類以上の評価項目があるのでしよう。攻略時間だけ早めても、総合評価は高くないと思います」

「それでは貴方は、どのような条件が必要だと思われますか」

「S評価とA評価の差を見比べながら、高い方を再現すれば良い。

ダンジョンに対する高踏破率、高撃破数。あとは高レベルとか、少人数でのボス撃破かな」

次郎はS評価とA評価についてを記した紙を差し出すと、自分の仕事は終わったとばかりにミルクと砂糖を混ぜたコーヒーを口に含んだ。

だがそれだけで終わるはずも無く、質問は続けられる。

次に確認されたのは、初級ダンジョンの最奥に巢食うボスの強さや倒し方だ。

初級ダンジョンのボスは、推定でレベル三〇ほどの軽トラック並の女郎蜘蛛が二体。他には、地下一五階に蔓延るレベル一五の女郎蜘蛛が、ボスを倒すまで沸き続けた。

おそらく大集団で挑戦しても、犠牲を増やすだけだろう。

ボス部屋でボスを倒しても、レベル一五未満の者は大量に沸いたレベル一五の女郎蜘蛛に同時に群がられて、抵抗できずに貪られていく。

推奨は、レベル三五が四人以上。ボスより強いレベルで二対一なら負けないし、雑魚に足元を掬われる事も無くなる。

なお当時の次郎はレベル四一で、美也は三六だった。二人で挑むなら、そのくらいのレベルと相応の連携力が求められる。

次郎はボスと取り巻きの強さについて、比較対象が無い事に苦慮しながらも、判断理由を添えながら説明していった。

その後も質問は続いたが、次郎は殆どを素直に答えていった。

「随分と参考になった。感謝する」

「どういたしまして」

コーヒーが三度空になるまで説明した次郎は、少し疲れた様子を見せ始めた。

すると井口豊は雰囲気を変えて、新たな話題を切り出した。

「ところで一つ頼みがあるのだが、転移で綾香をダンジョンに連れて行き、レベル上げをさせてくれないかね」

相手の意図を理解しかねた次郎は、綾香の顔を窺った後、井口豊に問い質した。

「それは何故ですか」

「綾香が魔法を覚えれば、検証作業で君を呼ぶ頻度が減る。それと安全のためでもある」

「安全ですか？」

「政治の世界は、白鳥のようなものでね。水上では綺麗事を唱えるが、水面下では沈殿した泥を蹴り飛ばし合う。君たちも実際に撃たれて、いくらか実感しただろう」

「ええ、まあ。労働党のおかげさまで」

白鳥自体が最初から灰色に映るのは、七村市役所を見てきたからだろうか。

だが田舎のマイナーな市の事情を口にするような真似はせず、次郎は同意と共に頷きを返して、話の続きを促した。

「今回の我々は、労働党自体を地に落とせる手札を何枚も持つており、共和党議員の不祥事など安っぽい条件と引き替えに幕を引かせ

るつもりもない。すると形振り構わなくなった相手方は、より過激になっていく」

「怖い世界ですね」

全くだ。と、政界の大物は躊躇いも無く首肯した。

「過激になった相手には、思いも寄らぬ行動を取る者も居る。一例を挙げれば、お互いに全面戦争になったら嫌だろうと脅すために、私や秀久君の家族に対して事故や単独犯を装って攻撃し、精神的な揺さ振りを掛けてくる者などだ」

次郎には、井口の危惧にどこか確信めいた感情が伴っているように感じられた。

実際に見聞きしたことがあるのか、それとも相手に心当たりでもあるのか。

高校生の次郎も、そのような発想が完全に理解できないわけでは無い。

但しイメージしたのは、ヤクザの鉄砲玉と、国際社会の核兵器による抑止論だった。なお私的には、少し前に一〇〇〇万円の配分を巡る問題で冷戦のプレッシャーを身に浴びて、直ぐに全面降伏している。

「孫は五人いるが、その中でも一番狙われやすいのは、未成年で女の綾香だ。そのため綾香には、それなりの自衛力を付けさせたい。当然だが相応の謝礼は払う」

それは金銭的にも道義的にも、非常に断り難い依頼だった。

何より嫌なのは、狙われるという綾香自身がこの場で話を聞いている事だ。

危険を伝えて自覚を持たせるのは、自衛をさせるのには有効だ。

しかし何も、次郎の前で話す事は無いだろうと、次郎は井口豊を恨みがましく思った。

だが緊急性や相手の忙しさを考えると、自分の中で結論が出ている話を引っ張る事にも気が引ける。

これから次郎たちは、高校二年生の夏休みに入る。

転移で中級ダンジョンに連れて行き、それなりに強い魔物をハイレベルで強引に取り押さえて適当にトドメを刺させれば、低レベルであればすぐに上がる。

次郎単独でも、深夜〇時までには転移で井口邸を経由してダンジョン内まで移動し、適当にレベルを上げてから転移で井口邸を経由して自宅に戻れば、すぐに達成できる。

美也の同意が得られれば、美也に協力を仰いで追加資金を渡せる事になり、不足するかもしれない分を充当配分できて万々歳だ。美也が怒った理由はもちろん充分に理解させられたが、この話であれば別に受けても大丈夫だろうと考えた。

「では期限を夏休みの間に限って、謝礼は成功報酬でどうですか。到達したレベル×三〇万円の成功報酬で、レベル一〇になれば三〇〇万円。レベル二〇なら六〇〇万円。こちらは最低でもレベル一〇をお約束します」

「それで構わんよ。遠慮無くレベル五〇にでも一〇〇にでもしてくれたまえ」

提示した金額が呆気なく認められた事で、次郎は井口家に対する価格設定が低すぎたのでは無いかと僅かに後悔した。

国会での成果を顧みれば、綾香のレベル上げだけではなく、次郎との繋がりを保つ事や、今後の情報提供機会に対する期待などが込められているのかも知れないとも思える。

であれば金額が一桁くらい増えても、呆気なく受け入れられてい

た可能性もある。

だが高すぎる要求を出せば、その場合は逆に引け目が出る。一方で、妥当か安値であれば後腐れは無い。

そのため次郎は、自身の心情的に欲張りすぎない事にした。

「分かりました。では契約成立と言う事で」

かくして、次郎の人生初となるアルバイトが始まった。

36話 レベリング

二〇四五年七月二二日、土曜日。

日本では多くの学生が、夏休みを迎えていた。夏休みが短いとされる北海道においても、今日から夏休みに入る中学校は多いらしい。綾香の中学校は札幌市にある私立の女子中高一貫校で、二学期制という制度を取り入れているそうだが、それでも夏休みは普通に存在する。

今年も猛暑が予想されていたが、今は政治問題の方が熱く盛り上がっている。

政治家として最も注目されている広瀬議員は、与野党をアリとキリギリスに例えた。

与党である労働党は、キリギリスだとされた。

短絡的な思考でダンジョン問題を隠蔽し続け、冬が訪れればダンジョンから溢れ出したカマキリに喰われて死んでしまう。なお実際に喰われるのは、日本国民である。

野党である共和党は、アリを自称した。

政府が隠したカマキリを公開し、冬を乗り切る対策を訴えたのだ。実際に国会で総理を相手に立ち回り、カマキリ以降の魔物を早期に詳らかにして国民に警戒と対策を促した広瀬は、訴求力で際立っていた。

それらを主張したタイミングは、優先攻略対象に変更されていた大場総理の地元・宮城県が、ドームから多階層円柱に変わった直後であった。

労働党にとって最悪で、共和党にとって絶大なタイミングを直撃されて、支持率に影響しないわけがない。広瀬の呼びかけは、無党

派層のみならず、普段は労働党に票を入れる有権者にも影響を及ぼした。

結局のところ野党の共和党は、次の二択を迫っているわけだ。

『沈黙を続ける労働党に任せ続けて、カマキリ以降の魔物に喰われる』

『情報を公開して対策を訴える共和党に交代させて、対策させてみる』

大型犬サイズで人を襲う巨大カマキリは、翌年一月四日に出現が予想される。

獲物に頭から齧り付く巨大肉食飛行昆虫に対する恐怖が拭い去れない大多数の人々は、労働党に恐怖と怒りの捌け口を向ける一方で、独自の情報網から詳細な知識を与えてくれる共和党に期待した。あるいは、期待したかった。

もうっ少しだけ冷静な国民は、労働党には出来ず共和党に出来る事が何かを考えた。

現政権は『情報は非公開』で、『自衛隊で巨大構造物を包囲し、周辺の国民を一時避難させ、魔物が出たら迎撃。自衛隊には、月一カ所ずつ攻略を継続させる』という対策を取っている。

それがどのような結果に至るのかは、広瀬議員が国会で『来年は国民が日本中で魔物に喰われる地獄が到来します』と指摘したとおりである。

では労働党から共和党に変われば、どうなるのか。
まずは、情報の差。

『労働党は、隠蔽という判断の誤りで膨大な犠牲が出たと批判されており、悪い情報ほど言い出せない』

『共和党は、野党として与党の失敗に責任を持つ立場になく、むし

る率先して悪い情報を暴き出せる』

この二つの差は、途方もなく大きい。

悪い情報こそ、言ってもらわなければ困るのだ。さもなくば自分たちが死ぬ。

生存を優先するのであれば、黙っているよりも機密を残らず公開して貰い、国民全体で対策を練った方が遙かにマシだ。その二択であれば、自分たちが生き残るために言える方を選択する以外に有り得ない。

次に、魔物対策の差。

労働党は、現状の対策通りである。

共和党は、政権交代しても自衛隊の対策が無くなるわけでは無い。そして労働党の口封じから逃れて共和党に駆け込んだと思わしき、超高レベルな複数の特典を同時に所持する謎の集団を、広瀬議員らは情報提供者に抱えている。

自分たちを狙う労働党から身を守るため、あるいは打倒するため、共和党に協力していると考えられる少年たちは、レベルを上げ易かったチュートリアルダンジョンで、数年分のアドバンテージを得て、史上初となる初級ダンジョン攻略も成功させた。

レベルが足りずに大人も行けない危険な場所を、少年達に見に行かせるのは倫理的に問題があるが、彼らは自発的意思に基づいて見に行き、そして労働党への意趣返しなのか魔物対策に有効な情報を次々と提供してくれた。

少年達を殺そうとした現政権では協力して貰うのは絶対に不可能で、危機的な現状において少年達の協力を失う事は出来ない。

まるで噴火中の活火山のように、日本中でどうすべきか激論が吹き上がる今日この頃。

件の広瀬議員の情報提供者である少年たちは、表舞台からは身を

隠しつつ、山中県にある多階層円柱の地下一六階まで転移で跳んで来ていた。

ダンジョン内の気温は、四季や天候などの影響を受けず、概ね一七度から二二度で安定している。

夏でも涼しさを保つダンジョン内部に踏み入った直後、少年は通路の片側を土魔法の巨大防壁で塞ぎ、後方の安全を確保した。

次いで収納能力で取り出した椅子と机を通路に並べて、徐ろに咳いた。

「マンドムだねえ」

普段であれば、同行している美也から何らかの反応がある。あるいは連れて来た綾香から、謎の単語を問い掛けられたかもしれない。

だが二人の女子は、余所行きの態度を取り繕ったまま、互いの様子を窺いつつ無言のままだった。

そんな微妙な空気に拍車を掛けるのが、変装した次郎と美也の偽名だ。

山田太郎と、山田花子。

呼び合っていて白々しい事、この上ない。

それでも美也が参加してくれたことで、不足が懸念された分配金問題の解決と、綾香の安全の確保が叶った。

ダンジョン内での脅威は、魔物の牙や爪だけに留まらない。

中には麻酔銃を撃ってくる魔物や、機関銃を撃ってくる魔物、未知のボス部屋にも係わらず背後から銃口を向けてくる魔物すら存在する。

もつとも現状では、魔物の親玉がその指示を継続できるのかは疑わしいが。

「それじゃあ花子、俺が魔物を片付けてくるから、綾香の護衛を頼

むな」

「分かったよ。太郎くん」

なんとなく続く沈黙に耐えられなくなった次郎は、さっさと仕事に取りかかるべく、一人でダンジョンの奥へと入り込んでいった。

次郎を見送った美也は、暫くしてから肩を上下させて溜息を吐き出した。

「それではよろしく願います。山田花子さん」

「……………こちらこそよろしく、井口綾香さん。まずは座って待ちましょう。紅茶でも出せたら良いんだけど、お手洗に行く回数は少ない方が良いでしょうし」

「お気遣い有り難うございます」

「次にレベルを上げたら、土魔法と水魔法を一つずつ取った方が良いでしょう」

「何故ですか」

「お手洗いで。土を被せておけば、翌日にはスライムが消してくれるから」

「分かりました」

二人は並べられた椅子に腰掛けると、次郎が進んでいった奥の方に視線を向けつつ、ダンジョン内での簡単なレクチャーを始めた。

視線の先では片側四車線、高さ三階建てほどの巨大な通路が数百メートル先まで伸びており、その先は遙かに広い空間になっている。空間内では、指先サイズまで小さくなった自称・山田太郎と、彼の何倍も大きな魔物の群れとが激しく争っており、衝撃音と喧騒が立て続けに轟いている。

「遠くに見える、大きな魔物は何でしょうか」

「あれはヒップグリフ。頭部が鷲で胴体が馬の、架空だったはずの

生物。多階層円柱の地下一六階にいるのは、紛れ込んだ人間を除くと、アレとスライムだけかな」

「架空だったはずの生物ですか？」

「うん。目の前に居るから、もう架空じゃないでしょ」

「確かにその通りですね」

なお次郎と美也が把握しているダンジョンの生き物は、次の通りだ。

・初級ダンジョン

地下 一階	レベル一	風	チスイコウモリ
地下 二階	レベル二	土	タマヤスデ
地下 三階	レベル三	火	トノサマバッタ
地下 四階	レベル四	水	イモリ
地下 五階	レベル五	風	ナナホシテントウ
地下 六階	レベル六	土	ヤモリ
地下 七階	レベル七	火	コオロギ
地下 八階	レベル八	水	オオサンショウウオ
地下 九階	レベル九	光	ゲンジボタル
地下一〇階	レベル一〇	闇	カマキリ
地下 一階	レベル一	風	オニヤンマ
地下 二階	レベル二	土	クロオオアリ
地下 三階	レベル三	火	シオヤアブ
地下 四階	レベル四	水	アマガエル
地下 五階	レベル五	闇	ジョウロウグモ

・多階層円柱

地下 一階	レベル一六	風	インプ（小悪魔？）
地下 二階	レベル一七	土	ペルーダ（トカゲ？）
地下 三階	レベル一八	火	オヴィンニク（火猫？）

地下四階	レベル一九	水	ヨーウィー（トカゲ？）
地下五階	レベル二〇	風	アダンダラ（猫？）
地下六階	レベル二一	土	イピリア（トカゲ？）
地下七階	レベル二二	火	コカトリス（鳥？）
地下八階	レベル二三	水	ウォーター・リーパー（飛蛙？）
地下九階	レベル二四	光	カラドリオス（神鳥？）
地下一〇階	レベル二五	闇	ガーゴイル（石像？）
地下一一階	レベル二六	風	ペリュトン（翼鹿？）
地下一二階	レベル二七	土	グーロ（山猫？）
地下一三階	レベル二八	火	マフート（獅子？）
地下一四階	レベル二九	水	カトブレパス（豚・水牛？）
地下一五階	レベル三〇	闇	キマイラ（合成獣？）
地下一六階	レベル三一	風	ヒッポグリフ（大鷲馬？）
地下一七階	レベル三二	土	リュークロコッタ（ハイエナ獅子？）
地下一八階	レベル三三	火	グリフォン（大鷲獅子？）
地下一九階	レベル三四	水	アハ・イシュケ（水馬？）
地下二〇階	レベル三五	闇	アラクネ（人蜘蛛？）

魔物のレベルに関しては、計測器など存在しないため二人の体感だ。

だが体感における階層を一つ降りた魔物の強さは、人間がレベルを一つ上げてBPを割り振った差くらい強いように感じられる。

日本に詳しいダンジョンを生み出した存在がいる以上、階層の浅い方に強い魔物を出すとも思えず、階層通りのレベルなのではないかと予想された。

そんな序列において、今のところ五指に入る強さのヒッポグリフが一頭、通路の奥からズルズルと引き摺られて運ばれてきた。

「ただいま花子、綾香。今日の稼ぎだよ」

そう自信満々に告げる原始人の左手には、馬より二回りは大きな大驚馬の左翼が、しっかりと握り締められていた。

綾香はヒップグリップの群れと争って無傷で倒した上に、軽口で冗談まで飛ばす余裕がある次郎をマジマジと見つめ直した。

だが大驚馬一頭を今日の稼ぎだと宣言された美也は、不満げに言い返した。

「ねえ、太郎くん。ネット小説に『旦那様の稼ぎが少ない件について』というタイトルで投稿したら、どれくらいポイントが貰えると思う？」

仮に美也がナローに投稿する場合、一体どのような小説になるのだろうか、次郎は想像を廻らせた。

まずは幼馴染としての出会いから始まり、山で暮らしていた背景が述べられるはずだ。その中で次郎の祖父が猟銃の免許を所持しており、次郎が関心を持って行った事などが説明されるだろう。

やがて小さな獲物などを狩って振る舞うような微笑ましいエピソードも交えられながら、二人の成長していく姿が描かれる。

そのうち恋愛小説的な、危機とそれを乗り越える姿が演出された後、男性が読めば口から砂糖を撒き散らして悶絶するような心理描写を経て、二人は結婚に至る。

そして妻は旦那の稼ぎが少ない事を憂いつつも、健気に頑張っていく形で物語は締め括られる。

なお次郎がそれを読んでもしまった場合、砂糖を撒き散らした辺りで死に至る。それ以降も、美也と顔を合わせるたびに何度か死ぬ。

「ランキングに乗ったらうっかり読んでしまうから、お止め下さい」

白旗を揚げた次郎は、手招きで綾香を呼び寄せた。

そして立ち上がった綾香が近づく間に、石製のナイフで大鷲馬の胸部を切り開きつつ、自らの魔力を通していない普通のナイフを手渡して告げる。

「あっちの大広場には、二〇体くらい殴り付けて転がしてある。これを倒してレベルを上げたら、移動するぞ」

「……はい？」

ナイフを握らされた綾香は、オウム返しに聞き返した。

もちろん先程までの戦闘は見ており、次郎が魔物の群れを蹴散らしていた事も知っている。

だが多階層円柱の深部で、車輛並みに巨大な魔物の群れを相手に、北海道ドームで蝙蝠を捕まえた時の様な無茶を再現するとは思っても寄らなかったのだ。

カルチャーショックを受けた綾香は、現実を飲み込むためにワンテンポを要した。

そんな次郎の手法は、高レベル者による低レベル者への典型的なパワーレベリングだ。

ゲームなどでは有り触れた行為で、高レベル者が絶大な防御力で壁になりながら敵を押さえ込んで弱らせ、技術も経験も浅い低レベル者に敵を次々と倒させて一気に力を付けさせる。

だが綾香のような超が二つ付くお嬢様には、馴染みが無かったようである。

「俺が取り押さえて、綾香がレベルを上げる。その繰り返しだ。」

花子は護衛。簡単だろう」

「手順だけ言えば、その通りかもしれませんが。ですがこちらのヒップグリップは、日本中で怖れられている巨大カマキリよりも強いので

すよね」

まだ転移で辿り着いてから、殆ど時間が経っていない。

それが既に二〇体も殴り飛ばされて転がされているという話をされれば、大抵の人は荒唐無稽な与太話にしか聞こえない。」

次郎たちが複数の特典を持っているダンジョン攻略者だという事は分かっていたものの、実際にヒツポグリフが次々と弾き飛ばされ、悲痛な嘶き声を上げているのを聞いていなければ、綾香も半信半疑だったに違いない。

しかし現実には、その遙か斜め上を行っていた。

「初級ダンジョンのボスになっている同サイズの女郎蜘蛛がレベル三〇程度だから、ヒツポグリフはそれより少し強いくらいかな」

整った造形の少女が、大理石のように固まった。

「ヒツポグリフは爆発的な瞬発力と飛行力、それに強靱な肉体と体力と蹴りが特徴で、超巨大女郎蜘蛛でも弾き飛ばされるか、蹴り飛ばされると思うぞ。しかも群れているから、殲滅前に近付くのは危険だな」

「でもヒツポグリフは遠距離攻撃が無いから、距離さえあれば事故は無いと思うよ。ここより深くなると、土弾を飛ばしたり、火を噴いたり、水の槍を投げ付けたり、毒と麻痺の糸で絡め取ってくる魔物がいるから」

二人の発言内容は、いずれも綾香を引き攣らせるに足りた。

それでも彼女は生来の気質なのか、あくまで冷静に事態の把握に勉めようと質した。

「お二人のレベルは、一体おいくつなのですか？」

「二人ともヒツポグリフの倍以上あるから安心しろ」

言外に信じられないと首を振る綾香の様子に、説明していた次郎も自分たちの非常識さを僅かに顧みた。

しかし美也の方は、何を今更と言った呆れ気味だった。

そもそも次郎は、自分の関心事にはのめり込むタイプだ。

それはネット小説を徹底的に読み漁るために、自分で探すだけでは飽き足らず、作者の恭也に記録媒体を渡してお勧め小説を入れてもらう事までやった事から明らかである。

自ら関心を持って取り組む事が、最も成長を促す。

次郎はネット小説を徹底的に読み漁るのと同様に、自宅の敷地内に発生したダンジョン探索にも一心不乱に取り組んだ。

活動の切っ掛けは偶然のレベル獲得であり、政府が地割れと称して隠蔽している事を思い起こした後は、禁じられる前になるべく上げておこうと潜り続けた。

凝り性で、レベル獲得に急ぎ、保護者に衣食住を丸投げでき、自宅の敷地内のダンジョン立地、占有による魔物独占、美也という完璧な連携パートナー、転移による直接往復、機動隊に追われた焦燥感からの自衛力向上などが組み合わさった結果、今に至った。

これは任務として専従し、接收と封鎖でダンジョンを確保し、友軍の火力支援を受けられる自衛隊や機動隊にも勝る条件だ。

二人での独占は、部隊単位で確実性を期しながら進む組織に対して、『頭割りした経験値配分』で遙かに勝る。

レベル上げだけを行う次郎たちと異なり、相手は任務として内部の調査や報告書作成、魔物の死骸回収、獲得した魔法の検証にも多くの時間を費やす。従って『レベル上げに費やせる時間』も、両者には大きな隔たりがある。

加えて『経験値一〇〇倍』である。レベル差が広がるたびに効率

で差が広がり、やがて隔絶していく。

それらを全て計算すれば、次郎たちは同じ年数をダンジョンでの活動に費やした自衛隊員や機動隊員に比べて、経験値の獲得量で途方も無い優位性がある。

今や次郎たちがレベル六〇代後半に至ってヒツポグリフを軽々と殴り飛ばし、一方でダンジョン探索チームが未だに初級ダンジョンの最奥で四苦八苦しているのも、それらの事情に鑑みれば、至極当然であつた。

そんな次郎に美也が付き合えたのは、骨髓移植に伴う自身の安全と、家族の選択とが乗算で動機付けされたからだ。

次郎がパートナーでなければ、決して今には至っていない。

特異性が大きくなり過ぎた次郎のパワーレベリングは、綾香の常識の遙か斜め上を突き進んでいた。

「今日のノルマは最低一〇〇体。レベルを三〇まで引き上げたら、北海道ダンジョンを攻略して攻略特典を取る事を目指したい」

「……………ちょっと待ってください。依頼は私のレベルを上げる事でしたよね？」

「いいや。依頼内容は『自衛力を付けさせたい』だ。そして期限は『夏休みの間』で、謝礼は『成功報酬』と約束した」

「確かにその通りですが、それでレベルを上げるお話だったのではありませんか？」

「レベルは、相手の方が強ければ守り切れない相対的なもの。転移は、相手が強かろうと逃げられる絶対的なもの。まあ、追加で交渉する予定だ」

追加交渉に関しては、綾香の安全を高めるためという名目ならば、そのために依頼を行った保護者達も反対しないだろうと次郎には思われた。

次郎は説明を省いたが、綾香が転移を獲得すれば、攻略特典を得ている次郎たちの希少性がその分だけ薄れる。

それは当初から望んでいたことで、実現すれば力を隠す必要がなくなるというものだ。

少なくともレベルや魔法は、大勢の人が獲得して特異性や希少価値が薄れた。今なら街で魔法を使っても、レベルを持っているんだなと思われる程度である。

攻略特典の希少価値を薄めるのは流石に難しそうだが、共和党代表の孫という特別な立場にある綾香が特典を持つ事には、いくつものメリットがある。

その中でも比重が大きいのは、特典獲得者に対する扱いと、検証作業の負担軽減だ。

特典獲得者に対する扱いについては、綾香が特典を持てば、井口家は特典所持者に対して人体実験的な扱いが出来なくなる制約が生まれる。あるいは、まず身内で試さなければなくなる。

検証作業の負担軽減については、井口豊や広瀬秀久が日本の魔物対策のために検証したいと望んだとして、綾香がいればそちらが先に呼ばれる。

負担に思うのであれば依頼を断ってしまえば良いのだが、次郎自身は日本が減じる事は望んでいない。

次郎と美也は思想の根幹に、お互いと祖母までを最優先枠あるいは最も親しい家族枠として、他の全てを切り捨てられるという考えを持っている。

それは幼い頃に家族関係の壊れた美也が、代替として渴望した箱庭世界であり、死守すべき最後の心の拠り所だったからだ。

美也の心が壊れるか否かの問題であったため、他の全てを捨てても守るべき最優先事項とされていた。

だが箱庭世界が守られるのであれば、他にも目を向けられる。

次郎の場合は自分の家族や恭也、中川や北村らの友人関係などで自分との関係性で手を貸せる範囲が変わっていく。

なお日本が減びて困るのは、次郎が英語を苦手とするからだ。

従って究極的には自分本位なのだが、だからこそ手を貸せる範囲は自ずと大きくなる。自分自身の為に、身元が発覚しない範囲で協力するに如くはない。

そして特典獲得者に対する扱いと、検証作業の負担軽減に鑑みて、綾香に転移能力を一つ持たせるという発想が生まれた。

美也としても、次郎が暮らし易くなる為であれば構わないと考えている。

彼女自身は箱庭をどの国に置こうと構わないのだが、箱庭世界の構築者として、住人の快適度は軽視できない問題であった。

先般、峰岸官房長官が記者会見で「攻略出来るチームが一隊で、その人員を使い回している」と弁明しており、攻略済みの人間でも何度もボス戦が出来ると確定している。そのため次郎たちがボス戦に加われない心配も無い。

北海道在住の綾香より一週間ほど早く夏休みに入った次郎たちは、既に北海道ダンジョンの攻略を進めていた。

だが実際にボスを攻略する前には、綾香のレベル底上げが必要だ。ヒップグリフの胸部を裂いた次郎は、そこへナイフを差し込むようにと綾香に促した。

37話 目標更新

僅か五日。

綾香がヒップグリップの強さを上回り、レベル三四に到達するまでに要した時間である。

パワーレベリングの可能性の一端は、アメリカ軍が撃ち落としたコウモリの群れを自分たちの経験値に変えた Sylphid^{シルフィード}が世間に示している。

だが実際に、レベル六〇台後半という日本最上級のレベルを持つ者たちが複数で協力し、転移を駆使して最効率でレベルを上げさせたら一体どうなるのか。

前例が無いために誰も正確な予想が出来なかった事を試みた結果、かような記録が生み出された次第であった。

日本中のダンジョンが封鎖されており、内部に入れるのが一八歳を超えてレベルの上げ難くなった自衛隊と機動隊ばかりである点を考慮するに、既に綾香のレベルは日本で三番目に達している可能性すらある。

レベルを上げさせた次郎たちも結果には驚愕したが、綾香の思いはその先を行った。

「泰然自若という言葉覚えまして」

二日間の休息を入れた綾香は、次郎に再会した時には悟りを開いたかのように諦観していた。すなわち、諦めて全てを受け入れる境地に至ったわけである。

そんな彼女の成長の方向性は、美也をモデルとした魔法特化型だ。

井口綾香 レベル三四 B P O
体力五 魔力九 攻撃三 防御五 敏捷四
火五 風三 水一 土一 光二 闇一

同レベルの美也に比べれば、高い防御力と引き替えに火力や回復魔法が幾らか低い。

これは綾香が、高レベル者の弱らせた魔物にトドメを刺す活動形態に特化していたからだ。

とはいえ魔物に関しても、一対一であれば既にヒツポグリフや、初級ダンジョンのボスである超巨大女郎蜘蛛を狩れるほどには強くなっている。

また防御力五は、次郎が機関銃の銃撃を弾いていた頃の数値と同じである。

従って自衛力を付けさせるという目標の第一段階は、ケチの付けようも無いくらい完遂できていた。

綾香のレベル三四到達によって、次郎たちの現時点でのアルバイト代はレベル三四×三〇万円で、一〇二〇万円に達した。

五日間の短期アルバイトとしては、苦笑いが出る金額である。

これと先の映像代一〇〇万円と合せれば、次郎と美也が二人で稼いだ金額は合計二〇二〇万円。分配金は、それぞれ一〇〇〇万円を越える。

美也が希望した六年制の国立大学医学部に進んで、奨学金などが一切無いとしても、卒業までの資金に見込みは付いた計算になる。

後は辻褄合わせだが、こちらのハードルはとても低い。

お札に関しては、イギリスで両替すれば銀行券の記番号では追えない。

イギリスでは銀行や郵便局なら手数料無しで替えてくれるし、日本の国旗が窓に貼ってある両替ショップも沢山ある。両替時に身分証明書は必要ないので、美也に任せればお札の問題は解決する。

そして美也を引き取った保護者の祖母も、三人で作る箱庭世界の住人だ。

最優先対象の美也が話せば、辻褄合わせに協力してくれる。資金は自分がタンス預金していたものだという事にして、それを孫の進学費用に充てたと誤魔化してくれるわけだ。

レベルを上げる事が危ないという考えは持つかもしれないが、次郎も口添えをすれば、二人で決めたならそうしなさいと口も出されなくなる。

（あとは、それほど要らないんだけどな）

元々次郎は金銭に執着しておらず、綾香にダンジョン攻略特典を取らせる機会に合わせて、美也のために六年分の生活費とお小遣いでも貰っておこうかと思つた程度だった。

親元から離れて暮らす大学生で、家賃や食費・光熱水費、通信費や雑費、交友費など合せて月一五万円掛かると大雑把に見積もる。すると六年分の費用は、月一五万円×一二月×六年＝一〇八〇万円だろうか。

だがその程度では流石に安すぎて、相手からクレームが出かねない。

もちろん次郎は井口豊から苦情を言われた事など一度も無いし、無理を言つても大抵は受け入れそうな印象もあるが、もう少しだけ上げておく事にした。

「それで、いくら必要かね」

綾香から話を聞いていた井口豊は、攻略特典を取らせるか否かの判断を終えていたらしく、単刀直入に金額を問うた。

攻略特典を取らせる理由を問われると思つていた次郎は予想を外された形だったが、それでも気を取り直して、事前に用意していた

料金表を差し出した。

・ 攻略特典Sより上	四億円
・ 転移能力S	二億円（二回／一日）
・ 転移能力A	一億円（一回／一日）
・ 攻略特典B？	五〇〇〇万円
・ 攻略特典C？	二五〇〇万円
・ 攻略特典D？	一〇〇〇万円
・ 攻略特典E？	五〇〇万円
・ 獲得特典なし	〇円

料金表を受け取った井口豊は、眉間にしわを寄せて何やら考え始めた。

その様子を見た次郎は、相手が金額で悩んでいるのではなく、特典の幅などで考え込んでいるのでは無いかと考えた。

金額に関しては、資産家の井口家ならば容易に捻出できるであろうし、共和党の資金から『ダンジョン調査費』の名目ですす事も、彼の立場と今まで次郎から得た情報だけで十分に可能だ。

例えば力マキリの映像記録と、聞き出した特性情報は、日本中がそれらの対策を練り始めた点において途方もない価値があったようだ。

そのおかげで死者が一人減ると考えれば、日本人の命が一人二万円以下と計算しない限り、二億円の価値は確実にある。

仮に共和党が出せないとしても、大企業などを回って未だ非公開ビデオの一部なりとも見せながら説明すれば良い。

日本を救うための資金という名目であれば、企業が自社のイメージアップを図るため、喜んでスポンサーに名乗りを上げるだろう。テレビCMを一々二本打つところのアピール力では無く、全世代に対する救命行為として長らく国民の記憶に残るのだ。

そのように考えた次郎は、暫し待ちの体制に入った。

「そもそも夏休みが終わるまで一カ月に満たないが、それで攻略が出来るのかね」

井口豊からは、金額や特典の幅では無く、実現可能性についての質問が返された。

初級ダンジョンは、地下一五階まで存在する。

支持率を大いに落とした政府と労働党はダンジョン攻略を焦っているが、部隊の投入から攻略まで一カ月という速度は相変わらずのままだ。

それはダンジョンが、一階層ごとに複数の市が入るほどに広大でそれが地下へ一五階層も続いているためである。

航空写真が撮れない未知の空間で、内部には数百万体の魔物が蔓延っている。

そして北海道の夏休みは、他の都府県に比べて短い。

「綾香さんの中学校では、夏休みは七月二二日の土曜日から、八月二〇日の日曜日まででしたよね」

次郎の確認に、井口豊の隣に座っていた綾香が軽く首肯する。

「はい、その通りです」

七月二九日現在、綾香の夏休みは残り二三日となっている。
だが次郎は、太鼓判を押した。

「アルバイト契約した翌日から六日間、それと昨日までの二日間で、俺たちは北海道ダンジョンの地下六階まで調べました。最深部に到達した後に、綾香さんを連れて各階層の魔物を倒したり、フロアを

踏破したりしながら総合評価を上げて、期限が近付いたら最後にボスを倒す形を取ろうかと思っています」

「僅か八日間で、地下六階に行ったと？」

「ダンジョンには昔から潜っていますし、仲間も優秀です。それに高レベルなので、移動速度も早いですから」

人類は、男性の方が空間認識能力に優れている。

それは人間が、二足歩行を始めて人類に分岐した七百万年前、あるいはそれ以前の哺乳類が誕生した二億五千万年前から、雄が外で狩りをして、雌が子供を産むという進化の過程で役割分担してきた特性を備えているからだ。

石槍を振り回す狩猟民族の次郎など、その典型であろう。

実際に脳の構造は化学的にも、男性が空間認識能力に優れる右脳優位、女性が言語や計算能力に優れる左脳優位になっていると判明している。

だがそれは、空間認識能力だけで比べた場合だ。

美也は大まかな地図を描き、次々と目印を作らせて全体像を細かく把握していき、どこに下層への階段が有りそうかを予想して補佐する。

結果として男女両方の能力を十全に活かした二人は、夏休みという期間とレベルも相俟って、凄まじい速度で探索を進めていた。

「二週間後にはボス部屋前まで行けると思いますし、それくらい時間があれば、綾香さんも夏休みの宿題が出来て都合が良いでしょう」
「二週間後というと、八月一二日か」

「はい。その翌日から一週間掛けて、階層の境目に轉移しながら一日二階層分の魔物を退治します。なるべく進出して到達フロアを拡大して、最終日の八月二〇日にはボスを倒します。総合評価Sは無理でも、Aは狙いたいですね。それで、如何でしょう」

お盆は考慮しますよ。と、事も無げに言い切る少年に、井口は再び考え込んだ。

現在の日本で、ダンジョン攻略がどれほど望まれているのか、子供ですら知らない者は居ないだろう。

大型犬サイズの巨大カマキリが、常人を越えた身体能力で襲い掛かってくる恐怖。

その後も続く、大型犬サイズの巨大オニヤンマ、巨大クロオオアリ、巨大シオヤアブ。

人々は家屋を大いに補強し、自警団を設立し、ダンジョン付近から離れた場所やダンジョン攻略済みの地域への避難を検討するなど、必死に対策を練っている。

まるで準戦時体制へと移行する国家であるかのように。

一カ所を攻略すれば、都道府県の一つが危機から逃れられる。

現在攻略中の都道府県は人口五〇〇万人規模であり、その規模の国土と人命が守られる。そのため政府は、今まで以上に攻略を急かしているのだ。

それを目の前の少年は、二億円で政府よりも遙かに早く攻略できると言う。

しかも『ダンジョン攻略が可能なレベルを持った、転移能力者を増やす』という、破格の条件付きで。

二億円は、社会から見れば破格の安値だ。

その程度の金額でカマキリ問題が片付くならば、日本中から依頼が殺到する。

しかもその際に「攻略するのは政府の命令で口封じに殺され掛けた少年たちで、攻略費用は彼らが身を隠すための逃亡資金です」とでも付け加えれば、誰も金額に文句は付けなくなり、既に死に体の労働党を墓場まで蹴落とせる。

だが井口豊の前に座る少年は、未だに名前も顔も明かさず、預けた携帯端末を収納で仕舞い込んで基地局も隠し、自宅では無い場所で電波を受信していると思われる。

そのため全面的な協力を得る事は難しい。

少年の身元を調べて追い詰める事は、物理的にはなく状況的に不可能だ。

仮に、井口と広瀬が最初に面会した時の『君の個人情報調べるともりは毛頭無い』という約束を破って、あらゆる手段を尽くして身元を調べ、接触したとする。

その場合には、今までの協力姿勢が一転して反発に変わるだろう。初級ダンジョンの問題が解決しても、ダンジョンを出現させた存在の問題は残ったままだ。多階層円柱や、その先も考えられる。

そのような状況で、最強のカードを自ら敵に回すなど、悪手の極みだ。

故に井口豊と広瀬秀久は、異なる布石を打っていた。

「いいだろう。やってみたまえ」

差し当って井口豊は、少年の過小すぎる要求を飲んだ。

「ありがとうございます」

嬉しそうに返事をする少年は、金銭・政治・常識など、いずれの感覚も普通の子供だった。わりと物怖じしない肝の据わった印象もあるが、その程度は個性の範疇に過ぎない。

だがその少年は、何度でも場に出せる反則的なジョーカーカードにして、さらに重要な場で必要な日本を救う切り札でもある。

井口豊は鷹揚に頷きながら、絶対に手放してはならない手札について思いを巡らせた。

今回少年が攻略特典Sに付けた金額は、僅か二億円。

井口が攻略特典に価格を付ける場合、最低でも三桁は増やす。

その金額が大げさだと思った者は、少し想像力を働かせてみれば良い。

収納能力者に核兵器を持たせ、転移能力者に各国の首都を転移登録させておけば、一体どうなるのかを。

核兵器搭載型の戦略爆撃機や、原子力潜水艦よりも、収納と転移を使われる方が遙かに怖いのだ。何しろ現代の如何なる手段を以てしても、絶対に防げない。

三桁増やした二〇〇億円は、核兵器搭載可能なステルス戦略爆撃機一機と同等の値段だ。一瞬で世界中の何処にでも往復できる転移能力が、ステルス戦略爆撃機一機よりも安いなど、そのような見積もりは馬鹿馬鹿しいにも程がある。

往復できる転移能力が一つあれば、自国の兵士にダンジョン往復でレベル上げを行わせる事も出来る。回復魔法を覚えさせれば、万能薬を使える者も量産できる。

世界中の何処の国でも、常識的な感覚として往復できる転移能力に二〇〇億は安すぎて、議会や国民の承認を簡単に得られるはずだ。大国ならばダース単位で纏めてお買い上げであろう。

さらに転移と収納を組み合わせれば、原子力潜水艦を世界中の海に常時展開する事や、護衛付きの機動艦隊を相手国の領海内部に配置する事と同等以上の威圧力が生まれる。

国防予算を一時的に削ってでも、世界中が獲得しようと金を捻出するはずだ。

そもそも他国に対する防衛以前の問題で、地球に現われた謎の巨大構造物に対する把握と検証のために、攻略特典を得ていない国々は切実に調べたいのだ。

そして日本は他国より遙かに切実に、魔物被害を食い止めるため彼が必要だ。

だが金銭は彼にとっての手数料で、それ以外の何かが無ければ動かない。

であれば井口豊は、偶々手元に紛れ込んだ途方もない札を保つために、どうすべきか。

まずは撃たれて追われた彼が恨みを持つ現政権を敵役として、自分たちが現政権に対抗する共通の仲間だと印象付けて協力を仰ぐ。それは実際に上手くいった。だからこそ彼は、井口や広瀬には程々に協力する姿勢を見せている。

次いで、定期的な接触による個人の性格や嗜好、集団の特性の把握。

こちらでも概ね理解できた。

少年は一般家庭よりも少し裕福な、家庭環境や友人関係に特段の問題が無い、成績が平均より上で健康な、程々には常識や良識を持つ、活動的な性格の一般的な男子高校生である。

受験を控えておらず、綾香に対する態度などから、おそらく高校二年生。

綾香のレベル上げに協力した少女は、一般家庭よりも貧しく、家庭環境に大きなトラブルがあり、成績はとても優秀で健康な、常識や良識は持つが一線を引いて心の壁を作る、やや問題を抱えた女子高生である。

二人は同学年で、対等で気の置けない、親戚よりも近しい幼馴染み。

概ねの制御は少女がアドバイス形式で行い、少年に対して一定の制約も課しているようだが、その範囲内で最終決定権を持つのは少年側であり、決定に対して少女は逆らわない。そして少女は、少年に対して精神的な依存がある。

他の協力者は、おそらく居ない。

井口豊は、何をおいても少年達を押さえなければならぬと考える。

法律、常識。この世界非常事態に、そのような事を言っている場合では無い。問題があるなら、法律や常識の方を変えるべきである。遡及適用、それも大いに結構だろう。人類が新たな状況に適応するだけの話だ。

彼は一瞬だけ、隣で静かに座る孫娘に視線を送った。

38話 夢と現実

二〇四五年八月六日。

目を覚ました次郎が食卓へ降りていくと、普段は外で朝食を摂る次郎の父・徹男の姿があった。

「おはよー」

軽く挨拶しながら、次郎は今日が日曜日であつた事を思い出す。通勤に片道二時間を掛ける彼の父親は、平日は喫茶店で朝食を摂り、外食してから帰宅する生活を送る。そのため次郎が父親と顔を合わせるのは、基本的に休日だけだ。

もしも次郎が社会人であれば、一日四時間を通勤時間に費やすくらいなら職場の近くに住む選択をするだろう。

だが徹男には、先祖代々の家と広い土地から離れる選択肢は無かった。

七村市の初代町長家であり、それ以前には三山村村長家であつたという家柄やプライドが、父にとっては毎日四時間の通勤時間を上回るらしい。

同じ食卓に座わつた次郎は、既に置かれていた自分用の朝食に箸を伸ばした。

朝食はご飯とインスタントの味噌汁、納豆とスクランブルエッグと何枚かのハム、それにミニトマトとキャベツの千切りだった。

まずは醤油を垂らした納豆をグルグルとかき混ぜながら、適当にテレビを眺める。

『おはようございます。八月六日、朝七時のニュースをお知らせします』

時間は七時丁度だったらしく、皺一つ無いスーツ姿の男性アナウンサーが現われて、ニュースを伝え始めた。

画面には国内と国外からで三つずつのトピックスが表示された。

- ・内閣支持率、ついに一〇%前半へ下落
- ・共和党、犯人に被害者情報は渡せない
- ・新生党、現政府はテロリストに等しい
- ・ライアン米大統領、日本の現状を非常に憂慮
- ・国連人権理事会、日本の人権侵害を現地調査
- ・アラブ首長国連邦、I S S の共同開発を提案

最近ではニュースの時間になると、ほぼ確実に内閣支持率と広瀬議員が話題に上る。

支持率に関しては、政府と労働党の支持率の下限を確かめる社会実験をしているのかと思えるくらい燦々たる有様だ。

これは警察と自衛隊を用いたダンジョン隠蔽と私的利用を行い、魔物により数万人の国民に犠牲を出し、これからその百倍の犠牲を出す危機を生じさせた事で有権者に見切りを付けられたからだ。

また内部に潜っていた子供たちを口封じのために執拗に撃ち殺そうと追い回した映像が出てきた事で、人間として倫理的に軽蔑されるところという政治家として致命的な状況に至っている。

次郎たちにとっては、映像を撮り溜めておいた価値があったというものだ。

日本における内閣支持率の最低値は、二〇〇一年に総辞職した内閣の七%だ。

その時は、日本の高校生達が乗った実習船「えひめ丸」が、海中から浮上したアメリカの原子力潜水艦に衝突されて沈没し、アメリカ軍が救助活動をせず見殺しにして日本人九名の死者が出たにも拘

わらず、報告を受けた総理がそのままゴルフを続けた事で国民の怒りを買った。

過去の例を見比べれば、それ以上の失態を犯している大場総理の内閣支持率は、今後七％を割り込む可能性が非常に高い。

「はてさて、どうなる事やら」

「何がだ？」

息子の呟きに、父親が反応を返した。

「いやあ、支持率」

「ふん。大場内閣は駄目だ、早く終わらせた方が良い」
「なるほど」

労働党シンパである父親の発言の意図を、次郎は正確に理解している。

内閣支持率と、政党支持率は、別物だ。

仮に大場内閣の支持率が七％を下回ったとしても、大場宗一郎という男が悪いだけで、与党である労働党は支持し続けるという国民は、徹男のように少なからず残るのだ。

そのため労働党の造反者や非主流派が大場宗一郎を中枢から追い出せば、労働党自体は政党支持率をある程度保って存続できる。

そして労働党の支持率が今の内閣支持率に引き摺られない為には、早々に見切りを付けて切り捨てなければならない。

徹男が考えたのは、まさに大場総理を切り捨てて労働党を残す案だった。

骨の髄まで労働党を支持する徹男が大場総理を見限った事で、次郎は大場総理の終わりをほぼ確信した。

『次のニュースです。アラブ首長国連邦が日本に対し、国際宇宙ス

テーションの共同開発を提案しました。同連邦は二〇一七年に火星移住計画『Mars 二一七』を発表しており、現在は高度約三万五、〇〇〇kmの静止軌道上に、国際宇宙ステーションを建設中です。この静止軌道は地球磁気圏と呼ばれる範囲にあり、人体に影響を及ぼす太陽からの放射線を逸らす比較的安全な……………」

納豆ご飯を食べている間に、テレビはトピックスの最後にあつた『アラブ首長国連邦、新ISSの共同開発打診』の話題に移つていた。

アラブ首長国連邦は、七つの首長国が集まつた連邦国家だ。

最も国土が広いのはアブダビ首長国だが、知名度では二番目に広いドバイ首長国が有名だろう。

人口は二〇四五年現在で二〇〇〇万人台だが、その八割以上が外国籍という問題を抱える。また国土は北海道と同程度だが、その大半が砂漠だ。

しかし国内には豊富な原油と天然ガスが埋蔵されており、それを日本などに輸出する事で高いGDPを保ち続けている。さらに天然資源に依存しないように、産業の多角化も推し進めてきた。

次郎はISSが国際宇宙ステーション（International Space Station）の略だと言つことを初めて知りつつ、アナウンサーの話に耳を傾ける。

『今回の表明は、共和党が公開した転移能力が、日本・イギリス間の長大な距離を一瞬で往復したことに着目したものです。膨大なコストと事故の危険を伴う宇宙空間へ、安全に人と物資を送り込めれば、ISSを速やかに建設できます』

ニユースでは、転移に収納能力や水魔法を併用する事が如何なる効果を及ぼすかについて説明を始めた。

だがニユースが語る可能性は、現実にくらべてまだ過小評価である。

非公開の収納能力Sの四〇フィートコンテナで運べる物の中には、太陽光発電を行うコンテナ式野菜工場などがある。

無重力空間である事を考慮して内部を固定し、水の循環システムも新たに組まなければならないが、それらは現代の技術では簡単に達成可能だ。

野菜工場の地上における収穫量は一基につき一日三・五〜五キログラムで、成人一〇人の目標摂取量を上回る。従って完成品を一基運ぶだけで、国際宇宙ステーションは一〇人分の野菜が自給可能になる。

野菜のみならず穀物も理論的には可能で、転移能力持ちと収納能力持ちが協力する限り、国際宇宙ステーションは人類を乗せたまま半永久的に稼働させられる。

また各種コンテナを火星に運べば、人類は火星で暮らせるようになる。

人類が使える惑星が、一つ増える可能性が見えてきたのだ。

『アラブ首長国連邦は日本政府に協力を求める声明を出し、引き替えにISSの共同利用を提案しました』

それは朝のニュースの締め括りとしては、実に夢のある話だった。例え、原油を用いた攻略特典に対する外交圧力を掛けているだけで、実現の可能性が皆無だとしても。

「ご馳走様」

朝食を終えた次郎は、テレビの時間を見計らい、七時半に合わせて近所に住む美也を迎えに行った。二人は同じ高校の図書文芸部員であり、近所の人達からは一緒に登校していると思われる。

合流した二人は、自転車で一〇分掛けてコンビ二に赴くと、昼食

を買ってから堂下家が所有する広い杉山まで移動する。別に家に寄らずとも、何処からでも入れる。

そこで次郎が自転車を収納してから、転移で北海道ダンジョンに跳ぶのだ。

現在の攻略階層は、地下一二階。

生息しているのは、懐かしの巨大クロオオアリだ。

およそ一年前の二〇四四年八月一日、山中ダンジョンの地下一二階を攻略中だった次郎たちは、巨大クロオオアリの群れと戯れていたところで機動隊員に遭遇し、そこで初めて発砲された。

以降の二人は、魔物と国家組織の両方から同時に逃げながら、地下への階段を探して奔走した苦々しい記憶がある。

その当時に比べれば、レベルが三〇くらい上積みされ、美也は一ニレベル分の能力加算もあった。加えて国家組織にも追われておらず、非常に難易度の低い探索となっている。

まるで障子紙を破るように巨大クロオオアリの甲殻を槍で突き破り、豆腐を崩すように内臓に押し入って魔石を突いて経験値を稼ぎながら、下層への階段を探し回る。

クロオオアリの死骸が大量に落ちている道が、既に二人の通った道だ。スライムの消化具合で、そこがどれだけ前に通ったのかを判別できる。

ひたすら潰しながら高速で駆け巡り、大雑把に地図を埋めていき、階段を見つければその階層はゴールとなる。階段発見までに赴かなかったエリアは、いずれ綾香と共に埋める予定だ。

探索時間は、概ね朝八時前から夕方六時過ぎまでの一〇時間となる。

但し永遠とダンジョン内に居るわけではなく、昼食は転移を用いてダンジョン外で摂る事が多い。

山中県には、誰も居ないが景観の良い山中の公園や、同じく誰も

居ないが綺麗な海辺に程近い林の中などが、いくらでもある。

そして次郎の収納空間には美也の要望によって、食卓になる家具や道具がしっかりと入れられているのだ。

「夏休みなのに海にも山にも行かないなんて、不健全だしね」

美也が思い描く理想的な夏休みのうち、最低ラインはその辺りにあるらしい。

中級編は水族館、動物園、植物園、遊園地、美術館の五つを達成することで、そうすれば上級編への扉が開かれるそうである。

なお植物園は行楽地、遊園地はレジャー施設、美術館は史跡に変えても良いらしい。

「八月二一日からは自由のはずだから、夏休みが終わるまでに二カ所ほど行くか」

「へえ……どこに連れて行ってくれるの？」

美也の試すような口振りとし目に、次郎は感覚的に答える。

「代替えが不可能な水族館と動物園。それって、中学生の分なんだろう。イルカショーがある水族館には心当たりがあるし、動物園はうちの県にペンギンも居るから、行っておくか」

答案用紙は、美也の表情に表われていた。

「それなら二一日と二二日はフリーにして、行くのは二三日以降でお願いね」
「ういいうい」

その後、非常に機嫌の良くなった美也と共にダンジョン午後の部

を終えると、二人は堂下家所有の杉林内に戻った。

午後六時過ぎに美也を送ってから帰宅すると、概ね夕食間際になっている。

堂下家は父親の仕事の都合上、家族で一緒に食卓を囲む習慣はない。食卓の自分の席に食事が出ていれば、それを勝手に食べる形だ。ダイニングルームを覗き込むと食事は既に置いてあり、大学が夏休みで実家に戻っている兄の一郎が、テレビを見ながら食事を摂っていた。

「次郎か」

「ただいまー。兄貴、今日の夕食は何？」

「ハンバーグ」

「うあー、マジカー」

テンションが駄々下がりした次郎は、悲しい眼差しを食卓に向けた。

二人の母である堂下紗江は、料理があまり得意では無い。

その中でもハンバーグは際立っており、水っぽくしたり、逆にボロボロにしたり、焦がしすぎたりする。

他の料理でもシチューはちゃんと作れるのに、カレーはキーマカレーにして失敗したり、普通のカレーでも創作料理にして変なものを入れたりして、大抵失敗する。

そもそも日本食の基本である一汁の味が薄すぎて、自宅にインスタントの味噌汁が大量に常備されている時点で、料理の腕はお察しだろう。ご飯だけはちゃんと炊けるので、納豆と梅干しとインスタント味噌汁があれば、とりあえず死にはしない。

母の紗江は空手一筋でオリンピックメダリストにまでなった元社長令嬢で、結婚するまで料理は管理栄養士に管理されて自ら作る機会を持たなかった。結婚後も殆ど祖母が作っていたため、未だに料理は中高生レベルだ。

しかし料理のことで文句を言つと空手のメダリストに怒られるため、堂下家で料理の味は禁句である。

もしも、母親の料理に以心伝心で低評価を付ける次郎たち兄弟を批判する者が居たら、声を大にして言いたい。

次郎たちの父親も、休日以外は朝・昼・夜の三食が外食であると。それでもゴタゴタ抜かすなら、良いから喰つてみると。

「うつつ、ケチャップ取つて、お兄ちゃん」
「ほらよ」

幼児化した次郎は、ボロボロと崩れるハンバーグにドバドバとケチャップを掛けて『ボロボロ肉のケチャップ和え』を作り出すと、それをご飯の『ふりかけ』にして朝食を頂くことにした。

勿論それだけでは辛いので、インスタントで豆腐の味噌汁も用意する。

「俺、早く結婚して、嫁に美味しいご飯を作つて貰うんだ」
「変なフラグを立てるな。愚弟」
「うぐっ」

一郎に注意されて渋々と食事を始めた次郎は、ふと兄が実家に居る理由を訝しんだ。

四歳年上の兄は、県内にある国立の経済学部に通う大学三年生だ。偏差値は五〇代後半で、七村高校の普通科からは毎年何人も進学している。また山中県は魔物が出ないと知られており、県外からの学生も徐々に入ってきている。

実家から大学までは片道二時間以上かかり、通学がするのは大変なので大学の近くにアパートを借りて一人暮らしをしている。そして堂下家の家庭事情から見れば大変羨ましいことに、自炊も外食も

し放題なのだ。

であるにもかかわらず、何故帰省しているのか。

「兄貴、大学は夏に部活とか無いの？」

「……………空手部は、レベル至上主義になってしまっただけ」

「レベル至上主義？」

そぼろ肉掛けご飯の隅をチマチマと崩しながら次郎が聞き出したところでは、一郎の空手部はレベルを上げた部員と上げていない部員とで、隔たりがあるらしい。

元々の空手部は、先輩後輩の厳しい上下社会だったそう。

しかし昨年七月に魔物が出た後に、部員間でレベルという格差が発生し、それが一年間で大きく広がった。

兄の一郎は、日本に魔物が現われた時に、効率的にレベルアップが行えたか否かの境目年齢にあたる。今の大学三年生は非効率世代で、二年生以下は効率世代だ。

今の二年生が効率の良かった時期に絵理のようにレベルを上げ、さらに今年の新入生がより高いレベルで入部した事で、空手部は下級生ほど強いという逆転状態に陥った。

そして決定的だったのは、新入生の一人がレベル四まで上げており、レベルに裏付けされた自信で、上下社会を無視するように友達感覚で上級生に接し続けた事だった。

穏便に言い含めても言う事を聞かない一年生に対して上級生達は、空手家らしく実力を示して威厳を保つ結論に達した。

しかし全国常連で部内最強だった一郎が負けた事で、逆に調子に乗らせてしまい、それまで辛うじて保っていた秩序の崩壊を招いた。それからの空手部はレベル至上主義となり、上級生が下級生に妥協を強いられるようになった。

それを嫌がった四年生は続々と引退し、前期が終わって就職活動の準備名目を得た三年生達も一斉に引退したそう。後は勝手にし

てくれと言つ話である。

目的が『一年生部員の態度を改めさせる』で、結果が『レベル至上主義になり、三丁四年生は引退』である以上、現政府のように目も当てられない大失態だ。

諦観して身を引いた兄に対し、次郎は掛ける言葉を持たなかった。五歳から一六年ほど空手を続けてきた兄の努力は、たった四レベル差に劣るらしい。

四レベルあれば、文化部の学生が様々な競技で県大会に入賞できるほどの力を得られる。技術は伴わないが、ボーナスポイントを敏捷に振れば高速で技を繰り出せるし、力に振れば破壊力が倍加するので、技術差も簡単に覆せる。

オリンピックメダリストであつた母のコネをフル活用した英才教育を受けても、レベルの前には形無しだ。これでは馬鹿馬鹿しくなつて引退するのも、致し方が無いだろう。

身に付けた技術や経験は残るので、努力は無駄では無いが。

「でも兄貴、そもそも空手協会がレベルの有無に関係なく同じ試合に出している事自体が、おかしいんじゃないかな」

「どういう事だ」

「最近の世界大会だと、レベルが禁止になっているところもあるんだろ」

日本中に魔物が氾濫し始めて暫く、世界中が日本に赴いてレベルを上げた自国民に要請して、様々な研究機関でレベルを多角的視野で調べるようになった。

その結果、レベルを獲得した人間の身体が、質量は持つが光学的に観測できない何かで補われているらしいとする発表が行われた。

最初の発表から暫くすると、各国でも観測できないエネルギーを確認している。

身体から切り離すとエネルギーが失われるため、細胞を採取して調べていた各国は当初発見できなかったが、そんなはずは無いと生きた人間そのものを調べた研究者がようやく見つけ出した。

エネルギーが何なのか、人体にどう作用するのかは、未だよく分かっていない。

但しレベルを持っていても受精は正常に行われ、生まれた子供も普通の人間だったため、レベル獲得の機会があればそれを躊躇う人はあまり居ない。

だが国際社会においては、レベルを持っている選手の世界大会出場はアンフェアだとして禁止される流れが出来つつある。

強い日本人選手はレベルの有無を調べられ、レベルを持っていた場合は参加できなくなるケースも出始めている。

「日本はその辺の対応が遅いからな」
「成程」

一郎の力強い断言に、次郎は大いに納得した。

日本の子供は世界に比べればレベルを上げる機会に恵まれており、体育系で派手に活躍している日本の子供には、親などが協力してレベルを持たせたと考えられる者が少なからず居ると考えられる。

それに対してどうするのか、日本の殆どのスポーツ協会では結論が出せていない。

「そういえば兄貴って、今テレビで流行っているカマキリ以降の魔物とかには、武器とかあれば勝てるの。例えばクロオオアリとかさ」

次郎はこの機会に、ずっと聞いてみたかったことを思い切って口にしてみた。

チュートリアルダンジョンと初級ダンジョンでは魔物のサイズや

形状、強さなどが異なるため、当時理解していた魔物の強さは現状で意味を成さない。

チュートリアルでレベルを○から一に上げた頃には次郎も美也も激しい痛みを感じたのに、初級では殆ど指摘がない点でも、変えられた印象は強い。

では現状のカマキリ魔物以降の強さに対し、一郎がどれだけ対抗できるのか。

果たして一郎の評価は、非常に厳しかった。

「良いか次郎、昆虫が強さを維持したまま大型犬サイズになった場合、クロオオアリは六トントラックを車両ごと持ち上げられるそうだ。人間は六トントラックを持ち上げられるか？」

「それは無理だね」

「その通りだ。人類最強が持ち上げられる重量は、六〇〇kg程度だ。しかもクロオオアリは巢まで運ぶが、人類最強は一〇分の一を一時的に持ち上げるだけで大記録樹立だ。比べるのも馬鹿らしい」
「成程」

次郎のイメージでは、巨大クロオオアリは単体ではあまり強そうには思えなかった。

しかし、一トン程度の軽トラックは簡単に持ち上げられるだろうし、二トントラックを持ち上げるイメージもすぐに湧く。持ち上げる物の大きさやバランスが適切であれば、六トンも不可能では無いのかも知れない。

六トントラックで正面から突撃しても、耐えて反撃してきそうな印象もある。

確かに巨大クロオオアリの力は、レベルを持たない人間からは隔絶していた。

「それよりも、まずは空を飛ぶカマキリだ。カマキリの鎌は人間サ

イズなら三トンの力があるそうだ。獲物に対する攻撃速度は〇・〇五秒。瞬きの四倍速い。お前は避けられるか？」

「絶対に不可能」

「そうだろう。そして俺も人間だ」

カマキリはレベル〇相当の魔物で、レベル〇の人間がボーナスポイントを攻撃や速度に振れば、互角程度に戦える相手だと思われる。

しかし全国大会常連だった一郎の話を聞いて、レベルが無ければどうやっても対抗できない相手だったと思い直さざるを得なかった。次郎はチュートリアル時代の感覚が抜けきっていなかったらしい。チュートリアルダンジョン探索時、カマキリはそれほど強くなかった。

その時点で次郎たちのレベルが二〇台だった為に、常人としての判断は不可能だが、非常に大雑把で良ければ今の三分の一から五分の一程度の強さだったように感じられる。

道理でチュートリアルダンジョン時、レベル上げが上げ易かったわけだ。

「その次のオニヤンマも、クロオオアリを挟んだシオヤアブも、率先して人間を喰らうらしい。勝つどころか、逃げられる人間も居ないだろう。年末には、ドームがある都道府県から、多階層円柱に変わった都府県に集団疎開が始まるぞ」

「あー、そうかも」

「俺には、そんな魔物の巣窟で自衛隊が月一ペースで攻略できている事が信じられないくらいだ」

「てかさ、そんな魔物が出たら日本ヤバくね？」

「だからこそ、ダンジョン隠しをしていた労働党が叩かれているのだろう。良いか次郎、自衛隊には就職するなよ。死ぬからな」

世間との認識のズレを幾許か埋めた次郎は、逆に疑問を感じた。現状に至ってすらダンジョン入り口を破壊してでもレベルを上げようと出来ない、全く以てお行儀の宜しい日本人は、一体何なのかと。

山中県ほど極端では無いにしろ、日本では欧米に比べて村社会の思想が根強いと次郎は考えている。前科が付けば制度的にはいくつかの免許取得の欠格事由になるし、周囲からも色眼鏡で見られるようになる。

警察と自衛隊を従えている政府・労働党に反抗して逮捕される事を恐れ、誰かが代わりに怒ってくれるのを待っていたのだとすれば、その代弁者になっている共和党が支持を集めるのも当然だった。

39話 アルバイト達成

転移能力を活用し、圧倒的なレベルと力で押し進んだ二人組は、井口豊に約束したとおり、八月一日には予定より一日早く地下一五階の最奥手前まで到達した。

既にレベル六〇台後半の二人にとって、最大でもレベル一五という初級ダンジョンの魔物たちは、足元に生える雑草にも等しい存在だった。

仮に適正レベルがあるのだとすれば、二人は既に初級ダンジョンどころか、次の段階である山中県が多階層円柱も遙かに越えている。初級ダンジョンの魔物が障害にならないのは、レベル三四に至った綾香にも言えることで、流石に雑草とまでは豪語できないが、戦闘では無く蹂躪になるくらいの戦力差はある。

翌一二日より綾香を加えた一行は、二階と三階を繋ぐ階層間の周辺、四階と五階を繋ぐ階層間の周辺探索という形で、綾香の踏破エリアを広げ始めた。

最初に二階側を、魔物を倒させながら真っ直ぐに突き進んでいく。その後は魔物の死骸を辿って下階層へと下る坂道まで逆走し、三階に降りて魔物を倒しまくりながら行けるところまで行く。

初対面では毅然としたお嬢様風だった綾香も、流石に行程が厳しすぎたのか、不健康そうな土色の肌と、糞れた表情に変わっていた。

綾香の祖父や父は、この件に関して明確な意思を示している。

だが攻略特典を取らせる事にはリスクも伴う事を、井口家が理解できないはずが無い。

綾香の母などは反対しなかったのかと考えた次郎が迂遠に問うと、

疲弊の色が見える綾香は目を据わらせたまま、大丈夫だと請け負った。

「いずれ父は、祖父の地盤を受け継いで国会議員になる予定です。その時に受け継げる物が増えるのであれば、母は率先して支援します」

「つまり嫁ぎ先の生活のためって事か」

「いいえ、典型的な政治家の妻だからでしょう。私には二人の弟が居ますが、どちらかは父の後を継ぐでしょうし、私が何処かに嫁ぐ時も、井口家のためになる相手が選ばれます。母には反対する理由がありません」

超上流階級の発想には着いていけないと呆れた次郎は、そういえば祖父にも妾が居たのだったと思い出す。

祖父が次郎を祭りに連れ歩いた時に、一度だけその家に寄ったのを見た事がある。

その時は、なぜ祖父が他人の家の鍵を持っていて、堂々と玄関を開けて中に入るのかと不思議がったのだが、事実を知ってさらなる衝撃を受けた。

ちなみにその家は、祖父名義であつた。

次郎の実家ですら祖父世代までならば実例があるため、その考え方が全く理解できないわけではない。

井口家ほど権力や財力で固められた家になると、今でもそのような風習が残っているのかもしれないと思い直した。

「でも嫁ぎ先か。転移能力まで獲得する綾香を、井口家が手放すかなあ」

「私に対して、やり過ぎたと思いますか」

「……………ああ。まあ一応、少しは」

綾香の安全のためにレベル上げを依頼したのは、祖父の井口豊である。

だが請け負った次郎も、特典獲得者に対する扱いの保険や、共和党の検証作業で自分と呼ばせないために、綾香に転移能力を獲得させる提案を行った。

次郎は自身や美也の事情を最優先しており、能力を得られる綾香にも損は無いだろうと考えて綾香の意志は最初から問わなかったが、改めて考えると綾香の人生に多大な影響を及ぼしている。

そんな次郎の考えを、綾香は否定しなかった。

「祖父達が転移能力者を手元に欲するのは、検証のためと、労働党に対抗するためです。次の選挙で労働党の議席を奪って政権を奪還し、警察や自衛隊の転移能力者を差配できるようにすれば、比重は軽くなると思いますか」

「……………が？」

「私の役割がゼロにはならないでしょう。嫁ぎ先は広瀬家が、井口家より立場が下で私を呼び易い家になるかもしれません。既に社会人の広瀬家のご子息とは歳が離れ過ぎておりますし、全く好みでもありませんか」

「本人の意志は？」

「嫁ぎ先として相手方の立場や財力が問われるのは、一般的ではありませんか」

「いやいやいや」

「全然違うと思うよ」

世間とはズレた発言に、一般人の二人から総突っ込みが入った。

次郎は、そんな時代では無いと否定する。

黙っていた美也としても、兄の恭也が最優先されて、妹の自分に対する扱いが酷かった事を肯定するような発言には苦情を入れざる

を得ない。

断固否定派の二人組に対し、お嬢様は懐疑的な表情で首を傾げた。

「そうでしょうか」

「嫌な相手だったら逃げれば良い。転移能力を取得すれば、いつでも逃げられる」

「そもそも逃げ先がありませんよ」

最初に言い切った綾香は、不意に押し黙った後、真面目な口調で自身の発言を否定した。

「いえ、一つだけ実家から身を隠せる可能性がありましたね。私に転移能力を持たせる提案をされて、少しでも気にしておられるのでしたら、私が逃げなくなった時にご支援下さい」

次郎は即答せずに少し考えを巡らせ、自分の可能な範囲を口にする。

「……………攻略特典で報酬が入ったら、逃亡資金とかは手助けしてやる」

「ありがとうございます」

誠実にお礼を述べる姿を見た美也も、流石に文句は付けなかった。次郎が綾香に特典を持たせようとした行動には、美也の承認もある。

自分より年下の過失の無い少女が、自分たちのせいで犠牲になるというのは、流石に良心に咎めなくてもなかった。どちらかと言えば、次郎の良心に咎めた事を美也が気にしたのであったが。

その穴を埋めるために報酬が一部目減りしても、美也は構わないと考える。

そもそもお金が欲しいなら、何かしらの情報を井口家に持つていき、対価としてささやかな額を要求すれば良いだけなのだ。

だが次の発言が、虎の尾を踏んだ。

「むしろ太郎さんが候補者になって下さるという手もありますね。私より能力をお持ちですし、祖父や父を簡単に説得できると思います。私も大丈夫ですよ」

途端に口籠もった次郎の代わりに、隣から美也の声が飛んでくる。

「へえ。太郎くん、モテるんだね」

「いやいやいや。さあ、女郎蜘蛛の親玉を倒しに行こうか」

冷や汗を掻きながら逃げ出した原始人を追い、虎とお嬢様が歩み出した。

相対的に魔物が弱すぎるため、以降はお嬢様の発言を気にしながら進んだダンジョン攻略となった。

唯一の懸念材料だった機動隊チームは最後まで姿を現わず、代わりに広島県が攻略されてニュースに取り上げられた。

七月に大場総理の地元である宮城県、八月に高瀬総務大臣の地元である広島県、現在の労働党にとっては、国民の怒りを買うという点で最悪の結果である。

その次は、本来決まっていたが後回しにされた愛知県と千葉県が順に攻略されると発表されている。予定では九月から一〇月にかけてだろう。急げば九月中だろうか。

だが野党第一党の改革党勢力が根強い愛知県と、野党第三党の新生党勢力が根強い千葉県を相次いで攻略対象としても、元々決まっていた県を労働党の私利私欲で後回しにしただけで、むしろ遅いと言われる。

さらに野党の分断を図ろうとしていると批判されている現状では、火に油を注ぐだけとなる。

九月頃に愛知県と千葉県を攻略した後は、人口順でようやく北海道となる予定だ。

そこを次郎たちが、勝手に攻略してしまうわけである。

政府は謎の集団に対して「勝手に攻略するな」と言えるだろうか。そんな事を言えば国民から「攻略するなとは何事だ」とお叱りがあるに違いない。

次郎としては、攻略して政府が責められても苦笑いするしか無いのだが。

むしろ攻略云々よりも、一月に向けて自衛隊や機動隊のレベル上げを加速させるべきだと次郎は考える。

一八歳以上の人間はレベル上げに要する魔物の数が次第に多くなり、二〇歳を超えれば数十倍、二十代後半には一〇〇倍以上と知られている。

だが仮に一九歳で二〇倍なのとしても、コウモリを計二〇匹狩ればレベル一、総計一〇〇匹でレベル二、総計三四〇匹でレベル三、総計七〇〇匹でレベル四、総計一二四〇匹でレベル五、総計二〇六〇匹でレベル六に上がる。

一九歳の隊員だけに資源を集中して一日二〇匹狩らせれば、レベル六くらいなら一〇〇日くらいで到達できるし、カマキリ出現の翌年一月四日に未だ間に合うのだ。

レベル六の隊員を一万人以上増やせば、レベル一〇の三万匹のカマキリの一割くらいは倒せるかもしれない。

もちろん次郎が知らないだけで実行中かもしれないし、それをやっても突入させた隊員は全滅するのだが。

一〇%台まで落ちた内閣支持率を気にする政府は、既に何を行っても批判されて、二進も三進もいかない状態だ。

七月に広瀬秀久が国会で暴露してから、未だ一カ月ほど。

暴露した時点で、既に積んでいた。

仮に警察や自衛隊のレベルを上げてカマキリ対策を採ると言えば、間に合うのかという批判が起こり、ダンジョンを解放して国民にも自衛手段を持たせると抗議活動が起こり、警察や自衛隊が得た力で高瀬総務大臣の孫だけではなく国民も治療しろと批判される。

なにしろ都道府県警を所管する総務省の総務大臣が、治癒魔法を自分の孫に私的に利用していたと週刊文秋にすっぱ抜かれたのだ。何を言っても批判されるのは目に見えている。

政府が混乱しているおかげで、次郎たちはスムーズにボス部屋まで辿り着けた。

ボス部屋でのボスの映像が欲しいと依頼されており、普段に増して念入りに変装しているが、その辺はご愛敬である。映像に関しては、編集してから渡す予定だ。

初級ダンジョンのボス部屋にあたる場所は、大雑把に直径一km、短径五〇〇m、高さ二〇mくらいの楕円形で、古代の闘技場のような空間になっている。

奴隷剣士の代わりに石槍を持つ男一人と魔法使いの女二人が現われて、闘技場の入り口が閉じられると同時に黒い渦が二つ、床から天井に向かって渦巻き出した。

「まずは俺がボスを一匹倒す。花子は雑魚の掃討。綾香は俺が取り押さえる二匹目のトドメを刺せ」

次郎は派手な演出の渦から、獅子ではなく軽トラックほどの大きさの女郎蜘蛛が出てくる前に槍を構えて、一気に走り出した。すると黒い渦が即座に消滅し、二体の巨大女郎蜘蛛が姿を現わした。

女郎蜘蛛は出現と同時に多脚を忙しく動かし、目にも止まらぬ速

さで次郎に向かって迫ってくる。

「グロい、キモい、ヤバイ」

次郎は石槍を振り被ると、カシヤカシヤと蠢く牙に矛先を流星の如く叩き付け、流れる勢いで引き戻しては、何度も隕石の衝突を浴びせ掛けた。

出現した時点では、クモ最大のアドバンテージである巣を張っていないため、両者の戦いは、単なる力と速度のぶつけ合いとなる。

レベル七〇近い次郎と、レベル三〇の女郎蜘蛛が正面から対峙した結果、一匹目の女郎蜘蛛は殆ど為す術も無く叩き潰された。

だがその間に二匹目のより大きな女郎蜘蛛が、尻の方にある出糸突起から粘着性の糸の塊を生み出して前脚で振り掛けてきた。

「ぶわはっ!？」

面攻撃と点攻撃を織り交ぜた粘着性の糸が、側面から次郎の全身に纏わり付いてくる。

次郎は、溜まらず全身と槍に火魔法を帯びさせて、纏わり付いてきた糸を必死に焼き払い、同時に土魔法で巨石を生み出して力尽くで投げ飛ばした。

「アホかアホかアホかつ」

美也の方は、周囲から湧き出しては迫ってくる雑魚の女郎蜘蛛を圧殺している。

同時に雑魚蜘蛛たちを観察していた美也は、ある事が脳裏を過ぎった。

雑魚蜘蛛の出現数は、以前に比べて五分の三ほどだ。

これは次郎たちが機動隊員三名と共に入った五人と、現在綾香と

共に入っている三人との差に連動している。

「ボス部屋って、人間の数で女郎蜘蛛の総数が変化するのもかも」

美也の予想を聞いた次郎は、自衛隊が人数で攻め込んでも勝てない理由が一つ腑に落ちた。

美也が観察している間に、次郎は石槍の先端をハンマーのように作り替え、柄の部分も大きく伸ばして、金槌で釘を打ちように二体目のボスの全身を何度も叩き付けていった。

脚がいくつも外れ、胴体が潰れ、それでも巨大女郎蜘蛛は忙しく大顎を動かし続けた。

対して圧倒的なレベルと速度で素早く背後に回り込んだ次郎は、ハンマーで出系突起を叩き潰し、最大の脅威である糸を一切出せなくする。

「綾香、炎」

横合いから光が迸り、二体目の女郎蜘蛛の傷口に流れ込む。

直後、女郎蜘蛛の体内から膨れ上がった魔力が燃え上がり、赤い火炎と真っ黒い煙を立ち上らせながら全身を焼き上げた。

そんな火達磨の女郎蜘蛛に、容赦なくハンマーが振り下ろされる。ハンマーの振り下ろしは、床から雑魚の大蜘蛛が湧き出て来なくなるまで、容赦なく徹底的に続けられた。

やがて黒い床面が灰色に変じて、大蜘蛛の無限沸きが停止する事で、高レベル者のボスに対する一方的な蹂躪に幕が下りた。

ボスを倒した後、次郎は暫く待った。

だが白い背景と黒い文字は、一向に出てこない。

「駄目みたいだ。同じ難易度での特典追加や、評価の更新は無いら

しい」

「うん、わたしも駄目みたい」

どうやら次郎と美也は、初級ダンジョンの評価がAで固定されてしまったらしい。

初攻略時、機動隊に追い回されて攻略エリアが中途半端になった挙げ句、ボス部屋に割って入られた事が、今更ながら大きく悔やまれた。

だが『同じ難易度のダンジョン攻略特典は、重複や更新が出来ない』と分かり、現在政府が行っている攻略が難航している理由にも察しが付いてきた。

- ・ 大人ほどレベルが上がり難い
- ・ 同じ難易度では、攻略特典の重複取得や評価の更新が出来ない
- ・ ボス部屋への突入人数に比例して、レベル一五の女郎蜘蛛が増える

すなわち、能力加算を取ってから再挑戦して評価を上げ直したり、特典の所持数自体を増やしたりする事は出来ない。

またザコが人数に比例して出るため、ボス部屋に人員を詰め込んで、特典所持者を量産する事も出来ない。

しかも検証数は少ないが、攻略人数が増えると評価が下がる怖れもある。

次郎たちの場合は、二人でS評価、五人でA評価だった。

チュートリアル時代であろうと、機動隊や自衛隊の突入部隊が一〇名以下だったと言う事は考え難い。Sで能力加算+二四、Aで能力加算+一二なのであれば、Bならば六、Cで三程度の可能性もある。

従ってボスが攻略できるのは、チュートリアル時代に隠蔽しながら運用していた本当の精鋭だけで、政府が幾ら焦っても即席チーム

は増やせないという事になる。

精鋭と言っても、次郎を追い回していた昨年の段階で、レベル一〇を越えていた集団が最大でも一個小隊三〇余名程度だったため、一年後の今でも個々はレベル二〇に届かず、能力加算Bくらいが関の山だと思われる。

しかも最前列に配置されていた最精鋭三人は、次郎が削った。加えて女郎蜘蛛たちとの相次ぐ戦いで、目減りした可能性すらある。多分レベルの極端に高い隊員がいるか、相応の武器や戦術があるから攻略が続けられているのだろうが、それでも政府が攻略に難儀している理由には概ね察しが付いてきた。

「それで、肝心の綾香の評価は何だった」

「総合評価Aでした。変装し直してから取得して、ダンジョン入り口に跳ばされたら、もう一度入り直すのですよね」

「Aだったのか……」

二回目の初級ダンジョン攻略による流入情報の過多からオーバーヒートを起こした次郎は、そちらの解析を後回しにして、報酬金額だけをざっと計算した。

転移能力Aが取れば、報酬は一億円だ。

それに各種ビデオ映像の報酬一〇〇〇万円と、綾香のさらに引き上げられたレベル三六に基づく報酬一〇八〇万円を合せれば、報酬総額は一億二〇八〇万円に上る。

それを二人で山分けすれば六〇四〇万円となり、大学生活は豪遊が決定した。

「まあいつか。それじゃあエセ機動隊員に変装し直して」

次郎は金額について、呆気なく割り切った。

元々報酬額は、獲得される特典が何であろうと困らない設定にし

ていたのだ。

「分かりました。夏休み中は色々大変でしたが、逃げ先をお約束頂けて感謝しています。太郎さんも花子さんも、今後もしっかりお願い致します」

「程々で、お手柔らかに頼む」

「わたしは機会があつたらね」

三人は再変装を済ませると、綾香が攻略特典を取得して、北海道に政府の予想外となる多階層円柱を生み出した。

そして生まれ変わった北海道の新ダンジョン内に入って暫く進んでから転移登録を済ませると、用は済んだとばかりに井口邸へと舞い戻った。

なお帰宅した彼らがテレビを付けた頃、突然形状を変えた北海道ダンジョンをテレビが生中継しており、大混乱した世間は何回目かのひっくり返りを起こしていた。

40話 水族館から

二〇四五年八月二三日。

薄い水色のキャンパスに、綿飴のような積雲が疎らに流れている。そんな程良い晴れ具合の天空を見上げて、ふと気付く。

地球に無数の青が存在する中で、飲み込まれそうな程に深く、濃く、それでいて美しい青は、空には無いのだと。

次郎が知った最も美しい青は、海だった。

そんな美しい青を背景に、手前のプールから六頭のイルカが一斉に飛び上がってくる。

直上に踊り上がったイルカたちは、まるでワルツを踊るように一斉に身体を回転させると、白い水飛沫を撒き散らしながら水面下へ飲み込まれていった。

拍手が打ち鳴らされ、子ども達の歓声が沸き上がる。

もちろん隣に居る美也も、喜んで拍手をしていた。

「凄いね次郎くん、さっきと逆回転だったよ」

「ああ、しかも三頭ずつで交差していたな」

イルカショーを行っている屋外会場は、水曜日にも拘わらず盛況だった。

流石は夏休みと言うべきか、周囲には親子連れを中心に五〇人くらいの人がいる。

これが多いと言うことに都会人は違和感を覚えるかも知れないが、二人が訪れたのは、山中県よりはマシだが人口下位の都道府県だ。しかも四方を海に囲まれた島にある水族館であり、電車で来るこ

とは出来ない。

島には二つの大橋が架かっており、最寄りの駅から出ているバスで三〇分ほど掛ければ来ることが出来る。

もしも日本にゾンビが大量に現われたら、この二つの大橋を破壊すれば当面の安全を確保できる。

約四七平方キロの面積に対して、人口は約二、〇〇〇人。人口密度が一平方キロ辺り四二人と、全都道府県で最も低い北海道すら下回る。

そんな島の約六割が森で、三割が水田と畑と果樹園、残る一割が住宅とゴルフ場とキャンプ場と養豚場という、文明を江戸時代まで戻せば自給自足で何万年でも暮らせそうな環境が揃っている。

もしもゾンビが日本で大規模発生する兆候を掴んだら、とりあえず住宅でも買っておくと良い。

二階建て七Ｋで四〇坪ほどの家が、約一〇〇万円で売っているのでお買い得だ。但し最寄り駅から約六km、築一〇〇年ほど経っているのを気にしなければだが。

そんな凄まじい島に水族館が建てられた理由は知る由も無いが、四方が海に囲まれているため、島の漁師から魚が貰い放題な点はメリットと言えるだろうか。

ここまで転移で来られれば楽だったのだが、直接現地に跳ぶのは駄目だと言われて山中駅付近までしか跳べず、そこから到着までに三時間近くも費やした。

そんな辺境の水族館であるから、都会に比べて人口密度が凄まじく低い。

おかげで二人は、水飛沫が掛かる最前列に陣取ることが出来た。

「あー、濡れちゃったよ」

美也は少し残念そうに、下ろし立ての洋服を見下ろした。

確かにチューリップ柄のコクーンミニスカートも、オフホワイトのレース切替オフシヨルトツプスも、イルカたちが撒き散らした水飛沫で少し濡れている。

ふと風魔法で障壁を張るか、火魔法で乾かせば良いのと思った次郎だったが、今日は基本的に能力禁止令が出ている。代わりにハンカチを取り出して、濡れたスカートの裾に当てた。

「ありがとう」

美也も手提げからハンカチを取り出して水滴を拭い始めた。

シヨーはクライマックスだったらしく、会場のアナウンスがシヨーの終わりを告げる。周囲の人々はガヤガヤと騒ぎながらも食堂街やペンギン館、本館の方へ移動を始めた。

「私たちはどうしようか？」

すこぶる機嫌の良い美也は、スツと右手を伸ばして次郎の左手を握ってきた。

だが、実のところは薄氷の上の機嫌の良さだ。

残る夏休みは、今までに溜まっていた負債を返済する精算日であり、決して気の抜けない次郎に課せられた任務なのだ。ここで「なんだかデートっぽいな」などと口走ろうものなら、一瞬でプールに突き落とされる自信がある

今週のノルマにある動物園にもペンギンが居るため、ペンギン館はあまり良くない。

本館にはジンベイザメやアザラシ、暗闇の中で照らし出される謎の各種クラゲ類、回遊するイワシや沢山の種類の魚たちがいるため、今から行くが遅くなって機嫌を損ねる。

お土産コーナーなどは、当然最後だ。

次郎は、ダンジョン内ではるくに動かさない頭をフル回転させな

がら、次の目的地を提案した。

「じゃあ、食堂街で食事にするか」

左手を軽く引きながら彼女を立ち上がらせると、次郎は人々の流れの最後尾に加わった。

青空の下、青いコンクリートにアザラシやカワウソのイラストが描かれた道を暫く歩くと、やがて古風な長屋敷の食事処が見えてくる。手前にはのぼり旗が大量に立てられており、コーヒー、アイスクリーム、かき氷、そば処などと大きく書かれていた。

軽く見て回ると、定番の麺類やカレー系が多かった。

こういう簡単に作れて、外れの無いメニューは、商業地では欠かせないのだろう。

臨海地らしくワカメラーメンのワカメは凄い量で、微妙にお得感がある。中には邪道のカレーラーメンなるものまで存在したが、ラーメンにカレーを掛けるだけなので手間は変わらない。

もちろん海ならではの海鮮丼定食や刺身定食、エビフライ定食などもあつて、プラス料金でホットコーヒーやアイスクリームなどを付けることも出来るようだった。

二人は定食系の食事処に入って、海鮮系を頂くことにした。

次郎は店頭のショーケースに並んでいたエビフライ定食のコーヒー付き、美也は刺身定食を注文した。

お値段は二〇〇〇円前後だが、夏のアルバイトで六〇四〇万円ずつの報酬を受け取った二人はプチ貴族なのである。

「そういえばさ、海苔って日本人しか消化出来ないって聞いたけど」「うーん、そんなことは無いよ。かなり昔、科学誌ネイチャーに海藻の食物繊維を消化できる腸内細菌を持つ日本人が見つかって、北米人からは見つからなかったって載っただけ。全人種は調べて無いから、他にも居るかもね」

「へえ」

「それに腸内細菌を移せば、欧米人でも消化できるようになるよ」
「ほほお」

少し混んでいる雑談に興じていると、食事処のテレビが正午を告げた。

真面目そうなアナウンサーが、お昼のニュースを伝え始める。

最初は三日前に攻略された、北海道の巨大構造物についてだった。北海道は人口が全国八番目であるにも係わらず、労働党の支持基盤では無いという理由で後回しにされていたと疑われている。

そこへ謎の集団が、憲法第二五条に規定される生存権に基づき、自ら企画して北海道ダンジョンを攻略したというニュースだ。

昨日の朝七時、緊急の記者会見を開いた広瀬議員が公開した約五分の音声抜きの動画には、念入りに変装した少年が映っており、古代の闘技場のようなボス部屋に入ってから、ボスが倒れて黒い床面が灰色に変わるまでが収められていた。

槍を構えた男は当初格好良く飛び出して素早く雄蜘蛛を退治するが、側面から雌蜘蛛に糸を振り掛けられると大慌てで槍を形状変化させながら格闘を始める。

その間に床から次々と大蜘蛛が現われては、背後から飛び出す火魔法に焼き払われ、風魔法に寸断されていた。

映像を公開した共和党は、どうすればボスを倒して魔物の出現を止められるのかを全国民で考えるために匿名で投稿された映像を公開したとして、ボスの大きさや想定されるレベル、特徴などを説明していた。

映像を流すために暗くされていた会場は、物凄い数のフラッシュで昼間のように眩しく輝いていた。

光の嵐が幾らか落ち着いたら後、共和党本部員は説明した。

匿名の手紙には、政府が後回しにしたダンジョンから魔物が飛び出して自分や家族、友人達が襲われる事に耐え難く、思い悩んだ末に攻略した事が書かれていたと。

そんな撮影者が顔を隠さざるを得ないのは、政府の命令を受けた機動隊が撮影者たちを撃ち殺そうとするからで、政府の妨害によってダンジョン攻略が阻害され、多くの国民が死に瀕していると。

その日の記者会見はそれで終わったが、既に死に体だった現内閣は追い打ちを受けて更に支持率を落とした。もはや与党寄りの新聞社が調査してすら一〇%に届かないのでは無いかと予想されている。

昨日から引つ切りなしに流れ続けるニュースを聞き流した次郎は、収納能力から携帯端末を取り出して受信を行った。

すると三日後の土曜日に、井口豊と広瀬秀久が東京で会って聞きたい事がある旨のメールが届く。現政権の幕を下ろす算段が付いたが、その日で無ければ都合が付かないため、何とかお願いできないかと。

「美也、次の動物園デートだけど、二七日の日曜日でも良いか」
「確か、土曜日にしようかって言ってなかった」

咄嗟に天気などの嘘が思い浮かんだが、どうせバレると思って素直に携帯端末を差し出した。

「お土産、一杯買ってくるから」

「うーん」

「今日もお土産、ゆっくり見て回ろうか」

「うーん」

「そういや、隣市の新しいクレープ屋が凄い人気だってアリスが言っていたけど、今度二人で行って見ないか」

「その辺で手を打とうかな。それじゃアレクチャーするから、いく

つか覚える事」

「ういいうい」

次郎はホッと溜息を吐くと、了解する旨のメールを送り返す。
なお出張費として、美也のご機嫌を取るために五万円ほど要求するの忘れない。

次郎からのメールは井口家の三人と広瀬の所へ同時に届くようになっていたらしく、すぐに綾香の父で広瀬の秘書でもある井口和馬から反応が返ってきた。

出張費は五〇万円払うので、食事は済ませてくる事、帰宅時は転移で移動する事、絶対に身元が分からない変装をしてくる事、同席者の質問に少し答える事など様々な注意事項が丁寧に附記されている。

とりあえず何も見なかった事にして三時間ほどご奉仕を続けた結果、なんとか美也からお許しを頂くに至った。

土曜日の夕方七時過ぎ。

事前に東京でお土産を買い漁った次郎は、サングラスと二重のマスクにカッラ、ニット帽など怪しい出で立ちのオンパレードで井口和馬と合流し、彼の手配した黒塗りの重圧感溢れる高級車に乗り込んだ。

車は一〇分ほど走り続け、隅田川沿いに佇む高級料亭前で停車した。

そのまま車内で暫く待たされた後、ようやく降りるようになると指示される。始めて入る料亭の玄関で靴を脱いで収納空間に仕舞い込むと、廊下を無言で歩き出した。

すると直ぐに、料亭の敷居の高さが理解できてくる。

いくつか並んだ座敷部屋の内側には大きな池があり、しだれた木の枝が垂れ下がった先に、庭師が考え抜いたであろう大きな石が浮かび、その合間を一匹数百万円はするであろう錦鯉が何十匹も優雅に泳いでいた。

各部屋のふすまは、客同士は互いに顔が分らないように、上の方に薄い障子が張られている。その隙間から溢れる木の色合いを帯びた灯りは、暖かな温もりが感じられた。

そんな座敷の最奥、廊下すら別になっている部屋の前まで案内されると、同行していた井口和馬だけが控えの間に下がっていく。

仕方が無く次郎だけで座敷の奥部屋に入ると、既に井口党首と広瀬議員が待っていた。それだけではなく、次郎の父が好きな公共放送でよく見る顔が幾つも並んでいる。

コの字型になっている席の右手には、中央に井口豊、池側に広瀬秀久。

奥には、野党第一党である改革党の藤沢博文代表、第三党である新生党の麻倉道繁代表、第四党である共歩党の青山浩一代表。

左手側には、与党の非主流派である小林宗吉衆議院議員、連立与党である国民党の相山昌良代表がズラリと座していた。

此処に居る全員で動かせる議員は、衆議院の過半数を上回る。

主義主張の異なる彼らが、一同に会して食事をしている光景は、極めて異質だった。井口和馬が下がったのも道理だろう。この場に居る人間は、格が違いすぎる。

そんな彼らから一斉に視線を向けられた次郎は、一瞬だけギョツとしたものの、すぐに気を取り直して挨拶した。

「遅くなりました」

「まだ君の到着予定時刻には五分ほどあった。構わないから私の隣に座りたまえ」

「はい、では失礼します」

次郎は井口豊らが座っている右手の廊下側に座した。

「さて、始めようか。山田くん、まずは机を収納能力で消してくれるか」

次郎は無言で懷石料理が乗せられた机を消し去ってみせる。

「おお」

「本当に消えたな」

老人達が驚きの声を上げる中、次郎は机を改めて出した。

音すら立てずに現われた机は、まるで先ほど消えた事が夢だったかのように、乗せられていた懷石料理ごと寸分違わぬ状態を保っていた。

「転移能力は、彼が帰る時に見せて貰えます。では山田くん、少し先生方の疑問に答えてくれ。言えない事は言わなくて良い。個人情報などは特にな」

「分かりました」

老人達と称すには些か若い顔触れもあるが、いずれも老獪な政治家たちを見渡した次郎は、与党・労働党の小林議員と目が合った。

彼は大場総理よりも年長者で、労働党に確固たる地位を築く非主流派の大派閥長だ。

自身も閣僚歴任者であり、派閥には三八名の衆議院議員も属している。

「い質問をどうぞ」

偶々次郎が指名の形となり、小林議員が徐ろに口を開いた。

「ふむ。君がチュートリアルダンジョンを見つけた経緯を話して貰えるかな」

「私の家は田舎です。家の敷地内にチュートリアルダンジョンを発見したのが、三年以上前の二〇四二年五月四日でした。石が光って見えたので降り立つと、コウモリに襲われました。必死に抵抗して倒したところ、偶然石を拾ってレベルが上がり、内部がダンジョンであると理解しました」

「そこで届け出ようとは思わなかったのだね」

「ええ。私が発見する二年前から、政府は全国の数十カ所で見つかった『南海トラフを震源とする西日本大震災後に発生した地割れと地質の調査』を行い、発見者には届け出るようにと呼び掛けていました。しかし我が家のダンジョンは、地震による地割れではない事が明白でしたので、政府の呼び掛けの対象外だったというのが建前です」

「それでは本音は？」

「明らかに嘘を吐く相手を信用できませんでした。地主を一方的に閉め出して補償しない点もダメでしたね。それは憲法二十九条第三項違反です」

「経緯については結構。相山代表、何かありますか？」

小林議員は隣に座る連立与党・国民党の相山代表に襷たすきを渡した。

国民党は衆議院が三一議席で、政党としては四番目の大きさだが、与党と結びついて日本の政治に強い影響力を及ぼしている。

その一方で、状況次第では立ち位置を変えて与党ですら批判し、民意を繋ぎ止めて安定した支持層を得ている。

そんな政党を率いる相山は、色々ありますがと前置きした後、疑問を口にした。

「君たちは、中級と予想される多階層円柱のボスに勝てそうですね？」

「勝てると思っています。私達のレベルは言えませんが」

「もう一つ。君たちが未知のボス部屋に閉じ込められたときに背後から襲われて、致し方が無く正当防衛で反撃した機動隊員のドッグタグは、残っていますか？」

「……………私は色々な物を収集する癖があります。が、冬籠もりする栗鼠のように埋めたドングリの位置をよく忘れます」

「それでは状況が整えば、出てきますか」

「火の魔法は化学的な発火とは異なりますので、想像以上に全てが綺麗に残っているかもしれません。収納空間内は時すら止まりますので、色々な証拠を保存するには最適です」

「それでは藤沢さん、次の質問をどうぞ」

相山が話を切り上げると、井口党首が野党側に質問を振った。

野党第一党である改革党の藤沢は、この場に居る政治家の中で最も若い四五歳だ。

雑誌の表紙を飾れるような線の細い端正な顔立ちで、医者と弁護士士の資格を併せ持ち、両方の実務を経験した後に静岡県知事を一期勤めてから衆議院議員に二度当選する。

西日本大震災後の野党転落で改革党が苦境に見舞われた後、幹事長を務めて党を立て直し、昨年からは当時四四歳の若さで野党第一党の党首となった。エリートの代名詞のような人物である。

「質問が有り過ぎて困ります。ですが山田君、短期目標として、最優先課題の解決方法について君の考えを聞かせて下さい」
「どうぞ」

「四七都道府県の初級ダンジョンを最短で残らず攻略するには、どうすれば良いと思いますか。物理的に可能であれば、組織、制度、慣習、法律、予算、犠牲などは一切問いません」

次郎は鋭い剣を向けられたような感覚を覚え、硬い言葉で返した。

「先に前提ですが、ボスはレベル三〇くらいの巨大女郎蜘蛛二匹で固定され、その他にレベル一五の女郎蜘蛛が大量に沸きます。攻略するなら、それに勝てる戦力が必要です」

藤沢は無言のまま、次郎の話に頷きを返す。

「次に解決方法ですが、確実に勝てるチームを量産して各地へ同時に送り込みます。転移能力者は、護衛を付けてボス部屋前まで進ませてから戻らせて、部隊を一気に運搬させます。護衛には犠牲が出ても仕方ありません」

「肝心のチームは、どうやって増やしますか」

「多階層円柱のインプを、兵器で死なない程度に弱らせてから護衛付きでトドメを刺させます。選抜するのはなるべく若い隊員です。本当なら一八歳未満が最良です。居ないでしょうけど」

「それが、共和党協力者である山田君の答えですか？」

「そうですね」

「それでは、日本国内閣総理大臣の山田君なら、どうしますか」

突拍子も無い仮定をされた次郎は啞然とし、暫く間を置いてから自信なげに答えた。

「……………私は一般人ですので」

「おかしな事を聞きましたね。ありがとうございます。それでは麻倉代表、次をどうぞ」

藤沢が質問を終えると、新生党の麻倉が身を乗り出した。

新生党は、次郎から見て若干過激な愛国発言や献身発言が目立つ

野党だ。

国民から一定の支持は得ており、次郎の父は少し評価している。

「君は、かなり力を持っているようだね」

「いいえ、そんな事はありません。単なる未成年の一般人です」

「謙遜だな。アラブ首長国連邦などが日本に国際宇宙ステーションの共同開発を打診してきたが、転移能力者としてはどう思うかね」

「全く関わり合いの無い話です。税金で運用している機動隊や自衛隊の転移能力者に協力せよと政府が命じるなら、そちらは頑張ってくれるかもしれません」

「君は協力してくれないのかね」

「しませんよ。私たちの事は、機動隊に撃ち殺された亡霊だとも思ったださい。依頼するなら、あちらへどうぞ」

「実際には撃ち殺されていないだろう」

「機関銃で何千発も撃たれて、協力するわけが無いでしょう。日本では思想信条が自由なので、黙って言う事を聞く人もいるかも知れません。私は違いますが」

次郎は野党第四党である共歩党の青山に視線を向ける事で、質問者の交代を促した。

すると黙った麻倉に代わった青山は、直ぐに質問を投げるのではなく、周囲に語り掛けるように話し始めた。

「彼が協力を拒むのは当然ですよ。しかし共和党の皆さんは、よく彼の協力を得られましたね」

「縁がありました。それが無ければ、暫く表に出なかったかも知れません」

「そうですか。うちに来てくれても良かったのだけね。それで山田君は、日本がどうなると良いと思うかな」

共歩党の青山と広瀬の会話を聞いている間に苛立ちが収まった次郎は、質問にやや考え込んだ。

どうなると良いかと問われると、確かに魔物パニックは迷惑だと考える。強いと想っていた兄が怖れていたのが、強く印象に残っていた。

かといって、自分が高校を中退してまで手伝おうと言う気にはならない。

それは政府に投げっぱなしにされた杉山を見て育った事で、政府が個人の犠牲を完全には保証してくれないと学んだからだ。

ダンジョンから魔物が溢れないようになれば良いと思う。

しかし麻倉党首のように、国家への献身だとか奉仕だとかで、次郎個人が一方的な負担を強いられるのは断固拒否する。それなら他国に逃げた方がマシなのだ。

「魔物が外に出ない状態になると良いですね。但し、国家への献身だとか奉仕だとかで、私個人が過度の負担を強いられるのは断ります。憲法十八条には、『何人も、いかなる奴隷的拘束も受けない。又、犯罪に因る処罰の場合を除いては、その意に反する苦役に服させられない』と記されていますので」

「法律をよく勉強しているようだね。ところで、共和党などに自発的に協力している範囲は問題ないわけだね？」

「そうですね。まあ程々に」

「引き続き共和党さんと、よろしく頼みますね。彼との顔通しは、この辺で十分でしょう。確認は取れました」

青山の提案に、反対者は出なかった。

「では山田君、今日はご苦勞だった。転移で帰還して見せてくれたまえ」

「ええ、では失礼します」

立ち上がった次郎は、瞬きをする間に消え失せた。その場に座していた七人は、彼が消えてから数秒間だけ動きを止める。

その後、井口から苦情が出た。

「麻倉さん。国会では無いのですから、挑発して話を引き出そうとするのは止めて頂きたい」

「申し訳ない。どうやら反骨精神が強いようですね」

「それなければ、ここまで大事にはなりません。しかし彼が隠れたままだと、日本は壊滅でした。それで小林先生、どうされますか」

井口に問われた与党非主流派の首魁は、井口を正眼に見据え、やがて重々しく沈黙を破った。

「乗りましょう」

それは与党内に、三八議席の衆議院議員の造反者が誕生した瞬間だった。

大場号は沈没寸前の泥船であり、背後からは泥船を撃沈できる武器を満載した真新しい船が、わざわざ小林達の目の前まで来て手を差し伸べている。

ここで泥船と一緒に沈む選択肢は、小林には無かった。

彼らにとって決定打だったのは、問題の解決手段を持っているのが共和党だけだと確認出来たからであつたが。

「結構です。国民党さんは、どうされますか？」

「臨時国会に提出される内閣不信任決議には、国民党議員の全員が賛成に回るでしょう」

次いで、衆議院に三二の議席を持つ連立与党が見切りを付けた。

判断の理由は、概ね小林と同じである。

もはや大場政権の延命や蘇生が、日本にとってマイナスにしかないと理解したのだ。

「結構です。それでは予てよりのお約束通り、内閣不信任決議に賛成された先生方には対抗馬を擁立せずに残って頂き、大場の共犯者共は、全党で選挙協力して纏めて落ちて頂くということで」

「改革党としては、再び共和党さんと連立政権を組みたいと思います」

「是非お願いします」

改革党の藤沢が名乗りを上げたが、これは最終確認に過ぎない。

元々連立を組んでいた共和党と改革党は、水面下で新たに連立を組む算段を付けていた。どちらも一党単独では過半数を取るのは難しいと分かっていたのだ。

そして味方が増え、議席数が上積みできて、反対が少なくなるのであればなお有り難い。他の野党二党にも、事前に話は通してあった。

「他党の皆様方も、ご協力頂きたいですな。日本が無くなつては、政治云々ではありません」

「それならば、新生党も加わろう。外では無く、内側から推し進めなければ成るものも成らん。カマキリに喰われるなど、全く冗談では無い」

「共歩党も手を貸しましょう。大場政権を追い出した後は、争っている場合ではありません」

野党第三党と第四党も次々と旗色を明らかにした。

彼らが共和党と連立を組むメリットは、国民の支持率を向上させる事、政策決定のプロセスに関与できる事、確実に大臣を出せて閣

議決定で賛否を行える事、様々な集団から献金を受け取れる事など数多ある。

だが最終的には、現状で蚊帳の外に置かれたくないという思いが彼らを決断させた。

「我々は合流できないが、大場派は内側から解体していこう」

「国民党も、すぐに鞍替えは出来ませんね。ですが魔物対策法案では、協力しますよ」

与党側の小林と相山両者の意思を確認した井口は、もう一つの計画についても確認を行った。

「それでお二方とも、例の計画には乗って頂けますか」

「……………直ぐに選定を始めさせる」

「確かに全党でやらなければ、効果が薄れます。しかし、酷い作戦です」

「重々承知しております。ですが早々にカマキリを全て片付けるためには、他にやりようがありません。諸外国に口を出させる隙も与えられません」

「分かっている。選定できない者は省く」

「時代錯誤ですね。法案に賛成はしますが、発覚があと一年早ければと悔やまれます」

41話 波乱

高校二年生の二学期が始まり、僅か一日で再び休みに入った。

それは山中県の二学期が毎年九月から始まり、今年は一日が金曜日だったからだ。

夏休みの宿題を完全には終わらせていなかった勇者あるいは愚者は、ここぞとばかりに本気を出す。一組では、男子の三分の一と女子の五分の一がそれに該当した。

一組の生徒は七村高校で最優秀だったはずであり、次郎は高校そのもののレベルに自信が持てなくなってきた。

だが彼らの一部は、紛れもなく勇者だ。

なんと修学旅行で次郎と同じ班だった中川たち四人組は、修学旅行中にナンパした京都の女子高生達に、夏休みを活用してわざわざ会いに行ったのだ。

優勝は間違いなく奈部。数百キロの道のりを、自転車で往復した。極めて大きな衝撃を与えた彼の行動は、意中の相手どころか親御さんにまで気に入られ、そのまま一番可愛かった京都女子との付き合いが始まったそうだ。

そんな冒険をしていたら、確かに夏休みの宿題どころではないだろう。

話を聞いた男子は大騒ぎで、一組の勇者を高らかに称えた。担任のフナヤマンまで一緒になって彼を称えていたのは、実に印象深い光景だった。

それには遠く及ばないが、電車で会いに行った鳥内も敢闘賞だ。彼は修学旅行中にナンパして、その後は山中県から会いに行ったという物珍しさに後押しされ、先方で沢山の京都女子に紹介された

らしい。

その後はSNSをフル活用して、沢山の相手と同時にやり取りをしている。誰か特定の女子と付き合っている様子は無いが、親しい相手は何人も居るようだ。

そして中川は、次郎の見立てでは技能賞だろうか。

本人は自首しないが、どうやら京都女子と田舎女子に二股を掛けているようだ。

男の浪漫を実現するとは、実に羨まけしからん話である。

だがどちらにも内緒らしく、いつか地雷は爆発すると思われる。

そんな彼は、優者と愚者を兼ねている。

最後に北村には、殊勲賞を授与したい。

二組の塚原愛菜美と付き合っているにも係わらず、京都に赴いた行動には甚だ疑問を感じるが、その行動力だけは称えられるだろう。むしろ北村は、その部分しか称えるところが見つからない。そんな凄いが愚かな北村は、略して凄い愚者である。

このようにクラスメイトたちの多くは、夏休み中にそれぞれ様々な経験を積んでいた。

もちろん次郎たちが夏休みに得た成果も、決して彼らに劣るものではない。

とりわけ人生初のアルバイトに関しては、目標を立てて成果を出せたという点で、次郎に大いなる達成感と成功体験を与えた。

この際、転移能力と一億円が釣り合うのかといった疑問はナンセンスだ。

次郎の目的は『美也の大学生活六年分の全費用を稼ぐ事』で、その金額を滞りなく得られた以上、目標は達成しているのである。

従って目標金額を達成した後、改めて新規のアルバイトを提案された次郎は、即座に渋面を作ってみせた。

「新ダンジョンの攻略特典？」

「はい。以前と同じ報酬でいかがでしょう」

「綾香の自衛力は、もう充分に付いたんじゃないのか？」

芳しい反応を得られなかったためか、綾香は押し黙って困った表情になった。

「それ以前に、井口党首も広瀬議員も居ないのに、単独交渉なんて大丈夫なのか」

二〇四五年九月二日。

臨時国会を三日後に控えた北海道の井口邸には、井口豊も広瀬秀久も、広瀬議員の秘書を務める井口和馬も不在だった。

しかし疑問符を投げかけた次郎に対し、綾香は即座に太鼓判を押した。

「私は交渉人^{ネゴシエーター}ではなく、伝達者^{メッセンジャー}です。事前に指示を受けていますので問題ありません」

どうやら許可は得ているらしく、話は巻き戻った。

だが綾香の自衛力を求めた井口家が、それを獲得した綾香に新たな特典を求めるのは、一体何故なのか。次郎はその理由を推し量ってみた。

転移能力を得るならば、往復が目的だろう。

転移能力Aの二つ目を取得すれば、一日二回の転移で各所への往復が可能になる。

次郎の使い道を見ていれば、その可能性の幅広さに着目するのも無理は無い。

収納能力を得るならば、その力の確認が目的だろう。

収納能力Aを取れば、二〇フィットコンテナ分の異空間を自在に生み出せる。

用途は様々だろうが、使い方次第では転移より恐ろしい。

能力加算を得るならば、初級ボス退治が目的だろう。

能力加算Aを取れば、BPを一二追加できる。

レベル三六の綾香が獲得すれば、初級ダンジョンのボス二匹を同時に倒せる。

いずれの特典を取得しようとも、凄まじい価値が見出せる。

出資者が何れに重きを置くのかは分からないが、それを求めても違和感はない。

「ちなみに綾香は、次に何の特典を取ろうと思っているんだ」

「転移能力です」

「確かに汎用性は高いよな」

「はい。私自身は中高一貫校とはいえ学内受験もありますし、易々と転移を指示され続けても困りますが」

次郎は、綾香が転移を取得せざるを得ない理由をさらに想像してみた。

大前提として綾香が持ち込んだ依頼は、綾香個人の考えではなく、背後の大人達が色々と考えを巡らせた結果である。

大人達の目的は、充分な自衛力を備えた綾香をさらに強くしたいのではなく、アルバイトを終えて縁が切れつつある次郎たちを確実に繋ぎ止めたのではないだろうか。

次郎が井口豊の立場であれば、次郎たちを繋ぎ止めるべく手を尽くす。

つまり次郎たちと綾香を接触し続けさせ、交流を深めさせる。

同時に綾香のレベルを高めて転移を取らせておけば、転移能力的に足手まといでは無くなり、戦力的に有用となり、今後も次郎たちと同行させながら最新の情報を得ていく事が可能になる。

前例のないダンジョンの深部に潜る次郎たちは、ダンジョン内で自身の安全を確保しなければならない。もしも強力な仲間が手に入るのであれば、自分たちの生命と天秤に掛けて、自ずと綾香の同行を断り難くなっていく。

もちろん綾香以外を提示されれば、疑り深い次郎たちは絶対に受け入れる事は無い。

だからこそ、偶然で知り合った綾香が適任者として選ばれたのだと次郎は考えた。

「確かに俺は大場政権に不満があるから、追い落とすのには程々に協力するし、俺達への伝達者とやらを変えられても受け入れられないけどさ」

「それでは、何か問題があるのでしょうか」

次郎の懸念は、綾香個人ではなく背後の大人だ。

「そもそも俺は、平均より少ない苦勞で、平均より良い暮らしが送られて、理不尽な目に遭わない自衛力があれば良いんだ。あとは、趣味とか三大欲求とか」

「今のお話は、笑うところでしょうか」

疑いの眼差しを向けられた次郎は、弁明を試みた。

「楽をして、良い暮らしをしたいと望むのは、普通の事だろう。大場総理があのような有様だから、自衛手段も欲しい。それと俺は、お寺のお坊さんじゃなくて普通の男子高校生だし」

「予てより、自衛と普通の範囲は大きく逸脱して来られたようですが」

「それは俺の興味と、花子の方針だな」

「どういう事でしょうか？」

首を傾げた綾香に、次郎は細かい説明を加える。

「俺は、政府が隠すダンジョンとレベルに興味を持った。花子は、安全を最優先したから高レベルを確保して、保険として魔物撮影とか調査記録も行った」

「つまり太郎さんは、楽をして良い暮らしが出来て、安泰で、趣味のダンジョン攻略ができて、三大欲求が満たされればご満足ですか」
「概ね間違っていないけど、額くと後が恐そうだな。あと俺は、中学三年生になんてことを言わせているんだか」

「大丈夫ですよ。太郎さんのご希望は、概ね理解しました。それで改めてお伺いしますが、報酬額は幾らがよろしいですか」

会話が一巡りして、再び巻き戻った。

次郎は洪々と、綾香が持ち込んだ依頼内容を再検討する。

初級ダンジョンは、雑魚がレベル一五で、ボスがレベル三〇だった。

多階層円柱は、雑魚がレベル三五のため、ボスは最低五〇から最大七〇と予想される。

次郎と美也はレベル七〇だが、美也が攻略特典で＋一二の加算を得ているため、二人でならば最悪のケースでも勝てる。二人の得意技は、各個撃破。二人で同時に一匹を倒してしまえば、後は楽勝である。

だがレベル三六の綾香では、そんな激戦の場では相当危ういように思われる。そこで次郎は、冷静に事実を告げた。

「綾香の今のレベルだと、ボス部屋への同行はきつい。最低でもレベル四〇以上に上げて、魔物も全種類を一定数倒さないとあまり意味も無い。もう夏休みは終わっているから、夜に少しずつ活動を続けても一ヶ月くらい掛かる」

「方針に従いますので、お願い致します」

あまり協力する気になれなかった次郎は、さらに注意点を付け加えることにした。

「交渉人に確認を取ってくれ」

「何でしょうか」

「今回はボスの強さが分からないから、かなり危険だ。最大でレベル七〇の可能性がある。報酬は据え置きで良いけど、綾香の命の保証は出来ない。俺が優先するのは花子だ。ボスが想像以上に強ければ、本気で綾香を見捨てる」

「どれくらいの本気で言っておられますか」

「俺たちが危険だと判断したら、本当に見捨てる。その場合は無報酬で構わないし、井口家には二度と来ない。恨まれるだろうけど、仕方が無い。逆恨みだと割り切る」

「……………私は、非常に困るのですが」

「多少なりとも面倒は見だし、浅からぬ縁も出来た。だから死なせるのは忍びないと思って、事前に警告しているんだ」

「それでは何とかして頂けませんか」

「交渉人が取得させるのを諦めるか、俺達が山中県が多階層円柱を攻略して、ボスの強さを確認した後に北海道で挑むかな。それなら事前に強さが分かるから、危険も下がる。但し山中県が多階層円柱は一年くらい掛けて攻略したから、北海道の攻略にはとても付き合えないけど」

次郎は持ち込まれた依頼に対する自分の方針と、綾香が取り得る

選択肢を告げた。

すると綾香は、渋々と本音の方を語り始めた。

「太郎さんは、本当の意図を分かっているじゃないですかね」

「本当の意図って、何だ」

「私は太郎さんと井口家を結ぶ、繋ぎ役です」

「その部分が、俺たちの間に壁を作っているって、理解しているんだろ」

建前を捨てた綾香に対して、次郎も率直に回答した。

「……………それでは背後を省いて、個別交渉を致しましょう」

「確か交渉人じゃなくて、伝達者って自称しなかったか。というか個別交渉って何だよ」

「私が個人的に用意できるもので交渉しますので、祖父達に許可を得る必要はありません。そして個別交渉とは、太郎さん個人、花子さん個人と、それぞれ個別に交渉するという意味です」

「とりあえず話だけは聞くけどさ。綾香の人生だし、嫌なら背後の要求なんて断ってしまえば良いと思うぞ」

綾香は一旦口を閉ざし、サングラス越しの次郎の眼差しを真剣に見つめた。

とても冗談で混ぜ返せるような雰囲気では無く、次郎は自ずと居住まいを正し、綾香の話を聞く体勢に入り直した。

すると綾香は、一言一言を確認するようにゆっくりと話し始める。

「私には、私自身の判断と意志で、太郎さんを祖父たちに引き合わせた責任がございます。また祖父と父は計画から実行までに大きく携わり、祖母と母も協力致しました。政治的混乱によってダンジョン攻略が遅れ、より多くの方がカマキリに食べられる結末に至れば、

今回の告発が正しくとも、犠牲者の家族は私たち一族を決して許さないでしょう」

次郎は黙って頷いた。

「太郎さんのご協力を頂ければ、私達の一族は確実に、大場政権よりも遙かに少ない犠牲に抑える方法がございます。そして私は、太郎さんが望まれる札を持っております」

「花子は？」

「花子さんが確実に望まれる札も分かりますので、私が自分で手配致します」

「自己犠牲は好きじゃ無い。札を出す綾香自身はどうなるんだ」

「むしろ濡れ手に粟でしたので、自己選択致しました。きちんと詳細を詰めさせて頂きたいので、私の部屋までお越し下さい。仰られた壁は、一枚も挟みたく御座いませんので」

綾香の意志はとても強く、次郎は詳細を聞かざるを得なかった。

この日から二日後、綾香は次郎と美也との間で、個別交渉を成立させた。

二〇四五年九月五日から始まった秋の臨時国会は、波乱の幕開けとなった。

日本では昨年七月以降の奇数月四日に、ダンジョン未攻略の都道府県から、それぞれ一万匹ほどの魔物が出現している。

魔物の種類は毎回一種類ずつ増えており、総数の約一万匹から出てくる種類を割った数、各魔物の出現数になっている。

そして臨時国会の前日、新種のオオサンショウウオが、未攻略ダンジョン三五カ所の合計で推定四万匹も飛び出した。

オオサンショウウオは、クロコダイルよりも強く凶悪だった。

さらに水魔法を用いて自衛隊の砲撃に応戦し、少なくとも五〇〇〇匹以上が包囲網を突破して、周囲の河川や湖などの水場に逃げ込んだのだ。

これまでに出てきたチスイコウモリ、タマヤスデ、トノサマバツタ、イモリ、ナナホシ TENTOU、ヤモリ、コオロギの七種類は、それぞれ自衛隊の砲撃や、人々の創意工夫によって対処してきた。

しかし水中に潜ったオオサンショウウオは姿が見え難いため、発見が困難で、見つけても銃弾がろくに届かないために撃破が困難だ。レベルを上げようとする一般人の手にも、到底負えない。

すなわちダンジョンから出現する魔物に、日本は処理が追い付かなくなった。

二カ月後までに地上のオオサンショウウオを全て殲滅する事は不可能で、これからは魔物の数が上積みされていくと思われる。

その渦中に始まった秋の臨時国会で、内閣不信任案が提出された。大場内閣は、ダンジョン問題を隠し続ける事で国民から自衛の機会を奪い、国家の対策すらも遅らせて、国民の生命・財産を奪い続けている。これは日本国憲法に真っ向から反しており、国民の信任に全く値しない。

そのように不信任の理由が熟々と読み上げられた内閣不信任決議

案が採決に入ったのは、当日の午後の事だった。

大半の国民は、どうせ無理だろうと諦め気味だった。

そもそも与党・労働党だけで単独過半数となる二二三議席を確保しており、連立を組む国民党の三一議席と合わせれば、野党が全員賛同したところで不信任は可決されない。

そのため国会内で拍手の大洪水が沸き上がった時、国民の多くは驚愕と共に思わず立ち上がり、テレビを食い入るように見つめた。

衆議院四四五議席のうち、立ち上がった拍手をしている者は二五三名。

それは衆議院議員の過半数である二二三議席を大きく上回る。

テレビは呆然と佇む大場総理と、起立して周囲に深いお辞儀をしている広瀬衆議院議員を、交互に何度も映し続けた。

翌日、衆議院の解散が発表された。

これは内閣不信任決議が可決された場合、一〇日以内に衆議院を解散するか内閣総辞職をしなければならないと定められており、慣習として衆議院解散が行われてきたためだ。

そして発表直後、国民はさらなる衝撃を受けた。

広瀬議員が、大場総理の地元である宮城県からの立候補を表明したのだ。

今回の選挙戦は、『隠蔽派 対 公開派』、あるいは『大場総理 対 広瀬議員』の全面対決という、国民にとって非常に分かり易い構図となった。

42話 闘争

衆議院選挙の投票日は、二〇四五年一〇月八日の日曜日となった。日本の衆議院選挙は、小選挙区比例代表並立制だ。

衆議院全体で四四五議席のうち、小選挙区制で二八一席、比例代表制で一六四席を選ぶ方式になっている。

そのうち小選挙区制は、日本を二八一の選挙区に分けて、それぞれの選挙区で得票数が最も多い候補者を当選させる方式である。一番票の多い人が当選するやり方で、非常に単純で分かりやすいのではないだろうか。

一方で比例代表は、有権者が勝たせたい政党名を投票して、得票をドント式と呼ばれる計算式で各政党に議席として配分する方式である。衆議院は拘束名簿式で、各政党が届け出た名簿の上位から順に、割り当てられた席に座る当選者を決めていく。

野党四党、連立与党の国民党、与党・労働党の小林派は、全面的な選挙協力を表明して小選挙区での候補者調整を行い、基本的には現職をそのまま残す形で互いに推薦を出し合った。

一方で不信任案に賛成しなかった議員の小選挙区には残らず刺客を送り込んで、徹底的に落選させて議席を奪い尽くすべく、全組織の総力を結集した選挙戦を展開している。

小選挙区制では、住所がどこであろうと、好きな選挙区から立候補できる。

最大の注目を浴びているのは、大場総理の地元である宮城県第一区だ。

総理は、人口や被害度合を無視して宮城県のダンジョン攻略を優先させた実績があり、それが国家全体の利益を考えるべき総理としては言語道断であろうとも、恩恵を受けた県民からの支持はそれな

りに残っていた。

内閣支持率が過去最低値を更新したとはいえ、新人には分厚い壁である。

そんな宮城県第一区に、ダンジョンに関する全ての問題で先頭に立ち続けた広瀬議員が、自ら刺客として飛び込んでいったのだ。

広瀬議員には、選挙前から政府の隠ぺい追求や、膨大なダンジョン情報公開の実績があり、政権を取った後はダンジョン攻略の加速や、回復魔法の治験開始などを公約に掲げている。

奇しくも宮城県第一区は、今回の選挙の縮図となった。

国内外からは様々な団体・個人が広瀬議員の公約に期待を寄せ、選挙区外の人々は少しでも支援しようと、ボランティア運動員として続々と現地に入っていた。

またネットなどでも大場総理に対する様々な罵倒のフレーズを生み出して、広瀬議員に対義語などを添えて連呼した。

例を挙げるなら「隠蔽の大場、公開の広瀬」「殺戮の大場、救命の広瀬」「未成年殺しの大場、未成年保護の広瀬」などであり、大いしい日本人にしてはフレーズが過激なのは、それだけ国民の怒りが高まっているからだろう。

野党四党は、代表や幹事長が続々と広瀬議員の応援に駆け付けた。また連立与党の国民党や、同じ労働党の小林派からも応援が入って、与党支持者の票すらも割れて続々と広瀬議員側に流れ込んでいく。

いかに大場総理のお膝元であろうと、これではとても保たない。街頭アンケートで広瀬議員の圧勝を確信したメディアの関心は、どのくらいの差で勝つかに移っていった。

労働党では、小選挙区で落選した議員は党代表を降りなければならぬ。また日本では、小選挙区で得票率一〇%未満だった候補者は、比例で復活当選できない決まりがある。

従って広瀬議員が過半数を取れば、大場総理は労働党の代表辞任に追い込まれ、九〇%以上を集めれば、復活当選すら出来なくなる。

既に選挙戦は最終盤だが、広瀬陣営は膨大な運動員の支援を受けて、普段は投票を行わない有権者を次々と引き出しながら、現職総理を相手に有効投票数の約八割を固める勢いで攻め続けていた。

ここまで日本の政治を動かす井口・広瀬の両一族は、選挙権を持たない一七歳の男女が端から見ても筆舌に尽くし難かった。

しかし次郎が感じた一族の恐ろしさの最たるは、二歳年下の方だった。

「どうしてこうなった」

メッセンジャー
ネゴシエーター

伝達人から交渉者に衣替えしたと自称した綾香は、次郎と美也に對して、それぞれ受け取らざるを得ない手札を示した。

美也に對しては、次郎と美也の全ダンジョン探索活動に、法的な正当化を与える事だった。

あくまで大場政権から見てであるが、勝手にダンジョンに潜って機動隊と争った過去について、新政府では問題ないとお墨付きを与え、今後の探索活動も情報提供の見返りに認めて正当な探索協力者扱いにするというものだ。

これは共和党が政権を取れば、匿名で通す次郎たちの個別事情に合わせた都合の良い決まりを自由に作れる。

そうすれば大場政権時代と異なり、次郎たちの活動に政府の承認を得られ、追い回される理由が一切無くなる。また今後二人の正体が露見しても、何ら問題なくなる。

どのような手札を提示するのか聞かされた次郎は、確かに美也が欲するであろうし、それを対価に中級ダンジョン攻略の同行や命の最大限保証を求めるのであれば、美也は取引に応じるだろうと考えた。

そのような経緯で彼女達が二人きりで交渉する場を用意し、取引

が成立すれば自分に対する札が何であろうと、次郎は受け入れるつもりだった。

続く翌日の交渉では、次郎に対する札として綾香自身が用意された。

美也と綾香の話し合いの結果、色々な説明を省かれて転がり込んできた状況に、次郎は本気で困惑した。

綾香は、次郎たちと井口一族との連絡調整係として派遣された。

御用聞き、活動の法的なお墨付きの調整役……というのは、もちろん建前だ。

実態としては、なお強い結びつきの妾と言う事にしたようだ。

綾香が自主的に自分を差し出して、美也が正妻、綾香が妾という、次郎の想像を絶する結論である。

確かにそれが成立するのであれば、綾香に対する次郎の協力度合いは確実に上がる。

だが箱庭の中に入れば摘み出し、箱庭の周辺に小屋を作れば壊しに行く美也が、なぜ綾香が妾になる事に同意したのか次郎にはまったく理解できなかった。むしろ闇魔法で精神支配でもされたのかと、本気で疑ったほどだ。

だが美也は、自身が元から負っていた『特別枠の大きな借り一つ』と、『これから負う特別枠の大きな借り一つ』を合わせた引き替えに、綾香を箱庭のギリギリ見える外側に置く事を認めた。

次郎を混乱の渦中で溺れさせた裏の交渉者は、井口豊である。

金で動かず、思想でも要求に満たない次郎に対し、女での誘導を試みたのだ。

まずは次郎に対して、レベルを上げさせるなどの名目で綾香を傍に付けながら、録音で情報を集めさせ、徹底的に分析を行った。

次郎と美也の家庭の経済状態を把握した井口家は、自身では金の要らない次郎が、美也のために進学や生活費を欲しているのだと理解した。

次郎は、一〇〇〇万円を受け取った時に「生活費が稼げました。感謝します」と話し、「君は、とても貧乏な家の子には見えないがね」と広瀬が返すと、「大凡ご推察の通りです。リーダーとして、責任がありますので」と答えている。

最低限で済ませる金銭要求と、その後の高校生らしい算出間違いの補填。

最初に面会した時の「仲間と共にダンジョンに挑んだ切っ掛けが病気でしたので、医療や回復魔法の実用化にはそれなりの思いがあります」との発言を併せて鑑みるに、井口家は次郎が嘘を言っていないのであれば、美也が六年制の医学部に行きたいが金銭的に不安があつたのだと結論付けた。

最終的に、その部分では嘘をついていないと判断した。

同時に次郎に綾香を接し続けた結果、ダンジョンには熱を入れるが学業にはそれほど熱心に取り組んでおらず、自身が医学部に行きたいわけでは無いとも判明する。

すると二人の間には、大きな隙が見えてくる。

医学部を目指す美也は、最低でも研修医を終える二六歳まで主婦や出産は出来ず、次郎に自分の都合で制約を強いる事になる。

次郎と美也の関係は一見対等で、美也の行為はその関係性を損なわせる行為だ。人生のうち八年の制約は、高校生の認識では長すぎる。

次郎はともかく、美也は八年間の制約を相手に掛ける事に、負担を感じないのだろうか。

だが金を受け取って進学の見込が付いたのは最近であり、二人はその問題について未だ話し合っていないと思われる。

そこに次郎の近くに綾香を置いて、美也に妥協させられる隙が見出せた。

次郎を籠絡するのは簡単だ。

まずは傍に置いている綾香に、違和感のないタイミングで、好ましくない政略結婚が控えていると説明させる。

既に社会人という一〇歳ほどは年齢が離れた、好みでも無い相手に嫁がされると言わせ、次郎が相手になってくれたら自分は救われるとアピールするのだ。

それは功を奏して、次郎は綾香を意識するようになった。

そして最終的には、妾でも次郎に貰われないよりはずっとマシな状況になるのだと説明する事で、最後の一押しをする。

なお綾香が説明した背景は、全てを事実に出来る。むしろ次郎が現れたことで、全てが事実になった。

実際に井口家のための政略結婚は勧めるし、次郎に比べて酷い候補者を用意して話を持っていく事など容易いし、次郎が相手なら結婚でも認める。綾香が次郎を呼び込んだ一連の話も事実だ。

従って綾香は、何一つ嘘を吐いていない。

全て事実であるが故に、簡単に自らを信じ込ませる事が出来た。

そして立場的にも思想的にも次郎しかいないと美少女に自ら本気で言わせれば、ごく一般的な男子高校生を落とすのは難しくない。

残るは、美也だけである。

心理的な弱みから次郎を束縛し切れない美也の隙を突いて、次郎の高校生らしい欲望や周囲を取り巻く状況、綾香を置くメリットなどを説明し、妥協ラインを測る。

なお周囲を取り巻く状況とは、次郎にハニートラップを仕掛けてくる組織が国内外に最低でも一〇〇や二〇〇はあるというものだ。

最初に攻略された山中県の高校生に当たりを付けて探し出し、呼び掛ける方法など国家や組織にはいくらでもある。小さなお願いの見返りに密かな報酬を示された場合、次郎は全てに抗えるだろうか。

綾香を置くメリットは、次郎が誘惑に抗えなくても、他所には行かせず綾香までで留め、正妻が美也で綾香が妾となる事で美也の立場を守るというものだ。小市民的な感覚を持つ次郎は、美也と綾香で同時にコントロールすれば抑えられると。

妥協ラインは、建前が井口一族との連絡調整係、御用聞き、法的なお墨付きの調整役。心の壁の内側には入らず、役割は守る。

政府がお墨付きを与える交渉が成立して、油断していた所に裏の交渉を持ち込まれた美也は、とても冷静ではいらなかった。

交渉を打ち切って逃げてしまえば済む問題では無い。

逃げた所で、北海道に修学旅行に行った山中県の七村高校の二年生男子までは探し出される。映像からは、身長や体格でさらに絞り込まれるだろう。

すなわち次郎を見つけ出される恐れと、その先の箱庭崩壊の実現可能性を認めざるを得なかった。

箱庭が壊れるくらいなら医学部など諦めても構わないが、既にその段階では無かった。箱庭には、誰かがほぼ確実に侵入してくるのだ。

そして綾香の交渉のメリットと妥協ライン設定に、心底嫌々ながら価値を認めた。

目的が妾を置く程度の協力を求めたいと明白であり、美也の制御に従うと言っており、目通しが済んでいており、箱庭の外の平原でギリギリ目が届く位置にいると言うならば、他に壊されるよりマシという結論が、美也が綾香を認めた理由だった。

なお建前は残っているため、手を出すかどうかは次郎次第である。実際に手を出すまでは、妾候補であるらしい。

それは美也にとつての逃げ道であり、彼女が場をひっくり返さないための最後の仕掛けである。そして次郎にとっては、守らざるを得なくなる枷となる。井口豊は、そこまでを采配した。

次郎が聞かされたのは、美也と綾香の結論だけだ。

綾香の語った矜持の実現と、好ましからざる結婚相手からの脱却、美也の『特別枠の大二つ』と引き替えの妾候補承認。

そして結論には、井口家の大人達も了解していると添えられた。

状況的には、嫁公認の妾を一人置くから、少し手伝ってと言われただけだ。

気分的には、裏の背景があまりに難しすぎて、思考を放棄した原始人である。

結論的には、老練な井口豊の手練手管に、二人が手玉に取られたのであった。

「……………とりあえず本業だな」

破局させられない井口が、次郎に対して相当譲った結果であったのだろう。

知らぬ間に顔を立てられつつ敗北させられていた次郎は、相手のフィールドで戦うのに懲りて、自分本来の活動に戻った。

差し当って、綾香と共に山中ダンジョンの地下一階から再攻略し直し、少しでも特典が高くなるように魔物を倒し、レベルを上げに奔走する。

万全を期すには未だ足りないが、二つの理由から急く必要があった。

第一には、国民の不安を共和党が払拭するためだ。

先が見える国民は、初級ダンジョンが攻略できても、次の多階層円柱が攻略出来なければ積んでしまうと思っている。

そこで選挙中に多階層円柱を共和党が攻略して見せる事で、労働党には出来なくても、共和党には出来ると証明するのだ。

立候補者は一斉に、このまま労働党に任せていいのかと言っただろ

う。これほどあからさまな実績を見せられては、どれほど弁舌を尽くしても巻き返せない。

第二には、政権交代が叶った後に井口豊が考える、カマキリを一匹も出さなくする方法に少し協力するためである。

綾香の総合評価を高めた後、再び辿り着いた地下二〇階の最奥前。広い空間を前にした通路で、三人は最終確認を行った。

「それじゃあ確認するね。基本は、二対一の連戦。太郎くんと私が二人でボスを一体ずつ倒すから、綾香は私たちの後ろに付いて、魔法で牽制。質問はある？」

次郎と美也のレベルは、共に七三まで上がった。

しかも美也は能力加算でB P 一二を追加で得ている。

既に周囲のレベル三五のアラクネなど問題では無く、ボスよりも確実に強いだろう。

二人の不安材料はレベル四二の綾香だが、ボスとは直接接しない方針で凌ぐ事となった。綾香との個別交渉の他に、井口家からは攻略特典報酬も示されているため、受けた仕事はきちんと行う予定であった。

「太郎さんと花子さんが、同時に別々の敵に襲われた場合はどうするのですか」

「その時は、わたしが単独で倒せそうなら倒すかも。時間が掛かりそうなら、太郎くんに支援魔法を飛ばして先に倒して貰う感じ」

「分かりました」

作戦が大雑把に感じられるが、それだけ次郎と美也の連携は上手くいており、臨機応変な対処が出来るという事でもある。

「それなら行くか」

そう言った次郎を先頭に三人は通路の奥へと足を踏み入れた。

その中は、少し前までは深い森だった。

肥沃な土が地面一杯に広がりながら隆起しており、所々に見られる石には何らかのコケ類がビッシリと張り付き、足元には背の低いワラビ、クサソテツ、クラマゴケなどのシダ植物が覆い尽くすように生えていた。

森を形成していたのは杉、檜、松、銀杏などの裸子植物で、杉山に通い続けた次郎と美也にとっては見慣れた光景でもあった。

だがそんな森は、先程まで通路側から送り込んだ美也の火炎魔法によって、徹底的に焼き払われた。

既に足場に生えていたシダ植物は全滅しており、黒焦げの大地から白煙が立ち上っている。森を形成していたシダ植物も枝を残らず失い、炭化した幹のみが山に並べ立てられている状態だ。

そんな焼け焦げた山に踏み込むと、背後の通路が消え失せた。

次いで山の中腹辺りに、黒い霧が二つ現われる。

次郎は近い位置にある霧の一つに槍の先端を向けると、号令を掛けた。

「アレだっ！」

そして大きく踏み込み、焼け焦げた山を一気に駆け上がっていく。既に山の各所からは黒い泡のようなものが湧き出して、地下二〇階に生息しているアラクネたちをボコボコと生み始めていた。その数は五〇ほどであるが、次郎と黒い霧との間には発生していない。

アラクネは、蜘蛛の頭部に人間の腰より上に乗ったような姿だ。大きさは人間部分が普通の人間サイズで、蜘蛛の部分が車両ほど。即ち大きなには、他階層のグリフォンやヒップグリフといった魔物達と変わらない。

糸は魔力が込められているらしく強力で、人間どころか他の魔物も簡単に持ち上げられるのではないかと思われる。さらに闇魔法の力が込められており、触れるだけでも状態が不良になる。そのため綾香の能力を闇五まで上げなければならなかった。

そんな強力なアラクネのうち、最も近い位置に発生した個体に向かって美也の全力の火炎魔法が放たれる。

赤い閃光は瞬く間にアラクネに達すると、一気に一瞬で燃え上がってアラクネが動き出す間もなく全身を覆って焼き尽くした。

「よし」

上半身が人間の姿をしていると言っても、手加減をするに値しない理由が三つある。

一つ目は、アラクネの人部分も肌が毛に覆われ、鉤爪が黒く異様に伸びた、ホモ・サピエンスとは異なる何かだからだ。鉤爪で器用に糸を操りながら巻き付けてくる姿を見れば、相手が魔物だと確信できる。

二つ目は、アラクネが日本語を介さず、次郎たち人間と遭遇すれば真っ先に襲い掛かってくるからだ。アラクネ同士で協力し合うという習性も無いようで、知性を持たず本能だけで襲ってくる怪物に躊躇いを覚える理由は無かった。

三つ目は、アラクネが人工培養したかのように同じ顔ばかりだった事だ。人と同型では無い他の魔物の顔については判別できないが、少なくともアラクネは、何処かしらの異世界で自然発生した存在ではなく、誰かに作られたような存在だと思われた。

相手は人ではなく、知的生命体でもなく、自然の生き物ですら無い。単なる化け物である。

その前提で突き進んだ次郎は、霧が晴れた先に居た新たなアラクネに一瞬だけ躊躇いを覚えたが、感情を意志でねじ曲げると全力で

槍を突き出した。

「キャアアアアッ」

毛に覆われていない白色の肌から腹部を軽々と貫いた槍は、すぐさま引き抜かれて白い首元に狙いを定め直す。

すると注視した鎖骨付近に、一瞬ブローチのような物が目に映った。

槍を握る次郎の手に再び躊躇いが生まれたが、少女が苦痛に蠢く間に槍は再び突き出され、首元を一気に貫いた。

槍をグルリと捻るのは、槍を得物としてきた次郎の習性のようなものだ。

咽を挟まれた少女は言葉を失して、代わりに口から吐血を漏らす。血は滴り落ちて、糸を紡いで作ったような胸元を覆う白い布の一部を赤く染めた。

「太郎くんっ！」

美也の声が届くや否や、次郎はアラクネを貫いた槍を手放してバツクステップを行い、アラクネから距離を取る。

次郎が離れた一瞬の間に、赤と緑の光が次々とアラクネの下半身にある蜘蛛部分を襲って切り刻み、焼き払った。

ボスアラクネの大きさは、他のアラクネと大差ない。代わりに人部分が異様に白く、頭部から生えているのは毛ではなく髪で、無機質な瞳ではなく人の怯えた瞳をしているだけだ。

次郎は洪面のままにナタのような武器を生み出すと、ボスアラクネに突貫して首元目掛けて全力で振るった。

身体能力に高い比重を置く次郎の攻撃が、柔肌を裂いて骨を断ち、首を刎ね飛ばす。

次郎の気分は最悪に近かったが、閉じ込められたボス部屋でボスを倒さないわけには行かないため気持ちを切り替えて、次のアラクネに向かって走り出した。

背後では、トドメの火炎魔法が一体目のアラクネを焼き尽くしている。

各個撃破された二体目のアラクネは、迫る次郎に対して逃げる素振りを見せたが、直ぐに首を撥ね飛ばされて仲間の後を追った。

43話 新政府

二〇四五年一〇月八日、日曜日。

単独過半数を取っていた労働党が内閣支持率を過去最低まで落とし、連立与党や同じ党内からも造反を招いて、内閣不信任決議案を可決されての解散総選挙の決戦日となった。

この間、選挙権を持たない次郎は代わりにダンジョン攻略を行った。

初級ダンジョンに次ぐダンジョンは中級ダンジョンであつたらしく、攻略を果たした次郎たちは攻略特典を得た後、新たに出現した灰色い塔型円柱の仮称・上級ダンジョンに踏み入っていた。

現在のステータスは次のように伸びている。

堂下次郎 レベル七四 B P O 転移S二 収納A
体力九 魔力一六 攻撃一〇 防御一〇 敏捷一〇
火二 風二 水二 土一 光二 闇五

地家美也 レベル七四 B P 三 転移S 加算A 収納S
体力七 魔力二二 攻撃六 防御七 敏捷七
火一一 風一〇 水二 土二 光八 闇六

井口綾香 レベル四三 B P O 転移A二
体力五 魔力九 攻撃四 防御六 敏捷六
火五 風三 水一 土一 光二 闇五

綾香が二つ目の攻略特典である転移Aを取得した事で、次郎たちは再び一億円の報酬を手に入れた。既に得ていた分と合せて二億二〇八〇万円であり、二人で山分けしても一億一〇四〇万円となる。

高収入を得た次郎は次第に働きたくなってきたものの、今後の活動を考慮して二つ目の転移能力を取得した。

共和党が政権を取った場合、上級ダンジョンで活動を続けると同時に、少し政府に協力するためだ。労働党が政権を保ち続ければ当然協力しないが、その可能性は皆無だろうと次郎は考えている。

夕食後の食卓で兄と共に見ているテレビ特番では、共和党が圧勝しそうな勢いが見て取れる。

労働党派の父が食卓では無く自室でテレビを見ているのも、子供の前でイラつく姿を自粛したからだろう。あるいは不愉快だから引き籠もったのか。

おかげで次郎たちは、父が好む公共放送では無く、開票速報が早い民放を見ることが出来る。報道が早いと誤報のリスクも高くなるが、誤報された本人にとっては深刻でも、次郎には総数が概ね合っていれば問題ないのだ。

『投票締切りの午後八時まで、残り三分を切りました。投票率は午後六時の時点で、期日前投票を含めると七五・一％。これは昭和三年、昭和二十七年、昭和三十〇年の衆議院選挙に次いで歴代四位となる高さです。その後の投票次第では歴代一位も有り得る事から、今回の選挙に対する国民の関心の高さが窺えます』

男性アナウンサーが過去のグラフを示しながら、説明する。

『これまでは労働党が単独過半数となる二二三議席を持ち、連立を組んでいた国民党の三一議席と共に安定した政権を担ってきました。今回の選挙で注目されるのは、連立の意思を示している野党四党で過半数を取れるのか。出口調査の結果発表まで、残り二分を切りました』

出口調査は、民放などが前回の投票結果、選挙の情勢、投票者が

らの聴き取りなど様々な情報を収集して結果を纏めたものらしい。

「兄貴、選挙結果はどうなると思う」

「それは共和党が勝つだろう。但し単独過半数は無理だな」

「なんで？」

「全ての選挙区に共和党候補を出せば圧勝しただろうが、選挙協力で他の野党や国民党、労働党の小林派にも譲って候補を出さなかったからだ。だが以前に連立を組んでいた改革党と手を組めば、過半数には届くだろうがな」

一郎の指摘は尤もだが、内閣不信任決議案を通すために、共和党は小林派や国民党とも手を組まざるを得なかった。

然もなければ衆議院選挙は行われず、カマキリパニックは実現していただろう。

身を切って折り合いを付ける事で望む結果を得る。それが井口・広瀬家の得意技だということを、次郎は一郎以上に理解していた。

「そういえばさ、どうして出口調査で結果が分かっているのに発表しないの？」

「先に言ったら、勝ちそうな候補の支持者は投票に行かなくなるし、負けそうな候補の支持者が選挙に行って、場合によっては結果が変わるからな」

「へえ」

成程と納得した次郎の見守る前で、テレビがカウントダウンを開始する。

効果音がタラン、タランと鳴る度に数字が小さくなっていき、それが〇になると同時に予想が飛び出した。

「これは凄いな」

「マジか」

あくまで各地の出口調査からの結果予想であるが、二二三議席だった労働党が六〇議席台まで落ち、代わって六〇議席台だった共和党が単独で一九〇議席を上回るらしい。

改革党、新生党、共歩党もそれぞれ伸びを見せており、不信任案に賛同した国民党も議席を維持している。

その結果、与党勢力が二五四から一〇〇未満に落ち、野党勢力が三三〇〜三四〇議席まで増えた。

野党四党は、選挙中から組むと宣言しており、間違いなく新政権が誕生する。

予想が発表された瞬間、父の部屋から罵声が轟いた。

「馬鹿野郎！」

どうやら受信料を徴収する公共放送でも、壊滅的な予想が出たらしい。

そしてテロップには、真っ先に広瀬秀久議員当確の速報が流れた。時刻は未だ午後八時〇分台である。

「はやっ！」

締め切りから、僅か一分未満で当確情報が出ていた。

するといきなり場面が切り替わり、広瀬議員が万歳をしている姿が映し出される。

切り替わった場面は宮城県青葉区の広瀬秀久選挙事務所らしく、四方八方に膨大なカメラが押し寄せており、その前で広瀬議員と支援者達が万歳三唱を行った後、広瀬が一礼をしてからマイクを持って話を始めた。

『国民の皆様が不安をお持ちの魔物につきまして、私たちは政権交代後の対策を進めて参りました。今回、衆議院選挙におきまして国民の皆様の信任を得られましたので、私は間もなく誕生する新内閣において防衛大臣を担い、来年一月四日の出現前までに初級ダンジョンの一斉同時攻略を実施します』

凄まじい数のフラッシュが一斉に焚かれ、暗闇が眩しく照らし出された。

テレビの画面から溢れ出す光に、一郎と次郎は揃って目を瞬かせる。

『既に期限が二カ月を切っておりますので、皆様が眉を潜めるような強引かつ強行スケジュールとならざるを得ませんし、実現のために強引な法案も通します。ですが何よりも国民の皆様様の生命を守るため、ご理解とご協力、厚い支援を賜りたく存じます』

テレビ局の予定では喜びの声だったはずの選挙事務所の中継が、記者会見のような場にならわっていた。

だがそれも当然だろう。

共和党政権が誕生する事も、その最大の立役者である広瀬議員が大臣席に座るのも既定路線とみられていたが、具体的な閣僚名に言及があつたのは初めてだ。

日本には無任所大臣と特命大臣を除き、一四の国务大臣職がある。内閣総理大臣、内閣官房長官、財務大臣、外務大臣、防衛大臣、総務大臣、経済産業大臣、国土交通大臣、農林水産大臣、厚生労働大臣、国家公安委員長、法務大臣、文部科学大臣、環境大臣。

制度上は内閣総理大臣のみが上席であるが、二〇四五年現在の席次としては概ね挙げられたとおりの順番になっている。

昔は総務大臣の序列がもう少し上であったが、外交政策やダンジ

ヨン出現で外務大臣と防衛大臣の職責が重くなる一方で、総務大臣職を連立与党の党首に渡すなどして重要度の入れ替わりが起こった。また厚生労働大臣は少子高齢化によって、いかに社会保障費を削減するかに終始して国民の恨みを買って易くなった。それに法務大臣以下には実質的な権限が殆ど無い事などもあって、同じ国務大臣職と言えど実際には重みで格差が存在する。

重要閣僚は防衛大臣までの四人で、内閣総理大臣の臨時代行筆頭候補者だ。

中量級閣僚は厚生労働大臣までで、大臣経験や与党内の派閥力学を要する。

軽量級閣僚は環境大臣までで、当選回数に基づくご褒美などと揶揄される。

なお総理、官房長官、外務大臣、防衛大臣の四人が、日本の安全保障や対外政策を定める四大臣会合のメンバーだ。

その下には財務大臣、総務大臣、経済産業大臣、国土交通大臣、国家公安委員長の五人が加わった九大臣会合があつて、より多角的な視点を要する事項を審議する。

すなわち防衛大臣は、国家戦略において最重要な四大臣の一人である。

『広瀬議員、防衛大臣に就任されるのは井口党首と話し合った結果ですか』

メディアの一人から声上がり、広瀬議員がマイクを持ち直した。

『勿論です。井口代表と話し合った結果、新政府誕生の暁には最速で動くために、私が防衛大臣を担う事となりました』

『それでは、自衛隊を動かして攻略するのですか!?!』

『いいえ。それだけでは月一、二カ所の攻略しか出来ない」と、前政権が示しております。ダンジョン攻略は新政府の最優先課題とし、最長でも二カ月以内に必ず結果を出しますので、日本にお住まいの皆様は、全力でご支援下さいますよう改めてお願い申し上げます』

兄が押し黙ってテレビに注視する中、次郎はやれやれとお茶を啜った。

既に井口家と話は付いているが、政権交代が成る事が確定した以上、今後の次郎には沢山の仕事が発生する事になる。

テレビはテロップに次々と当確議員の名前を流しながら、暫く広瀬議員の選挙事務所前からの中継を続けた。

明けて翌日。

朝刊の一面には共和党圧勝と共に、大場総理の労働党代表の引責辞任と、広瀬議員の防衛大臣就任がデカデカと載っていた。

旧

労働二二三 国民三一

改革七一 共和六三 新生二八 共歩二一 他八

新

労働六四 国民三一

改革八一 共和二〇五 新生三三 共歩二六 他五

結果は新与党となる連立四党で、四四五議席のうち四分の三を上回る三四五議席を獲得するという、まさに圧勝であった。

労働党も大場派に反旗を翻した小林派が三八名全員で当選する一方で、その他の派閥は合計で二六議席しか残れていない。

国民党も、党そのものが労働党から離れて共和党と協力体制を構築した。

すなわち新しい内閣は、与野党の衆議院議員の九割以上から協力

を得られる状態となった。

大場は小選挙区において一二%の票を獲得し、比例区で復活当選を果たした。

だが今後は、針の筵だろう。

民主制における政治判断の誤りは、政治家を選んだ国民自身に帰す。

直接口封じを指示した物的証拠でも出てこなければ捕まえるのは難しいし、おそらく出てこないだろうが、その代わりに二度と政権を任せないという国民の判断が下された。

この裁きで大場派は衆議院での議席を劇的に減らし、閣僚も大半を落選させた。

加えて来年の参議院議員選挙に向けて、小林派が現職の参議院議員を切り崩しに掛かるのも必至だ。泥船から離脱を図る議員は、これからも続出するだろう。

そして選挙から八日後、新生日本政府による特別国会が召集された。

43話 新政府（後書き）

二巻はここまです。

次話から三巻になります。

44話 パワーレベリング

二〇四五年一〇月一八日、水曜日。

秋の日の入りは早く、夜空では既に星々の海が輝きを放っている。この日は井口内閣が誕生してから三日目の夜であり、国難の渦中にある日本は暗中模索しつつも、ようやく一筋の光明を見出したところであった。

新総理となった井口豊は、国家安全保障会議を行う九大臣会合の席に連立各党の党首を据え、野党となった労働党の小林派や国民党とも協力して挙国態勢で国難に臨む姿勢を内外に示した。

総務大臣に改革党の藤沢博文、経済産業大臣に新生党の麻倉道繁、国土交通大臣に共歩党の青山浩一。加えて農林水産大臣職も改革党に譲るなど、大きな配慮を見せている。

また防衛大臣には広瀬議員を起用し、その他の重要閣僚や国家公安委員長には広瀬大臣を阻害しない人物を配するなど、井口内閣の最優先課題が誰の目にも明々白々な組閣を行った。

広瀬防衛大臣にとっては、就任から三日目。

次郎にとっては、二学期の中間テストが終わった当日。

関係者のスケジュールが最速で折り合ったこの日、山中県の上級と思わしきダンジョン内部において、光量を抑えた軍用投光器の数々が、未知なる深淵の奥深くを幾重にも照らし出した。

暗闇に浮かび上がるのは、陸上自衛隊の普通科連隊と呼ばれる部隊の隊員達。

灰色い塔型円柱の地下を先行しているのは、小銃小隊と呼ばれる三〇余名の小隊だ。彼らはレベル持ちであり、その能力を活かして本来は携帯できない強力な特殊対物ライフルを携えながら、扇状に

展開し、前面にクロスファイアポイントを形成していた。

特殊対物ライフルの弾頭には、レベル七のコオロギの魔石の核が用いられている。未使用の魔石にはエネルギーが残っており、魔石の核を含んだ弾頭を高速で撃ち込む事により、魔物に衝撃を与えられるのだ。

コオロギの魔石は初級ダンジョンから魔物が溢れていた頃に集められた物で、在庫は有るが補充が難しいため、使用が認められる場所は限定される。地上で用いられる特殊対物ライフルの弾頭は、レベル三のトノサマバツタの魔石の方だ。

魔石には、水素自動車の燃料である圧縮水素の代わりに水魔石を用いた新たな自動車の実用化が期待できるなど、エネルギー革命を起こす凄まじい可能性があり、大学では研究が進められている。

だが魔石の最初の利用は、コストを無視した軍事目的だった。

そんな夢もへつたくれも無いブライスレスな弾丸で武装した彼らの前方には、無人偵察通信車が先行しており、連隊本部はカメラを通して現場に指示を出している。

自衛隊には、陸上自衛隊、海上自衛隊、航空自衛隊の三種類がある。

大前提として武力攻撃が起こらないようにするのが政府の責務であるが、万が一にも日本が武力攻撃を受けるようなことがあれば、島国の日本は空で防いで、海で防いで、最後に陸で防ぐ。そんな国民にとつての最後の砦となるのが、陸上自衛隊だ。

陸上自衛隊は超巨大組織であり、この場に居るのは日本に一〇〇個ほどある連隊の一個に過ぎない。

しかし山中ダンジョンの駐留連隊長は各国の大佐にあたる一等陸佐（二）で、隷下には千数百名の隊員が居る。

連隊の力がどのくらい高いのか、次郎を含めた一般人には非常に理解し難いが、日本の歴史の教科書に載っている二・二六事件は、この場に居る連隊とほぼ同規模の千数百名で起こった。

その時は首相官邸や警視庁、防衛省などが占拠され、陸軍大將や複数の大臣が殺され、最終的に内閣が総辞職している。

現代ではまず有り得ないが、連隊から全ての制約を外し、完全な奇襲を許したという条件を付け加えれば、連隊はそのくらいの力を持っている。

そんな凄まじい力を持つ彼らは、防衛大臣から最重要任務を帯び、目下遂行中である。

連隊本部はダンジョンの入口前に設営されており、そこには防衛大臣の命令を受けた総監部防衛課長や、井口和馬大臣秘書官なども詰めながら、今回の作戦を固唾を吞んで見守っている。

カメラが映し出しているのは、無人偵察車の前方に一人だけ立つ次郎だ。

注がれているであろう数多の視線に、まるで全身を透視されているかのような居心地の悪さを感じざるを得ない。

次郎への身元詮索に関しては、広瀬大臣が指揮官たる連隊長を防衛省まで呼び寄せて、新任の防衛次官や統合幕僚長も同席の元、一切の詮索を禁じる旨の命令書を直接渡している。

そして下で命令を破らせる者が居れば、それが誰であろうと直ぐに防衛省若しくは統合幕僚監部に報告せよと厳命までされていた。命令された連隊長としては、唯々諾々と従うだけである。

なにしろ所管の大臣、制服組トップ、軍服組トップの三者から統一された命令を直接受領したのだ。

機密は、それを知る者の数が増えると漏れるリスクが高くなる。

自衛隊で正体を把握すれば、機密が他国に漏れて干渉や引き抜き
の恐れが生じる。そして他国に知られると最も困るのが、山田太郎とその仲間達だ。

総理や防衛大臣が連絡手段を持っており、自衛隊では身元を調べない方が国益に叶うという政治判断がされた事は、連隊長にも理解できない話では無かった。

もちろん次郎の側も、自衛策は行っている。

体格が出難い服装や顔のペイント、固定ゴーグルやマスク、ニット帽などで変装し、転移で山中ダンジョンの内部に直接跳ぶなど工夫している。

ここまでして次郎が来なければならなかった理由は、今回の作戦が日本全体を救う抜本的なものだからだ。

その作戦とは、日本政府が次郎の手を借りて、選抜された中高生六〇余名のレベルを引き上げさせ、日本に現われた初級ダンジョンを残らず攻略させるというものである。

これは綾香のパワーレベリングの限定版と見なせるだろうか。

第一陣は、四親等内の血族に現職の大物国会議員を持つ、三〇余名の中高生達。

彼らを選定した名目は、次の通りだ。

- ・政治家として子供を戦地に送り込むなら、まず身内から。
- ・政治家のコントロールが利きやすい相手だけを選別できる。
- ・責任所在を明確に出来て、推薦者に責任を取らせられる。
- ・最初から地位も財産も権力も持っていれば、買収され難い。
- ・超党派の大物政治家の血族で揃えば、国内外から守りやすい。
- ・状況が切迫しているため、選挙前からの選定が必要だった。

政権交代からカマキリ出現までは、二カ月を切っている。

そのため条件を整えた人員を速やかに送り込むために、内閣不信任決議を提出する以前から、内々に選定が行われてきた。

選定者、保護者、推薦者には、誓約書に反すれば命は無いとの同意書を書かせている。そして実際に殺しても構わないように、一人息子や一人娘などを避け、死んだと思つて出すようにと予め言い含められていた。

そんな彼ら彼女らは、小林派以外の労働党を省く超党派から選ば

れている。次郎が東京で五党の党首と小林議員に会った頃、選考を進める話が付いていた。

現与党が衆議院の議席の七五%を占め、野党となった労働党小林派や国民党など一六%とも協力関係を築けたために、党利党略や与党の依怙贖肩にはあたららない。

それでもレベルや特典を得られる事には、一定の不満や嫉妬が予想される。

そのため少年少女が、魔物の巣窟に放り込まれてボスと戦わされる事実を分かり易く伝えるべく、集団の名称は『特攻隊』と名付けられた。あからさまで、時代錯誤も甚だしい名称と実態である。

そんな特攻隊の第一陣に選ばれたのは、何れも閣僚級やそれに準じる者、各政党・各派閥の実力者を四親等内の血族に持つ、選沢基準の中でも特に厳選された御令息・御令嬢たちだ。

そこに綾香を混ぜる事により、能力獲得を自然に演出させられ、総理たちも大つぴらに綾香の能力に頼れるようになるという思惑もある。

かくして選抜された三〇余名は、大場元総理が発したままの国家緊急事態宣言下における徴用扱いとなった。

もちろん公欠扱いとなるが、その他にも補償に関しては、閣議決定と衆議院への法案から直ぐの可決で、様々に行われる予定になっている。

例えば希望する国公立への無試験合格、一時金と生涯年金、任務中は国家命令に基づく活動で個人の刑事・民事責任は一切問われない等だ。

これは国外に引き抜かれないための措置で、生涯に渡る日本国での特別年金支給などの各種優遇は、世間に一般公開する時点で速やかに法整備する予定となっている。

この程度で日本にカマキリ以降の魔物が出なくなるのであれば、圧倒的大多数の国民はその判断を支持するだろう。仮に支持されな

くても政府は決行する。非常時の巨大な内閣ならではの、有無を言わせぬ舵取りであった。

特攻隊の第二陣は、防衛省や自衛隊の幹部を祖父や父に持ち、将来自衛官を志す男子中学三年生たち計三〇余名となる予定だ。

彼らは陸上自衛隊高等工科学校に推薦扱いで進学が確定し、進学後もダンジョン任務を行う事になる。その後は任官するか、防衛大学に進んでさらに任務を継続する。

選抜条件は、本人の志願の他にも多岐に渡る。

学校の成績や内申書、過去の非行歴、親の所属や階級、祖父や親以外の自衛官の有無、家庭の経済状態、二親等内の職歴や犯罪歴、血縁者に外国籍の者が居るか等、調べられるだけ調べて最良の者から順に選ぶ。

攻略特典を持たせるにあたって、不安定要素を一点も抱えたくないのだ。

もしも選考が間に合わなければ、第一陣から漏れた政治家の子弟で穴を埋める予定であり、それを聞かされている自衛隊は不仲な将官達ですら協力し合って、迅速な選考作業を進めている。

「作戦開始時刻です」

不審者スタイルの男に、背後から催促の声が投げかけられた。

すると肩を竦めた先頭の男は、傾斜の浅い下り坂をゆつくりと歩み始める。

その後ろからは遠隔操作の無人偵察通信車二両が付き従い、一〇メートルほど後ろから厳つい男達と、武装した上に番号の入ったビブスを付けた御令息、御令嬢が続く。

暫く勾配を下っていくと、やがてダンジョンでは定番らしき大広間の入り口が見えてきた。

大広間は、初級以降の各ダンジョンの登竜門だ。

常に何体かの魔物が居て、必ず侵入者に襲い掛かる。

さらに通路からは新手もやってくるため、大広間を突破するには相応の実力か、あるいは魔物の攻撃に耐えられる人数の何れかを要する。

速度を落とさずに大広間へ踏み入った次郎は、偵察通信車輛が続いたのを確認した後、巨大な入り口の大半を土壁で一気に塞いだ。そしてワザと残した一角に、土槍を格子状に重ねた出窓を作り、後背への魔物の侵入路を防いでから広場に向き直る。

広い空間内には、既に十数体の魔物が潜んでいた。

次郎は手持ちの石槍に、闇魔法で痺れの効果をイメージして込め、槍の先端には銛のような反しを付ける。

そして徐ろに槍を構えた刹那、黒くて丸い影が、時速一〇〇〇キロを越える速度で突っ込んできた。

「ぬおっ！」

突き出した石槍に、ロケットランチャーから発射された砲弾を空中で殴りつけた時のような激しい衝撃が走る。

実に良い手応えのあった槍は、横合いへ受け流されながら直ぐに手放された。

既に手元には新たな槍が生み出されており、その槍は瞬く間に二体目の影に突き刺さった。

衝撃を受けた二本目の槍が、流れるように後方へ飛んでいく。

既に三つ目の影が迫っており、次郎は手放した二本目の槍には目もくれず、新たに生み出した三本目の槍を突き刺した。

今の自分が、どれだけ有り得ない事をしているのか。

迎撃する姿を第三者に見られる事で、次郎は始めて自分の行為を客観的に見直した。

『四方八方から一斉に迫り来る十数発ものロケットランチャーの砲弾を、槍で次々と貫きながら叩き落としていく』

それは一体、何処のイージス艦の自動迎撃システムだろうか。

しかも迫り来る砲弾は、実際には翼の生えた猫の様な姿であり、直線的に接近するだけでは無く、減速や軌道修正、方向転換などを行うミサイルの性質を持っている。

さらに風魔法や闇魔法で風や影に溶け込みながら、侵入者に悟られぬように近付くなど、ステルス性も抜群だ。

そんなステルスミサイル並の魔物達を、美也はアルプと名付けた。アルプとは、ゲルマン神話に出てくる妖精の一種だ。

様々な動物の姿に化けたり、姿を消したりしながら、人間に襲い掛かってくる夢魔だそうだ。まさに打って付けの名前である。

上級ダンジョンの地下一階では、そんな淫乱ステルスミサイルのアルプたちが、侵入者に向かって一斉に飛び掛かってくる。

地下一階は複数の市が入る広さで、一気に走り抜けるには長すぎる。

しかも地形は入り組んだ地下通路で、出会い頭に現われたステルスミサイルを回避していくには狭すぎる。

アルプは、そんな最低の環境に数万体は潜んでおり、時速一〇〇〇キロを超える速度で迫りながら、ミサイルの爆発に匹敵する威力の猫パンチをほぼ無限に繰り出してくる。

相当のレベルが無ければ回避は不可能で、大きな差を持たないレベルで進むためには全てを撃破する以外に無い。

いかに連隊が精強だとしても、こんな所を突破できるわけが無い。例えイージス艦のみで編成した大艦隊を侵入させられたとしても、地下二階に辿り着くまでに残らず撃沈される酷い場所だ。

だが、そんな強力な魔物であるアルプたちは、次郎の体感では中

級ダンジョンの地下二〇階に蔓延っていたレベル三五のアラクネに比べて、僅か一レベル高いに過ぎない。

すなわち中級ダンジョンの地下二〇階も地獄であり、今の自衛隊では中級ダンジョンの攻略も不可能だと思われた。

両手に持った二本の槍で、七体目と八体目のアルプを殆ど同時に貫いた次郎は、網目状になっている土壁の奥へ一瞬だけ視線を送った。

出窓には、翼と四肢を折った串刺しのアルプを入れる予定だ。そうすれば御令息・御令嬢は、さぞかしレベルが上がる事だろう。

綾香は中級ダンジョンを用いて僅か五日でレベル三四になったが、この上級と思わしきダンジョンで行うパワーレベリングの効率は、それを遙かに上回る。以前に比べると人数は多いが、三〇余名の大半が今月中にレベル三〇に届くと見込まれた。

対価は、綾香の時より遙かに上積みされて、一レベルにつき二〇〇万円。

すなわち三〇レベルの人間を一人作れば六〇〇〇万円の報酬で、六〇人分なら三六億円となり、人数やレベルが増えればさらに報酬は上がる。

今回の活動には美也が加わらないため、報酬の全額が次郎の取り分だ。

別にそこまで要らないと思った次郎だったが、この上積みには綾香の持参金も混ぜられているらしい。要するに、次郎との連絡を保ち続ける必要経費なわけだが。

具体的な内訳は聞かされていないが、仮に半分だとすれば一八億円。上積み分は、丸ごと綾香に返しておいた方が無難だろうかと思いい悩む次郎であった。

これらの報酬は、全て国庫から支出される。

匿名の次郎でも受領できて、受領時点で所得税も源泉徴収済みと

なっている。

内閣総理大臣ともなれば、それくらいは簡単に通せるらしい。もっとも僅かに残っている旧与党から追求されたところで、実際に国防のために不可欠な費用なのだが。

「もう終わりがいな。仰山倒したわ」

適当な方言を呟いた身元不明の政府協力者は、最後の一匹である十六体目のアルプに襲い掛かり、背中から腹部まで一気に貫き通した。

そして無線越しに戦闘終了を告げると、串刺しにされて魔法で痺れさせられたまま転がるアルプを回収し、次々と無力化する作業を開始した。

レベル〇の人間は、アルプが身じろぎだけでも骨折するので、無力化作業には特に念を入れる。まずは手で串刺しになっているアルプの翼と四肢を根元から折り、身動きが取れないようにした。

何やらギアギアと鳴いているが、ここで容赦など一切しない。だが魔石の力を他人に吸収させるためには、次郎単独で殺してしまふ訳にはいかない。そのためアルプの胸部に石ナイフで切り込みを入れて、トドメを刺し易い様にするまでで留める。

次郎がレベル三〇に至るまでには、難易度の低いチュートリアルダンジョンですら中学時代の一年三カ月を費やした。

それと比較すれば、僅か二週間で実質的な作業時間が夜の三時間のみというレベリングが、一体どれほど理不尽であるのか良く分かる。

超人を生み出す対価として一人六〇〇〇万円という金額は、野球選手の獲得金を思い起こせば少なすぎる。要求すれば一〇倍でも払うだろう。

（でも一八億を超えても、使い道が無いしなあ）

次郎は考え事をしながら、余裕で解体作業を行い続ける。その様子をモニター越しに見ていた連隊本部は、ようやく息を吐いた。

もつとも今回の作戦を通して、頭の痛くなる問題も見えてきた。

先程の戦闘では、攻略特典という特殊能力は用いられず、単に高レベル者の戦闘力が示されたに過ぎない。すなわちレベルさえ上げれば、先程の脅威の戦闘は誰でも行えるようになるのだ。

諸外国の軍人や工作員、テロリスト、反政府勢力などが高レベルを得た場合、新時代の市街戦は地獄となる。

魔石を用いない携行火器類の大半が無意味になり、魔法が飛び交う新時代の戦闘に危機感を抱いた防衛課長は、共に派遣されてきた井口和馬大臣秘書官にその事を問うた。

すると井口秘書官は、むしろ平然と答える。

「レベルには、同じくレベルという対抗手段があります」

「それでは今後の自衛隊には、彼のような高レベル者が求められるようになるのですか」

「ダンジョンが魔物を放出する以上、高レベルが求められるのは必然です。第二陣には頑張つて貰い、彼個人に依存しなくても第三陣以降のパワーレベリングを行える体制を確立したいと大臣は考えておられます」

モニターの向こう側では、アルプにトドメを刺す第一陣の面々が、急激にレベルを伸ばしていた。

45話 生徒会長選挙

次郎が夜のお仕事に初出勤した翌日。

二学期の中間テストが終わった七村高校は、生徒会長選挙へと突入した。

七村高校の生徒会長選挙が二学期に行われるのは、消去法による唯一の選択肢だからだ。

一学期に実施すると、まだ学校行事がよく分からない一年生が置き去りとなり、有権者の三分の一が実質的に排除されてしまう。市立学校の選挙で、有権者の三分の一を置き去りにする事が出来るわけが無い。

三学期に実施すると、二年生が当選した場合には任期を終える頃には大学受験の真つ最中となり、まともな引き継ぎが出来なくなるからだ。当選するのは大抵二年生であり、こちらも好ましくない。従って二学期が、生徒会長選挙を行う最良の時期となる。

生徒会長の任期は、一〇月下旬から一年間だ。

七村高校の生徒会は、九月末の学校祭を最後の仕事として全ての業務を終了する。そして一〇月半ばまでに新会長の立候補が受け付けられ、中間テスト後に公示、一週間後に演説会と投票、最後に新生徒会の発足となる。

「それで、キタムーが立候補の届け出をしていたと」

「おう。ジロー、当然分かっているだろうけど、友情票を頼むぜ」

「そしてナカさんが応援演説をするよ」

「任せろ。ジローは部活の後輩に票を依頼してくれ！」

「お前ら正気か」

休み時間中の教室内で、立候補者と応援演説者の二人がアピールを行っていた。

朝のホームルーム中に配られた学級通信には、確かに北村の立候補が記載されていた。

だが次郎としては、投票を依頼するのであれば公約の一つくらい説明して欲しいと考える。勿論、脳天気な表情からは持ち合わせている様子が窺えない。

では北村は、一体何のために立候補するのか。

そもそも歴代の生徒会役員の半数ほどは、大学への学校推薦狙いであるらしい。

七村高校は、県内の国立大学に指定推薦枠を持っている。生徒会長、副会長、会計の三役は、非行さえ無ければ成績を問わず推薦して貰えるそうだ。

おそらく北村は、目の前にぶら下げられた人参に食らい付いたのだろう。

そして中川も、副会長という人参を共に食うと思われる。何しろ生徒会長は、自分の補佐を行う副会長と会計を指名できるのだ。

そのような報酬でも無ければ、全国の高校で毎年生徒会が滞りなく結成されるはずも無いのだが、本物の政治家達の攻防を見た直後の次郎としては、お粗末さが際立って見えた。

「うちの部は、個性派揃いだからなあ」

私利私欲に塗れた動機を察した次郎は、一人の部活の後輩たちを思い浮かべながら、洪面を作ってみせた。

果たして自由奔放な山羊たちから集票するには、どうすればいいのか。

一年一組の浜野亜理寿は正統派優等生なので、自分の票は自分が納得した相手に入れるだろう。

本気で口説くなら、生徒会の具体的な問題点と解決案を事前に説明して、納得して貰うしかない。生徒会に關与する氣が無い次郎では、説得は不可能である。

同じく一組のアメリカ人ハーフは、部活の先輩の友達というナアナアは通じそうに無い。一方で韓国人ハーフは、頼めば意外に聞いてくれそうではある。但し、以降は深みに嵌まりそうでもある。

二組のドジ優等生は、市立高校で教師が誘導する生徒会を冷めた目で見ているような雰囲気があり、最初に頼んだ候補にそのまま入れそうだ。

三組の同人誌描き、四組のオタ女と万事同調型の三人は、三次元の生徒会に拘りは無さそうなので、おそらく先着順で決まる。なお投票先の決定後は、変更依頼が難しい。

五組の拝金主義は、簡単に買収できる。相応の条件を出せば、さらに集票までしてくれる頼もしい後輩だ。同じく五組のリアリストは、意外に芯がしっかりしているので、真面目に公約を見比べそうである。

七組のおっとりは、ペースを掴んでコントロールするまでが非常に難しい。彼女に掛ける労力で、他を三人集票できる。八組の乙女ゲー好きは、依頼者の交友値次第である。

だが彼女達のクラスに立候補者が居た場合、難易度はとても高くなる。

次郎が思い返すと、一一匹の山羊たちの中で労せず確実に得票可能そうな相手は、誰一人として居なかった。

もちろん今回は北村の動機が不純なため、後輩に頼んで回る氣は起きない。

だが仮に自分が立候補した時にはどうなるのかと思ひ直し、意外に票が入らない事に衝撃を受けずには居られなかった。

羊の振りをして寝ていた次郎の先輩としての信望は、ほぼ皆無である。

「そういえば他の候補って、どこから出ているんだ？」

「二年は二組の男子と、五組の女子。一年も一組と七組から出るらしい」

「ほほう。それは多いな」

昨年の立候補者は、僅か一名だった。

全校生徒を体育館に集めての演説会は行われたが、次郎の記憶では目新しさの無い話をされて、そのまま信任投票になっていた。

信任されなければ新生徒会長はどうなるのかと思ったが、開票作業が全て教師だけで行われ、票の割合すら出されず、信任されたという校内放送が流れて選挙が終わった事で妙に納得した。

その時は、本当に形だけの選挙だったのだ。

それが今や、定数一に対して五人が争う大熱戦となっている。

立候補の届け出期間中に行われた激しい衆議院選挙と劇的な政権交代が、生徒達の行動に多大な影響を及ぼしたのだと確信させるには十分な変化だった。

「まあ票は入れておく」

「おう、頼むぜ」

悪友達は忙しいのか、同情票を約束した次郎をアッサリと解放すると、次のクラスメイトに迫っていった。

候補者五人のうち、二年生が三人で、一年生が二人というのは、決して二年生の不利には働かない。

なぜなら三年生は卒業まで僅か半年であり、今からの学校の急速な変化よりも、大きく変わらない安定を望むからだ。

その意味では一年生よりも二年生の方が好ましく、三年生の票が二年生に流れていく結果、二年生間で取り合いになって目減りする票を三年生が埋める。

選挙権を持つ老人の投票行動と同じ理屈である。

北村にとって不利なのは、北村が一組に所属している事だろう。入試時点で最優秀な生徒される一組は、他のクラスからやつかみを受け易い。

もしかすると都会の人からは不思議に思われるかも知れないが、超田舎の山中県ではそういう風潮が当たり前のように存在する。

顕著なのが二組のライバル意識で、二年二組からの票は殆ど入って来ないであろうし、三年生からも二組の票はあまり入らない。

だが五組以下になるとライバル意識は殆ど無く、自分のクラスに立候補者が居れば大半の生徒は応援するし、居なければ投票先は興味の赴く方向へと流れていく。

次郎は北村達の選挙活動を端から眺めつつ、自分の進路についても考えた。

次郎の成績はクラスで八〇一五番で、真面目に勉強する生徒の中にあって相対的には下落傾向にあるが、美也のように医学部のような大層なところを目指す予定は無いので受験には焦っていない。

そもそも現在でも稼ぎは医者や弁護士より多いのだ。

これからは土日祝日などを利用して、美也と共に上級と思わしきダンジョンでレベルを上げ、効率が落ち始める一八歳までにはレベル九〇台に突入し、高校生の間にレベル一〇〇くらいには達したいというのが当面の目標だ。

進学先に関しては、おかしなプライドを持つ父親が『大学の手堅い学部に進む以外に有り得ない。なお親元から離れて暮らす経験を積むため県外へ』と考えており、母親も賛同したため、次郎が持つのは親が決めた範囲内の選択の自由だけである。

堂下家は金だけは充分に出てくるが、その代わりに幾許かの制約はある。

なお逆らう場合、高校卒業時に就職に必要な手切れ金を出されて終わりだ。

北風と太陽のアダルト版である。

金という見えない鎖で繋がれた旅人は、七時間目まで真面目にノートを埋め続け、掃除とホームルームを終えて日々のノルマから解放されると、さらに従順な羊として部活へと赴いた。

これではダンジョンに潜りたくなるのも、道理であらう。

「いっちゃん乗り」

部室に入るや否や、絵理が小さな胸を張りながら嬉しそうな声を上げた。

二年生五人、一年生一人という大所帯になった今、次郎たち二年一組が一番乗りになる事は珍しくなった。

だが今日に限っては、一年生が初となる生徒会長選挙の説明をホームルームで受けているのだろう。

二組の塚原愛菜美は、クラスメイトが立候補したので公約を聞いていることが考えられる。本来は北村も行つて然るべきだが、担任のフナヤマンは北村の動機を色々と察したのか、クラス内での演説を手配していない。

そのため三組の丹保智美との勝負となり、二分の一の確立で勝つた結果、絵理が一番乗りを果たした次第であつた。

それから暫くすると、他の部員も続々とやって、直ぐに部室内が賑やかになった。

なお後輩達の話題は生徒会長選挙であつたが、次郎は勿論、美也や絵理、北村の彼女である塚原愛菜美ですら、北村への投票依頼は行わなかつた。

それから一週間後の一〇月二六日、木曜日。

七村高校において生徒会長選挙が行われた。

立候補者は、二年生が一組の北村亮介、二組の男子、七組の女子。そして一年生が一組の女子、五組の男子。以上の五名であった。

七村高校は、計一〇クラスで各学年の定員が二八〇名だ。

普通科以外から立候補が出るのは五年に一度くらいなのだと、七村高校の生き字引でもある顧問の大林先生は語った。

二年二組の男子は、中高とソフトテニス部所属で、気さくな性格でクラスの人気者らしい。成績もクラスで上の方で、周りからも押されての立候補だったそうだ。

但し、北村の彼女である塚原愛菜美が同じクラスに居る事を知らず、一組と二組の確執を利用しようとしてか彼女の目の前で北村への批判をしてみせて、それが噂として流れた点が致命傷となっている。

クラス内だけで話しても、情報は部活を介して拡散されてしまう。男子に比べて女子は情報伝達網が発達しており、彼候補は物凄い勢いで男女からの票を失った。

対して塚原愛菜美は、彼氏に投票してくれとは一度も言っていない。それは選挙の公平性などを鑑みての行動では断じて無かったが、なぜか美談として広がり、北村は諮らずして良識派の票を引き寄せている。

二年五組の女子は、次郎の又聞き情報ではミーハーで、衆議院選挙に影響を受けての立候補らしい。

但し副会長候補に三組の普通科男子、会計に七組の生活福祉科女子を立てるなど、バランス感覚と集票に優れた行動を取っている。

もっともその行動自体も、共和党が他党と連携して閣僚人事に配

慮した事を真似たのかもしれないが、手堅い方法で生徒に安心感を与えていた。

一年一組の女子は成績優秀、幼い頃から書道やピアノコンクールで賞を貰い、新聞に読者投稿して掲載され、市民マラソンや歌唱コンクールに出るなど、非常に多才な人物であるらしい。

彼女が構想する新生徒会の会計候補には、なんと次郎たちの部活の後輩である浜野亜理寿を口説き落としており、当選の暁には能力重視の確固たる生徒会が誕生しそうであった。

一年五組の男子は、いわゆる善人であるらしい。

彼は自分たちの学校に生活福祉科があるにも関わらずバリアフリーになっていない状況に疑問を持ち、生徒会として働きかけたいと訴えたそうだ。

もともと校内には車イス生活の生徒が居ないので、投票権を持つ生徒達への訴求性は強くないが。

そして北村は、次郎が熟知する通りである。

高い熱意と、在り来りな公約で、北村を知らない全校生徒を錯覚させている。

全校生徒が集められた体育館でクジが引かれ、出た番号順に立候補者の演説が次々で行われていく。

次郎が関心を持ったのは、一年一組の女子だった。

原稿文を持たないままに淀みなくスラスラと、それでいて抑揚がしっかりと付けられた声で先輩を立て、同級生に仲間意識を持たせ、全生徒で頑張っというと呼び掛ける主旨の演説を行った。

次郎が彼女から受けたのは安心感で、彼女がやってくれるなら任せると言う風に思わされた。立候補した北村が友達で無ければ、確実に彼女に入れていた。

そして最後に北村の演説となった。

客観的に批評するなら、大きな声だがあまり印象に残らない自己紹介と公約、具体性に欠ける努力の約束で、ネットから拾ってきたかのような定型文に思われた。

しかも原稿用紙を見ながらで、一年女子の候補に比べれば自分の本心の言葉ではないような印象を受けざるを得ない。

次郎がもう駄目かと思った矢先、演説を終えた北村がいきなり土下座を始めた。

「……………うええ？」

次郎が奇声を上げるのと前後して、全校生徒八四〇名の生徒から響めきが起る。

『どうか僕に投票をお願いします』

暫く無言で頭を下げた後、頭を下げたまま投票をお願いする北村の声からは、まさしく本心の切実さが滲み出ている。

「堂下、アレってどういうことだ？」

「知らん。むしろ知りたくない。俺に聞くな」

困惑する周囲からの問い合わせに、次郎は自分が無関係である事を強く主張した。

やがて持ち時間が尽きて、北村が疎らな拍手と共に候補者の席へと戻っていく。

次に行われたのは、立候補者への応援演説だった。

それぞれの応援演説者たちも、各立候補者に近い演説のレベルで応援を行っていく。

だが生徒達の頭には、彼らの応援する内容が殆ど入って行かなかった。

次郎も大多数の生徒の一人に属しており、各応援演説者の演説中に気になっていたのは、北村の応援演説者である中川が、一体何をやってしまうのかであった。

生徒達が静かに固唾を飲んで見守る中、ついに中川の演説が始まった。

中川は、北村が非常に良い友人なのだと紹介し、生徒会長に立候補したやる気を褒め、必ずやり切る男だと保証した。

そして自分が友人の一人として支える事を宣言し、最後に土下座した。

「「「おおーっ！」「」」

焦らされていた生徒達は、中川の期待通りの行動に大ウケして喝采を行った。

居たたまれないのは、二年一組の生徒達である。

成績優秀者とされる集団が、全校生徒の前で土下座する連中というレッテルを貼られてしまったのだ。

部活の後輩達に対しても、これからどんな目で見られるかと思うと不安を拭い去れない。

だがこれで落選したら、もっと悲しいことになる。もはや二年一組の全員が、北村に投票する以外に選択肢を持ち得なかった。

「あつ。おい、フナヤマン逃げてるぞ」

「マジか、あいつ一人だけ逃げやがった」

奈部達の声を聞いた次郎が教師達の席を振り返ると、そこには担任の舟山先生の姿が見当たらず、ちょうど体育館の扉を開いて外へ出て行くところだった。

おそらく一人だけ逃げるのだろつ。

美也に漢字検定の準一級を受験させながら、密かに勉強して自分で一級を受験した時と同様、実にセコい行動である。

壇上では一年一組の女子が、土下座をする次期副会長を見て呆れていた。

一年五組の男子は生暖かい目で、二年二組の男子は侮蔑し、二年五組の女子は率直に笑っていた。

同日、北村が当選した旨の全校放送が流れたが、二年一組の生徒は若干二名を除いてあまり喜ばなかった。

「高校生に選挙権を持たせたら駄目だな」

高校二年の秋、次郎は民主主義の恐ろしさを理解した。

46話 ブラックバイト（前書き）

今話は、一部の読者様に大きなストレスを与える恐れがあります。要約レベリングで調子に乗った子供二人が馬鹿をやって処分されるお話。

作者的には必要なので書きましたが、読み飛ばして頂いても大丈夫です。

次話と次々話は、ストレス発散のため？に短編を挟みます。

46話 ブラックバイト

塔型円柱で撃破するアルプの数は、一夜で一八〇匹以上。

一分未満で一匹を捌き続け、御令息・御令嬢の経験値にする。

これは次郎のハイレベルを最大限に活かした、自衛隊の常識を完全に逸脱したレベルの上げ方だった。

月月火水木金金というスケジュールで、推定レベル三六の魔物を各自が一日六体も倒した結果として、九夜にして全員が最低目標のレベル三〇に達した。

これを過酷と称すには、あまりに難易度が低すぎるだろう。少なくとも集められたお坊ちゃまお嬢ちゃまは、全員が達成できた。

最も過酷だったはずの次郎すら平然としており、土日は毎晩三時間の作業の他に、美也と共に自分たちのダンジョン探索も行った程だ。

そのため第一陣の目標値は、レベル三一に上方修正されている。

一人を選抜して確認したところ、レベル三一に達するためにはアルプを合計六八体倒せば良いと判明した。

全員のレベルが上がった事で、魔物の処理が適当で済むようになった次郎の手間は減っている。そのため第二陣が来る一月一日までには、全員が目標に辿り着けそうだった。

だが、あまりに簡単に力を付けすぎた弊害が出たのか、それとも元々の特権階級意識が表に出たのか、頭の痛い問題も発生していた。

「離せ、この野郎っ、ふざけんなコラッ……………グエッ」

捕まれたまま腹部を膝蹴りされ、肋骨を数本纏めて折られたのは、

問題を発生させた選抜者の一人だ。

彼は、外出を禁止された連隊拠点から無断で離脱し、能力を使って民間人を暴行し、捕まえに来た自衛隊にも反抗した。

動機を纏めると、暇を持て余して、力をひけらかしたくなっただけだ。

魔物の危機が迫る現状で、それを退治に行く自分が罰せられる事はないと高を括っていたのか、彼は好き勝手に振る舞った挙げ句、夜になると当然のようにレベリングに参加しようとした。

社会経験が皆無で、甘やかされたお坊ちゃまの、度し難い思考回路だ。

彼のような危険な人間に、国家が転移能力を持たせられるわけがない。

さらに彼を許容すれば、他の隊員の倫理観にまで悪影響を及ぼす。国内外からも、特攻隊が彼のような集団だと誤解されれば、そのような集団を高レベルにして特典まで持たせるのは危険だと批判を浴びて、攻略活動にも差し障りが生じるだろう。

事態は直ちに政府へ報告され、攻略活動への妨害行為を行った彼は、国家の緊急避難で排除される事となった。

『鈴木竜生、貴様には失望した』

蹴られた腹部を押さえながら呻く彼に対し、旅団長は冷酷に告げた。

旅団長は彼よりも他の特攻隊員に言い聞かせるように、日本には魔物の脅威が差し迫っており、勝手な行動がいかに悪影響を及ぼすのかを改めて説明していった。

そして作戦を妨害する人間は、誰であろうと容赦しないと告げる。

「俺の爺さんは……………」

『鈴木茂文部科学大臣は、貴様の死に改めて同意された。苦渋の決

断をされたそうだが、同意されずとも貴様一人の我が儘で国家が滅ぶわけにはいかん。政府の最終判断も出ている』

ジワジワといたぶる旅団長のやり方に、彼を取り押さえている次郎は、次第に苛立ちを募らせ始めた。

旅団長が敢えてこのようなやり方をしているのは、力を得た御令息や御令嬢に対して、政府が彼ら彼女ら以上の力を持つ匿名の暴力集団を使えるのだと教え込むためだ。

すなわち鈴木は、特攻隊員たちへの倫理教育の教材であり、犯罪抑止のための見せしめとなる。

そんな理由を説明されて、特攻隊を取り押さえる能力を次郎しか持っていない事や、彼らを真つ当に機能させる事も必要だと感じたからこそ渋々協力したのであって、決して積極的な加担では無かった。

次郎は早く終わらせるとばかりに、掴んでいる相手の右腕を捻り始めた。

「おいちよつと待……………ギヤアアアツ」

彼の悲鳴が、旅団長の言葉を無理やり遮った。

もう一言二言は付け加えようとしていた旅団長は、次郎がストレスを感じている様子を見て話を打ち切った。

旅団長に与えられている命令の一つに、政府協力者である山田太郎を怒らせるなというものがある。

山田太郎が協力しなければ、パワーレベリングが成立しない。

その後も多階層円柱や、塔型円柱など先々のダンジョンでも協力を仰がなければならぬと予想されている。

旅団長としても、政府協力者として非常勤公務員的な立場にあるとは言え、未成年である山田太郎の手を借りなければならないのは不本意であった。

『貴様に掛ける時間は惜しい。以上だ』

「待て、待て、待つ……………」

次郎が闇魔法を送り込むと、鈴木の内内にある魔力が掻き乱され始め、身体が意志に反して動かなくなった。

身動きが取れなくなった彼が床に叩き捨てられると、既に特殊対物ライフルを構えていたレベル持ちの自衛隊員たちが、一斉に銃撃を浴びせていく。

自衛隊側がトドメを刺すのは、自衛隊は高レベル者を殺せるのだと意識付けたいからだ。そうして自衛隊の作戦指示に従わせ、最終的には日本を救う。

次郎としては、選抜者に対する教育を施しきれなかった旅団長が、自分たちの手で落とし前を付けたのだと思う事にした。

第一次特攻隊は、三四名だった。

そのうち四人程度の脱落者が出るのは、織り込み済みらしい。

報酬は脱落者のレベル上げ分も支払われるし、次郎の手を煩わせた今回の処理料は、一人につき追加で一億円になるらしい。従って今回のお手伝いは、政府承認のブラックなアルバイトの一環に過ぎない。

表に出ない次郎には、相応に表に出ない仕事が行われたわけだ。

内閣総理大臣自身が、ダンジョン問題を解決するためには法律や常識を語っている場合では無いと考えているため、労働基準監督署が頑張ったところで螳螂の斧である。

付け加えるなら、今回脱落するのは一人では無かった。

一人の人間の成れの果てを青ざめて見つめる選抜者の中から、次郎は三一番のビブスを付けた女子高生を引きずり出した。

「ちょっと、ちょっと、ねえ、なんで、何でアタシなのっ、嘘、嫌だ、待って待って」

騒ぎ立てる女子高生に、次郎は特製の猿轡を噛ませて黙らせる。相手が男子高生であれば蹴り飛ばして黙らせられたが、流石に女子への暴力には忌避感があつた。

『増田七音、貴様にも失望した』

「ソーツ、ソーツ!!」

『機密漏洩。規則違反で持ち込んだ携帯端末を用い、外部に機密情報を多数発信した。事前に情報が漏えいして国内外から作戦を妨害されれば、数一〇万人単位の国民が命を落とす。貴様はテロリストだ』

ちなみに増田が情報を発信したのは友達相手であり、既読になっていた。

自衛隊はサーバーから相手端末の情報を消し、さらに転送履歴を調べるなど飛び火した火の粉を消すために躍起となっている。

『我々は貴様に掛ける時間も惜しい。以上だ』

旅団長は次郎に気を遣ったのか、早々と結論を告げた。

次郎自身は男女差別をしているが、それでも特攻隊の面々には男女差別がない事を教え込まなければ意味が無い。嫌々と魔力を送り込み、動けなくなった彼女を床面へ投げ捨てた。

次郎にお膳立てされた自衛隊は、一斉に銃声を鳴り響かせた。

彼女は特典や報酬に目が眩んで立候補すべきでは無かったし、周囲も彼女に正確な評価をして同意すべきでは無かった。候補は沢山居たのだから、彼女である必要は全く無かったのだのだ。

なお推薦者以外への告知は、作戦終了後に行われる。

二つの物体が運ばれていった後、選抜者達の大半は重苦しい足取りのまま、いつも通りの作業に戻った。

内心で動揺していたのだとしても、レベル〇ですら出来た作業を繰り返すだけなので、身体だけは問題なく動く。

彼らが動き出すのを見届けた旅団長は通信を切ると、背後を振り返って直立した。

旅団長の後ろには、三人の人物が座っている。

防衛大臣の広瀬秀久、引責辞任した前任者に代わる新任の統合幕僚長、同じく新任の陸上幕僚長。すなわち昔風に言えば、軍務大臣と大将二人だ。旅団長が少将で偉いとは言え、彼らの前では借りてきた猫のように大人しくなる。

「ご苦労だった。座ってよろしい」

「はい、失礼致します」

旅団長が着席すると、広瀬大臣が列席の面々を見渡して口を開いた。

「諸君らの懸念は理解している。あのような甘ったれた子供達に力を与える事は、政府も好ましく思っていない」

統幕長と陸幕長は黙したまま待ちの姿勢に入る。

「だが政府は、三つの理由で容認せざるを得ない。第一に、このままでは来年一月に、都道府県の半数以上が魔物の群れに襲われる。生きるか死ぬかの二択である以上、子供を使う以外に生きる手段が無いのであれば、やるしかない」

自衛隊の攻略速度では、年内に茨城県、静岡県、京都府、新潟県、

長野県と順に攻略していけるものの、それ以下の人口である都府県にまでは手が届かない。

未攻略地は二八都府県にも及び、該当する地域では数千万人の人々が生命の危機に陥り、疎開させても国土は使い物にならなくなる。だが阻止する為に自衛隊が数で押そうにも、ボス部屋には突入者に比例した敵が湧き出てくる。

レベル一桁の自衛隊員をどれだけ揃えても、投入数の数十倍に及ぶレベル一五の雑魚蜘蛛を増やされては勝ちようがない。

従って、レベルを爆発的に引き上げた少数精鋭で挑むより他に方法が無いのだ。

「第二に、早急に実行するためだ。選定の基準を決めるだけで一年以上掛かる行政を絡ませる時間は無く、誰を行かせても人道や公平性で批判が起こる。故に政治家が身を切り、自分たちの子供や孫、甥や姪に説明し、本人の同意を得て特攻して貰うのだと言えば、最も反発が少ない」

未成年者を巨大な女郎蜘蛛の蔓延るボス部屋に放り込む事には、大抵の人が眉を顰めるだろう。

では結局、誰を行かせるのか。

今回は、行けと命じる総理以下の大物政治家たちが最初に自分たちの子供や孫を差し出した。それは肉親としては残酷でも、自ら範を示すべき政治家としては、国民に範を示せている。

「第三に、攻略特典と呼ばれる能力について、我々は核兵器の保有国に転移と収納を持たせる意志や、国民を諸外国の人体実験に差し出す意志は無い。そのために力を持つ政治家の子や孫たちに能力を持たせ、全員で一致団結して要求を断る必要がある」

三つの理由を説明し終えた広瀬議員に対し、統幕長が硬い笑顔で

口を開いた。

「それでは僭越ながら、第二陣には自分の孫にも出て貰いましょう。統幕長の身内も特攻隊に加えれば、防衛省や自衛隊からの抑止効果も増すかと思考します」

「本人の意志はどうなのだね」

「自衛官になりたいと言っておりまして。未だ中学二年生であるため、時期は遅れそうですが」

「いや、将来確実に任官するのであれば、一年早くとも構わない。

第二次特攻隊の後に続く年代にも基幹要員が必要になる。私から彼に、一枠増やすよう依頼しておこう」

大臣と統幕長のやり取りを聞いていた旅団長は、部屋の端に居る連隊長に目配せをした。

連隊長は軽く頷く仕草で了解の旨を伝え、第二陣に一名の追加を差し込んだ。

それから三日後。

充分な経験を積ませた三二名は、残らずレベル三一に達した。

各々は五、六名ずつで班を組み、一月四日に魔物が溢れ出でくるであろう未攻略ダンジョンの地上付近において、戦闘訓練と連携訓練を兼ねた魔物退治を手伝う。

なお政治家の票集めだとの批判を避けるため、全員が推薦者の小選挙区とは異なる県に配属される予定だが、純軍事的には特に影響はない。

そうしてダンジョンの地上付近で経験を積んだ若鳥達は、そのま

ま五、六人毎に六チームに分かれて各ダンジョンへ潜る事になっている。

総合評価が上がるように魔物退治を行い、多少はフロアも埋めながら攻略を進め、一月中にはボス部屋に突入する予定だ。

「それで三三羽の雛鳥たちを育てるのに掛かった餌代は、いくらだね」

「第一陣は、総額二億四〇〇万円であります」

「輸送ヘリ一機よりも安いな。それで半月で六県が救われるか。作戦が好みでは無いなどは、言っておれんな」

金額を聞いた陸幕長は、輸送ヘリ一機よりも安く済んだ費用と、予想される成果とを比べて、作戦が好みでは無いという私的な考えを引っ込めた。

自衛隊の予想では、送り込まれる六カ所の全てで圧勝だ。レベル三一の五名と、レベル三〇の巨大女郎蜘蛛の二体との戦いとなる。

三人と二人に分かれて別々のボスに向かい、三対一の方が先にボスを始末してから残りに合流すれば、終始圧倒するだろう。

もちろん個々の状況次第では、作戦通りに進まない事も有り得る。例えば、二人側のうち一人が雑魚の対応に手を取られて居るうちに、もう一人がボスと相打ちと言う最悪のケースも想定される。

だがそれでも突入した彼らが全滅する可能性は低く、一人減った所で次の攻略にも支障は無い。

第一陣は、時期的に第三次攻撃まで行えて計一八カ所を攻略出来る。

第二陣は、第二次攻撃と第三次攻撃で、計一二カ所を攻略出来る。それらに自衛隊の四カ所を合せれば、年内に三四カ所を攻略出来る。

未だに残る初級ダンジョンを全て攻略するには、それで充分だ。

「来月からは第二陣の育成だ。旅団長、頼むぞ」

「はい。第一陣の二名を処分した映像を見せて、二度と馬鹿な気は起こさせないように厳しく教育致します」

こうして最初の若鳥たちは、山中県の育成場から静かに飛び立っていった。

47話 短編 ハロウィン前編（前書き）

今話と次話は、短編です。

本編と短編は別物・別人物であり、本編には何ら影響しません。

これらをご了承の上、次の二択からお選び下さい。

「今話と次話を飛ばす」「今話と次話は飛ばさず、作者を叱らない」

47話 短編 ハロウィン前編

かつてヨーロッパの一部で秋の収穫祭を行い、悪霊払いを行っていたハロウィン。

そんな伝統行事が永い年月を掛けて次第に変質し、今では子ども達がお化けに扮して近隣を周り、『Trick or Treat』（イタズラか、御馳走か）と言ってお菓子を貰う地域住民の子供と大人の交流の日になった。

アメリカでは、伝統的なハロウィンの文化を受け継ぎつつも、子供だけではなく大人も仮装して出迎えるようになり、仮装パーティーなども行われるようになった。

それが近年では日本にまで波及して、日本では若者がコスプレをして、都会を練り歩く日となっている。

これら一連の流れを見ていけば、日本のハロウィンがコスプレ行列になる理由も理解できなくは無。

日本では既に神輿や獅子舞などと言った収穫祭が存在しており、カボチャの収穫も一般的では無く、元来のハロウィンが田舎に入り込む余地は無かったのだ。

お菓子を貰い歩くトリックオアトリートも、お菓子をくれなければ悪戯をするという脅し部分が、日本人の大半の感覚では受け入れられなかったのだろう。

その点コスプレであれば、コスプレを行いたい個人が手間を掛けるだけで、近所にお菓子を求めたり、諸準備で地域に負担を掛けたりするわけでは無い。

しかも昨年用いた衣装を一回で使い切るのは日本人の精神では勿体ないと思うため、何年も出てくるグループが多く、参加者は一向に減らなかった。

そうして日本のハロウィンのコスプレ行列は続けられ、次第に伝
統化し始めている。

そんなハロウィンのイベントに、次郎と絵理が訪れていた。

二人がハロウィンに参加した経緯は、生徒会長選挙の一週間前ま
で遡る。

一〇月一九日、木曜日。

会長選挙の説明を受けていた一年生や、立候補者の話を聞いてい
た二組の塚原愛菜美らに先んじて部室に入った絵理は、照明やパソ
コンの電源をパチパチと付けながら、人懐っこい笑顔で猫なで声を
出してきた。

「ねえジロー君、美也っち。ボク、お願いがあるんだけどさ」

「なんだよ」

「何？」

途端に悪い予感がした次郎と美也は、顔を引き攣らせながら怖ず
怖ずと話を促した。

「図書文芸部としての、創作とお披露目で遠征をしたいんだ。一〇
月二八日の土曜日に、渋谷でハロウィンの仮装イベントがあるんだ
けど、参加したいからジロー君を貸して欲しいな」

「どうして俺なんだ」

「だって部の遠征記録にはするけど、半分くらいは私的な用事だし。
土日の遠征で泊まりになるから部の女子は誘えないでしょ」

「うーん」

次郎は美也の様子を窺ったが、基本的に関わりたくないオーラが
滲み出ている。

次郎もご遠慮願いたい、一年半もクラスメイト兼同じ部活同士

で付き合いがあつた結果、オタクイベントが絡んだ時には絶対に引かないタイプだと分かっている。

もしも断れば、奥の手を使ってくるだろう。

例えば『チュートリアル』の映像。誰かに似ていた気がするけど、あれって金色コウモリを黙っている事の範囲内だったかな』などと言われれば、非常に面倒なことになる。

最初からそれを口にしないのは、アレが広瀬防衛大臣や井口総理大臣から出されているため、流石に危機意識が芽生え始めているのだと思われた。

絵理は、趣味嗜好が特定分野に極めて偏っているだけで、知能や判断力は決して低くないのだ。

「分かった。二八日の土曜日から二九日の日曜日に掛けてだな？」

「うん、ありがとう」

次郎の夜のアルバイトは、一日休む事になりそうだった。

レベルアップの速度が当初の予想より速いので、特に問題ないだろうが。

「それで仮装って、学校祭の時に着たのを使うのか？」

「そうそう。一回だけじゃ勿体ないから！」

途端に陽気になった絵理が、強い口調で肯定した。

二年一組は先月の学校祭で仮装行列を行ったのだが、絵理が用意した衣装は中級ダンジョンの地下一階に出てくるインプをデフォルメ化したもので、実物には似ていないが、革製の黒い翼や三叉槍まで細かく作り込まれていた。

次郎はネットで購入したトノサマバツタのコスプレで、リアルでキモイとウケていた。お値段は十六万円で、これまでの人生で最も高価でお馬鹿な買い物だった。

「綾村さんの他には誰が行くの？」

「山中県からは誰も行かないよ。現地集合でレイヤーさんたちと合流」

美也が確認をする間に他の部員が続々とやって来て、話は途切れで終わった。

それから九日が経ち、ハロウィンのイベントが訪れたのである。

「言うなれば、ボクたちは文化の担い手なんだよ。つまり巫女さんだね」

「ナドト、ハンニンハ、キョウジュツ、シテオリ……………」

午後七時四二分。渋谷は四方八方、物凄い人出だった。

群集の統制を諦めて久しい警察は、歩行者天国の地域を拡大する応急処置と、開催日時や開催地域を拡大して人の分散を図る根本策を取っている。今年は一〇月三十一日が火曜日のため、開催日時は一〇月二十八日の土曜日から三十一日までの四日間に分散した。

しかし昨年からは新宿方面がダンジョン発生によって使えなくなっており、そこから流れてきた人達で渋谷方面は相変わらずの大盛況だった。

次郎が目の前を通り過ぎていった金色の大仏頭の男達を二度見すると、その端には女子の水着を着た男達が走っている姿が見える。

交通整理をしている警察官は、アレを捕まえないで良いのだろうかと思った次郎であったが、警察の方はそういう類いの連中を見慣れすぎているようで、もはや違和感すら覚えならしい。

三人で巨大な三ツ目頭に扮した化け物を通り過ぎ、二二世紀の猫型ロボットが六〇年ほど時代を先取りして現われる。かと思いきや、十字架を背負った二〇四五年ほど前の宗教家も、アスファルト上を裸足に腰蓑姿で歩いていた。

やがて現われる、カボチャ神輿と法被^{はっぴ}にふんどし姿の男達、カボチャ姫とカボチャ兵団、そして何故かサンタクロースとトナカイ達。遠方の歩道には、緑色に輝く謎の巨大風船が滞空している。

あまりにも混沌とした世界に飲まれた次郎は、渋谷駅の改札口を出てから僅か三分で白目を剥き、その状況に至ってようやく絵理のコスプレ姿が腑に落ちた。

バイト代を注いで作り込んだであろうインプは、山中県の七村高校においては激しく浮いていたが、ここ渋谷では見事に溶け込んでいる。

周囲には同レベルのコスプレを着込んだお洒落な女性が大量に居て、男子もウケ狙いから本格的なものまで多様に揃っていた。

多分おかしいのは絵理ではなく日本で、山中県は日本に取り残されているだけだろう。

都会人に溶け込んだ絵理は人の波に乗りながら道玄坂方面を一〇分近く歩いて、血糊で彩ったハイクオリティなインプたちが群れている中に入ってしまった。

「すみませーん、遅くなりました」

「おおつ。本当に来たねエリー」

「山中県から来たんだ。凄いじゃん」

絵理が合流したのは、絵理の同人作家仲間だった。

大学二年の小山奈津と大西陽彩^{ひいろ}、大学一年の東山希愛^{のあ}は、同じ高校の漫画研究会に所属していた先輩後輩で、今も一緒に漫画を描いているオタ女だ。

主なジャンルは女性向けアニメで、オンリーイベントには高い頻度で出るらしい。

このうち大西は吸血鬼のコスプレをした彼氏、東山は頭部をチスイコウモリに扮した彼氏をそれぞれ連れて来ており、おどろおどろしい彼らはインプ達のナンパ除けを兼ねている。

小山にも彼氏は居るが、その彼はオタク活動にあまり理解が無く、インプ姿に眉を潜められるために呼んでいない。

四人目の片岡舞華は、絵理の一つ下の高校一年生だ。

舞華は絵理と同じく漫画を描き、同人イベントにも出てくる戦友のような関係だそうで、二人は大学生達三人組に誘われて今回八口ウインに参加した。

もともと舞華が神奈川県民であつたのに対し、絵理は山中県民であつたため、絵理の方は無理だろうけど一応念のために誘つてみたという次第である。

二人の画風は、絵理が広く支持される今風のスタンダードなものであるのに対して、舞華はスタイリッシュで格好良い絵を好んで描く。

どちらが売れるかと言えば二人とも同じくらいだし、スタンダードな画風から外れても絵理と同等の支持数を得る舞華の画力は、実際のところ絵理よりも高い。アニメーターになるなら絵理、オリジナルの漫画を描くなら舞華といったところだ。

絵理もかなりオタク界に精魂を注いでいるが、それを上回る一学年下がいる事に対して、次郎は改めて世の中の広さを認識した。

「いやあ、親の説得には苦労しましたよ。あ、山中県からトノサマバッター匹連れて来ました。名前はジローくん。ほらご挨拶」
「ヤア、トノサマバッター、ジローダヨ。ソラモ、トベルヨ」

同人作家さん達の前で何かしなければと考えた次郎は、バッターの着ぐるみをフル装備のまま、その場からジャンプしてバク転をして見せた。

単なるバク転であれば、体操部で大会に出るような人は概ね出来るが、着ぐるみを着て行うのは桁違いに難易度が高い。

プロ野球の開幕式で飛び跳ねる一部マスコットキャラの中の人

大衆の前でやっているの、レベルが無くても不可能では無いが、あれは野球選手並みに凄いプロである。

「「おおー！」」

「わあ、凄い凄い」

案の定パフォーマンスがウケて、魔物以外の周囲からも拍手が送られた。

田舎のバッタに対する評価は、単なるバッタから飛べるバッタへと上方修正された。

この界限では、山中大大学の空手部のようにレベルがあってズルいという考え方は薄く、面白ければ良いらしい。ハイクオリティな魔物集団にあつての既製品感は、充分に補えたようである。

「ドウモドウモ」

山中県民の尊厳を守った次郎は、かぶり物の頭のままへこへことお辞儀をした。

すると舞華が歩み寄って来て、ジッとバッタの頭部を見つめた後、バッタの頭部に触れてくる。

「ジローさん、これは手作りですか？」

「チガウヨ。アマゾン、ノ、テンネンモノダヨ」

熱帯雨林のごく一部には、多種多様な生態系が混在するのである。

「お値段はいくらでした」

「ニホンゴ、ムスカシイネ」

「頭、外してみても良いですか」

「ヤメテ、シンジャウ。ナカミ、デチャウ」

次郎が抵抗する間もなく、舞華は背後からバツタの頭部を持ち上げて、素早く抜き取った。

そして露わになった次郎の頭部を、四名のインプ達が蹴るように眺め尽くす。

「ああつ、中身が出てしまった」

「おー、意外にイケメンじゃん」

そう評したのは彼氏を連れて来ていない小山奈津であつたが、相手が大学生のお姉様であるので、社交辞令も入っていたのだろうと次郎は考えた。

さもなくば華麗なバツタジャンプと、バツタの頭部から顔を現わした事で、偏差値も補正が掛かったのだろう。

「ジローさん、年いくつですか？」

「舞華さんより一つ上の高校二年生。絵理とはクラスメイトで、同じ部活」

「あたしの一つ上ですね。それならあたしも呼び捨てで良いですよ」

「舞華」

「ジローさん」

「舞華」

「ジローさん」

「舞華、結婚しよう」

「一生オタ活に専念させてくれるならオッケーです」

「流石、絵理の知り合い作家さんだわ」

「いえいえ、それほどでも」

意気投合したトノサマバツタとサイドテールのインプは意味深に笑い合つと、絵理の方を振り向いた。

「そういえばジローさんとエリーって、明日どうやって帰るの？」

「適当に新幹線ですよ。今日はトコトン練り歩くぞー」

「流石エリー」

「えっへん」

絵理の鼻が、ピノキオのように高々と伸びる。

話が落ち着いたタイミングを見計らい、集団のリーダーの一人である大学二年の小山が声を掛けた。

「ねえエリー、バツタ君はどれくらい歩ける感じ？」

「ダンジョン産のバツタよりレベル高いです」

「おおー。それじゃあ、容赦なくレッツゴー」

「「「はい」」」

小山が先頭に立って歩行者天国を歩き出し、その後ろに大西と吸血鬼の彼氏、東山とチスイコウモリな彼氏が続く。

そして大学生達の後ろに絵理と舞華が並んで歩き、トノサマバツタの着ぐるみが追いかける集団が完成した。

最後尾のバツタは複眼の穴で周囲を見渡し、恐竜が大地を踏みしめるような重量感で、ノシノシと路上を歩んでいく。

目の前にはカジュアルショートなインプと、ツインテールの片側をバツサリ切ったようなサイドテールのインプが連れ立っており、前に行く大学生たちを第一グループとするなら、絵理達で第二グループのようなものが形成されていた。

「エリー、血糊してないの？」

「時間なかったよ。この辺は良いけど、都会に来るまでは血糊していたら、救急車を呼ばれるし」

「そう。じゃあ付けようか」

「いえす、マイマイ感謝」

舞華は腰に付けた黒い革製のショルダーバッグから、慣れた手つきで血糊と化粧道具を取り出すと、絵理の顔に素早く血糊を塗り始めた。

歩き出した次郎が周囲を見て回ったところ、佇んでいる女性仮装者に対して男性は見定めをしており、一緒に写真を撮って欲しいと依頼している姿が散見された。

写真を名目として自然に隣に寄ってから、女性の仮装などを褒め、雑談で親しくなるなどして連絡先を交換している。

次郎が面白く感じたのは、都会のハロウィンは男女の出会いの場も兼ねている点だ。

ストリートに可愛い等と褒める男性がいた場合、周辺の女性は褒められる対象が自分で無くても動きを止め、男性視線でお淑やか、或いは可愛く振る舞っている。

女性側も期待があるのか満更ではない様子で、このように軽々とナンパできる都会の環境に、田舎者として軽いカルチャーショックを受けた。

「ジローさん、左手借りますね」

サイドテールのインプが、トノサマバツタの左腕に掴まりながら体を預けてくる。トノサマバツタも普段の監視が無いのを良い事に伸びてきた指先を絡め合う。

その動きを目ざとく見つけたカジュアルショートなインプが、バツタの右腕を掴んで引き寄せた。

「ジローくん、サイドテールが好きなの？」

「バツタ、シヨツカク、スキ」

バツタを自認する着ぐるみ男は、バツタとしては当然の行動だとばかりに開き直った。

それに触覚を一本持つ神奈川県インプとは、なぜか相性が凄く合う。

ちなみにバツタが自己弁護するならば、美也はツインテールなので触覚は二本になる。

また綾香は髪の一部を編み込んだ長髪で、両肩から身体の前側に髪が流れているので、見る人次第では二本の触覚になるかもしれない。

今回の場合は触覚が無い絵理と、触覚が一本ある舞華との比較で、一本の側に惹かれただけである。

「それなら触覚が二本あるダンジョン産のバツタとは、相性が抜群のはずだよね。――一月四日の土曜日、ボクと一緒にダンジョンに行こうか」

「アイツラ、シュゾク、チガウ」

「駄目。ボクとレベル上げに行くの。四に上げたいし」

「バツタ、ニホンゴ、ムズカシイ」

あくまで知らん振りをするバツタに対し、絵理は日本語以外で要求を出してきた。

Why don't you go the Dungeon
With me?

（ボクと一緒にダンジョンに行こうよ）

Unfortunately, Eri don't have
my favourite antenna.

（残念だけど、絵理には俺のお気に入り触角が無い）

二学期の中間テストでクラス五位だった絵理の攻撃に対して、一

二位だった次郎はタジタジになりながらも、美也から習った英語で言い返す。

その様子を面白そうに見ていた舞華が、横から英語で参戦してきた。

Then, could you take me there?
(それなら、私を連れて行って頂けませんか?)

Sure, let's go on a date on Saturday. Oops.

(もちろん、土曜日デートしようぜ……シマッタ)

中途半端な英語力でデートの約束を取り付けてしまったバツタの頭部を、絵理が白い目で見つめる。

「ジローくん、どうしよっかなあ?」

「ミンナ、トモダチ、ハナシアオウ」

状況に流されてしまった次郎は、素直に白旗を揚げた。

普段に無い行動を取ったのは、ハロウインの場の雰囲気や、パワーレベリングでストレスが溜まっていた事などが原因だろう。そのためだろうか、サイドテールのインプの誘惑に抗い難かった。

絵理は仕方がないとばかりに、やれやれと首を振る。

「マイマイ、ボクはジローちゃんと付き合っているわけじゃないから」
「えっ、そうなの?」

略奪愛的な流れを面白がっていた舞華は、すんなりと絵理が引き下がった事に意外そうな表情を浮かべた。

「うん。だから遊びに行ってもボクは構わないけど、このバツタ、

「凄く仲の良い幼馴染の子とか居るからね」

「そんなの別に良いよ。山中県って厳しいね」

「ええっ、あー、うん、ボクは良いけどね」

普段の次郎と美也の様子を知る絵理は疑問符を浮かべるが、舞華は全く気にした素振りを見せなかった。

「それじゃあダンジョンが残っている山梨県にしましょう。連絡先交換して下さいね」

「バッタ、ケイタイ、コレ」

収納から取り出した携帯端末を操作しつつ、妾候補までいる事は黙っていようと心に誓ったバッタであった。

48話 短編 ハロウィン後編

次郎と舞華が赴いた山梨県は、甲府駅前にダンジョンが出現している。

出現の際には、駅の南側にあった県庁北別館や県議会議事堂を飲み込んだ。

そして今後ダンジョンが中級に変化した暁には、隣接する山梨県庁も消えるだろうと予想されている。

そんな県庁の南には山梨県警察本部があり、警察はそこを司令塔として山梨ダンジョンを封鎖中だ。

県議会議事堂の東側に残った舞鶴城、駅北の県立図書館や甲府合同庁舎、西側の労働局などは自衛隊に全て接收され、前線基地として魔物殲滅に利用されている。

政府が指定した魔物出現時の警戒区域は、甲府駅から半径四キロ弱。

東は、約三・二キロ先の酒折駅まで。

西は、約三・〇キロ先の甲府高校付近まで。

北は、約三・二キロ先の金峰神社付近まで。

南は、約三・六キロ先の甲斐住吉駅まで。

その範囲に住む人達は、奇数月の四日には退避を勧告される。

これは非常事態宣言下において、従わない場合は実力での排除も辞さないという、強い強制力を伴うものだ。

但し甲府駅を中心は、二〇四五年現在において人口五〇万人を擁する甲府都市圏の一角であり、指定地域にも一〇万人以上が住居を構える。

そのため避難先が不足しており、他県同様に早急な攻略が望まれていた。

二〇四五年の十一月に入った最初の夜、政権交代後初となる魔物大氾濫を三日後に控えた新政府は、広瀬防衛大臣による魔物迎撃戦の記者会見を開いた。

井口内閣の発足から、僅か一六日後の事である。

新社会人であれば、採用から半月しか経っておらず、未だ何も分かっていないに等しい。また対立政党による政権交代であり、本来はあつて然るべき引き継ぎも、まともに行われていない。

何かを為すにはあまりにも期間が短く、通常であれば前政権が埋設した地雷の確認作業に追われているところだ。

しかし広瀬大臣は、並の政治家とは一線を画していた。

彼は政権交代前には、ダンジョン問題を独自調査し、検証作業を行い、その結果を基に特攻隊という具体的な対応策を練り、作戦に動員する人員や関係者への同意を取り終えていた。

そして政権交代後には、圧倒的な民意と命令権、法的根拠を以て不服従者の頭を押さえながら、自身が最も信頼する秘書官を手配した人員に張り付け、妨害される前にさつさと現地へ送り込んだのだ。

広瀬は防衛大臣に就任した時点で、自身と井口総理が手配した人員だけで初級ダンジョン問題を解決できる体制を整えていた。

そんな広瀬大臣は記者会見において、魔物迎撃戦の一部を国内メディアに公開する旨を発表した。

東北地方は福島県、中部地方は岐阜県、近畿地方は三重県、中国地方は岡山県、四国地方は愛媛県、九州地方は熊本県。

何れもカマキリ発生までに自衛隊の対応が間に合わないといわれている県だ。

加えて各ブロックでは、対応できない県では最大の人口を擁する。そこでお披露目される『第一次特攻隊』が、年内に日本中のダン

ジヨンの約半数を攻略する予定だと発表されては、メディア側も色めき立たざるを得ない。

該当する各県には、国内外各社のメディアが全社総動員体制の元、公式非公式を問わず殺到していった。

そのおかげで、今日の山梨ダンジョンは各所から殆ど放置されている。

「山梨県が引つ掛からなくて良かった」

「ホントですよ」

次郎と舞華の二人は、神奈川県相模原市の百貨店でゆつくりとデートを楽しんだ後、本日の目的地である山梨県の甲府市までリニアに乗って僅か二〇分で移動した。

甲府市のリニア駅は、甲府駅から約八キロの距離にあり、政府の立ち入り禁止区域の外側にある。

そこからタクシーに乗って、甲府駅から西側へ約三・六キロの距離にある山梨県立美術館並びに芸術の森公園へと辿り着いた。

お金は掛かるが、幸いにも昨日は舞華の誕生日。次郎は一日遅れのお祝いという名目で、日本政府から分捕った資金でデート費用を全て出した。遠慮はされたが、男の甲斐性は山中県の文化だと、文化の日が誕生日の舞華を言いくるめた。

おかげで神奈川県から現地までの移動時間は、僅か一時間未満だった。

そのため二人は、余裕を以て百貨店でウィンドウショッピングを楽しみ、服を選び、ランチとお喋りを楽しんで、今は緩やかな気分です公園内に居た。

タイル道に並んだ煉瓦調の椅子に並んで腰掛け、整った芝生の丘や木々、澄んだ青空を眺めながら、柔らかな秋風に身を委ねる。

時折、ドーンドーンと砲撃音が響くが、それが海で聞こえるさざ

波の音にも感じられ、瞼を落しそうになる。

そんな穏やかさの中、二人は静かに時を過ごしていた。

「目標はレベル三です」

舞華が希望を口に出す。

もちろん魔物が飛んで来なければ、いくら希望を出しても話にならない。

ダンジョンから出現する魔物は、各地でそれぞれ約一万匹。

今日の発生予想分を含めて、チスイコウモリ、タマヤスデ、トノサマバッタ、イモリ、ナナホシテントウ、ヤモリ、コオロギ、オオサンショウウオ、ゲンジボタルの九種類。このうち、出てきた順で奇数は空も飛ぶ。

五〇〇〇体が空を飛んだとして、自衛隊が半数を落とせば残り二五〇〇体。

それが四方八方へ均等に分散したとすれば、次郎たちの方向に三〇〇体。

そのうち警戒区域内の自衛隊や警察、居残った人達に襲い掛かって脱落する魔物、遙か遠方に飛んでいく魔物を省けば、多くて一〇〇体程が次郎たちの所へ流れてくると思われる。

なお周囲には公園内だけで一〇〇人以上が屯して武器らしき物を構えており、園外にも同数以上はいるはずなので、二人で一体確保できれば上々だ。するとレベル九のホタルを確保しても、レベル一から二が限界と思われる。

「レベル三を目指す理由は何かあるのか」

「回復魔法を取って歯学部にいけば、歯の再生治療が出来るかも知れません。抜いて再生。矯正歯科。どう思いますか」

次郎は納得して拍手を打った。

国外のように、水道水にフッ素を含ませた虫歯予防の政策を施行していない日本では、虫歯になる人が非常に多い。医学部を目指す美也も立派だが、舞華の示した方向性も多くの人の助けになるだろう。

いかに歯科医師が供給過剰で、国家試験の合格ラインを引き上げて人数を絞っているとはいえ、回復魔法を用いた治療を始めれば方々で引く手数多だ。

歯科医院を開業すれば、厚労省が目をつけるくらいボロ儲けになるのは必至だ。

医療行為として診療報酬が認められなくても、自費治療にしてしまえば良い。

お金持ちで歯が無い年寄り、日本中に沢山いるのだ。

「それなら大成功、間違い無しだな」

力強い口調の太鼓判に、舞華は自然に微笑んだ。

「あたしって、心理テストでも勤め人より開業の方が向いていて」

次郎は相槌を打ちながら、話の先を促す。

「例えOLでも絶対に漫画は描くし、イベント日は休みますけどね」

それってどう思いますか。と、言外の問い掛けが行われた。

舞華の意図を把握するためには、二〇四五年現在の日本の国内事情を正確に理解する必要がある。

そもそも日本では、次郎の親世代が産まれた四〇〜五〇年前から少子化による生産世代の減少と、高齢化による非生産世代の増加、そして生産世代と非生産世代の比率が狭まる事で負担が増える少子

高齢化問題が危惧され続けてきた。

しかし、事なかれ主義の行政府は、ドイツやロシアなどの少子化対策の簡単で確実に効果が出るモデルケースがいくつもあったにも係わらず、長きに渡って少子高齢化問題の抜本的な対策を怠ってきた。

そのしわ寄せが、今の日本では国家全体に重くのし掛かっている。不足する社会保障費の財源は、増税に増税を重ねて購われた。

個人への負担は四公六民、五公五民、六公四民と生存可能な限界を見極めるように引き上げられている。生かさず殺さずとは、今の日本人に対する税制度の事だ。

また医療費も抑制され、介護サービスに対する公的補助も極めて乏しくなっている。

一般的な人間は生産世代だけが辛うじて生きていけて、老後は僅かな貯蓄を使い果たせば早く死んで欲しいとばかりに、老後の社会保障が殆ど無く、主に家庭ごとの家族責任だとされる。

現代の奴隷である派遣の使い捨て人材は、余裕が無くなった企業を倒産させないためには到底無くせず、政府の描く理想的なモデルケースを外れたら人生は終わりだ。漫画家や声優を本気で目指す者は、大半が奴隷生活まっしぐらである。

そのような余裕の無い世の中にあって、社風次第であるが、サラリーマンやOLが趣味のために休むなど多くの場合は言語道断になっている。

だから舞華は、魔法が得られるなら歯科医を考えたらしい。

次郎が結婚しようなどと口走った時、一生オタ活に専念させてくれるならオツケーだと返したのは、半ば以上は本音だったのだろう。

「俺はやりたい事をやる派だからな。応援するぞ」

「ありがとうございます。ちなみにジローさんのやりたい事って何ですか」

「色々あるけど、とりあえず舞華をレベル三まで上げたら、ご褒美にキスで」

「えっ……えええっ!？」

「さあ頑張って上げようか」

「あー、ちよつと待って下さいよ」

椅子から立ち上がった次郎は、東の空を向いた。

望遠鏡を覗き見る人達が響めき、頻りに警戒の声を上げる先には、青空に黒い点のような塊が幾つも飛び交っている。

あれらは全て魔物で、レベル一のチスイコウモリ、レベル三のトノサマバツタ、レベル五のナナホシtentウ、レベル七のコオロギ、レベル九のゲンジボタルの五種類五〇〇体以上だ。

なお地上にはレベル二のタマヤスデ、レベル四のイモリ、レベル六のヤモリ、レベル八のオオサンショウウオの四種類五〇〇体以上が居て、それらが人間を上回る身体能力や魔法を駆使して自衛隊を攻撃している。

それら自分たちに向かってくる魔物への対応を優先せざるを得ず、空を遠方へと飛び去るだけの魔物はどうしても後回しにならざるを得ない。

後回しにされた魔物達の多くは、東の愛宕山や八人山方面に流れている。次いで北西の緑が丘や片山に向かい、残りはてんでバラバラに散っていた。

次郎は強大な魔力を以て、ダンジョンの上空に不可視の強烈な風を生み出した。

突風は上空を東から西へと流れ、飛行中の魔物達の一角を突風で吹き飛ばす。

突然の強烈な風に押し流された魔物達は、体勢を崩しながら西へと流された。

飛ばされてくる魔物の数は、少なく見積もっても五〇〇体以上。

その全てが次郎たちの所へ来るとは思えないので、次郎の体感では舞華のレベルを三に上げるには妥当な数になりそうだった。

「おい、魔物の群れがこっちに飛んでくるぞっ」

「あんなに沢山、かなりヤバいんじゃないか」

しっかりと事前準備してきたはず武装集団が、引け腰になっていた。

彼らの中には過去の魔物出現時にレベルを上げ、能力や魔法に秀でた者もいる。さらに自衛隊の砲撃で弱った魔物も多いため、立ち回り次第では稼ぎ時のはずだ。

それでも想定外の数に身の危険を感じたのだろうか、自信の無い者たちが慌てて後方に下がり、さらに一部は建物内に避難を始めていた。

次郎は舞華を招き寄せると、懷から取り出したように見せながらアウトドア用のナイフを手渡した。

「ジローさん、あれって本当に大丈夫なんですか」

「全く問題なし。それじゃあ今から捕まえて取り押さえるから、舞華はトドメを刺してレベルアップしていつてくれ」

「どうやって捕まえるんですか？」

「こつする」

陽光の下でもなお明るく瞬く巨大ゲンジボタルの群れが、空を滑空するように降りてくる。

その群れの正面に向かって、地上から魔法で生み出されていた石礫が、自衛隊の砲撃にも勝る速度で投げ付けられた。

風を切り裂く音と共に飛び上がった石礫は、向かってきた大型犬サイズのゲンジボタルの身体を穿ち、体勢を崩させて地上に叩き落とす。

空からはゲンジボタルの他にも、巨大コウモリ、巨大トノサマバツタ、巨大ナオシテントウなどの魔物達も次々と降下してきて、周囲の人々は大混乱に陥っていた。

次郎は舞華を庇いながら前に出ると、落ちてきたゲンジボタルに向き合い、軽く腕を突き出した。

次の瞬間、次郎の速度はレベルを持たない人間の認識できる速度を超えた。

最初に掴んだのは、ゲンジボタルの触角だった。

触角を右手で掴みながら引き寄せ、左手で口器を殴りつけて部位ごと破壊する。

次郎は左に殴り飛ばしたゲンジボタルの前胸部分を右脚で蹴り返し、前胸と左前脚を同時に破壊する。

次いで蹴り飛ばされたゲンジボタルの右複眼に、左手に生み出した石を叩き付け、右目を丸ごと破壊する。その勢いのまま、触角を手放した右手に生み出した石で、左複眼も殴り壊した。

刹那で大量の部位を破壊されたゲンジボタルの頭上から、右脚の踵部分が振り下ろされる。

地に伏せたゲンジボタルを側面から軽く蹴って仰向けに引つ繰り返した次郎は、右脚で胴体を踏み付け、両手を伸ばして前脚と後脚を全て千切り飛ばす。

その後は懷から出したように見せかけて、収納から取り出したナイフで後胸を裂いて露出させた。

「オッケー。そのサバイバルナイフの刃を後胸に差し込んでくれ」
「えっ、うそおっ？」

舞華は、次郎が瞬間的にゲンジボタルに襲い掛かった直後、ゲンジボタルがひっくり返って、六本の脚が全て落ちて胸を裂かれている状態になっているとしか分からなかった。

「ほら、一匹目。まだ倒すんだからゴ―」

「ちよつと、心の準備がつ!？」

引き寄せられた舞華は、次郎に右手を添えられて操られるがまま、ひっくり返ったゲンジボタルの裂かれた前胸にサバイバルナイフを差し込んだ。

「意志を流し込むような感じで押し込むんだ。そうすると魔力が入って、ゲンジボタルの魔石に舞華の魔力が混ざる。そしたら吸収可能だ」

「うー、イメージと違う」

「よし、ナイフはこう動かして」

次郎はサバイバルナイフを持った舞華の右手を握ると、そのままゲンジボタルの前胸を開いて、刃の反対側のスウェッジに魔石を引っ掛けて転がり出させた。

ゲンジボタルの魔石は白色で、光魔法の系統だと考えられている。魔物達の魔石は、人間が直接手を介さずに銃や砲弾などで倒せば、人間が触れても吸収できずに、石の中にエネルギーが残ったままになる。

エネルギーは当該魔法で一以上のBPを割り振った人間が燃料として利用可能になるが、日本ではレベル〇でも魔石の力を固形燃料などとして有効活用できないか研究を始めている。ちなみに現在は魔石の構成物質を解析しようとしている初期段階らしい。

それは資源の乏しい日本にとっては必要な研究だろうが、話を聞いている限りでは成果は当分先そうである。

「あつ、レベルが二に上がりました」

「いきなりレベル二か。それは凄いな」

「はい、有り難うございます」

たった一匹でレベルが二つも上がった事は次郎にとっても驚きだったが、舞華が倒したのは、クロコダイルより強いレベル八のオオサンショウウオよりも上の魔物だ。

次郎は軽く踏み潰したが、巨大ゲンジボタルは硬い身体を持ち、回復魔法で自らを回復させる事も出来る。さらに口器を相手に差し込み、血肉を吸い上げる恐ろしい魔物だ。

そんな怪物を倒せば、普通の人間であればレベルが二つ上がってもおかしくはない。

「よし、それじゃあ次の魔物だな。ジャンジャンいくぞ」
「分かりました」

周囲を見渡すと、阿鼻叫喚の地獄絵図とまではいかないが、一〇〇人余りの人間では手を焼いているようで、魔物は大量に余っていた。

連携して魔物を襲っている人や、噛み付かれながらも反撃している人は大勢居るが、一方で複数のコウモリに噛み付かれて必至で逃げ惑う人、バツタの後脚に蹴られて腹部を押さえながら蹲る人、ナホシテントウにしがみつかれて齧り付かれながら悲鳴を上げる人、ゲンジボタルの口器に突き刺されて体液を吸われている人なども散見される。

そんな激戦区の中、次郎は誰とも抗戦していない二体目のゲンジボタルに飛び掛かると、瞬く間に取り押さえて舞華を手招きした。

「早すぎですっ！」

「こいつか、その次でレベル三だな。どうせならレベル四とか五も目指すか。魔力と光魔法が上がったら、再生治療も高度になるぞ」

「有り難いですけど、こんなに楽で良いのかな」

「大丈夫、お礼は貰うから。三で軽いキス。四で長めのキス。五で舌が入るやつで」

「えー、本気ですかー」

「もちろん絵理には内緒で」

「ジローさん。あたしって、結構高いんですよ？」

「ちなみにレベル六以上は、段階がアップする」

「知らないですからねー」

各所から悲鳴が聞こえる中、謎の交渉を妥結した二人は我が道を進んだ。

戦果はゲンジボタル一二匹とナナホシテントウ六匹、トノサマバツタ三匹であり、レベルは七に達した。

48話 短編 ハロウィン後編（後書き）

短編は、本編とは分岐した世界線・異なる時間軸です。
次話から本編に戻ります。

49話 上級ダンジョンへ

内閣支持率が八割を超えた。

それは自由な意思が表明できない独裁的な国家、あるいは多様性に乏しい国家でも無ければ容易に達成できない数値だ。

しかし民主主義国家においても、一定の条件をクリアすれば達成可能となる。それは戦時中で、国民に共通の敵が居て、政府が目覚ましい戦果を挙げる事だ。

『第一次特攻隊、五時間で魔物五〇〇〇体を撃破』

『現在六カ所のダンジョンを快進撃中』

一一月の魔物氾濫において、広瀬大臣がマスコミにお披露目した三二人の特別攻撃隊は、一時間に一〇〇〇体という凄まじい戦果を挙げて国民の期待に応えた。

彼ら彼女らは全員が未成年の子ども達だが、政治家が自らの子弟を最前線に出して身を切る意志を示した事で、内閣支持率是否が応にも上がらざるを得なかった。

第一次特別攻撃隊の面々は、全員が初級ダンジョンのボスよりも高い三レベルのチームだ。

ボスは二体であるが、特別攻撃隊は五、六人で六チームを編成し、まずは六カ所に突入する形を取った。

そこで攻略時に可能であれば全員が攻略特典の転移能力を取り、第二陣に組み込んで残る各地のダンジョン攻略を手伝わせる。

第一陣の一度目の攻略が成功すれば、日本に残るのは二四カ所のダンジョンのみ。

時間的には、その後に二回の攻略機会がある事から、一二班以上

を編制して全班に転移能力者を加えて送り込み、ダンジョン外で休憩を取らせながら部隊の体力を維持。ボス部屋では転移能力者を切り離して突入させる。

転移能力者を含まない班員が全滅しても、転移能力者がボス部屋前に増大させた新部隊を送り込めるため、確実な攻略が可能になる。すなわち第一陣の転移能力取得に、その後の作戦の難易度が掛かっている。

第一陣は、突入を命じる政治家の子弟。

第二陣以降は、自衛隊の子弟で、自らも入隊を希望する者から選出した。

彼ら彼女らは、国家緊急事態宣言下における身柄の徴用にあたる。第一陣への補償は、希望する進路への無試験合格、一時金、特攻隊年金。

第二陣以降への補償は、一時金と第二次特攻隊年金。

任務中は国家命令に基づく活動で、個人の刑事・民事責任は一切問われない。

すなわち他国へ引き抜かれないために、好きな進路と大金、生涯に渡つての日本での金銭支給、攻略に協力する限り法的に保護するというものだ。政府は閣議決定を行い、衆議院に法案を提出して、それらの補償を可決させた。

「最終判断を行ったのは私、広瀬秀久であり、批判は私が甘受する。だが計画は変更しない。第一次特攻隊の最深部突入は、十一月二二日を予定している」

シンと静まり返った記者会見場が、フラッシュで眩い点滅を繰り返す。

労働党の旧主流派の一部は、非人道的だと批判を繰り返していたが、対案を示さなかった事から大多数の人々の共感を得るには至ら

ず、旧主流派の間でも意見が割れていた。

いずれにせよ賽は投げられており、人々は固唾を呑んで、二三日の結果を見守っている。

もつとも国内には、大多数とは異なる方角を向く少数派の国民も居る。

各々が向く先は様々だが、中でも一七歳の男女二人組が向いていたのは、とびきりおかしな方向だった。

二人が向き合う先は、ゴブリンの巣である。

「後ろから沢山来るかも！」

「迎撃に切り替える。正面は石壁で塞ぐ」

「分かったよ」

美也の正面に、赤、緑、茶の三光が生まれて輝きだした。

やがて光は、業火、突風、礫となって重なり合いながら後方に吹き抜けていく。

背後から飛んできた魔法や矢は、一斉に吹き散らされて灰色の洞窟壁面にぶつかり無力化されていった。

直後、前方だった場所を土壁で幾重にも塞いだ次郎が飛び出し、石槍を構えて射手たちに襲い掛かる。

筋骨隆々とした緑色の肌、長い耳、やや小柄で醜悪な顔をした仮称・ゴ布林達は、慌てて後衛と前衛を入れ替えようとする。

「遅い」

次郎や槍先にゴブリンの一体を引っ掛けると、それを振り上げてゴブリンの身体を洞窟の天井に力強く放り上げる。

激しい衝突音と振動が響き、うめき声のような呻り声が一度だけ溢れた。

それを掻き消すように、槍は左右に激しく振り回される。

剣を掲げたウォーリア、槍を構えるランサー、矢を番えるアーチャー、杖を振り上げるソーサラー、そして集団を統率するリーダーと、何れにも属さないゴブリン。

これら六種類が、上級ダンジョンの地下二階に出現する魔物達であり、次郎達と交戦している敵対集団でもあった。

上級ダンジョンの内部は、日本の平均的な市が複数収まる規模の灰色地下迷宮だ。

そこに空想上の魔物が出現する点は中級ダンジョンと変わらないが、上級の場合は魔物だけではなく、その集落までもが再現されている。

上級ダンジョンの地下二階には数十の集落が存在し、集落の間には広い空間に深い森が存在していた。

森を構成するのは、中級ダンジョンのボス部屋で見た背の高い杉、檜、松、銀杏などの裸子植物だ。

大地には肥沃な土が敷き詰められ、鉱物にはコケ類が張り付き、シダ植物のワラビ、クサソテツ、クラマゴケなどが足元を覆い尽くしている。そして中央には、大きな湖も存在した。

そんな地下二階に暮らすのは下級、中級の上層で見た魔物達で、それらはいずれもゴブリン達の餌だった。

ゴブリン達は餌を喰らい、他のゴブリングループとは縄張り争いを行う。

だが最大の疑問である、彼らがどうやって増えているのかは未だ不明だ。

転移で地上に戻ってから攻略を再開すると、壊滅させた周辺の集落のゴブリン達がいつの間にか纏めて復活している事が多々あった。菌類が増殖するわけでもあるまいに、その速度で回復するのは有り得ないだろう。

巻き戻り説、蘇生説、リポップ説。いずれにせよ理不尽極まりなく、人類がこの地を制圧する事は極めて困難だ。

高速で剣を振り回すゴブリンの攻撃範囲外から槍を振るい、豪腕を折った勢いで顎を砕き、地面に叩き落とす。

ゴ布林達の強さは、ロケットランチャーのように飛んできたアルプ達よりも若干上で、レベル三七と見積もっている。素早さだけならアルプが上だが、ゴ布林は武器を使い、毒を用い、集団戦を展開できる。

広瀬大臣が投入した、レベル三一の第一陣三二名が集落に入れば、おそらく数分で壊滅する。

レベルが互角でも、ゴ布林が用いる毒に対抗する光魔法や、ゴブリンの動きを感知できる闇魔法が必須で、総数で上回らなければ一気に押し込まれるのは目に見えている。

対して次郎たちはレベル八〇で、ゴ布林が何万体生息していうと歯牙にも掛けない強さがあつた。

まるでゲームセンターのモグラやワニ叩きで高得点を出しまくるように、次郎は攻撃範囲内に踏み入ったゴ布林たちを槍で叩きまくり、茶色い体液の海に沈めまくった。

次郎が武器として槍を選んだのは、小学生の頃に子天狗として槍を持たされ、獅子舞をさせられてイメージがし易かったからだ。

チアリーディング部がバトンを回すよりも遙かに早く槍を振り回し、身体の動きに合わせて槍を突き出し、薙ぎ払い、構えながら飛び退り、子天狗同士で連携しながら獅子を攻撃する。

田舎の伝統を継承してきた老人達の「ああでもない、こうでもない」という自己満足に散々付き合わされた結果、次郎は槍の使い方に慣れていた。そんな槍は攻撃範囲が広く、ゴ布林が剣で次郎を斬り付けるよりも先に叩きのめせる。

次郎が槍を得物とするように、美也は炎と風の魔法を得意とする。それは全てを焼き尽くしたい、切り刻みたいなどという負の感情から生み出されたものだろうと次郎は考えている。なにしろ生み出された時期は、両親を長年の虐待で告発して縁を切る数カ月前だ。美也の場合、魔法の制御は完璧で、それが暴発する時は本人が意図して徹底的に引き起こす。レベル上げや能力加算という事前準備を徹底するため、ゴブリンだろうがボスだろうが、彼女の業火から逃れる術は無い。

次郎は恐い想像を振り払うかのように、美也に声を掛けた。

「流石に最大の集落だけあって、守りが堅いな」

「他の集落を弱らせたから、こっちに纏まっちゃったんだと思うよ」

「うーん、マンダムだ。いい加減疲れたから、一旦撤退で」

「撤退は良いけど、全然マンダムじゃないからね」

二人は倒したゴブリンの胸部に土と炎の槍を突き刺し、魔石から力を吸収すると集落の出口に向かって走り出した。

背後の石壁は破壊されていないが、警戒の遠吠えが洞窟内を行き交い、方々からも遠吠えが返ってくる。

二人は洞窟から広い森に出て暫く走り、やがて背後を振り返った。

「半包围だね」

「湖を背にしているから、ほぼ包围かな」

それはまるで、森から湧き出す軍隊蟻の群れだった。

地上の魔物氾濫よりも遙かに多いゴブリン達が、各々に武器を構えながら次郎たちに向かってくる。

いくら集落に逃げ込んでも破壊の限りを尽くされ、部族を殺され続けるので、いい加減に頭に來たのだろう。彼らはレベルの差を顧みず、膨大な数で逆撃に転じた。

「美也のレベル上げ方針、大正解だったなあ」
「本当にね」

醜悪な顔に、目を血走らせたゴ布林達が、次郎たちを睨み付けながら油断無く両翼を伸ばしつつあった。

次郎は闇魔法で、数万体の彼らを群として認識し、それらが森の大地に広がる動きを把握していた。

そして大地を伝って彼らの真下に、二桁まで割り振った土系統の魔力を流し込む。

「準備オツケー」

「こつちも大丈夫」

「じゃあ三、二、一、今……」

勢い良く両手を振り上げた次郎に従って、ゴ布林達の足元から一斉に土槍が突き上がった。

槍は地面に埋設してあった罠であるかのように、一気に跳ね上がって筋骨隆々としたゴブリンの足や身体の皮膚を貫き、肉を抉る。瞬く間に串刺しにされていくゴ布林達が、凄まじい絶叫と共に槍から逃れようと、狭い群集の中でぶつかり合い、押し退け合っていた。

だが土槍は、無情にも突き上がり続ける。

あたかもドラキュラ伝説の元となった串刺し公ヴラドの所業を再現するかのように、ダンジョン内部にはゴブリンの串刺しの林が生まみ出されていく。

そんな串刺し林の上空から、炎と風の轟風が吹き荒れ、串刺しにされたゴ布林達を煉獄の炎で焼き始めた。

バーベキューの余熱が、周囲にまで押し寄せる。

次郎と美也の二人は、残った魔力で湖の水を引き寄せ、水壁を生

み出して森を焼き払う業火に耐えた。

荒れ狂う天地からの攻撃に、ゴブリン達は完全に統率を失った。やがて彼らは必至に飛び上がって槍から逃れ、這いつくばって逃れながら、生存本能の赴くままに壊走し出した。

次郎は一体も逃がすまいと、逃げ出すゴブリンを優先して串刺しにしていく。

美也も通路に灼熱の炎を注ぎ込み、逃げ込んだゴブリンを焼き払っていく。

やがて森が焼け落ち、湖が水位を激減させた頃、かつて美しかった森は五万體近くの串焼きが並ぶ、生々しいバーベキュー会場へと変貌していた。

焼き加減は様々で、一部はまだ動いているようだが、命が尽きるのも時間の問題だろう。

ところで武器を扱うゴブリンは、知的生命体の様に見える。

世界に知られれば、人類以外の知的生命体の対応を巡って大きな議論が巻き起こるだろう。

だが彼らは、他の魔物同様に、人に襲い掛かってくる習性を持っていた。

さらにダンジョンを攻略しなければ、日本中に魔物が溢れてくる。そのため次郎と美也は、他の魔物同様に倒す事で結論が出ている。ゴブリンは地球に実在しなかった空想上の魔物であり、日本語も通じないため、他の魔物と同様に倒す事に躊躇いが生じなかった。

次郎はゴブリンの身体を串刺しにした槍から大地を伝い、魔石の魔力を一斉に吸収し始めた。それに少し遅れて美也も、次郎が吸収し損ねたゴブリンの魔石を風魔法を使い、吸い寄せるように吸収し始めた。

二人は四方八方に全力で魔力を飛ばし、およそ四万五万體という

膨大なゴブリンを自らの経験値に変換していった。

作業が効率的なのは、敵に比べて圧倒的にレベルが高いからだ。今までレベルを上げ続けた成果が、高レベルで高収入な魔物と遭遇した事により、絶大な効果を齎していた。

「レベルが八〇から八三に上がったよ」

「……まあ、この地下二階はもう二度と使えそうに無いけどな」

かつて豊かな森と美しい湖があった地下二階は、干上がった湖と、煤けた荒野に広がるゴブリンの串刺し林へと変貌を遂げていた。

もともと塔型円柱は、中級ダンジョンを攻略した事で出現したものであり、塔型円柱を攻略すれば再び変貌するであろうことから、二人は塔の環境など一切気にしていなかったが。

「それじゃあ地下三階に降りようか」

「そうだな。下でも稼げると良いな」

半年後には一八歳を迎えてレベル上げの効率が落ち始める次郎は、地下三階以降の魔物にも同様の稼ぎを期待していた。

仮に地下三階が駄目でも地下四階、地下五階とダンジョンには続きがある。

美也の受験勉強のためにも、高校三年の夏が終わるまでにはレベル九九なり一〇〇なりに達して、レベル上げに区切りを付けておきたかった。

50話 大金星

日本が冬支度の様相を呈し始めた、一月二二日。

期末テストまで二週間を切った七村高校では、生徒達がテストどころでは無いと、授業中と休み時間を問わず携帯端末で情報収集に明け暮れていた。

『本日は全ての番組を変更し、六県のダンジョンに突入した第一次特別攻撃隊の特別番組をお伝えしております。ただいまの時間は私、菅山雄大と』

『平山香奈がお伝えします』

『それではゲストの皆様をご紹介します。一人目は、時代劇や刑事ドラマではお馴染みの俳優、五井甚平さん。二人目は女優の柊亜寿沙さん。三人目は医師の千葉美冬先生。どうぞよろしくお願いします』

紹介される度にゲストがそれぞれ、よろしく願います等と言ってお辞儀をする。

期末テストが迫る貴重な休み時間であるが、携帯端末の音量を大にしてテレビを見ている中川や北村に文句を付ける生徒は居ない。むしろ聞き耳を立てるか、自らの端末でテレビを見るなどしている姿が方々に散見された。

もっとも次郎たちのクラスで発生している現象は、今日に限っては日本中で同様に起きている。

何しろ今日は、全都道府県の半数以上に暮らす数千万人が、集団疎開をするか否かの決断を迫られる日なのだ。

疎開が必要ない山中県であろうと、疎開の受け入れ先として他人事では無かった。

『先月発足した井口新内閣は、ダンジョン攻略に政治家の子弟を「特攻隊」と称して突撃させる作戦を発表しました。特攻隊となった中高生達は、与野党を問わず閣僚級や各派閥長などの大物政治家の血族から選ばれました』

『はい。全員が僅か二週間という僅かな強行スケジュールでレベルを上げられ、今月四日に地上に氾濫した魔物をチームごとに約五〇〇体ずつ倒した後、六日からダンジョンに突入しました。本日は最深部への突入予定日であり、遅くとも今夜までには結果が判明する見込みです』

今回の作戦は、次郎の案を土台としている。

彼は、野党時代の井口豊に「推奨は、レベル三五が四人以上」と語った。

井口豊と広瀬秀久は、五対二、あるいは六対二まで数的優位を拡大させて、運用面でも三対一の側が決着を付けてから二対一の所に援護に向かうという、安全性と確実性を向上させた作戦を採った。

特攻隊のレベルに関しては、タイムスケジュール的にレベル三五まで上げる事は出来なかったため、ボスよりも高い三二でレベリングを終了させた。

但し、お披露目時の魔物退治と、ダンジョン内で総合評価を上げる為の魔物退治とで、実際の突入までにレベルの上積み进行を期待している。

加えて特攻隊には、魔石を弾頭に用いた特殊対物ライフルを持たせた。先手を取って銃弾を浴びせ、ダメージを負わせてから戦闘を開始する予定だ。

三二名は、次のように分けられた。

東北地方の福島県、六名。

中部地方の岐阜県、五名。

近畿地方の三重県、五名。

中国地方の岡山県、五名。

四国地方の愛媛県、六名。

九州地方の熊本県、五名。

六名の県については、福島県は原発問題を抱えているため、愛媛県はブロック内に安全圏が一つも無いため、人数が増やされた。

なお既に特典を持っている綾香は、攻略特典が高くなる可能性が高い五名の岐阜班に編制された。

巨大カマキリの氾濫日が迫っているため、仮に各班に脱落者が出て四人に減った場合でも、作戦は中止せずに四人がかりでボスを一体ずつ倒す事になる。攻略を断念して撤退するのは三人以下になった場合だ。

そうしたトラブルを極力避けるため、深部までの補助要員には、カマキリ対策要員としてレベルを上げさせていた自衛隊員から選抜された中隊規模の同行がある。

各中隊は道案内、索敵、囷、火力支援、物資運搬、カウンセリングまで何でも熟しながら、特攻隊を可能な限り最深部の近くまで送り届ける役目を担う。

その人数を超えると、階層間の魔物が来られない安全地帯に全員が入り切れなくなるため、実質的に投入可能な最大規模だ。

出現から一年半も経過した初級ダンジョンでは、内部の調査が行われてある程度の地図が出来ている。

また安全地帯には、食糧や水、医薬品なども集積されているため、到達予定日が遅れる事は、殆ど無いと考えられている。

（綾香さえ無事なら、あとはどうでも良いんだけどな）

特攻隊にパワーレベリングを施したのは次郎だが、両者は師弟ではなく、コンビニ店員と客くらいの関係だ。

店員が経験値という名の商品を陳列し、客側が次々と商品を手に

取っていく。お支払いは日本政府で、彼らは親が持つ買い物カゴに商品を入れる子供でしかない。

もちろん作戦の成否は、日本に住む次郎にも少なからぬ影響を及ぼす。

そのため綾香を除いた隊員の負傷に心を痛める事はないが、全体的な作戦が成功して欲しいとは思っていた。

『なんとしても成功して欲しいですね。平山さん』

『はい。全員が無事に帰ってきて欲しいと思います。それではゲストの方にもご意見を伺いましょう。五井さん、今回の作戦をどう思われますか』

『そうですね。未成年の子供達を一六日間も魔物に襲われ続けるダンジョンに放り込み、疲労の極地で巨大女郎蜘蛛に挑ませるのは、大人としていかんと思います。それしか手段が無いとしても、駄目でしょう』

『それでは、どうすれば良いのでしょうか』

『巨大女郎蜘蛛との決戦時には、せめてレベルの高い自衛隊員を付けるべきでしょう』

『ご意見番の五井氏に口を挟む形で、女優の柊亜寿沙が割り込んでいった。』

『でも大勢で入ったら、ボス以外の女郎蜘蛛が増えて大変になるんですよー。それに一緒に入った大人が襲われたら、ボスに集中できなくなるじゃないですか。それで負けるなら、最初から一緒に入らない方が良いんじゃないですかあ』

得意気な様子の柊亜寿沙に、五井がしかめっ面を向けた。

『そんなに危険な場所なら、なおさら子供だけで行かせるのは駄目』

だろう』

『でも巨大力マキリが大量に出たら、都道府県の半分以上に人が住めなくなつて、皆が困るじゃないですかー』

柊のデモデモ攻撃に、五井のこめかみがヒクヒクと動く。

柊の間延びした口調はともかく、主張の方は正論だ。

突入する子供達が動揺して戦闘に支障が出る要素は極力排除すべきであるし、子供達を突入させないまま日本に巨大力マキリを放出させるわけにもいかない。

ここまでの状況に持つて来るだけでも、井口豊が極めて重要な時期に自ら次郎の調整に専従し、自身の孫娘を差し出すなど、多大な負担をしているのだ。

井口総理と広瀬防衛大臣は、特攻隊を突入させると言う結論を出しており、より確実に時間的にも確実に間に合う対案が示されない限り、今回の作戦を中止することは無い。

もっとも倫理面では、五井の発言も決して間違いでは無いが。

なお圧倒的なレベルを持ち、政権交代直前に中級ダンジョンを攻略してみせた政府協力者の山田太郎氏は、第二次特攻隊のパワーレベリングを施していると政府が伝えているため動かせない。

第二次特攻隊は、残る都道府県の攻略に欠かせない人員だ。

それを育成している山田太郎氏を第一次特攻隊に加えるのは本末転倒であり、最初から解決策としては拳がらない。

のほほんとしている次郎だが、世間的には最も苦労している事になっている。

『千葉先生はどう思われますか』

『第一次特攻隊は、政権交代直後と力マキリ出現間近のために人数が揃えられませんでした。ですが第二次特攻隊以降は、転移能力を使えばもっと大人数で、安全に攻略出来るのでは無いでしょうか』

『なるほど』

『最も過酷なのは、第一次特攻隊の皆さんです。転移が使えず、一六日間も魔物が襲ってくるダンジョン内を進まされれば心身共に疲弊します。そんな疲れ切った子供たちだけで、軽トラクサイズの女郎蜘蛛たちの巢に入るなんて、想像を絶します』

千葉の発言に対して、画面の端に映っている五井が力強く頷いた。

『身柄を徴用された第一次特攻隊への対価は、報酬と好きな進路への無条件合格だと聞きますが、子供達に命と時間を差し出させる以上、恩恵を受ける日本が対価を支払うのは当たり前です。せめて政府は、充分な報酬を出してあげて欲しいです。一カ所に付き、一県と一〇〇万人以上が救われるのですから』

『そうですね。ではここで現地と中継が繋がって……』

「おい、ナカさん。フナヤマンが来たぞ」

生徒たちが、一斉に座席へと戻りだした。

次郎も慌てて戻り、何事も無かったかのように教科書とノートを取り出して机の上に並べていく。

起立、礼の号令に合わせて身体が条件反射的に動き、着席の後に授業が始まった。

とはいえ、手慣れた生徒は机の中に起動済みの携帯端末を隠し入れ、教師の隙を窺って覗き見ている。また壁際や窓際の上級者は、ワイヤレスイヤホンを片耳に取り付けて情報を収集している。

「速報だつ。岐阜県が、多階層円柱に変化したって！」

突然立ち上がった中川が、覗き見ていたニュース速報を大声で伝えた。

「「おおおつ」」

待ち望んでいた報告にクラス中がどよめき、拍手と歓声が一齐に鳴り響いた。

綾香の担当する岐阜ダンジョンが無事攻略された事で、次郎もやや安堵した。彼女のレベルは、次郎が初級ダンジョンを攻略した時よりも高いが、促成栽培のお坊ちゃまお嬢ちゃまに足を引っ張られる可能性は完全には拭えなかったのだ。

中川の大騒ぎは、担任が歩み寄って頭上から拳骨を落とすまで続けられた。

「いてえ」

「隣のクラスに聞こえるだろうが。大林先生が授業中なんだから静かにしろ」

「えー、フナヤマン、立場弱すぎー」

「やかましい。ほら、他の奴等も携帯仕舞え。授業が終わってからにしろ」

「体罰、体罰」

「仕舞わなければ、携帯を一日預かるぞ」

何人かが大慌てで携帯を仕舞い込んだ。

携帯端末を没収されては、堪ったものではない。

素直に五〇分間の授業を受けた生徒達は、授業が終了すると一齐に各自の端末などからテレビを見始めた。

次郎と美也が覗き込んだ端末には、六県の中継映像が流れていた。そのうち福島、岐阜、三重、愛媛、熊本の五県が、既に多階層円柱に変わっている。

すると案の定、クラス中が大騒ぎを始めた。

特攻隊の作戦成功が六県中一県であるのと、六県中五県であるのとは、今後の作戦がまるっきり変わってくる。

六県中五県成功するのであれば、このまま特攻を続けさせれば、日本中の初級ダンジョンが巨大カマキリの氾濫前に攻略できるのだ。戦略が『全都道府県にカマキリ以降の魔物を氾濫させないようにする』で、戦術が『育成した特攻隊を投入してダンジョン攻略させる』である以上、第一次攻撃の戦果は上々と言えるだろう。

「同じ時間に一斉突入したのか？」

「こんなに短時間で一度に変わっているなら、そうじゃないかな」

「ふーん。残りは岡山県か」

「時間を合わせて突入したなら、五〇分も経って岡山が変わっていないのは、あんまり良くないね」

「……………そうだなあ」

次郎と美也は暫く端末を眺めていたが、岡山県のドーム状の巨大構造物が多階層円柱に変わる映像は見られなかった。

そのうち英語の女教師がやってきて、無情にも教卓を出勤簿で叩いた。

既にチャイムは鳴っており、現在は授業中である。

「先生、今大事なところなんですよー」

「帰ったら何度でも再放送しているから、家に帰って見なさい」

「鬼 悪魔 独身」

「鳥内君、それは宣戦布告ですか」

三〇代の女教師が、鋭い目つきになって威圧を始めた。

鳥内は宣戦布告文である『四捨五入』は口に出さず、渋々と生放送を諦めて端末を机の中に放り込んだ。

その後、生徒達は英語を含めた二つの授業をやきもきしながら聞き流し、午後に入ったところでようやく吉報を耳にした。

全国の半数にあたる二三都道府県の初級ダンジョンが攻略され、

特攻隊員は全員が無事生還を果たした。

後日次郎が聞いたところに寄れば、攻略が遅れたのは、脱落者が居た為であるらしい。三二名中二名が、ボス部屋突入以前の精神面による問題で脱落した。

地下一〇階以降の魔物達を目の当たりにして、パワーレベリングで楽をしていた反動が出て耐えられなくなったのだ。大量の巨大蜘蛛が蠢く地下一五階あたりを歩けば、精神に負荷が掛かって仕方が無い部分はある。

戦闘中に他の隊員の足を引っ張るくらいなら、最初からボス部屋に入れない方がマシというのが現場の判断だ。二人は本人の辞退という形で自衛隊と共に留まり、多階層円柱への形状変化と共に外へ出されている。

パワーレベリングを受けておきながら、周囲の足を引っ張っただけで終わった。

二人分のレベル三に上がるだけの経験値を他に回せば、他の隊員のレベルが一つ上がったかもしれない。

その分は推薦者が特攻隊の立場を擁護するなど、自ずと責任を負う事になる。

なお特攻隊への対価である『好きな進路への無条件合格』や『一時金と特攻隊年金』も、作戦から降りた事で貰えない。そして何より、ボスを倒していないため、ダンジョンの攻略特典が得られない。脱落組は、未成年者として顔出しや氏名の公表が無かった点が救いとなり、単に病気療養していた形で医師の診断書を添えられて復学した。

結果としては、四名班一個、五名班四個、六名班一個での攻略となった。

ただし総合評価は、同じ班でもバラバラに分かれた。

福島班、六名。総合評価『D、C、D、D、D、C』

岐阜班、五名。総合評価『B、B、B、B、B』(綾香は自己申告)

三重班、五名。総合評価『B、B、B、B、C』

岡山班、四名。総合評価『A、A、B、B』

愛媛班、五名。総合評価『C、C、C、C、B』

熊本班、五名。総合評価『C、C、C、C、C』

六名が悪く四名が良い結果なのは、『対ボス戦の人数』の影響だろう。

また愛媛班は、Bの一人だけが休憩時間も熱心に魔物を倒し続けており、逆に三重班は一人だけがサポートに集中して魔物撃破数が少なかったため、『各魔物の一定数撃破』があると予想された。

熊本班は自衛隊の調べた最短コースを進んでおり、『フロア踏破率』が影響したと思われる。他にも機動隊と自衛隊の蓄積から、『レベル』も影響すると判明している。

総合評価Bは、『能力加算+八』、『転移能力(一回/二日)』、『収納能力(一〇フィートコンテナ分)』からの選択だ。

総合評価Cは、『能力加算+四』、『転移能力(一回/四日)』。総合評価Dは、特典が得られない。

六名班で突入して、個々の魔物退治が不足して評価Dになった四名は、とても残念な結果となった。

だがいずれにせよ第一次特攻隊三〇名は、日本を救う英雄となった。

51話 白と灰色

第一陣が初級ダンジョンを六つ同時に攻略した日は、第二陣である自衛隊子弟のパワーレベリングが完了した日でもあった。

第一陣の育成期間が一三日であったのに対して、第二陣の育成期間は一二月。

自衛隊は、次郎が一夜に捕獲する一八〇匹分の経験値を、第二陣の質向上ではなく、総数拡大に注ぎ込んだ。

第二陣の自衛隊の子弟は五五名で、全員がレベル三一に達している。

そんな彼らは、第一陣の結果を参考に、攻略特典BからAを狙うらしい。

政治家子弟は国内外に対する抑えの見せ札で気軽に使えないが、自衛官であれば任務として駆り出せる。

（俺は稼げたから良いけどな）

アルバイトを全て終えた次郎の懐には、綾香の持参金とやらを省いても三〇億円を上回る大金が入っていた。

美也も個別に一億円以上を持っており、綾香も持参金二七億円の他に特攻隊の一時金や生涯年金が支給されるため、真面目に働くのが馬鹿馬鹿しくなってくる。

次郎がよく読む小説サイトのファンタジー系小説において、ダンジョンは一攫千金だと異口同音に語られるが、現実でもその通りだったと実感した次第だ。

稼ぎ過ぎて、働きたくない病を煩った次郎と異なり、第二陣はやる気に満ち溢れている。

第二陣にも、第一陣より随分下がるが相応の報酬が生涯約束されている。

第一陣よりも少ないのは、転移能力の支援を受けられずに一六日間魔物に襲われ続けた第一陣の困難さや、第一陣から転移での支援を受ける事、第一陣の検証を基に高い特典を獲得出来るようになった事などと比較しての差だ。

それでも大金と厚遇が確約されており、彼らは意欲的だった。

第二陣の育成完了時点で、残る初級ダンジョンは二四カ所。

その全てを攻略すべく、彼らは四名から五名の一三個班に分かれ、転移能力を取得した第一陣から各班二名ずつの支援を受けながら、第二次特別攻撃隊として第二次攻撃を開始した。

第二次攻撃の開始が一月二五日、最深部突入が二月一日。

第三次攻撃の開始が二月一四日、最深部突入が二月三〇日。

これに機動隊と自衛隊の合同チームが攻略している場所を加えて、年内に全初級ダンジョンが攻略完了となる。

次郎は太平洋戦争時の兵隊さんを見送る国民のように万歳を繰り返しながら、美也と共に上級ダンジョンの攻略へと戻った。

地下三階のオーク達を二番煎じで串刺しにし、地下四階のリザードマンを美也が地下湖ごと沸騰させた一月が過ぎ去った。

一月三〇日と二月一日には、七村高校で期末テストも行われた。

その後、地下五階のハーピーを鋭い石混じりのハリケーンでミキサーにかけて一週間ほど経った頃、次郎は広瀬大臣から呼び出しを受けた。

広瀬大臣に呼び出された理由は、上級ダンジョンの環境破壊ではない。

機動隊と自衛隊の合同チームが、四七都道府県の二四カ所目として攻略した新潟ダンジョンが、予想外の現象に見舞われたのだ。

新潟ダンジョンは、ドーム状の巨大構造物が『灰色から白色に変化』した。

そして中級ダンジョンである『多階層円柱への形状変化は起こらなかった』のだ。

白いドーム内部に居たのは、相変わらずのコウモリであった。

『昨日未明、自衛隊と機動隊の合同チームによる新潟ダンジョン攻略が行われ、二四番目となるダンジョン攻略に成功しました。ですが新潟ダンジョンは、中級ダンジョンへの形状変化が起こらず、外壁が灰色から白色に変化しました。関係者によると、これは想定外の事態であり、政府は情報収集に追われているとの事です』

アナウンサーの音声と共にテレビに映し出されているのは、ドーム状のまま白化した新潟ダンジョンであった。

政府の予想では、初級ダンジョンは攻略する事で中級ダンジョンである四段の多階層円柱に変わるはずだった。

だが新潟ダンジョンは、攻略から丸一日経った今も白いドームだ。

「そこで、君の意見を聞きたい」

テレビの音量を落とした広瀬大臣は、次郎を呼び出した要件を告げた。

既に防衛省からは、様々な可能性を伝えられているのではないだろうか。それでも確信には至らず、次郎を呼び出したらしい。

なぜ次郎に意見を求めるのか。

それは次郎たちがチュートリアルダンジョン時代から様々な検証記録を集め、中級ダンジョンを攻略し、その先のダンジョンも攻略中という、日本で最もダンジョン経験が豊富な人物だからだ。

自衛隊や機動隊といった組織から完全に独立しているため、組織の方針や慣習を気にせず自由な意見も述べられる。多角的に事象を

捉えるべきだと大臣が判断したため、次郎が呼び出された次第であった。

もちろん次郎たちが答えを知っているはずは無いのだが、それでも次郎と美也には独自の考えがあった。

「日本中の全てのダンジョンが中級になったら、難易度が高すぎて新規の人は攻略できなくなります。ダンジョンを出現させた相手はダンジョンを攻略させたいが為に、敢えて初級ダンジョンを一定数残したのかもしれませんが」

「その判断に至った理由は何かね？」

「新潟ダンジョンは、四七都道府県で二四番目の攻略で、丁度半分以上を過ぎたところでした。相手がダンジョンを攻略させたいのは、攻略特典を出す点から明らかです。第二次特攻隊が攻略する次のダンジョンも変化しなければ、私たちは相手のダンジョン攻略推進活動の一環だと考えます」

断言する次郎に、広瀬は暫く考え込んだ。

だが答えなど分かるはずも無く。やがて次郎の意見として受け入れたのか、次の疑問を口にした。

「新潟ダンジョンは、攻略後に白化してダンジョン外へ飛ばされた。だが内部への転移は可能で、最奥には何も出なかった。これはどう見るかね」

「もう調べたんですか」

「秘匿部隊にも、転移を持っている者が居るからね」

「それなら、ダンジョン外に飛ばされたのはボスを倒して攻略したからだと思います。白化は攻略済み、若しくはボスが居ない目印。

内部への転移が可能なのは、形状が変わっていないから。ボスが出ない理由は、倒したから」

若者故の柔軟さだろうか。それとも責任を負わずに済む立場故だろうか。

次郎の回答は淀みなく、断定的で、自衛隊が徹夜で討議した結論よりも遙かに踏み込んでいた。また現状を有りの俚に受け入れた解釈で、多角的視点からの意見を期待していた広瀬は、有効な意見の一つだとして頷いた。

だが防衛大臣の立場としては、様々な状況を想定しなければなら
ない。

「では仮に、第二次特攻隊が攻略したダンジョンが中級に変化した場合は、どう判断するかね」

「その場合は、新潟ダンジョンが例外になりますので、他との差を考えますね。秘匿部隊が、相手の定める限度数を超えて同じ難易度のダンジョンを攻略した可能性。何らかの禁忌事項に抵触した可能性。俺の情報量が少ないので、そこは判断出来ません。まあ知りたくも無いですけどね」

放言した次郎は、秘匿部隊の銃撃が大場政府から命令されたただけだと理解している。新政府は殺害命令を解除しており、既に次郎たちは狙われていない。

この問題に関しては、当時の防衛事務次官と統合幕僚長、緊急事態を布告された後に指揮命令権を有していた警察庁長官が政権交代に前後して引責辞任しており、対外的な幕引きは終わっている。

もちろん次郎に対しての公的な補償は為されていないので、次郎は彼らの協力を拒む大義名分を有したままだ。それは次郎にとって少額の賠償金を貰うよりも都合が良いので、状況は継続したままとなっている。

ダンジョン問題を抱える防衛大臣の広瀬としては、政府の命令であれば違法行為にも手を染める秘匿部隊がある方が色々と有り難い。また次郎が自分たち専任の協力者である状況も都合が良かったため、

次郎が何も言わなければ現状のままにするつもりだった。

「ところで白いダンジョンは、魔物を放出すると思うかね」

それは現政府にとって、重要な問題である。

次郎は少し考えてから、先ほどよりも自信なさげに答えた。

「分かりません。でも攻略しても魔物が出るのであれば、攻略の推奨効果が下がります。楽観論だと、出ないと思います」

「楽観論で無ければ、どうだね」

「リセットされてコウモリから出る可能性と、リセットされておらずカマキリから出る可能性の二パターンですね。一月四日には、白いダンジョンに全ての特攻隊を揃えた方が良いかもしれません。八五名も特攻隊が居るなら、二四県に三人ずつ置けますよね」

「成程、参考になった。ところで君の話は、ダンジョン専門家である山田太郎氏の意見として世間に公表しても構わないかね」

「……………別に良いですけど、責任は持てませんよ」

「勿論だ。意見を聞いてどうするのは政府が決める。今日の報酬は和馬君から受け取ってくれ」

「どうもです」

その日のうちに記者会見を行った広瀬大臣は、目下調査中である事を告げた上で、予てよりの情報提供者にして政府協力者の山田太郎と相談した結果として、次郎との話を残らず紹介した。

そして広瀬大臣は、一日の第二次攻撃の結果を見守りたいと締め括った。

現状に対する認識と、対策の発表があったことで、混乱していた世間は第二次特攻隊の攻略結果に注目した。

翌々日、第二次特攻隊が攻略したダンジョンが続々と白化した。

その結果によって、人々は不安を完全に払拭する事は出来ないものの、概ね安堵した。

世間では、ダンジョンを生み出した存在があり、その存在がダンジョンを攻略するように望んでいるという説が最有力視されている。その根拠は、次郎が示したとおり攻略特典が付くからであり、他にもチュートリアルダンジョンが出た点、日本語のステータスが出る点、レベルが上がる点、BPが付く点、日本の四七都道府県の駅前にダンジョンが出た点などが挙げられる。

その後、政府は予定通り三回目の特攻を行わせ、次郎たちは冬休みに入った。

ハーピーをミキサーにかけるのに飽きてからは、地下六階のオーガーを季節外れのバーベキューにして、地下七階のホブゴブリンをゴブリン同様にドラキュラ伝説の再現に用いた。

上級ダンジョンの森林を、大規模な焼き畑農業で次々と使い潰し、引き替えに美也と二人で膨大な経験値を独占する。

森という食糧庫を失った魔物たちは、それでも不思議と活動出来ていたものの、同族を襲うなど殺伐としていた。

やがて年が明けて、カマキリ出現が予想されていた一月四日の夜、広瀬から再召喚された。

今回も、大規模な森林破壊に関する苦情では無い。

いつの間にか政府公認にされたダンジョン専門家である山田太郎氏に対する意見聴取が目的である。

『この時間は番組を変更し、繰り返し臨時ニュースをお伝え致します。本日午後三時頃、全国各地の全ての初級ダンジョンの外壁が、白色から灰色に再変化しました。その後、午後四時五十分、高知ダンジョンのみが白色に再変化し……………』

二〇四六年一月四日。

日本の全てのダンジョンから魔物が出なかった。

その時点で、政権交代を行った与党四党と、協力した労働党の小林派、国民党の決断が功を奏した結果となり、彼らに権限を与えた国民が日本を救う大勝利をもたらした事となった。

しかし、勝利宣言は未だ為されていない。

それは白化していた二四県の初級ダンジョンが、一月四日に再び白色から灰色に戻ったからだ。その際には、内部に居た自衛官や警察官が、一斉に転移でダンジョン内から追い出されている。

但し、ダンジョン内への転移は相変わらず可能で、最奥には再びボスが発生していた。高知ダンジョンが白色に戻ったのは、政府が確認の為にボス部屋に行かせたからだ。

そして前回の発言が的中していた次郎が、再び呼び出された。

「元の色に戻ったという事は、ダンジョンがリセットされたんじゃないですか。もしかすると、再来月の四日には再び魔物が出てくるかも知れません。相手の意図は、攻略の催促とか、魔物退治をサポートするとか。あるいは、攻略特典の再取得チャンスとか」

攻略特典は、各ダンジョンのボスを最初に倒した者しか得られない。

そして次郎のように山中県と北海道の二カ所を攻略するような者が居れば、他の者は特典の獲得機会が減らされる。

新規参入者のために初級ダンジョンを残すのであれば、ボスを復活させる事もその一環となるのではないか。それが白色から灰色に戻った初級ダンジョンに対する次郎の考えだった。

「催促なのだとすれば、魔物が氾濫しない中級ダンジョンはどう考えるかね」

広瀬が指摘した中級ダンジョンは、魔物の氾濫が起こっていない。山中ダンジョンは、二〇四四年八月二七日から二〇四五年一〇月一日まで、七回もの魔物氾濫日に魔物が放出されず、次郎たちに攻略されて塔型円柱に変わった。

また沖縄と鹿児島でも二〇四四年一二月の攻略から、二〇四六年一月現在で魔物の未放出期間が七回目を迎えている。何れも灰色で、最奥にはボスも存在している。

「中級は初級に比べて、難易度が高いです。今の特攻隊でも、綾香以外はボス部屋にすら辿り着けません。ですから催促も、初級より長いスパンなのだと思います」

「充分に有り得るな」

広瀬の納得する様子に、次郎は今回も満足する答えが返せたらしいと考えた。

しかしふと思い付き、念のために自らの懸念を伝える。

「恐いのは、初級ダンジョンがどこまでリセットされているのかです」

「と言うと？」

「各初級ダンジョンは、カマキリが出る直前でした。このまま放置した場合、次の氾濫日には、コウモリから順番に再出現ではなく、いきなりカマキリが出てくる可能性もあります」

「確認するにはリスクが大きいな。敢えて人口の少ない一県だけを未攻略で残して、戦力を集中させて確かめるか。それとも危険を避けて、黙々と攻略し続けるか。流石にそれは、総理に諮らなければなるまい」

それは防衛大臣であろうと、一人で決断できない問題だろう。だが政府がいずれの道を選ぶにしても、十分な対策は為される。

共和党との間で相互利益を享受する次郎としては、労働党が巻き返しを図る機会が出ては困るので、頑張っただけで対策して欲しいと考えた。

「今回も助かった。報酬は和馬君から受け取ってくれ。それと、もう一つ頼まれて欲しい」

「何でしょうか」

「再出現したボスを倒しても、総合評価が付くのかを検証したい。高レベルの君と綾香君に、特典取得の可能性がある者を一人ずつ付けて、何力所か確かめたい。最奥までの移動には、転移能力者を付ける」

「……………機動隊とか言わないですよね？」

「地図作りと第一次攻撃隊の護衛をさせた、秘匿部隊とは無関係な若手自衛官だ」

「それだったら良いですけど」

「そうか。再取得が可能ならば、第三次以降の特攻隊候補者にも特典を与え、中級攻略を進めさせる。君たちは綾香君と共に、上級と予想されるダンジョンの攻略を続けてくれれば助かる」

「分かりました」

その後、次郎と綾香が選抜者を連れて複数のダンジョンで検証した結果、初級ダンジョンの初攻略者は総合評価が表示されて、特典も得られる事が判明した。

そのため灰色化した初級ダンジョンは、特典の国外流出や混乱を避けるために転移で白化しつつも、第三次以降の特攻隊が育てば攻略させて特典を与える事が内々に定められた。

そしてこの頃から、政府の大胆な新計画が動き始めた。

52話 ダンジョン一般開放案

広瀬大臣に再度呼び出されてから二カ月が過ぎた。

次郎たちは綾香を加え、山中ダンジョンの攻略を行っている。

綾香は、中学三年生の三学期。

だが第一次特攻隊の報酬で、中高一貫校の高校受験は兎も角、大学受験からは解放されており、上級ダンジョン専任となったために攻略に費やせる時間が次郎たちよりも増えた。

そのため次郎たちは、完全に綾香を仲間に加えた編成に作り直すべく、最初に綾香のレベル引き上げを図った。

やり方は単純で、地下一階のアルプから七階のホブゴブリンまでを、焼き畑農業ならぬ焼け野原農業で撃滅させ、各階層を使い捨てにしながら攻略し直した次第である。

綾香のステータスは、効率的なレベル上げの実績がある美也の真似だ。そのため魔物達は、炎や風に幾重にも襲われた。

その一方で政府は、一つの社会実験を行うことにした。

灰色に戻った二四の初級ダンジョンのうち、人口最小県のダンジョンのみを白化させずに残して、その結果がどうなるのかを確かめる実験である。

可能性としては、攻略前に戻ってカマキリから出直す。完全にリセットされて、再び地下一階のコウモリから出直す。何も出ないままになる。この三種類が想定された。

実験のメリットは、ダンジョンのシステムを確認できて、判断基準が生まれる事だ。

中級ダンジョンや上級ダンジョンの白化が間に合わずに魔物が氾濫する場合、政府は人口優先で攻略するか、出現する魔物の種類や

危険度を優先して攻略するかを判断できるようになる。

実験のデメリットは、カマキリが出た場合に犠牲者が予想される事だ。

その場合は、転移で即座に再攻略部隊をボス部屋に送り込む予定だが、ダンジョン周辺の県民が避難指示に従わなければ、犠牲者を無くす事は出来ない。

レベルを求める県民が居残る事は容易に予想され、県外からも人が来る事も目に見えている。

この実験を行う旨が公表されると、対象とされた鳥取県は猛反発した。

避難の支援は警察・自衛隊が中心となって行う。また魔物が破壊した施設等に対する補償も行われ、県には補助金も出る。

だが当事者としては、そもそも実験されなければ迷惑を被らないそれが公平な負担ではないなら、なおさら不満は募る。

先頭に立って大反対したのは、鳥取県知事だった。

知事は衆議院選挙前からの在任で労働党色が強いため、政府による労働党への意趣返しだとまで言い出す始末だった。

それでも政府が必要な検証だとして未攻略状態を保つ姿勢を崩さなかったため、批判に熱が入りすぎた知事は、ついに鳥取県を沖縄県に見立てて言い募った。

『政府は鳥取県を、对中国向けの在日米軍基地を置く沖縄県のように、魔物に対する前線基地にでもしたいのか』

鳥取県知事の最後の失言は、逆に沖縄県知事から嚴重抗議された。一方的な負担だと分かっているなら、どうして普段はそう言わず、自分たちの都合が悪くなった時にだけ公平性を訴えるのだと。

鳥取県知事は不適切な発言だったと謝罪したが、沖縄が出た辺りからの泥沼は殆どメディアに取り上げられなかった。

ユーラシア大陸側から見て、太平洋側へ弓状に飛び出した日本列島は、大陸と太平洋とを塞ぐ壁のような形状になっている。

沖縄県与那国島と台湾との距離は一〇七キロメートルで、台湾島と中国との距離は一五〇キロメートル。一〇七キロは東京駅から宇都宮駅よりも近く、一五〇キロは東京駅から静岡駅に行くよりもずっと近い。

中国の上海などから太平洋側に出る海路や空路を、領海や領空で塞ぎながら台湾付近まで延ばす沖縄は、中国の進出を抑える絶妙な位置にある。それは沖縄を最前線基地として在日米軍が置かれる所以の一つでもある。

テレビは地政学上の問題を避け、社会実験の是非を繰り返し問うた。

『隠蔽体質の前政権に比べれば、遙かに前進しています。しかし民間人に被害者が出る事は、強く懸念しますね。鳥取県の負担も決して小さくは無いでしょう』

『五井さんはこう言っておられますが、柊さんは如何ですか』

『これって、避難に従えば大丈夫なんですよー。被害の補償もあるのに、どうしてもルールを破る人が被害者になるんですかー？』

『年寄りには逃げるだけでも負担だろう。攻略してしまえば負担はない。だったら攻略しろという鳥取県知事の考えは間違っていない』

『では千葉先生は如何でしょう』

『きっと、政府への支持率が高い今しか行えない社会実験ですよ。全てのダンジョン攻略が間に合わない時、判断基準があると助かります。次の政権へのツケにせず、自分たちへの支持率を下げてでも公表して検証する姿勢は、評価したいと思います』

実験日となる二〇四六年三月四日は、偶然にも日曜日である。

鳥取ダンジョン周辺を包囲する輪の外には、上級ダンジョンを攻略中の次郎たちも密かに呼ばれていた。もしもカマキリが出てくる

なり、予想外の事が起これば、美也と綾香が局地的なハリケーンを生み出す予定である。

そして厳戒態勢が取られる中、午後三時がやってきた。

『緊急速報です。たった今、鳥取ダンジョンのドーム上部が一部消滅し、魔物と思わしき黒い影が飛び立つ姿が確認されました。消滅部分は五カ所以上、既に自衛隊の一斉砲撃が始まっています』

地上に入り口が出なかったことで、地上型の魔物は出ないことが確定した。

コウモリだけであれば、次郎たちは手出しを控える事になっている。

三人は派手な花火を見物した後、コウモリの大半が撃滅させられて、ダンジョンが白化したたのを見届けてから静かに引き揚げた。

この日を以って、初級ダンジョンがある二四県に関しては、現状のままであれば地上被害を完全に無くす算段が付いた。

もちろん地上にダンジョンが残っている以上、地上に魔物が出ていなくても、非常事態宣言を解除する事は出来ない。

二四個の初級ダンジョンは、常時白化して魔物氾濫を抑え、攻略特典も取得を政府が厳しく管理する事となった。

中級ダンジョンは、第二次特攻隊や、それ以降の特攻隊が攻略を担当する。少なくとも最深部の手前までは進んで、転移能力者で行き来できるようにしておく。

上級と思わしきダンジョンは、政府協力者の山田太郎氏が攻略を担当する。最深部まで調査して、結果を広瀬大臣に報告すれば任務達成だ。

当面の方針は、そのように定まった。

但し第二次特攻隊は、レベル三二から三三程度しかない。

対して中級ダンジョンの地下二〇階には、レベル三五のアラクネが多数生息している。

これを突破できたところで、上級はさらに困難だ。

山田太郎氏と、画一的で横並びの第二次特攻隊とでは、大規模オンラインゲームのプレイヤーで例えば廃人と常人くらいの差がある。

この問題に関して政府は、一月に広瀬が次郎と話した後から、大胆な対策を検討していた。

『繰り返しニュースをお伝えします。政府は、二四カ所の初級ダンジョンに関して、将来的に許可を得た国民にレベル上げを目的とした入場を認める方針を示しました』

それは人々が待ちに待った、ダンジョンを利用したレベル上げの政府公認であった。

井口総理が行った記者会見では、現状の説明から行われた。

現状としては、ダンジョンからの魔物氾濫は一時的に止まっているが、中級やその上のダンジョンからの魔物氾濫の危険があり、そもそもダンジョンを出現させた側の目的も不明である以上、予断は許さない。

そのため政府は対策として、『国民に自衛手段を持たせる為』に、初級ダンジョンを開放する決断を下した。

但し、被害と関係の無い他国民が日本でレベルを上げて、戦争や犯罪に用いては困るので、国籍などで制限は行う。国内においても一定の制限は設ける。

なお説明されなかったが、転移や収納などの攻略特典は一切渡さない。

具体的には、ダンジョンが灰色に戻ってボスが復活した時、内部

の人間は外へ跳ばされるので、それから数日のうちに転移能力者たちでボスを倒してしまう。そうすれば、転移を持たない人間では地下一五階まで物理的に辿り着けない。

転移能力者が買収される危険性を考慮して、各特攻隊員には転移出来るダンジョンを数カ所に限定させておく。そうすれば一人が裏切っても、奪われた部分を優先攻略させるなり、勝手に獲得に来たところを抑え込むなり対応できる。

転移も収納も、犯罪利用されないように国で取得者は厳しく管理する。

例外は、山田太郎と山田花子、それにチュートリアルで取得した可能性が拭い去れない民間人だけだ。

山田たちは、彼らが犯罪で与える被害以上の情報提供やダンジョン攻略をもたらしている為に、政府判断で見逃している。犯罪抑止として、犯罪が不要な程度の金銭は渡しており、綾香も付けている。

チュートリアルで取った民間人の場合は、隠れられる限り見つけようが無い。むしろ犯罪の一つでも行ってくれた方が見つけ易くて有り難いくらいだ。

そうして各ダンジョンを白化してボスを消し、攻略特典の流出や魔物氾濫を防ぎ、国民にはレベルだけを持たせて魔法研究や利用を促進したい考えだ。

ただし年齢によってレベルが上がり難くなるのは、周知のとおりだ。

今回は、国民の自衛力向上が目的であり、限られた資源をレベルの上がり易い若者に与える事が全体的な効率に繋がる。

そのため発表時点で、年齢には上限を設けたいとも付け加えられた。

開放する二四ダンジョンは、北海道・東北、関東、中部、近畿、中国、四国、九州の七ブロックに分けられる。

各ブロックに住所がある国民は、自身の住む各ブロックで白化状態の初級ダンジョンに入れるようになる。

北海道・東北地方は、四カ所。

関東地方は、二カ所。

中部地方は、五カ所。

近畿地方は、三カ所。

中国地方は、三カ所。

四国地方は、三カ所。

九州地方は、四カ所。

入場許可の申請先は、初級ダンジョンに駐留する二四の連隊本部。申請は三段階に分かれており、ハードルこそ高いが、申請日に一歳以上四〇歳未満であれば、多くの日本人が不可能では無い条件となった。

第一段階は、五月に公開されるウェブ上の申請書・誓約書二枚・同意書二枚・宣誓書・保証書をダウンロードし、必要事項を記入して、指定様式の顔写真・健康診断書・マイナンバーカード表裏両面・パスポート顔写真掲載ページと共に全てPDF化して送信する。

申請書は、個人情報やメールアドレスなど各種必要事項を記載。

誓約書Aは、現地の自衛隊・警察・職員の指示を厳守する制約。

誓約書Bは、ダンジョンの管理運営に一切の不服を申し立てない制約。

同意書Aは、内部での全損害を政府が保証しない同意、未成年は保護者も。

同意書Bは、内部での傷病に対し、健康保険や障害年金が使えない同意。

宣誓書は、内部で負う全ての被害や損害を、政府や管理者に訴えない宣誓。

保証書は、日本国籍を持つ成人二名が、連帯保証人となる署名捺印。

これらを送信した場合、メールアドレスに自動返信がある。そのメールアドレスに記載されているURLをクリックすることで、登録完了となる。

第二段階は、後日メールで指定された期間に、連隊本部へ書類を持参する。

持参するのは第一段階でデータ送信した各種書類、マイナンバーカード表裏両面のA四サイズコピー、パスポート顔写真部分のA四サイズコピー、戸籍謄本、住民票、通知用のハガキに自分の住所先を記載したもの。

なおA四茶封筒を用意し、自身の郵便番号・住所・氏名・URLをクリック時に表示された受理番号を指定位置に記載の上、その封筒に書類一式を入れて提出する。

連隊本部へは、マイナンバーカードとパスポートを持って本人が持参する。

これら全ての要件を満たせない場合、申請は受け付けられない。

第三段階は、通知ハガキ・身分証・印鑑を持参し、入場許可証を受領に行く。

申請の受理ないし不受理の返信ハガキが届くのは、七月以降となる。

受理の場合は、本人がハガキ・顔写真入りの身分証明書・印鑑を持参の上で、八月以降に入場許可証を受け取りに行く。

発行される入場許可証の有効期間は三年間で、それを持参すれば九月の開放日以降に、住所があるブロック内の各ダンジョンに入場できるようになる。

居住地が変わった場合、住民票を移して入場許可証に記録される住所が変われば、自動的に入場ブロックを移ることが出来る。

不備・疑義・違反等があれば、入場許可を取り消す事がある。

入場許可証を紛失した場合、再発行はされない。

不受理の場合、その理由は通知されない。

一度申請した者は、次回まで再申請を受け付けない。

素行が善良で無い者・責任能力が無い者・生活能力が乏しい者（暴力団員、前科者、成年被後見人、精神科通院歴者、税金未納歴者、自己破産歴者、生活保護受給者）と、その被保護者は不受理となる。また日本政府が他国の犯罪や戦争に加担する事を避けるため、日本国籍以外の者、多重国籍者、二〇四六年以降の帰化者も今回は不受理となる。

受理される年齢の目安は、概ね一二歳以上、四〇歳未満である。

犯罪などに利用されないため、入場条件は相応に厳しくなっている。

金銭的な問題を起こしている者に関しては、レベルを用いて強盗などを起こされては困るからだ。レベル一〇になって、レベルを持たない年寄りを襲っては手に負えなくなる。

また生保受給者を省くのは、ダンジョンで魔物を倒せる稼働能力があるなら、まずは働きなさいという理由であった。少子高齢化が進んだ日本では、四〇歳未満の若者であれば性別を問わず介護の仕事はいくらでもある。

各種の選別を通った者が、九月以降の公開日から初級ダンジョンへ入れる。

必要と思われるダンジョン外での魔法の犯罪利用防止、魔法特許対策などの各種法整備は、これから順次行われていく。

お役所仕事の日本としてはスケジュールが早いのは、それだけ魔物問題で切羽詰まっているからだ。

手間暇を全て申請者側に負担させ、入場許可証はマイナンバーカードの発行システムやデータ管理システムをそのまま流用して、可

能な限り時間を短縮させる。

このダンジョンを開放する発表は画期的であり、国内外で繰り返し報道されて、様々に議論された。

『魔物対策だと言うなら、日本で暮らす外国人を対象から省くのは如何なものでしょうか』

『日本から自分の国に帰って、レベルを使って犯罪を起こしたら、国際問題になるからじゃないですかー』

『戦争している国の兵士に持たせるのは、戦争への加担になるかもしれない』

これらの問題に関しては、入場できる者は肯定的に捉え、入場できない者は否定的に捉えた。

『それにマイナンバーを利用するそうですが、IDの情報流出は大丈夫でしょうか。厚生労働省などは、過去に年金システムの入った端末をネットと繋げて、年金情報を大量流失させたようなお粗末集団です』

このような危惧も為されたが、こちらに関しては反論できる者は居なかった。

世間では、ダンジョン開放の話題で持ち切りだった。

パスポートやマイナンバーカードの申請者も増えている。なお今回の先行入場対象からは除外されているが、帰化申請も増えているらしい。

国内では右翼系の団体が自国民優遇に様子見を行い、左翼系は懐疑的な立場で、労働党は旧主流派の間でも細かく割れている。

諸外国も動きを見せており、アメリカが同盟国としてアメリカ軍への特別な配慮を求め、一部の国は市民団体やメディアを動かし、欧州も人類で共有するようにと各所で様々な声明を出した。

なおイスラム教圏ではコーランに記載のある魔術の扱いが難しく、全面的に否定する国もあれば、一部肯定する国もあり、共通見解は出し難い状況にある。

そして三年生になった次郎たちのクラスでも、大いに盛り上がりを見せていた。

「政府、マジで有能過ぎる。まだ政権交代から半年だし」

「俺、六月の参議院選挙で共和党に投票するわ。まだ選挙権無いけど！」

朝から休み時間に入るたびに、中川と北村は頻りに興奮を口にしていた。

確かに政権交代から一年未満で初級ダンジョンへの入場許可を出すとなれば、政策の迅速さは前政権の比ではない。

勿論、いくつかの不満もある。

例えば、不受理の場合に理由を告げず、再申請も受け付けない点だ。対応者側の判断間違いで落とされた場合、目も当てられない。

また高校生たちにとっては、一八歳未満に保護者の同意が必要な点も引かかった。

「うちの親、許可出さないだろうなあ」

「でも一八歳以上になると、レベル上げ難くなっていくんだろ。それって自分だけの意思で入れるようになって、ほぼ終わりじゃん」

現状では親が反対した場合には、子供はレベルを得られない。

次郎の場合は、母親が許可しそうであるが。

もつとも次郎は、両親の許可の有無に拘わらず、黙々とダンジョンの探索活動を続けていた。

春休みを有効利用した結果、上級ダンジョンと思わしき場所の地

下八階から地下一階までの魔物がスキュラ、ケンタウロス、ヘルハウンド、スレイプニールの順であると確認し、それらを焼け野原農業と串刺しで手当たり次第に駆除できている。

いずれも強さはレベル四五程度で、経験値も中級と比較して膨大な量が入っている。

その結果、三月に入った時点でレベル九三、四月に入った時点でレベル九六になっており、五月にはレベル九九に届くと見込まれる。次郎は五月一日に一八歳の誕生日を迎えてレベルアップの効率が落ちるが、レベルの最大値が九九ではなく一〇〇であったとしても、一八歳になった直後であればまだ上がるだろうと見込んでいる。

上級ダンジョンを使い潰してもレベルを一〇〇まで上げて、夏休みには上級ダンジョンの完全攻略を目指したい考えた。

（レベルが九九九とか一〇〇〇まであったら、もうどうしようも無いけどな）

三年生の二学期からは、大学受験の受験勉強に入る。

父親の方針で『国立大学の手堅い学部』に入れば良いため、自分の偏差値で行けるところに進めば良いのだが、美也和大学を合わせるために少しは受験勉強しなければならない。

また美也も、国立の医学部を受験するからには、いずれ探索活動に付き合えなくなるだろう。

最終奥義として、特攻隊にも勝る『政府協力者・山田太郎枠』でどこにでも無条件合格できるとはいえ、それには正体を政府側に明かさなければならない。

井口総理や広瀬大臣は喜んでどこでも合格にしてくれそうであるが、勘弁して貰いたい次郎としては、探索活動は三年の夏までを限界としなければならなかった。

振り返れば中学三年生の時分も、同様の事をしていた記憶が蘇る。行動の根幹は、三年経ってもあまり成長していない次郎であった。

53話 最終学年

世間がダンジョン入場許可申請で大騒ぎになっていた頃、次郎たちは高校三年生となった。

クラスメイトの顔触れは全く変わらないが、図書文芸部には八人の新入部員が入っており、否が応でも自分たちが最上級生になったのだと自覚させられた。

部員は三年生五人、二年生一人、一年生八人の計二十四人という大所帯となっており、入学時に廃部の危機だった面影は何処にもない。

しかも新一年生には男子が三人も入ってきたため、男女比も一対一五から四対二〇まで改善されて概ね軌道に乗った形だ。

もつとも部員獲得に奔走したのは、部長の絵理と次期部長の浜野亜理寿であり、その件に関して次郎は特に何もしていない。頑張ったのは、ロッカー運びくらいだろうか。

「いやあ、ロッカーの調達が間に合って良かったよ」

「二段ロッカーになったのは惜しいですけど、幅は広がりましたね」
部室である旧視聴覚室の壁には、三月までは四連ロッカーが四台置かれていた。引退した一年上の先輩を計算すると、一七人の部員に対してロッカーは一六人分であり、一名分足りていなかった。

新学期に部員が増える事で再びロッカーが不足する事は明白だったため、絵理が顧問の大林先生を介して学校側と交渉し、部室の四連ロッカー四台（一六名分）と、学校側にある三連二段のロッカー五台（三〇名分）を交換したのだ。

教師側は、教員用に冬物コートも入れられる長いロッカーが欲しい。

図書文芸部は、狭くても良いから全部員の個人ロッカーが欲しい。互いに必要な物が異なっていたために交換が成立し、図書文芸部は部員二四名分のロッカーを獲得できた。なお四台を出して五台もらえたのは、今年度で定年退職する顧問の大林に高い発言力があつた為である。

「問題はパソコンだけだね。亜理寿が三年になった時に入ってくる部員が六人以上なら、今の台数だと足りなくなるから」

図書文芸部に置かれているパソコンは二四台で、現在は不足していない。

だが次郎たち三年生五人が出て行った後に、来年度の新入生が六人以上入ってくれば、不足する事になる。

「絵理先輩、卒業生からの寄付はいつでも受け付けていますよ」

「残念ながら、ボクは常に同人活動に投資するから全然お金が足りないんだ。金持ちな先輩は、そっちにいるじゃない」

「って、俺かい」

得意気な絵理の視線の先には、ロッカーの設置を終えて自分の仕事は終わったとばかりにナロー小説を読んでいる次郎が居た。

確かに次郎は、世間一般から見れば金持ちの世帯に属している。

自身では生まれた家が標準なので自覚が薄いが、実家が会社を経営し、山や駐車場・アパートなどいくつもの不動産を所有し、一般人の生涯年収よりも多い預金や株式を保有する家は、確かに平均よりは上だろう。

もつとも超ど田舎の堂下家では、長男が全てを受け継ぎ、次男以降は家を出るといふ昔の日本人さながらのオールオアナッシングな考え方を持っている。

長男が田んぼを受け継ぎ、次男以降は商人や職人に弟子入りでもして……という、家の資産を分けない田舎の農家の伝統的な方式だ。法定相続人などの現代的な常識は、もちろん通用しない。相続放棄の制度は、そのためにあるとすら思っている。

もちろん進学費用は問題なく、子供が親から受けられる世間一般的な支援は享受できる。

そして実家の財産を継承できない代わりに、将来の親への仕送りや介護の手間なども一切不要だ。家を出た時点で独立扱いのため、実家が困難になっても支援しなくても良い。

だが、それ故に実家の資産と自分の資産は同一視しておらず、次郎は自身が金持ちだと言う感覚は持っていなかった。少なくとも、春先までは。

現在は、綾香の持参金なるものを省いても約三億円という大金を収納空間に貯め込んでいる。また美也も一億円以上を稼いでおり、そちらへ支援する必要も無い。

そのため次郎は、絵理たちの認識する金持ち像と実態が一致していた。

「まあ、俺と美也の寄付分で二台なら良いけど」
「本当ですかっ！」

次郎は安易に請け負ったが、これは次郎たちと入れ替わりで卒業した先輩たちも寄贈していたからだ。ちなみに先輩たちは、パソコンが良く分かっていない大林先生の間を突いて、色々と便利なソフトもインストールしていた。

その恩恵を享受してきた次郎としては、身バレしない範囲で先輩に貰った程度は後輩に返しても良いと考えた。

一方、堂下家の時代錯誤など全く知らないアリスは、お金持ちの先輩が後輩にプレゼントをしてくれるのだと単純に考えて喜びを露わにした。

「それならオフィスソフト全部入りで、お絵かきソフトとペンタブ、文章校正ソフトもお願ひします」

「程々にな」

「えっ、ソフトと付属品も良いんですか!？」

「ちよつと、ちよつと、ジローくん。何それ、ボクも欲しいよ」

割り込んできた絵理に対し、次郎は芸人が突っ込みを入れるような手刀を作ると、空気をベシッと叩いて見せた。

「絵理は、自分のパパに買って貰いなさい」

「パパー、マルチタッチディスプレイ買ってー」

「誰がパパやねん。指差すのやめい」

次郎と絵理が漫才を繰り広げている間、アリスは美也に確認を取っていた。

美也に確認を取ったのは、次郎が美也の寄付分として一台を加えると言った為であり、付け加えるなら誰が次郎の手綱を握っているのかを知っているからでもある。

「美也先輩。堂下先輩がああ言っていますけど、本当に大丈夫ですか？」

「卒業する先輩からの置き土産として、パソコン二台分だよね。予算的に駄目そうな分は却下するから、部活で使う機材やソフトで欲しい物の案を出してみて。あと、他の部には内緒ね」

「分かりました」

財務大臣の承認を得た亜理寿は、部員の一部を集合させて指示を出し始めた。

「皆、色々調べてみて。麗緒奈レオナ、由姫ユフイ、仁美ひとみ、本体を探してみて。デスクトップでもノートでも良いから」

「アタシはアメリカ製のハイスペックマシンを探せば良いんだよね」
「ちゃんと日本語で使えるのを選んでね」

「最近は韓国製も優秀ですよ」

「それなら由姫はそっちを探してみて。見比べてみたいから」

「私は常識的な物を探すわ」

「それじゃあ仁美は、安い方で候補を出して。高い方は、あたしが探すから」

アリスは、アメリカ人ハーフと韓国人ハーフに多角的な視点から探させる一方で、ドジ優等生には国内標準型を調べさせる事にした。さらに自身も担当の一人に加え、他の部員にも指示を出していく。

「梨々花りりか、久美江くみえ、紫苑しおん、使用するソフトと機材のリストアップはそっちで検討してみて」

「うん、分かったよ。使いたい物を探してみるね」

「意外に安くて良いのは色々あるから、沢山挙げてみるね」

「二人に任せまーす」

同人誌描きとオタ女には、ソフトと機材を探す指示が出された。なお同調型は、グループとして二人に組み込まれただけのようである。

「で、なんで清水が此处に居るんだ？」

次郎の隣には、椅子を引っ張ってきた二年の拝金主義が座っていた。
た。

彼女はアリスの呼び掛けとは別に動き、興味深げに笑っている。

「いえー。ちなみに予算は、おいくら万円なのかなあって思いまして」

「内容次第だろう。美也が『部活で使う機材やソフト』と説明したとおりだ。多ければ優先順位が付くんじゃ無いか」

「周辺機器には、レーザープリンタも入りますか？」

「予算を測ろうとするな。それに学校の支給品以外を使っても、インク代が高いから持続しないと思うぞ」

「流石にインク代までは駄目ですかー」

「買ったときに付いてくる分だけあっても、直ぐに使えなくなると思うぞ」

「ですよー。ちなみに寄贈してくれるのはいつですか」

「卒業の時には置いていくよ。先輩が使っていて、不要になった中古品なら目立たないだろ。それに今渡すと、引退したみたいで居辛くなるからな」

「いえいえ、いつ来て頂いても良いんですよ。お金持ちは大歓迎です」

「そりやどうも」

「ちなみに先輩って、大学はどこで何学部へ？」

「……………手堅い普通の所だ。ちなみに俺は、医学部とかに行く予定は無い」

「二五歳未満で年収一〇〇〇万円を超えたら連絡してくださいね」

「しねえよ！」

まるで蛇が獲物のネズミを狙っているかのように笑いながら、拝金主義は次郎の元から離れていった。

その頃にはアリスの方も、各部長への指示を終えていた。

なお一年生の方には声が掛かっていないが、そちらは入部したばかりだからだ。

「ねえパパー、買ってー」

「やかましい。ベシベシ」

拝金主義が去った空間に入ってきた駄々っ子に向かって、手刀が軽快に振るわれる。

ちなみに「町やネットで知り合ったパパに買って貰いなさい」などと親父系のギャグでは返さない。ここは二〇匹の山羊が暮らす山羊舎で、次郎はマイノリティな羊なのだ。あくまで関西人のような分かりやすいボケと突っ込みで健全に回避する。

すると駄々っ子は、次郎の定位置を占拠するように、机の上に沈み込んで見せた。

「きゅう」

「わざとらしいわ」

次郎は洪々と、空いている島に移住を開始した。

部室には八つのテーブルの島があり、そのうち六つの島にパソコンが四台ずつ置かれている。

そんな列島の端に陣取っていた次郎は、押し寄せてきた駄々っ子侵略者から逃れるべく、海を渡ってパソコンが置かれていない広い新天地を目指したのだ。

ちなみに暇つぶしの物資である文庫本は、隣の大陸である図書室から幾らでも借りて来られる。

だが新天地には、既に原住民が陣取っていた。

「堂下先輩、ちっす」

「おう、不思議ちゃん。ちっす」

第一原住民、不思議ちゃん。

一年生で学年トップの成績でありながら、ちっとも秀才そうに見えない、常にマイペースなオカルツパの女子である。

不思議ちゃんは移住者を確認した後、そのまま自習を再開した。

なお次郎が勝手に付けた新一年生八人の属性は、次の通りである。
一、不思議ちゃん。二、お嬢。三、中国人ハーフ。四、宝塚。五、乙女。六、お嬢の幼馴染み。七、ギャルゲ主人公の友人枠。八、ナチュラル。

ちなみに一〇五が女子で、六〇八が男子だ。

山羊舎の混沌は著しいが、被害は三匹の若い羊が入った事で緩和されている。三年女子（九割方は絵理）が被害を与えるのは次郎、二年と一年の女子が被害を与えるのは一年男子で、住み分けが為されている。

次郎が新天地に居座ると、不思議ちゃんに代わってお嬢がやって来た。

お嬢は、自然に恵まれた七村市に巨大なホテルを作り、旅行客を迎える観光業を行っている創業者の一族だ。

七村市民に対して結婚式やパーティ、回忌などの各種イベント会場としてホテルを提供しており、テレビCMも流している事から、ホテル名を伝えれば大抵の七村市民には名前が通じる。

ホテルの建設費だけで次郎が現在持っている現金の倍以上は掛かっており、堂下家が富裕層だとすれば、お嬢は超富裕層に位置している。

ちなみに堂下家は、所有する土地の一部をホテル用の駐車場としてお嬢の実家に安値で貸しているという繋がりがある。

「先輩の家の会社って、結構儲かっているんですね。宴会でも、いいつもあり部屋取ってくれますし」

「まあな」

「では後輩として、遠慮無く頂きます。ありがとうございます」
「どういたしまして」

不思議ちゃんとお嬢に移住の承認を得た後は、様子を窺っていた他の一年生が話しかけてきた。

「図書文芸部は先輩からの寄付、結構やっているんですか」

「いや別に。今年の三年でパソコンを寄付するのって、五人の中で多分俺だけだろ。俺が入学した時に卒業していった先輩達は、同人活動で上手くいって、かなりの金があったらしいからな」

「同人活動は、儲かりますか？」

「絵理も人気ジャンルで金儲けに走れば、儲かるはずだけどな。でも趣味に走って凝るから、クオリティは上がっても儲からないんだよなあ」

「成程分かりました」

中国人ハーフが引き下がるのと入れ替わりに、今度は宝塚がやってきた。

彼女は非オタ女で、同人誌を作る輩の隣で芥川賞作家の小説を読むような凄い女だ。

「先輩。やっぱり無理なら、どうとでも止められますよ」

「おうサンキュー。先輩から貰った分を後輩に渡す感覚だから良いぞ。部の予算も足りないしな」

「それは失礼しました」

「いやいや。常識的な後輩が入ってくれて助かるよ。俺達が卒業した後もよろしく」

「随分気が早いですね」

宝塚との接触はそれで終わった。

他にも個性的な一年生ばかりが揃ったが、絵理とアリスはよくそんな連中を引き込んだものだと思えて感心する次郎だった。

こうして新たな後輩を迎え、高校の最終学年が進み始めていた。

「パパー、買ってー」

「もう移住してきたんかい」

なお客観的に見て、部内で一番騒がしい山羊と羊は、この二匹であつた。

54話 デモンストレーション

二〇四六年五月一日、次郎は一八歳となった。

現代では十八歳は成人年齢であり、相応の権利と義務を与えられる。

それが少子高齢化社会での労働人口の確保や、低所得労働階級の維持、増収などを目的とした過去の短絡的な政策の結末であろうとも、次郎にとっては保護者の同意が不要になった点に何よりも価値があった。

もはや自分が稼いだ約三一億円を、親に采配される恐れはない。渡された現金は法的に源泉徴収済みとなっているため、未成年者として親だけが問題だった。

もちろん現在は、レベル上げに勤しむために成人の権利を行使する暇は無い。

だがレベルを最大まで上げ切って、塔型円柱も攻略した暁には、使う余裕も出てくるのでは無いかと考えている。

但し、派手に使う際の大金を得た言い訳は、ろくに思い付いていないが。

そのようにあぶく銭を手に入れた新成人が欲に塗れた夢を思い描いていた頃、日本全体でも新たな夢が次々と描かれていた。

次郎の誕生日と同日、ダンジョンの入場許可証を得るための申請書類一式が、政府の告知通り各行政機関のウェブ上へと一斉公開された。

時期的にゴールデンウィーク直前とあって、若者達は大いに盛り上がった。

マスコミも、ダンジョンのある都市で通行人への街頭インタビューを行うなどして、連日に渡って入場許可申請の話題を取り上げて

いる。

ゴールデンウィーク中の今日も、男子高校生と思わしき制服を着た二人組が、インタビューに答えている様子がテレビに映っている。

「ダンジョンへの入場申請は、行われましたか？」

「勿論です」

「当然出しました」

「いつ申請されましたか？」

「五月一日の夕方です。家に帰ってから直ぐに用意しました」

「俺も同じです。家のプリンタでPDF化しました」

「ええっ、当日に申請されたのですか」

女性リポーターが大げさに驚いて見せた。だが彼らのように当日申請を行った者は、全国でかなりの数に上った。

何しろ事前調査の結果、許可申請を行いたいと回答したのは男子生徒の六割、女子生徒の三割で、検討中と回答したのは男子生徒の三割、女子生徒の三割にも上ったのだ。

一二歳以上四〇歳未満の国民は、約三〇〇〇万人。

男性の六〇八割と、女性の二一六割が申請する場合、想定される申請者数は最低でも一〇〇〇万人を大きく上回り、高い場合は二〇〇〇万人を越える可能性まである。

申請の事務処理が先着順で、許可する総数は不明瞭。

さらに初勤の遅れが数十万人から数百万人も差になると考えれば、一日でも早く申請したいと考える人が多くなるのも無理からぬことであつた。

「早い方が良いと思って。診断書と顔写真は先に用意しておきましたし」

「いつ連隊本部に呼ばれても良いように、戸籍謄本も住民票もパスポートも、全部揃えてありますよ」

「凄いですね。もしも許可が出たら、レベルを上げてどんな能力を取ろうと思いますか」

「風魔法が欲しいです。最終的な目標は魔法で空を飛ぶ事ですね」
「断然、身体能力です。それ一本に絞れば、山田太郎みたいに超高水平に成れると分かっていますし。俺は特典まで目指しますよ」

テレビはその後何組かのインタビュー映像を流した。

やがてインタビュー映像が終わると、その様子を見ていたスタジオで司会者とゲストたちが、ダンジョン開放後の国民のレベル上げについて色々意見を交わす。

政府がダンジョンを公開する名目は、国民の自衛手段獲得だ。

国民が自衛手段を獲得する事に関しては、数万人の死者と数十万人の被害者を出した魔物氾濫に対する危機感や、未だに残るダンジョンへの不安から、世論は概ね肯定的に捉えている。

その他にも医療費抑制や、魔法研究で消費エネルギーの転換、魔法を用いた特殊部品の製造など、資源の乏しい国として様々な夢を見た結果、各界からの圧力が行政の重い腰を後ろから蹴飛ばし、左右から前に引きずる勢いで前に押し出している。

国内メディアの報道も、各所が押す力の一端だ。

また政府側でも、メディアを介した様々な広報活動を展開している。

そんな数多ある広報活動の一つが、群馬ダンジョン前で行われていた。

「ジャポンテレビです。皆様、本日はよろしく申し上げます。こちらは撮影スタッフと、高ノ宮プロダクションさんです」

壮年の男性は軽くお辞儀をすると、テレビクルーとタレント事務所を紹介する。機材を抱えたテレビクルーは一礼し、事務所の男女は自己紹介を始めた。

「高ノ宮プロダクションと申します。この度は当プロダクションをご指名頂き、誠にありがとうございます。こちらは弊社所属タレントの片山真暖マノンです」

「はじめまして。Sylphidシルフィードの片山真暖マノンです。よろしくお願いします」

プロデューサーの名刺を渡したスーツ姿の青年と、世界的に知名度の高いアイドルユニットのリーダーが、丁寧にお辞儀をする。

Sylphidは四人組の女性アイドルユニットで、全員がハーフ若しくはクォーターだ。内訳はフランス人クォーター、フィンランド人ハーフ、トルコ人ハーフ、中国人ハーフと国際色も豊かである。

彼女達は、沖縄県で芸能活動中だった一昨年の七月、米軍が大量に撃ち落としたコウモリの群れに襲われた際、一気に経験値を稼いでレベルアップを果たした。ある意味、パワーレベリング体験の第一人者でもある。

そんな彼女たちは、有名人として初めてテレビの前で魔法の実演を行った事で、世界的な知名度を得るに至った。

今やSylphidは国内外で引っぱりだこであるが、今回依頼を出したのが日本政府であった為、事務所は無理をしてスケジュールを調整してやってきた。今回の依頼はリーダーのみであるため、スケジュールの調整が効き易かったのもあるが。

「広報官の安井です。今日は、よろしく願います」

撮影内容の打ち合わせは、事前に終わっている。

責任者の連隊長は顔見せのみ行い、後は広報官の安井が引き継いだ。

やがて撮影場所の案内が終わり、タレントの準備が整うと撮影が

始まった。

「皆さんこんにちは。 Sylphid^{シルフィード}の片山真暖^{マユン}です。 ついにダンジョン入場許可申請が始まりましたので、今日は関東ブロックの申請先の一つ、群馬ダンジョン駐留連隊本部にやってきました」

片山が両手を身体の右側に伸ばすと、その先に群馬ダンジョンの正面が大きく映し出された。ダンジョンは白いドーム状で、政府見解で安全である事が分かる。

入り口は塞がれて連隊本部も置かれているが、ドームの白化とダンジョン公開の方針が定まって以降、連隊本部は内部から出てくる魔物対策から、外部から来る人々に対する門番的な設営に造り替えられつつある。

「今日ご案内してくださるのは、自衛隊の安井さんです。 安井さん、今日はよろしくお願いします」

「陸上自衛隊の安井千紘広報官です。 こちらこそよろしくお願いします」

安井は二十代前半の若い女性で、一般市民への印象が少しでも柔らかくなることを目的として説明役選ばれた。

彼女は笑顔で、ダンジョンを公開するにあたっての説明を始めた。

「それではダンジョンの入場許可申請の手順について、簡単にご説明しますね。 基本的には三つです。 書類を出して、審査を受けて、合格なら入場許可が貰えます」

「凄く簡単そうですね。 実際にはどのような手続きが必要なのでしょう」

「はい、必要な手続きをご説明します。 あちらの群馬駐連本部へお越し下さい」

「分かりました。ではこれから、群馬ダンジョン駐留連隊本部へ行ってみたいと思います」

片山と安井は、群馬ダンジョン駐留連隊本部に向かって歩き出した。

実際に使われる映像ではカットが早送りにされるであろうが、二人が雑談をしながら歩いて行く間も撮影は全撮りで続けられる。やがて二人は連隊本部の屋内に入ると、入り口から右手側の一番の窓口の前で立ち止まった。

「はい、ここが窓口です。ここでは皆さんが第一段階でデータ送信された書類の原本と、第二段階で必要な書類を、A四サイズの茶封筒に入れて持参して頂きます。茶封筒には、申請者の郵便番号・住所・氏名・第一段階の申請時に表示された受理番号を記載して下さい。真暖さんは、全部持って来られましたか？」

「実は私も書類を整えて、群馬ダンジョンに入場許可申請を出しました。こちらです」

「はい、受け取りました。それでは中身を確認させて頂きます」

片山は、予め撮影用に準備されていた見本の茶封筒を提出した。それを受け取った安井は、見本品をカウンター前に順番に並べていった。

連隊本部に提出しなければならないのは、第一段階で送信した、申請書・誓約書二枚・同意書二枚・宣誓書・保証書・申請日から三カ月以内の健康診断書、そして第二段階に必要な、マイナンバーカード表裏両面のA四サイズコピー、パスポート顔写真部分のA四サイズコピー、戸籍謄本、住民票、通知用のハガキに自分の住所先を記載したものである。

これらをA四サイズの茶封筒に入れて、茶封筒に自分の郵便番号・住所・氏名・第一段階申請時に表示された受理番号を記載して提出

する必要がある。

揃えるのは手間だが、日本国籍のパスポートとマイナンバーカードを手に入れられる人であれば、第二段階までの申請は出来るようになる。

「提出物と茶封筒で合計一四点、確認しました。それでは確認の為に、パスポートとマイナンバーカードを見せて下さい」

「こちらです」

「提出されたコピーと同じ物ですね。そして提出者は、片山真暖さん本人に間違いないようです。はい、第二段階の申請を受け付けました。まずはパスポートとマイナンバーカードをお返しします」

パスポートとマイナンバーカードを目視で確認した安井は、それを直ぐに片山へ返却した。

「はい。パスポートとマイナンバーカードを返して貰いました」

「もしも受付担当者が返し忘れたら、皆さんその場で直ぐに言っして下さいね。この後は七月以降に、申請の受理ないし不受理の返信ハガキが届きます。受理されたら本人がハガキと顔写真入りの身分証明書を持って、入場許可証を受け取りに来て下さい。お疲れまさでした」

「ありがとうございます」

「続いて、受け付けた側の手順を一部お見せします。受け取った連隊本部では、このように処理します」

安井は、その場で受理番号が入ったバーコードシールを発行して、ハガキと封筒にそれぞれペタペタと貼り付けた。

そしてバーコードをスキャンで読み込むと、表示させていた片山のデータを入力して紐付けする。

「ここまでが第二段階でした。真暖さん、疑問に感じた事はありませんか」

「国籍が日本でなければ受け付けないという話について、質問してみたいです。私が所属する^{シルフィード}Sylphidは、ハーフとクォーターの集まりです。入場許可は、どこまでが認められるのですか」

「はい。ダンジョン法案では、日本国籍のみを持つ方が対象となります。フランス人の祖母を持つ片山真暖さんは、ご本人は最初から日本国籍のみですから大丈夫です。但し、日本国籍と外国籍を同時に持っている場合、あるいは二〇四六年以降に帰化された方の場合、今回は不受理になります」

「両方の国籍を持っていて、日本国籍を選択した場合はどうなりますか」

「はい。このようになります」

安井広報官が机に立てかけた説明のボードには、二重国籍者の扱いが記載されていた。

それによれば、国籍法第一四条第二項に基づき外国国籍の離脱を行った者は受理、離脱できず日本国籍の選択宣言を行った者は不受理と記載されている。

日本政府は、提出された外国国籍喪失届ないし日本国籍の選択宣言を確認することは出来るが、提出も宣言も一切されていない多重国籍者を把握する事は出来ない。

もちろんアメリカでの出生届を領事館経由で提出されているような場合は、アメリカ国籍を持っている多重国籍者だと分かるが、基本的には分からない事の方が多い。

そのため両親の片方が外国人で自動的に他国籍が得られる場合は、外国国籍喪失届が提出されていない限り多重国籍者であると見做されて、入場許可申請が却下される。

これで完全に多重国籍者を省けるわけでは無いが、これ以上は現

実的な選別能力の限界で、どうしようもないとされた。

どうしようもないで済むのは、この制度を導入した目的の一つが「日本政府は他国の戦争や犯罪に加担しない」という名目を得るためだからだ。

ここまでやれば「日本では制度的に他国籍者・多重国籍者がレベルを得る事を禁止していたが、虚偽申告した者が日本を騙した」と主張できる。

他国に魔法技術の特許を先行取得されないためという目的もあるが、禁止していたレベル上げで勝手に国際特許を取得する国があれば、レベル上げの機会から当該国を省くなどの対応を取れる。

差し当たって、国民に広くレベルを取らせて様々な技術発展を促す事と、他国にそれを奪われない事の現実的に妥協できるラインがこの辺りにあったわけだ。

将来的に緩和される可能性はあるが、日本の国益の為に他国民の入場を認めるのはなるべく遅らせたいというのが政府の本音だ。

そのために大場政権時代から続いているアメリカとの『沖縄ダンジョン共同調査』は継続されており、アメリカの拒否権があるため国連は身動きできないでいる。俗に言うダブルスタンダードだが、国益優先でアメリカと妥協ラインを綱引きしている井口総理の強かさには、アメリカすらも舌を巻いていた。

そういった強硬手段を採れるのは、国内に膨大な原油が埋蔵しているが如く、ダンジョンが日本国内のみに存在している圧倒的有利な立場と、現与党の対抗勢力が無いために外国勢が工作できないためであるが。

片山は暫くボードを撮す時間を置いた後、質問を口にした。

「制度的に国籍を離脱できない国もありますよね。そのような方はどうなりますか」

「はい。ダンジョン法案では対象外ですが、法律が変われば認められるかも知れません」

「分かりました。ありがとうございます」

日本政府はダンジョン公開にあたって、血統ではなく、国籍を基準にしている。

純血の日本人でなければならないという間違った誤解が無いようにするには、ハーフやクォーターの有名人に許可を出すのが手っ取り早い。但し同時に、クォーターやハーフに一律で許可を出すわけでは無いとも説明しなければならない。

今回その部分を周知する事こそが、Sylphidの片山真暖が呼ばれた理由であった。

「ではここからは、七月にハガキが届いて入場許可証を受け取った後についてご説明します。審査が終わると、ハガキに受理もしくは不受理のハンコが押されて郵送されます。このような形です」

安井は先程受け取ったハガキに受理とハンコを押し、片山に手渡した。

「ありがとうございます」

「そのハガキと、顔写真入りの身分証明書を持って、再び連隊本部に来て下さい。窓口は申請窓口ではなく、受け取り窓口です。そちらでハガキと受取証へのサインと引き替えに、入場許可証が貰えます」

引き替えに消印の入ったハガキを受け取るのは、届け出された住所への郵送で本人に届くかの確認。受取証へのサインと印鑑は、間違いなく本人へ渡した証拠となる。

片山が受取証に日付と氏名を書き、印を押して安井に渡す。すると安井は受領証と引き換えに、事前に用意していた入場許可証を手渡した。

「開放日以降にこちらの許可証を持参すれば、片山真暖さんは関東ブロックの群馬・栃木ダンジョンに入れます。入場許可証の有効期間は、二〇四六年九月から、二〇四九年八月までの三年間です。但し、ダンジョンが白化していない時は入場できませんので、ご注意くださいね」

「はい、分かりました」

入場許可証は、日本で三〇年の実績を持つマイナンバーカードと同じ仕様だ。

年数分だけ様々な問題を修正しており、全国には読み取り機が配備済みで、カード自体の生産体制も確立されている事から、すぐさま安定した運用が見込める。

当初の構想としては、マイナンバーカード自体にダンジョンの入場許可の有無も載せるというものがあつた。しかし有効期間の差があるために、独立したカードとして作成する事になった経緯がある。そのためマイナンバーカードと入場許可証には互換性があり、日本の行政機関に幅広く置かれているマイナンバーカードの読み取り機から、内蔵のICチップで本人の顔写真や有効期間を簡単に読み込める。

また入場許可証はマイナンバーと紐付けされており、マイナンバーに入った情報の一部を読み込むこともできる。

片山に渡された入場許可証は、政府が事前に作成した本物のカードだった。

既に各連隊本部では、審査さえ終われば入場許可証を発行できる状態に至っている。

繁々とカードを見つめる片山に、安井はレクチャーを行っていく。ダンジョン内部で遭難しても、自衛隊はダンジョン内の搜索は行わない。そのため事前準備を怠らず、なるべくグループで行動する

事が推奨されている。

自衛隊や警察の指示を厳守する事や、命を大切にすることなどが改めて語られた後、編集された映像が全国放送された。

54話 デモンストレーション（後書き）

事前予告の連投は、今回まででした。

ペースは落ちますが、これからもよろしくお願い致します。

最後に、投稿の原動力となりますので、ぜひ下の方で評価を付けて下さい

55話 ねじれ解消（前書き）

日間ローファンタジー1位&総合ランキング5位！？（ ）
。
読者様に頂いた燃料で、3巻が終わるまで連投を再開します。

55話　ねじれ解消

二〇四六年六月。

この月は参議院選挙が予定されており、共和党を中心とした連立与党の大躍進が確実視されている。現政権が支持される理由は多々挙げられるが、一言で纏めれば「前政権より良くなったから」だ。

魔物の出現を停止させた実績は、誰が見ても一目瞭然であろう。魔物が地上に出現したのは、二〇四四年七月四日の労働党政権時代。

以来は二カ月に一度、各都道府県のダンジョンから魔物が氾濫した。

しかも魔物の強さは、毎回上がっていた。

三種類目のトノサマバツが出た頃には、既に警察の拳銃では手に負えなくなった。そのため自衛隊が重火器で応戦したが、市街戦は多くの被害を齎した。

五種類目のナナホシテントウからは、人間の反応速度が追いつかなくなった。

六種類目にヤモリが出てきた頃からは、旧政府の恣意的な攻略順位の変更が行われ始め、各地で大規模な抗議デモが発生し始めた。

八種類目のオオサンショウウオが出た翌月に政権交代が起こり、九種類目のゲンジボタル出現時には、特別攻撃隊による撃退が行われた。

そして一〇種類目のカマキリが出る前に特攻隊の突入が行われ、全ダンジョンの攻略に成功してカマキリが出なくなるという大成果が挙げられた。

旧与党は隠蔽を続けて魔物氾濫による多数の犠牲者を出し、現与党はそれを暴いて魔物の氾濫を止めた。被害者がどちらを支持する

のかは、自明の理である。

新政府の政策には、今後の展望もある。

それは、一般国民に対するダンジョンへの入場許可だ。

魔物を倒す事で得られるレベル、身体能力、そして六種類の魔法。火・水・風魔法は、個人では電気・ガス・水道などの光熱水費を下げられて、個人消費が拡大する。また国家全体でも、吹っ掛けられていた原油やガスの輸入量を大幅に減らし、貿易赤字の軽減が期待できる。

また土魔法による建築事業力の大幅な拡大や工期の短縮、光魔法による新たな治療法の確立など、世界に先んじて日本が魔法技術を独占する恩恵を得られる期待が持たれている。

新政府は世界に先駆けて日本人にダンジョンを公開しようとしており、政治方針や日本の将来性、何よりも自身のレベル獲得機会に国民は期待している。

従って、大場政権と比較した圧倒的に高い評価と、今後への期待の両方を得ている現与党が、何れも無い旧与党に負ける道理が無い。もちろん現与党に対する不安もあるが、もはや小林派を除く労働党は批判者の受け皿には成り得ない。労働党としては、現与党の失策を待つしか無い状態だった。

「これでようやく捻じれ国会が解消されます」

総理の孫娘である綾香の断言振りからは、政府側の余裕の程が窺えた。

改選前の参議院は、未だに労働党が幅を利かせており、野党落ちした労働党が与党の様々な法案を批判して自分たちの健在ぶりをアピールしてきた。

そのため政府は、発表したダンジョン法案を参議院選挙後に先送

りして、先に国民の審判を問うたのだ。

すなわち「ダンジョンへの入場を認める新政府と、認めない小林派を除く労働党の、どちらを支持しますか」と。

従って今回の選挙は、国民にダンジョンを開放するか否かが争点となっている。

「でも、ダンジョンに入れない連中が労働党に協力するんじゃないか」

次郎は与党の勝利を確信しつつも、今回の選挙における懸念を口にした。

ダンジョンの入場許可証は、素行が善良で無い者・責任能力が無い者・生活能力が乏しい者（暴力団員、前科者、成年被後見人、精神科通院歴者、税金未納歴者、自己破産歴者、生活保護受給者）と、その被保護者は不受理となる。

また日本政府が他国の犯罪や戦争に加担する事を避けるため、日本国籍以外の者、多重国籍者、二〇四六年以降の帰化者も第一回目の入場許可申請では不受理となる。

その中でも暴力団員や準構成員・前科者の家族は、被保護者だけではなく、成人でも不受理にされるという噂が流れている。

そのため入場許可証は、真っ当かつ善良な国民である事を証明する身分証として重宝されるという皮肉な結果になっている。

おかげで次郎と美也も、真っ当な一般人の振りをして申請したほどだ。

もっとも現地警察とやらの指示に従う意志は、二人とも皆無であるのだが。

なお綾香は、特攻隊として特別な許可証を与えられる事になっている。

「許可を得られない人から不支持者が出るのは、最初から覚悟の上です」

「そうなのか？」

「はい。それに暴力団員や前科者にレベルを持たせない事は、一般国民の支持にも繋がりますので、一概に支持が下がるとは限りません」

「それはそうだよな」

次郎と美也は道理だとばかりに頷いた。

「不受理を伝えるのも、七月以降ですから」

「だから六月に参議院選挙があつて、七月に受理か不受理のハガキが来るのか」

「はい。ですから今回は確実に圧勝です。三年後の選挙でも勝てば、参議院も入れ替えを終えられて、労働党の旧主流派を殆ど消せます。そのためには、もう少しだけ時間が必要ですが」

「まあ頑張つて、徹底的に追い落としてくれ」

労働党自体を消滅させることは、おそらく不可能だ。

しかし参議院選挙で徹底的に追い詰めれば、現政府寄りに対立候補も擁立されない小林派が数を増して、労働党を完全に乗っ取れる。そうなれば労働党は、名前は同じでも基本方針が随分と異なる政党に変化する。

次郎としては、大場派が消えてくれればそれで良かった。

話が一段落した後、次郎は攻略を再開すべく、前方へと大きく跳躍した。

そして次郎たちに迫って来ていたバジリスクの頭部を槍で弾き飛ばし、伸びてきた尻尾を掴んで振り回し、まるで力エルを掴んでアスファルトの地面に力一杯叩き付けたかのような、滅茶苦茶な破壊

力で灰色の壁に強く打ち据える。

ダンジョン内に破裂音が反響し、バジリスクの頭部から撒き散らされた血肉と毒液が、灰色の壁を赤黒く塗装した。

バジリスクは、山中ダンジョンの地下一四階に生息するレベル四九程の魔物だ。

鶏に蛇の尻尾を生やしたコカトリスとは異なり、ニシキヘビのような太い胴体の蛇に、鶏冠を乗つけた様な姿をしている。

長さは五、六メートル程で、身体能力が非常に高く、中級ダンジョンの低階層辺りに出てくるような魔物であれば、おそらく一咬みして丸呑みにしてしまう。

その上、かなり強力な毒も持っている。

毒は血液凝固系で、地上で動物の血液をシャーレに入れて毒を混ぜてみたところ、僅か一滴で血液がゼリーのようにプルンプルンに固まった。これを体内に毒を流し込まれば、全身の血液がゼリー状に固まって循環不全を起こすだろう。

毒を無効化するには、毒を受けた本人がバジリスクのレベル・魔力・閥属性などの総合力を上回るレベル・魔力・光属性・閥属性を持つていなければならない。

それが不可能だった場合には、早急に外部から解毒する必要があるが、その時に要求される魔力と光属性はさらに高い。

レベル八〇代後半まで上げた綾香であれば充分に防げるが、他の特攻隊員では不可能だ。彼らが塔型円柱の地下一四階を攻略しようとすれば、確実に全滅する。

殆どヘビという外見の気持ち悪さから、美也と綾香は近寄らずに遠距離魔法でトドメを刺している。

だが前衛を受け持つ次郎は、近接戦闘を避けられない。

そのため次郎は、相手が蛇ではなくバジリスクという魔物で、自分は魔物退治のプロであると自分に強く言い聞かせた。

沖縄にはハブ捕り名人が居るらしいので、次郎はバジリスク捕り名人を自称して、そう在るのだと思い込んだ。そしてプロとして、バジリスクたちの尾を掴んで振り回している。

プロの技術は、最初に尾を抑えながら頭部を破壊し、倒したバジリスクの胴体を踏み付けて固定しながら、背中に槍を突き入れて魔石の力を吸収するというものだ。

「目標の尻尾を掴んでスイング、踏み付けて魔石回収。目標の尻尾を掴んでスイング、踏み付けて魔石回収。目標の尻尾を掴んでスイング、踏み付けて魔石回収」

半分心が死んでいるが、プロとは私情を排して対価のために仕事をする大人の事である。成人を迎えた次郎は、経験値という対価を得るために働くバジリスク捕り名人なのである。

なお残った血肉や毒は、スライムが処理してくれるので放置する。

バジリスクの死体を研究機関に提出すれば、大金を稼げるのかも知れない。

だが誕生日を過ぎてレベルが九九で鈍化した次郎は、レベル〇〇の美也に追いつく事を最優先としている。

美也の経験値の稼ぎ具合を見る限り、どうやらレベル一〇〇でレベルアップは打ち止めらしいが、せつかくここまで上げて来てレベル九九で固定されてしまったのは、画竜点睛を欠くこと甚だしい。

美也と綾香の二人が、次郎のレベル上げを支援する事を言い訳にしてバジリスクに全く近寄らないため、次郎は自ら率先して捕まえては、次々と壁に打ち据えて倒していった。

弾け飛んだ血肉は風魔法で壁側に押し返されるため、通ridoの両面のみが汚く染まっていく。

「上級ダンジョンが地下二〇階までなら、あと三カ月弱で六階分潜

らないとね」

早く先に進もうという催促は、バジリスクの巢から出たいからか、それとも攻略したいからか。次郎が予想する美也の感情比は、七：三くらいだ。

要するに、物凄く嫌がっている。

「夏休みがあるから時間的には大丈夫だろう。それくらい進めば、俺のレベルも上がるだろうし」

受験シーズンというタイムリミットは、次第に迫ってきている。

ところで学力は美也先生に引き上げられた次郎だが、希望する学部は特にない。

大金を所持しており、働かなくても暮らしていけるため、金銭欲求や労働意欲が希薄なのだ。

しかし親戚中を見渡しても大学に行っていない人間はおらず、大学に行くのが当たり前という環境で育ったために、堂下家の常識に基づいてとりあえず大学に行っておくかという感覚で進学を予定している。

進学先は父親が国立に行けと煩いので、言われるがままに国立を進学先に選ぶ予定だ。さらに手堅い学部にしておけと言われているため、手堅い学部に行く予定である。

これでは自発性の生まれようはずがない。

まだバジリスクを叩き潰していた方が、自らの意志で行動している分だけ自主性で評価できた。

おそらくダンジョン関連の学部があればそれを志望するのだろうが、あいにく日本にはダンジョン学部なる物は存在しない。

もつとも仮に新設されるとすれば、次郎は学生ではなく、ダンジョン第一人者の山田太郎教授として招かれかねない。但し山田教授も、実のところダンジョンの事はあまりよく分かっていないが。

「この上級ダンジョンと仮定しているダンジョンをクリアした後が気になります。次のダンジョンは、在るのでしょうか」

「そもそも、何でダンジョンが在るのかだよなあ」

ダンジョンの第一人者グループは、それぞれに首を傾げた。
ダンジョンを生み出した側は、ダンジョンを生み出す事で一体何を
得られるのか。

「相手が宇宙人説か、異世界人説か、未来人説かで、目的が分かれるな」

「宇宙人説の場合は、どうしてなの」

「人類を進化させようとしているとか。ほら、チンパンジーに色々
と教え込む人類がいるだろ。その人類と宇宙人版」

「わたしたちは実験動物なのかな。それはあんまり嬉しく無いね」

「その場合、日本だけが選ばれた理由が分かりません」

人類より遙かに技術が進んだ宇宙人が犯人であつた場合は、人類
が実現不可能なあらゆる事象に、人類を越える技術であるからと説
明を付けられる。

レベルや魔法を与える動機も、進化の過程を研究して成果を自分
たちに還元する事や、人類を対等レベルに引き上げて交易を行う事
や、労働力化したいなど様々に思い付く。

だが日本人だけを対象にした事には、説明が付かない。

「それなら異世界人説の場合は何なの」

「その場合は、異世界で魔物の処理が追いつかないから、神々の魔
法で異世界に跳ばすゲートでも作つた結果、こっちに繋がつたとか」

「そんな凄い魔法があるなら、自分で倒せば良いじゃない」

「きつと大魔法で、それを使った大魔導師は命を落としたんだよ」

「先程に比べると、可能性は低そうです」

「事实は小説より奇なりって言うだろ。まあ仮説の一つだから」

低評価を付けられた次郎は、渋々と異世界人説を引っ込めた。

「未来人説の場合は、どういう理由なの」

「その場合は、歴史を変えたいんだろうな。世界的に承認が得られているなら、こうしないと人類が滅びるとか。日本単独なら、日本だけのレベル独占。単に個人なら、タイムマシンの開発者がご乱心したとか」

「タイムマシンが作られたとしても、未来から過去へ干渉が行われた別の世界が出来るだけで、大本の世界は変わらないような気がするけど」

「未来人は、目標とする世界線とか時間軸を作れたら目的達成なんじゃないか。あるいは個人なら、実験とかそういう次元かも」

「結局、実験なんだ？」

「だって結果だけが欲しいなら、ダンジョンを出してのんびりレベル上げをさせるなんて回り道だろ。人類は絶滅危惧種じゃあるまいし、一億人くらい捕まえて無理矢理レベルを上げさせたって、滅んだりしないって」

「相手が聞いていて、本当に一億人を捕まえて改造したらどうするのですか」

「……………さっきのは嘘です。人類はか弱い生き物です。ガラスのピュアハートです。捕まえられたら死んじやいます。ヤメテ」

白々しい言葉が、バジリスクの住処に虚しく響く。

言い訳を済ませた原始人は、再び魔物を振り回しながら深部へと進んでいった。

一方、地上で行われた参議院選挙は、昨年に引き続き連立与党が圧勝した。

二〇四六年現在の参議院は二二二議席で、衆議院四四五議席の約半数である。

当選者の任期は六年で、三年ごとに半数改選となるため、旧与党である労働党が幅を利かせてダンジョン法案に反対の構えだった。

参議院議員は最新の民意を反映していない事から、両院で意見が分かれた場合は衆議院の優越となる。だが法案に反対されれば、衆議院で再可決をし直さなければなくなるため、一月から始まった通常国会では何度も足を引っ張られてきた。

改選前は、西日本大震災への対応で批判を浴びた直後の結果が如実に出ていた。共和党を中心とした連立与党全体で、僅か八五議席しか無かったのだ。

だが改選後は、一四〇議席に伸びている。過半数が一一二議席なので、現政府は衆議院に続いて参議院でも過半数を獲得した。

二〇四〇年

労働党 六七 国民党 七

改革党 一四 共和党 一二 新生党 四 共歩党 四

その他 三

二〇四三年

労働党 五一 国民党 七

改革党 二二 共和党 一九 新生党 五 共歩党 五

その他 二

二〇四六年

労働党 一四 国民党 六

改革党 二七 共和党 四九 新生党 七 共歩党 六

その他 二

連立与党が対立候補を擁立せずに選挙区制で当選した労働党の参議院議員は、八名全員が小林派だ。

衆議院議員も合わせると、労働党は主流派と非主流派の国会議員数が逆転し、小林議員が労働党の最大勢力となった。

残存する労働党議員も次々と小林派に接触を図っており、小林議員が労働党の党首になるのも時間の問題である。

これで日本のダンジョン法案は順調な通過が確定し、九月のダンジョン開放に向けての障害が取り除かれた。

世間では、選挙後からダンジョン入場許可申請の受理・不受理を知らせるハガキも順調に届き始める。

そして次郎と美也も、受理のハガキを受け取った。

「わたしの元親」

「うん？」

「親権喪失の後に偽装離婚して、元父が慰謝料を渡した後に自己破産で借金を消して、元母と元兄が生活保護を受給しているの。裁判で戸籍が外れていなかったら、わたしは危なかったよ」

「マジか」

「お婆ちゃんの支援が止まったからだって馬鹿な事を言っていたみたい」

「あー、よしよし」

美也の告白にショックを受けた次郎は、とりあえず抱きしめて、二本の触覚を持つ頭を撫でながら慰めた。

生活保護を申請するときは、親族に支援が出来ないのか連絡が行く。それで美也の祖母に連絡が行き、美也が事情を知ったのだろうと次郎は判断した。

申請されたのは、おそらく元両親が美也の親権を喪失して祖母の支援も止まった以降から、元兄の恭也が未成年の間。

時期的には、美也が中学二年の冬から高校一年くらいで、次郎が恭也を助けに病院に行った頃だった事になる。

美也が恭也に関わるのを嫌がったのも道理であった。

偽装離婚による世帯所得の誤魔化して生活保護費を受給するのは、立件するのは難しいが詐欺だ。

人によつては恭也の大学費用を稼ぐために情状酌量の余地があると思うかもしれないが、大学は義務教育では無く、日本の長期経済停滞や非正規雇用者の増大から、学費が理由で進学を断念する人も多い。

その中で、詐欺を働いて税金を騙し取った者だけが得をするのは、道義的にも法律的にも、やはり容認される事では無い。

「とりあえず入場許可証が貰えるから、美也はあつちとは無関係な」

次郎の腕の中で、トレードマークとなっているツインテールが僅かに頷く。

美也がアツサリと受理された件に関しては、膨大な申請者に対して、対応者側が機械的に処理せざるを得なかったのだらうと次郎には思えた。

三年以上前から祖母の戸籍に入っている美也は、元親の各種事由に人生を左右されない。

受理者の数は、次郎たちのクラス四〇名でも半数を超えており、膨大な申請者の大半が受理されたようである。

初級ダンジョンは、全国に二四カ所ある。

だが入場許可者の総数は、一〇〇〇万から二〇〇〇万人と予想されている。

各ダンジョンの入場対象者は五〇万人以上で、人口の多い関東地方では数百万人にも上る。

ダンジョン内は魔物が尽きず、あらゆるゴミを膨大な数のスライムが消化してくれる。怪我を負っても自己責任で、自衛隊・警察・職員の指示に従わなかったり、管理運営にクレームを付けたりすれば、入場許可を取り上げられて出入り禁止に出来る。

そのため管理は楽に思えるが、実際には入場ゲートは超巨大テーマパークを真似なければ、とても押し寄せる人波に対応できないだろう。開放初週の土日には、夏冬のオタクの祭典並みの入場者による大混雑が予想された。

実際問題として負傷者が出ればどう対応するのか、トイレなどはどうするのか、運用を始めなければトラブルも予想しきれず、どうなるのか分からない事だらけだ。

もともと許可証が貰えるのは八月で、実際に入場出来るのは九月。その頃には上級ダンジョンの攻略が終わり、次郎たちは受験シーズンに入っている予定だった。

56話 夏の訪れ

次郎たちにとって、高校最後の夏休みが訪れた。

とはいえ中学二年生以来、夏と言えばダンジョン潜りが恒例行事である。

そんなダンジョン引き籠もり生活でも真つ当な高校生活が維持できているのは、小学生一年生以来のクラスメイトである中川や北村などが居るからだ。

最近の二人は生徒会長と副会長として学生の中心を担っており、彼らを観察していれば、自ずと各種イベントの要点を裏方の動きから押さえられる。

また同じく小学一年生からのクラスメイトである越後屋輝星が居て、遠慮無く踏み込んでくる部長の絵理も居るため、美也も女子の間で孤立する事は無い。

そんな二人は、クラスの友人関係に支障が出ない恵まれた環境にある。

「綾香、高校生活はどうだ」

「藪から棒にどうしたのですか」

ダンジョン内を遠慮無く散々連れ回した綾香に対して、今更ながらに問う次郎の行為は如何なものだろうか。

魔物たちの住処を次々と踏破する事と引き替えに、綾香の高校一年生の前期がダンジョン側に偏っていた事は、今更疑う余地もない。レベルは相変わらず次郎が上がらず九九のままで、美也が一〇〇、綾香が九二まで迫っている。三人のレベル上げは、後続の特攻隊などに恨まれること間違い無しの、環境を破壊し尽くす焼け野原作戦だ。

もつとも上級ダンジョンが次のダンジョンに進化するなり、白化でリセットされるなりすれば、何事もなかったことになる。

いずれにせよ三人は、ひたすら経験値を稼ぎつつ、深部へと潜り続けている。

地下一七階に生息するマンティコアは、『人面有翼獅子尾蠍』とでも称すような外見をしている。

すなわち獅子でありながら、顔は人面犬のように人に似た造形をしており、悪魔のような大翼を生やし、鋭利なサソリの尾を持っている。

胴体は、自動車並のサイズがある。

尻尾を伸ばせば体長は倍加し、翼は鳥のように大きく広がる。

だがダンジョン内が広いため、巨体でも動き回るのに支障は無い。通路の幅は、チュートリアル時代からダンジョンの級が上がるごとに、片側二車線の道路並、三車線、四車線、五車線と広がってきた。

また階層ごとの高さも、二階並、三階、四階、五階と高くなっている。

おかげでマンティコアが突進するのは、日常茶飯事だ。

突進時の最高時速は、少なくともニア新幹線は超えている。飛行時に飛行機並の速度を出せるのかは不明瞭だが、とりあえず地球の常識は通用しないと思った方が良さだろう。

強さの見積もりは、概ねレベル五二。

毒の強さは不明だが、闇魔法が入っているので、免疫を持たない地球上の生物は防げないのでは無いだろうか。

そんなマンティコアに対して、同レベルでの戦闘は無謀の極みだ。第二次特攻隊が全員掛かりでなら、半壊した上で一体くらいには勝てるかもしれない。

もつとも死闘を繰り広げるくらいなら、下位の魔物を多数倒した

方が安全かつ安定した経験値を稼ぎ続けられるのは明らかだが、そのおかげで地下一七階は、相変わらず次郎たちの独占状態である。

もつとも次郎たちにとってマンティコアは弱すぎるため、逆の意味で効率が悪いかもしれない。

レベル九九の次郎が、強大な魔力と土属性で形成した石槍を力任せに一振りする。

すると凄まじい衝撃を受けたマンティコアは頭蓋骨を陥没させ、人間がハイスピードの車に撥ねられたかのように派手に吹き飛んで、頑強なダンジョンの壁に勢いよく叩き付けられた。

激突のエネルギーは、マンティコアの全身を強く打ち据える。

肋骨をバキバキと纏めて数本折り、折れた肋骨が内臓を貫く。マンティコアは打ち据えられて翼をひしゃげた後、床面に落ちて痙攣した。

そこへ再び石槍が振るわれ、無造作に伸びているサソリの尾を容赦なく決り飛ばす。

レベル九九と、レベル五二の戦いは、かくも一方的だった。

三度目に振るわれた石槍が醜悪な人面を叩き潰すと、マンティコアは首の骨を折られてついに動かなくなった。

そんなマンティコアの群れが残らず倒れるまで攻撃の手は緩まず、全滅の後には次々と心臓付近に石槍が突き立てられて、魔石の力が回収されていく。

これが地下一七階における、次郎の戦い方であった。

次郎が前面に集中できるのは、後ろで美也と綾香が背後の魔物を適当に間引いているからだ。

女性陣は、次郎とは正反対に徹底して遠距離から魔法攻撃を行うスタイルだ。

手元から迸るのは炎の津波。

虚空に生み出された炎は、通路全体を覆い尽くしながら、風魔法を重ね掛けで前方へ一気に押し流されていく。

それに対峙したマンティコアは、魔物の習性なのか人間に襲い掛かるうとして、炎の壁を突破しようと突撃してくる。しかし炎を押し出す風が、強烈な向かい風となってマンティコアの突撃を阻むのだ。

進む力と押し返される力が拮抗して、結果としてその場に留まらされたマンティコアは、猛烈な炎に全身を覆い尽くされて、目や鼻、耳や口から流れ込んできた魔力で体内を書き尽くされていく。そうして眼球を破裂させられ、舌と咽を焼かれ、気管や肺を炭化させられた後、無力にも崩れ落ちていく。

全てを焼き尽くしたい深層心理を具現化した美也と、それが効率的だと模倣した綾香が専売特許とする、苛烈で恐ろしい攻撃だった。炭化させられたマンティコアは、その魔石に込められていた魔力の素のような力を、炎の引き潮に浚われていった。

そんな三人による破壊と衝撃の嵐が過ぎ去った後、静まり返ったダンジョンの広間で再び綾香が口を開いた。

「中高一貫ですし、特攻隊である事は皆知っています」

「ああ、そうだったな」

井口綾香は、第一次特攻隊の第一班だ。

魔物が氾濫しないように頑張っていますと言えば、魔物の脅威にさらされた記憶を持つ日本人で文句を付ける者は殆ど居ない。

「私は太郎さんを祖父に引き合わせて、政権交代の切っ掛けを作りました。そして個人的には、お二人と契約を交わして、私自身が欲しいものを手に入れました」

「ああ」

「高校生活は、その対価です」
「対価？」

次郎はマンティコアに差し込んだ矛先を掻き回して魔石に当てながら、話の続きを促した。

「一般的な高校生活を送るか、それとも多少不便となる代わりに、ダンジョン問題で自分の思想信条を実現させるか。私は後者を選びました」

「ふむ」
「私の人生ですので。自己選択に後悔はありません」

綾香は現職総理の孫娘にして特攻隊員という立場であり、高校での友人生活に一定の距離を置かなければならない事も否定しなかったが、その代わりに本人の欲しい物は手に入ったらしい。
芸能人なども、学校生活を犠牲にする代わりにやりたい事を実現させている。

その特殊版だと考えれば、一般的な高校生活では無いにしても、選択の結果を総括出来るのは将来の本人だけだ。

謝罪した次郎に対して、綾香は首を横に振って不要である旨を伝えた。

綾香に限らず、次郎たちもダンジョン攻略に青春の大半を投じてきた。そして代わりに、多くのものを手に入れた。

個人的に得たものはレベル、身体能力、魔法、攻略特典、大金、政治的な後ろ盾などが挙げられる。

日本全体の变化としては政権交代、ダンジョン公認が挙げられる。ダンジョンに関しては、既に一〇〇〇万人以上が入場許可申請を受け理されていた。

いずれ人々は次郎のようにダンジョンに潜るようになるであろう

し、日本中のどこでも魔法を行使するのが当たり前の社会になるだろう。

そう考えれば、次郎たちも綾香も社会の変革期に、少しだけ他の人より前を走っただけだったのかもしれない。

「他の医学部志望者もダンジョンでレベルを上げたら、花子の治癒魔法にアドバンテージが無くなるかもしれないな。次は、もう一度能力加算でも取ってみるか？」

「アドバンテージは、そう簡単に崩れないと思うよ。チュートリアルダンジョンと攻略特典の転移Sがあっても、レベル一〇〇になるのは大変でしょう」

「確かに、そうかもしれない」

次郎はレベル九九に至るまで、中学二年から高校三年までの四年間を費やしている。

そして一八歳になってしまい、五月からはレベル九九の停滞が続けている。

一八歳になってからレベルを上げるのは過酷で、レベル九九から一〇〇に上がった時の美也と比べて一〇倍もの経験値を稼いでいるが、未だ足りていない。

家の裏手にあったチュートリアルダンジョンで底上げし、攻略特典の転移でダンジョンへ直接赴き、最後には美也の支援を受けてすらその有様だ。

チュートリアルダンジョンでのレベル上げや、攻略特典の転移能力などを得られない人では、一八歳になるまでに自力でレベル一〇〇へ達する事は不可能に近い。

例外は政府のパワーレベリングだが、あれは医者を作るためでは無く、ダンジョン攻略に特化しているので、美也のような自由度は無い。

「次にわたしが取ろうと思っているのは収納能力。お金があっても、物が持てなくて困っているでしょ。いざという時も、思い切って引越してできるしね」

「そうか。俺は能力加算を取ろうと思っている」

綾香の前で行った美也の危ない発言に、次郎は慌てて言葉を繋いだ。

「どうして能力加算なの」

「前に第一次特攻隊の候補生を二人ほど処理したけど、対人能力が高くないとダメだと実感した。あとは閻属性を一〇まで上げた花子の魔力が読めなくなっただから、それは必要だと思って」

「それなら取っておいた方が良くもね」

次郎は、収納と加算のどちらを選択するか迷った。

生活の利便性を取るか、自衛能力を高めるか。そして天秤は、後者に傾いた。

「綾香は収納を取るんだよね」

「はい。私は転移Aを二つ持っているだけです、次は収納の予定です。閻属性は一〇まで上げますが」

「それなら預かっている持参金は、収納能力を取った時に渡すぞ。」

あとは花子にも、生活費で一〇億円渡しておく。年収一〇〇〇万円で一〇〇年分な」

「ちょっと大雑把すぎるよ。でも分散して持った方が良くから、一応預かるけど」

「私の持参金は、返されては困ります。渡すのであれば花子さんと同様に、生活費として再計算して下さい」

「……………ぐぬぬ」

三人は再び歩み始め、マンティコアを手当たり次第に狩り始めた。上級ダンジョン地下一階のアルプが無限に発射できるロケットランチャーだとすれば、縦横無尽に駆け回る軽自動車サイズのマンティコアは、千年後の飛行型戦車辺りだろうか。少なくとも現代で例えられる兵器の枠は越えている。

そんなマンティコアは、体内に土色の魔石を持ち、身体に土魔法を纏わせるなどして身体強化を行っているようである。

現代の戦車程度は軽々と弾き飛ばせるくらいの凄まじい突進力とロケットランチャーなど全く通じなさそうな絶大な防御力。その厚い壁を突破するには、次郎のようにさらに強い力と土魔法を以て対峙するか、美也たちのように強烈な魔法で攻めなければならぬ。

現代兵器であれば、アメリカ軍のレールガンを直撃させれば物理的に倒せるだろうか。レーザー砲は、マンティコアの各属性の魔法防御がどう作用するのか今一不明だ。

「もしマンティコアに騎乗する高レベルの騎兵とかが作れたら、一個連隊の千数百名で世界最強だよなあ」

「核攻撃で、纏めて倒されると思うよ」

「手懐けるのも難しいと思います」

「核兵器を撃たれても、第二次特攻隊は衝撃波に耐えて転移で逃げられそうな気がするけど。あと手懐けるのは、闇魔法とかで頑張ればいけるかも」

「でもマンティコアの体重は四〇〇キログラムよりは絶対に重いはずだから、核を撃たれたら騎獣は全滅だよな」

「ぐぬぬ、ダイエツトしやがれ」

蹴り飛ばされたマンティコアが、サッカーボールのように飛んでいく。

「そもそも転移でどこにでも往復できる私たちは、乗り物なんて無

くても、往復回数分だけ撃てる核兵器並になっているからね」

「……………マジか」

「それに広瀬大臣は、もっと凄い事が出来るようになるよ」

「と言うと？」

「まず転移能力の取得で、往復可能な自衛隊員を増やすでしょ。次に、対象国に渡航歴がある人の転移に同行して、現地に跳べる人を増やすでしょ。そうしたら対象国の要所に、高レベル部隊を一瞬で送り込めるようになるよね」

確かに転移登録を防ぐのは難しい。

世界で最も多いのはアジア人で、世界人口の半数以上を占める。日本人が紛れたところで判別は困難だ。

「マンティコアと同じレベル五〇くらいのチームに転移能力者を二人付ければ、核兵器でも使わないと倒せないよね。それが四七チームあれば、日本くらいの国なら壊滅的な被害を与えられるかも」

「……………それは、何と言ったものか」

「核兵器を持っていないから、外国も日本を抑止できるけどね。でも千万人以上がレベルを持つ日本人も、銃で自衛するアメリカ人みたいに自衛力が高くなるから、攻め込むのは難しくなるかな」

「マンティコア部隊は、いらない子だったな」

騎乗の妄想が潰えた次郎は、サッカーボールのように蹴飛ばしたマンティコアの背中から石槍を突き刺すと、黙々と力の素を奪い取っていった。

57話 上級攻略

二〇四六年の夏の盛り。

山中ダンジョンの地下二〇階には、数千というケルベロスの死体の山が、^{うすたか}堆く築き上げられた。

魔物達は、^{つらつ}須く外来生物法に基づいた特定外来生物指定を受けており、環境省によって残らず駆除対象と認定されている。

だが動物愛護団体がケルベロス殺害に至った動機を耳にすれば、怒りの余り抗議活動を起こしかねない。それは彼らの動機が、人間を襲う危険な生物を駆除する事では無く、一八歳になった一人の男のレベルを一〇〇に上げる事だからだ。

いかにケルベロスの強さが概算レベル五五で、軍艦並の強さを持つマンティコアを正面から噛み殺せるほどの強大な力を持つていようと、レベル九九の次郎にとっては何の脅威にもなり得ない。

結局のところ戦いとは、相対的なものだ。いかに相手が強くとも、それ以上のレベルで対峙すれば負けようが無い。

そんな一方的な攻撃が熱心につけられた背景には、年齢と供にレベルが上がり難くなる事に加え、次郎たちが受験勉強のために活動を休止せざるを得なくなるという事情があった。

そのため早々にレベルを上げてしまおうと、最後に徹底的な経験値の搾取が行われたのだ。そしてケルベロスの死体の山と引き替えに、次郎のレベルは八月半ばになって、ようやく目標だったレベル一〇〇に達した。

レベル九九から一〇〇に上がるまでは三カ月以上を掛けており、しかも夏休みの半分まで費やしたため、次郎にとっては非常に長いレベル上げだった。

特攻隊のレベル上げや、政府の用事に付き合わなければ、順調に

レベルが上がって苦労はしなかっただろう。

だが個人としては使い切れないほどの金銭報酬は得ており、山田太郎の政府協力者としての社会的名声や立場も確立されて官憲から狙われる事が無くなった為、対価としては妥当だっただろうかと納得した次第であった。

綾香のレベルは一〇〇に届いていないが、彼女は未だ高校一年生なので、これから機会はある。

かくして三頭犬と戯れる日々は、ついに終わりを迎える事となった。

「このダンジョンが終わったら、次があっても無くても、本当に休止だからね」

「うい」

結局ダンジョンが何なのか、次郎には分からず終いであった。

だが、興味の赴くままに個人で行けるところまでは行ってみたという点は、次郎に一定の満足感をもたらしている。

後は画竜点睛を欠かないように、最奥のボスを倒すだけだ。

チュートリアルでは、ボスの強さが並のカマキリよりも一〇レベル高かった。

また下級と中級では、同じくボスの強さが並の魔物よりも一五レベル高かった。

その流れから考えれば、今回のダンジョンでは五五レベルのケルベロスよりも一五レベルから二〇レベル高いボスが、これまで通り二体出る可能性が高い。

対する次郎たちは、美也の方針により徹底して過剰戦力である。

最後に意思確認を行った三人は、最奥の真っ暗な空間へと足を踏み入れた。

「それじゃあ光を撃つよ。正面、右、左っ。正面、右、左っ」

美也は上空の三方向に対し、手前と奥の二カ所ずつに、眩い光球を打ち出した。

打ち上げられた強烈な光源は、空間の暗闇を明るく照らし出す。するとそこには、広い平原と傾斜の浅い丘が姿を浮かび上がらせた。

「黒い丘と平原か。チュートリアルが黒い草原、初級が黒床の闘技場、中級が黒い森、本当に自由な所だな」

「それに結構広いですよ」

空間全体の広さは不明瞭だが、遙か彼方には黒色の壁が天に向かって伸びているので、流石に限界はあるのだろう。

空は、ダンジョンの全二〇階層をぶち抜いたほど高い位置に天井があり、雲すら浮かびそうだった。

まるで都市全体が巨大防壁に囲まれた、箱庭都市の中に入り込んだかのような錯覚を覚えざるを得ない。

あるいは未来の恒星間移民船団の中だろうか。

ダンジョンの壁は何故か全く傷つけられないので、檻の中に囚われた動物園の動物のようにも感じられる。

「これはワンちゃんが走りやすそうだな」

様々に妄想を巡らせた末、目下直面している現実問題としてその点を顧みた。

今回の丘と平原は、三頭犬の群れが大量に駆け回れそうな広さだった。

「正面奥、右奥、左奥、一一っ、……………左右の奥に、一頭ずつ居

たよっ」

目視で丘の向こうに犬の頭を発見した美也が、次郎に判断を促す。かなり遠方のために正確な大きさは不明瞭だが、四トントラックあるいはティラノサウルス並の通常ケルベロスに比べても三倍くらいは大きい。

全長三〇メートルを超える白亜紀の首長竜が首を三本に増やし、頭部と口を巨大化させ、四肢を太く発達させたような巨大生物が、上級ダンジョンのボスだった。

「……………映画に出てくる三本首の巨大怪獣じゃん」

「翼は生えていないよ」

「ですが火炎は吐きますし、数も二体も居ますね」

上級ダンジョンのボスの強さに関して、次郎たちはレベル七〇程度と考えていた。

推定の根拠は、初級ダンジョンと中級ダンジョンだ。

初級ダンジョンでは、雑魚の強さが最大一五、ボスの強さが三〇であつた。

中級ダンジョンでは、雑魚の強さが最大三五、ボスの強さが五〇であつた。

そして上級ダンジョンの雑魚が最大五五であつた為、ボスは七〇だと考えたのだ。

その見積もりは、おそらく大きくは違っていないだろう。

しかし巨大ケルベロスの巨体を見た瞬間、レベル以外の要素で脅威度が上方修正された。

通常ケルベロス三体くらいであれば、同時に噛み殺すくらい容易そうな巨大な顎と大きな牙、そして長くて太い首である。

もしも巨大ケルベロスがダンジョンから地上に出れば、戦車を踏

み潰し、戦闘ヘリを薙ぎ払い、核兵器でも撃ち込まなければ止める事は出来ない大怪獣の出現となるだろう。

そんな巨大ケルベロスが首だけを覗かせている丘からは、一〇メートル級のケルベロス達が無数に姿を現わし始めていた。

通常サイズのケルベロス達であれば、ダンジョン内でグループ行動していようと、次郎たちを殺せるほどの脅威は無い。

しかし数百体も同時出現すれば、ボス戦では相当の脅威となる。

「花子は右側のボスを倒してくれ。綾香は両方の雑魚の殲滅。俺は左側のボスを倒して、ついでにレベルも測ってみる」

「じゃあ、行くね」

「分かりました」

右手側上空に、赤い光線が複数同時に打ち上げられ始めた。

まるで打ち上げ花火の火薬弾が、空へと打ち上げられる様に伸びていった後、光線はケルベロス達の上空に達して炸裂する。

まずは光が分裂し、花火の下半分だけが広がったかのように伸びていき、円では無く地上まで飛んでいつて次々と炸裂を始めた。

炸裂した魔法攻撃で、地上が明るく輝き出す。炸裂にやや遅れて爆音が轟き、その中にケルベロス達の悲鳴にも似た咆吼が響いてくる。

そんな自衛隊の戦闘車両が一斉に砲撃を始めたかのような攻撃は、右方向のみに留まらなかった。

左右両側のケルベロスに向かって、地上スレスレから緑の光線が、数十本纏めて伸びていく。

緑の光線は、高射砲が空の敵機に向かって伸びていくように次々と打ち出され、敵機への着弾前に炸裂した。

しかし、炸裂の爆風は激烈だった。

炸裂の衝撃を浴びたケルベロス達は、次々と巨体を弾き飛ばされ、

ハリケーンに飲み込まれた自動車のように軽々と後方へと転がっていった。

次郎が見るところ、二人はボスのレベルを測るために手加減をしている節がある。

然もなくば、全ての花火をボスに向かって真っ直ぐ伸ばし、至近で一斉に爆発させたはずである。

「えーこちらは、山中ダンジョン地下二〇階の花火大会会場です。八月一二日、日曜日。雲一つ無い打ち上げ日和の本日、二体の巨大ケルちゃんと沢山の通常ケルちゃんを観客に迎えまして、午後四時一七分より一斉に打ち上げ花火が始まりました。それではインタビューに行ってみましょう」

花火の観覧中にインタビューするという非常識な宣言を行った次郎は、既に暗闇が広がる花火会場の中を、左の巨大ケルベロスに向かって走り始めた。

爆風が向かい風程度にしか感じられない男は、緑の光線の直撃を浴びないようにだけ気を付けながら進み、右手に生み出した太い石槍を両手で抱え、跳躍しながら巨大ケルベロスの犬頭の一つに向かって突き出した。

「こんにちは。本日はどこからいらっしゃいましたか！」
「ギャワンッ」

次郎の胴体ほどもある太い槍が、ケルベロスの頭の一つを、下顎付近から口の中に向かって突き刺した。

最低のインタビュアーである。

ちなみに巨大ケルベロスのサイズ的には、太い槍も爪楊枝が下顎から突き刺さった程度でしかない。

しかし、爪楊枝には先端に抜けない反しが付いており、闇魔法の毒素も塗られていた。それをレベル一〇〇の男が力尽くで深く突き刺し、魔力二四の出力と闇属性八の毒素を注ぎ込んだ攻撃である。

どれくらいの威力を持つかというところ、レベル四九の毒蛇たるバジリスクや、レベル五二でサソリの尾を持つマンティコアなどは、次郎の毒槍を受ければ数分で瀕死に至る。

毒を受けて嫌がり暴れる犬頭の一つに向かって、次郎は平然と宣った。

「ええつ、態々そんなに遠いところから山中県までお越しになられたのですか。山中県は山と海と田んぼしか有りませんよ。空気と水は澄んでいますけどね。では次の方に聞いてみましょう。こんにちは、今日はどこからお越しになられたんですか」

「ギャワオンッ」

次郎は三つ並ぶ犬頭の真ん中に向かって跳躍し、二本目の太い毒槍をマイク代わりに突き出した。

次郎の速度自体が銃弾を撃ち込まれたかのように高速で、真ん中の犬頭は避ける事もままならず、槍を下顎から突き刺される。

しっかりと突き刺した次郎は、仰け反る犬頭の下顎を蹴って地面まで素早く退避し、わざとらしく右手でマイクを持つような仕草をしながらお茶の間に向かってリポートを続けた。

「なんとご兄弟で火星のタルシス平原から来られたそうです。タルシス平原と言えば、マリネリス峡谷の西に位置する火山平原として有名ですね。道理で皆さん、先程から火を噴いているはずですね」と

最後の犬頭が巨大な炎を吐き出したのを見た次郎は、高レベルと巨大な魔力で生み出した乱雑な風魔法と水魔法の障壁で防ぎながら、

素早く跳び去って回避した。

レベルや魔力が高いので、直撃を浴びても死ぬわけでは無い。しかし次郎が持っている服では、何を着ていようと一撃で駄目になる。

装備品が魔物の攻撃に耐えられないのは、全ダンジョンのあらゆる魔物に共通する問題だ。自衛隊の三三式迷彩帽や防弾チョッキ三型改であろうと、中級ダンジョンの魔物には耐えられない。

そのため次郎は、装備品の使い捨てで経済的に苦しんだ。

美也が遠距離魔法に特化した理由も、次郎を補う以外では経済問題が挙げられる。

これから日本人が大挙してダンジョンに入っていく事になるなかで、装備品の問題は直ぐに着目される事になるだろう。

より高レベルの魔物の皮を剥いで防具にすれば問題は解決するのだが、魔物を倒すために、より強い魔物を倒してその皮を剥がなければならぬのは本末転倒だ。

後続組は先行者から売って貰えば済むが、先行者は売って貰える相手が居ない。

「というか、俺が売れば儲かるよなあ。この巨大ケルベロスの牙なんて、武器として強そうだし。まあ硬すぎて、加工は物凄く大変だろうけど」

既に大金を得ている次郎は、売買に関してそこまで執着しているわけではなかった。

売るのは難しそうだと判断した次郎は、ケルベロスの牙を収納で確保して、自宅の杉山の地下に穴でも掘って埋めておこうかと思いついた。

政府に渡せば感謝されるかというと、現状ではそうでも無い。

広瀬大臣から次郎への要請は情報だけであり、次郎の暫定レベル付けと、美也の暫定魔物形態・特性評価だけでも充分すぎるらしい。

それは単に優先順位の問題で、実際に地上に出て国民に被害を与える魔物を研究するのが最優先で、それだけでも手一杯だからである。

今後はダンジョンを公開して、膨大な民間人が魔物の素体を持ち帰るので、初級ダンジョンに関しての研究は爆発的に進んでいくだろう。

中級や上級の研究は、初級で成果を出した企業と協力して進められるようになるかも知れない。

差し当って次郎は自分の仕事として、上級ダンジョンのボスの強さを、暫定的にレベル七〇ほどと見積もった。

それは槍を刺した感触による防御力や反応速度、対毒性、反撃の炎攻撃などから総合評価しての体感的なものであるが、全魔物の暫定レベルを付けてきた男としては、大きくは違っていないと自負した。

いずれ必要になるであろうボス戦の映像も綾香がカメラで撮影しているため、手抜きは無い。

仕事は済んだと判断した次郎は、飛び上がって仕上げに掛かった。

「最後の方にも聞いてみましょう。ハロー、ユーはどこからイナカ・ジャパンに!？」

「ギャオオンッ」

次郎が突き刺した石槍が、最後の犬頭の下顎に深く突き刺さる。

下顎を蹴って飛び退いた次郎は、もう一度高らかに跳躍して手に馴染む普通のサイズの石槍を生み出すと、今度は上空で次々と三つの犬頭に向かって投げ始める。

最優先で狙うのは、巨大な六つの瞳。次いで大口を開けたときに覗く巨大な舌。

次々と生み出される石槍は、強大な力で空気を振動させながら巨

大ケルベロスの頭部に投げ続けられ、閉じた瞼の上から眼球に突き刺さり、鼻の穴に入って内部に刺さり、嫌がって開けた口から口内に突き立てられていった。

「そうですか、三人ともご兄弟でしたか。宇宙人の方が、地球への訪星で日本を選んで下さって、日本人としては嬉しいですね。ところで皆さん、火星大使の方でしょうか、それとも個人旅行でしょうか。個人の方でしたら、まずは国交樹立までお待ち下さい。お帰りは、転移かワープを使用して自力でお願いします」

石槍で三つの針山を築いた次郎は、次に石の長刀を生み出すと、針山の一つに乗った。

次郎は魔力二四、土属性一三、闇属性一一であり、二つの属性魔法を同時に全力で込めた武器を創り出し、刃や毒素を補充し続けられる。

彼が生み出した長刀は、刃と毒が魔力の続く限り回復し続ける、魔法の毒刃であった。

その凶悪な長刀の刃を巨大ケルベロスの首筋に突き立てた次郎は、近接戦向けの割り振りを行ったレベル一〇〇の力で、首の骨が当たる深さまで無理矢理に刃を差し込んだ。

そして首を駆け下りながら、まるで魚を捌くように首を力尽くで引き裂いていく。

毒槍で感覚が麻痺したケルベロスは、ろくに抵抗もできず、ガリガリと首の骨を削られながら、血を吹き出してよろめき倒れ込んだ。首の付け根辺りまで裂いた長刀はそのまま方向を変え、真ん中の首に向かって今度は舌から駆け上がり始める。

まるでカッターの刃が段ボールに差し込まれたまま引かれていくように、ケルベロスの首は骨ごと切り裂かれた。

次郎は最後に残った首に飛び乗ると、やはり首を深く裂いていき、三つの頭を悉く潰し終えた。

頭部を潰されたケルベロスは、座り込んだまま力尽きた。

その胴体に向かって強烈な蹴りが入れられ、ケルベロスは横向きに倒れ込んだ。それから間を置かず、胸部に長刀が突き立てられて魔石を探り当てられる。

既に死んでいる巨大ケルベロスから長刀を伝い、魔石の力が次郎に流れ込み始めた。

「やっぱり、レベル七〇くらいだよな」

力の吸収が終わると、空間の黒い床・壁・天井が一斉に白く変わっていく。

次郎が左手側のケルベロスと戯れている間に、美也も右手側のケルベロスを倒していたらしかった。

やがて周囲が全て白化した後、虚空に真つ白な背景と黒い文字が浮かび上がった。

上級ダンジョン 総合評価S

攻略特典を選択してください。

- 一・能力加算S (BP+二四)
- 二・転移能力S (二回/一日)
- 三・収納能力S (四〇フィートコンテナ分)

選択肢を保留した次郎は、一先ず美也と綾香と合流した。

ダンジョンの入り口に飛ばされた後、もしも次のダンジョンが出ていたら中に入って転移できるように登録をしていくためだ。

「お疲れ様。ここは上級ダンジョンだったらいいな。評価はSだった」

「終わったね。わたしも評価Sだったよ。収納の二つ目を取るね」

「私もです。これで収納能力が得られます」

何を取るか決めていた三人は、それぞれ能力を選択した。

堂下次郎 レベル一〇〇 B P〇 転移S二 収納A 加算S
体力一三 魔力二七 攻撃一一 防御一一 敏捷一二
火六 風六 水六 土一五 光一〇 闇一二

地家美也 レベル一〇〇 B P〇 転移S 加算A 収納S二
体力八 魔力二六 攻撃七 防御七 敏捷八
火一三 風一三 水四 土四 光一五 闇一二

井口綾香 レベル九五 B P一 転移A二 収納S
体力八 魔力二四 攻撃七 防御七 敏捷八
火一二 風一二 水三 土三 光五 闇一〇

それぞれ能力値が示された後、景色が一瞬でダンジョン前に移り変わる。

入り口から全体像を見る事は出来ないが、壁が灰色では無く黒色で、明らかに前のダンジョンとは異なっている。

上級よりも上位のダンジョンがあった事に、三人は驚きを示した。

「まだ次のダンジョンがあったのか。転移登録をするために入るぞ」
「うん。でもこの先は、受験が終わるまでは攻略しないからね」
「分かりました」

次郎は、さらなる広がりを見せたダンジョンの階段に入った。
それに美也も続くが、何故か綾香だけは後に続かなかった。

「待つて。綾香が付いてきてない」
「……………どうした？」

二〇段の階段を飛び降りたところで次郎は立ち止まり、入り口前の綾香に振り返って声を掛けた。

綾香は入り口に向かって手を伸ばし、虚空を叩きながら答える。

「入れません。見えない壁があるみたいで、先へ進めません」

「どういう事だ」

「綾香の話が本当なら、人数制限か、レベル制限か、ダンジョン経験時間かも」

「綾香、どうしても入れそうに無いか？」

「……………はい」

現在は八月一二日の日曜日、午後五時前だ。

ダンジョン前には多くの人目があり、いかに変装していても長々と滞在したくは無かった。

「綾香は先に転移で離脱してくれ。俺と花子で入り口から中に入って転移登録だけして、綾香を同行させられないか試してみる」

「分かりました。すみません」

そう話した綾香の姿が、すぐに転移で掻き消えた。

見届けた次郎と美也は互いに頷き合うと、黒いダンジョンの内部に潜っていった。

58話 分岐点

次郎たちは上級ダンジョンの次のダンジョンを、黒ダンジョンと仮称した。

形状は上級ダンジョンの塔型円柱と変わらず、外壁が黒い為になぞ呼んだ。

地下一階で出現する魔物は、上級ダンジョンと同じ猫悪魔のアルプ。但しケルベロスよりも若干強く、従来見られた知性が窺えなかった。

結局綾香は黒ダンジョンに入らず、次郎と美也は丁度良い切っ掛けだとはかりに攻略を休止した。実際には次郎は個人で密かに潜っているが、精々気張らし程度の時間だけで、本格的な攻略からは程遠い。

黒ダンジョン出現については、広瀬大臣から上級ダンジョン攻略成功の報告が行われた。国内向けには、新たなダンジョンの確認作業が始まったと伝えられている。

そして夏休みが終わり、九月に入った。

九月一日は美也の誕生日であり、次郎に続いて美也も成人年齢の一八歳になった。

一方世間では、九月五日の水曜日に初級ダンジョン公開が行われ、平日にも拘わらず多くの国民がダンジョンへと潜っていった。

九月中にダンジョンへ入れるようにするのは政府の公約であり、必ず実現するように九月に入って早々の公開を目指していた。

それでも公開が五日になったのは、九月一日と二日が土日であり、仕事か休みの社会人と、夏休みが終わっていない学生が一斉に入つて混乱する事を避けるためだった。

週半ばの水曜日であれば、一斉入場は避けられると考えたわけで

ある。

だが世間では有給休暇、夏季休暇、仮病が数日前から続出し、解禁日の早朝には徹夜組で遙か彼方まで行列が続いた事で、考え方が甘かったと言わざるを得ない結果となった。

とりわけ関東ブロックの群馬・栃木ダンジョンは地獄の混み具合であり、入場時間を三時間も早める対応を取ったが、職員に食って掛かっての初日入場許可剥奪、公務執行妨害での逮捕者続出など様々な混乱が見られた。

結局のところ公開日をいつにしても、大混乱は避けられなかったわけである。

しかし九月中に一〇〇〇万人以上がダンジョンに入れた事で、政府の公約は一応実現された。

テレビではダンジョン特番が連日に渡って流れ続け、テレビ局や芸能人も挙ってダンジョンに潜り込んだ。

そんなダンジョン内には、武器や資機材の持ち込み制限が無い。事故防止のために車輛の乗り入れは禁止されているが、テレビカメラであれば全く問題なかった。

『千葉先生もダンジョンに籠もって、レベル四まで上げて来られたそうですね』

『はい。巨大コウモリを四〇〇〇体以上、倒してきました』

『はあっ！？　どうやったらそんなに倒せるんですか。だってコウモリって、人間と同じくらい強いんですよ』

『事前に一〇人くらいのスタッフをお願いして、ダンジョンにいらした沢山の方々にコウモリを捕まえて貰って、お金で譲って頂きました。もちろん源泉徴収税は、私が税務署に納付済みですよ』

『うわっ、ズルい、金持ちズルいで！』

『私が回復魔法を覚えて研究するのは、医学を発展させるためですから。ちゃんと医師として所属学会に報告しますし、皆さんは患者さんとして回復魔法の恩恵を享受できますよ』

千葉美冬は、ダンジョンから内部へ入って直ぐの広場の隅で、生きた状態のコウモリの買い取りを行った。

そしてテレビ局を張り付かせていた事で、彼女の斬新な行動はテレビ番組の一環だと認識され、一〇〇万人のうち四〇〇〇人程度の人が一匹程度ならイベント気分に乗ったのだ。

経験値も欲しいがお金も欲しい学生、テレビの企画に乗ってみたミィハーな大人、帰り際に美味しいものでも食べて帰ろうと思った人々から次々と買い漁った結果、レベルが上がり難いにも拘わらず、千葉はレベル四を達成したのだ。

『ダンジョン内では買い取り所などの仮設店舗を作るので無ければ、経験値の譲り渡しは現在禁止されていないそうです。但し、いくつか制約事項がありますので、詳しくは各ダンジョンを管理している駐留連隊本部にお問い合わせて下さい』

『はへえ、それ、千葉先生が自分で調べたんですか？』

『はい。特攻隊が山田太郎氏から支援を受けたのを参考にして、ダンジョン駐留連隊に問い合わせて、広報室から回答を頂きました』

『昔はネコミミ付けて歌って踊ったみーちゃんが、驚きの成長をしたんやなあ』

『昔の事は、ちょっと記憶に無いですね』

世間では様々な人々が、多様な方法でダンジョン活動を行っていた。

ちなみに次郎と美也も山中県から隣の県まで移動して、初級ダンジョンに表から入って魔法が使えるアリバイ作りを行っている。

もつとも入場待機時間が長すぎたため、もう二度と入りたいとは思わなかったが。

その後の次郎は、美也との約束通りにダンジョン攻略を休止した。

既に高校三年生の二学期であり、次郎たちのクラスは受験勉強を本格化させている。

推薦入試を受ける北村も、生徒会長として九月二十八日の金曜日から二日間に掛けての学校祭準備に専念し、ダンジョン活動を見送った。

学校祭では、クラスが土下座と焼きそばを掛けた焼きそば屋『どげそば』を開く中、生徒会長の北村と副会長の中川は、全体の統括をしっかりと行っている。

「しかしダンジョンが公開されたにも拘わらず、キタムーとナカさんがダンジョンに行かずに、学校祭全体の運営に集中するなんてなあ」

「確かに意外だったかも。これまで一日だった学校祭を九月末の土曜日を含めた二日間に制度変更したりして、しっかりと生徒会長と副会長をやっているよね」

学校祭を二日間にしたのは、これまで自分たちのクラスと、部活の出し物の二カ所で手一杯で、生徒達が他をゆつくりと回る時間が無かったからだ。

生徒会長の北村と副会長の中川は、生徒達が自分たちの出し物を行うだけではなく、他のクラスがどのように考えて何を出すのかを見る事で、生徒達の視野を広げ、思考力を養わせられると学校側に提案して日程変更を実現させた。

生徒会の実績としては上々で、二人は教師からのウケが良くなり、国立の山中大学への推薦も確定しているらしい。

それに土曜日が学校祭であれば、近隣住民や保護者、卒業した先輩、入学希望の中学生、他校の生徒などを幅広く呼ぶ事も出来る。

土曜日には外部者を誘う者も現われ、生徒会長たちは生徒からの支持も高まった。

かつては土下座して生徒会長になった同級生の進歩に、二人は万

感たる思いだった。

「じゃあ交代時間だな。せっかくキタムーが采配してくれたんだし、美也も他のクラスの出し物を見てきたらどうだ」

「そうだね。それじゃあ休憩するね」

美也が休憩のために店から離れた後も、次郎は暫く売り子を続けた。

焼きそばの売れ行きは上々で、続々と在庫が減っていく。

次郎が作られた焼きそばの残量を気にし始めた頃、どこかの中学校の制服を着た少女がやって来た。

七村市では見かけない制服だが、在校生の従姉妹などの可能性もある。次郎は気にせず声を掛けた。

「いらっしやいませー。一つ二五〇円です」

「それなら二つ下さい」

「はい。五〇〇円になりますー」

次郎は焼きそばのパックを二つ袋に入れると、視線を戻した。しかし先程まで居たはずの女子中学生の姿は、どこにも見当たらない。

「……………あれ」

少女の代わりに立っていたのは、先程の少女にそっくりな、次郎よりも二、三歳上の女性だった。

少女が着ていた中学校の制服ではなく、落ち着いた紺のトップスに、ベージュ色のトレンチミディスカートを合わせている。

明らかに別人のはずだが、顔の造形から髪質、髪型まであまりに似通っており、次郎は先程の少女の姉だろうか疑った。

「ねえ、焼きそば二つの注文だよ。はい、五〇〇円」
「あ、はい。すみません」

注文内容に加えて声までソックリだったため、次郎は先程の少女の姉だろうかと考えて焼きそばを手渡した。もしも先程の少女が再び買いにやって来た場合、収納に仕舞ってある焼きそばを二つ取り出して渡せば良い。

五〇〇円を手渡した大学生くらいの女性は、焼きそばを受け取りながら微笑んで告げた。

「一カ月半ほど遅くなったけど、レベル一〇〇おめでとう」
「何の事ですか」

殆ど間を置かずに、次郎はシラを切った。
咄嗟に考えたのは、彼女が山田太郎と山田花子を探す、政府の調査員である可能性だ。

政府協力者の二人が、攻略の続く山中県を居住地とする高校生の男女二人組である事は、最も高い可能性として概ね想定されている。自衛隊や警察の関係者が勝手に山田ペアを探しに学校祭へ来たのだとしても、決して驚くには値しなかった。

しかし女性は、次郎の疑念を打ち払うかのように、手に持っていた焼きそばの入った袋を虚空へと掻き消した。

次いで右手の人差し指で、周囲の光景を指し示す。

次郎が周囲を見渡すと、生徒達が凍り付いたかのように、全く動かなくなっていた。

輪になってジューズで宴会をしているクラスメイト達。広場に溢れている他クラスや他学年の沢山の生徒達。躍動感溢れる姿が、ま

るで静止画のように固まっていた。

これに似た現象は、次郎も収納能力で確認している。

収納能力も、中に入れた物の全てが時間停止した。

だが生物は入れられたものの、生きている魔物とレベルを持った人間だけは、中に入れられなかったはずだ。七村高校には、修学旅行で北海道ダンジョンに突入した数十名のレベル持ちが居る。

次郎は、ゆっくりと頷く事で、女性に話の続きを促した。

次郎が聞く体勢に入ったのを見て取った女性は、話し始めた。

「二人とも完全魔素体になったから、少し説明に來た感じがな」

「魔素体？」

「身体の一部が魔素と結び付けば、不全魔素体。全身が魔素と結び付けば、完全魔素体」

「どう違うんですか」

女性が視線を虚空に向けると、次郎と美也のステータスが表示された。

堂下次郎	完全魔素体	転移S二	収納A	加算S
体力一三	魔力二七	攻撃一一	防御一一	敏捷二二
火六	風六	水六	土一五	光二〇
			闇一二	

地家美也	完全魔素体	転移S	収納S二	加算A
体力八	魔力二六	攻撃七	防御七	敏捷八
火一三	風一三	水四	土四	光一五
			闇二二	

次郎が見慣れたステータスの一部が、変化していた。

レベル表記が消えており、代わりに完全魔素体という謎の文字が現われている。

「不全魔素体と完全魔素体は、妖精の血が流れた人間と、精霊そのもののくらい違うよ。でも、わたしにとつての二人は、エクセルとかワードで開いて自由に編集できるデータファイルになった感じかな」
「それじゃあ、不全魔素体は……」

「結び付いた魔素で全体像は分かるから、紙媒体をスキャンした画像データみたいには使えるね。レベルの低い方が画質は粗いけど、ダンジョンで量産するくらいなら問題無いかな」

次郎は、淡々とした例え話に戦慄した。

彼女の話が事実だとすれば、全世界を揺るがしている魔物たちは、目の前の女性が無限コピーしていたという事になる。

だが投下された爆弾は、まだ炸裂前だった。

「キミたち二人は、あたしが此方の調整者として登録を申請して、認められました。これから定期的にデータ取りするけど、どのタイミングで呼び出されても混乱しないように、予め説明しておこうと思って」

「俺と美也は、コピーされてどこかで使われる……のですか？」

一方的な通達を行う未知の相手に対して、次郎は警戒しながら慎重に言葉を紡ぐ。

「少なくとも、あたしはその予定。他所でも使われるなら、異世界無双なんて、あるかもしれないね。次の特典を取ったら、その分も更新しておくね」

「どうして俺たちなんですか」

「最大の理由は、あたしが自由に出来る間に、完全魔素体になってくれたから。井口綾香が完全魔素体になるくらいまでは頑張るつもりだけど、そろそろ限界も近いからね」

「ダンジョンに平原の空間を作って、水生生物の魔物を並べて、潜ってきた人にザクザク倒させたら、レベル〇〇の完全魔素体なんて直ぐに増やせるんじゃないですか」

次郎は女性がダンジョン製作者だと推定して、大きく踏み込んだ。しかし相手は、少し間を置いてから首を横に振った。

「それは出来ないんだよ。だからキミが間に合ってくれて良かった
と思っっているよ」

「でしたら、なるべく大切に扱って下さい」

「勿論。此方だと、人類が滅亡しそうになったらあたしがコピペするよ。二人は第二次性徴の後期まで魔素体じゃなかったから、身体に問題がない理想体だしね」

「……………えっ？」

発言に複数の爆弾が入っていたのを、次郎の耳は聞き逃さなかった。

「ちゃんと番いで登録してあるから、他所でも心配しなくて大丈夫だよ」

「いやいやいや。全部おかしい。でもその前に、レベルを上げると成長に影響が有るんですか？」

「魔素化の開始以降は、成長の方向性が変わるみたいだからね」

「どれくらいですか」

「身長なら一〇cm伸びるところが、半分の五cmとか。生殖能力も落ちるみたいだね。個体差が大きいから、一概には言えないけどね」

次郎の目の前で炸裂した爆弾は、金属片を撒き散らしてさらにダメージを与えていく。

「それなら、俺の身長はもつと伸びていたって事ですか」
「そうだね。でも平均的だから、あたしは今のままで良いと思うけど」

次郎が平均的な身長になったのは、おそらく両親の遺伝だろう。
兄の一郎は長身であり、兄弟間で明らかな差がある。

美也は中学に陸上部で、その頃は平均より身長が高かったにも拘わらず、今は平均的だ。これは女子の成長が早い事が幸いしたのであって、レベル上げの時期が早まっていれば、おそらく平均より低くなっていた。

「……例えば、仮に小学生で魔物を倒してレベルを得たら、どうなるんですか」

「身長がドワーフで、生殖能力がエルフ？」

次郎の表情から、徐々に血の気が引いていった。

今月から日本では、十二歳以上の日本人が一〇〇〇万人単位で魔物を倒している。もはや取り返しは付かない。

だが女性の方は、そんなことは気にもしていないようだった。

そもそも彼女は、次郎に対して全く悪意が無いどころか、次郎が混乱しないようにとわざわざ事前説明に来て、コピペとやらでは配慮を約束するなど好意的であるらしい。

無論、コピペ自体が本人の意思を問わない一方的な行為である点には、好意と立場に明らかな温度差を見て取れるが。

「俺達の事について確認したいんですけど」
「何かな」

「オリジナルとコピペの俺達がそれぞれ受けるメリットとデメリット

トを教えてください」

あらゆる疑問の中で次郎が最も気にしたのは、自身と美也の今後であった。

女性は暫く考える素振りを見せていたが、やがて疑問に答え始める。

「此方でのオリジナル最大のメリットは、瘴気消費体に変質しない事。これは遅くとも四年以内に分かるから。デメリットは、老化が遅いから人類社会だと生き難い事かも」

「じゃあ、コピー体の方はどうですか」

「引つ張り出す相手次第だけど、完全魔素体は調整できるから、問題の解決手段としてヒーロー扱いになると思うよ」

「老化が遅いつて話ですけど、一体どれくらいですか」

「世界最高齢は簡単に更新するよ。それが嫌なら、さっきのあたしみたいに、自分の身体が歳を取ったイメージで身体を変化させれば良いから。死んだらコピーするから、此方で老衰を希望するなら干渉しないよ」

「つまり、イメージ次第で外見年齢を変えられるんですか」

「うんうん。でもあたしも、基本的には七年前の一四歳から今の二一歳までの間しか、姿を変えられないけどね。完全魔素体になる以前に若返るとか、実年齢以上に加齢するのって、人間だと精神面でちよつと勇気が必要かもね」

「七年前……………二〇三九年？」

「一一月四日。あたし、元は和歌山県民だったから」

女性は、そろそろ良いかなと自問自答すると、次郎に向き直った。

「最後に一つお礼を言っておくよ。受験勉強があるのに、最上級ダンジョンに来てくれてありがとう。キミの所に来たのは、それが理

由だったりするんだよ」

「それは気晴らしと生活習慣なんで。受験があるので、あまり行けませんけど」

「うん。受験が終わったら、またよろしくね」

「もう完全魔素体を登録したのに、どうして攻略させたいんですか。黒ダン……最上級ダンジョンなんて、レベル〇〇からしか入れないですよ」

「登録はあたしの保険でしか無いからだよ。でも質問の時間はおしまい。最上級ダンジョンの最奥まで来てくれたら、ケルンが登録体向けにレクチャーしてくれると思うよ。でも来るなら、なるべく早く来てね」

女性は最後に何かを呟くと、一瞬で姿を掻き消した。

次郎には最後の呟きが、『間に合わなくなるから』と聞こえたような気がした。

「おい、どうしたジロー」

先程まで止まっていた周囲が、急に動き出した。

「……いや、何でも無い。焼きそばパック、そろそろ尽きるぞ」
「もう材料が無えよ」

焼きそば屋の店員に戻った次郎は、完全に上の空で高校最後の学校祭を過ごした。

59話 大学へ

ダンジョンを作ったらしき女性が接触したのは、次郎のみであつたらしい。

完全に寝耳に水だった美也は、次郎から聞き出して概要だけは掴めたものの、又聞き故に判断に迷った。

差し当って二人が直面したのは、その話を綾香と共有するか否かだった。

綾香に情報を伝えた場合、背後の大人達が右往左往して、データを渡さないために綾香のレベル上げをストップさせる可能性が考えられる。そして次郎たちを研究して病気への罹患や老化を抑える研究が進むかも知れない。

逆に伝えなければ、オリジナルは次郎や美也と同様にダンジョン製作者側にデータを取られ、老化を遅くされる。そして一蓮托生となり、コピー体は異世界で次郎たちと共に程々に無双である。

「綾香に伝えるのは、絶対に却下。先ず立場を同じにしないと、信用できないよ」

「まあ、そうだな」

美也の意見には次郎も賛同した。

利己主義者の二人にとって、自分たちが人体実験に供される事は断固拒否すべき未来である。そのため広瀬大臣らに伝えるという想定は、最初から有り得ないものだった。

次郎が心配したのは、レベルを得る事で身体の成長の方向性が変わるらしき点だが、現時点で一二歳以上の入場許可者は続々とダンジョンに入っており、既に後の祭りだ。

それに一二歳以上であれば、概ね生殖能力はある。

三年間の実証試験中には、成長期の伸びが半減している事に多くの人が気付くであろうし、次回の第二次申請から最低年齢を一四歳以上くらいに引き上げれば、とりあえず被害は限定的になる。

「次郎くん、異世界に綾香ごとコピーされる事はどう思う」

元和歌山県民を自称した『此方の調整者』は、コピーされる他所の場所として異世界を例に挙げた。

「転移とか収納は、便利だよな。レベル〇〇なら強さも充分だし、味方に居た方が良いんじゃないか」

「……………条件付きで良いよ」

「条件って何だ」

「最大の譲歩が、この世界と同条件」

「うい」

美也にとって綾香は、競争相手であると同時に協力体制を敷ける仲間でもある。

他所がどのような環境であるのか分からないという不安が後押しし、綾香の存在を承認へと至らしめた。

次郎の側には特に否定的な理由は存在せず、結局二人は綾香に対して同じ立場になるまで沈黙を守る事にした。

最初から選択肢を提示して自主的に選ばせるのが良識的なのだろ
うが、そのために犠牲になる気は無いというのが、二人の判断だった。

「でも、凄く疑問があるんだけど」

「何だ？」

「日本って、千数百万人がダンジョンに入り始めたし、これから生

まれてくる子供も入るから、将来的には挑戦者が何億人になるですよ」

「ああ、日本人の子供の半分がダンジョンに入るとすれば、何百年後には億単位だよな」

「それなら、一四歳になるまで魔素体じゃなかったレベル一〇〇の人間なんて、いずれ何万人でも出ていると思うけど、どうして先着にするんだろうね」

「ああ。なるほど」

その疑問には、次郎も同感だった。

二人が自力でレベル一〇〇に達成したと言っても、厳密には次郎は最終段階で美也の支援を受けているし、美也も初期段階では次郎の支援を受けている。

さらに綾香のようにパワーレベリングでレベル一〇〇に達しても良いのであれば、それくらいの人間は今後いくらかでも出てくるだろう。

データ化して便利に使いたければ、最初に到達したから価値があるとも思えない。他にもたくさんデータのデータが集めるまで待てばいいのだ。

次郎は暫く思考を巡らせ、唯一見出した可能性を口にした。

「最後に、早くしないと間に合わないとか言っていたけど」

「それって、ダンジョンを出現させられる時間かな。若しくはレベルを上げるための魔素の資源的な問題とか、他所と競争していて攻略特典の交付に上限があるとか、滞在時間が迫っているとか」

「うーん、全く分からん」

次郎は言葉では投げ出しつつも、思考自体は続けた。

「唯一分かっているのは、最上級ダンジョンを攻略すれば何かに間

に合うつていう事だな。まあ受験が優先だけど、俺は大学に入ったら後はまた潜ってみる」

「うーん、答えを得るにはそれしかないよね。わたしはどのくらい手伝えるのか分からないけど、困ったら言ってね」

「それじゃあ、その方針で」

そうして結論を出した二人は、一先ず受験生に戻った。

学校祭が終わった七村学校は、生徒会長が北村から二年生に交代した。

当選したのは昨年立候補していない二年の男子で、しかも北村の土下座を真似て当選した事から、七村高校では生徒会長選挙で土下座をすることが禁止されてしまった。

そんな馬鹿馬鹿しい選挙が終わり、高校生活がラストパートに突入していくなかで、周囲の空気に飲まれた次郎も真面目に勉強に取り組み、大学受験を行った。

受験先の候補はいくつかあったが、次郎と美也の二人が地元から離れたかった事や、次郎の偏差値の都合、今後は完全魔素体として同じ立場の仲間になる綾香との距離的な事情などを総合的に鑑みて北海道になった。

成績で合格できる大学を受験先に選んだからだろうか。

結果として二人は、特に何の問題もなく大学へと合格した。

しかも美也は受験先のレベルを下げた為なのか、学費の減免対象になった。

祖母には次郎と同棲して、学費はアルバイトで稼ぐので支援は最低限で良いと伝えていた美也だったが、減免によって祖母をより安心させられた事は素直に喜んでいた。

次郎の方にはそのような特別な条件は一切無かったが、口うるさい父親が課した人生最後の条件を達成できた事は安堵した。

そんな父親との進路に関する最後の話し合いは、合格という結果

からすんなりと纏まった。

「学費とは別に、生活費は家賃を合せて月一五万。それとは別に三〇〇万やるから、後は自分でやりくりしろ。足りなければアルバイトでもすれば良い」

「了解」

「将来は弁護士にでもなるのか」

「いや。手堅い学部だから、公務員にでも何でもなれるだろ」

「そうか。お前の進学と入れ替わりで、一郎が家に帰ってくる。お前の就職先はどこでも好きにしろ。それと高畠さんの孫娘と付き合いがあるそうだが、家を出るお前にまで相手の出自はとやかく言わん。それも自由にすれば良い」

高畠とは美也の祖母の苗字であり、母親の旧姓でもある。

大地主の血筋という時代錯誤な考えを植え付けられている次郎の父親は、代々の小作人である高畠家の美也との付き合いに好意的では無い。嫡男である兄の一郎であれば、おそらく付き合いは認められなかったに違いない。

だが家から出る次郎には、付き合いを認めるそうである。

生まれて以来、いい加減に父親の受け流し方に慣れている次郎は、相手の主義主張を右の耳から左の耳へと聞き流し、要点だけを口にした。

「分かった。進路も相手も好きにする。あと四年間生活するアパートとかマンションだけど、ネットで探してみても良い？」

「おかしな所で無ければ、保証人のハンコは押してやる」

「それなら、生活費の範囲内で大丈夫そうところを探してみる」

淡泊に話し合いを終えた次郎は、四年間暮らす大学付近のマンションをネットで探した。

北海道札幌市は山中県と異なり、検索に引つ掛かる賃貸マンションが異様に多い。

大学や大型ショッピングモールからも徒歩数分で、二LDKながら家賃七万程度の物件がゴロゴロと転がっていた。次郎たちの地元では絶対に有り得ない選択肢の多さだ。

次郎はマンションを決めると、足早に山中県を後にした。

兄と入れ替わりで実家から出た次郎は、もう自分は山中県には帰らないだろうと思っていた。

資金的には、美也に一〇億円を渡し、綾香の持参金を別枠としても未だ二六億円以上があるため、適当に店のオーナーにでも成るか、株式投資でもして世間体を保ちつつ、美也の医学部から研修医、医師への流れに付き合うのも悪くないと考えている。

美也は祖母が残っているため、山中県から去る事には後ろ髪を引かれる思いがあった。

だが祖母は七村市を終の住処と定めており、その遺産は元母親が虎視眈々と狙っている。何しろ美也は母親と法的に縁を切ったが、祖母は母親と縁を切れていない。

母親に一切関わり合いたくない美也は、遺産相続の争いから逃れるべく、山中県からは大きく距離を置いた。

成人した二人にとって、そろそろ祖母離れして箱庭を移す頃合いだったのだ。

二人とも二〇四七年の三月中に住民票自体を動かしており、既に七村市民では無い。

「はあ。やっと完全に自由だね」

大学デビューのため、ツインテールからロングのストレートへと進化した美也が、次郎のマンションのリビングで大きく伸びをしながら、溢れ出す開放感をアピールした。

色々と抑圧され続けていたことを、エリート幼馴染みの次郎は重々承知している。

当初は髪型に強い違和感があったものの、自由民を自称する幼馴染みの有り様をそのまま俚に受け入れた。

つまり触覚は消えてしまったが、美也は美也であった。

「まあ、ここまで長かったからなあ」

「もう山中県には、帰らない」

「そうだなあ」

「このまま北海道に住もうよ」

「そうだな。構わないぞ」

「ふふふーっ」

いつになくご機嫌な美也がじゃれてきたので、次郎は子猫と遊ぶように左手を差し出して、適当に振ってみた。

すると左手をバシッと掴まれ、軽く振り回される。

実行している当人にもよく分からないコミュニケーションが成立する中、次郎は受験中に浦島太郎と化していた様々な状況の変化を振り返った。

次郎たちが受験に追われている半年間、綾香は次郎たちが干渉せずとも北海道の中級ダンジョンで自主的にレベル上げを続けた。

そして次郎たちが北海道に引越した頃には、既にレベル一〇〇に到達していた。

美也と同様に接触は無かったようであるが、順当なペースで到達したため、おそらく登録されていると思われる。

これで綾香も共通被害者であり、政府の人体実験から逃れ、コピペで方々を回る運命共同体となった……かもしれない。

第一次特攻隊による初級ダンジョンの白化は順調で、これまでに

ダンジョンから魔物は溢れ出していない。

問題は中級ダンジョンの方で、沖縄と鹿児島では二〇四四年二月の攻略から、二〇四七年三月で魔物の未放出期間が一四回目を迎えた。

政府は第二次特攻隊の一部をレベル五〇台まで上げつつ、彼らを用いて第三次特攻隊の育成も行っているそうだ。

第三次特攻隊も順調にレベルを上げており、いずれ初級ダンジョンのボスを倒して攻略特典を獲得し、いずれ中級ダンジョン攻略にも参加するらしい。

国民の自衛力も、徐々に向上している。

一般人からは、半年間でレベル一〇を越えた者も出始めているらしい。トップ集団になると、インプに匹敵するレベル一〇台半ばまで達した者もいるとか。

チュートリアルダンジョンが自宅の敷地内に出た次郎ですら、レベル二〇に達したのは八カ月後であった。そのためダンジョンに潜っているレベルの最速者は、一体どのように生活しているのか非常に気になるところである。

あるいは千葉美冬のように頭と金を使って飛び抜けたのかもしれないが。

ダンジョン入場許可から漏れた海外からは、日本政府の方針に対する批判や非難声明も出ている。ダンジョンの全てが日本国内に在り、魔物の出現も日本に限定されているとは言え、日本の優位が看過できないのだろう。

ダンジョンが封鎖されていた時点では、日本にさえ居れば湧き出してくる魔物を倒してレベルを上げられたが、今はダンジョンに潜る者しかレベルを上げられない。

そんな海外からの不満に関して政府は、第一次入場許可の追加は行わないと明言している。いくつかの国は日本の方針を変えさせよ

うと表で圧力を掛け、裏では政治家への個別接触も後を絶たないらしい。

だが工作にも拘わらず、魔物被害が無くなった事と、ダンジョンを公開した事で、政府への支持率は高止まりしたままだ。

それに経済的にも、魔法や魔石の利用で様々な可能性が見えてきた。

魔法があれば電気ガス水道の代替が可能であり、光魔法の医療への応用も検討され始めた。また魔物の魔石は、エネルギー革命を起こしつつある。このままダンジョンを長く独占できれば、次々と新技術を生み出していけるだろう。

日本はダンジョンが出現した頃の暗中模索から抜け出して、ようやく新たな環境での前進を始めていた。

59話 大学へ（後書き）

三巻はここまです。

次話から四巻になります。

60話 大学生活

二〇四七年四月、次郎は大学に進学した。

入学生の総数は全学部で二五〇〇人を越えており、在校生は一万人を大きく上回る。

全校生徒合せて六〇人に満たなかった三山中学、八四〇名を抱えていた七村高校と順調に生徒数が増えていき、ついに大学では一万人以上の生徒数となった。

少子高齢化と田舎暮らしで感覚が麻痺していたが、日本は九五〇〇万人が暮らす大きな国である事を改めて実感させられた日であった。

もっともキャンパス内は緑豊かで、あまり都会という印象がない。エルムの森、ポプラ並木、北一三条門のイチヨウ並木、その他各所に大量の木々が生えており、大野池があつて、サクシユコト二川が流れているため、次郎が当初イメージしていたビルが建ち並ぶ狭い都会の印象からは掛け離れていた。

学内は緑と建物の調和が見事に取れ、整然とした一つの綺麗な街のようであつた。その中には殆どの学部と共に学生生活に必要な施設が概ね纏まつており、非常に利便性が高い。

興味深かつたのは北大のキャンパス内に放送大学まであつた事で、どういう経緯でそうなったのか、誰か知っている人が居れば教えて欲しいと思つた次第であつた。

他には病院や農場、研究所や寮もあり、北二〇条辺りからは北キャンパスと呼ばれる研究所や研究機構があつて、散歩コースとしても上々である。

そんな環境で新生活をスタートさせた次郎には、早速何人かの同級生が出来た。

長谷空海^{すかい}、大熊騎士^{ないと}、穂刈翔馬^{べがさす}の三人である。

都会のネーミングセンスと見比べれば、山中県七村市の田舎者達は、少なくとも名付けに関しては大人しい方だったのだと戦慄せざるを得ない。

もしも堂下次郎が『堂下空海』や『堂下騎士』だった場合、今とは性格が全く異なっていた恐れもある。

「おいジロウ。講義が終わったらサークル見学に行こうぜ」

「了解。別の学部に幼馴染みが居るんだけど、もう一人誘っても良いか」

「おう、どんどん誘え」

長谷が朗らかに宣言したので、次郎は彼らの誘いに乗ってサークル見学に赴く事にした。

入学式の日には先輩達が待ち構えており、新入生にサークル案内チラシを配りまくっていたが、アピールに来ていたサークルだけでも数十はあった。

全体では活動しているサークルが一二〇団体もあるらしく、運動系は次郎のレベル的に選択不可能だが、文化系に限っても選択肢は沢山ある。

「それで、空海はどこを見に行きたいんだ」

「面白そうなサークルがある。ダンジョン研究会だ。ナイトとペガも候補に入れている」

「おう、マジか」

差し出されたチラシには、コウモリを虫取り網で捕まえるユニークなイラストが描かれている。

実際の巨大コウモリに比べると、デフォルメされたコウモリは随分と愛らしい姿だった。

思わず苦笑した次郎に構わず、長谷は説明を続ける。

「他にもあるぞ。ダンジョンウォーカー、UMAクラブ、北大魔導師連盟、北大冒険者ギルドの四つだ。ダンジョン一般公開後、一気に増えたらしい」

「マジで、そんなサークルがあるのか」

都会の凄まじさに、田舎者としては最早笑うしかなかった。

「ダンジョンウォーカーは気合いの入った探索集団で、入場許可証を持つてない学生は募集外らしい。ジロウと幼馴染みは、入場許可証を持つているか？」

「持つている。ダンジョンにも入ったし、レベルも上げた」

「よし、選択肢が増えたな」

「ナイス次郎」

次郎が財布から入場許可証を出して見せると、長谷に続いて大熊まで褒めてきた。

「次郎は何を覚えたんだ。やっぱり魔法だよな？」

「ああ。コウモリと戦って怪我をしたから、咄嗟に光魔法を覚えて回復した」

「そうか。オレは最初に火を選んだぞ。一七歳のうちにレベルを上げないといけなかったから、遠距離攻撃一択で。一浪してでも上げまくろうかと思ったほどだ」

「へえ、熊さんって、レベルいくつだ」

「受験前にレベル五まで上げた。そして親にマジギレされた」

「それは大変、ご愁傷様です」

流石の騎士様も、領主には弱いらしい。

「だがしかし、合格後にアイシャルリターンでレベル六まで上げた」「やだー、熊さんってガチ系じゃないですかー」

「でもなー、おいちゃん一八歳になって、レベルが上がり難くなつてたんよ。もうアカンわ」

「なんで関西弁やねん」

ベシツと突っ込みを入れた次郎だったが、大熊は気にもせず、レベル六の我が身を誇らしげに自慢している。

だが実際に次郎と同学年でレベル六に達している進学組は、そう多くはないだろう。

何しろダンジョンが正式に公開された二〇四六年九月は、次郎たちが高校三年生の二学期だったのだ。

四月から九月五日までに生まれた約半数は一八歳になっており、世間では一八歳になると二十倍以上の経験値が必要だとされている。下半期の者がレベル六までにコウモリを一〇三体倒せば良いのに比べると、上半期の者は二〇六〇体も倒さなければならず、半数は最初から重すぎるハンデを背負っている。上半期の者がレベル六に到達するのは、下半期に比べると極めて困難なのだ。

また下半期の者も、受験勉強とレベル上げを天秤に掛けなければならぬ。

従って次郎たちの学年で進学希望者は、三月が誕生日の者を除いて、皆がそれほど高いレベルではない。

但し例外として、ダンジョン外でレベルを上げた者の存在がある。それは次郎たちが高校一年生だった二〇四四年七月以降、日本の各ダンジョンから溢れた魔物を倒した者達である。

初級ダンジョンは二〇四六年一月に特攻隊が白化するまで、二カ月に一度、九回に渡って合計数十万匹の魔物を放出した。総数は約四〇〇万體であり、それらを倒した者はダンジョン内部に入らずともレベルを上げている。

だが自衛隊や警察、大人、レベルが欲しい外国人などが魔物の大半を倒してしまつたため、こちらは運次第である。その最たる例は、シルフィードSylphidの四人組だろう。

「空海と穂刈は？」

「我は四也」

「僕は三。道外は遠すぎだよ。それで堂下君は、レベルいくつなの」
「俺と幼馴染みは四だ。山中県はコウモリが集まる森があつて、夏休みに狩れたからな」

「そうなんだ。それならダンジョン関係のサークルには問題なく入れそうだね」

「マジか。とりあえずガチ系のウォーカーは、ちよつと無理っぽい。来年度の後輩とのレベル差が開き過ぎるし、幼馴染みも医学部だから付いていけない」

「よし。それならダンジョン研究会、UMAクラブ、北大魔導師連盟、北大冒険者ギルドを回るか。全部第五サ館にあるらしい」

次郎は日本の多々ある素晴らしい点の一つに、名は体を表わすという言葉が実践されている事が挙げられると考えている。

動植物や海洋生物など、欧米人は母国語で聞いても首を傾げるものが多いが、日本人が和名を聞くと大雑把には想像できる命名が為されている。

だが大学のサークルは、そういった実践が為されて居なさそうだった。

はたして『北大冒険者ギルド』とは、何をするサークルであるのか。名称から活動内容を推察する事は困難だった。

そんなどうでも良いことに悩みながら講義を受けた後、次郎たちは美也と合流してサークル会館へと向かった。

「いや、暫し待てジロウ」

しかしその歩みは、合流後の自己紹介から次郎が歩き出した直後に止められる。

「なんやねん」

「関西ネタはもう良い。それよりも幼馴染みが女子とは聞いていなかった。少しばかり説明を要求する」

説明を求められた次郎は、美也のことを何と説明しようかと迷った。

幼馴染みは、紛れもなく事実である。

家が川を挟んだ向かいで、幼稚園から大学まで一緒だった。

また校外でも祖母同士に引き合わされ、中学二年からは二人でダンジョンに潜ってきた。

だが長谷が聞きたいのは、結局のところ二人の関係であろう。次郎が予想するに、コピペされた異世界では……………。

「マイワイフ？」

「マイダーリン？」

「宜しい。コウモリに喰われ給え」

およそ確信的な二人の回答に、長谷は馬鹿馬鹿しいとばかりに匙を投げた。

もちろん匙を投げたのは大熊と穂刈も同様で、三人はバカップルへの質問を放り投げてサークル会館への歩みを再開した。

新サークル会館の通称は新サ館で、別称は第五サ館。学生達はい

ずれかで呼ぶらしい。

六階建ての新しい建物で、様々な共有施設も入っている便利な建物だ。

大学のサークル二〇に対して、新サークル会館の部室は六五室しか無いが、公認サークルのみを入れているため、公式には部室が足りているらしい。

そしてダンジョン関連のサークルは全て公認を受けているらしく、ダンジョン研究会、ダンジョンウォーカー、UMAクラブ、北大魔導師連盟、北大冒険者ギルドの五つは全て新サ館に部室を持っていた。

大学が国立である以上、ダンジョン研究推進という国策の影響を受けずにはいられないらしい。

最初に見学に行ったのは、ダンジョン研究会である。

ダン研の設立は二〇四四年。

設立当初は巨大構造物研究会という名称だったらしく、大学の植木園に突如発生した巨大構造物を調べようと、沢山の学生が新設立のサークルに入会した。

そして二〇四五年七月一日。国会で広瀬大臣が巨大構造物を魔物の住むダンジョンであると宣言し、政権交代後にはダンジョンが正式名称とされた事を踏まえて、その年の暮れにはサークル名が現在のものに変わったそうである。

但し大学生のサークルらしく、程々に遊んだりもする。

北海道・東北ブロックの入場許可証は東北四県に入れるため、道外に赴くついでに旅行をしたり、ジングスカンパティや忘年会をしたりもする。そんな程々に緩いサークルである。

現在の所属人数は、およそ七〇人。

部室に対して部員が多すぎるために部室は部の荷物置場となっており、活動はパソコンが揃った講義後の空き教室を貸して貰っているらしい。

兼部も可能で、敷居はそれほど高くない。
説明して貰った次郎達はお礼を述べた後、一先ずダン研を後にした。

次に訪ねたのは、UMAクラブだ。

この部の設立も二〇四四年で、未確認生物の魔物を調べようというのが設立目的だ。

UMAクラブでは独自に調べた魔物の情報を百科事典にしてネットに公開しており、北海道での出現分布図などは、公的機関でも活用されているらしい。

但し活動には大学の研究会として限界があり、日本に現われた初級ダンジョン地下一階のコウモリから、地下九階のゲンジボタルまでの百科事典はそれなりに作れたものの、カマキリ以降は調べられないでいる。

現在の所属人数は、およそ二五人。

活動は週一回の例会で、月一回は泊まりでダンジョンに潜る。

但し、潜れるダンジョンが道外にしかないため出費が大きくなり、使用済み魔石の寄付や企業からの寄付金などは受けているものの、個人が負担する年間費用は高くなるそうだ。

UMAも兼部が可能で、可能であれば是非にと勧められた。

三番目に赴いたのは、北大魔導師連盟である。

名は体を表わすというが、このサークルは正にその名の通りであった。すなわち、北大生で魔法が使える者達の相互互助組織である。主な活動は魔法の研究で、実践を繰り返して技術を獲得しようとしている。

また外部に対しては治癒魔法で北大病院や研究所、土魔法や水魔法で農学部に協力するなど、各所へも幅広く貢献しているそうだ。想像していたよりずっと建設的な組織であり、次郎と美也も好印象を持った。大学側に公認されているのも道理であった。

現在の所属人数は、およそ九〇人。

活動は週一〜二回で、魔法の実践は野外、若しくは呼ばれた施設で行う。

北魔連も兼部が可能で、同行した長谷からも悪くない反応だった。

そして最後に赴いたのが、北大冒険者ギルドだ。

活動内容は、情報共有とダンジョンアタック。

同じ北大生同士でパーティを組みたい者達が集まり、日程を合わせてダンジョンに潜る。ようするにこのサークルは、冒険者の斡旋所である。

一度限りの臨時編成から、中長期のパーティ結成まで様々だが、ダンジョンウォーカーと異なるのは、サークル全体ではなくグループ単位で挑んでいる事だろう。各自の都合と折り合いやすいため、挑戦頻度が高くなる傾向にある。

現在の所属人数は、およそ七〇人。活動は各自次第だが、週一でギルド会がある。

文科系のダンジョン関連サークルは全て兼部が可能らしく、掛け持ちしている学生も多いとの話であった。

結局、次郎たちは揃ってダン研に所属し、長谷達はいくつかのサークルも掛け持ちした。

61話 ダンジョンサークル

次郎と美也の大学生活は、極めて順調に滑り出した。

そもそも大学は、受験の段階で講義に付いていけない生徒を足切りしている。

学部に志望する意欲と合格できる学習能力があつて、真面目に講義を受けさえすれば、基本的には大学のレベルに付いていけないはずが無いのだ。

それに二人は、高校時代に費やしていたダンジョン活動が激減している。

探索活動を減らす前の学力で受かっている以上、ダンジョンに潜らなくなつた時間分だけ余力がある。それを学生生活の様々な方面に振り向ける事で、二人は万事に余裕を以て取り組めた。新たに始めたサークル活動も、そんな余暇から生まれた一端である。

「ようこそ新人生諸君。俺は会長の津田^{つだ}洋司^{ようじ}だ。まずは入会届とアンケート用紙に記入してくれ。その後でオリエンテーションをさせて貰う」

「了解しましたー」

次郎たちに対応した津田は、そろそろ床屋に行つた方が良いんじゃないかと指摘したくなるような伸びた髪に、ジャージに似た服装、そして爪楊枝^{つまようじ}に似た名前の、実に個性的な三年生だつた。

大学における髪型や服装の自由度は、流石に高校とは比べるべくもない。

なお氏名の方は、在り来りな苗字に在り来りな名前の組み合わせで、親の作為があつたか否かは不明である。

そんな会長に入会届を渡された新入生達は、一枚目の用紙の空欄を埋めた後、二枚目のアンケートで暫く手を止めた。

アンケートには、冒頭にサークル入会のお礼と歓迎の旨が会長名で記されている。

そこまでは問題ないが、続く文言に、サークル内の影響を受ける前の段階で、幅広くダンジョンに対する認識を集めたいという主旨が説明されていた。

その内容は、ダンジョンに対する六W二Hであった。

すなわち、When、Where、Who（誰が）、Whom（誰に）、Why、What（何を）、How、How muchを各自が想像して埋める事で、ダンジョン自体の推察に供しようというわけだ。

「これは面白そうだな」

長谷が楽しそうにアンケート欄を埋め始めたのを皮切りに、次郎たちもそれぞれ六W二Hを埋めていく。

ダンジョン研究会に入る以上、ダンジョンを研究するためのサークル活動に協力する意思はある。

但し、あくまで常識的な範囲内だ。

当然ながら次郎は『犯人は、西日本大震災時に死んだ事になっている、焼きそば好きな当時一四歳の元和歌山県民だ』などとは書かない。

あくまで女性に会う前の段階で考えていた範囲で埋めていく。

・ When

第一次現象Ⅱ二〇四〇年五月四日、午後三時以降。

第二次現象Ⅱ二〇四四年五月四日、午後三時以降。

・ Where

第一次現象Ⅱ各都道府県の僻地。推定Ⅱ各三カ所。約一四一地点。

第二次現象Ⅱ各都道府県の利用者最多駅正面。四七カ所。

・Who（誰が）

地球人の現代技術を遙かに上回り、日本に対して一定の知識を持つ存在。

高度な文明を持つ宇宙人、異世界人、未来人、神などの何れか。

・Whom（誰に）

日本人。（日本語でのステータス表記から、対象は明らか）

・Why^{なぜ}

先方の目的達成のために。

・What（何を）

日本人のレベル上げ、能力並びに魔法獲得を。

・How^{どのように}

魔物を倒させて魔石を吸収させる形で。

・How much^{いくらか}

目標レベルあるいは目標人数等に達する程度。

次郎は五人中三番目にアンケートを提出した。

津田はそれを一読し、軽く頷いてから次に美也のアンケートを受け取る。

最後に随分と真面目に悩んだらしき穂刈が提出して、五枚の用紙が揃う。

「協力感謝するよ。ではオリエンテーションを始めようか」

「お願いします」

「まずダン研の活動期間は、一年から三年の後期が終わるまでだ。二月に追いコンがあつて、その後はOBOGになる。今は新三年が二五人、新二年が一七人、新一年は募集中。君たちの他にも何人か入ってくれている。一応新入生の入会目標は二〇人だから、同級生を誘う機会があつたらぜひ頼むよ」

そう前置きした津田は、ダン研の概要を纏めた用紙を配布した。用紙には会の所在地、連絡先、活動時間、活動場所、地図、役員名、グループと各リーダーなどが印字されており、それらについて順番に説明が行われた。

グループの項目については、ダン研を四つのグループに分けていると説明がある。

それぞれ『定義・法則性』、『魔物・被害軽減』、『レベル・人体影響』、『技術転用・政治問題』について主なテーマにしているそうだ。

そして月曜なら定義・法則性、火曜日なら魔物・被害軽減といった風に、サークル内でも活動曜日が異なる。なお金曜日は総合的な集いで、全員が集まるそうだ。そのためグループへの未所属者は、金曜日のみに来る。

会のイベントは金曜日に行われる事が多く、場合によっては土日にダンジョンの現地調査が入る事もあるらしい。

「グループは複数所属しても良いし、未所属でも良い事になっている。兼部の都合で決める会員も居るね。何回か顔を出した後に、各自が自由に決めてくれて良いよ」

そう誘った津田自身は、月曜日の定義・法則性のリーダーを兼ねていた。

彼らがやっている事は、ダンジョンの様々な法則を推測し、一定の範囲内への絞り込みを行っていく事だ。

例えば、初級ダンジョンの攻略によって中級ダンジョンに変化した数が二三、変化せず白化したダンジョンが二四であった事を元に、中級ダンジョンから上級ダンジョンに変化する数を推定する。

また、一般公開された初級ダンジョンで、内部の何処からいつ魔物が補充されるのかを、魔物との遭遇地点の統計から推定する。あるいはダンジョン外に氾濫した魔物が、各都道府県の海上や離島の

何処まで活動範囲を広げられるのか等々。

そういったダンジョンの概要を、様々な根拠を積み重ねながら推測していく。それが月曜日グループの活動内容であるらしい。

新入生にアンケートを取ったのは、彼自身がリーダーを務めるグループ単独の為であるらしい。

野暮ったい身なりをしていながら、中々に強かであった。

そんな彼に勧められるがまま、次郎たちは翌日以降にも各グループに顔を出して回った。

火曜日のグループは、魔物・被害軽減をテーマにしている。

魔物の生態や群れの脅威度を調べると共に、いかにそれらの活動から人的・物的・経済的な被害を軽減するかを研究しているのだ。

例えば日本政府の基本的な対応方針は、国民全体のレベルを上げて、自衛力を高めて魔物被害を軽減するというものである。

また魔法や魔石の技術転用も推奨しており、官民の各研究所は、日々研究を続けている。

魔法分野では明らかな結果がいくつも出ている。

魔石のエネルギーの利用に関しても、それなりに使えると分かってきた。

例えば火属性が一以上であれば、赤色の魔石を用いて火魔法を使う事が出来る。魔石を使えば、魔力を使う時のように息切れならぬ魔力切れは起こさない。

属性を持たない者も、技術を組み合わせれば赤の魔石を着火剤程度には扱える。他にも緑や青の魔石は風や水流を生み出す程度、白の魔石は損傷した皮膚などの回復促進程度には利用できると判明してきた。

そして火曜日グループは、日本政府の対策や研究をより効果的に

する方法、あるいは根本的に別の方法を模索するグループであるらしい。

「例えば、どんな方法があるんですか」

「そうね。例えば法整備で魔法を後押し。善きサマリア人の法って知っているかしら。緊急時に無償の善意で手を貸した人が、不作為に被害を発生させても、それを罰しないというものだけど」

「聞いた事はありません。でも日本では、法整備されていませんよね」

「そうよ。それを魔法に適応したら、豪雪時に火魔法で除雪、害虫発生時に風魔法で駆除、火災現場で水魔法の消火、河川の氾濫で土魔法の土嚢、事故現場で光魔法の応急処置、犯罪発生時に闇魔法で沈静。良いと思わない？」

次郎たちに対応した火曜リーダーは、ダン研の会計も務める三年生の女性で、いかにも性善説を信じていますというようなタイプだった。

提案のメリットは次郎も認めるが、デメリットも色々と思いついた。

火魔法は火災の危険があるし、風魔法は害虫以外にも被害が出る怖れがある。

水魔法の消火は費用対効果が大きいだろうが、土魔法は河川氾濫を止めた時に他が氾濫するかもしれない。

光魔法は研究途上で、最終的に人体へどのような効果を及ぼすか、未だ明らかでは無い。

闇魔法は、犯罪が明らかかなケースであれば構わないだろうが、判断者の誤解による沈静化で被害を出すケースは防げそうに無い。

だが今のところ単なる見学者の次郎は、敢えて議論は行わず、感心を見せながら頷いた。

持論を展開したいのであれば、まずは火曜日グループに入ってから行すべきである。

続いて顔を出した水曜日グループは、レベル・人体影響を主なテーマにしている。

こちらは二年生の双子の姉弟でリーダーを務めていて、二人でダニ研の副会長を一棒持っている。

水曜日チームは、レベルを得た後の人体の影響に関する事なら何でも調べているそうだ。

数多くの一〇代少年少女が、意気揚々とダンジョンに潜り始めてから八カ月。レベルと身体の成長速度の減衰との相関関係は、既に世間でも騒がれ始めている。

但し、ダンジョンに入り始めてから身長が一〇cm近く伸びた者もあり、レベルを得る対価としての成長速度減衰に、人々は優先順位付けの討論を繰り返しつつも、未だ答えを見出せていない。

そんな人々の討論の前提となる根拠を研究するのが、水曜日グループだ。

「すると成長期の影響とかを調べるんですか」

成長の方向性が変わるために、成長期や第二性徴の伸びが半減するのだと、次郎は既に答えを聞いている。

心からの感嘆では無いと察したのか、それともアピールする内容を広げたいのか、大須田弟は説明内容を加えた。

「もっと広いテーマだよ」

「他は、どんな事をやるんですか」

「そうだね。人は火属性を取ると、耐火能力が上がる。水属性なら、水中適応能力が上がる。魔力と属性が人体にエネルギーを供給していると仮定して、そのエネルギーは人体にどう作用しているのか。」

そんな事もやっているよ」

「成程。難しそうですね」

それは次郎も対して考えた事が無かったテーマだ。

何しろ、考えたところでどうしようも無い。

自称・元和歌山県民から教えて貰った単語で推察するに、身体が魔素体に変わっている事との相関関係が大きそうだが、魔素を観測できない人類がそれに辿り着くのは容易ではなさそうだ。

双子の弟に続いて姉の留美衣も、研究の意義を説明する。

「レベルを得た人の子供にも、影響が出るかもしれないわ。レベルを持つ両親の遺伝的な影響。母胎での成長時の影響。でも原理が分かれば、コントロールできるでしょう。悪い影響なら抑制すれば良いし、良い影響なら伸長するのも有りよね」

「へえ」

次郎は、二重の意味で感嘆の溜息を漏らした。

知ったところで無意味と思っていた内容でも、実際には役に立つどころか、場合によっては必須になる可能性も有り得るのだ。

そして受験勉強から解放された大学生は、かくも自由に関心の赴く事を調べられるのだと。

そして最後は、木曜日グループの技術転用・政治問題チームだった。

応対してくれたのはダン研副会長も兼ねる二年生のリーダーである。

「うちは他とは毛色が違うんだ」

「どう違うんですか」

「海外の動きをネットで追いかけて、仲間内で討論する事が多いね。諸外国は、日本によるダンジョン独占を危惧している。短期的には軍事力の急拡大、中期的には他国で再現不能な魔法技術による経済力向上、長期的にはダンジョン発現者側と日本との関わり方」

「その長期的な怖れって、具体的にはどんな内容なんですか」

短期的と中期的な問題は、次郎にも大雑把には想像出来る。

例えばダンジョンを日本が殆ど独占することで、日本国民全体のレベルが上がり、レベルを持たない外国人との間に大きな格差が生まれる。

いずれ日本人の半数近くが、世界選手権に出場できるレベルの基礎身体能力を持ち、BPの割り振り次第では陸上生物最速のチータよりも速く走り、銃器を持たずとも魔法による遠距離攻撃を行えるようになる。

さらなる上位者は、戦車が高速で突撃するように地上の障害物を弾き飛ばしながら駆け回り、攻撃ヘリが飛び交うように都市のビル間を跳び回る。

そんな各国の特殊部隊も裸足で逃げ出すような国民を、数千万人も抱える日本に対して、日本と争う国家の首脳部は、その力が自分たちに向けられないかと恐怖する。

中期的には、魔法・魔石・魔物の素材によって、新技術が生み出される。

魔法による製造時のエネルギー削減、従来では十分な設備投資を要した過熱・切断・形成などを無償で行う事が出来る。

それは原材料を輸入して、加工して輸出する日本の得意分野であるため、国際競争力は否が応にも高まっていく。魔法の技術が向上すればするだけ、持つ者と持たざる者の格差が広がるのだ。

だが長期的な問題については、次郎も大まかすぎて想像できなかった。

すると木曜リーダーは、問題点を簡潔に纏めた。

「ダンジョン制作者が、地球人では対抗不可能な技術力を持っているのは明らかだ。そんな超常的な存在が日本だけを優遇したら、あるいは日本側から優遇を依頼したらどうなるのか。そういう怖れだよ。そんな事があつたら、どうなると思うかな」

次郎は日本だけが優遇される未来を創造してみた。

先方は、千万人以上のステータスを完璧に管理出来ている。そして特典付与も、思いのままだ。

ではその超越的な技術で全地球人にステータス管理を適応して、日本人の氏名以外を持つ者に、マイナス効果のある特典を無理矢理与えたら一体どうなるのか。

例えばマイナス特典が、一日に一回、起点から半径一〇〇万キロ以上の距離ヘランダムで強制転移するということのようなものであった場合、先方は日本人以外を一夜にして絶滅させる事も出来る。

その後地球に残った資源は、全て日本人の物である。

諸外国は到底受け入れられず、全力を以て阻止する以外に生存の道が無くなる。

「外国の政府は、全力で阻止しようと思いますよね」

「その通り」

木曜リーダーは、正解を出した生徒を褒める教師のような表情で、和やかに頷いた。

「この場合、二通りの阻止方法が考えられる。ダンジョン製作者に翻意を促す方法と、日本を介して阻止する方法。日本に対しては様

々な外交圧力を掛けるか、友好関係を形成して被害を受ける対象から外れるだろうね。元々の日本との国家間関係や経済関係、国力、協力体制を敷ける国次第で、諸外国はどちらに比重を置くかを選ぶことになる」

「成程」

次郎は日本が旅人で、諸外国を北風と太陽に見立てた。

「我々は諸外国の行動に対する、日本のリアクションを想定するのさ。各国の歴史や政治体制、日本との関係なんかを調べながらね。グループでは、各国に対して最低二班がそれぞれ独立した別々の視点で分析しているよ」

「色々やっているんですね」

「だけど分析対象に対して人数が足りないという欠点があるね。政府が外務省を用いるのと異なつて、情報の質も量も足りない。ダンジョン情勢も刻々と変わる。だから幅広さと深さのどちらかは犠牲にしないといけない」

「そうですね」

「ああ。いずれ意味を持たせるために、レポートの形で公開したいとは思っている。もし入ってくれるなら、よろしく頼むよ」

「了解しました。検討します」

勧誘を終えた木曜リーダーは肩の力を抜くと、次郎たちを相手に雑談を始めた。

「それにしてもダンジョン政策で主体的な判断が出来る今の日本は、中々に恵まれているよね。少なくとも政府は選択の自由を持っている」

「そうですね。日本だけにダンジョンが出ていますしね」

「その通り。これが二国以上に出現していたら、また話は変わった

んだろっけどね。これは一体どうしてだろっね」

木曜リーダーは心底楽しそうに、我々は考える葦だねと呟いた。

62話 インプ氾濫

二〇四七年四月末、日本全国津々浦々で大学生の新入生歓迎会が続々と開催された。

飲酒は脳の発達を阻害するため、日本では医学的には二〇歳までは推奨されないとされているものの、成人年齢の一八歳であれば法的には問題ないとされている。

そんな大義名分の元、部活やサークルに入った新大学生の多くが、新歓で随分と酒を飲まされた。

もつとも参加者の中には、上手く逃れた一部の例外も存在する。

「酔い止めのウコンは肝臓に悪いから、余りお勧めできないよ」

次郎がコンビニの酔い止めコーナーを眺めていると、美也が横から小声で忠告してきた。

「ウコンって、肝臓に良い薬なんじゃないのか？」

「全然。ウコンは肝炎のリスクもあるよ」

「マジか」

「うん。他には、その青汁の鉄分も肝臓には悪いよ。隣の栄養補助食品の殆ども、医学的には何の意味も無いどころか、逆に身体に悪いから」

「……………コンビニが健康に悪いのは聞いた事があるけど」

「発展途上国と違って、日本で栄養が足りてない人は、滅多に居ないでしょう。それなのに、そんなに沢山の栄養補助食品コーナー、本当に要るのかな？」

美也が指差したコンビニの酔い止めコーナーの隣には、大量の栄

養補助食品やサプリメントのコーナーが設けられていた。

「お酒の話に戻るけど、次郎くんは飲み慣れていないでしょ。お酒は、無理に飲まないのが一番だよ」

「了解。口に入った瞬間に収納で消すわ」

そもそも飲酒経験の無い次郎は、酒に対する執着心が無い。

一方で脳への悪影響や中毒症状、依存症などのデメリットは一般常識で知っているため、個人的には飲酒が魅力的には思えなかった。次郎たちは謎の元和歌山県民から、病気になるように身体を調整されているらしいが、だからといって自ら病気に罹患するような行動を取る理由も無い。

酒も飲まず、タバコも吸わず、不良行為もせず。

二人は利己主義者であり、利己主義者は自分が一番大切なのである。

結局、美也の忠告を素直に受け入れて飲酒を控える事にした次郎は、続々と倒れた新一年生たちの列から無傷で逃れる事が出来た。

やがて、アルコールに敗北した各地の死者達がゾンビ程度には復活し始めた頃、世間はゴールデンウィークに突入した。

今年のゴールデンウィークは、金曜日に始まって、日曜日に終わる。

そんな最悪の日程だが、それでも無理矢理予定を捻じ込むのが大學生のクオリティだ。

ゴールデンウィーク初日の金曜日には、ダン研で再び有志による集いがあり、復活したゾンビ達にトドメを刺していた。

「堂下君はお酒に強いね」

明けて土曜日。

ダン研へ顔を出した際、次郎は会長の津田にそう評された。

次郎の仲間では翔馬が完全に潰れており、騎士は兼部しているチート剣道部にふらつきながら参加し、空海は白い顔のままアルバイトに行っている。

大学の新歓で始めて酒を飲んだ人間は意外に多く、大半が潰れてタクシーなどに放り込まれていた。

なお次郎は、同級生達の住所をタクシー運転手に伝えた後、荷物を放り込むように面白おかしくタクシーに放り込んでいた側である。

「いえ、俺は見えないところで自重していましたから。帰り際にラーメンを食べて、家に帰ってからは経口補液も飲みましたし」

ピノキオは鼻高々に、嘘八百を並べ立てた。

「それは実に賢明な判断だ。ホームドクターがいると強いね」

津田は言葉とは裏腹に、酔わなかった理由にはさして感心を示しておらず、平然としている事実を評価しているようだった。

「ツマ会長は腹黒だからね。ドウシタ君も気を付けた方がよいよ」

「黒すぎて煮ても焼いても食べられるところが無いからね。ドーシタ君も要注意ね」

「鋼君、留美衣君、そこはせめて計算高いと言って欲しいな」

ダン研の双子が二重に注意を促した後、会長は開き直りながら種明かしを始めた。

曰く、ダン研が行った新歓の目的は『先輩に半ば強引に飲まされるという危機を与え、一年生同士の連帯感を生ませ、共通の話題を与える事で、入会後の退会者を減らす』という意図があったらしい。そして、図太そうだと確信した次郎に種明かしをしつつ、来年以

降に利用するようにと云つてのけた。

「急性アル中とか出たら、どうするんですか？」

「二次救急が北大病院の日を飲み会にしていたからね。万が一に運び込む事になつても、医師は全員うちのOBだから大丈夫だよ」

「マジか、確かに腹黒だわ」

先輩が注意喚起する会長の悪辣さの一端を、ようやく思い知った次郎であつた。

とんでもない手法で連帯感を高めさせていたダン研であるが、流石にゴールデンウィーク中日であり、前日には再度の飲み会が開催された事も加わつて、土曜日の参加率は非常に低かつた。

それにダン研では、バイトをしている学生も多い。

火曜リーダーで会計の笹森陽彩や、木曜リーダーで副会長の簗島択海も、休日には大抵アルバイトが入る。

高校時代の収入で既にアルバイトが不要な美也も、サークル活動は最大でも月・水・木・金までと決めており、残りは勉強や料理教室などに充てているため土曜日は不参加だ。

もつとも次郎は、定年後に暇を持て余す老人の如く、今のところは真面目にサークルへ参加している。但し内容自体は大したものでは無く、どちらかと言えば活動全体を俯瞰する意味合いが大きい。

専らの活動は、データ収集と入力だ。

具体的には、学内サーバのサークル共有フォルダに、次郎専用のフォルダが作られており、そこへ先輩の作成した参考資料を見ながら、月・水・木それぞれの自分用資料を作成しては放り込んでいる。一方で先輩達はデータが積み上がっていて余裕なのか、午前の大半は雑談に興じていた。

「奇数月の四日といえば、一昔前なら世間も盛り上がっていたもの

だがね」

「魔物、出ませんからね」

「ダンジョン入場者の数も減っているらしいし、日本人って飽きっぽいわよね」

留美衣の指摘は、現代日本人の一面を的確に表わしている。

同調意識が強い日本人は、事態の発生時には共同して物事への対応に当たる。

ダンジョンをひた隠していた労働党に対する日本人の共通した怒りは、その典型と言えるだろう。

だが結果が出た後は、波が引いたように逃れていく。

それは、日本人の処世術でもある。

周りと歩調を合わせたがり、長いものには巻かれ易い習性があるため、連立四党が対処したと聞けば、文句を言えなくなるのだ。仮に口を出した場合、周囲から何らかのレッテルを貼られて周囲から批判されかねない。

それなら最初から意思表示をしない方がマシであり、自分が傷つく恐れのある争いを避けて感心を向けなくなるのは、まさに処世術の一端だ。

他には、周囲がレベル三なので自分も同程度にしようという発想も、村社会で生き残る工夫や、同調意識の表われである。

日本人の行動原理は、ダンジョンが現われた現代にあっても一向に揺るぎなかった。

土曜日に集ったダン研のメンバーは、生協の格安食堂で腹を満たした後、さらに人数を減じながら各々が自由に行動を始めた。

次郎のように一応は活動している者、会長達のようにメンバーの監督を兼ねて雑談している者、黙々と自分の課題を熟している者、資料集めから脱線してネットサーフィンをしている者、そして中に

は携帯ゲームで対戦している者すらいた。

次郎が、何となくダン研の雰囲気が掴めてきたかと思った矢先、留美衣の携帯端末が振動を始めた。

「あれっ」

「んっ？」

留美衣に続いて鋼、津田会長、次郎らの携帯が次々と共鳴するようになり振動を始め、画面に警告文を強制表示させる。

『国民保護に関する情報。魔物発生。魔物発生。ダンジョンから魔物が発生した模様です。脅威度一六。今すぐ頑丈な建屋内に避難して下さい。対象地域：鹿児島県、沖縄県』

警告は、全国瞬時警報システムによる魔物発生情報だった。

基本的には対象地域に出されるが、設定を広域に変えれば、国内のどこでも受信する事が出来る。次郎たちダン研は、当然ながら広域設定にしていた。

「脅威度一六って、インプか」

周囲から驚きの声が上がった。

脅威度は、ダンジョンに生息している魔物をコウモリから順に番号付けしたものだ。

一がコウモリ、二がタマヤスデ、九がゲンジボタル、一〇がカマキリ。そして一六は、インプを一匹でも確認した時に表示される。なおカマキリのボスが出た時は、三〇が表示される事になっている。数字が高い方が危険である事は、無論言うまでも無い。

「おい皆、インプが出たらしいぞっ」

「本当か!？」

周囲が慌てて携帯端末の警告文を開き、テレビを表示させると、画面からは派手な魔法の炸裂音と、激しい砲撃音が轟いてきた。

そして戦闘音に混ざって、緊急避難を呼びかける不吉で不快な国民保護サイレンも鳴り響いている。

「ヤバい、マジだ」

魔法攻撃と砲撃音とサイレンの三重奏は、人々の心を激しくかき乱し、冷静な判断を根こそぎ奪って今すぐ逃げると急き立てる。

直後、サイレンに変わって非常放送が流され始めた。

『魔物発生、魔物発生。先程、沖縄県に、魔物が、発生、しました。住民の、皆さんは、ただちに、避難、してください』

「どこへだよ」

ダン研の二年生が、非常放送に向かって突っ込みを入れる。

北海道にいる彼らには無関係だが、仮に北海道で飛行力と知能を持つインプが大量に出現した場合、一般人が何処へ避難すれば良いのかは不明瞭だ。

次郎が周囲の様子を眺めると、ダン研の会員達は状況に多少焦りつつも、端末の画面とパソコンで情報を収集し、あるいは周囲の様子を伺っている様子だった。

そして彼らの視線が最も集中しているのは、この場をまとめる會長の津田だった。

その姿は、あたかも村長の意見を待つ村人達である。

右習えで、長いものに巻かれ易い日本人として相応しい反応だった。

「確か鹿児島と沖縄ダンジョンには、特攻隊が待機していたね」
「はい。奇数月の四日午後三時には、五班ずつが待機するとテレビでやっていました」

鹿児島と沖縄は、上級ダンジョンまで攻略が終わった山中県を除けば、国内で最も早く中級ダンジョンに変化したダンジョンだ。
変化したのは二〇四四年一二月で、以来一四回に渡って奇数月の四日に魔物が氾濫しなかった。

もっとも、いずれ魔物が氾濫するであろう事は予測されており、両ダンジョンには奇数月の四日、第二次特攻隊一個班五五名の大半が分散待機する事になっている。

もちろん、待機するよりも攻略してしまえば良いという意見もある。

しかし特攻隊のレベルは、中級攻略がギリギリ可能な四〇後半から五〇程度でしかなく、上級ダンジョンに変化させると政府協力者以外は攻略できなくなってしまう。

そのため政府は中級ダンジョンの最奥を転移登録させつつ、変化の時期をギリギリまで遅らせたかった。

「特攻隊が居るなら、大丈夫だろうね。僕らはこのまま情報収集をしようか。映像を保存できる人は保存も頼むよ」
「分かりました」

津田の指示で情報収集に移行したダン研は、急速に落ち着きを取り戻した。

彼らの特攻隊に対する信頼感の根拠は、二〇四五年一月に特攻隊第一陣がお披露目された際、一個班五名が一時間で一〇〇〇体撃破という大戦果を挙げた事だろう。

当時の脅威度一から九の混成集団に比べると、脅威度一六もあるインプだけが一万体も出ている今の方が遥かに危険だが、二県に五

個班二五名ずつが待機しているならば、当時に比べても有利だろう。

なお当時活躍した第一陣の政治家子弟三二名は、あくまで非常事態下での民間の特別協力者という扱いのため、鹿児島と沖縄には待機していない。

有志が初級ダンジョンの白化には協力しているものの、このような待機・警戒任務には、最初から召集されていない。

「SNSの投稿も拾い集めていってくれ。現地の人間の行動心理も知りたい」

「了解です」

腹黒会長の冷静かつ冷血な指示に、次郎は思わず拍手をし掛けた。人間とレベル一六のインプは、能力が隔絶しすぎている。

地球上の生物で比較するなら、人間とインプの強さの中間点に、レベル八でクロコダイル以上の強さを持つオオサンショウウオがいる。

すなわち『人間を軽く捕食できるクロコダイルを、軽く捕食できるくらい強い』のが中級ダンジョンのインプだ。インプの強さは『人間の捕食者の捕食者』級である。

常識的に考えても、自衛隊の集中砲火から逃れる化け物の集団を相手に、素人の個人ないし集団が抗しきれぬわけが無い。レベル三の巨大バツタが飛び回っていた頃とは、訳が違ふのだ。

その狙われれば確実に殺される状況で、一体どう逃げるのが生存率を上げるのか。ダンジョン研究会の研究活動としては、決して見逃せない実証実験となるだろう。

既に何人かの携帯端末にはテレビが映されており、パソコンから海外ネットを介してタイムラグのあるテレビを映して映像データの保存を行う者も居た。

次郎は自らの端末を操作し、テレビの画面を映し出す。

テレビの画面には、三六式小銃を撃ちまくる三人の自衛隊員が映っていた。

その百メートルほど先には幼児サイズで灰色い肌・緑目・頭部の角・尖った耳・腹部膨満・コウモリの翼・鉤状に尖った尻尾を持ったインプが飛び回り、周囲の自衛隊員を襲っている光景が映される。自衛隊の機関銃による銃撃は命中しているが、大半は硬い皮膚に弾かれており、弾丸が当たった直後には回避行動を取られて避けられている。

一方インプは風魔法で自衛隊や警察を深く切り裂き、長い尻尾で身体を突き刺す。

そこへ特攻隊がミサイルのように飛び込んできて、インプを蹴り飛ばし、防壁に叩き付けて一撃で始末する。

だがインプの数は多く、高レベルの特攻隊も全てを防ぎきる事は不可能な様子だった。

『……………インプの群れが空から自衛隊に襲い掛かり、砲撃は半数が途切れました。現在、特攻隊と自衛隊による戦闘が行われているが、インプの一部はダンジョン周辺から移動し、沖縄本島の各所へ散った模様です。各所ではインプに襲われる市民が多発しており、既に犠牲が出ている模様です』

リポートしている男性記者とテレビクルーの周囲には砲弾と銃弾、特攻隊の魔法とインプの魔法が飛び交っており、土煙と白煙が上がって視界がかなり悪くなっている。

方々からは連続した発砲音と罵声が上がっており、テレビはそれらの音声を抑えながら、リポーターのマイク音声を拾っているようだった。

『江田さん、そちらは大丈夫なのですか』

スタジオからは、そんな愚かな質問が飛ぶ。

もちろん誰がどう見ても、全く大丈夫そうには見えない。

先程来、倒れ伏した自衛隊員や警察が何人も画面に映っては、それを避けるようにカメラが何度も横へ逸らされている。

インプが溢れている現場では、衛生兵が負傷者を救護するどころか、倒れた隊員の機関銃を握って応戦せざるを得ない有様だった。それでもリポーターはプロ意識の表われなのか、自衛隊員に引き摺られるように退避を続けながらも、中断せずにリポートを続ける。

『本日は土曜日で、特攻隊は普段の隊員に加えて第一次特攻隊からも有志が参加していました。特攻隊は市街への救援にも出ていますが、飛行するインプの被害範囲は広く、周辺は大変危険な状況です』
『江田さん、ありがとうございます。状況の変化があったらまたお知らせ下さい』

『分かりました』

次郎が携帯端末に映したテレビ局は、最初から現場で中継が行われており、第一次特攻隊の有志による参加まで言及するなど、情報の質と量が異様に高かった。

たまたま特攻隊を待機させて備えている特集番組でも、撮影していたのだろうか。

ダン研の面々もテレビのチャンネルを切り替え、食い入るように画面を見つめている。

やがてテレビの画面は、中継映像をメインにしつつも、端にワイプでスタジオを映す二画面方式に変わった。その上部には大きな文字で、外国人向けに『まもの おきなわ かごしま すぐにげて』と表示されている。

『現地からの報告では、被害範囲がダンジョン周辺から広がってい

るようです。現在鹿児島市、那覇市にいらっしゃる方は、直ちに安全な場所へ避難してください。また周辺地域にお住いの方々は、インプの飛来に警戒し、不要不急の外出はお避け下さい。携帯回線は混み合う恐れがあります。救助要請以外の連絡には、メールやSNSなども活用して下さい。政府が発表した脅威度一六は、過去最大の数値です。決して大丈夫だとは思わず、より高い安全を確保して下さい……」

スタジオのアナウンサーが次々と事前に用意されていたであろう警告を読み上げていく。

その刹那、画面に濃い緑色の光が輝き、読み上げは中断された。テレビを見ていたダン研の面々も、画面から溢れ出した緑光と、大気を揺さぶって轟くような巨大な爆音とに、視聴を強制中断させられる。

「うわあっ」

「眩しっ！」

驚く周囲の中で、次郎だけは発生した輝きに見慣れた色合いを感じ取った。

（……………綾香か）

美也と綾香のステータスは、綾香が美也を模倣した事でとても似通っている。しかし魔力の質は、次郎にとっては二人の容姿くらい異なっただけだった。

次郎が岩のように頑固で揺るがない性質だとすれば、美也は炎のように内面に踏み込む者を焼き、綾香は風のように自らの意思で自由に移ろいゆく。

三人が魔石を持っていたならば、それぞれ特有の色を持つだろう。

次郎は自身が、土色に白と黒を混ぜた濃い茶色に、故郷の杉山の土を混ぜた独特の土色の魔石になると思っている。

美也は、赤・緑・白を混ぜたクリーム色から赤みだけを増し、血を固めたような赤桃色の魔石になる。但し表面は炎で取り繕われ、一見すると綺麗な赤色に見えるだろう。

綾香は、赤・緑・白・黒を混ぜた黄土色から、緑だけが徐々に深みを増していき、最終的には僅かに黄色みを帯びた濃い緑色の魔石になる。

画面に発生した緑色の光からは、そんな綾香特有の色が僅かに感じ取れた。

次郎が見ていたテレビは、衝撃的な光景を撮し出していた。

上空に向けられたカメラには、眩い緑光の中心から飛び出した幾百、幾千もの光の束が放射線状に広がる光景が中継されていたのだ。光は屈折しながら偏向レーザーのように伸びていき、瞬く間にインプの群れを貫いて焼き尽くし、吹き飛ばし、僅かな間に消えていった。

それらと同時に、夜空に最後の打ち上げ花火を炸裂させた様な、大きな爆発音も轟いている。

光と音が止んだ後に残ったのは、上空で身体を吹き飛ばされたインプ達で、バラバラになったそれらは、まるで雨のように地上に降り注いでいた。

『こちら、沖縄ダンジョン前です。スタジオ、聞こえますか』

『江田さん、聞こえています。映像も見えています。そちらの状況を報告して下さい。何が起きたのですか』

『はい。先程上空で、爆発のようなものが発生しました。その中心から物凄い数の緑色の光の束が飛び散って、上空を飛行していたインプの群れを次々と貫きました。ここから見渡す限り、上空のインプは全滅しています』

『爆発は何だったのですか。地上のインプはどうなっていますか』

『爆発は突然発生しました。周囲の自衛隊の方々も、特攻隊も、啞然としています。地上に残ったインプも怯えており、周辺から続々と逃げ始めています』

『インプが逃げているのですか？』

『はい。インプは戦意を喪失して逃げ出しています。逃げるインプには発砲もされていますが、インプは応戦せずに、ひたすら逃げているようです』

その後もスタジオと現地のやり取りは放送され続けたが、二度目の爆発は鹿児島県で発生したとの速報が入った。

次郎が見ていたテレビでは流れていなかったが、地元テレビ局は沖縄と同様の爆発を撮影しており、やはりインプの群れが壊滅して逃げていく様子が映されていた。

いずれの県でも逃げたインプが居るために避難命令は中々解除されなかったが、掃討作戦は順調に推移していった。やがて広瀬大臣が緊急記者会見を行い、爆発が政府協力者による支援魔法であると発表した事で、ようやく事態は収拾した。

記者会見では、当然ながら魔法の詳細についての質問が行われた。しかし広瀬大臣は、魔法の詳細は日本の安全保障に関する情報であり、特定機密保護法に指定される特定機密にあたるとして公表しなかった。但し、両ダンジョンは速やかに攻略すると約された。

そして翌朝、鹿児島と沖縄のダンジョンは約束通り速やかに攻略された。

63話 最上級ダンジョン

ここ数年の日本は、近年稀に見る騒動の渦中にあるといえる。

ダンジョン発生という事象に関連して、様々な組織・団体の常識や前提が、根本から揺さぶられた。

地球外生命体と思わしき魔物や、現代科学を無視した魔法が齎した影響は甚大で、それ以上に攻略特典と称される能力の付与は、様々な方面に強烈な衝撃を与えた。

各国は外交や国防計画の練り直しを迫られ、人類を中心とした宗教の大半が地球外生命体の存在に関する解釈を求められ、数多の学会の理論・法則・定説などは土台から引つ繰り返された。

グローバル社会において、極東における限定的な事象と強弁する事は、不可能である。人々は情報を持ちすぎており、間違っている事は間違っていると知られてしまうのだ。

各組織の担当者は、自らの組織の原則論を修正するにあたって、正確な情報を求めた。中には強行に迫ってくる国もあつたが、井口総理は国際協力はするとした上で、日本国内を最優先する姿勢は崩さなかつた。

「総理。米政府から、ホフマン新大統領との会談を求める要請が入っております。事前調整事項の中には、先に米議会で承認のあつた、日米FTAの税率についての大幅な譲歩案も示されていますが……」

日本での政権交代以降、アメリカは共和党の白人系のライアン大統領から、民主党でユダヤ系アメリカ人のホフマン大統領に交代している。

先のライアン大統領は、日本の旧与党であつた労働党や大場元総理との繋がり深く、逆に政権交代した井口総理との交渉は梨の礫

であつた。と、されている。

実際には大場政権時代に始まつた沖縄での共同調査を継続していたのだが、アメリカのメディアが求める水準には達していなかったらしい。

なおアメリカの求める水準とは、攻略特典の折半である。

これに関して、アメリカのどんな無茶振りにでも譲歩する日本の井口総理は一切応じなかった。

そのためアメリカ人は、ライアン大統領の指導力に疑問を持ち、選挙でも新大統領に期待する風潮が生まれ、政権交代の一助となった。

そのような話を聞けば、大抵の日本人は空気を読んで自ら譲歩する。

アメリカ側は、日本人特有の性質も計算尽くであつた。そしてホフマン新大統領は、先に意気揚々と議会の承認を取り付けて盛大にアピールしたわけである。

井口総理は、そんなアメリカ側の全ての事情を承知していた。

「代替条件に、攻略特典を寄越せというものがあるだろう」

「はい。そのための譲歩案ですので」

「ダンジョンは日本固有の問題であり、日本は主権国家だ。加えて我が国は防衛上、自国に被害をもたらす魔物とダンジョンの管理と攻略の主導権を持ち続ける事が不可欠だ。攻略特典の配布など、調整不可能だと伝えたまえ」

「ですが協議が不調になつた場合、逆に税率を上げるというあからさまな示唆が……」

「その場合は、こちらも税率を上げて対抗する。必要な物はアメリカ以外から買えば良い」

「……………本当に宜しいのですか」

「財政を圧迫していた医療費は、光魔法で大幅に抑制できる道が開けた。核兵器に対抗する手段も得られた。魔石の転用技術も生まれ

た。それを、ただかF T Aの税率減、しかもいつ元に戻すかも分からない程度のもので、攻略特典を配布など有り得ん」
「畏まりました。調整不可能と返します」

井口総理が強気で居られるのは、圧倒的な支持率、衆議院の四分の三の議席、参議院の半数以上の議席、労働党の旧勢力が壊滅状態などの絶対的な政治基盤があればこそだった。

多少国民に負担を強いても、国民にはダンジョンやレベルという未来への展望があり、攻略特典を渡さない理由にも納得して支持を続けてくれる。

そんな日米の水面下での罅迫り合いが行われていた五月。

次郎の方も、地上では六月の大学祭に向けた準備をしつつ、地下では最上級ダンジョンの攻略に勤しんでいた。

現在日本では、今後インプの氾濫を避けるために、鹿児島と沖縄に続いて国内に二〇カ所残るダンジョンを中級から上級に変化、あるいは白化させなければならない。

すると日本中に上級ダンジョンが増える事になり、そこからの魔物氾濫を避けるために、今度は上級ダンジョンも攻略していかなければならなくなる。

上級ダンジョンのボス退治は、次郎たちが居れば問題ない。いずれ特攻隊でも可能になるだろう。

では上級ダンジョンを攻略した後は、一体どうなるのか。

次郎は、黒ダンジョンが最上級ダンジョンだと製作者側に聞かされて知っており、それを攻略できれば魔物の地上氾濫は止められると考えている。

魔物氾濫が無くなれば、日本はダンジョンの恩恵だけを受受できる。

そうなれば日本経済は立て直しの機会を得られ、日本に住む日本人の次郎たちもより良い生活を送れるようになる。

そのような理由に基づき、次郎は最上級ダンジョンの最奥を目指していた。

最上級ダンジョンの内部は、壁も床も真っ黒だった。

魔物は上級ダンジョンと同じ種類が出てきて、数十の集落も存在し、集落の間には広い空間に黒くて深い森もあった。

森を構成しているのは、上級ダンジョンにも生えていた背の高い杉、檜、松、銀杏などの裸子植物で、いずれも黒色だった。

大地には黒い土が敷き詰められ、鉱物には黒いコケ類が張り付き、シダ植物の黒ワラビ、黒クサソテツ、黒クラマゴケなどが足元を覆い尽くしている。そして中央には、大きな黒い湖も存在した。

最上級ダンジョンは、その内部の全てが黒色に染められている。

そして魔物には、黒色以外の特徴もある。

上級ダンジョンに出てきた魔物は、武器を持ち、集落を作る知能を持っていた。

だが最上級ダンジョンに出る魔物は、最初から存在している集落や武器を一切使わず、ひたすら盲目的に得物へと迫ってくる愚かな集団だった。

それでも次郎が苦戦したのは、黒ゴブリンが並のケルベロスよりも強く、自動回復する不思議な特殊能力を持ち、数も多すぎたからだった。

本日の美也は多忙なため、サポート役は綾香である。

「……………状況は理解致しました」

「どうした。問題でもあるのか」

「どうしたは、次郎さんの苗字でしょうに」

不機嫌な綾香が生み出した緑色の風の刃が、黒色のゴブリン達を四方八方から滅茶苦茶に切り裂き、黒い血を吹き出させる。

しかし周囲に満ちる黒い霧のようなものが傷口に流れ込み、ゴ布林達は直ぐに回復していった。

これこそが最上級ダンジョンの魔物の特殊能力で、魔石を壊さない限り、やがて回復して動き続けるのだ。

四肢を斬り落としても、魔石のある身体側からは欠損した部位が生えてくる。

黒ゴ布林達も体内に魔石を持っているため、不完全魔素体の一種なのだろう。

だが周囲の黒い霧を吸収して体力や負傷を回復する点や、集落や武器を使わない点、理性を持たず盲目的に迫ってくる点は、上級ダンジョンのゴ布林とは一線を画していた。

それらに相対し続けた次郎は、黒ゴ布林達の正体が、元和歌山県民が口の端に乗せていた『瘴気消費体』では無いだろうかと思像している。

根拠の一つが、最上級ダンジョンに入れるレベルだ。

完全魔素体になった次郎たちは『瘴気消費体に変質しない』メリットがあるらしい。

すなわちレベル九九までの不完全魔素体は感染するらしいので、ダンジョンにレベル制限がされている理由は、その辺りに有るのでは無いかと思われた。

黒ゴ布林に傷を回復された綾香は、さらに魔力を上乗せすると、巨大な太刀のような風を生み出した。

生み出された風の太刀は誕生と同時に直ぐさま振るわれ、黒ゴ布林達の身体を水平方向からバツサリと寸断した。

雑草を鎌で刈るような、あるいは裁断機で紙を切断するような、一撃必殺の荒い攻撃である。

さしものゴ布林達も身体を半分にされては如何ともし難く、黒い床面で蠢きながら、綾香の生み出す炎の海に飲まれて沈んでいっ

た。

「荒んでいるなあ」

「どなたのせいでしょうか」

「……………うーん」

次郎は炎の海を泳いできたゴブリンの生き残りを叩き潰しつつ、心穏やかならざる綾香の心境を察した。

綾香が荒む理由は、『完全魔素体』に関してだ。

綾香がレベル一〇〇に達してから一カ月半ほど経った頃、綾香の目の前にステータスが現われた。

井口綾香 完全魔素体 転移A二 収納S

体力八 魔力二六 攻撃七 防御七 敏捷八

火一三 風一三 水三 土三 光七 闇一〇

もちろん綾香にとっては、完全に寝耳に水だった。

その中で次郎に対して最初に説明を求めたのは、正しい行動だった。

その時点で次郎と美也から、綾香を共犯者として引き込むダンジョン製作者との接触の説明があった。

様々にコピペされる事を理解した綾香は、総合的に鑑みて完全に次郎たちの側に付いたのであるが、完全魔素体の表示が現われるまで信用されていなかった事に不満だったわけである。

「今度、気分転換にうちの大学祭でも来るか。北大祭」

「北大に進学されたのですか？」

「ああ。綾香が北海道に住んでいるからな。六月にあるけど、来るなら色々案内するぞ」

「ではお願いします。何日ですか」

綾香の声色が、僅かに高くなった。

北大は北海道にある国立大学で、道民にとっては北海道の東大である。

道民の綾香が大学祭を見学に行こうとも、進学先に選ぶとも、誰も疑問には思わない。

そこで次郎たちが形成した打算無しの人間関係の輪に入っていけば、派手に名前の売れてしまったこれからも、周囲へ過剰に阿る^{おもね}生活から多少は解放される。

そんな綾香の心境を察してか、次郎はさらに追加で気を紛らわせる案を出した。

「北大祭は、六月六日の木曜日から六月九日の日曜日までだ。それと、俺が札幌市に借りたマンションにも案内しておこう。携帯を収納でしまふなら、転移で遊びに来てても良いぞ」

「分かりました。今日のところは、大人しく騙されておきます。不満は残っておりますが、いずれ解消して頂けるものと信じておりますので」

「……………うい」

全然騙された風には見えなかったが、綾香の機嫌が良くなったので次郎は沈黙を保った。

そんな綾香の攻撃魔法は、条件提示後に巨刀の荒っぱい一刀両断から、半自動でゴブリンを撃ち抜く視線連動型の追尾レーザーに切り替わった。

今月の頭に、インプ達を残らず撃ち落としたレーザー攻撃の、地上殲滅版である。

魔力消費量が大きいためにレベル〇〇の綾香でも疲弊するし、味方が居る方角には危なくて撃てないという欠点もあるが、それらをクリアできればビルだろうと山だろうと貫く強烈な攻撃になる。

「こうして見ていると、能力加算で魔法を引き上げるのは存外大きいな」

「そうですね。最上級ダンジョンでは、能力加算を取ろうと思いません」

「まあ、綾香はの方が良いだろうな」

コピペされるなら、能力の高い方が良い。

順調に勉強に励む美也も攻略特典を望んで、ダンジョン攻略に参加の意思を示している。

綾香よりも加算分だけ能力が高い美也は、魔物の殲滅方法が綾香よりも極端となる。おそらく夏休みの間には、次郎たちが倒した魔物の数に追いつくだろう。

「ではこちらも、花子さんを置き去りにするくらい倒しておきましょう」

「了解。とりあえずゴブリンは徹底的に駆逐だな」

次郎たちは集落から外に出て、森を徘徊する黒ゴブリン達に攻撃を始めた。

64話 大学の夏休み

子供の頃、早く大人になりたいと思った覚えがある人は、どのくらい居るだろうか。

勉学の強要、ライフスタイルの強制、行動の制約、精神的な束縛、不条理な要求。

それら保護者の様々な干渉に対する平和的な解決手段が大人になる事であり、そうあるうとする事は極めて正常な思考である。

しかし大人になる事で失われる物もいくつか存在する。

その最たる例の一つが、夏休みであろう。

もちろん社会人の中には、年に三〜四カ月だけカニ漁船に乗って年収一〇〇万以上を稼ぎ、残りは長期休暇という特別な職業もある。

だが大多数の職業に就くと、かつての保護者からの干渉を大幅にシャットアウト出来る事と引き替えに、学生時代に得られたような夏休みは失われる。

次郎たちの大学では、夏休みは八月の初旬から九月の下旬までだ。北海道の夏は短い、それにも拘わらず本州並みの長期休暇である。その理由に思いを馳せた次郎は、教授達が休みたいだけではないかと疑った。

実際には相応の理由があるのかも知れないが、次郎の周囲にはテレパシーを使える人間が居ないため、脳内に突っ込みを入れる者は居ない。

もつともテレパシーは使えないが、魔法を使える知り合いならば沢山いる。

それは、現在進行形で次郎が携帯端末のネット対戦をしている大

学の同期であり、所属しているダンジョン研究会のメンバー達である。

「おいジロウ、開始ボタン押せよ」

「いや、熊さん。そろそろ到着だろ。大富豪は終わり」

「もうそんな時間か。空海、翔馬、終わりだつてよ」

「おう、分かった」

「札幌から新青森までの三六〇キロを約二時間。やっぱり新幹線は速いね」

次郎の周囲には、魔法を習得している者が多い。

サークルメンバーの掛け持ち先でも、ダンジョンウォーカー、UMAクラブ、北大魔導師連盟、北大冒険者ギルドなどは、揃いも揃ってレベルを持つ者たちの集まりだ。

二〇四七年現在、レベルを得る事で生命力や身体能力の向上などのメリットはあっても、明確なデメリットは見つかっていない。また生計を立てる手段としては確立していないが、力や健康を得る事は、生計を立てる事の補助的な位置付けには成り得る。

そのため次郎たちと同学年でレベルを持つ人間は、日本全体で三分の一を越えている。

そんな魔法使い集団の末端に名を連ねるダン研は、高校生たちの夏休みが終わってダンジョンが空く九月上旬の平日に、青森ダンジョンに挑戦する計画を立てた。

本当はダンジョン公開から一年を記念して九月五日の土曜日に入りたかったが、流石に混雑が予想されたため、その日は避けて九月二日から四日までを予定した。

レベルを得るメリットとデメリットを見比べれば、夏休みの機会を逃す理由が無い。ダン研メンバー七〇名のうち八割近い五三名が探索に参加を表明した。

なお不参加者の理由は多様で、ダンジョン入場許可証が北海道・東北ブロック以外にあつて青森ダンジョンに入れない者、成績が芳しくなかった者、資格取得の日程が被った者、抜けられないアルバイトがあつた者などである。

「次郎嫁は参加できなくて惜しかったな」

「まあ、医学部だからなあ」

不参加だつた一七人の中には、美也も名を連ねている。

学部を言い訳にしてまで来るのを拒んだ理由は、レベル上げの意味が無いからではなく、女性にとって下級ダンジョンのトイレ事情が好ましくないからだ。

次郎たちしか入らない高難易度のダンジョンでは、単独で大きく距離を取つて、風の防壁で音を遮断して、土魔法で周辺を埋め尽くすという手法を採っていた。

しかし公開された下級ダンジョンでは、ゲート内側の入り口前にこそ大量の仮設トイレが設置されているものの、ダンジョン内では周囲に魔物を警戒する仲間が居る中で、『簡易テント、簡易トイレ、凝固剤』の三点セットでトイレを済まさなければならぬ。

凝固剤で固めた袋は、その辺に棄てておけば灰色スライムが処分してくれるので持ち帰り不要だが、女性にとってはそういう問題では無いらしい。

そのためダンジョンに潜る女性の多くが、入り口付近ばかりで活動する。

そこではコウモリ数が常に不足し、女性の大半は経験値不足で低レベルに留まつてしまう。

「全国のダンジョンに入れるようにすれば良いのに、どうして駄目な決まりになっているんだ」

「確かに。マイナバーカードの流用だから全国何処でも使えるだ

ろっしな」

「そうだよな。それは制度の不備だから改善すべきだよな」

次郎たちの疑問に、火曜日グループが横から入ってきて賛同の意を示した。

北海道・東北ブロックに住所がある者は、当該地域の初級ダンジョンに入れる。

北海道から青森県までは新幹線一本で行けるため、道民がダンジョンに潜るときは、青森ダンジョンを選択する事が多い。

停車駅次第で到着時間は変動するが、六時三五分に札幌を発車する始発の新幹線なら、停車駅が少ないので新青森に着くのは八時三五分となる。

新幹線は料金が高いために、車に乗り合わせる青春まつしぐらなチームもあるが、次郎は新幹線に乗ってきた。

「全員そろそろ時間だ。旅館の場所は分かっているだろうから、はぐれても置いていく。旅館に荷物を預けたら、全員で青森ダンジョンに移動だ」

「了解ですー」

ダン研の探索予定は、二泊三日となっている。最低目標は、参加者がそれぞれ一つレベルを上げる事だ。

もともと次郎たちは既に限界値と思われるレベル一〇〇に達しており、ステータスからレベル表示が消えているため、目標達成は不可能であろうが。

高校生の綾香が夏休みだった七月二〇日の土曜日から、八月一八日の日曜日まで、次郎たちは自由時間の大半を最上級ダンジョンの探索活動に費やした。

それは探索と言うよりも、ダンジョン内部の破壊活動であった。

回復する最上級ダンジョンの魔物達に辟易した三人は魔法を重ねて、第二階層から第十階層までの各森林地帯を炎と風で焼き払い、土を引っ繰り返し、何も無い荒野に変えた。

その結果、膨大な魔物を倒している。

大魔法を使う二人に比べると次郎の撃破数は伸び難いが、そもそも普段参加できない二人の撃破数を引き上げるのが長期休みの目標なので、結果は期待通りだ。

そうして夏休みの自主的な課題を終えた現在は、インターバル中であつた。

働き過ぎの日本人として、少しは休まないといけない。

そんな考えの元、次郎はダン研主催のイベントに旅行気分に参加していた。

「潜るぞ潜るぞーっ」

「おーっ！」

女子力の解釈に新たな一文を書き加えたダン研の女性陣が、意気揚々と新青森駅のホームに降り立った。

そんな彼女らの進撃に男共が付き従い、新青森駅を出てから二手に分かれた。

下級ダンジョンが解放されて以来、下級ダンジョン周辺のホテルは予約が多い。

いかに九月の平日と言えど、五三名が泊まれるホテルは流石に無かつた為、ホテルを分けたのだ。

次郎が泊まるホテルは新青森駅と青森ダンジョンの中間に位置しており、一泊六〇〇〇円台で朝食も付いてくる。

暫く歩くと、すぐにお値段相応のホテルが見えてきた。

そこからは会長の津田が先頭に立ち、ホテルに入っていく。

「今日から予約の北大ダンジョン研究会の津田です。事前にメール

でお願いしていた荷物の預かりをお願いします」
「畏まりました。こちらの方へどうぞ」

津田は随分と慣れた様子でフロントマンとやり取りを済ませると、月曜日と火曜日の合計二八名をロビーへ誘導した。

ロビーに入ると各自が荷物から装備品を取り出して身に纏い、残る荷物を預けると直ぐにホテルを出て、水曜日と木曜日のチームと合流する。そして水と食料を調達すべくコンビニを経由し、青森ダンジョンに向かって歩き出した。

各々の装備は様々だが、槍の持ち運びが面倒だった次郎は、懐かしのナタを二本用意した。

周囲も日本刀や槍、弓などで武装しており、武器だけ見ると戦国時代にタイムスリップしたかのようである。但しリュックサックや背負い袋には、魔石を取り出し易いナイフやL型バーがはみ出していたが。

防具は、ヘルメット、ゴーグル、ネックガード、肘や膝のプロテクター、グローブ、安全靴などが真つ当な装備だとして推奨されている。予算が豊富にあれば、着衣や手袋を防刃のケブラー繊維で揃える人もいる。

道具は、水筒や簡易テントと簡易トイレと凝固剤のセットなどが必須だ。他にも長時間潜るなら携帯型の簡易折り畳み椅子は欲しいし、深くまで潜るなら寝袋などにも必要になる。

照明は、ヘルメットやベストに取り付けるタイプのLEDライトや、リュックなどにぶら下げるLEDランタンが主流だ。なお洞窟内では、いくら焚き火を起こしても酸素濃度が変わらなかったため、今では火や光魔法の証明も認められている。

その他にも、奥まで潜るチームは貸自転車屋で自転車を借りる場合がある。殆ど買うのと同じくらいの保証金が発生するが、自転車が無事なら保証金は返して貰える。

なお事故が予想されるため、原動機付きの乗り物は入口で止められている。

ここまで武装したダン研は、一昔前であれば銃刀法違反で現行犯逮捕されただろう。

しかし、人を襲う魔物が大量に氾濫するようになった現在、『違法性阻却事由によって罪に問われないと解される』とする見解が関係機関・都道府県警に通達されており、武装してもそれだけで逮捕される事は無い。

解釈の根拠は、日本国憲法第二五条の生存権だ。

憲法優位説によって、生存権が銃刀法を上回ると解されている。もっとも、武器を以て人を傷つければ、相応の罪に問われる事に変わりはないが。

武装したダン研は堂々と青森市内を歩き、ダンジョン関連の土産物屋や屋台を通り過ぎて、途中で貸自転車屋に寄ってから入場ゲートを通ってダンジョン内に侵入した。

時刻は一〇時を過ぎたところで、この大集団であれば素早く行動できた方だろう。

ダンジョン内部に入って坂道を下った津田は、人が沢山群れている大広場に出ると、空いている近場に移動し、引き連れてきた五二名に指示を出す。

「それじゃあ入り口、中間A、中間B、奥までの四チームに分かれる。入り口は留美衣君、中間Aは僕、中間Bは沢海君がリーダー。奥は陽彩君がリーダーで、鋼君が副リーダーの二人体勢になる。各自、リーダーの元に集合」

次郎は津田の号令に従い、長谷空海、大熊騎士、穂刈翔馬らと共に奥までチームに加わった。

「リーダーは名簿を確認しながら点呼。確認後は移動して良し。それでは健闘を祈るよ」

自分以外の三チームを追い払うように右手を振った津田は、自身が受け持つチームの点呼を始めた。

次郎が所属した奥までチームも津田から離れた場所に集まり、リーダーの笹森に点呼を取られた。

「ルールは一個。コウモリを一匹倒したら、次は周りにも譲ってね。それじゃあ出発　っ」

「「「おー」」」

奥までチームの一五人は、陣形も役割分担も無く、撤退時間すら定めずに、地下二階を目指して自転車で走り始めた。

初級ダンジョンの通路幅は、大半が片側三車線の国道並に広い。そのため人々は、中央付近を二輪車の左側通行として使うルールを生み出し、自転車での移動を可能とした。

「追い越し車線は右側だからね」

「了解です」

「荷台付きの緊急車輛は、一番右側だから。サイレンが聞こえたら左に寄ってね」

「そんな物まであるんかい！」

笹森の指示が飛び、ダン研は通路の追い越し車線を走り始めた。初級ダンジョンの各階層は、一般公開されて日本中の人々に調べられた結果、おおよそ四〇〇平方キロメートルであると判明している。日本の市は、平均一七〇平方キロメートルなので、ダンジョンの一階層は平均的な市の二倍以上三倍未満だ。

仮にダンジョン内が正方形で、最奥まで直線で行けるのならば、

二〇キロほど走れば地下二階へ辿り着ける事になる。

だがダンジョン内部は、迷路のように入り組んでいる。

そのためこのダンジョンでも、実際の移動距離は三倍以上となる。

北海道ダンジョンの地下一階から地下二階への道は、コウモリとの戦闘を回避しながら迷わずに進んだとしても、レベルを持つ者が乗る自転車で片道三時間は掛かる。

つまり午前一〇時の出発であれば、地下二階への到着は早くとも午後一時だ。

地下二階で二時間ほど滞在してから帰路に着けば、ダンジョン脱出は午後六時。

(……………絶対にスムーズには行かないだろ)

なにしろ陣形も役割分担も定めず、撤退時間すら示さないチームである。従って地下二階まで辿り着き、感覚的に満足したら撤退なのだろうと推察された。

それでも破綻とまでは行かないのは、会長が事前準備させていた地図や道具があるからだ。

スライムが何でも消化してしまうために標識などは一切設置されていないが、ネットで印刷した地図に蛍光ペンで曲がった道などを記入していけば、現在地と帰り道には迷わないで済む。

次郎が自転車のハンドルに肘を付けながら走行と同時に地図を見ていると、背後から魔力の流れが感じられた。

「炎の精霊達よ、僕に力を、ファイヤーボール！」

次郎の後方から詠唱が響き、炎の魔法が飛び出して見事にコウモリへ命中した。

飛び回っていたレベル一のコウモリは火魔法の直壁を受けて、警

察の拳銃で発砲されたときよりも呆気なく撃ち落とされる

「おおつ、翔馬やるじゃん！」

「前を照らそうと思ったら、丁度居たからね」

魔法攻撃は、コウモリの肉体的な防御力とは無関係にダメージを与える。

墜落したコウモリに二度目の魔法を放った翔馬は、堅実にトドメを刺した。

彼はそこから直ぐに自転車降りて、短刀で胸部を切り裂いて魔石に触れ、力を吸収してから直ぐに自転車の列に復帰する。

集団を待たせた翔馬が一言謝った後、笹森が号令を出して集団は再び移動を開始した。

停車から再出発まで、僅か一分足らずの出来事である。

次郎は翔馬の効率の良さに、思わず目を見張った。

先行者として効率性を高めてきた次郎にとっても、彼の稼ぎ方は悪く無いものだった。

道理で人々のBPの割り振りが、魔法一辺倒に偏る訳である。もしかすると効率的な稼ぎ方などがネットに載っているのかも知れない。

「手慣れているな」

「僕もレベル三だからね。堂下君はダンジョンの外でレベルを上げる事が多かったんだっけ」

「ああ。俺は森林で稼いだんだ」

「それは大変だったね」

「いやホント、自転車での経験は初だね。最初は金が無かったから、こういう稼ぎ方は無理だったしなあ」

入り口付近は混んでおり、そこかしこでコウモリと戯れる人々が視界に入る。

国内二四カ所のダンジョンに対して、潜る候補者は一〇〇万人以上。一カ所に五〇万人が登録している中、火曜日と言えど一万人くらいは入り込んでいるのだろう。

地図に示された道順で二階に向かっている以上、遭遇率が高いのも道理である。

「風の刃よ、吹き荒れろっ、エアカッター！」

「水よ集え、そして駆け抜けろ、ウォーターブレット！」

ダン研の面々は掛け声を掛けながら、魔法で次々とコウモリを撃ち落として進撃を続けた。

一五人が連携して一匹ずつコウモリを倒し、やがて二匹目を倒す者も現われ始める。

各自がレベル相応の戦闘力で、危なげない堅実な動きを続けた。

「……………すまん、ちょっと聞いても良いか」

「どうしたジロウ」

「皆は魔法を使うときに、どうして呪文を唱えるんだ。無言でも撃てるだろう」

「それは当然、気合いが入るからだ」

「そもそも魔法は呪文を唱えるものだろう」

「無言で魔法を使うと、周りが危ないからじゃないかな」

次郎のふとした疑問に対して、空海、騎士、翔馬の三人から三者三様の答えが返ってきた。

前の二人は兎も角、翔馬の言い分は理解できなくも無い。

魔法を撃つと宣言しても、魔物側は身構えたり避けたりする恐れが無い。一方で、周囲の人間は宣言した者と魔物の位置を把握して

射線上に入らないように注意する事が出来る。

「つまり纏めると、呪文は唱えた方が良い訳か」

「その通りだ。ジロウも唱えてみる。最低でも二節だ」

「……………マジで？」

「こういうものは、恥ずかしいと思うから恥ずかしいのだ。皆が唱えている当たり前の事だと思えば何も問題ない」

「受験していた一年で、随分と常識が変わったなあ」

次郎は感慨に耽る振りをして、厳しい現実から目を逸らした。

65話 青森ダンジョン

次郎がダン研に入ってから月曜日グループで学んだ物の中に、ドレイク方程式というものがある。

これは一九六一年、アメリカの電波天文学者フランク・ドレイクが、この銀河系にどれだけ交信可能な知的生命体が存在するかを説明するために用いたものだ。

$$N \parallel R \times f_p \times n_e \times f_l \times f_i \times f_c \times L$$

$N \parallel$ 交信可能な文明の数

$R \parallel$ 天の川銀河で一年に誕生する星の数

$f_p \parallel$ 恒星が惑星を持つ割合

$n_e \parallel$ 生命が存在し得る惑星の数

$f_l \parallel$ 実際に生命が発生する割合

$f_i \parallel$ 生命が知的生命に進化する割合

$f_c \parallel$ 交信可能な高度文明を持つ割合

$L \parallel$ 文明が電波を発し続ける年数

ドレイクは、それぞれに妥当な値を入れれば、 N が一以上になるため、銀河系を丹念に探索すれば必ず他の文明が見つかるはずだと主張した。

その後、ハッブル宇宙望遠鏡やケプラー宇宙望遠鏡が登場して、計算式に当て嵌める値が次々と修正されていった。

二〇〇九年に打ち上げられたケプラー宇宙望遠鏡が白鳥座方面の約一万個の恒星を観測した結果、地球型惑星とスーパーアースが一〇〇〇個以上も発見された。そのうち五〇個は水が液体で存在し得るハビタブルゾーン内に存在し、一〇個は地球サイズであった。

ハビタブルゾーン内にある地球サイズの惑星は、程良い大気があれば引力圏内に水を引き留めておける。

宇宙には水素が大量に存在しており、太陽などの主系列星は水素を使って核融合を起こしている。また酸素も恒星の核融合や爆発などで自然発生する事が、ヨーロッパ宇宙機関のハーシエル宇宙望遠鏡による観測結果で証明されている。

それら水素と酸素が出会えば水分子が作られ、宇宙空間上に存在する岩石と結びつく。あとはハビタブルゾーン内で惑星が形成された後に、恒星系の外周から氷の天体が引き寄せられて惑星と天体衝突を起こせば、地球のように水を獲得できるというわけだ。

天の川銀河には少なくとも二〇〇〇億から四〇〇〇億個の恒星が存在している。

ケプラー宇宙望遠鏡による観測結果が、天の川銀河にある恒星系の平均だと仮定した場合、ハビタブルゾーンを公転している生命が存在し得る地球型惑星 n_e は恒星数の一〇〇〇分の一であり、天の川銀河全体で四億〜八億個ある計算になる。

f_l 、 f_i 、 f_e 、 L に関しては、今のところ想像でしか値を出せない。

但し、地球に原始海洋が誕生した四〇億年前、ほぼ同時に原始生命が誕生した事から、水が液体で存在する惑星で生命が発生する確率 f_l は、現代ではかなり高いと考えられている。銀河自体における恒星系のハビタブルゾーンや惑星大気なども考慮して、四〇分の一と見積もる。

そうすると何らかの原始生命が発生する惑星 f_l は、一〇〇〇万〜二〇〇〇万個となる。

原始生命が誕生した惑星 f_l で、原始生命が知的生命体まで進化する f_i の割合は、一〇〇万分の一と仮定する。

一〇〇万分の一という低い数値は、恐竜などが長い繁栄の時を経ても知的生命体に進化しなかった点、現在地球に生息する多様な生命体の何れも知的生命体まで至らない点を加味した結果である。

そもそも太陽系のように、ハビタブルゾーンの外側を公転する巨大ガス惑星の木星と土星、巨大氷惑星の天王星と海王星のような、太陽系外周の全質量の九九%を占める各天体が理想的な配置になっているケースは稀である。

その中でも特に木星は、凍結線上のギリギリ外側で物質を集め続けて質量を地球の三一八倍まで増大させ、ハビタブルゾーン内にあった原始惑星の一部を太陽に引き寄せずに天体衝突を起こさせて揮発性物質を集約させ、大気が宇宙空間にあまり逃げ出さない程度に質量を増大させて、原始地球を誕生させた。

その後、土星との軌道共鳴によって小惑星帯から原始地球に資源を運び、中期にはハビタブルゾーン内の地球軌道を安定させて気候を一定に保ち、後期には長周期彗星から地球を防御して生命の長期生存を可能とした。

その上で適度に大量絶滅を引き起こして生命の進化を促すバランスは、まさしく絶妙の域だ。これほどまでに理想的な経過を辿って知的生命体を生み出す恒星系は、銀河広しと言えど極稀であろう。

すると天の川銀河では、原始生命が誕生しうる一〇〇〇万〜二〇〇〇万の惑星の内、人類並みの知的生命体 f_e が誕生し得る惑星は、一〇〜二〇個程度となる。

最後のし、人類並みに進化した知的生命体が何らかの電波信号を発するか、宇宙空間に人類が観測可能な人工物を創り出して人類と交信する可能性は、相手と人類の技術力、お互いの文明維持年数で大きく変わる。

人類が知的生命体と呼べるようになったのは、チンパンジーなど他の生物も行える二足歩行や道具の使用を始めた数百万年前ではなく、農耕と牧畜によって人工的に食糧を生産できるようになった数

万年ほど前からだ。但し、この時点では相手を観測のしようがないので、しは○である。

また電波天文学などで宇宙人の交信を受信しようと試みたのも一〇〇年ほど前であり、当時の技術力では一〇光年先の電波を捉えるのが精々であった。この時点では、相手が全銀河を覆うような大文明でない限り地球側が観測できるし、確率は○である。

天の川銀河がある一〇万光年の範囲内に誕生する知的生命体feが一〇だとして、それら文明が平均的に分布したとすれば、互いの距離は一万光年。

すると人類が一万光年先までの全惑星の地上を観測できる技術を持てば、先発文明の滅びた遺跡か、これから知的生命体に進化しそうな生物、運が良ければ同時代を生きる知的生命体を観測できるようになるだろう。

ようするに現代の地球人が、自力で地球外知的生命体を見つけられる可能性は、一〇〇年前の技術から劇的に変わらない限り、○だ。結論として宇宙人と会いたければ、地球から半径一萬光年にある惑星の地表に存在する人工物を、隈無く調べられる技術力を持つべきである。

但し大陸プレートの移動などで建造物が消えてしまったため、地球から観測する程度では見つからないだろう。各恒星系に直接赴いての、詳しい精査が必要である。

もともと人類の文明力的には、未だ数千年ほど早いだろうが。

「と言うのが、ダンジョンが現われる前の定説だったんですけどね」「宇宙人の方が、自分で姿を現わしたからね」

午後一時半を回ってようやく辿り着いた、青森ダンジョンの地下二階。

タマヤステと戯れる一部のメンバーを眺めながら、次郎は遅めの

昼食に取りかかった。

「暗き冥府より湧き出し魔物よ、汝の在るべき世界に戻れ、ファイヤーボール！」

ダン研の女子が詠唱すると同時に、野球ボールほどの真つ赤な火の玉が現われて、サッカーボール大の巨大タマヤステに襲い掛かった。

顔に直撃を受けたタマヤステは仰け反り、そこに男子の蹴りが入って身体を引つ繰り返される。

「この野郎、硬いんだよてめえ！」

転がったタマヤステの腹部に向かって、ツルハシや金槌、両口ハンマー、果ては混合ガソリンで動かす穴掘機などが襲い掛かっていった。

腹部を破壊されたタマヤステは毒を撒き散らし、奇っ怪な鳴き声を上げながら激しく動き回る。

その声に呼び寄せられたのだろうか、タマヤステの群れが一斉に襲い掛かってきた。

だがダン研のメンバーは一五人、次郎は休憩しているが周囲には他の探索者もあり、数では負けていない。

最悪の場合、休憩に入った次郎たちが呼ばれるか、それでも無理そうなら一階に逃げれば良いのだ。魔物達が自発的には各階層を越えない事は、既に経験則から既知となっている。

「来たわよ！」

笹森が薙刀を構え、周囲に警告を促した。

次郎はそれに構わずに携帯型の簡易折り畳み椅子を展開し、サン

ドウィッチを取り出し、青森県のコンビニで買った北海道牛乳のパックにストローを差し込む。

隣にはリーダーの笹森と入れ替わりで休憩に入った副リーダーの鋼が座り、彼もコンビニで買ったおにぎりとお茶を取り出した。

ダンジョン内では、軽く摘まめるサンドウィッチやおにぎり系が比較的人気で、態々崩れるお弁当を持ち込む猛者は中々いない。

「ドウシタくんは、相手がどこから来たと思うかな」

鋼が振ってきた話題は、ダンジョンを出現させた存在についてだった。

ちなみにダン研の大多数は、宇宙人説が最も有力だと考えている。中には未来人説も少なからずいて、根拠としては日本のみ良い意味でも悪い意味でも差別されている点や、それを日本政府が独占している点が挙げられる。曰く、日本政府は未来の日本人とコンタクトを取っているのではないかというわけだ。

但し世界的には、どちらの考え方も少数派だ。

日本以外では、神によるものだという説が多数派を占めている。その内訳は、人類に対する試練の始まり、地獄の顕現、日本に対する神罰など様々だ。

なお次郎は、鋼と同様に相手の事をよく分かっていない。

実際に会った相手の自称は元和歌山県民だが、単なる和歌山県民はダンジョン作成能力など持たない。背後に何らかの存在がいて関与していると考えるのが、至極真つ当な思考である。

それが地球文明に介入しに来た宇宙人だと言われれば、おそらく信じただろう。

あるいは神や未来人だと説明されても、相手側に次郎を騙すメリツトが思い浮かばないため、その説明を前提としただろう。ダンジョンを生み出して魔物を創り出している以上、紛れもなく神や未来

人に匹敵する創造力は持っているのだ。

その中で今のところ最も高い可能性として、宇宙人説に立っている。

なぜ宇宙人説なのかというと、未来人が過去に移動する技術は現代では理論上不可能であるし、万能の神という存在が論理的に矛盾を来す事も知っているが、宇宙人のワープだけは理論的には可能だからだ。

「宇宙人説が正しいとして、地球から最短距離で知的生命体が存在し得る可能性があるのは、一二光年先のくじら座タウ星eですよね」
「うん、そうだね」

くじら座タウ星は、太陽に似た恒星をG型主系列星だ。

太陽よりも質量が小さく、光度が小さい為、各惑星が受けるエネルギーは太陽系の四五%ほどしか無い。

恒星系には五つの惑星が確認されており、タウ星eは地球の四倍ほどの質量で、地球と太陽の五三%ほどの距離を一六八日で公転している。

このタウ星eは惑星の質量が大きいために、地球と同様の大気が存在した場合は大気が厚くなり、宇宙空間に逃げ難い事から、表面温度は八 ほどとなる。

地球の表面温度が一五 のため、生物が存在するにはかなり良い条件といえる。

「仮にタウ星人が居たとして、一二光年先から真っ直ぐ地球へ来たなら、最小に見積もって人類より千年先の技術で来れそうです。まあそんな事は無いと思いますけど」

「それはどうしてだい」

「地球人に付与された転移能力は、アインシュタインの相対論で理論的には可能だと示されています。でも個人単位に付与するのは、

「一二光年を移動する程度の文明だと無理そうだからです」
「うん、成程ね」

鋼は納得したが、実はそれ以外にもタウ星人では有り得なさそうな理由がある。

タウ星は、単体では生物が存在するのには良い条件だ。

しかし恒星系には問題があつて、エッジワース・カイパーベルトと呼ばれる恒星系外縁天体群が太陽系の一〇倍以上も存在している。つまり、巨大隕石の衝突が多発し易いのだ。

これはタウ星系の恒星の力が太陽よりも弱いために、天体群が恒星風でタウ星系外に吹き飛ばされ難い事や、木星や土星のような巨大ガス惑星が天体群を引き寄せなかった事に起因する。

辛うじて天王星や海王星のような巨大氷惑星であるタウ星gが一つ確認されているが、それ以外にタウ星eを守る巨大惑星は配列されていない。

そのため、タダでさえ多い天体群が長周期彗星となった場合、木星や土星などに引き寄せられず、進路上に存在するタウ星eに衝突して大量絶滅を引き起こす頻度は、地球に比べて一〇〇倍以上も多くなってしまう。

およそ一〇〇〇万年に一度は大量絶滅を起こすのであれば、恐竜の絶滅から六八〇〇万年で誕生した現在の人類のような知的生命体がタウ星eで存在するのは難しそうだ。

隕石に対応した進化をするのであれば、クマムシのような極限生物の方向であろう。

仮に高度な知的生命体が誕生してもそして海底や地底に適応した生物は、陸上生物よりも宇宙に出るハードルが高くなる。タウ星人が地球に来られない所以である。

「タウ星だと、僕たちのような知的生命体の発生は難しそうだよね」
「はい。進化しても隕石衝突に強い海底生物か、地底生物が関の山

でしょう。陸上生物に比べると、宇宙に出るハードルは高いと思います」

「それなら、もっと遠いんだろうね。どれくらい先から来たのかな。一〇〇光年先か、それとも一〇〇〇光年先か」

遠い目をした鋼は、実際にはどれほど遠い宇宙に思いを馳せているのだろうか。

少なくとも一〇〇光年程度ではないだろうと、次郎は考えた。

天の川銀河の直径は一〇万光年。中心部には巨大ブラックホールがあるため、反対側から大きく迂回して来るなら、移動距離は一〇万光年を超える。

もつとも、それほど遠方から来るのであれば、道中に居住可能な惑星は無数にあるだろう。次郎はけなしの想像力をめぐらせ、一つの恒星系を思い浮かべた。

「一四八〇光年先にあるKIC 8462852だと、どうですかね」

KIC 8462852は、白鳥座を調べていた宇宙望遠鏡ケプラーが観測した、謎の減光を不規則に起こす恒星だ。

恒星は太陽よりも一段階上のF型主系列星であるが、二〇一〇年代に最大二二%という異常な減光が確認され、ハーバード大学に保管されていた記録を遡ると、過去一〇〇年の間にも不規則に最大二〇%の減光が起こっていた。

ケプラーが観測した白鳥座方面にある一万個の恒星系で、このような特殊な減光を起こしたのはKIC 8462852だけである。そして減光が、恒星を横切った小惑星や彗星の類でない事は、NASAのスピッツァー宇宙望遠鏡による赤外線観測などによって確認された。では減光は、一体何なのか。理由は今のところ分かっていない。

そこで登場したのが、巨大人工天体やダイソン球だという仮説だ。何しろ恒星系は太陽よりも少し強い程度で、恒星系内に恒星以外の天体がある事も分かっている。その星を発祥とする異星人が文明を発展させた可能性は、今のところ否定できない。

「一四八〇光年の彼方が。そんなに悪くないね」

鋼の感触は悪くなかった。

太陽よりも強い恒星に二〇%もの減光を不規則に起こしうる規模の巨大な人工天体やダイソン球を作れるのであれば、相手は人類に比べて数万年先の技術を持つだろう。

人類を手玉に取るくらいの高度な文明が栄えていても、不思議ではない。

そんな文明が近場の恒星系開拓では無く、一四八〇光年先の地球を訪れる理由については、わりと簡単に説明できる。

まず先方の動機は、生存環境の拡大だ。

一つの恒星系のみにしがみついていると、いずれ恒星の死によって滅亡するのは自明の理である。であれば移住可能な他の恒星系に広がるのは、生存を目的とすれば極めて真つ当な行動といえる。

次いで地球を選択した理由であるが、相手が誕生した恒星系の外に移住先を求める場合、移動可能な範囲で最も生存に適した惑星を選ぶのが道理である。そして地球は、人類や多様な種を生み出せるほど、生物にとって理想的な環境である。

一四八〇光年を移動できる技術力があれば、相手が地球を移住先を選ぶのは当然なのだ。

その際、現住生物を自分たちの生存よりも優先する訳がない。人類が地底に住まうタウ星人を自分たちよりも優先しないのと同じ理由である。

だが鋼の根本的な疑問は、未だ解消されていない。

すなわち、何のためにこれほど広大なダンジョン空間を生み出すのかだ。

日本に発生しているダンジョン空間は、日本の国土を越えている。初級ダンジョンは、一階層が四〇〇平方キロメートル。一五階層を合わせれば、六〇〇〇平方キロメートルもある。

中級ダンジョンは、一階層が八〇〇平方キロメートルあるのではないかと言われており、二〇階層で一六〇〇〇平方キロメートルとなる。

初級で固定された二四県を合わせれば、十四万四〇〇〇平方キロメートル。

中級になった二二都府県を合わせれば、三五万二〇〇〇平方キロメートル。

日本の国土が約三八万平方キロメートルなので、出現したダンジョン空間の方がずっと広い。

国家規模の空間を生み出して、あるいは空間を繋いでどこかに転移させて、一体何をしたいのか。

地球人的に考えれば、行為に対する費用対効果が全く見出せないという事になる。人類に対する下調べだとしても、相手の行動が効率的には思えない。

次郎としても、相手の目的が『完全魔素体のデータが欲しいから……では無い』という事は直接聞かされているが、本当の目的が何なのかは想像も付かなかった。

「鋼くん、増援に来てー！」

「……………休憩は終わりのようだね」

「了解です」

鋼たちは思考を打ち切ると片付けを済ませ、地底人たちに向かって武器を構えた。

66話 大学二年生

大学一年の夏休みが終わってからは、特に大きなイベントなどは無かった。

後期も前期と同様の日々が繰り返されて、全科目で問題なく単位を取得できた。各講義の評価は様々であるが、単位さえ取れば卒業するにあたって問題は無い。

大学における講義やサークル、生活や友人関係などは、スタートが大切なのだろう。

アルバイトという項目を切り捨てた次郎や、それに加えて普段のダンジョン探索を制限した美也は、全ての履修科目の単位を取るという極めて順調な一年間を終えた。

二年生になると講義の専門性は高くなるが、やっている事には変わらない。二年生の前期でも取れるだけの講義を詰め込み、それを無事に終えて夏休みを目前にしていた。

もつとも一億人弱が暮らす日本では、僅か一年間で社会情勢が大きく様変わりしている。

例えば日本のダンジョンは初級が白化二三カ所、中級が白化一二カ所、上級が灰色一五カ所、最上級が黒一カ所となっている。

上級はいずれも攻略されていないが、インプが湧き出した鹿児島や沖縄の二の舞は御免だとばかりに、かつて特攻隊の第二陣と呼ばれた自衛隊の攻略チームや、後発の第三陣以降のチームが攻略を行うべく頑張っているらしい。

上級ダンジョンの魔物は自衛隊の一部以外には非公開放だが、地下二〇階にはレベル五五の魔物の群れが生息しており、ボスがそれより遙かに強い事は公表されている。

その件に関して、国会で対応を問われた広瀬防衛大臣は、転移所

持者が最奥まで辿り着ければ、当面は政府協力者の山田太郎氏らに白化を依頼するが、いずれ自衛隊が独力で白化を行えるようにすると説明した。

また黒いダンジョンはどのように認識しているのかとの問いに対しては、上級ダンジョンよりも上のダンジョンであると認識しており、山田太郎氏らに調査を依頼しているところであると説明している。

次郎が一年をのほほんと暮らしている間も、正体不明の山田太郎氏は相変わらず大活躍であった。

なお山田太郎氏に支払う上級ダンジョンの白化、および最上級ダンジョンの調査費用は、一体いくらになるのかと労働党の議員に問われた大臣は、次のように回答して、しつこい追求者を黙らせた。

「いずれも無償で協力して貰っています。彼は、自分を殺そうとした連中には死んでも協力しない。と常々口にしていますが、元々善良な国民の一人であり、無辜の市民を守るために自ら進んで協力を申し出てくれました。未だ一〇代ですが、実に良い青年です。前政権では彼を含むダンジョンを知った子供達の口封じを企図しましたが、現政権は友好的な関係を構築しています」

労働党の議員は藪蛇を避けるべく、本来予定していた次の質問をせずに質疑を終えた。

質問者が協力関係にある小林党首の派閥員であれば、広瀬大臣も手加減しただろう。

広瀬の辛辣な反撃により、二〇四九年の参議院選挙で労働党に残っている旧主流派議員たちの敗北も確定的となった。

『午後六時になりました。ニュースをお伝えします』

二〇四八年七月四日、土曜日。

いつの間にか善人にされてしまった山田太郎と仲間達が、賃貸マンションのリビングでコーヒーとクッキーを前に雑談していると、スuits姿の男性アナウンサーがテレビの画面に現われて、夕方のニュースを伝え始めた。

トピックスは六時のニュースと掛けて六つ並んでいる。

- ・世界初の魔石自動車『マナ』、二〇四九年に限定発売決定
- ・液化赤魔石、ガス燃料の代替実用化
- ・二〇四七年度医療費、前年度の三分の二に減少
- ・魔法犯罪の厳罰化、再犯者の死刑も視野に
- ・ホフマン米大統領、日本に魔石輸出を要請
- ・国連高官、日本のダンジョン独占を非難

『最初のニュースです。日本自動車メーカー連合が共同開発した、魔石エネルギー車の限定発売が発表されました。魔石エネルギー車は、青魔石から取り出したエネルギーと酸素を化学反応させた電気エネルギーでモーターを回す自動車です。魔石燃料の航続距離は約一〇〇〇キロメートル。技術的には幾らでも連結可能で来年には限定車の発売が……』

最初のニュースは、水素自動車の燃料である圧縮水素の代わりに水魔石を用いた新たな自動車の実用化についてだった。

魔石自動車は、水素自動車と同じ技術を用いている。

そのため電気自動車と異なって充電が不要で、車体重量も水素自動車並みに軽く、圧縮水素よりも遙かに取扱いが安全だ。

その上、水素自動車を生産していた工場の製造ラインも殆ど変えなくて良いというメリットがある。

肝心のコストだが、車体価格は水素自動車と殆ど変わらない。

一方、燃料と航続距離だが、地下四階に生息する巨大イモリの魔石二個で、魔石車は最低一万キロ走れるらしい。なお二個というの

は、二つの魔石を物理的に接触させる事で水素を放出させられるからだ。

従来の燃料代が1km10円以上のため、魔石二個の価格が10万円以下ならば、電気自動車の低料金充電が実現する。

イモリの魔石が一個五万円以下というのは難しく思われるかも知れないが、レベル10を越える者であれば、地下四階に潜れば大量に獲得できるため、それを生業とする者が居ればさほど難しくはない。

往復で一週間ほど潜って、100個拾えば年収500万円。
むしろ10分の一で買い叩かれたとしても、毎月一回潜れば年収600万円。充分に高収入でやっていける。

この位儲かるのであれば、コンビニのアルバイトをしている若いフリーターは、続々と魔石ハンターに鞍替えするだろう。

冒険者が魔石を探りにダンジョンへ潜る姿が目に見えようである。

そして日本の自動車の燃料代も、従来の10分の一に近くなる。

「ついに魔石が売れる時代になってきたな。でも、あと六年早ければなあ」

次郎がダンジョンに潜り始めたのは、今から六年以上も前の二〇四二年五月である。

その頃に魔石の買い取りがあれば、次郎はボロい服を着て、お年玉を切り崩しながら暮らさずに済んだかも知れない。

「でも魔石を売っていたら、レベル100には成れなかったと思うよ」

「ぐぬう」

美也の突っ込みが入り、次郎は押し黙ってコーヒーを一口啜った。

自動車メーカーが絶賛買い取り中の青魔石は、技術的に何個でも連結させられるらしい。

そのため六個連結させて三万キロを走らせる事や、魔石とモーターを増やして大型トラックや電気飛行機に应用する事も出来る。

また、地下八階のオオサンショウウオの魔石を用いる事でエネルギー内包量が跳ね上がるため、工業用や軍事用としても大いに期待できる。

最早、技術革新の域だ。

日本にとっては、車の燃料を輸入しなくても良い点が最大のメリットだ。

さらにニューストピックスの二番目にある液化赤魔石も、液化石油ガスの代替エネルギーとなる事が判明している。

その他にも、土魔石が高度な建材に応用できる事や、緑魔石が手術室などで一般的な空気圧を高める効果を得られる事、白魔石が治癒効果をもたらす事、黒魔石が局所麻酔に使える事なども判明している。

すなわち、全ての魔石で様々な利用方法が考案されたのだ。

これからは貿易黒字も大幅に増えていくだろうし、なにより自国で燃料供給が出来るようになるので国際関係が有利になる。

麻倉経済産業大臣は、昨今では四六時中機嫌が良いらしい。

そのように世間では、頭の良い人達が様々に頑張っているようである。

対して利己主義者の次郎は、賃貸マンションのリビングでコーヒを一口飲んでから、美也と綾香に夏休みの目標を告げた。

「今年の夏の目標は、最上級ダンジョンの網羅と、可能なら攻略特典の獲得だな」

世間が頑張っている一年間、次郎も最上級ダンジョンの地下一〇階から二〇階までを踏破していた。

そこで直ぐに最奥へと挑まないのは、到達していないエリアが残っているからだ。

攻略前に三人の到達エリアを可能な限り増やし、同時に魔物を徹底的に焼き尽くして、なるべく高い攻略特典を得たい。

大学の講義もこれくらい真面目にやれと言われそうであるが、大学の講義は取得した単位について斯様な特典は貰えない。

美也は授業料減免の対象になっているが、それは成績優秀である事に加えて世帯収入が低いからであって、結局のところ次郎にご褒美はないのだ。

労働者が報酬の良い方に流れていくのは、自由経済の原理である。

「改めて確認するけど、最上級ダンジョンの攻略目的は何か？」

手作りクッキーを摘まむ次郎に対し、美也は目標に対する目的を再確認した。

クッキーをコーヒード流し込んだ次郎は、ホッと一息吐いてから三人の共通見解を敢えて口にする。

「一つは特典。もう一つは解明。今投げ出すと、一生謎が残ったままになる」

次郎が攻略を目指す理由は、その二つだ。

特典の獲得に関しては、明らかなメリットがある。

そしてダンジョンの攻略に関しては、完全魔素体となった自身や美也の状態を正確に把握しておきたいという思いがある。

次郎たちではなく政府の特攻隊が攻略した場合、民間人である次郎たちには全ての情報が降りてこない怖れもある。

「そうだね」

美也は頷き、次郎の主張を受け入れた。

「次郎くんの意志は分かったけど、綾香はそれで問題ないかな」

「問題ありません。完全魔素体に関して事前にお話し頂けなかった時の様に、また置き去りにされると困りますので」

「……………うい」

それまで無言でクッキーに手を伸ばしていた綾香が、明確な意思表明を行った。

綾香を一蓮托生とすべく作為的に話さなかった次郎には反論の余地もなく、三者はこのままの方針で進む事になった。

「それで、特典はどうするの」

コーヒーと同様に、若干冷めた声色で美也が問う。

次郎は美也の声色に気付かない振りをして、攻略特典について考えた。

堂下次郎 完全魔素体 転移S二 収納A 加算S

体力一三 魔力二七 攻撃一一 防御一一 敏捷二二

火六 風六 水六 土一五 光一〇 闇一二

地家美也 完全魔素体 転移S 収納S二 加算A

体力八 魔力二六 攻撃七 防御七 敏捷八

火一三 風一三 水四 土四 光一五 闇二二

井口綾香 完全魔素体 転移A二 収納S

体力八 魔力二六 攻撃七 防御七 敏捷八
火一三 風一三 水三 土三 光七 闇一〇

次郎が転移四回／日、収納は八・四畳分。

美也が転移二回／日、収納は三四畳分。

綾香が転移二回／日、収納は一七畳分。

この状態で、転移能力・収納能力・能力加算のうち何を取得するのか。

もしも中世ファンタジー世界に人間として飛ばされる事が事前に分かっているのであれば、収納能力を増やして植物の種子や電子計算機、太陽光発電器やOA機器、技術関係のデータを大量に入れたPCや書籍などを持っていくと有用だろう。

ガラス細工のペンダントなど、安価だが未開文明では高く売れそうな物も大量に持っていくと、現地通貨に換金する事で活動資金を一気に得られる。

大気成分や重力の異なる惑星、物理法則が異なる世界、近未来などであれば、持ち込んだ物の大半が無駄になるかもしれないが、先方で収納能力を活かす事は出来るはずだ。

あるいは、能力加算の追加も有用に思えてくる。

如何なる世界の、如何なる立場であろうとも、能力や魔力が高ければ相応に活用できる。苦手部分を補えば万能になるし、敢えて得意分野を伸ばしても良い。

「俺は能力加算だな」

「どうして能力加算なの」

「魔力を動力に機械とか船を動かす世界だと、魔力が高い方が有利だろ。宇宙に占める質量とエネルギーのうち、現在の人類が把握できている物は五％程度しか無い。すると魔法の素になっている物も残り九五％のどれかだろう。扱えた方が有利だろうと思って」

「暗黒物質とダークエネルギーだっけ」

「何ですか、その変な名前は」

共通理解を前提に話を流そうとする次郎と美也を、綾香が制止した。

ダン研はある種のオタクであるため、所属者は文系であろうとも、おかしな知識を得ていく。次郎は細かい数値を省き、大雑把な説明を行った。

「宇宙は膨張しているって、聞いた事あるか」

「はい。それは聞いた事があります」

「その宇宙を膨張させているエネルギーがダークエネルギーで、宇宙全体の質量とエネルギー七〇%くらいを占めている」

「凄く多いですね」

「まあ、宇宙を膨張させるくらいだからな。それと渦巻き銀河の動き等を説明するために圧倒的に足りない質量を説明する物質が、光学的には観測できない仮称・暗黒物質で、宇宙全体の二五%くらいになる。つまり俺達が知っている原子とかは、宇宙全体の五%くらいしか無いわけだ」

「……人類が理解できる物質は、少ないですね」

「まあな。その観測できないエネルギーとかが魔法の素になっているんじゃないかと、俺達ダン研は考えている。巨大構造物とかも、未だによく分かってないだろ」

「意外に真面目なサークルなのですね」

「まあ、一応な」

大学のサークル名がオカシイのは、単なる仕様である。

一通り説明した次郎は、話を戻す事にした。

「異世界文明に飛ばされても良いように魔力とか諸々を上げておこ

うと思って」

「そっか、それならわたしも参考にするね」

「私も能力加算の予定ですが、内訳の参考にさせていただきます」

67話 黒の中

世界に現れた地獄の極地たる最上級ダンジョンは、あらゆるものが真っ黒だ。

壁や床など、目に付く全てが火山灰由来の黒ボク土に近い黒色に染まっている。

ベトリと、肌にベタ付きそうな穢れた黒いダンジョン。そして内部に湧き出るスライムや魔物も、環境に由来するのか、やはり黒々としている。

上級ダンジョンに生息するケルベロスは、大地を疾走するティラノサウルスを彷彿とさせた。一方で、黒々とした最上級ダンジョンを走る黒いケルベロスは、闇夜に溶け込む影のようだった。

「不可解だったのは、魔物の行動原理と自動回復だったな」

最上級ダンジョンを概ね網羅した次郎は、そのように総括した。

まずは、魔物たちの行動原理について。

従来のダンジョンであれば、魔物達は肉食獣のような行動原理で動いていた。

全身を用いて様々な攻撃を繰り出し、仲間と連携して得物を追いかける知恵を使い、負傷すれば多少は怯む。それらは地球の動物と何ら変わらず、違和感は一切覚えなかった。

だが最上級ダンジョンの魔物達は、攻撃魔法を回避せず、得物しか見えていないかのように同族の死骸を押し出しながら、次郎たちに向かって直進してきた。

そのため攻撃魔法は有効で、まるで直進する蟻の行列に真上から沸騰したお湯を掛けるかのように、極めて単純に蹴散らす事が出来

た。

但し魔物達の不可解さについては、極めて不可解である。

次に、魔物たちの自動回復について。

最上級ダンジョンの魔物達は、どのような傷が付いても、軽い回復魔法が常時かかっているかのように回復してしまった。しかも四肢を斬り落としても、時間さえかければ魔石のある身体側から欠損部位が生えてくる。

何度が重傷を負わせたと思って油断したところで不意を突かれ、以前との感覚の違いに苦しめられた。

それでも十分な時間を掛けた結果、次郎たち三人は最上級ダンジョンを概ね網羅したとの確信を持てた。

「わたしたちの攻略方法は、あんまり変わらなかったけどね」

魔物の不可解さを訝しがる次郎と異なり、美也は事態を単純に捉えた。

すなわち魔物たちが突然逆立ちをしようと、あるいは突然人間と会話を始めようと、全て背後で操っている存在の意思が介在すると解したわけである。

そのように一切合切を割り切った美也は、ダンジョン攻略から今後の対策へと思考を移行させた。

当面の対応策は、攻略の総合評価をSにして特典を得ておく事と、先方へ敵対せずに交渉の余地を残す事。

そんな美也の判断に基づき、次郎たちは魔物の行動を問わず、上級ダンジョンと同様に攻略した。

すなわち全階層を夏休みの間に転移で何往復もして、第二次大戦中の空襲や、沿岸都市に対する艦砲射撃を彷彿とさせるような絨毯爆撃を繰り返したわけである。

「確かに、魔物を倒す手順は変わらなかったな」

「上級ダンジョンに比べると、随分と過激でしたよ」

「そうかな」

「はい。あたかも第二次世界大戦の空襲を彷彿とさせるような攻撃でした」

「どうやって戦中を彷彿と出来るんだよ」

「中学生の時に見た戦後一〇〇年という番組で、空襲の記録映像を見ました。後はイメージです」

「空襲とダンジョンでの蹂躪、どっちが地獄絵図なのか判断に迷うな」

第二次世界大戦の終戦から一世紀以上が経った、二〇四八年九月二〇日現在。

真の意味で彷彿とするような人は殆ど残っていないが、当時の記録映像はしっかりと残されている。

ダンジョン内では、その空襲と遜色ないほどの激烈な攻撃が行われた。

即ち、攻撃範囲内の全てを炎で焼き尽くし、ハリケーンで吹き飛ばす攻撃だ。

総合評価上げのために、上級ダンジョンよりも遥かに念入りに行った破壊活動は、森を破壊し尽くし、遠方まで見渡せる黒焦げた大地を生み出した。

光魔法に照らし出されたダンジョン内の世界は、まるで溶岩流が全てを飲み干した後、降り注いだ黒色の煤で山肌を覆われたかのような、生き物の存在しない悲壮な世界を生み出していた。

「空襲の方は生存者が居るけど、マシとは言えないよね」

「というか今更だけど、空襲とか沿岸部の都市を押そう艦砲射撃とか、果ては核攻撃にも匹敵する攻撃魔法を使えるレベル一〇〇のパイティってヤバイよな」

綾香からの情報では、特攻隊の一部にはレベル九〇台に届いた者がいるそうである。

次郎が大学に入学した頃の五〇台から僅か一年半で良く上げたものだと感心させられるが、思い起こせば次郎と美也も同じペースで上げていた。

もっとも次郎たちレベル上げは、後続の事を一切考えず、資源を一切残さないダンジョンの焼け野原戦法であつた。

その件に関して三人は、今に至つてもやり過ぎたとは思っていない。

森を焼く戦法が先着順であるなら、当該ダンジョンを出現させ、先方に完全魔素体としてデータを取られる事になつた自分たちが使うのが順当だとすら感じている。

そんな開き直り集団のレベル上げのペースに匹敵する以上、特攻隊の一部は自衛隊にでも入つて、学校生活などを犠牲にした専任状態になっているのかもしれない。

最上級ダンジョンの最奥まで来るのは当分先だろうが、能力的には既に次郎たちと殆ど遜色ない所まで迫ってきている。

「祖父達は、高レベル者の魔法の力を小さく見せる事で、なるべく時間を稼いでいます。来年の参議院選挙と衆議院選挙で勝つて、あと五年ほど井口政権を保てば、日本はエネルギー輸入国から、魔石エネルギーの輸出国に変わるそうです」

「ほお」

「それで今日は、予定通りに攻略するという事で、よろしいでしょうか」

先程来、最奥への入り口前で黒ケルベロスを吹き飛ばし続けている綾香が、半身を振り向かせながら確認した。

綾香は井口総理や広瀬大臣との繋ぎ役を担っており、最上級ダンジョンが攻略間近である事を先方に伝達している。

両者からは、攻略を事前に通達すべしという束縛は受けていない。だが攻略の結果次第では、首相官邸に居る井口総理や、日曜討論でテレビ局に寄る広瀬大臣などに緊急で連絡する必要がある。

次郎は鷹揚に頷いて攻略決定を肯定すると、美也に最終確認の視線を投げた。

するとケルベロスに魔法の炎の嵐を浴びせていた美也も、手を休めないままに頷き返した。

「今日で良いよ。結構長かったね」

「そうだな」

美也が感慨深げに呟くと、次郎も軽く共感の意を示した。

二人は、ダンジョンに潜って六年以上になる。その活動には、将来を左右するテインエイジャーの殆どを投じてきた。

これだけの期間を勉強や資格取得に費やせば、ほぼ確実に望む進路へ進めただろう。

次郎としては、美也を巻き込んだ投資の回収について、それなりに気にしている。美也一人ならば責任の取り様はあるが、どうせならば収支は黒の方が良い。

現段階での採算は、次郎が日本人の平均的な生涯年収を何倍も上回って稼げており、美也も学費を稼いで希望した医学部に進学できている。

従って採算は、大きな黒字であろう。

しかしダンジョンを生み出した存在が口にした、次郎と美也をコピーして彼方で用いるという部分についての収支は不明瞭だ。

そちらの収支もプラスにする方法が、高い攻略特典を得る事であり、ダンジョン製作者側と建設的な関係を築く事だと美也は考えて

いる。

「最後の特典だけど、俺は能力加算にしようと思う。コピーされて彼方とかで使われるかもしれないし」

「それは良い考えだと思うよ。それで次郎くんは、何を上げるの？」
「最初は身体能力を高くしようかと思ったけど、全属性を底上げる事にした」

次郎は、十分な転移能力と収納能力を持つ一方で、土属性を除いた魔法が不得手だ。

特典による加算で万遍無く上げておけば、汎用性の高い万能型となる。

最上級ダンジョンの攻略後も魔物対策や、自衛を目的とした対人戦闘、彼方での活動などで幅広い用途が期待できるだろう。

次郎の表明に対して、美也は大いに賛同の意を示した。

「そうなんだ。それなら、わたしも身体能力を上げようかな」
「ほほう」

美也は十分な転移能力と収納能力を持ち、加算も得ているために次郎以上にバランスが良い。その状況で敢えて能力加算を選択したのは、次郎に行動を合わせる為だった。

身体能力を上げておけば、次郎の行動に合わせられる。

元々、初級ダンジョン攻略時に美也が能力加算を選択したのも、それが理由だった。

美也の選択理由を阿吽の呼吸で察した次郎は、敢えて理由を問わなかった。

代わりに綾香に対し、同じ質問を投げかける。

「綾香はどうするんだ？」

「転移の予定でしたが、能力加算に変更します。理由の説明は必要でしょうか？」

綾香の転移能力は一日二回で、次郎や美也の半分しかない。

それでいて祖父が内閣総理大臣、私事での転移能力はどれだけ回数があっても足りないほどだ。

それでいて転移ではなく能力加算を選んだのは、自分を優先したからだろうと次郎は察した。

何しろ政略結婚を嫌がり、次郎を籠絡した前歴を持っている。

「俺たちと同じ理由なら、聞かなくても大丈夫だ。これからも宜しくと言う事で」

「はい。地球よりも厳密な一夫多妻制の世界でも、よろしく願います」

平然と宣う綾香と、急激に冷たくなった美也の瞳が、次郎に突き刺さった。

「……………白旗大降伏」

たった一言で追いつめられた次郎は、敢え無く白旗を揚げた。

そして不意に、一夫四妻を実現しているイスラム教の人を尊敬した。

一夫多妻制度を実現している人々は、一体どのように妻たちを納得させてハーレムを維持しているのか。そして妻同士は争わないのか。

何しろ、箱庭世界で共に育った幼馴染ですら、この有様なのだ。どれだけレベルを得ようと、人としての凄さで一夫多妻制の人々には到底敵わない。

次郎は敗北を知った。

そして今後、尊敬する人を問われた際には、イスラムの人と答えようと決意する。

次郎はそんな決意を内心に秘めつつ、最上級ダンジョンの最奥と
思わしき空間の入り口前に立ち、美也と綾香を順に手招きした。

二人は前方に魔法を飛ばしながらジリジリと後退し、次郎の傍ま
で寄ってきた。

次郎は二人の腰に両手を回して引き寄せると、抱き抱えて跳躍し
ながら、三人揃って最奥へと飛び込んだ。

刹那、通路と最奥を繋いでいた空間に黒い壁が出現し、最奥を隔
離する。

殆ど音を立てずに着地した次郎は、素早く二人を解放した。

途端に美也が方々へ光魔法の光源を飛ばし、綾香がその隙間を埋
めるように火魔法の補助光を飛ばす。

そんな二人が照らし出した最奥の空間内に浮かび上がったのは、
墨で染め上げたような黒い土壌だった。

真っ黒な土が、光源の届く限り地平線の果てまで続いている。

「相変わらず、非常識な空間だな」

次郎は呆れたように肩を竦めたが、ダンジョンの最奥に踏み入っ
た者であれば、大抵は同様の感想を抱くだろう。

各ダンジョンの最奥の構造は、いずれも道中の通路や広いだけの
空間とは一線を画している。

チュートリアルは黒い草原、初級は黒床の闘技場、中級は黒い森、
上級は黒い丘と平原。いずれも人類の常識から見て、非常識という
言葉に当てはまる。

そして最上級ダンジョンの最奥も、黒い土壌と、雲の高さまで伸
びる黒い壁に仕切られた、殆ど何も無い黒い空間だった。

海底一万メートルの深海から生物を取り除けば、このような光景になるだろうか。

常識を置き去りにした光景に次郎が見入っていると、美也が警告を発した。

「次郎くん、壁が変」

美也が指さしたのは、通路があつた位置から一〇〇メートルほど上方の壁だった。

光魔法に照らし出された壁に、壁とは色が異なる無数の人影が映っている。

人影は次郎達から見て左側へ走っており、その背後から黒い津波が迫ってきて、次々と人影を飲み込んだ。

津波は美也の指差した場所で固定されており、人影たちは必死に逃げながらも続々と引きずり込まれ、津波と同化して消えていく。声も無く見入る次郎たちの眼前で、黒い津波は沢山の人影を飲み込み続けた。

やがて津波の勢いが弱まった頃、美也と綾香の光源が急激に弱まり、空間全体が暗闇に覆われ始めた。

「美也、綾香、俺と手を繋げ」

強力な光源を出し直す代わりに手を繋いだ三人の姿が、急速に暗闇の中へと沈んでいった。

68話 プロローグ

(……また消えた)

数多の泡白い光が、彼方にて深淵へと吸い込まれていた。

それらは、動けない少女の背後から現れては彼女を追い越し、やがて小さくなって消えていく。そんな幻想的な光景は、ブラックホールに吸い込まれる星々すらも連想させた。

だが幾千、幾万もの光を見送った彼女は、次第にそれらを掃除機に吸い込まれるゴミのように感じ始めた。

光の大きさが自身と同等であった事や、身動きの取れない苛立ちなどが、そのように思わせたのだろう。

やがて、光が人の魂であると気付いた頃、彼女の心は既に擦り切れていた。

人の主観で有害な星もあるだろう。ゴミの中にも役立つものはあるかも知れない。

そんな取り留めの無い妄想をするくらい長時間、彼女は宇宙の大掃除を傍観させられた。

彼女が知覚した光の数は、およそ数万から十数万。

輝いていた全ての光が飲み込まれ、最後の光が暗闇に灯る。

「ようやくあたしの番？」

辟易していた彼女は、ようやく終われる事に安堵した。

一方的に深淵へと吸い込まれるのは理不尽で、せめて事前説明と同意は取って欲しい。だからといって、このまま放置されても困る。

何しろ彼女は、既に死んでいるのだ。

いつか必ず来ると警告され続けてきた、南海トラフ巨大地震。

その「いつか」は、二〇三九年一月四日に訪れた。

もつとも時期が数年単位で異なっていたとしても、自らの居住地を定められない中学三年生の彼女が至った結末は変わらなかっただろう。

彼女は諦観と共に、小さな一欠片の輝きとなった自らの身体を眺めながら、引き寄せる流れに身を委ねた。

しかし虚空に引き込まれる直前、彼女は強制的に停滞させられた。ふと見上げれば前方に黒衣の青年が浮いており、それが潮流の流れを塞ぎ止める障害物になっていた。

虚空に現れた青年は若過ぎず、年寄り過ぎず、一見すると二十代くらいに見えた。

肌は日本人と白人のハーフか、あるいはクォーターくらいの白さだ。髪は濃いグレーで、瞳は紫がかっており、少なくとも純血の人間ではない。

服装は黒衣の神父服で、背中にはマントのようなものが付いている。差し当たって彼女は一四年間の人生で、そのような神父服を纏う宗教を見た事は無い。

よって彼女の視点では、彼は夜道で出会った不審者並の怪しい人物に値する。

もしも平時であれば、道の端に大きく寄って早歩きで立ち去るか、回れ右して反対方向に走り出すだろう。もちろん防犯ブザーは、いつでも鳴らせる状態にしておく。

しかし残念ながら、現在は魂のような状態で防犯ブザーを所持できていない。

加えてブラックホールのような深淵に引き摺られている最中であり、地球から助けが入る可能性は皆無だろう。

「あなた、誰？」

避けがたいと理解した彼女は、自ら声を掛ける事で機制を制した。だが青年は微塵も怯まず、それどころか全く予想し得ない回答を返した。

「魂を収集中の観測者。とても名乗るべきか」

「……………はあ？」

彼女は一瞬思考停止に陥り、再起動して反射的に話の続きを促した。

「遙か未来、個々の存在が個別の宇宙を創り出すに至った先進文明に属する観測者。この宇宙を創り出した別宇宙人。あるいは大災害で失われた魂を収集している死神。好きに捉えれば良い」

「宇宙を創った神様ですか？」

彼女の普段の常識からすれば、青年の放言は全く有り得ない馬鹿げた戯言だ。

しかし彼女の持つ常識では、彼女が宇宙空間に居る時点で全てが有り得ない。

このように知識と目の前の事実が異なる時、彼女は自身の知識不足が原因で理解できないのだと考える。

そのため彼女は、常識に基づく否定を取り下げ、彼の主張を再検討しようとした。

だが男は、その思考を遮った。

「見た方が早いだろう」

男が口を閉じた瞬間、彼女の視界に半透明の立体映像のようなものが流れ始めた。

それは当初、目に見えないほど小さな細胞のような存在だった。それらは大気と水を持つ惑星上に満ちるエネルギーと物質を取り込んで分裂し、分裂した個体がまた周囲のものを取り込んで分裂を繰り返すという生態を永遠と続ける。

永い年月を繰り返した細胞は、やがて形状を変化させ、巨大化し、分化していった。

分化した生命体は、栄枯盛衰の歴史を繰り返す。

惑星上ゆえに避けがたい他の天体との衝突や、大気成分の変化と言った幾度かの壊滅的な環境破壊を生き延びた複数の生命体は、長い生存競争を経て、やがて一つの生命体を勝者とした。

それは甲殻と触手を持ち、強固な群れを作る、黒い昆虫のような生命体だった。

甲殻昆虫たちは惑星上で大繁栄の時を迎え、知的生命体を名乗れるまで知性を高め、やがて空間や資源を求めて惑星外へと進出した。

「……………これが貴方たちの祖先ですか？」
「如何にも」

そこから更に永い時が過ぎていく。

恒星系、銀河系、超銀河団、超空洞。

先住生命体を侵略し尽くして一部を取り込んだ甲殻昆虫達は、生態を環境に適応させながら宇宙の端々まで触手を広げ続けた。

そして長大な年月の間に技術躍進が起り、彼らの宇宙の下に下位宇宙が生み出される。

寿命という概念を無くして久しい甲殻昆虫たちは、標準宇宙の下に下位宇宙を生み出し、そのさらに下へ下へと下位宇宙群を広げた。

彼らの目的は、甲殻昆虫の群れの維持と、標準宇宙のエネルギー確保。そのために下位宇宙群を生成して、生成地からの搾取を行う生態を取り始めた。

下位宇宙群は上位宇宙に内包される為、上位宇宙が滅びれば下位宇宙群も滅びる。

だが下位宇宙は、理論的には無限に生み出せる存在であり、より下位であるほど創り易く、影響が小さいために無理が効いた。

彼らは生成した下位宇宙を分裂させ、分裂させた二つの宇宙をそれぞれ膨張させる手法で下次元に多元的宇宙空間を生み出し始めた。

宇宙は、甲殻昆虫が発生した標準宇宙群が起点〇とされた。

そして一つ下位の宇宙を位階一と呼称し、その下に連なる宇宙を位階二、位階三、位階四と定めていった。位階が高いほどに標準宇宙や下位宇宙への影響が大きくなる事から、格に応じた管理権限者が定められた。

位階一から三は、最上位宇宙群。

位階四から六は、上位宇宙群。

位階七から九は、中位宇宙群。

位階一〇から一二は、下位宇宙群。

位階一三から一五は、最下級宇宙群。

そこで映像は途端に減速し、一つの甲殻昆虫へと焦点を当てた。

彼は甲殻昆虫たちを統治する群れの一つに、長一族として誕生した。

順調に成長した彼は、やがて子供へおもちゃを与えるにも等しい気軽さで、位階一五の最下位宇宙を一つ与えられた。

彼は期待通りに位階一五の最下位宇宙を管理して、当該宇宙を分裂させる。

そこで集めたエネルギーと引き換えに、次は位階一四の宇宙を管

理する権限を与えられた。

以降も収集、分裂、生成の各種工程を繰り返し、やがて下位宇宙群、中位宇宙群の位階管理者へと権限を引き上げていく。

そして、位階六の上位宇宙を基礎とする樹形宇宙群の管理者となった。

彼女が見ていた映像は、そこで途切れた。

おそらく、現在進行形なのだろう。

彼女は青年を地球が存在する宇宙を生成した創世神だと仮定した上で、相手が偉すぎて敬称や敬語は諦めつつも、質問を投げかけた。

「それで宇宙創世の神様は、どうして魂なんて集めているんですか」

「複製して調整し、管理している別の観測点へ送り込むためだ」

「別の観測点ですか」

「そうだ。お前達と同系統種の内、特に魔素を効率的に扱う者たちを観測している。それが滅びそうなので、補充に用いる」

「どうしてそんな事をするんですか」

「種族繁栄の為だ」

青年の話によれば、甲殻昆虫を主とした生命体群は、エネルギーの生成と消費のバランスが保たれる範囲内で群れを維持している。そのため群れを繁栄させるためには、エネルギー生成を増やすか、消費を抑制する必要がある。

彼は、エネルギーを生成する役目を担いながら、消費を抑制する方法についても考えてきた。

そして自らが管理する宇宙群にエネルギー循環効率が高い生命体を見出して、観測体の特性を自種族に取り入れられないかと考えた。だが観測体は、高濃度の瘴気に起因する強大な魔物によって滅びつつある。

上位階からの干渉で問題を解決した場合、起点〇の自種族では再

現できないため、リスクが残って観測体の特性を取り入れる事が出来ない。

そのため彼は、下位階からの干渉で問題の解決を図れないかと試みた。

具体的には、下位階から観測近似体の魂を集めて調整を施し、観測点に送り込む事だ。

観測近似体には複数の候補が有り、何回目かの作業として地球人の魂に強化と調整を施して送り込む事にした。

また今回は、さらに二つの追加対策も行う。

一つ目は、繋いだ彼方の観測点から、此方の地球側へ瘴気のみを逆流させて、彼方の瘴気を減らす事だ。これによって環境改善を図る。

二つ目は、瘴気を流された此方の観測近似体も観測して、観測近似体が瘴気に上手く対処すれば、彼方の観測体にもフィードバックする。

青年にとっては、地球人の魂を用いて観測体を補強し、地球に瘴気を逆流させて観測点の瘴気を減らし、観測近似体である地球人の実験も行うという一石三鳥の計画となる。

「つまりあたしたちは、彼方に対して毎年接種させているインフルエンザのワクチンみたいなものですか？」

彼女は理解の及ばない範囲の大半を切り捨て、自分への扱いと行く末を問うた。

「他の魂は然り。然れど、此处に例外が生まれた」

「例外？」

「未だ死に至らぬ魂を収集した」

「それって、あたしは死んでいなかった。っていう事ですか？」
「然り」

それまで宇宙や神だと聞かされて全てが他人事に思っていた彼女から、急速に怒りという感情が湧き出してきた。

青年にとっては他人事でも、彼女にとっては自分の生死そのものなのだ。

「ちょっと酷くないですか？」

「一度は死した。そして収集の間に蘇生し、生きたまま過剰に調整された」

一度は死んだと聞かされた彼女は、流石に鼻白んだ。

それでも自然に蘇生したのなら、自称死神が生き返った魂を刈り取るのは理不尽だと思い直し、若干語気を弱めつつも文句を言い募る。

「それって結局、生きているあたしを予定外に改造したって事ですよね？」

「然り。異常体の汝を彼方へと送り込めば、彼方の観測価値が損なわれる。だが此方に戻しても、同様に此方の観測価値が損なわれる。因って汝は、何れに送るも能わず。故に汝には、異なる道を能う」

「異なる道って何ですか」

「一つ、存在を抹消する。一つ、地球に流す瘴気の調整者と為る。選択せよ」

「はあっ!？」

彼本意の提案は、彼女にとっては理不尽極まりなかった。

第一案に関しては、全く話にならない。

第二案に関しては、何が何だか分からない。

だが彼女の住む宇宙そのものを創り出した青年は、自らが生み出した宇宙をエネルギー生産と観測対象としてしか見ていない。

そのため善意や好意には、全く期待できそうになかった。

彼女は選択の前に、第二案について説明を求めた。

「調整者について教えて下さい」

「彼方の瘴気を減らす為、此方へ瘴気を流す。汝は流入する瘴気を調整し、此方に負荷を掛け、観測価値を高めさせよ。然らば汝には記憶の保持と共に、此方の調整者として適度な調整力を与える」

彼の一方的な提案は、彼女にとっては選択の余地が無いものだった。

「調整者になります」

かくして彼女は、神の代理人として此方の調整者となった。

そんな彼女の決意と宣誓に、青年は頷きすら返さずに通達する。

「然らば汝は、我管理下の位階――下位宇宙群の一つである此方における調整者と為る。以降の全ては、此の補助者に問え」

言葉を切った彼の足元に一匹の白猫が現われた。

猫は興味深げに彼女を眺めると、宇宙空間を軽い足取りで歩み、

彼女の元にやってくる。白猫が一歩進むごとに周囲の闇が深くなり、視界に映っていた全てが見えなくなっていった。

69話 ケルン

暗闇に閉ざされていた最奥に、魔法の灯りが戻った。

そうして再び照らし出された空間に、いつの間にか一匹の猫が、静かに佇んでいるのが見えた。

短毛の黒猫で、大きさは普通。

だがこんな極限地帯に、普通の猫が居る訳がない。

次郎はすかさず前に出て盾になると同時に、その動作によって後ろの二人に警告を発した。そして正面の猫からいつ襲い掛かれても良い様に、最大限の警戒を続ける。

「さっきの映像の猫と、同じかも」

次郎の後ろから注意深く観察した美也が、推論を口にした。

先程まで映し出されていた映像の白猫と、姿形は一緒である。但し、毛並みの八割が黒く染まっており、口元と四肢の一部だけが白いという真逆さであった。

まるでダンジョンの白化と黒化を表わしているかの不吉さで、三人は一層警戒を強める。険しい視線を一身に集中させられた黒猫は、黄土色瞳を細めると、鳴き声の代わりに人語を発し始めた。

「こうして橋場成美という中学二年生の少女は、この樹形宇宙群の創造者にして管理者に親補されて、位階――下位宇宙群の一つである此方の調整者に成ったニヤ」

人語を話す猫は、その全てが次郎の常識から隔絶していた。

例えば先程の映像を投影できるだけでも、次郎の知り得る科学の水準を遙かに上回っている。猫がその気になれば、認識できない間

に超科学で次郎たちを消し去る事すら容易いのではないだろうか。
もつとも猫が次郎を殺す理由は無い。

何故なら、この宇宙群を作り出した甲殻昆虫の目的は、瘴気を流して観測近似体に負荷を掛け、その対処方法を見るというものだからだ。

次郎は後ろの二人を庇うように前に出ながら、相手が自分に意識を集中するように率先して声を掛けた。

「その人は、焼きそばを二個買っていたお姉さんの事で間違いないか」

「そうニヤ。なるみんニヤ」

「するとアンタが、お姉さんが言っていたケルンで合っているか」
「その通りニヤ」

白黒猫は躊躇う事無く、アッサリと肯定した。

猫の肯定を受けた次郎は、二年前の学園祭の日に、焼きそばを買いに来た女性が話していた言葉を思い浮かべた。

『もうデータ化したのに、どうして攻略させたいんですか。黒ダン……最上級ダンジョンなんて、レベル一〇〇からしか入れないですよね』

『本来の目的は、データ化じゃ無いからだよ。でも質問の時間はおしまい。最上級ダンジョンの最奥まで来てくれたら、ケルンが伝えられるかな。その頃には、時期だと思っし。でも来るなら、なるべく早く来てね』

次いで創造者の目的を思い浮かべる。

彼は、『地球人の魂を素材として用いて観測体側を補強』、『地球に瘴気を移して観測点の瘴気を減らす』、『観測体と同系統種の観測近似体である地球人の対処方法を見る』という一石三鳥の行動

を取った。

そのうち二つは既に達成されており、残る一つが現在進行中だ。観測近似体である地球人に負荷を掛けて、上手い対策を採れば本来の観測体にもフィードバックする。

但しそれは『物のついで』であり、実験に失敗して地球人が滅びるとしても、特に対策を施すような様子は無かった。

こうして調整者にされた和歌山県民の少女は、自らに与えられた『適度な調整力』の範囲内で対策を行った。

まずは魔素を効率的に扱う能力の付与を日本人に偏らせ、日本人が滅亡を回避しやすいように取り計らった。

そんなチュートリアルダンジョンを大場政権が隠したため、初級ダンジョンは全都道府県の利用者最多駅前に出現させた。その初級ダンジョンも封鎖されたため、レベルアップをアピールして攻略も促すべく、魔物を氾濫させた。

そして最上級ダンジョンに瘴気を押し込めて、次郎のような完全魔素体に瘴気を払わせることで、人類滅亡規模の被害をもたらさないようにしようとした。

また日本人の完全魔素体を登録して、滅亡時の保険とした。

少女が精一杯の抵抗をした結果、完全魔素体の登録にだけ成功して、溜まり続けた瘴気は結局放出しなくてはならなくなった。

「最悪の一手前という認識で合っているかな」

「認識に齟齬があるニヤね」

「どんな齟齬だ」

「登録体の対処行動で、資源の偏重で作為的に適応させた個体を用いれば、最終的により繁栄できる結果が示されたニヤ。あとは近似体が各地で抗って、群れ単位での適応パターンも見せてくれれば良いニヤ。此方の観測結果は、期待値以上だったニヤ」

「確かにお互いに、認識の齟齬があるな」

両者の利害は真逆であり、立場の違いから歩み寄りは不可能そうだった。

どう反応して良いか分からない次郎に構わず、ケルンは話を続ける。

「調整者は、機会を与えたニャ。最上級ダンジョンに瘴気を押し込めて、此処で瘴気を払えば済むようにしたのに、日本政府は態々資源を偏重させて生み出したチュートリアルダンジョンを封鎖したニャ」

「チュートリアルダンジョンは、やっぱり育成目的だったのか」

「そうニャ。初級ダンジョンは駅前に作ったニャに、それも封鎖したからなるみんなの瘴気非拡散計画は破綻したニャ。もう予定通り、瘴気消費体を発生させるしか無いニャ」

「瘴気は何となく分かるけど、瘴気消費体って何だ」

次郎は、焼きそばを買いに来た少女が口に使っていた言葉を思い出していた。

少女は完全魔素体のメリットとして、瘴気消費体に変質しない事を挙げた。

ダンジョンなどの率直なネーミングセンスを顧みるに、瘴気消費体とは、瘴気を消費する体を持つ者である可能性が高い。

そして先程、ケルンは最上級ダンジョンに瘴気を押し込めたと言った。

これらの前提を踏まえれば、瘴気を浴びた魔物達が瘴気消費体に変質しているであろう事が充分に予想される。

黒ダンジョンの魔物達は全身が黒くて、思考力は極小あるいは皆無で、盲目的に突進する、力の強い連中だ。

従って瘴気消費体とは、そのように変質した存在なのではないだろうか。

「そうニヤね。例えるならゾンビかニヤ」

「『ゾンビ!?!』」

「より正確には、活動する毎に瘴気を消費する個体ニヤ。一杯増やして、地球に流れ込む瘴気を減らさせるニヤ。人類の九割九分くらいゾンビになったら、流入量と消費量を釣り合わせられるニヤ」

あまりに恐ろしい回答に、三人は愕然とした。

二〇四八年現在で、人類は約一〇〇億人。

九割九分がゾンビになれば、世界人口は一億人ほどしか残らない。全ての国の人間が平均的にゾンビ化した場合、人口一億人未満の日本で生き残るのは、約一〇〇万人だ。一〇〇万人は、東京都以外の全国民が死に絶え、東京都の人間も一〇人中八人が死ぬ絶望的な生存率だ。

「本当にゾンビを出す気なのか」

「最優先は、位階一〇・下位宇宙群の一つにある彼方の観測体ニヤ。此方は、別に壊れても構わないニヤ。九割九分九厘でも良いニヤけど、なるみんなが調整者として九厘は削ったニヤ」

次郎とケルンの問答を聞いていた美也は、そこで出ていた消費量という単語に危機感を抱いた。

「それって、わたしたちが瘴気消費体を倒したら、瘴気を消費する存在が減って世界に瘴気が増えるっていう事なのかな」

「最上級ダンジョンは、元の数まで戻るから瘴気消費量は変わらニヤいし、コピー体を増やす時に瘴気を詰め込んで消費するから瘴気は減るニヤ。でも三人だけだと手が足りないから減らすのは無理ニヤ」

「ヤね」

美也は解決策を考えたが、咄嗟には出てこなかった。

応急処置としては、各地の上級ダンジョンを攻略して最上級ダンジョンを増やし、瘴気消費体を詰め込んで消費量を増やす案が思い付いた。

しかし魔物の氾濫を考えれば、最上級ダンジョンがある県からは全ての人間を疎開させて、廃県にしなければならぬという問題が生じる。

それで全世界で一億人の生存者が一億二千万人くらいに増えたとしても、根本的には焼け石に水のままだ。

「最初はアフリカ大陸から始めて、陸路でユーラシア大陸全域。海路と空路は、船と飛行機が行き来する果てまで、消費量が見合うまで感染を広げる予定ニヤ」

「対策が採れるだけ、バイオハザードの方が遙かにマシですね」

総理の孫娘である綾香は、顔面蒼白になりながら辛うじて呟いた。世界中がどんなに対策を取っても防げない点で、ゾンビよりも遙かに悪い事態である。

そして最悪の事態が発生するのは、おそらく井口豊が総理在任中の間だ。どのような対策を採っても感染を防げない上に、責任者として国中から総批判される事は疑いようがない。

井口の性を持つ綾香の立場から見ても、本当に最低で最悪の未来だった。

「そんな事をしたら、確実に文明が崩壊するぞ」

仮に日本だけが上手く残っても、各国からのあらゆる輸入品が途絶えるため、文明レベルは鎖国していた江戸時代まで戻らざるを得

なくなる。

「そうなれば、少しは観測体の参考になるかもしれないニャね。観測近似体として足掻いて見せて欲しいニャ」

次郎は内心で鋭く舌打ちした。

数多の宇宙創造者にして管理者である死神のオーダーは、観測近似体である地球人による瘴気消費体の効果的な撃破と生存への足掻きだ。

そんな要望に対して調整者である少女は、完全魔素体を増やして最上級ダンジョンで解決させる事を画策した。

だがそれは、少女の浅知恵だった。

日本の旧政府である労働党が欲に塗れてダンジョンを隠蔽して独占した結果、少女の計画は一向に進まず、瘴気が溜まり続けて決壊の日を迎えつつあるのだ。

「タイムリミットはいつだ」

「最上級ダンジョンの攻略特典を獲得する間くらいは待つニャよ。でも、この辺の掃除くらいはして欲しいニャ」

「手伝うって、最上級ダンジョンの魔物退治でもすれば良いのか」

「最奥に来たからには、予定通りボス退治ニャ。そのついでに、この辺りに溜まっている瘴気処理も、少しお願いするニャ。ゾンビ二万三万ほどニャ」

啞然とする次郎たちの前で一頻り笑ったケルンは、スッと瞳と口を細めた。

直後、黒猫は透明度を増しながら巨大化を始めた。

次郎たちが驚いて見守る中、半透明な巨大黒猫は目を三日月に細め、大きな口の口角を吊り上げ、耳を立てながらゆっくりと浮かび上がり、やがて壁の上部にへばり付いた。

「…………マジで地球生物じゃないな」

「ケルンは、この宇宙外の存在ニヤ。なるみんなが此方の調整者で、ケルンはその補助者ニヤけど、役割は調整者専用端末と理解すれば良いニヤよ。もう出すニヤ？」

ケルンの瞳が下方へと動き、黒い壁とは色の異なる無数の人影に視線を合わせた。

人影は次郎達から見て左側へと走り続け、背後から迫る黒い津波に飲み込まれ続けている。

津波は固定された定位置のままで、人影が必死に逃げながら引きずり込まれている状態が続いていた。

それが突如として逃げる先を変え、壁から這い出してきた。

全身にヘドロの様な黒い液体を纏わり付かせた、人間サイズの動く腐乱死体。

それが壁から続々と溢れ出し、異臭を放ちながら空間内を埋め始める。

「相手の数が多すぎる。後ろに下がるぞ」

立て直しを図るべく引いた次郎たちの背後では、ゾンビ達が満員電車から溢れ出る人のように、秒速数百体の速度で続々と壁から這い出していた。

70話 瘴気消費体

ゾンビは、全身にヘドロの様な黒い液体を纏わり付かせていた。それが濃い瘴気に由来する物なのか、汚泥なのか、海底のヘドロなのかは分からない。

本能的に飛び退いた次郎は、いかに完全魔素体として瘴気消費体には変わらないと断言されていたようにも、その黒い液体には最大限触りたくないと考えた。

「下がりながら攻撃、中央付近に石柱を造るから、その上から魔法攻撃」

「どうするのっ!？」

「土魔法で高い壁を造って、その中に円柱を造って、上から魔法で一方的に撃つ」

「分かりました」

最初に次郎が駆け出し、美也と綾香は襲い掛かってくるゾンビの群れを魔法で撃退しながら、後を追う様に後退を始めた。

壁面から溢れ出してくるゾンビの群れは、まるで街の住人を丸ごと連れて来たかのような幅広い年齢層だった。

二三万に及ぶ老若男女の由来は、既にケルンの映像と告白で明白だ。

南海トラフ巨大地震によって犠牲となった、和歌山県、高知県、徳島県を中心とした人々であろう。

それが壁面の一角から続々と溢れ出し、次郎たちに向かって迫ってくる。

次郎は空間の中心部に向かって疾走しながら、大いに愚痴った。

「悪趣味だ」

その言葉を聞き捨てならなかったのか、瞳と口だけになって壁に埋まっているケルンが、空間内に声を飛ばして否定して来た。

「ソレは単なるコピー体ニヤ。肉体は火葬されるか海に還って、魂は加工して彼方の観測点に送り込んであるニヤ」

「だからって、わざわざ使う必要は無いだろ」

次郎の反論も拡大されて、空間内に広がる。

ゾンビとの交戦中にも拘わらず、次郎はケルンと言い合いを始めた。

「オカシイ事を言うニヤね」

「どの辺がオカシイんだよ」

「地球人も、リサイクルを推奨しているはずニヤ？」

「異文化交流が難しすぎる！」

創造者が行動を起こした理由は、自種族のエネルギー問題解決を模索するためだ。

調整者や補助者が創り出したダンジョン産の魔物も全てコピー体であったし、初級までの魔物も日本産の生物の拡大強化型だった。

相手側の目的と行動は、生存と繁栄で終始一貫している。

それ故に、感情論に訴える事の困難さが容易に想像できた。

「そもそも南海トラフ巨大地震が起こる事は、日本人も皆が知っていたニヤ。犠牲を避けられたのに避けなくて、犠牲を出した後に憤る感性は、ケルンにはサッパリ理解不能ニヤ」

ケルンが指摘したとおり、南海トラフ巨大地震が起こる事はあら

かじめ分かっていた。

日本は四つのプレート上に乗っており、プレートが動いている以上、歪みが大きくなっていつか地震が起こるのは自明の理だ。

また東海・東南海・南海地震には、周期的に発生している記録も残っている。

西暦六八四年、八八七年、一〇九六年と一〇九九年、一三六一年、一四九八年、一六〇五年、一七〇七年、一八五四年、一九四四年と一九四六年。

いずれも連動型あるいは単発の短期集中型で、九〇年から二〇〇年周期で発災している。

従って、一九四四年から九〇年後の二〇三四年以降、いつ南海トラフ巨大地震が発災してもおかしくない事は、義務教育を終えた日本人であれば大抵が理解できたはずだ。

実際に南海トラフ巨大地震が発災したのは二〇三九年で、過去に蓄積された周期データの範囲内だった。

しかも一九四四年と一九四六年の昭和南海地震ではエネルギーの発散が不充分だったことから、次の発災間隔は長期的に見て短くなり、大型の地震になる事も予想されていた。

二〇一二年八月に行われた中央防災会議の被害想定第一次報告では、東海地方が大きく被災したケースで死者三二万三〇〇〇人、負傷者六二万三〇〇〇人。

死者の内訳は和歌山県が二万六〇〇〇人、高知県が一万九〇〇〇人、宮城県が一万五五〇〇人、静岡県が一万五〇〇〇人、三重県が一万二〇〇〇人、徳島県八九五〇人などとなっており、具体的にどここの地域で何人死ぬかの地図も、南海トラフ巨大地震対策ワーキンググループによって作られていた。

それから二〇三九年の発災まで、二七年以上もの時間があった。

「でも住所を変えられない人とかも居ただろう」

「なるみんなには変えられなくても、なるみんなの保護者には変える機会が沢山あったニャ。それに日本という国もおかしいニャ」

「日本のどこがおかしいんだよ」

次郎は議論を交わしながらも、ゾンビを大きく引き離して中心部へと辿り着いた。

そこで瞬時に右手へと魔力を集め、高くて厚い壁を意識しながら左回りに大きく円を描く様に回り始める。

ゾンビの身長は、人間のそれと変わらない。

対する防壁の高さは約四メートルで、壁の厚みも同程度ある。

それだけあれば乗り越えられなくなるだろうし、壁を破壊する事も出来ないだろうが、これは突破される事も想定した第一防壁に過ぎない。

次郎が壁を造る間、美也と綾香はゾンビの群れに炎と風の魔法を浴びせていた。

炎魔法は、ゾンビの全身を燃やし続けている。

だが周囲の黒い空間から溢れ出す黒い物質で回復しており、一向に数が減っていない。

燃えながら淡々と迫ってくるゾンビ達は、生者から見て不気味でおぞましかった。歩行速度が早歩きからジョギング程度に遅いためにパニックにならずに済んでいるが、これが走るゾンビだったら、次郎たちは極端な距離を取っていただろう。

風魔法は、向かい風となってゾンビの前進を阻んでいる。

さらに風の塊がゾンビの全身を抉っているが、高濃度の瘴気に満たされた相手は部位の欠損すらも直ぐに回復してしまった。

身体の一部を損壊させても撃破には至らず、早期の壁作成による安全圏の確保は急務だった。次郎は、防壁の範囲を予定より小さくする事で、作業の速度を上げた。

「そもそも西日本大震災でおかしな犠牲者を出した切っ掛けは、阪神淡路大震災にあるニヤ」

「なんで阪神淡路大震災が関係するんだよ」

阪神淡路大震災は、一九九五年一月に兵庫県南部で発生した直下型地震だ。

医療資源の適切な投入や被災者の広域搬送が出来ていれば、六四三三人の犠牲者のうち少なくとも五〇〇人以上が助かっていたと結論付けた日本では、その年を防災元年と位置付けて災害対策の教訓にした。

以降、広域災害救急医療情報システム（EMIS）や、災害時派遣医療チーム（DMAT）を立ち上げ、毎年の広域搬送訓練を行うなど、災害対策を整備・強化してきた。

「日本が災害対策の土台にした阪神淡路大震災は、『大陸プレート内で起こった直下型地震』ニヤ。南海トラフ巨大地震は、『海洋プレート内で起こった海溝型地震』ニヤ。だから南海トラフ巨大地震では、直下型地震の阪神淡路大震災を教訓に広域搬送訓練をするよりも、海溝型地震の東日本大震災を参考に津波避難施設を作って避難先を被害予想地域の住民全員に具体的に周知すべきだったニヤ」

「そんなのは結果論だ」

次郎には、ケルンの主張が結果論のように思えた。

しかしケルンは、きっぱりと否定する。

「結果論じゃないニヤ。広域搬送は、津波から助かった後の話ニヤ。海溝型地震だった東日本大震災の犠牲で、西日本大震災で優先すべき対策が津波だと分かっていたはずニヤ。阪神淡路大震災を原則論にして同じ間違いを繰り返した観測近似体は、斜め下過ぎてケルンには理解不能ニヤ」

「それでも、広域搬送も必要だっただろう」

「和歌山県の各地に十分な津波避難施設があつたニヤら、なるみんは助かつていたニヤ。阪神淡路大震災の教訓を盲目的に踏襲して、本来必要な対策から目を背けるのは、官僚の前例踏襲主義、予算の無駄遣い、事なかれ主義って呼ぶニヤ」

「……………あの時のニュースでは、避難施設が増やされて助かつた人も出ていたぞ」

具体的な犠牲者の名前と、なぜ阪神淡路大震災の教訓が災害対策の土台にされていたかを明確に説明された次郎は、一瞬言葉に詰まった。

そして今では行政の広報色が強かつたと分かっているニュースを例に挙げて、苦しい反論を試みる。

だが誰に憚る必要も無いケルンは、行政をバツサリと切り捨てる。

「広報で誤魔化しても、やるべき仕事をさぼっていたのは明らかニヤ。だから犠牲を避けられたのに避けなくて、犠牲を出した後に憤る感性が、ケルンにはサツパリ理解不能だと言つたニヤ」

「だからって、俺みたいな個人単位でどう対策出来たんだよ」

「そんなの簡単ニヤ」

「……………どうするんだよ」

「沢山の人間が見るネットにでも投稿して、問題の根幹と自助の意識を少しでも植え付ければ良いニヤ。そうしたら、どこかで誰かが助かるかもしれないニヤ。ほら、個人で対策も支援も出来たニヤ」

「日本でそんな奇特な事をしている作者を見かけたら、今後は支援しておくよっ」

ケルンとの問答を打ち切つた次郎は、足止めをしていた二人に声を掛けると、完成した防壁の内側に飛び込んだ。

逃げながら撃つよりも、攻撃を受けない場所から一方的に撃つ方

が継戦出来る。

美也と綾香は防壁上に飛び乗ると、足止めから一撃必殺に魔法を切り替え、ゾンビ達の頭上から撃ち始めた。

迫っていた数十体のゾンビが、狭い範囲で発生した強烈な炎によって全身を焼かれ、炭化させられて歩行速度を落とす。ゾンビは肉が焦げた様な臭いを撒き散らしながら、直ぐに動かなくなった。

そこに風魔法が襲い掛かり、炭化した全身をバラバラに吹き散らした。

流石にここまで破壊されたゾンビは再生しない様で、総数が僅かに減少する。

効果があると判明した炎は、すぐに各所で同時に発生し始めた。

焼かれている前方集団は、歩行速度が速い成人男性型のゾンビ達だ。男性の大半は背広姿で、サラリーマン風の人が多かった。

若い年齢層は次郎と同年代で、上の方は次郎の父よりも高い。

犠牲者の中に、山中県民である次郎や美也、道民である綾香が知った顔が無いと分かっている点は、唯一の救いだらう。

西日本大震災は、次郎が小学五年生の時に発災している。

下手をすれば、犠牲者の中に知った顔が合ったかも知れないのだ。

グルリと囲んだ防壁の内側に飛び込んだ次郎は、防壁から二〇メートルほど内側に第二の防壁を造り始めた。

美也と綾香の広範囲魔法が吹き荒れている以上、次郎の接近戦は邪魔にしかない。頭上から岩石を降り注いで、風の進路を妨げるのも悪手だ。

そんな次郎の役目は、ゾンビを阻む確実な壁を造ること。

一層で不安なら、第二層を形成する。

次郎は先程造ったよりもさらに厚くて高い、六メートル級の防壁を造り始めた。

「丁寧な仕事振りニヤね。その調子なら、日本中がゾンビで溢れて

も、耕作できる土地を囲んで生き残れるかニヤ」

「これって、俺達への練習用のつもりなのかっ！」

「さっき言ったニヤ。単なる物のついでニヤ」

「ついでかよっ」

「創造者も此方に瘴気を流して、物のついでで検証もしているニヤ」

「お前らは、大迷惑だっ」

「地球人も、自己の創造物を自由に扱っているはずニヤ。地球人の思考は、ケルンと乖離し過ぎて理解できないニヤ」

次郎は反論が思い浮かばないまま、ケルンに対して憤った。

最上級ダンジョンの最奥で戦闘を行うことは、もちろん覚悟の上だった。

だが想像していたのは黒い大型のケルベロスであって、二万三万体的ものの人間のゾンビの群れでは無い。

「日本政府が初級ダンジョンを封鎖してから、完全魔素体の大規模育成と最上級ダンジョン内での瘴気消費は絶望的になったニヤ。三人に最上級ダンジョンの攻略特典を与えて登録情報を更新した後は、地球にゾンビ大発生ニヤ」

主から送り込まれたケルンは、自らの役目が果たせる事が嬉しいのか、目を爛々と輝かせながら喜びを露わにした。

「ダンジョンを封鎖していたのは、大場総理時代だ。今の政府は、初級ダンジョンを一般公開しているだろ」

「民主制の政治責任は、民衆自身に帰すニヤ。諦めるニヤ」

「俺が国会議員への投票権を行使できるのは、来年の参議院選挙からなんだよ」

「代わりに一八歳未満の未成年は、レベルが上げ易かったニヤ。頑張るニヤ」

次郎は状況の見直しを訴えたが、けんもほろろに突き返された。加えてケルンからの駄目押しが入る。

「なるみんなが与えられた『適度な調整力』には、適度な範囲があるニヤ。完全魔素体の番いと予備を登録申請したのは、裁量権の範囲内ニヤ。最後の攻略特典も、取得速度が放出開始前に間に合ったから許容範囲ニヤ。でもその後は、適度の範囲を逸脱するニヤ」

橋場成美が次郎を急かしていたのは、自分の限界を悟っていたからだったらしい。

次郎は第二の防壁を完成させると、さらに内側に飛び込んだ。既に魔力は、六割ほど失った感覚がある。

そのため第三の防壁造成は取り止め、代わりに防壁内の中心部に、高さと厚さがハメートルに及ぶ塔の様な狙撃台を造り始めた。

一方でゾンビ達の前方集団は、既に第一の防壁に取り付いていた。壁にへばり付いたゾンビの群れは、全力で壁を打ち据えて壁の破壊、ないし威嚇によって美也と綾香を落とそうと試みている。

その力は渾身の一撃を何度も繰り出す有様で、己の肉体の損壊を全く顧みない激しさだった。しかし連中は瘴気を吸って回復するため、そんな後先を考えない行動でも成り立ってしまう。

ゾンビたちを端から見るに、脳のリミッターを外した人間に非常識な回復力を与えたに匹敵するようで、木造住宅の壁や商店街のシヤッター程度なら、数体居れば簡単に破壊できる程に厄介だと感じられた。

対する次郎の防壁はレベル一〇〇にして魔力二〇、土属性一三という絶大な力で建造されており、突貫建築ではあるが鋼並の硬さになっている。

そんな壁に突撃したゾンビ達は、流石に防壁の破壊は出来なかつ

たらしい。

それでも孤島を取り巻く大海の如く、ひたすら防壁に対して波を打ち続けていた。

美也と綾香は効率を最優先して、防壁に取り付くゾンビを無視し、固まっている場所に炎と風を浴びせ続けている。

「ちょっと爪が甘かったニヤね」

ケルンが肉球を浮かび上がらせながら、爪をニユッと伸ばして駄目出しをした直後、ゾンビの一部が四メートルの壁を乗り越え始めた。

「次郎くんっ、ゾンビが越えてくるよ」

「なんだって!？」

美也の警告を聞いて慌てて第二防壁に飛び乗った次郎は、自らが造り出した第一防壁をゾンビが乗り越えた姿を目撃した。

咄嗟に乗り込まれた第一防壁に飛び移り、防壁上のゾンビを蹴散らして壁下に叩き落とす。

すると見下ろした第一防壁の外側には、ゾンビが他のゾンビを踏み台にしながら、無理矢理に足場を造っている姿が見て取れた。

それは意図的なものでは無く、ゾンビが群がり過ぎた為に自然発生した人肉の土台だった。

得物が次郎たちしか存在しない中、防壁を四方八方から取り巻いているゾンビ達は、自ずと中心に群がっている。

そのため各所で、密集したゾンビの土台が自然形成されていた。

「二人とも、次の防壁に下がれっ」

第一防壁を放棄した次郎たちは、第二防壁に飛び移った。

それを追う様に、第一防壁の外側から次々とゾンビの集団が登ってくる。

次郎は後ろを振り返り、防壁内の中心に据えた八メートルの正方形六面体を見上げる。

当初は充分と思っていたが、四メートルの防壁に登られた今となつては何とも心許ない。

六メートルの第二防壁に飛び移った美也達が撃退を始める横で、次郎は叫んだ。

「保険を増やしてくる」

「次郎くん、内側に増やしても逃げ場が無いよ。外側に、高い足場を増やして。飛び移りながらゾンビの数を減らすから」

「分かった。ちよつと造ってくる」

「早めにねっ」

計画を大きく見直した次郎は、ゾンビを迎え撃っている反対側に駆け出した。

すると地平線の向こう側から、上級ダンジョンの最奥で見たアルゼンチノサウルス級のケルベロスが、二頭同時に迫ってくるのが見えた。

「美也、綾香、後ろから巨大怪獣二体が来ているっ！」

「攻撃魔法を中断したら、ゾンビが乗り込んでくるよ」

「守る範囲が広すぎます。侵入を防ぐには、炎と風が両方必要です」
「ああっ、もう！」

次郎たちは、『前門の虎、後門の狼』と呼ぶに相応しい状況に陥っていた。

前方には、瘴気で無限回復する二三万体のゾンビたち。

後方には、三〇メートル級の巨大ゾンビケルベロス二体と、一〇

メートル級のゾンビケルベロス数十体。

ボスである巨大ゾンビケルベロスの強さは、推定でレベル九五から一〇〇程度だ。

最上級ダンジョンの全ての魔物が、上級ダンジョンよりも二〇ずつ上である点を踏まえれば、そのように推定できる。次郎たちのレベルが一〇〇であるから、殆ど互角の強さで厄介な相手と言える。

二〇階に群れていた通常のケルベロスは、レベル七五相当だろう。この辺りはさほど脅威では無い。

そして最後のゾンビたちに関しては、地上に出す事を想定しているとすれば圧倒的に弱いはずだ。地上の人間が1億人単位で生き残れる程度の相手であれば、全個体に群がられても次郎たちは死なないと思われる。

だが二三万匹ものゴキブリに群がられる様な物で、精神的には死ぬに準じるくらいの苦しみを味わう事だろう。女性二人組が嫌がるのも無理はなかった。

だが役割分担を考えれば、物理で襲ってくる脳筋のケルベロスたちを、後方支援系の二人に近づけさせる訳にはいかない。

「とにかく後ろのケルベロスを狩ってくる。少し自衛していてくれ」

「普通のケルベロスも倒しておいてね」

「足場の追加もお願いします」

次々と出される要求に肩を竦めた次郎は、一足飛びに後方の黒い床面へと降り立った。

そして着地と同時に土魔法で足場を一カ所追加してから、突風を吹かせ、床面を力強く蹴り出して、風と共にゾンビケルベロスの群れへと突入していった。

71話 最後の攻略

三〇メートル級の巨大ケルベロスが、大気を振るわせる巨大な雄叫びと共に三つ首を振り上げ、次郎に向かって勢い良く振り下ろした。

まるで一〇階建てのマンションが、正面から倒れ込んで来るような圧迫感。

だが相対した次郎は一向に怖れず、自ら懷に飛び込む形で牙の攻撃を回避した。それに留まらず、首の真下から巨大石斧を勢い良く振り上げて、中央の首を深く抉り返す。

肉を抉って、首の骨に激しい衝撃を与え、直後に骨の折れる音が響く。

石斧に押されるがまま不自然に曲がっていく中央の首が、攻撃の実行者に大打撃の確信を与えた。

しかも首を振り下ろした巨大ケルベロスの頭部と胴体の間に、次郎は上手く潜り込んだ形になっている。

懷に飛び込まれて次郎を見失ったケルベロスが対処するためには、そのまま床面に倒れ込んで巨体で次郎を押し潰すか、一度距離を取るしか無い。

だがゾンビの如き知能しか有しない瘴気消費体に、そのような判断は不可能だ。

そしてこれまで幾百万の魔物を倒してきた生粋の狩人が、そんな絶好の機会を見逃すはずも無かった。

彼は一本目の首を破壊した直後に食い込んでいる石斧を手放し、今度は右側の無防備な首筋に向かって躍り掛かった。

「ぬおりゃあぁっ」

手放した石斧が地面に落ちるまでの僅かな間に、二本目となる新たな巨大石斧が生成される。誕生直後の石斧は真横から振りかぶられ、産声の代わりとばかりに右首に激しく叩き付けられた。

「ギャウウンッ」

二度の致命傷を受けたケルベロスの残った左犬頭から、猛々しい偉容とは裏腹の情けない悲鳴が響いた。

交戦中の敵と言うより一方的な災厄を与える存在から逃れよと、左頭は咄嗟に仰け反って後退を図った。

しかし、骨を砕かれた二本の首が動きを阻害した為、次郎に対しては身体を少し浮かせて、左首までの進路を都合良く開けただけ格好になった。

「ナイスアシスト」

次郎は二本目の石斧を手放しながら左首目掛けて飛び込み、三本目の石斧を掬い上げる様に力一杯振るって、無防備な第三の首筋へと叩き付けた。

強い衝撃が手元に伝わるが、骨を断った感触は得られなかった。

左首は仰け反って浮き上がっていたため、カウンターや真横からの振り下ろしに比べて威力が劣ったようである。

「ウラアッ！ ドラアッ！ ドアラッ！」

次郎は罵声にも似た掛け声と共に、左首に向かって木こりの如く石斧を幾度も振るった。

巨大ケルベロスは攻撃される度に嫌がって逆方向へ逃れようと足掻くが、次郎はそれを追い回して攻撃の手を緩めない。

次郎が巨大ケルベルスの懷に飛び込んだまま離れないため、周囲のケルベロスたちは次郎を捉えられず、横槍は入って来なかった。あたかも鬼の体内に飛び込んだ一寸法師のような一方的な攻撃が暫く続いた後、巨大ケルベロスは三本の首骨を全て叩き折られてついに倒れた。

直後、次郎は巨大ケルベロスの真下に巨石を生み出して、倒れ込む胴体を支えた。

そして心臓付近に長い石槍を次々と突き入れて心臓と付近の胸部を徹底的に破壊し、魔石に触れて力を吸収する。

これはレベルや評価が目的では無く、巨大ケルベロスが周囲の膨大らしき瘴気を吸収して復活することを怖れたためだ。

目下、次郎たちの最大の脅威は、レベル九五と推定した二体の巨大ケルベロスだ。

そのうち一体を確実に無力化しておけば、戦況は一気に次郎たちの側へと傾く。

基本的に一対一であれば、レベル差が順当な結果を出すのだ。

「慎重な戦い振りで結構な事だニヤ」

「そいつはどうも」

「もうちよっで行けるんじゃないかニヤ」

「それって登山だと引き返す基準だから」

ケルンの恐ろしい提案に対し、石壁作成で魔力を減らしている次郎は拒否権を発動した。

この場合の救いは、ケルンの創造者が次郎たちの全滅ではなく、地球に流入する瘴気の軽減努力を検討材料に加えたいと望んでいる事だろう。

そんな創造者に送り込まれた補助者であるケルンは、創造者の意向に添い、その範囲内であれば調整者である橋場成美の希望にも沿

っている。

そのため現段階で瘴気軽減のキーパーソンとなっている次郎を必要性の乏しい死に追いやるような真似は、基本的に出来ないはずである。

次郎はトドメを刺した一体目の巨大ケルベロスの真下から飛び出すと、二体目の巨大ケルベロス目掛けて生み出した石槍を投槍した。石槍は二体目の胴体に突き刺さるも、巨大な相手には然したるダメージを与えた様子は無く、次郎に向かって襲い掛かってくる。

だが二体目の行動は、ケルベロスを自分に引き付けたい次郎の思惑通りだった。

次郎は足踏みの爆音を鳴らしながら迫り来る一〇階建てのマンシヨンに対抗する様に、真っ正面からケルベロスの巨体に向かって駆け出した。

「ギャオオオオーンッ」

二体目の巨大ケルベロスは、一体目と全く同じように襲い掛かってきた。

自在に動かせる頭部で押し潰す、あるいは噛み砕くという動作を、そのまま単純に繰り返してきたのである。

「お前ら、馬鹿だろう！」

それに対して次郎は、相手以上の高速で攻撃を避けて、懷に飛び込んで首を叩き折るという全く同じ戦法で迎え撃った。

三つの首によする攻撃を掻い潜って、無防備な内側に潜り込む。同時に、自身の全長以上の刃を持つ巨大な石斧を生み出して、大きく振りかぶって力一杯に打ち込んだ。

骨まで通った衝撃が、硬いであろうケルベロスの左首の骨を叩き

折る。

例えば体格やリーチの差ではケルベロス側に分があるとしても、次郎はレベル一〇〇で近接戦闘特化型である。

同じ創造神由来の力を得ている者同士、レベルが高い次郎の攻撃が、レベルの低いケルベロスに通じない道理は無い。

瞬く間に左首を無力化して中央の首に向かった次郎は、橋場成美が最上級ダンジョンのボス設定を間違えているのではないかと考えた。

レベル一〇〇にならないければ入れない最上級ダンジョンの最奥に、レベル九五のボスを二体並べた所で、侵入者が二人以上いれば勝てるわけがない。

もちろん周囲にはレベル七五ほどの通常ケルベロスが数十体加わっているし、壁側にはおまけで二三万体の人体ゾンビがいる。

そしてすべての瘴気消費体は瘴気で自動回復するため、戦い方を間違えれば苦戦は免れない。

しかし瘴気消費体は何れも盲目的に迫ってくる愚かな存在ばかりで、倒し方をパターン化して嵌め込んでしまえば、相手には対応する事が出来ないのだ。

中央の首も内側に入り込まれた次郎には対応できず、石斧で一方的に殴られ続けて直ぐにおかしな方向に曲がった。

上級ダンジョンの魔物であれば、こう容易くは行かなかつただろう。もしかすると最上級ダンジョンへの敷居を下げるために、敢えて楽な設定にしているのかもしれないが。

「ギャウウウンッ」

二本目の首が無力化された巨大ケルベロスは、情けない悲鳴を上げながら後ろに跳び下がった。

だがそれは反射的な反応で、根本的に逃亡する発想や、周囲のケ

ルベロスと連携を図る発想などは持たないのだろう。

いかにも中途半端で隙だらけのケルベロスに対し、次郎は追い縋って右首に石斧を叩き付け、それを足場に新たな石斧が振るい続けて首を叩き折った。

「ぬおおおっ！」

腹からの野太い雄叫びと共に、次郎の両手から巨大な岩の杭が飛び出して巨大ケルベロスの真下に入り込んだ。

次郎は呼吸するくらい自然に長い石槍を生み出すと、胴体が浮いた状態のケルベロスの胸部に次々と突き入れる。

心臓付近を穴だらけのボロボロになるまで徹底的に破壊し、魔石のある場所を勢いよく貫き通す。魔石を穿たれて魔素を吸われたケルベロスは、体内の瘴気を循環させる力を失い、急速に力を失って倒れ伏した。

これで残るは、数十体のレベル七五の通常ケルベロスだけである。レベル二五ものの力の差があり、相手には知性も皆無な以上、もはや正面からの力押しでも負ける事は有り得ない。

次郎は大立ち回りを演じてケルベロス達の注意を引き付けながら、圧倒的強さで、雑魚の群れを一掃し始めた。

かつて狩猟を行っていた人間は、その進化の過程で、一昼夜も獲物を追いかけて続けられる体力を獲得した。

そんな先祖の能力が現代人へ十全に引き継がれているとは言い難いが、体力を失った分だけ人々は知能を獲得している。

二三万体のゾンビに対抗する術として、美也と綾香は火葬を選んだ。

餌に群がって密度を高めたゾンビに対して、千体単位を焼却する業火を放つ。

自身が放つ炎への耐性力、高台という安全圏の確保、次郎による後顧の憂いの解決が揃えばこそ成立する固定式の火炎放射器あるいは天災発生装置であった。

広範囲攻撃の効果は絶大で、二三万を数えたゾンビの群れは着実に数を減らしていった。

戦闘中の美也は、放火の手を緩めないままゾンビ全体の動きを俯瞰し、時折次郎の戦闘状況を確認した。

次郎はボス二体を撃破した後の掃討戦に移行しており、端から見てモグラ叩きのようにケルベロスを蹴散らしては、転がって隙を見せる個体を順番に狙い定めてトドメを刺していた。

現状に至って美也は、勝敗の帰趨が自分たちの勝利で終わる事を確信した。

必要に応じて次郎への支援を行うつもりだったが、最早その必要すらないと判断する。

彼女はゾンビを焼き続けるまま、巨大化して壁に半ば埋まっているケルンに目を向けた。

「最後の攻略特典は、三首犬を全部倒した時点で選んで良いニヤ。三人がこの部屋から出て行った後に、アフリカから瘴気消費体を広げていくニヤ。ニヤッニヤッニヤ」

非常にご機嫌な笑い声を上げるケルンに向かって、次郎が反論を試みる。

わざわざ中継してくれているのか、二人の会話は美也たちの元にも届いていた。

「そんな事をされたら、共和党が誤解されて綾香が困る。そもそも労働党の封鎖政策が悪化の原因なのに、大場前総理の周辺は我が物顔で、ゾンビが湧き出たのはダンジョンに深入りした共和党のせい

だとか言って責任を押し付けてくるぞ」

「撮影している映像を公開すれば良いニヤ。創造主が知りたいのは、観測近似体が行う瘴気への対処方法ニヤから、公開して知恵を絞るのは構わないニヤ」

「だったら、ゾンビを出す前に知恵を絞って貰ったらもつと良いんじゃないかな」

一方的に言い募る次郎と、全く取り合おうとしないケルンとの問答に、美也が割って入った。

「どういう意味ニヤ？」

「文明が崩壊してから対処しようとしても、組織的な事は無理でしょう。ゾンビを撒き散らす事は何時でも出来るから、それは後回しにして、先に組織的な対応を見た方が、創造主の意向にも橋場成美さんの希望にも添うんじゃないかな」

「タイムリミットがあるニヤ」

「わたしたち全員が攻略特典を選ぶまでは、待てるんだよね」

美也は先程来ケルンが保証していた発言を、敢えて聞き返した。

「それくらいは容易いニヤ」

「それなら、太郎くんと綾香が攻略特典を選んで外に出て、井口総理と広瀬大臣をここまで転移で連れて来て。それで日本の対応を検討して貰うの。理想は、文明を崩壊させないで瘴気を継続的に処理する方法。それは主の意向に添うよね」

「引き延ばしのために攻略特典を選ばないつもりかニヤ？」

金色の瞳が、やや不満げに釣り上がった。

しかし美也は怯む様子を見せず、妥協点を模索する。

「少しの間だけね。その間、瘴気が増える分だけ追加のゾンビを倒せば良いでしょ」

「ウジャウジャ出るニャよ」

「最初に身体の色割合を見たけど、本当は、まだもう少し保つんだよね。ゾンビが多くて無理そうなら特典を選ぶから、どうかな」

「ウーイーニャーン。条件付きで認めるニャ」

やや間を置いて、ケルンは美也の提案を条件付きで承認する意思を示した。

「分かったよ。条件は何かな」

「先に攻略特典を宣言しておくニャ。継続できないと判断した時点で、特典を与えてここから追い出すニャ」

「それなら能力加算」

これ以上は妥協させられないと判断した美也は、直ぐに事前に決めていた特典を宣言した。

それを聞いたケルンは細めていた金色の瞳を元に戻して、条件の成立を告げる。

「二人に一度ずつだけ、同行者の入場制限を外すニャ」

「それじゃあ二人とも、お願いね。それと足場は増やしておいて」

「マジかよ」

「致し方がありません」

綾香は風魔法の威力を急激に上げ、魔力を使い切っても構わないとばかりにゾンビを蹴散らしに掛かった。

次郎はケルベロスとの攻防が続けたまま、これからの行動を脳内で必至に検討する。

まずはケルベロスと眷属を全て倒して最上級ダンジョンを攻略し、

次郎と綾香だけで攻略特典を獲得する。

その次は地上に戻って、ケルンが不満を持つ前に井口総理と広瀬大臣を連れてくる。

ケルンは僻地のダンジョンを利用者最多の駅前に変え、ダンジョン内から魔物を放出し、放出する魔物の強さを毎回上げ、ついにはゾンビを出す判断を下した調整補助者だ。

しかも、日本政府を『民衆が選んだ代表』として、政権を担っている党派を無関係に同一視した上で、既に見限っている。

この段階に至っての引き延ばしは、明らかに悪手だ。
美也の負担が劇的に重くなるし、最悪の場合は交渉が成立せずゾンビが出現し始める。

次郎は総理と大臣を最速で連れてくる事を決めた。

「綾香、総理と大臣を分担して連れてくるぞ。二人は今日、どこに居るんだ」

「今日は最上級ダンジョンを攻略するかも知れないと事前に伝えてありますので、祖父は総理官邸です。広瀬大臣は、ジャポントレビで二時間の日曜徹底討論に生出演する予定です。祖父の方は、総理官邸に直接転移できる私が担当致します」

「マジか」

「広瀬大臣の方は、父が秘書として同行していますので、連絡しておきます」

「……………分かった。頼むな」

一気に戦意を喪失した次郎の手は、無情にも最後のケルベロスの胸を貫いた。

72話 ジャポントレピ

二〇四八年九月二〇日現在。

世界中で無作為に選んだ一〇万人くらいに『世界で最も注目を浴びている人物の名前を挙げる』と言えば、上位五人くらいの中には確実に広瀬秀久の名前が挙がる。

その前後には、米中露の大統領や主席がズラリと名を連ねている。

広瀬秀久の名前が世界中に大きく知られ始めたのは、二〇四五年七月一〇日の記者会見と、その三日後の国会での追及だ。

彼は緊急記者会見において、まず次の六点を全世界に向けて詳らかにした。

一・日本政府は、初級ダンジョン発生の四年前からダンジョンを把握していた。

二・四年前に出現したのは前段階の『チュートリアルダンジョン』である。

三・政府は全都道府県で一〇三カ所発見されていた約一〇〇カ所のチュートリアルダンジョンを封鎖し、以前から独自調査を行っていた。

四・前段階では弱体化した魔物ばかりで、レベルが非常に上げやすかった。

五・ダンジョンを攻略すると『総合評価』に基づき『攻略特典』を得られる。内容は『能力加算』『転移能力』『収納能力』で、攻略者各自がそれぞれ得られる。

六・政府はダンジョンの情報を隠蔽しており、奥に潜った民間人を組織的に口封じすべく機関銃で銃撃していた。

これらは、チュートリアルダンジョン内部の全魔物を撮影した映像、転移で東京・ロンドン間を往復しながら周囲の人々を映す映像、収納で大量の米俵や廃タイヤを自在に出し入れする映像、未成年の子供たちを機動隊が撃ち殺そうとする映像などと共に、ネットを含めた国内外のあらゆる報道媒体へ一斉に公開された。

その記者会見後に行われた国会では、大場元総理と直接対決して、答えに窮した彼を沈黙させてTV放映が切り替えられるという状況に追いやった。

以降、内閣不信任決議案の可決に大きく関わった一人となり、政権交代後は防衛大臣としてダンジョン問題の責任者を担い、政府要人の子息から選んだ特攻隊を即座に作り出してダンジョンを攻略させ、非公開の独自協力者を使って最新情報を得ながら、ダンジョン問題を一手に采配している。

今や世界中が広瀬の動向に注目しており、広瀬がテレビに出ると聞けば、各国が彼の発言を一言も聞き漏らすまいと映像を記録して翻訳を行う。

しかし広瀬は『必要があれば自ら記者会見を行う』というスタイルで通ってきており、メディアに呼ばれたからと言って出るような事は無かった。

そんな彼に加え、連立与党側から改革党の藤沢代表、新生党の麻倉代表、共歩党の青山代表、そして野党側からも不信任案に賛成した労働党の小林代表、同じく国民党の相山代表が揃うという今日の日曜討論を実現する為に、ジャポンテレビ側は会長と社長は全面的に要望を飲むという条件で、三顧の礼どころか三〇でも三〇〇でも土下座する姿勢で望んでいた。

ジャポンテレビ側が欲しいのは、彼らを出演させたという実績であり、今後の出演依頼の足がかりの為である。広瀬大臣や各党の代表が出たと言う理由を付ければ、番組の格が上がって大抵の国会議

員を呼べるようになる。

それに藤沢代表は、国内メディアを所管する現職の総務大臣兼弁護士でもある。

偏向報道のようなおかしい真似をすれば、即座に衆議院議員の九割を味方にする戦後最強の政権集団から、会長と社長が揃って辞職するまで容赦なく叩きのめされる。

そのため今日の生放送は、なんとしても成功させるべく、総力体制で臨んでいた。

一例を挙げるなら、司会の自由選択権だ。

誰でも自由に指名して下さいと、事前に顔写真付きのリストを政府に提出したのだ。

リストから選ばれたのは、テレビ局側が大物扱いしている司会者でも、独自キャラクターで人気の司会者でもなく、中立的なスタンスを取る若手司会者の菅山雄大だった。

指名された菅山は、分厚い司会進行書を渡され、最終的には「とにかく上手くやれ」という無責任極まりない指示を最高経営者から与えられて、獅子と龍と猪と虎と鬼と猛禽類がタッグを組んでいる二時間出られない檻の中に放り込まれた。

菅山は、自分の人生の岐路が今日だと悟った。

なお指名されなかった司会のアシスタント役には、元アイドルの医者で自らもレベルを四まで上げた千葉美冬が呼ばれている。

彼女は、何度も共演した菅山が司会を務める番組の補佐役だと聞かされていた。

ゲストの名前がゲストだとしか書かれていない事を若干訝しがりながらも、番組次第では呼べる芸能人が変わる事もあるだろうと深くは悩まずに仕事を受けた。

依頼には、ゲストが二極化されているので、人数が不利な方をフオーするような立ち回りをお願いしますとも書かれていたが、司

会の補佐役ならそれくらいの配慮は当たり前だろうと納得した。

彼女がそれらを畏だったと悟ったのは、生放送が始まるわずか一時間半前である。

「あ、あたしお腹痛い。お腹痛いです」

「嘔吐くな。この場で診断書書くな。諦めい」

「嘘じゃ無いです。急性のストレス性胃炎です。誰か変わって……」

「駄目駄目、会長と社長の指示なんだから」

「なんで、あたしなんですか。もう三一歳のオバさんより、若くて綺麗な自局のアナウンサーを呼びましょうよ」

「千葉先生も若くて綺麗だって。ほら観念しろ」

「番組が失敗したら全部あたしのせいにして、ジャポントレテレビ側の責任じゃ無いと言ったためでしょう。騙されていたアイドル時代とは違うんですからね」

「ああん、聞こえんなあ。そろそろ挨拶に行くで。ちなみに応対してくれる広瀬大臣の秘書官は、政権交代前からの腹心で、東大卒の弁護士で、井口総理のご嫡男。下手な扱いしたら、並の衆議院議員にケンカを売るより余程ヤバイで？」

「いやーっ、おうちかえるー」

「ドナドナっ、ドナドナっ」

かくして、ジャポントレテレビ側が満を持した二時間の特別生放送が開始された。

普段の三倍増しほどの丁寧な紹介を行い、忙しい中出演してくれた事に礼を述べ、いくつかの法案について議論が交わされる。途中で画面の外側に居る秘書が退席する出来事はあったが、番組は順調に進んでいった。

そして四つ目の話題として取り上げられたのは、一般人への入場を認めたダンジョン法案についてだった。

ダンジョン法案は、二〇四六年九月一日から、二〇四九年八月三

一日までの三年間という期間限定で申請者に初級ダンジョンへの入場を認める法律だ。

申請者は一〇〇〇万人を越えており、既に有効期間が一年を切ったこの制度について今後どうしていく予定なのかが意見交換される。

現在のダンジョン法案では、来年の更新時の条件は現行のままとなる。

第一回目の申請で対象となったのは、最初から日本国籍を持つ一二歳以上、四〇歳未満の者であった。

有効期間は三年間で、暴力団員、罰金刑以上の前科者、成年被後見人、精神科通院歴者、税金未納歴者、自己破産歴者、生活保護受給者、そして先に挙げた何れか一つ以上に該当する者の被保護者には与えられない。

また二〇四六年以降の帰化者は不受理。片親が日本人や、生まれた国が国外などの理由で複数の国籍を持っており、国籍法第一四条第二項に基づき外国国籍の離脱を行った者は受理、離脱できず日本国籍の選択宣言を行っただけの者は不受理となる。

対象年齢や有効期間を延ばすのか、入場できるダンジョンを中級まで広げるのか、そして対象者を広げるのか。これらについては、与党内でも意見が百出していた。

「例えば申請時に一一歳だった子供は、次回の申請機会が三年後の一四歳となります。レベルを上げやすいのは一八歳未満ですから、機会には四年間。一二歳の時に申請できた子供が六年もレベルを上げる機会に恵まれている事を考えますと、不平等にも思えますが」

「仰るとおりです。最初の制度作りでは現行法案の実現が精一杯でしたが、改善の余地は有ると思います。自動車免許のように二回目以降の更新は有効期間を延ばす一方で、更新のタイミングを毎年にしても良いかも知れません」

千葉が内心では必死の思いで行った指摘に対し、広瀬はやけにアツサリと肯定して見せた。それだけではなく、藤沢党首や麻倉党首らが次々と賛同する。

「来年度の更新から有効期間を五年間に延ばして、以降は更新機会を毎年に変えるのは如何でしょう」

「それは構わん。だが免許証のように随時取得までは難しいぞ。そんな事をしたら調査が出来なくなつて、資格対象外の者に入場許可を与える事に繋がりがねん」

「犯罪の抑止という面では、資格取得が困難な方が良い点は否めません。国家資格も随時では無いのですから、年一度の案でも問題ないと思いますが」

「それでは持ち帰つて精査の上、摺り合わせてから閣議に提出する事とします」

自分の発言で閣議決定が行われそうになっている千葉は、内心でギヤアギヤと叫びながらも、なんとか仕事を果たすべく野党側にも話を振つた。

「小林議員は如何でしょう。現行の制度から改正した方が良いと思われる部分など、何かございますか」

「そうですね。除外対象のうち、罰金刑以上の者の被保護者が対象になっているのは厳しいのでは無いかという意見は何度か聞きました。その点は執行猶予付きの実刑以上に改めるなど、見直しの余地が有るのでは無いかと思います」

「では、それも検討しましょう」

広瀬は野党であるはずの小林の意見をアツサリと飲んだ。

驚く千葉に代わり、この問題は取扱いが安全だと分かった菅山が良いところ取りで取り纏め役が変わる。

「それでは相山党首は、ダンジョン法案の改正について何かご意見はございますか」

「私の方は……………」

言いかけた相山は、カメラの外を向いて言葉を嚥んだ。

そしてややあつて広瀬大臣を見て、広瀬大臣が頷くのを確認してから軽く言葉を繋ぐ。

「中級ダンジョンを公開する時期が気になりますね。より良い魔石、高度な魔法、日本の未来にプラスとなるかも知れません。あまり先送りしない方が良いでしょう」

「なるほど。ではここで一度CMに入りまして、皆様にはさらにご意見を伺つていこうと思います」

番組のテロップが流れる間に広瀬大臣が立ち上がり、それを見た藤沢大臣や麻倉大臣が次々と立ち上がっていく。

CMへの入り方は、テレビを見ていた人達に通常では無い事態が起こった事を容易に知らしめていた。

「CMに入りました。一八〇秒です」

「延ばせ！」

「延ばします」「分かりました」

即座に指示を出した広瀬大臣に、プロデューサーとディレクターが相次いで答える。

そこにマスクとサングラス、帽子を着用したブカブカの服を着た男が、井口和馬大臣秘書官に連れられて入ってくる。

広瀬の前でおかしな変装をしている男が、ダンジョン攻略の第一人者・山田太郎氏である事を、殆どの人間は瞬時に察した。

広瀬は鋭い眼光をテレビ局のスタッフに放ちながら、男に問い質した。

「緊急事態なのは分かった。ここで言える事か、場所を変えるか」
「今、別の者が総理を迎えに行きました。大臣たちも直ちに転移で同行して頂きます。可能であれば、この場に居る各党代表もです。理由は最悪すぎて、殆ど言えません」

次郎が一気に言い募った後、広瀬は自分の秘書官に告げた。

「話せる範囲で説明したまえ」

「山田達が最上級ダンジョンの最深部で、国家が最優先すべき、極めて重大かつ緊急に判断を要する事態に遭遇しました。総理と各党代表が必要な理由は、即断即決を求められるからです」

「それは間違いないのだな」

「可能な限り確認しました。総理と回線が繋がっています」

広瀬は差し出された通話状態の携帯端末を受け取ると、拡大音声にして画面に映っている井口総理と会話を始めた。

「総理、今の話で宜しいですか」

『そう判断した。私の職責において、現状を緊急事態基本法に基づく『国会の議決を採る余裕が無い国家緊急事態』だと宣言する。私と君が不在の間、総理代行は高峰外務大臣を指名した。私達が不在の間に強権が必要になる場合も想定される。和馬は高峰の所へ送り、そのタイミングを伝えさせる』

「分かりました。現時刻を以て、井口総理の職責において、緊急事態基本法に基づく国家緊急事態が宣言された事を承知します。防衛大臣の指揮権は、一時的に高峰総理代行へ移譲します。テレビのCMが終わり次第、速やかに国民へ向けて発表の後、転移で現地へ向

かいます」

『私も何人かに指示を出したら直ぐに向かう。現地で会おう』

「承知しました」

通話を切った広瀬は携帯端末を秘書の和馬に返すと、藤沢らを見渡して告げた。

「皆様方、お聞きの通りです。国家緊急事態につき、各大臣は同行願います。小林党首と青山党首にもご同行願いたいのですが、宜しいでしょうか」

「野党党首としての責務を果たそう」

「むしろ外されていたら抗議するところですよ」

有無を言わせぬ語調に連立与党の党首たちは頷き、野党の小林と青山も同意の意思を示す。

全員の理解を得て軽く頷いた広瀬は、次郎と和馬に視線を戻して確認した。

「今、他にすべき事は何だ」

「……山田君、秘書は同行させられるか？」

「止めた方が良いと思います」

次郎が危惧したのは、情報漏えいだ。

関わる人間が増えるほど、秘密は守り難くなる。また各政党の党首たち本人ならば兎も角、秘書の家族にまで護衛の手が回ると思えない。

本来であれば、彼らを連れて行く事自体を誰にも知られない方が良いのだろうが、今は一刻も早くケルンの元へ連れて行かなければ、国家以前に人類自体の存続が危うい。

「では各秘書に、手帳や筆記用具、モバイルPCなどを持って来させてください。大臣が自ら作業する必要があるかもしれません」
「よし、全員急げ！」

広瀬の叱咤で、秘書たちが慌てて控室に向かって駆け出した。

「CMあと一分です」
「もう少し延ばして、一〇秒前からカウントダウンしろ」
「合計三分に延ばします」

スタジオ内の人々が慌ただしく走り回る中、和馬は次郎の肩を叩いて耳打ちした。

「堂下次郎君。君には、私の代わりに広瀬大臣の臨時秘書を担ってもらう。君はダンジョンに最も精通している。気付いた事を補佐して、聞かれた事には助言すれば良い。報酬は井口家から綾香を先払いしているはずだ」

「……………調べたんですね」
「ただの親馬鹿が、娘を心配して個人的に調べただけだ。頼んだ」
「可能な範囲で頑張ります」
「出来るだけやってくれ。パソコンは持っているな？」
「収納空間に入っていますよ」
「一〇秒前です……………九、八、七」

広瀬大臣達が元の席に戻って姿勢を正し、やがて生放送が再開された。

最初に緊張した様子の司会者が映し出される。

「番組の途中でしたが、ここで政府からの緊急発表があります。広瀬防衛大臣、お願いします」

「全国民の皆様にお伝えします。本日一〇時四四分、井口豊・日本国内閣総理大臣が、現状を『国会の議決を採る余裕が無い国家緊急事態』であると再宣言しました。日本国は緊急事態基本法に基づき、井口総理の宣言時刻を以て新たな国家緊急事態に入りました」

テロップに『井口総理が国家緊急事態を再宣言』という文字が流れ始めた。

「井口総理と私、此処に居る各党の代表は、直ちに緊急事態の対応にあたります。総理不在時の総理代行は、総理指名で高峰外務大臣となります。高峰総理代行には、不在になる各大臣の権限も一時移譲されます。防衛省職員並びに全自衛隊員は、高峰総理代行に従って行動するように命じる」

テロップには『総理代行に高峰外務大臣、四大臣職も兼務』という文字が追加された。

広瀬が説明している間に、秘書達が控え室からバタバタと駆け戻ってくる。

頃合いを見計らった広瀬は、次郎に指示を出した。

「山田太郎君、開始したまえ」

指示された次郎が広瀬達に触れていき、その姿を掻き消していく。僅か二、三秒の間に大臣や党首の姿が残らず消えた後、次郎は井口和馬に向き直って、移動を宣言する。

「では行ってきます」

和馬が頷くと同時に、次郎の姿がスタジオから消え失せた。次郎が消えるのを確認した和馬は、スタジオ内に茫然と佇む司会

者の菅山と、物凄く焦った様子のアシスタントの千葉に一礼をして、各議員の秘書や護衛らと共に立ち去ろうとした。

「ちょ、ちょっと待って下さい。広瀬防衛大臣の政権交代前からの腹心で、井口総理のご嫡男でもある弁護士の井口和馬大臣秘書官」

「……………何でしょうか」

「コメント、コメント下さい。生放送なのに、出演者がみんな居なくなりました。あと一時間くらいあるんです」

「番組を変更して、特別番組にして頂いても構いません」

「ありがとうございます。それと、山田太郎さん。彼が最上級ダンジョンの最奥で、国家が最優先すべき、緊急かつ極めて重大な判断を要する事態に遭遇したと言っていましたね。判断の為に総理達が現地に赴くって話でしたよね。そこまでは肯定ですよ。それだけ答えて下さい。それで一時間保ちますから！」

「……………映像に記録されている通りです」

「ありがとうございます」

何故か泣きそうになっている千葉を尻目に、和馬は残っていた議員秘書や護衛達と共に、今度こそスタジオを後にした。

なお顔が土色の菅山と共に残された千葉は、VTR映像と想像力を最大限に活用し、残る一時間でテレビ局の開局以来最高の視聴率を叩き出した。

73話 地獄の底で

此方で最も深い最上級ダンジョンの最深部。

この地における生者の世界は、断崖絶壁の上にあった。

高さ一二メートル、直径三〇メートル程の三つの円柱の上。

その狭い範囲だけが生者の生存圏であり、次郎たち三人、六党首と広瀬大臣の合計一〇名が、天頂から眼下に広がる別世界を見下ろしていた。

眼下に果てしなく広がるのは、魑魅魍魎の跋扈する地獄の底。

汚泥の中を引き摺り回されたかのように、ボロボロに擦り切れた衣服を身に纏い、同様に全身の各所を割かれ、体内の様々な物が露わになった死者の大群。

視界を埋め尽くすそれらは、地獄の底から蜘蛛の糸を掴もうとするかのように、円柱の上に向かって手を伸ばす。

そして蜘蛛の糸の代わりに伸びてきた炎に焼かれながらも、瘴気を浴びて再び動き出し、幾度も焼き直される煉獄を繰り返していた。

それら煉獄と比べれば、視界の奥で串刺しになっているゾンビは、幾分かマシなのだろうか。

地上から剣山のように突き出した一〇〇〇本以上もの太い串のそれぞれに、一〇体余りのゾンビが胴体を貫かれて繋ぎ止められており、頭や手足を動かしながら蠢いている。

彼らは動く度に腹部の傷が開くが、その傷を瘴気が回復させてしまつたため、永劫の串刺し地獄を続けている。

剣山を建造した目的は、瘴気を永続的に消費させるためだ。

こうしなければ流入してくる瘴気を減らせず、地上にゾンビで溢れ出しますと説明されては同行した政治家達も押し黙るしか無かった。

人道を全面的に無視した次郎の瘴気自動消費システムと、美也と綾香による定期的な瘴気払いによって、空間内に溢れていた瘴気だけは、流入と消費のバランスが辛うじて保たれた。

なお、途中退席は許されない。

次郎は四回分のうち三回を消費しており、次に使うと戻って来られない。

綾香は二回分のうち二回とも使い切った。

美也は四回分のうち一回しか使っていないが、彼女がこの場から離れた時点で、人類社会は崩壊が確定する。

剣山の作成作業を終えた次郎は円柱に戻ると、現状の説明を始めた。

「状況が落ち着きましたので、改めて説明します。粗方は花子から聞いたと思いますが、今日の前に広がっている光景が、これから世界で起こる出来事です。全てはケルンの判断次第だと言う事を念頭に、可能な限り日本の被害を軽減させる方向で交渉をお願いします」
「ケルン次第じゃないニヤ。なるみんなの『最上級ダンジョンで完全魔素体が瘴気消費体を倒して、流入量と消費量のバランスを保たせる計画』が、現状ではタイムリミットまでに実現不可能なのは明らかニヤ」

「タイムリミットまでの正確な時間を教えて頂きたい」

広瀬大臣が問い質すと、ケルンは口を僅かに開けて、鋭い牙を見せ付けた。

押し黙った広瀬の代わりに前に出た次郎が、ケルンに向かって問い質す。

「……なんで怒るんだよ」

「此方の存在は、四つに分類されるニヤ。調整者、登録体オリジナ

ル、観測近似体、その他。観測近似体風に表現すれば、研究者が実験動物の訴えに耳を貸す道理は無いニヤ」

一瞬呆けた次郎は、ケルンの細まった目を見ながら言い返した。

「いやいや、そもそも同行を認めただろ」

「観測近似体に相談するのは認めるニヤ。ケルンが相手をするのは、創造者が登録を認めたオリジナル体までニヤ」

「山田君。すまないが中継を頼む」

井口総理は、殆ど官を置かずに中継ぎを依頼した。

確かに井口が判断した通り、ケルンが応じなければ話にならない。問題を政府に丸投げしたかった次郎は、当初の目論見を外されて渋々と仲介役を始めた。

「あー、ゾンビの大氾濫が始まる日を教えてくれ」

「調整者の任命から一〇年後の二〇四九年一月四日が発症日ニヤ」

通訳となった次郎が問い直すと、今度はまともな回答が返ってきた。

「発症から、一体どれくらいで世界中に広まるんだ」

「半年くらいで、九割九分を瘴気消費体に変えるニヤ。発生源も感染力も潜伏期間も変えられるから、封じ込めは無駄ニヤよ」

「確か、アフリカ大陸から始めて、陸路でユーラシア大陸全域。海路と空路は、船と飛行機が行き来する果てまで、消費量が見合うまで感染を広げるんだっただか」

「そうニヤ。釣り合いが取れたら、感染力を弱めるニヤ」

次郎が代行して話を聞き出すと、藤沢総務大臣や青山国土交通大

臣が端末機やノートパソコンを床に並べ、自らデータを入力し始めた。

その様子を見ていた次郎は、石柱の上に土魔法で石製の円卓を二つ作り出して並べ、椅子を置いて着席を促した。そして広瀬大臣の隣に座ってノートパソコンを取り出し、ワードとエクセルを開いてデータを入力する。

なし崩し的に通訳になったとはいえ、井口和馬に指示された程度の仕事はやっておこうと考えたのだ。但し広瀬大臣は、自らもメモ帳に手書きで記録を行っていたので、どれだけ役に立つのかは不明であるが。

現在は、二〇四八年九月二〇日。

ゾンビの発生が一年と一カ月半ほど未来で、それから半年後には人類の九割九分がゾンビになるらしい。

但し半年間生き延びれば、その後は感染し難くなる。

「山田君、ゾンビが人類全体の九割九分を超えたら、それ以上はゾンビにならないのかを確認してくれ」

「はい。ケルン、瘴気の流入量と消費量が釣り合ったら、それ以降は観測近似体を瘴気消費体に変えないのか」

「対処行動を見たいから、最初からの全滅は予定していないニヤ」

「ちなみに、ゾンビを処理し過ぎて人類とゾンビの総数が五〇億体くらいに減った場合は、どうするんだ」

「不足する消費量分、不全魔素体のゾンビをコピーするニヤ」

「逆に総数が二〇〇億になったら、どうなるんだ。それと地球外に移動したら、ゾンビ騒動は終わりで良いのか？」

「彼方の参考にならなければ、瘴気流入量を増やすニヤ。それと此方の範囲は『この宇宙』ニヤから、同位階以上の別宇宙に移動するまで実験範囲ニヤよ」

「一体どうやって勝つんだよ、このクソゲーは」

言葉とは裏腹に、次郎は利己主義者的な対策を想像した。

それは、これから一年間で日本の借金を増やしてでも世界中の物資を買い集めて備蓄し、食料の自給自足体制を確立し、その後は海路も空路も全て封鎖して鎖国状態にする事だ。

すなわち日本人一億人を生かして、他国の九億人を諦める。

ゾンビで滅亡した国にお金を返す必要は無く、エネルギーも魔法と魔石燃料で最低限は代替できる。魔石を燃料に用いた自動車などの普及が進めば、未来への展望もある。従って、食糧自給率の向上が急務だろう。

だがゾンビの詳細を知られば、日本に核兵器を撃ち込んで総人口を減らされ、撃ち込んだ国が自国民を生き残らせようとするかもしれない。

あるいは安全を確保した島国である日本に軍事侵攻して、占拠する恐れもある。

ロシアや中国の距離と軍事力であれば可能だろうし、切羽詰った場合には、アメリカも様々な理由を付けて強引にやって来る可能性もある。

あるいは民間人が、一〇万隻単位の漁船などで強引に押し寄せてくる可能性もある。そして日本には、それを取り締まるだけの能力は無い。

ケルンの話は、安全保障に支障を来す恐れのある情報として、最低でも特定機密保護法の対象になるだろう。あるいは公文書自体に残さない形となるかもしれない。少なくとも九割九分の部分は、日本が生き残るためには世界に言えない事だ。

国家とは、人間が形成する最も大きな群れである。

群れとして互いに協力し合えば、個々で活動するよりも自己保存や子孫を残せる可能性が高まる。そのために国家という群れを形成しているのに、他の群れを助けるために自分の群れを犠牲にするの

はナンセンスだ。

なお群れ同士が合流しないのは、合流すると資源の分配が平等になって、強大国側に属する国民の優位性が失われるからだ。

強大国は弱小国に対し、経済支配による内政干渉などで負担や危険を押し付け、自分たちの安全性や生存機会を高めている。平等にすれば自分の優位性が失われるため、大国は小国の民衆を併吞せずに酷使する方を選択する。

そのような数百の群れが凌ぎを削る国際社会において、他の群れのために自分の群れを犠牲にしようと言い出す者は、実際にゾンビを目の前にした彼らの中には居なかった。

但し、それらは一国民の次郎から見た原則論に過ぎない。

日本人だけが生き残っても、ゾンビによって狭められた生存圏や入手できなくなった資源、生産力の問題などで文明の先細りは必至である。

他に手が無い場合は致し方が無いが、まとめて生き残る方法があるのであれば、そちらを選択すべきだというのが、群れの長たる者達の判断だった。

「山田君、瘴気消費体の撃破で消費する瘴気量をゾンビとの比率で確認してくれ」

「はい。ケルン、瘴気消費体の瘴気消費量をゾンビ換算で教えてくれ」

「魔石を持たない観測近似体の一日消費量を一とすれば、最上級ダンジョンの瘴気消費体は、レベルの一〇〇倍くらいが一日の瘴気消費量ニヤ。でも生成量はレベルの三乗くらいニヤ」

「そもそも魔物のレベルは、俺たちの認識で合っているか」

「合っているニヤ」

話を聞き出した次郎は少し考えてから、収納能力から取り出した新たなノートパソコンを起動させ、最上級ダンジョンの全ての魔物のレベルとデータが入力済みのエクセル表を開いて美也に見せた。すると美也が無言で頷いたため、次郎はデータを広瀬大臣の方にも見せる。

これまでコツコツと入力していたデータであつたが、ゾンビ対策となれば、もはや背に腹は代えられない。

「総理、山田のパソコンに最上級ダンジョンの魔物データが入っています」

「それを使う。データを複製して共有しろ」

・最上級ダンジョン

地下 一階	レベル五六	黒	アルプ
地下 二階	レベル五七	黒	ゴブリン 六種類
地下 三階	レベル五八	黒	オーク 五種類
地下 四階	レベル五九	黒	リザードマン 五種類
地下 五階	レベル六〇	黒	ハーピー 四種類
地下 六階	レベル六一	黒	オーガー 四種類
地下 七階	レベル六二	黒	ホブゴブリン 六種類
地下 八階	レベル六三	黒	スキュラ 三種類
地下 九階	レベル六四	黒	ケンタウロス 四種類
地下一〇階	レベル六五	黒	ヘルハウンド 二種類
地下一一階	レベル六六	黒	スレイプニール
地下一二階	レベル六七	黒	トロール 三種類
地下一三階	レベル六八	黒	ミノタウロス 三種類
地下一四階	レベル六九	黒	バジリスク
地下一五階	レベル七〇	黒	ムシュフシュ
地下一六階	レベル七一	黒	エンプーサ 三種類
地下一七階	レベル七二	黒	マンティコア

地下一八階 レベル七三 黒 火鼠
地下一九階 レベル七四 黒 ラミア 三種類
地下二〇階 レベル七五 黒 ケルベロス

各自が着席して、計算が再開される。

最上級ダンジョンは黒アルプがレベル五六で、黒ケルベロスがレベル七五。

すなわち人間のゾンビが一日に消費する瘴気消費量を一とするならば、黒アルプは一日の瘴気消費量が五六〇〇で、生成量は約十八万。黒ケルベロスは一日の瘴気消費量が七五〇〇で、生成量は約四二万。

一日に二万四〇〇〇体の黒ケルベロスを倒すか、五万七〇〇〇体の黒アルプを倒せば、一〇〇億体のゾンビと釣り合う。

なおケルベロスをいくら倒そうとも、ダンジョン内では増えて元の数に戻るために一日消費量は変わらない。

「山田君、ケルベロスは一日何体倒せるかね」

「どんなに頑張っても二四〇体です。二万四〇〇〇体なんて、物理的に不可能です。念のために言っておきますけど、能力加算Sを持つ熟練者の山田太郎で二四〇体です。特攻隊は半分と見積もって下さい」

なおその数字は、次郎が普通の学生生活を営む場合だ。

魔石の回収が不要であるならば、最上級ダンジョンの地下二〇階を駆け回り、一分間に一体を倒し続ければ四時間ほどでノルマを達成できる。

だが一日一二時間労働のブラックで働いたとしても、七二〇体が精々。一〇〇億人を維持できる二万四〇〇〇万体に到達するのは不可能だ。

一億人分の二四〇体は倒せるので、日本以外が滅亡してから二四

○体倒せば出来るかもしれない。

「では、最上級ダンジョンで大量に倒し易い魔物は何かね」

「ゴブリンですかね。あいつらは物凄く群れるので、範囲攻撃でまとめて薙ぎ払えば、ケルベロスの一〇倍くらい倒せるかもしれない」

「ゴブリンの瘴気消費量はいくつだ」

「推定一八万五〇〇〇ですね」

「一〇〇億人を生かすには一日何体倒せば良い」

「約五万四〇〇〇〇体でしょうか」

「特攻隊が一人につき一二〇〇体倒せば、四五名で釣り合うか!？」

「計算上は、そうなります。体感的にも、レベル一〇〇なら不可能ではないと思います。続けるのはきついですけど」

「その次に倒し易いのは何だね」

「近接型ならホブゴブリンで、魔法型ならパーピーですかね。近接型なら、とにかく小さくて武器が魔石に届きやすい相手が楽です。

魔法型なら、魔法に弱い相手がお勧めです」

その後の大臣・党首たちの話し合いは、特攻隊を効率よく運用して、瘴気消費体を撃破させる方向にシフトしていった。

瘴気流入量と消費量を釣り合わせ、その間に第三次以降の特攻隊も育てて、以降は可能な限り溜まっている瘴気も減らしていく。また最悪も想定して、鎖国と自給自足が可能な体制にする。

特典を取らせない為の作業を第二次特攻隊から第一次特攻隊に移す事や、国民からも気消費体の撃破者を出させる案なども出たが、そちらは保留された。

「瘴気流入を自己解決する体制を整えるから、実現したら地上への放出は一時留保で頼む。観測近似体の一集団である日本政府は、政体が維持できれば、そちらの色々な検証には付き合うつもりだ」

「勝手にやってみれば良いニヤ。有意性が認められれば、考慮されるかもしれないニヤ」

「分かった」

「それなら異分子はそろそろ出ていくニヤ。次からレベル〇〇未満が同行すれば、即座に瘴気消費体に変えるニヤ」

美也が特典を選択してポイントを割り振ると、次郎たちは塔型円柱の外部に一瞬で跳ばされた。

最終話 選択

二〇四八年九月二〇日、新政権下で改めて『国家緊急事態』を宣言した井口総理ら一行は、最上級ダンジョンでの対応を行った。

後に『空白の八時間』と呼ばれるようになった時間に、一体何があったのか。

総理は、『特定秘密保護法の特定秘密に指定される内容』であり、一般向けには公表出来ないとした。その上で、緊急事態の対策は講じているとも説明した。

対策メンバーは、政治家から与野党の六党首と防衛大臣、外務大臣、内閣官房長官の九名。そして民間から、総理指名により必要に応じて山田太郎。

僅か一〇名という密室の集まりであったが、野党党首を全員入れる事で党利党略の批判にはあたらず、レベルとダンジョン攻略経験が最多の集団でリーダーを務める山田太郎氏を加える事で実務的にも机上の空論に成らないようにする。というのが政府の説明だ。

この集いは、国家安全保障会議の『四大臣会合』『九大臣会合』『緊急大臣会合』と並ぶ四形態目の会合として、『一〇人会合』と呼称された。この会合は事務局を国家安全保障局として、特攻隊の緊急育成や食料自給率の向上、緊急時の入国禁止措置や実力排除など様々な決定を行った。

外野が理解できたのは、日本政府がダンジョンに対する何かしらの確信的な情報を得て、それに基づいた行動を取っているという事だ。

それから暫くは、日本政府が輸入する物資に国外からの追隨が起こり、市場に混乱が見られた。

そんな六党による協力体制は、翌年のケルンがゾンビ氾濫日と明言した翌年の二〇四九年一月四日まで完全に維持された。

次郎と美也が大学三年生になり、綾香が北大に進学した二〇四九年。

この年は六月に参議院選挙、一〇月に衆議院選挙が行われ、旧労働党勢力が議席を大幅に減らして小林派にほぼ吸収された。

予定調和の選挙で次郎が着目したのは、井口和馬が選挙区を変えて衆議院議員に当選した事くらいだ。

元々は井口一族で地盤を引き継ぐ予定だったはずだが、井口総理が政界を引退できなくなった事、選挙協力をしている他党から対抗馬を擁立されない事、唯一の対立候補である旧労働党の元議員には圧勝する事から、余所で立候補して当選したのだ。

これは国民の投票結果であり、親が政治家だと子供は政治家に成れないという法も無いため、文句を付ける者は居なかった。

参議院でも長期政権の基盤を確立させた井口総理は、その後も瘴気消費体が地上に現われないように対策を続け、外部に知られざる成果を挙げた。

政治的には激動の年が過ぎつつあった頃、大学三年生の冬という就職活動の時期に差し掛かった次郎に、就職活動もしていないのに内定通知が届いた。

提示された職名は、内閣総理大臣秘書官。

ハローワークには確実に載っていないであろう、極めて特殊なお仕事である。

「本名でも、特別に山田太郎の戸籍を用意しての任官でも良い。秘書官の定数を増やして広瀬副総理の所でも良いが、どうだね」

「山田太郎の戸籍で、ですか？」

「さらに追加で、山田花子の戸籍を用意しても良い。ダンジョン法案でも閣議決定でも、君が同意するならばすぐに実施するつもりだ」

井口総理は強弁したが、次郎が顔や名前を隠した経緯や、山田太郎の有用性、現政権の政治権力を鑑みるに、簡単に押し通せる話である事は間違いない。

「総理とか副総理の秘書官って、滅茶苦茶偉い人なんじゃないですか？」

「省庁の課長級だが、君は例のアチラ側と交渉が出来る人材だ。他に流出など有り得ん」

「……………うっ」

思わず擬音を発した次郎だったが、この場合は総理の言い分が正しい。

ケルンと交渉できるのは、登録体オリジナルの次郎と美也、綾香の三人。そのうち誰を動かすにしても、もはや次郎を介さないわけにはいかない。

「君には、四年後の衆議院選挙で国会議員、綾香を秘書にしてダンジョン問題対応要員、いずれ担当大臣になつてもらいたいと考えている。何しろ、君たちしか交渉できないのだから、他に選択の余地は無い。これは、一〇人会合のうち九人の合意を得ての話だ。君が合意すれば一〇人全員一致となり、正式決定する」

「……………少し考えさせてください」

井口総理にとっての既定路線を説明された次郎が考えたのは、自身のメリットとデメリットだった。

まずはメリットであるが、様々にコピペされる可能性がある次郎は、総理や副総理の秘書官になる事で得られる経験は貴重に思えた。また山田太郎としての戸籍や身分証明書が貰えるのであれば、貯め込んだ金銭も使い易い。

デメリットは、自由度が下がる事だ。

だが国内に置いて絶対的な政治権力の後ろ盾を得て将来的に大臣になるのであれば、自分を害せる存在は殆ど居なくなる。

次郎は美也と相談を重ねた上で、山田太郎としての戸籍を貰い、内閣総理大臣秘書官の一人となる事にした。

以降の大学生活は、その労苦の大半が就職先での勉強に費やされた。

また綾香は次郎の選択に合わせて、大学卒業後に司法修習生となり、弁護士になって次郎の秘書になる進路を選んだ。

それから一年ほどの時が過ぎ、大学を卒業した次郎は、山田太郎として内閣総理大臣秘書官の一員となった。

官報に山田太郎が載った事で世間は騒ぎになったが、完全魔素体として年齢をイメージで変えられる事を活かした次郎が一五年分ほど老け込んで見せ、髪型も変えたため、堂下次郎に結び付けられる事はなかった。

以降、濃厚な三年間が過ぎた二〇五三年一〇月。

二五歳の次郎は、当初の約束通りに共和党から『前職が内閣総理大臣秘書官である山田太郎候補』として、衆議院議員選挙に出馬した。

山田候補への応援演説には、一〇人会合のメンバーである与野党の六党首や外務大臣、官房長官などが続々と駆け付けた。

対立候補には、労働党の旧勢力で当選七回を誇った大物の元衆議院議員が居た。

だが次郎が対立候補として出馬した時点で、相手はダンジョン問題を隠蔽するために口封じしようとした犯人側になる。一方で次郎は、特攻隊を育てて魔物氾濫を防いだ国家の功労者だ。

マスコミが煽りまくった結果、山田太郎の圧勝となった。

両手を振り上げて、振り下ろして、振り上げて、振り下ろして。

万歳三唱を五セットくらい繰り返した次郎は、25歳の最年少議

員となった。

そんな彼には広告塔として様々な肩書が与えられたが、その中でも一番大きな肩書は『防衛大臣政務官 兼 内閣府大臣政務官』だろう。

当初の予想では、内閣総理大臣秘書官と大臣政務官の間にあたる『大臣補佐官』辺りだろうと高をくくっていたが、実際には二階級昇進だった。

もつとも次郎は、思ったよりも他の議員から反発されなかった。

それは現与党の共和党が、野党時代に広瀬議員と情報提供者の山田太郎とで大躍進したからだ。共和党にとって山田太郎は、最大の功労者の一人なのだ。

それに周囲には弁護士・医師・元大学教授などの専門家が揃い踏みだが、流石にダンジョンの専門家は居ない。

ことダンジョン問題に限っては、山田太郎には他に代替の効かない唯一無二の価値があった。

かくして、祖先に七村町の初代町長までしか政治経験を持たなかった堂下家は、衆議院議員と同時に、二つの大臣政務官を兼任する事となったのだ。

それから年が明けた二〇五四年。

美也は研修医を終えて北大病院の勤務医になり、山田花子としては国立魔法医学研究所の非常勤研究員となった。

また綾香も弁護士となって、次郎の議員秘書になっていた。

この頃、新たに『外務大臣政務官』を兼任するようになった次郎は、一〇人会合の決定により密命を帯びて、最重要任務を果たしていた。

「ねえジロン。魔石でエネルギー問題は解決するはずなのに、どうして日本政府は外交圧力に弱腰なの？」

次郎を奇怪なあだ名で呼んでいるのは、補助者にケルンと名付けた此方の調整者である。

日本の記録では、二〇二五年四月四日生まれで、二〇三九年一月四日死亡。

二〇二八年五月四日生まれの次郎とは、三才差となる。

中学二年生だった一四歳で死亡扱いになったため、最終学歴は小学校卒。

人間だった頃の氏名は、橋場成美^{はしはなるみ}で、当時のあだ名は『なるみん』。その繋がりで次郎は「ジロン」と呼ばれている。

「弱腰つてわけでもないですけど、全てのエネルギーを代替できるところまで技術は追いついていないんですよ」

「中級ダンジョンを一般解放したら、魔石一個単位から得られるエネルギー量も大きくなるよ」

「中級ダンジョンの一般開放案は、なるみんの日本頑張れっていう応援ですか。それとも調整者としての希望ですか」

「ジロン、政治家っぽい」

「おかげさまで」

一〇人会合で次郎に与えられた使命は、『地上に瘴気消費体を発生させない事』だ。

『地球人の九割九分がゾンビになり続ける結末』を回避するために必要な事ならば、基本的に何をしても良い事になっている。

外交上の問題で瘴気消費体の出現を回避できなくなりそうな場合には、同盟国との同名破棄や、障害となる国家との交戦すらも可能だ。その際には、調整者である橋場成美や、宇宙外生命体であるケルンの存在が公表される事になる。

もつとも、極力そうならないようにするのが次郎の仕事である。そのために橋場成美をおだてたり、宥めすかしたりしている。

端から見れば、大企業の担当者に頭を下げる営業職のサラリーマンと何ら変わらない。次郎も立派な大人になったと言えるだろうか。

「外交圧力で困っているなら、相手の地下資源を日本の地下に移しても良いよ。ちょっとしたお願いはするけど」

「願って何ですか」

「何十パターンかの実験を手伝ってもらいたいから、転移能力を持つていない特攻隊の完全魔素体を作って欲しいかな」

「とりあえず保留で」

政治家らしく問題を先送りした次郎は、一人溜息を吐いた。

かくして次郎は、ダンジョンが現われた日本で、管理者との交渉役を担う事になった。

最終話 選択（後書き）

ここまでお読み頂き、ありがとうございました。
今作は、これにて完結です。

実は本編の他に、58話の分岐点からゾンビルートに入る話も作っていました。
ですがそれは、創造主が数多作り出した世界の一つでしかないので、止めました。
私はゾンビ物が大好きですので、機会があれば別作で書きたいなあとは思っています。

次に中継ぎで書いているのは、ゾンビではなく1700年後の未来が舞台のSFです。

経済支配や独立戦争、地球への天体突入等やりたい放題ですが、タイトルは……

『乙女ゲームのハードモードで生きています』

<https://ncode.syosetu.com/n6685ep/>

はい、気分転換ですね。

では、またどこかで巡り会える機会がございましたら、次作以降でもよろしくお願い致します。

最後になりますが、今作の総合評価をお願い致します
ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<https://ncode.syosetu.com/n4966ek/>

日本にダンジョンが現われた！

2018年3月9日13時37分発行